鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　16

平成11年度発掘調査報告

（第１分冊）

平成12年３月

鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目198番地 6 地点）

田楽辻子周辺遺跡

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成10年度から11年度にかけて国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として14ヶ所の調査成果を掲載しています。特に若宮大路周辺遺跡群では数棟の掘立柱建物跡とともに木組による溝跡が良好な状態で発見されました。また田楽辻子周辺遺跡では往時の田楽辻子とみられる道路や側溝の遺構をはじめ屋敷等の庭園に関わるような玉砂利を敷き詰めた遺構が発見されるなど大きな成果をあげることができ、鎌倉の往時の姿の解明を一歩進めることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成12年3月31日

鎌倉市教育委員会

例　言

1　本書は平成11年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

ごあいさつ …… I

例言 …… II

平成11年度調査の概観 …… VIII

1　西方寺跡（No.219）極楽寺二丁目18番外地点

第１章　遺跡概観 …… 5

第１節　遺跡の立地 …… 5

第２節　調査の経緯と経過 …… 7

第３節　堆積土層 …… 7

第２章　検出された遺構と出土遺物 …… 9

第１節　遺構と遺物 …… 9

第２節　トレンチ …… 19

2　海蔵寺旧境内遺跡（No.299）扇ガ谷四丁目632番２外地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 32

第２章　調査の経過 …… 35

第３章　発見された遺構と遺物 …… 36

第１節　１面 …… 36

第２節　２面 …… 38

第３節　３面 …… 45

第４節　トレンチ …… 49

第４章　まとめ …… 51

3　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町一丁目81番18地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 64

第２章　調査経過とグリッド配置・基本土層 …… 67

第３章　検出された遺構及び出土遺物 …… 69

第４章　まとめ …… 72

4　若宮大路周辺遺跡群（No.242）雪ノ下一丁目198番６地点

第１章　調査の概要 …… 85

第１節　調査地点の位置と環境 …… 85

第２節　調査の経過と方法 …… 87

第３節　層序と生活面 …… 87

第2章　検出遺構 …… 90
第1面の遺構 …… 90
第2面の遺構 …… 95
第3面の遺構 …… 100
第4面の遺構 …… 106
第5面の遺構 …… 115
第6面の遺構 …… 116
第7面の遺構 …… 121
第3章　出土遺物 …… 123
第1節　出土遺物と整理の概要 …… 123
第2節　出土遺物 …… 123
第4章　まとめ …… 175
第1節　遺構の特徴と年代 …… 175
第2節　出土遺物について …… 176
5　田楽辻子周辺遺跡（No.33）浄明寺一丁目661番外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 214
第2章　調査の経過とグリッド配置 …… 217
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 220
第4章　まとめ …… 290
6　材木座町屋遺跡（No.261）材木座一丁目890番1地点
第1章　環境と立地 …… 338
第2章　調査の概要 …… 340
第3章　検出した遺構 …… 342
第4章　出土した遺物 …… 344
第5章　調査成果 …… 346

（第2分冊）

7　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目271番3地点
第1章　調査地点の概観 …… 5
1　地勢と位置 …… 5
2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 5
3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 8
第2章　調査の概要 …… 9
1　調査にいたる経緯 …… 9
2　調査方法と測量基準線の設定 …… 9

3　調査経過 …… 9
第3章　遺構と遺物 …… 11
1　1面 …… 11
2　2面 …… 13
3　3面 …… 13
4　3b面 …… 13
第4章　まとめ …… 20
8　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目271番4地点
第1章　調査地点の概観 …… 32
1　地勢と位置 …… 32
2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 32
3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 35
第2章　調査の概要 …… 36
1　調査にいたる経緯 …… 36
2　測量方眼設定方法 …… 36
3　調査経過 …… 36
第3章　調査成果 …… 38
第1節　概要 …… 38
第2節　各説 …… 39
第4章　調査のまとめ …… 93
9　大慶寺旧境内遺跡（No.361）寺分一丁目819番1地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……113
第2章　調査の概要 ……117
第3章　調査の経過と方法 ……120
第4章　まとめ ……141
10　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字荏柄10番9外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……156
第1節　遺跡の位置 ……156
第2節　歴史的環境 ……156
第2章　調査の経過 ……157
第3章　検出した遺構 ……159
第1節　A区の遺構 ……159
第2節　B区の遺構 ……162
第4章　出土した遺物 ……163
第1節　A区の遺物 ……163

第2節　B区の遺物 ……163
第5章　まとめ ……186
11　由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）由比ガ浜二丁目1203番20地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……213
第2章　調査の概要 ……215
第3章　検出遺構と出土遺物 ……217
第1節　上層遺構 ……217
第2節　下層遺構 ……220
第4章　まとめ ……224
12　名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1888番地点
第1章　環境と立地 ……237
第1節　地理的・歴史的環境 ……237
第2節　調査地点の立地 ……239
第2章　調査の概要 ……240
第1節　調査の経緯と経過 ……240
第2節　国土座標上の位置とグリッド配置 ……241
第3節　堆積土層 ……241
第3章　遺構と遺物 ……242
第1節　Ⅰ期の遺構と遺物 ……242
第2節　Ⅱ期の遺構と遺物 ……245
第3節　Ⅲ期の遺構と遺物 ……253
第4節　出土遺物一覧 ……263
第4章　調査成果 ……274
第1節　自然科学分析 ……274
第2節　出土遺物から ……283
第3節　調査地点の性格 ……285
13 米町遺跡（No.245）大町二丁目2404番地点
第1章　調査地点の位置と歴史的環境 ……302
第2章　調査の経過 ……304
第3章　検出した遺構と遺物 ……304
第1節　層序 ……304
第2節　遺構 ……307
第3節　遺物 ……307
第4章　まとめ ……308

14 円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字東瓜ヶ谷1299番１外地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……321
第２章　調査の概要 ……322
第３章　発見された遺構と遺物 ……324
　第１節　堆積土層 ……324
　第２節　発見した遺構 ……324
　第３節　確認調査出土遺物 ……324
第４章　まとめ ……326

平成11年度調査の概観

平成11年度の緊急調査実施件数は18件であり、調査対象面積は1,296.87㎡であった（平成12年２月１日現在）。これを前年度の12件、1,241.69㎡と比較すると件数は前年度の1.5倍となっているものの、面積のうえでは若干の増加にとどまっている。このことは、個々の発掘調査がいずれも小規模な調査である傾向を顕著に示しているものといえよう。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設に関するものが17件、自己用店舗併用住宅の建設に関するものが１件となっている。例年以上に店舗併用住宅の建設に伴う調査が減少していることからも未だ景気が低迷状態にあることがうかがわれる。反面、低金利や住宅の取得にともなう税制上の優遇措置が実施されていることもあって、個人専用住宅の建設に伴う発掘調査は増加するところとなった。本年度も耐震性等を考慮した鋼管杭等の打設や地盤改良工事を採るものが10件みられた。少なくとも本市においては、ここ数年こうした杭打ち工法等が確実に発掘調査実施の主体的要因となった感があり、こうした傾向は今後もさらに増加していくものと予測される。また、地下室の建設を含むものが５件みられ、個人専用住宅における地下室の建設も増加の傾向にあることがみうけられる。

本年度は政所跡（地点６）において鶴岡八幡宮境内と政所とを区画していたとみられる南北方向の溝跡が発見されたことや、大倉幕府周辺遺跡群（地点18）において14世紀後半から15世紀前半にかけての時期の滑川の旧河道跡が確認されたことなどが特記事項としてあげられる。

以下、各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

１　円覚寺門前遺跡（No.287）

北鎌倉駅前の県道から瓜ヶ谷と呼ばれる北向きに開く谷戸を南に100ｍ程入った谷戸の東側に位置する。平成10年11月に前面の道路から１ｍ程高い敷地において地盤の柱状改良という工法による基礎構造の個人専用住宅の建設について事前相談があり、確認調査を実施したところ、地表下60㎝以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について数回の協議を重ねたところ、建築主から埋蔵文化財の保護について理解が示され、基礎工事による掘削深度を現地表下60㎝までに抑える基礎構造に設計の変更がなされた。これにより住宅の建設部分における埋蔵文化財の保護は可能となったが、車庫の建設部分については前面道路と同じ高さまで地盤の切り下げが行われるため、この部分における埋蔵文化財への影響は不可否と判断されるにいたった。このため車庫の建設部分を発掘調査の対象範囲として、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成11年４月13日から４月30日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、数基の柱穴跡、土壙及び溝状遺構が発見され、14世紀代における谷戸内の土地利用の一端が明らかになった。

２　米町遺跡（No.245）

市街地の中心部からにやや東よりあたる大町ニ丁目の住宅地の一角に位置する。平成11年２月に当該地において鋼管杭の打設工事が行われている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き完了後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ現地施工に至ったとのこ

とであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えられることから、急遽、神奈川県教育庁文化財保護課（当時）の担当者による現地確認を得て今後の対応策について指導を求めたところ、早急に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度を確実に把握したうえでさらなる対応を検討すべきとの指示を得るに至った。この時点で現地ではすでに基礎工事が完成した段階にあったため、以前に確認調査が実施されている近隣地点の調査成果から地表下40cm以下に埋蔵文化財の存在が予想されるため、事業者と数回にわたる協議及び文化財保護法に基づく手続き等を経て、完成済の基礎構造物を避けるかたちで基礎の内側に3箇所の調査区を設ける方法により平成11年4月17日から4月30日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査面積が狭小であったにもかかわらず、調査地を南北に区画する溝と調査地の南側前面に位置する現況道路に沿う東西方向の溝とともに多くの柱穴が発見され、13世紀代に遡る遺物も出土しており、当該地が大町大路と車大路にはさまれた町屋の一角にあたる様子がうかがわれるところとなった。

3　弁ヶ谷遺跡（No..249）

市街地中心部の南東にあたる、材木座の紅ヶ谷、弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の入口付近に位置する。平成11年4月に個人専用住宅の建設について事前相談があり、建築計画のなかに地下室の建築が含まれるものであったため確認調査を実施したところ、地表下90cm以下に埋蔵文化財の存在が確認された。このため設計変更を含め事業者と協議を行ったが、当初の計画通り地下室の建築に変更の余地がないとの結論にいたり、工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断された。このため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法に基づく手続きを経て、調査の実施方法等についての協議が整った後、平成11年6月27日から7月21日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀後半のものとみられる泥岩の切石を積んで構築した井戸や溝跡等が発見され、材木座の谷戸内における土地利用の様子の一端が明らかになった。

4　長谷小路周辺遺跡（No.236）

若宮大路の下馬四ツ角の交差点から長谷観音や大仏方面に向かう県道鎌倉葉山線の南側に所在する。平成11年2月に自己用店舗併用住宅建設の事前相談があり、建物の基礎を杭構造とする計画であり、事前に実施した確認調査の結果から工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、平成11年6月26日から8月31日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、往時の長谷小路かとも思われる東西方向の道路状遺構やおおむね14世紀代を中心とする大型の井戸跡や方形竪穴建築址等の遺構群が検出された。

5　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町大路の東側に面した住宅街の一角に位置する。平成11年6月に前面の道路から約60cm程高い敷地において鋼管杭を打設する工事が実施されている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き完了後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ現地施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えられることから、急遽、神奈川県教育庁生涯学習文化財課の担当者による現地の確認を得て今後の対応策について指導を求めたところ、早急に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度を確実に把握したうえで

調査の結果、おおむね中世後半期から近世にかけての時期に属すると考えられる溝跡、井戸跡、柱穴及び数基の土壙が発見されたが、本調査地点において発見することのできた遺構と玉縄城跡との具体的な関係は現段階において不明と言わざるをえない。

12 笹目遺跡（No.207）

市内中心部の南西にあたる笹目町に所在し、県道の北側に位置する。平成11年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画のなかに地下室の構築を含むものであったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下70cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成11年11月29日から平成11年12月25日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀代に属すると考えられる数棟の方形竪穴建築址が発見されるとともに、その下層からは中世以前の時期に遡る古代の土器類も出土するところとなった。

13 笹目遺跡（No.207）

上記調査地点12の西隣に位置する。平成11年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画のなかに地下室の構築を含むものであったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下70cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成11年11月29日から平成11年12月17日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、既存建物の基礎による攪乱を部分的に受けながらも数棟の方形竪穴建築址が発見されるとともに、攪乱によって頭と両足先を欠損するものの伸展葬の人骨１体を発見することができた。

14 米町遺跡（No.245）

前述の調査地点８とは河川を隔てた西側に位置しており、敷地の西側にあたる魚町橋付近は市街地一帯の土地が南に向かって急激に低くなる地形の変換点にあたっている。平成11年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、基礎の構造を通常の住宅よりも掘削深度の大きなものとする計画であったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下120cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議したところ、建設箇所が河川に面した場所であるため、基礎の構造を堅牢なものとする必要から現地表下250cmまでの深さに達する独立基礎６ヶ所を設けることが避けられないとの意向が示された。このため文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成11年11月29日から平成11年12月17日まで発掘調査を実施した。

発掘調査は独立基礎が建設される部分に限定して、２ｍ×２ｍの調査区を敷地内に６ヶ所設定して工事による掘削の及ぶ深さまで実施した。このため具体的な遺構の面的な広がりを確認することはできなかったが、各調査区の土層断面の観察所見からは14世紀の後半から15世紀代にかけての遺構の存在が予想されるとともに、当該期の遺物が比較的多く出土するところとなった。

15　材木座町屋遺跡（No.261）

市内の南東部にあたる材木座六丁目に位置し、周辺には浄土宗の大本山光明寺が存する。当該地は材木座の海岸線から約100ｍほど内陸に入った場所にあたる。平成11年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎の工事に先立って表層地盤の改良工事を実施する計画であることから、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下100㎝以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議したところ、海岸地帯に近い立地で地盤が軟弱であると考えられることから、当初の計画通りに敷地の地盤改良を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年１月６日から平成12年２月10日までの予定で発掘調査に着手した。

16　田楽辻子周辺遺跡（No.33）

市内の東部にあたる雪ノ下五丁目に所在し、かつて勝長寿院があった大御堂ヶ谷と呼ばれる谷戸の入口部分の東側に位置する。平成11年９月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎の一部が深基礎の構造になるとともに、敷地の西側が道路後退にともなって高さ約１ｍにわたって切り下げられ、さらにその部分には擁壁が建設される計画であることから、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下130㎝以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を実施したが、敷地が接する北側の道路よりも約１ｍ高いことから基礎の一部を深いものとすることと道路後退による土地の切り下げはいずれも計画に変更の余地がないとの意向が示された。このため工事による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年１月６日から発掘調査を開始した。

調査はまず住宅の基礎部分15㎡について実施し、狭小な面積にもかかわらず数基の柱穴等が発見され中国製の陶磁器のほか、中世以前の時期に遡る須恵器の破片も出土するところとなり、平成12年１月11日までにこの部分の発掘調査を終了した。なお、道路後退にともなう敷地の切り下げは住宅の建設完了後に実施されることから、この部分についての発掘調査は平成12年度になってから実施する予定である。

17　大倉幕府周辺遺跡群（No.48）

市内の中心の東側にあたり六浦道と呼ばれる現在の県道金沢鎌倉線の北側に位置し、本調査地点の西側はちょうど六浦道と二階堂大路が交わる場所にあたる。平成11年12月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を鋼管杭の構造とする計画が事業者から示された。当該地周辺ではこれまでにも数ヶ所で発掘調査が実施されており、具体的な遺構の存在する深さがおおむね予想可能であることから、ただちに工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため、確認調査を実施せずに発掘調査の実施に向けた協議を事業者との間で開始し、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年１月24日から平成12年３月31日までの予定で発掘調査を開始した。

18　大倉幕府周辺遺跡群（No.48）

前出の調査地点17から西に約200ｍ程の場所にあたり、六浦道と呼ばれる現在の県道金沢鎌倉線の南側に位置している。本調査地点のすぐ南側には滑川が東から西に向かって流れており、この滑川はおり

しも本調査地点のすぐ東側で北から南に向けてほぼ直角に蛇行をしている。平成11年２月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画のなかに地下室の構築を含むものであったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。当該地における住宅の建設工事は、敷地南側を流れる滑川に架かる大倉稲荷橋の架け替え工事の完了を待って実施されることから、この時点では神奈川県藤沢土木事務所の施工による同橋架け替え工事が完了する平成12年３月末以降に発掘調査を実施することで具体的な事業者との協議は一時中断することとなった。その後、橋の架け替え工事が平成12年１月末に当初の予定よりも早く完了することとなったため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年２月１日から平成12年３月20日までの予定で発掘調査を開始した。

本誌所収の平成10年度・11年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
①	西方寺跡 (No.219)	極楽寺二丁目18番外	個人専用住宅 (車庫造成)	社寺	118.48㎡	H10. 3. 9 ～H10. 5.15
②	海蔵寺旧境内遺跡 (No.299)	扇ガ谷四丁目632番2外	個人専用住宅 (地下室)	社寺	67.28㎡	H10. 3.12 ～H10. 5. 2
③	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目81番18	自己用店舗 併用住宅	都市	39.14㎡	H10. 5.11 ～H10. 6. 2
④	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目198番6 の一部	個人専用住宅	都市	119.68㎡	H10. 6. 8 ～H10. 9.16
⑤	田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)	浄明寺一丁目661番外	宅地造成及び 個人専用住宅	都市	254.30㎡	H10. 7.30 ～H10.10.12
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7	個人専用住宅 (2世帯住宅)	都市	40.00㎡	H10. 9.21 ～H10.10.26
⑦	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目271番3	自己用店舗 併用住宅	都市	25.00㎡	H10. 6.18 ～H10. 7. 4
⑧	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目271番4	自己用店舗 併用住宅	都市	76.32㎡	H10. 8. 3 ～H10.10. 9
⑨	大慶寺旧境内遺跡 (No.361)	寺分一丁目819番1	個人専用住宅	社寺	140.75㎡	H10.10. 8 ～H10.11.26
⑩	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂字荏柄10番9外	個人専用住宅	都市	172.15㎡	H10.11. 2 ～H11. 1.23
⑪	由比ガ浜中世集団 墓地遺跡 (No.372)	由比ガ浜二丁目1203番20	自己用診療所 併用住宅	墓地	111.58㎡	H10.11.26 ～H10.12.11

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
⑫	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1888番	個人専用住宅	都市	77.01㎡	H10.12.11 ～H11. 3. 5
⑬	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2404番	個人専用住宅	都市	20.86㎡	H11. 4 .17 ～H11. 4 .30
⑭	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字東瓜ヶ谷 1299番1外	個人専用住宅	都市	21.75㎡	H11. 4 .13 ～H11. 4 .30

平成11年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
1	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字東瓜ヶ谷 1299番1外	個人専用住宅 (車庫造成)	都市	20.00㎡	H11. 4.13 ～H11. 4.30
2	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2404番	個人専用住宅	都市	20.86㎡	H11. 4.17 ～H11. 4.30
3	弁ヶ谷遺跡 (No.249)	材木座四丁目336番7	個人専用住宅 (地下室)	都市	28.00㎡	H11. 6.26 ～H11. 7.21
4	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目 254番15外	自己用店舗	都市	124.72㎡	H11. 6.26 ～H11. 8.31
5	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目402番5	個人専用住宅	都市	182.47㎡	H11. 7. 6 ～H11. 9. 4
6	政所跡 (No.247)	雪ノ下三丁目989番4	個人専用住宅	官衙	53.82㎡	H11. 8.16 ～H11. 9.30
7	下馬周辺遺跡 (No.200)	由比ガ浜二丁目110番5	個人専用住宅	都市	93.27㎡	H11. 8.17 ～H11.10.27
8	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2313番15	個人専用住宅	都市	42.43㎡	H11. 9. 6 ～H11.10.23
9	理智光寺跡 (No.265)	二階堂字理智光寺 750番1	個人専用住宅	社寺	61.43㎡	H11.10.18 ～H11.12.11
10	東勝寺跡 (No.246)	小町三丁目523番14	個人専用住宅 (地下室)	社寺	90.00㎡	H11.10.25 ～H11.11.20
11	玉縄城跡 (No. 63)	城廻字中村473番8	個人専用住宅	城館	95.28㎡	H11.11. 2 ～H11.11.22

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
12	笹目遺跡 (No.207)	笹目町285番1外	個人専用住宅 (地下室)	都市	87.46㎡	H11.11.29 ～H11.12.25
13	笹目遺跡 (No.207)	笹目町286番1外	個人専用住宅 (地下室)	都市	134.56㎡	H11.11.29 ～H11.12.17
14	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2308番1	個人専用住宅	都市	24.00㎡	H11.12. 6 ～H11.12.17
15	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目760番1	個人専用住宅	都市	56.31㎡	H12. 1. 6 ～H12. 2.10
16	田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)	雪ノ下五丁目555番1	個人専用住宅	都市	51.00㎡	H12. 1. 6 ～H12. 4.28
17	大蔵幕府周辺遺跡群 (No. 49)	雪ノ下字大倉耕地562番16	個人専用住宅	都市	89.64㎡	H12. 1.31 ～H12. 3.31
18	大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49)	雪ノ下四丁目580番10外	個人専用住宅 (地下室)	都市	129.08㎡	H12. 2. 1 ～H12. 3.20

鎌倉市全図

平成11年度の緊急発掘調査地点（1～18）
本書掲載の平成10・11年度調査地点（①～⑭）

※遺跡名は一覧表参照

西方寺跡（No.219）

鎌倉市極楽寺二丁目18番外

例　　言

1．本報は、神奈川県鎌倉市極楽寺二丁目18番外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、個人専用住宅に係る車庫造成の範囲118.48㎡を対象に平成10年３月９日から同年５月15日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報の編集・執筆は粂が行い、齋木が加除筆を加えた。

4．本報に掲載した遺構写真は、粂、熊谷洋一が撮影を行った。

5．本報の遺構・遺物図版の指示は下の通りである。

遺構全体図　　1／120
遺構個別図　　1／60
遺物実測図　　1／3
遺構・遺物図版　水糸高は海抜数値を表わす。
　　油煙、焼け焦げは黒塗りで表示した。

なお各図にはスケールを表示した。

6．本文中において「鎌倉石」、「土丹」と表記しているものは、ともに鎌倉周辺域で産する岩石で、前者は砂質凝灰岩、後者は破砕泥岩の地域用語である。

7．発掘調査、及び報告書作成にあたり次の諸氏、諸機関より御協力、御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
手塚直樹、大河内勉、菊川英政、鎌倉考古学研究所

8．本報に関わる出土遺物、図面、写真等の資料は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

9．調査体制は、以下の通りである。

担当者　　齋木秀雄
調査員　　粂健一、熊谷洋一
調査補助員　田村葉子、八杉陽子
調査協力者　石渡辰男、杉浦永章、多田徳蔵、蓑田孝善（鎌倉市シルバー人材センター）

本　文　目　次

第１章　遺跡概観 …… 5
　第１節　遺跡の立地 …… 5
　第２節　調査の経緯と経過 …… 7
　第３節　堆積土層 …… 7
第２章　検出された遺構と出土遺物 …… 9
　第１節　遺構と遺物 …… 9
　第２節　トレンチ ……19
第３章　まとめ ……20

挿　図　目　次

Fig. 1　調査地点及び周辺の遺跡 …… 6
Fig. 2　グリッド設定図 …… 7
Fig. 3　堆積土層図 …… 8
Fig. 4　４面・６面全体図 ……10
Fig. 5　６面下・７面全体図 ……12
Fig. 6　８面全体図 ……14
Fig. 7　出土遺物（１）……16
Fig. 8　出土遺物（２）……17

図　版　目　次

PL1.　１．トレンチ１　（北から）
　　２．トレンチ　１東壁堆積土層
　　３．調査地裏の石塔群
　　４．調査地前から極楽寺方面を望む
　　５．作業風景
　　６．作業風景
PL2.　１．調査区西壁堆積土層
　　２．調査区北壁堆積土層
　　３．４面全景（北から）
　　４．遺構４（東から）
　　５．６面全景（北から）
　　６．かわらけ集中地点（東から）
PL3.　１．遺構12堆積土層（東から）
　　２．遺構12（南から）
　　３．６面下全景（北から）
　　４．遺構14（西から）
　　５．７面全景（北から）
　　６．遺構16（西から）
PL4　１．遺構17・18・19（西から）
　　２．遺構17・18・19（東から）
　　３．遺構16・17・18・19（西から）
　　４．８面全景（北から）
　　５．遺構20・21・22・23（西から）
　　６．遺構20堆積土層（西から）

第１章　遺跡概観

第１節　　遺跡の立地

本調査地は、鎌倉市極楽寺二丁目18番外に所在する。江ノ島電鉄の極楽寺駅より北東に150m程の場所で極楽寺坂の頂上付近北側に位置する。極楽寺地区は、鎌倉旧市内を取り囲む山並みの外側で鎌倉市の南西部に位置している。村名の由来となった極楽寺は、霊鷲山感応院極楽寺と号し、真言律宗奈良西大寺の末寺である。開山は忍性、開基は北条重時である。極楽寺は、文永四年（1267）に忍性が入寺して以来、飛躍的な発展を遂げて繁栄を極めたが、元弘三年（1333）北条氏の滅亡により有力な後ろ盾を失うと同時に急激に翳りの色が見え始める。そして元亀三年（1572）には、火災により講堂他３塔頭を残して焼失してしまう。明暦年間になると焼失を免れた講堂を本堂に、仏法寺を方丈として現在地に移転して今日に至っている。

往時の極楽寺の境域には、西方寺・仏法寺・真言院・興正寺・蓮華寺・尼寺・福田院・吉祥院・宝幢（塔）院・就学院・勧学院等の多くの支院塔頭の存在が境内古絵図などから推定されている。この内の西方寺が今回調査を実施した地域にあったと推定されている。この寺については史料が非常に乏しく開基、開山、開創などは不明とされている。このように不明な部分が多い西方寺であるが『金沢文庫古文書』に「元徳二年正月卅日、於西方寺書写也」とみえ、正和三年（1314）「浄光明寺住持高慧等連署発願文写」に西方寺導也が署名している。また正和三年十月十四日付「覚園寺文書」で連署している相模国内の浄土宗関係の寺の僧14人のうち「西方寺導也」の名があることから、これより以前に創建された浄土宗の寺と思われる。また『新編武蔵国風土記稿』の都筑郡新羽村（現在の横浜市港北区新羽町）の条に西方寺がある。新羽村の西方寺には鎌倉の極楽寺から移ったという寺伝を残しているという。新羽村の西方寺の開山は継真で永禄四年正月朔日遷化していることから、西方寺が移転したのは天文年間（1532～1554）以降といえるであろう。

移転する以前の西方寺の境内には、極楽寺切通しが通っていたとされている。この極楽寺切通しは、所謂「鎌倉七口」といわれる中のひとつで鎌倉と外界を結ぶ重要なルートであり極楽寺の他に大仏・化粧坂・亀ケ谷・巨福呂・朝比奈・名越がある。

現在の極楽寺切通しは、近世以降になって開鑿されたもので道幅も広く勾配も緩やかになっているがもともとの切通しは、現在よりも北側を通り数年前までは崖面で観察することが出来たが、今ではコンクリートに覆われて観察することが出来なくなっている。高さも現存する成就院とほぼ同じ高さであったようで道幅も狭く荷物を積んだ馬が一頭通るといっぱいになる程であった。この極楽寺切通は交通の要点としての役割ともうひとつ防禦施設としての一面も兼ねていたようである。防禦施設と考える上で興味深い特殊な遺構が極楽坂周辺には残っている。それは「一升桝」、「五合桝」と呼ばれる桝形遺構でいずれも方形に土塁を廻らせた広場で近世の城郭や戦国期の山城の一部に見られる桝形の古い形態を示すものであろう。「一升桝」は馬場ケ谷の奥の山上にあり、「五合桝」は成就院の背後霊仙山の山頂付近にある。ここに軍勢を入れてその数をはかる目安に使われたと言い伝えられているが、実際には極楽寺坂防衛のための兵士を伏せておくための施設として考えるべきであろう。このような施設の存在から見てもここが防衛上でいかに重要であったかが窺われる。実際に元弘三年（1333）の新田義貞の鎌倉攻めの際にも極楽寺坂は、陥ちることはなく新田勢が稲村ケ崎にまわったことは有名である。

現在の西方寺跡は、寺院があった痕跡は見る影も無いが、調査地の北側の山裾と切通しを挟んだ南側

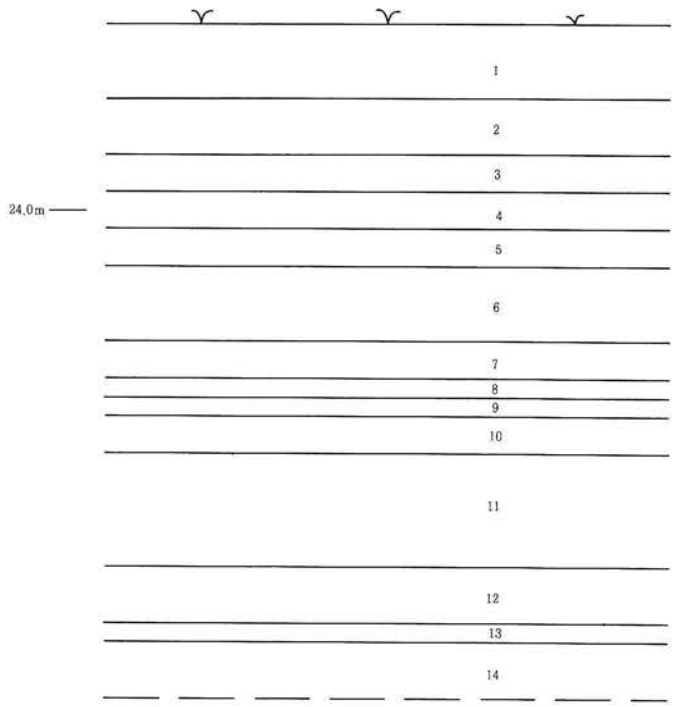


Fig. 3　堆積土層図

8層　暗茶褐色粘質土・・直径2～5㎝の土丹粒子を多く含む。この層の上面を第7面とした。

9層　黒褐色粘質土・・・直径2～5㎝の土丹粒子を多く含む。

10層　暗茶褐色粘質土・・直径2～3㎝の土丹粒子を多く含み締まり強い。この層の上面を第8面とした。

11層　土丹層・・・・・・かなり大きなサイズの土丹で構成され隙間に暗茶褐色粘質土が混入する。

12層　土丹層・・・・・・上の土丹層に比べ小さな土丹のみで構成される。

13層　暗灰褐色粘土・・・非常に細かな土丹粒子が若干含まれ、砂質土が含まれるのでザラザラしている。締まりは強い。

14層　暗灰褐色粘土・・・地山。木片が数片出土する。

第２章　検出された遺構と出土遺物

調査はまず表土層を除き第１面の検出を行ったがここでは、遺構を確認する事は無く撹乱の除去と土丹による地業面を確認するにとどまった。この後、第２面から第８面までの調査を行った。調査では、土丹地業層の上面を面として捉え遺構の検出を行った。

その結果、本調査で検出した遺構は、土壙13基、溝状土壙１基、溝１条、柱穴４口、ピット３口である。出土した遺物は、かわらけ・常滑窯製品・手焙り等の中世遺物でテンバコ総数にして10箱を数えるが、大部分はかわらけが占めておりその他の遺物は小片が殆どである。なお、かわらけについては整理作業の時間等の制約から完形品に近い製品を主に実測を行い図示した。また、かわらけは実測出来なかった破片を大・小に選別しそれぞれの総重量を量り、本調査地で出土した大・小の完形品のかわらけ５点づつの平均値（大170g・小49g）で割って重量個体数として示した。

以下、検出した遺構と出土遺物の説明を加える。

第１節　遺構と遺物

Ⅰ　１面

地表面から40～50cmの厚さの耕作土を除去すると海抜24.6m前後で土丹粒子、かわらけ片を主体とする暗褐色粘質土が検出される。この層の上面を第１面とした。ここで、遺構の検出を試みたが現代撹乱が多く遺構は検出されなかった。第１面では出土遺物もないため全体図は図示しなかった。

Ⅱ　２面

第２面は、第１面を構成する暗褐色粘質土層の下約30cm程で確認された土丹粒子を非常に多く含む暗褐色粘質土上面を面とした。海抜は24.2m 前後を測りほぼフラットである。ここで検出された遺構は、土壙２基（土壙１、２）である。

土壙１

調査区西部で検出。直径は上端で約40cm、深さは10cmを測る円形の土壙である。覆土は、黒褐色粘質土で土丹粒子を多く含むものである。出土遺物については、かわらけが破片で３片出土しているが図示出来たものは無い。

土壙２

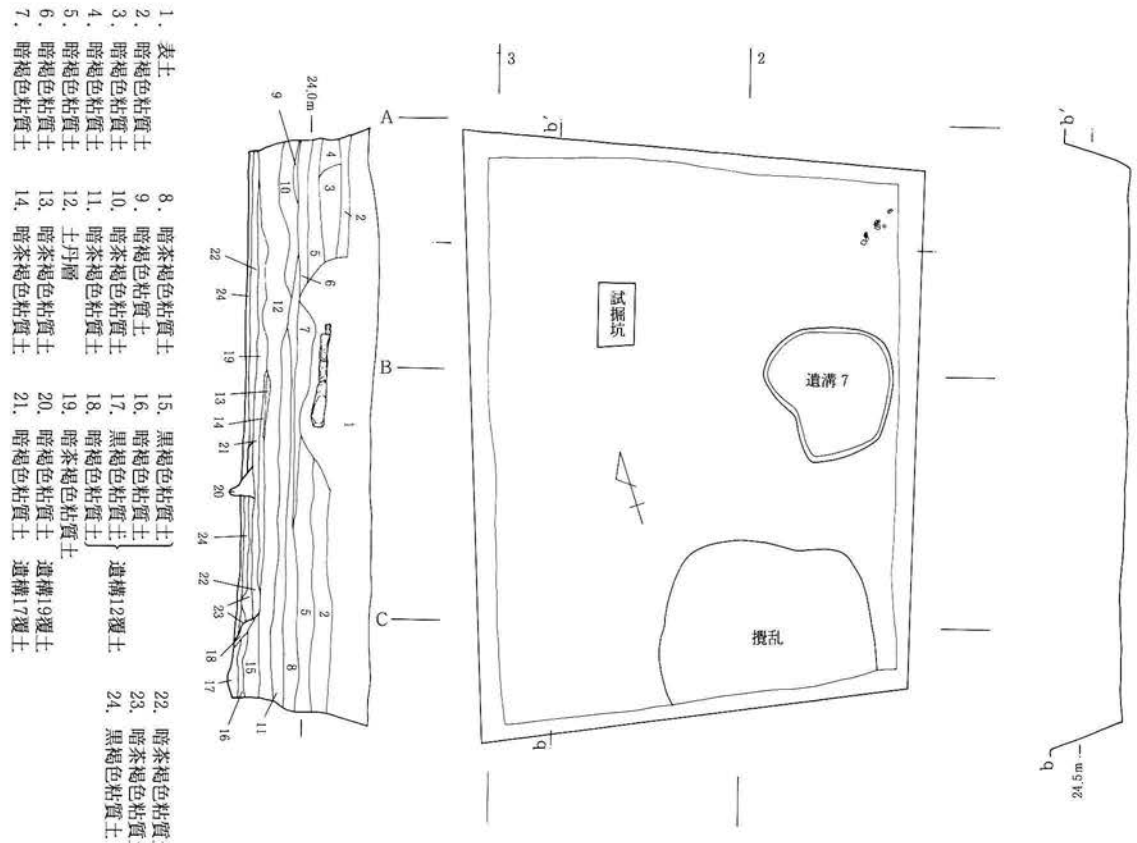
調査区西部で検出。直径は上端で約100cm、深さは約30cmを測る土壙である。覆土は、黒褐色粘質土で炭化物を多量に含む。遺構１と調査区に切られるため不明である。出土遺物は、図示出来なかった遺物として、かわらけ・常滑窯甕・釘が出土している。

２面出土遺物（fig.7-1～12）

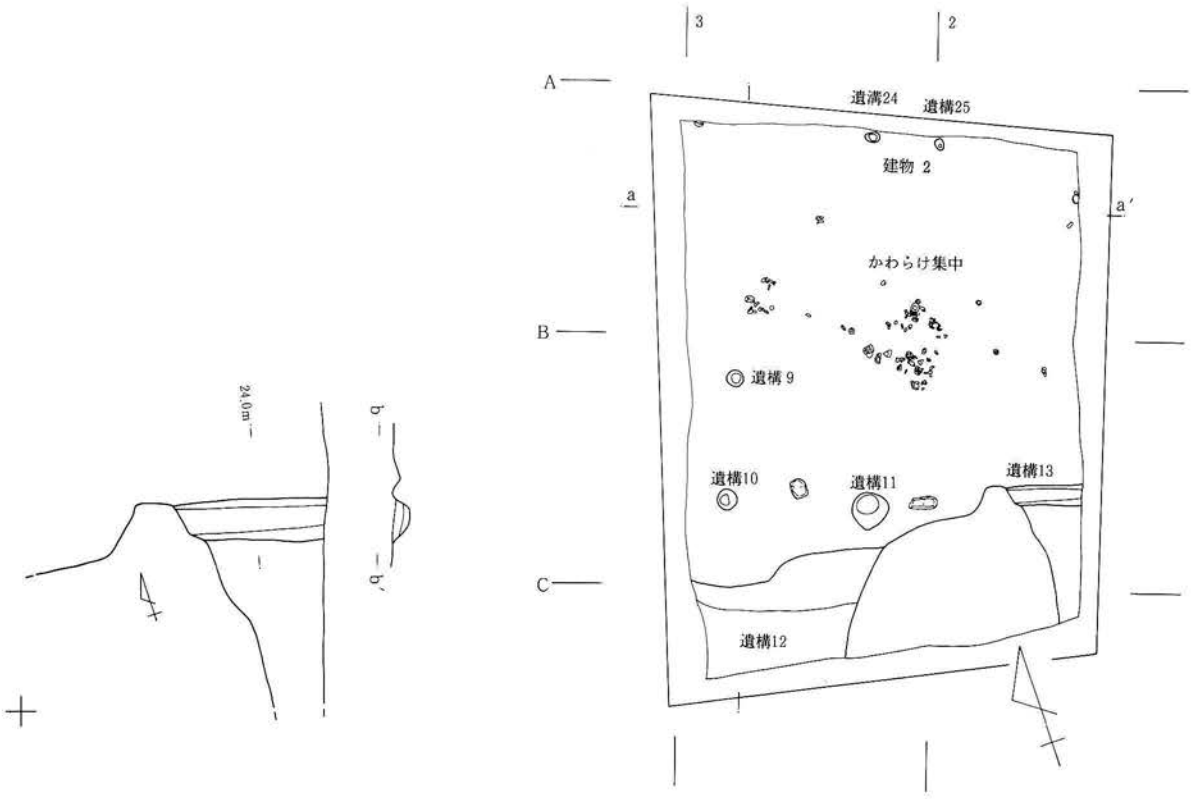
1～11は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。１～４は小型でいずれも器肉はやや厚く、１だけが器高が低く浅いタイプである。５～11中・大型で８だけが器肉が薄いタイプである。３～５は口唇部に油煤付着、灯明皿。12は擦り常滑。常滑の甕の胴部片を利用したもので、外面にあたる部分と断面については著しく摩滅している。13は元豊通寶（北宗・初鋳年1078年・行書）。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが破片個体数にして大43個、小63個・青磁碗・瀬戸窯瓶子、皿・山茶碗窯捏ね鉢・常滑窯甕、捏ね鉢・魚住窯捏ね鉢・手焙り・鉄製品・銅銭が出土している。

Ⅲ　３面

第３面は第２面下約20cm程で確認された土丹粒子の少ない締まりの強い暗褐色粘質土の上面を面とし



（4 面）



（6 面）

Fig. 4　4 面・6 面全体図

て調査を行った。海抜は24.0m 前後である。検出した遺構は、土壙２基（土壙４、５）である。

第２面、第３面では、それぞれ２基の土壙を検出しているがこれらにともなう遺物は少なく図示出来た遺物もないため全体図及び遺構個別図は省略した。検出した遺構、出土した面遺物は、以下の通りである。

土壙４

調査区中央北寄りで検出。直径は上端で約40㎝、深さは約30㎝を測る楕円形を呈する土壙である。覆土は、暗灰褐色粘質土で土丹粒子、炭化物、かわらけ片を少量含む。出土遺物については、図示出来なかったが、かわらけ小片が14片出土している。

土壙５

調査区北部で検出。直径は上端で約50㎝、深さは約25㎝を測る楕円形の土壙である。調査区外に延びている。覆土は、暗灰褐色粘質土で土丹粒子、炭化物、かわらけ片を少量含む。出土遺物については図示出来なかったが、かわらけが重量個体数にして小１個分、釘、骨が出土している。

３面出土遺物（fig.7-14～17）

14～17は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。ここに図示した、かわらけはいずれも小型であり14・15は体部が直線的に立ち上がる器高の低いもので、16・17は器肉は薄く器高の高いものである。この他に、かわらけが重量個体数にして大17個、小42個分、瀬戸窯入れ子、常滑窯甕、手焙り、滑石鍋、釘、銭、骨、染付碗が出土している。

Ⅳ　４面

第３面下の土丹粒子、炭化物、かわらけ片を多く含む暗茶褐色粘質土上面を第４面として調査を行った。海抜は23.8m 前後である。検出した遺構は土壙１基（土壙７）である。

土壙７

調査区東部で検出。直径は上端で約210㎝ 、深さは約20㎝を測る。不整円形を呈する浅めの土壙である。覆土は、暗茶褐色粘質土で小さな土丹粒子、炭化物、かわらけ片を含み上層は大きめの土丹と鎌倉石が覆っていた。この遺構からは、動物遺骸（猫？）が 1頭分検出されている。猫の埋葬遺構とするには土壙の平面形等に不自然さが残るが可能性は高い。

覆土からはfig.7-26に示した元豊通寶（北宗・初鋳年1078年・篆書）が出土している。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大９個、小21個分、常滑窯甕、釘、銭、骨が出土している。

４面出土遺物（fig.7-18～25）

18～25は、かわらけである。器表は灰燈色から燈色を呈し、いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。18は底部中心部分に穿孔が見受けられる。20～25は中・大型に属するタイプで20・21・24は器肉が薄手で胎土が精良、22・23・25は20・21・24に比べ器肉がやや厚く胎土も小礫を含み雑な印象を受ける。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大26個、小26個分、青磁碗、瀬戸窯卸し皿、山茶碗窯捏ね鉢、常滑窯甕・捏ね鉢、魚住窯捏ね鉢、手焙り、釘、砥石、骨が出土している。

Ⅴ　５面

第４面下20～30㎝程の大、小の土丹ブロックを主体とした暗茶褐色粘質土を混入した土丹面上面を５面として調査した。海抜は23.6m前後を測る。しかしここで遺構は確認されなかった。このため全体図は省き、出土遺物を以下に示した。

５面出土遺物（fig.7-27～33）

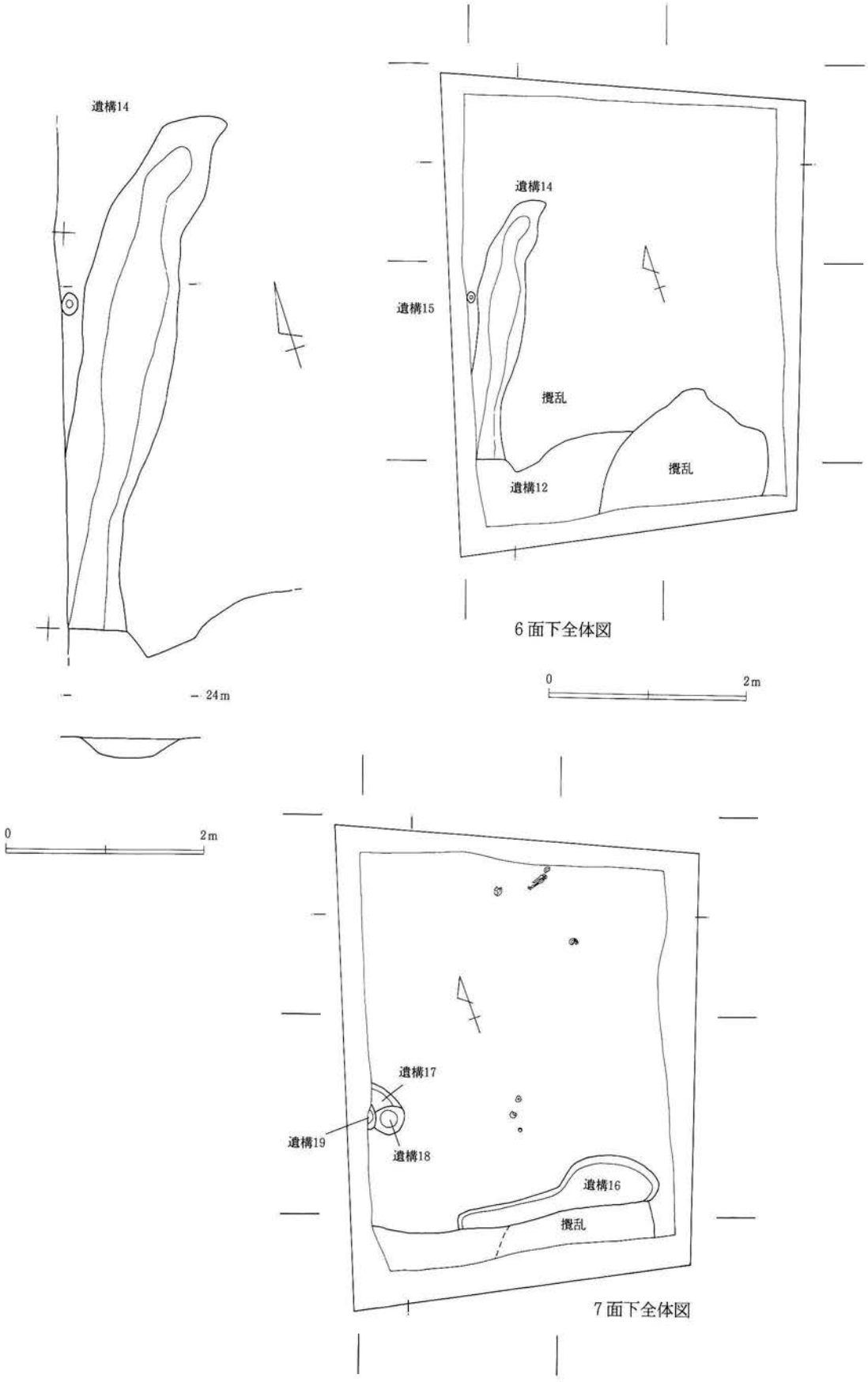


Fig. 5　6面下、7面全体図

27は手焙りの破片で胎土は灰黒色を呈する。体部には小さな孔が穿れる。28～32は、かわらけでいずれも轆轤成形で外底面には回転糸切り痕を有する。器表は灰燈色から燈色を呈する。32は口唇部に油煤付着、灯明皿。33は滑石製のスタンプ。表面には草花が陽刻される。滑石鍋からの転用と思われる。この製品の中心短軸方向には穿孔がある。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大16個、小38個分、青磁瓶子・碗、瀬戸窯皿、山茶碗窯捏ね鉢、魚住窯捏ね鉢、常滑窯甕・捏ね鉢、手焙り、擦り常滑、染付碗、釘、骨が出土している。

Ⅵ　6面

第5面下20～60cmで確認されたかわらけ片を多く含む暗茶褐色粘質土上面を第6面として調査を行った。海抜は23.3m 前後を測り南から北に向かって緩やかに傾斜している。また、性格は掴めなかったものの調査区東寄りには土丹が集中する範囲が確認出来た。検出した遺構は不明遺構1基、溝1条、建物1棟、ピット2口、かわらけ集中地点1カ所である。

かわらけ集中地点

調査区中央付近で検出。東西で約5ｍ、南北で約1.5m 程の範囲で確認された。これは明確な遺構に伴うのではなく、平面的に散乱している状況であった。かわらけは、完形品がひび割れたものまたは小片が殆どで出土状況からは、正位、覆位を意識したものとは考えられなかった。ここではかわらけ溜りでは無くかわらけ集中地点とした。

出土遺物（Fig. 8-45～63）

45～63は、かわらけである。58・60は口唇部に油煤が付着する灯明皿。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。45～56は小型の浅皿タイプ。57・58は小型の深皿タイプ。59～63は中・大型。器表は概ね灰燈色から燈色を呈する。54・60は口唇部に油煤が付着する灯明皿。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数として大22個・小70個分、青磁、山茶碗窯捏ね鉢、常滑窯甕、手焙り、瓦、釘、砥石等が出土している。

建物 1

遺構9、遺構10、遺構11のピットで構成される。調査区南部で検出された。遺構9は上端で約25cm、深さ約25cmで平面円形、遺構10は上端で約30cm、深さ約10cmで平面円形、遺構11は上端で約60cm、深さ約15cmで平面円形を呈している。遺構間の距離は遺構9と遺構10の間が約95cm、遺構10と遺構11の間が約110cmを測る。小規模な建物であったと考えられる。

各遺構覆土は、暗褐色粘質土で炭化物を含む。出土遺物は、図示出来るような遺物は無くかわらけが破片で出土している。

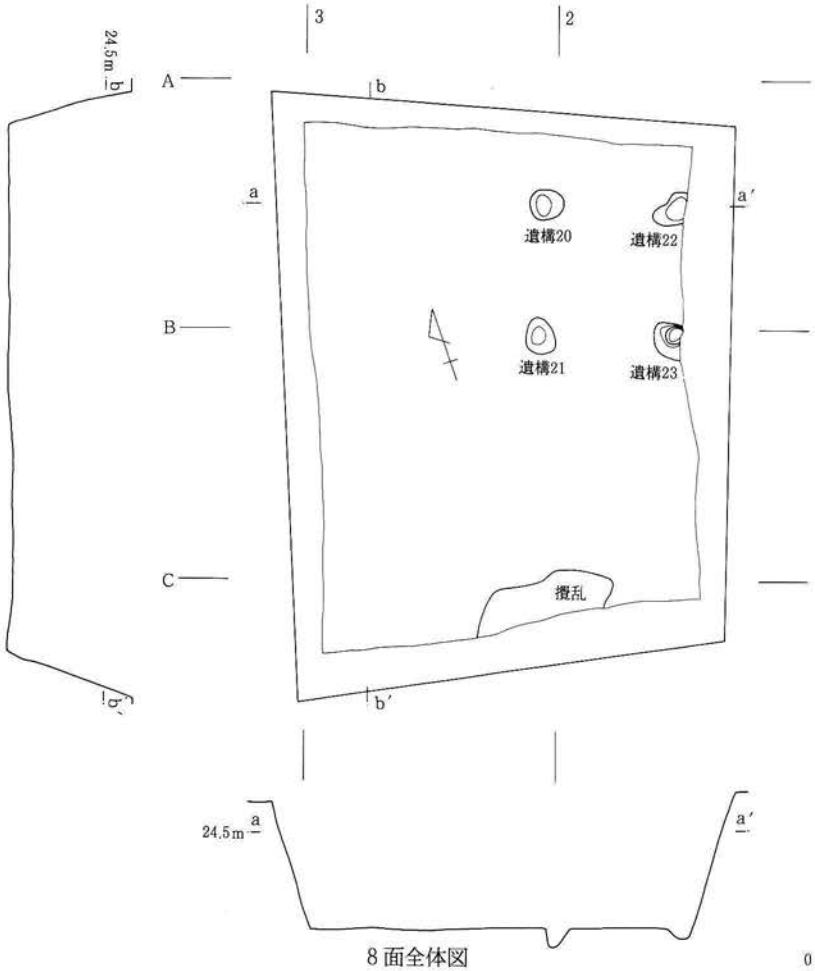
遺構12

調査区南西部で検出した不明遺構である。東を撹乱に、南と西で調査区外に延びるため遺構の性格、形態を示すことは出来ないが、確認した部分では東西が約280cm、深さは約60cmを測りかなり大きな遺構であるといえるだろう。この辺りにあったとされる極楽寺の切り通しあるいは寺域への入口の一部とも考えられるが確証は無い。覆土は、暗灰褐色粘質土で土丹粒子と炭化物が多く含まれる。

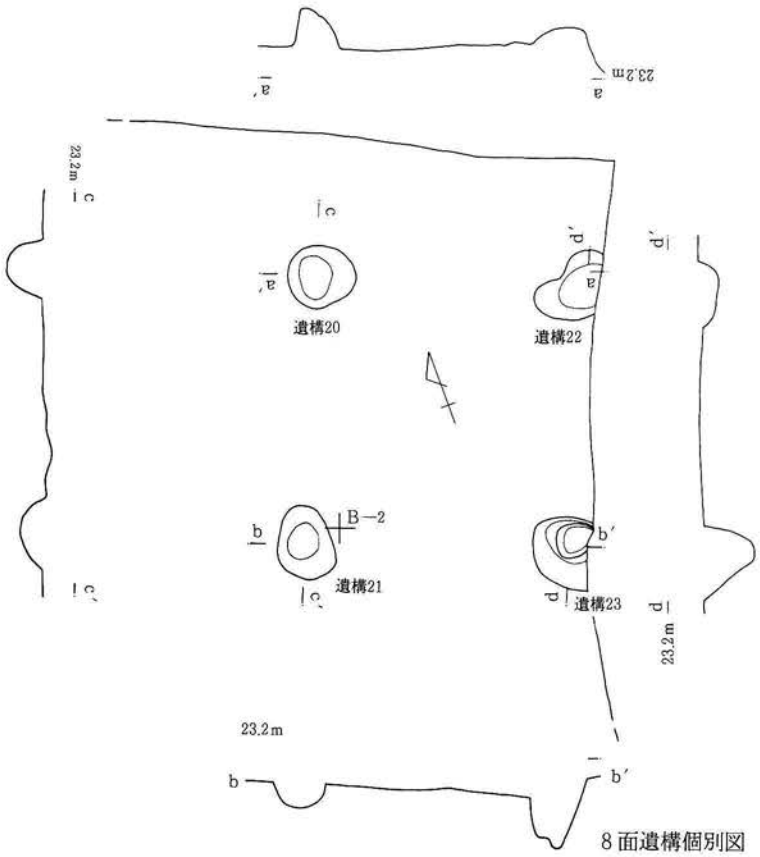
出土遺物（Fig. 7-42～44）

42～44は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。42・43は小型で42は灰燈色を呈し器肉が薄い。43は灰燈色を呈し器肉が厚く器高の低いものである。44は大型で粉質胎土で赤燈色を呈する器肉が薄手のタイプである。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大8個・小18個分、常滑窯甕、手焙り、瓦、釘、硯、骨等が出土している。

溝1－遺構13



8面全体図



8面遺構個別図

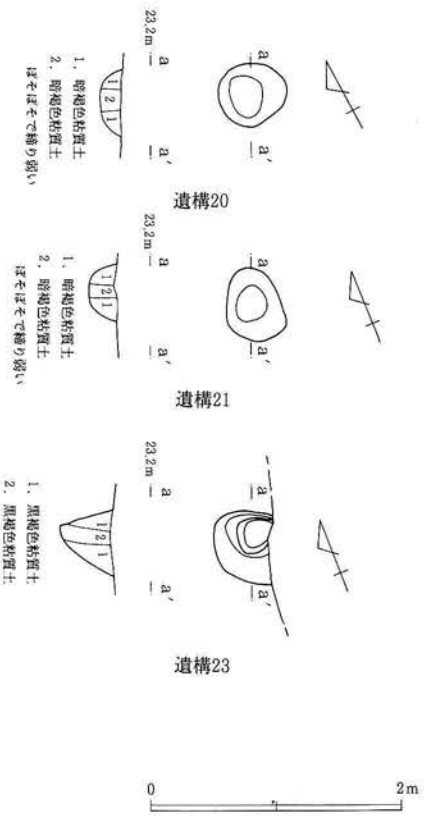


Fig. 6　8面全体図

調査区南東部で検出された調査区を東西方向に走る溝であるが、東は調査区外に延び、西は撹乱に切られているため全容は定かではないが、長軸で約120cm、幅が約30cm、深さは約10cmを測る小規模なものである。覆土は、暗茶褐色粘質土で土丹粒子が非常に多く含まれる。出土遺物は図示出来たものが無く、かわらけが重量個体数にして小1個分が出土した。

建物2

遺構24と遺構25で構成される。調査区北部で検出されたが中心部は調査区北側にあると思われ、全体形は把握できなかった。遺構24は、土丹をくり貫いた様な遺構で上端の一辺が約20cm、深さは約5cmを測る正方形に近い形を呈する極浅いピットである。遺構25は、遺構24と同様に土丹をくり貫いた様な遺構で長軸で約20cm、深さは約10cmを測る楕円形を呈するピットである。

6面出土遺物（Fig.7-34～41）

34は龍泉窯系青磁の燭台の破片である。胎土は灰色で精緻、釉は透明感のある濃緑色である。35～39は、かわらけでいずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。36は糸切り痕が不明瞭である。35～37は小型で35は器肉が薄く体部がやや外反気味に立ち上がる深皿タイプである。36・37は器高の低い浅皿タイプである。38・39は大型のもので39は粉質胎土で非常に精緻、燈色を呈し器肉は全体的に薄く歪みも少ない成形である。40～41は釘である。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが破片個体数として大26個、小75個・青磁碗・白磁皿・瀬戸窯入れ子・山茶碗窯捏ね鉢・常滑窯甕、壷、捏ね鉢・釘・笄・骨が出土している。

Ⅶ　6面下

第6面の調査区東で確認した、西に向かって緩やかに傾斜している土丹を含む暗茶褐色粘質土層の上面を6面下として調査を行った。ここで検出したのは溝状遺構1基とピット1口である。6面と6面下は同じ基盤層上で確認された2時期の切り合いである。

遺構14

調査区西部で検出。調査区を南北方向に走る溝状の遺構と思われる。遺構の全長は、前面の遺構13に切られているため確認された長軸が約520cm、幅が約100cm、深さ約15cmを測る浅い遺構である。

出土遺物

図示出来た遺物は無く、かわらけが破片個体数にして大2個、小4個、かわらけの破片には内折れタイプも含まれている。山茶碗窯捏ね鉢・常滑窯甕・釘・銭が出土している。

遺構15

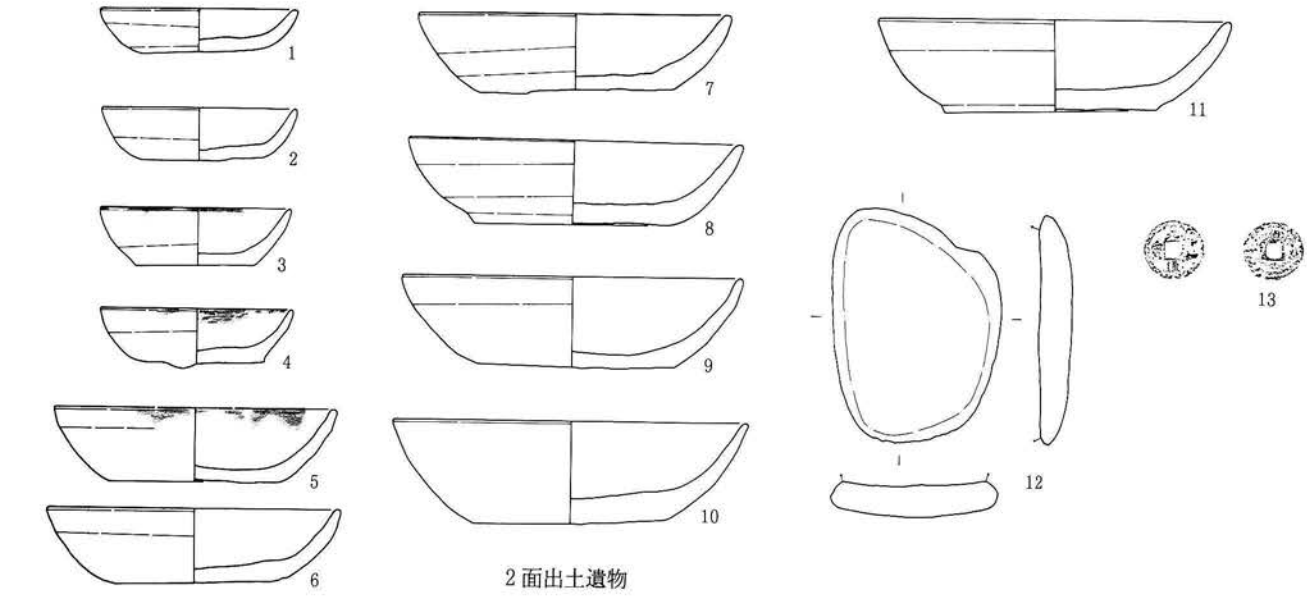
調査区西部で検出。直径は約20cm、深さは約5cmを測る円形を呈する小型の土壙である。遺物は出土していない。

6面下出土遺物（Fig.8-64、65）

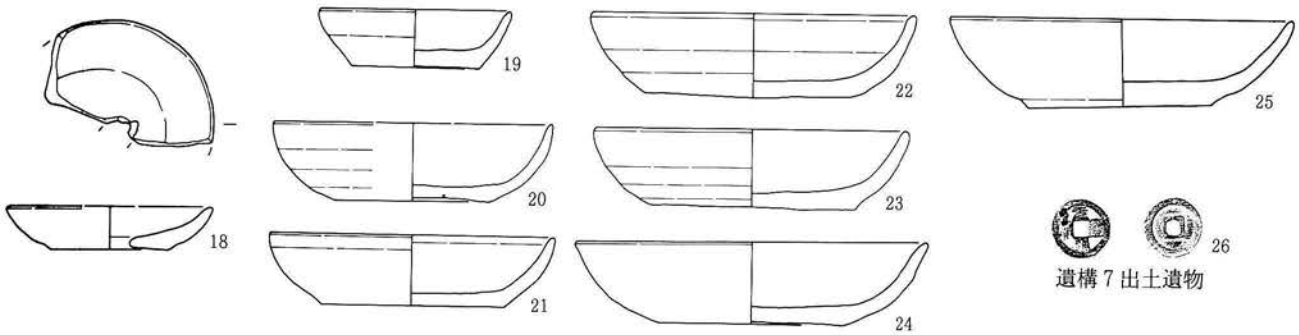
64は山茶碗窯系捏ね鉢の底部片である。器表は明茶褐色を呈し胎土は小礫を含み灰黒色を呈する。器表、胎土ともに一見すると常滑窯製品に似ている。高台は貼り付けである。内底部は、摩耗が著しくスベスベになっている。65は大観通寶（北宗・初鋳年1107年・楷書）が出土した。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大14個、小44個分、白磁口兀皿、山茶碗窯捏ね鉢、常滑窯甕、手焙り、銭が出土している。

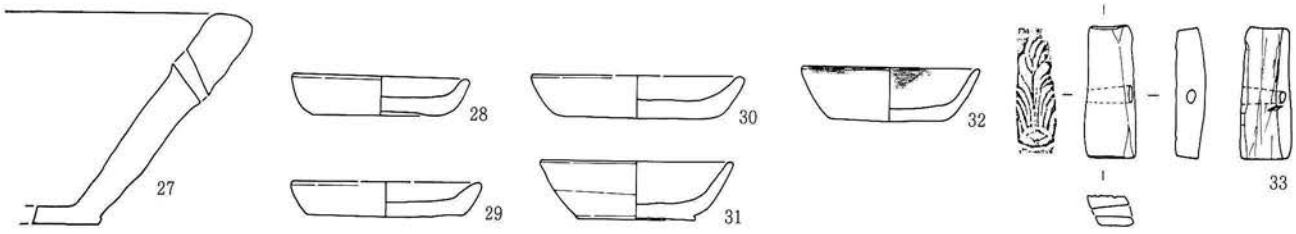
Ⅷ　7面

6面及び6面下を構成する暗茶褐色粘質土層の下20cmで確認された暗茶褐色粘質土上面を第7面として調査を行った。海抜は23.1m前後である。検出した遺構は大型の遺構1基と土壙3基である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
2面出土遺物

14
15
16
17
3面出土遺物


18
19
20
21
22
23
24
25
26
遺構7出土遺物
4面出土遺物


27
28
29
30
31
32
33
5面出土遺物

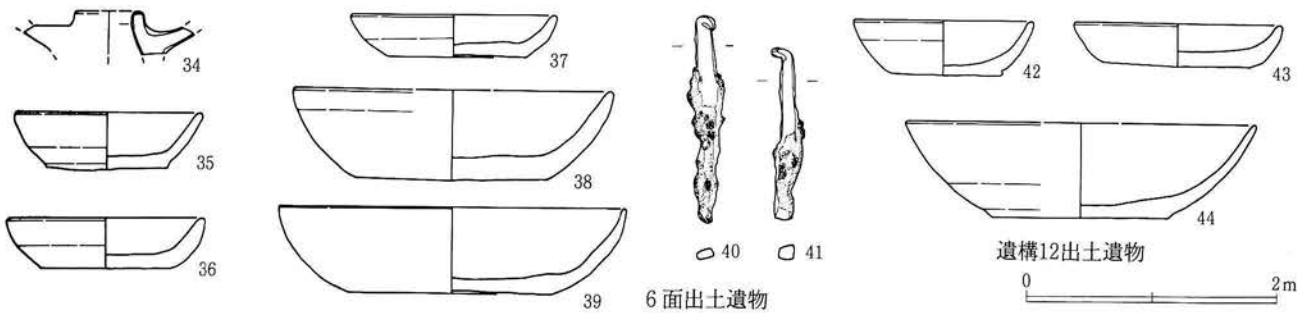
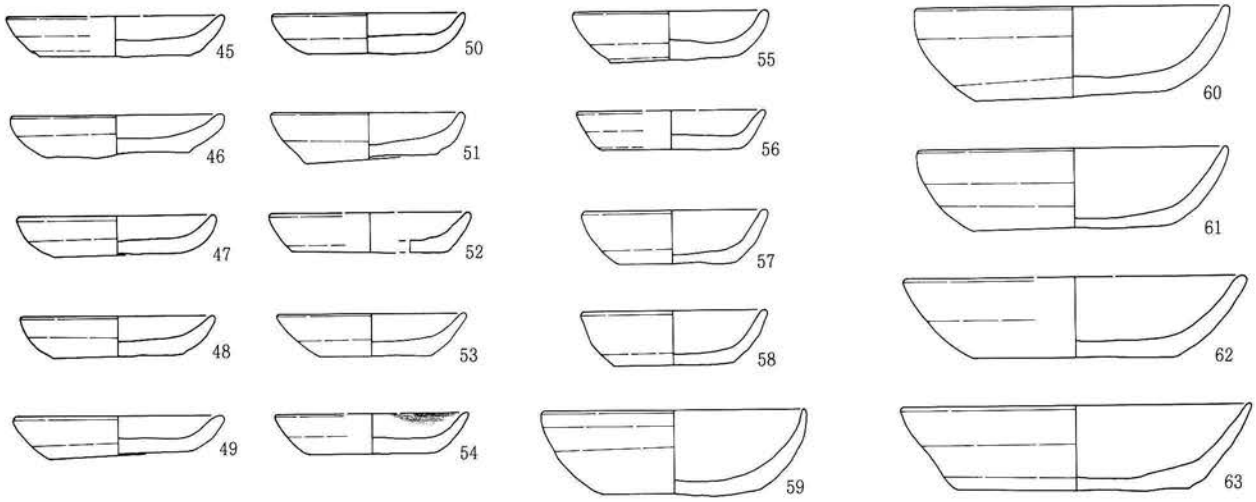
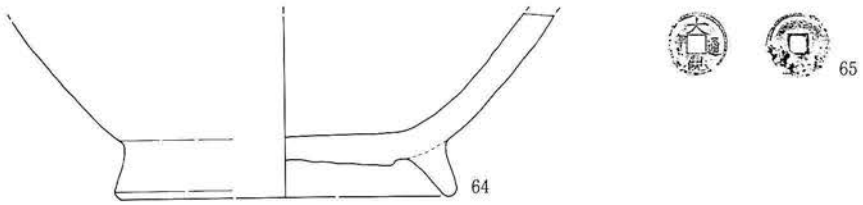

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
遺構12出土遺物
6面出土遺物
0
2m

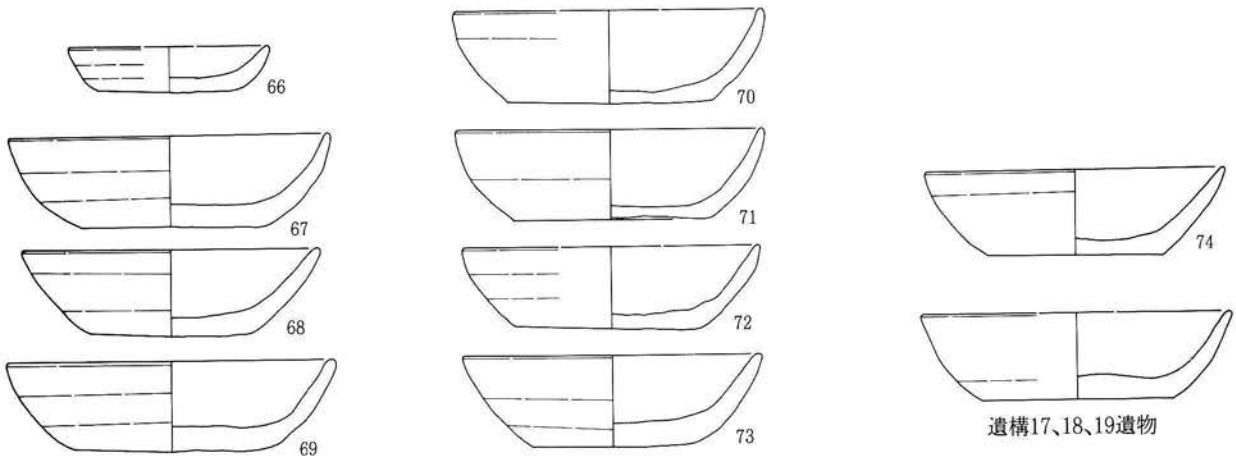
Fig. 7　出土遺物（1）



かわらけ集中地点出土遺物

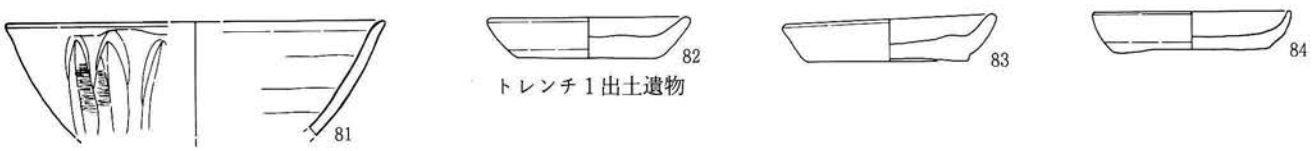


6面下出土遺物



遺構17、18、19遺物

8面出土遺物



トレンチ1出土遺物

攪乱出土遺物

0 10cm

Fig. 8　出土遺物（2）

遺構16

調査区南部で検出。撹乱に切られているため遺構の性格、形態は不明であるが長軸で約400㎝、深さは約20㎝を測る遺構である。覆土は、暗褐色粘質上。出土遺物は、図示出来た遺物は無く、かわらけが重量個体数にして小1個分と骨が出土している。

遺構17・18・19

調査区西部で検出。この3基の遺構はそれぞれ切り合いを持つ土壙である。遺構17、遺構18、遺構19の順に新しい。17は調査区外に延びるため直径は不明、深さは約10㎝。覆土は、暗褐色粘質土で土丹粒子、炭化物、かわらけ片を多く含む。遺構18は、直径は約50㎝で深さ約30㎝を測る円形を呈する土壙である。覆土は、暗褐色粘質土で土丹粒子、炭化物、かわらけ片を多く含む。遺構19は、調査区外に延びており直径は不明、深さ約35㎝を測る。覆土は、暗褐色粘質土で遺構17・18に比べ炭化物が少ない。

出土遺物（Fig.8-74、75）

74～75は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。器表は灰燈色を呈する。74は体部が直線気味に立ち上がる薄手のタイプである。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大2個、小3個分が出土している。

7面出土遺物（Fig.8-66～73）

66～73は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。66のみ小型で他は中・大型である。器表は灰燈色から燈色を呈する。68は体部が直線的に立ち上がる。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大9個、小18個分、瀬戸窯製品、常滑窯甕・捏ね鉢、手焙り、釘、骨が出土している。

Ⅸ　8面

第7面下20㎝程で確認された直径2～3㎝ の土丹を主体とする締まりの強い暗茶褐色粘質土上面を第8面として遺構の確認を行った。海抜は22.9m 前後を測る。検出された遺構は柱穴4口である。

建物3

検出した柱穴4口は建物址を形成していると考えられるが調査区内だけでは建物全体を想定するのは困難であるが、上面で確認された建物1よりは規模が大きいようである。

建物を構成する遺構20～遺構23は、芯々距離にして遺構20と遺構21の間が約210㎝、遺構20と遺構22の間が約210㎝、遺構21と遺構23の間が約200㎝、遺構22と遺構23の間が約200㎝を測る。各遺構は遺構20が直径約50㎝、深さ約30㎝を測る円形で、覆土は暗褐色粘質土で炭化物を少量含み締まりは弱い。遺構21は直径約60㎝、深さ約20㎝の円形で、覆土は暗褐色粘質土である締まりは弱い。遺構22は直径約50㎝、深さ約15㎝を測り、覆土は黒褐色粘質土で炭化物が多く含まれ締まりはやや強い。遺構23は直径約50㎝、深さ約40㎝を測り、覆土は黒褐色粘質土で炭化物が多く含まれ締まりはやや強い。

遺構20から遺構23では遺物が全く出土していない。

8面出土遺物（Fig.8-76～80）

76～80は、かわらけである。いずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。76は内折れタイプで粉質胎土、燈色を呈する。77～80は器表が灰燈色から燈色を呈する薄手で器高の低い小型タイプである。80は口唇部に油煤が付着する灯明皿。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大5個、小12個分、山茶碗窯捏ね鉢、常滑窯甕、釘、骨が出土している。

第2節　トレンチ

8面までの調査を終了した後、調査区の中央に2m×2mのトレンチを設定し下層の観察を行った。8面の構成土が約20cm程の厚さで堆積しておりそれ以下では、自然堆積の土丹層が約90cm堆積している。この土丹層は土丹ブロックの大、小で2つに分けることが出来る。これを取り除くと海抜にして22.0m付近で暗灰褐色粘土の地山を確認することが出来た。地山を確認したこととそこからの湧水が見られたのでこれ以上の掘削は行わなわずここで作業を終了した。地山層からは、自然木と思われる木片が数片出土した。

出土遺物（Fig. 8-81～84）

81は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗。灰白色で精緻、釉は淡い青緑色で薄くかけられる。82～84は、かわらけでいずれも轆轤成形で外底面に回転糸切り痕を有する。82・83は灰燈色を呈し体部が直線的、或は外反気味に立ち上がる。84は赤燈色を呈する器肉が薄いタイプである。この他に図示出来なかった遺物として、かわらけが重量個体数にして大7個、小21個分と釘が出土している。

ここに示した出土遺物は、全て8面を構成する土中から出土したものでありこれより下層では遺物を確認していない。

Ⅰ　撹乱出土の遺物（Fig. 8-85～90）

85～90は、かわらけである。87・90は、口唇部に油煤が付着する灯明皿。

第3章　まとめ

今回の発掘調査は、現在の極楽寺切り通し路面から数メートル高い位置での調査でもあって、切り通し関係の遺構が確認されるのではないかと期待したが、すでに削平されてしまったのか、今回の地点では確認することはできなかった。しかし、地山近くから遺構面が幾度も作り替えられている様相は掴め、周辺の生活が賑わっていたことが明らかになった。
本章では、調査で得られた結果から2～3の事項についてまとめを行う。

Ⅰ　検出された遺構の年代

調査では、最下層の第8面から蓮弁文青磁碗と口径8㎝ 前後の器高の低いかわらけが出土している。1片しか出土していない青磁碗はさておき、幾つか出土しているかわらけは小型化し、84は器肉も薄くなっている。これだけで判断するのはやや軽率かもしれないが、一応第8面の年代を13世紀第3四半期頃と考えたい。

最上層の第2面からは11点のかわらけと磨り常滑、銅銭が出土している。かわらけには所謂戦国タイプは一点も含まれておらず、小皿は8㎝以下の口径にまとまっている。器形は大、中、小に分かれる。伴出する遺物がほとんど無いため、十分な資料での結論ではないが、第2面の年代はおおむね15世紀初頭頃までと考えたい。

以上のことから、今回の調査で確認された遺構群は極楽寺が創建（1259）されてから間もなく構築され、元亀三年（1572）に火災で極楽寺の多くの建物を失う前に、生活が廃止されていたと考えられる。切り通し（文永～弘安頃開鑿－1264～1288）との関係は明らかにできなかったが、確認された幾つかの面は同時に存在していたことだろう。

Ⅱ　出土遺物について

今回の調査で出土した遺物はほとんどがかわらけで、一般的な生活を示すような鉢や甕等の焼き物はわずかしか確認できなかった。出土遺物を百分率で示せばかわらけが90%以上を占めていることになる。逆に通常の場合、寺院遺跡で多く出土する瓦や仏具等の宗教遺物はほとんど出土していない。調査地周辺に推定される「西方寺」の中での調査地点による出土遺物の様相変化もあるのだろうが、出土遺物から寺院断定することはやや困難を伴う。

しかし、極楽寺の境内域とはいえ、鎌倉で切り通しの頂上近くを調査出来ることは希であり調査結果に期待が持たれた。その結果として、極楽寺の切通しの頂上近くで何回も地行され、建物が作り替えられている様子が確認されたことは興味深い。

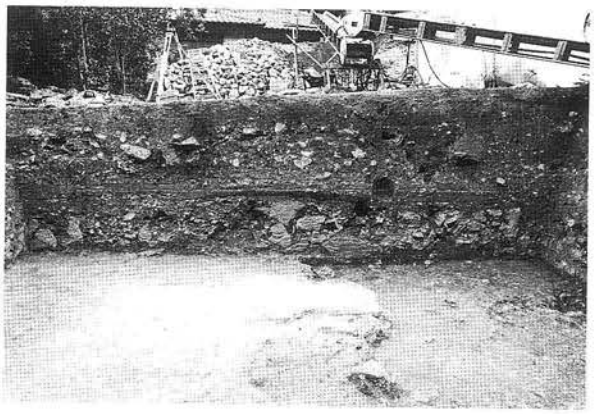
今後、切通しと極楽寺あるいは周辺の防御施設などとの関係が明らかになれば、切通しの持つ意味がより明確になるだろう。

現在、鎌倉市が進めている周辺の地形調査の結果が待たれる。

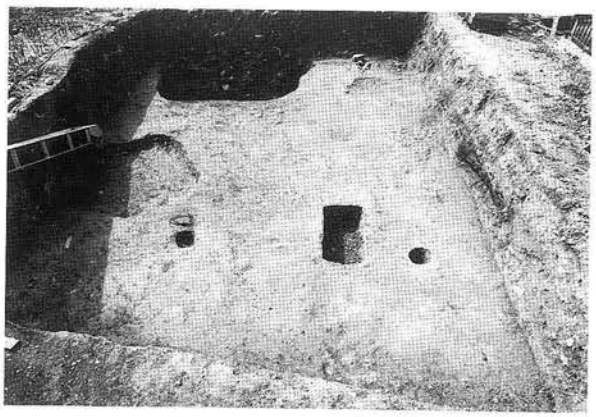
写　真　図　版

PL. 2

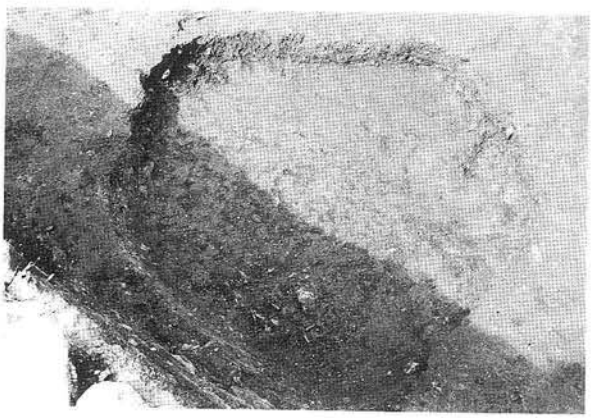
1．調査区西壁堆積土層



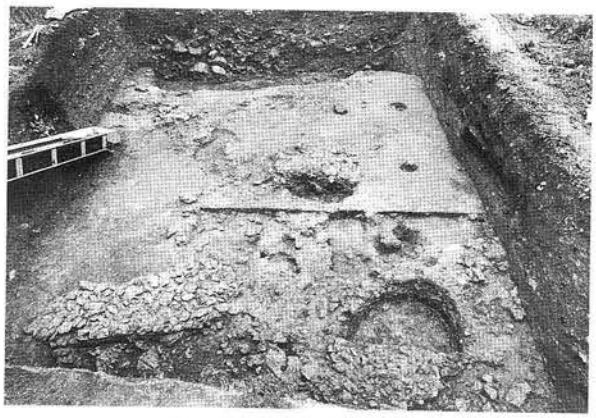
2．調査区北壁堆積土層



3．4面全景（北から）



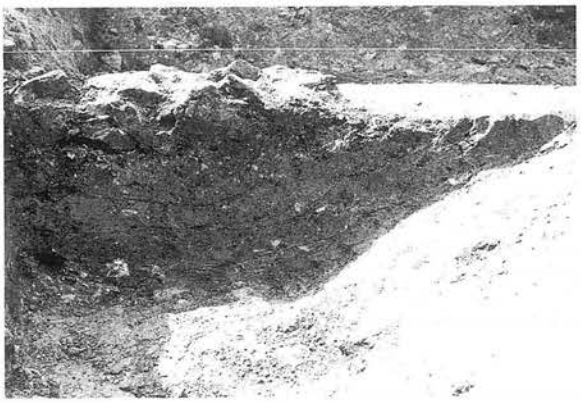
4．遺構4（東から）



5．6面全景（北から）

6．かわらけ集中地点（東から）

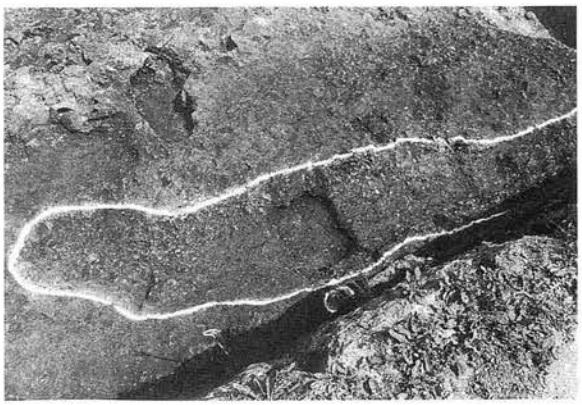
PL. 3



1．遺構12堆積土層（東から）

2．遺構12（南から）

3．6面下全景（北から）

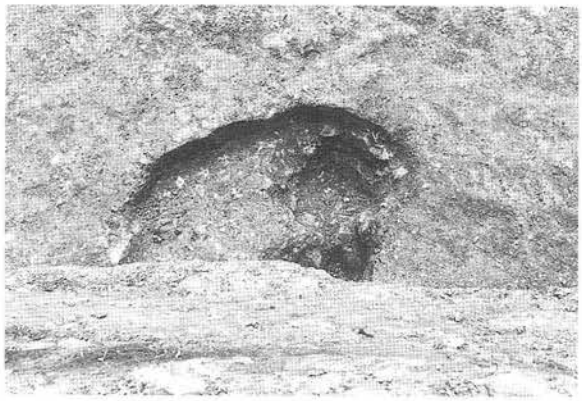


4．遺構14（西から）

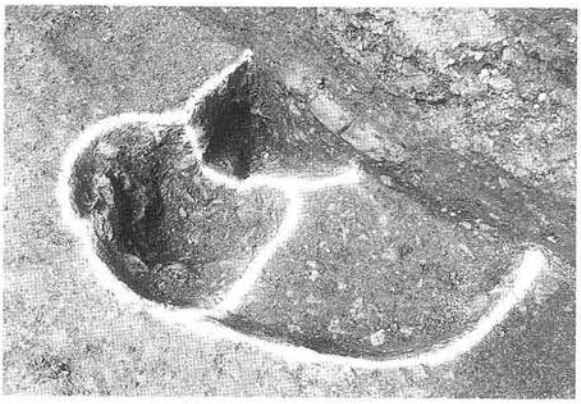
5．7面全景（北から）

6．遺構16（西から）

PL. 4



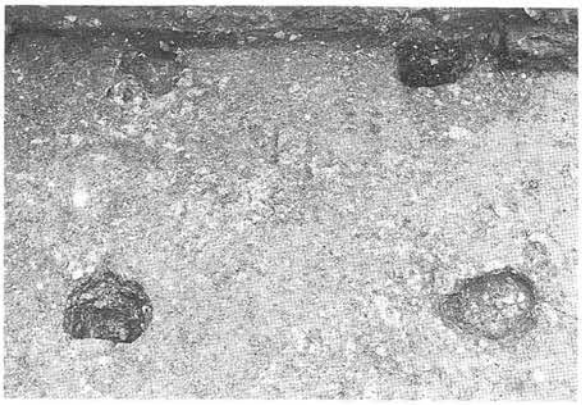
1．遺構17・18・19（西から）



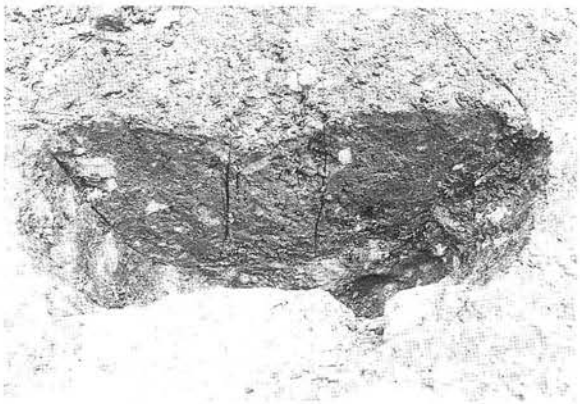
2．遺構17・18・19（東から）

3．遺構16・17・18・19（西から）

4．8面全景（北から）



5．遺構20・21・22・23（西から）



6．遺構20堆積土層（西から）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
さいほうじあと 西方寺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ごくらくじ 極楽寺二丁目 18番外	14204	219			1998年 ３月９日 ～ ５月15日	118.48㎡	自己用住宅 駐車場用地

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西方寺跡	寺院址	中世	版築面	かわらけ他	

海蔵寺旧境内遺跡（No.299）

扇ガ谷四丁目632番３地点

例　　言

1．本報は鎌倉市扇ガ谷四丁目632番３地点における住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．調査は平成10年３月16日から５月２日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は以下のとおりである。

担　当　者　手塚直樹

調　査　員　野本賢二、小柳津シゲ子、岡陽一郎

調査補助員　松原康子、鍛治屋勝二、田畑衣理

作　業　員　渡辺鉄雄、関卯之松、宮崎明、出川清次（鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報の執筆は岡（第１章）、野本（第２章～第４章）が行い、これを手塚、野本が編集した。

5．資料整理は小柳津、田畑、岡、鍛治屋、野本が行った。

6．写真は、２面の全景（ポール式高所撮影）を木村美代治が、その他の遺構を野本が、遺物を山上玉恵が撮影した。

7．本報に掲載した地形図は鎌倉市都市基本図1：2500、1：500を縮小して使用した。

8．本報中の挿図縮尺は以下のとおりである。

図７・９・11・13・17・19　　1：30

図４・６・８・16・21　　1：60

9．報文中のＰは柱穴を表す。

10. 遺物実測図の縮尺は基本的に３分の１である。それ以外は各々に縮尺を付した。

11. 出土遺物の情報は遺物観察表に記した。遺物実測図番号、遺物観察表番号、遺物写真番号はそれぞれ一致する。

12. 遺物写真の縮尺は不同である。

13. 図面、写真、遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している

14. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。（順不同・敬称略）

斎木秀雄・馬淵和雄・木村美代治・福田誠・瀬田哲夫・汐見一夫・伊丹まどか・川又隆央・熊谷満（鎌倉考古学研究所）、根本志保（東国歴史考古学研究所）、諸星真澄、（社）鎌倉市シルバー人材センター、宮久保信義、（株）三井木材工業

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 32
第２章　調査の経過 …… 35
第３章　発見された遺構と遺物 …… 36
　第１節　１面 …… 36
　第２節　２面 …… 38
　第３節　３面 …… 45
　第４節　トレンチ …… 49
第４章　まとめ …… 51

挿　図　目　次

図１　遺跡の位置と周辺 …… 33
図２　遺跡の位置と梅谷「やぐら」分布図… 34
図３　グリッド設定図 …… 35
図４　１面平面図 …… 36
図５　１面出土遺物 …… 37
図６　２ａ面平面図 …… 38
図７　２ａ面建物部材 …… 39
図８　２ｂ面平面図 …… 40
図９　２ｂ面「張り出し部」 …… 41
図10　２ｂ面「張り出し部」下層出土遺物… 42
図11　２ｂ面落ち込み …… 43
図12　２ｂ面落ち込み出土遺物 …… 44
図13　２ｂ面遺物出土状況 …… 45
図14　２面出土遺物（１） …… 46
図15　２面出土遺物（２） …… 47
図16　３面平面図 …… 48
図17　３面礎板列 …… 48
図18　３面上出土遺物 …… 48
図19　トレンチ …… 49
図20　トレンチ出土遺物 …… 49
図21　調査区壁土層図 …… 50

表　目　次

表１　遺物観察表（１） …… 52
表２　遺物観察表（２） …… 53
表３　遺物観察表（３） …… 54
表４　遺物総破片点数表 …… 54

写真図版目次

図版１　１．１面石列（南から） …… 57
　　２．２ａ面全景（東から） …… 57
　　３．２ｂ面落ち込み遺物(東から)… 57
図版２　遺物写真 …… 58
図版３　遺物写真 …… 59

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点（図１－１）は鎌倉市の中心部付近に位置する扇ガ谷の内、源氏山から北西へと伸びる丘陵の東側に開析した梅谷と呼ばれる谷の内部に位置する。すぐ南には国指定史跡の仮粧坂があるため、ここを訪れる観光客の姿が絶えない。発掘調査はなされていないものの、調査地点の西には縄文土器片の採取された葛原岡遺跡が存在し(註1)、東に位置する海蔵寺の裏山が崩落した際には、崩落土中から弥生（末期）土器片が採取されている（図１－２）(註2)。とはいえ、これらの時代における調査地点付近の様子は全く不明であるといってよく、この点は古代についても同様である。あえて想像するならば、仮粧坂が鎌倉と武蔵国方面とを結ぶ武蔵大路の一部と考えられている点、鎌倉郡衙の東に位置する現在の今小路がこの武蔵大路と接続する点、『吾妻鏡』では養和元（1181）年という早い時期に武蔵大路が登場する点(註3)等から、この道路は中世以前から存在したと考えられよう。なお、この養和元年の記事では、主人の足利俊綱を殺害した桐生六郎が鎌倉に入ろうとして、武蔵大路から深沢経由で腰越へ向かった旨を記すため、彼は仮粧坂を経由して鎌倉入りしようとしたものと思われる。

調査地点周辺の様子がある程度明らかになるのは、鎌倉時代以降のことである。『とはずがたり』(註4)の作者の二条もここから鎌倉に入るが、その際の印象を「化粧坂といふ山を越えて、鎌倉の方を見れば、東山にて京を見るには引き違へて、階などのやうに重々に、袋の中に物を入れたるやうに住まひたる」とするのは、都市鎌倉の特徴を捉えている点で有名である(註5)。鎌倉時代末に成立の『真名本曽我物語』では、三原での狩に出発した源頼朝は「気幸坂」を通行しており(註6)、この道路が鎌倉街道上ノ道にも接続していた様子が窺える。

同時に当地が商業地でもあったことは、建長三（1251）年に幕府が定めた商業地域の中に、「気和飛坂山上」が登場することに明らかである(註7)。「山上」とあるため、現在の源氏山公園一帯がそうであったのであろう。また、『太平記』の日野俊基の処刑記事(註8)からは処刑場であった様子を知ることができるが、源氏山公園内で確認された土壙墓（図１－３）の存在は(註9)、同時にこの周辺が墓地でもあったことを物語る。先述した海蔵寺の裏山の崩落時には、やはり崩落土中から、蔵骨器として利用された瀬戸窯・常滑窯壷等が出土しているが、これも山上が墓地であったことの反映であろう。当地のもつこうした多様性については、それが鎌倉の内外を分けるという境界の地であるがゆえに成立したという、石井進氏の指摘がある(註10)。なお、仮粧坂という地名も、極めて境界性の強い地名であり、各地に見られる同地名も例えば平泉（岩手県）や磐田（静岡県）のように、やはり都市の境界に位置する。「化粧坂の少将」に代表されるような遊女に関する伝承も、この境界性がもたらしたものであろう。

また、その立地ゆえに当地が防衛拠点として利用されたこともよく知られ、元弘三（1333）年の新田義貞の鎌倉攻めを皮切りに、暦応元（1338）年の北畠顕家の西上時、正平七（1352）年の観応の擾乱、応永二十三（1416）年の上杉禅秀の乱に際しては戦場となっている(註11)。中でも暦応元年の際には、北畠軍の狼藉を恐れた円覚寺門前在地の人々が同寺に訴えた結果、瓜谷から山越えで仮粧坂までの道をつける工事を行ったという。この工事は途中で中断されたが、一種のバイパスを造ろうとしたことは興味深い。(註12)

本調査地点はこのような性格を持つ仮粧坂の下に位置するが、諸資料の不足もあって具体的な土地利用の形態は不明というしかない。ただ、かつて梅谷には宗旨や創建・廃絶時期が不明な「新阿弥陀堂」と呼ばれる堂があったとされ、南北朝以降には供僧の存在を知ることもできる(註13)。なお、本調査地点の北の丘陵斜面には複数の「やぐら」（石窟）が開口しているが(註14)、これらについても「新阿弥陀堂」

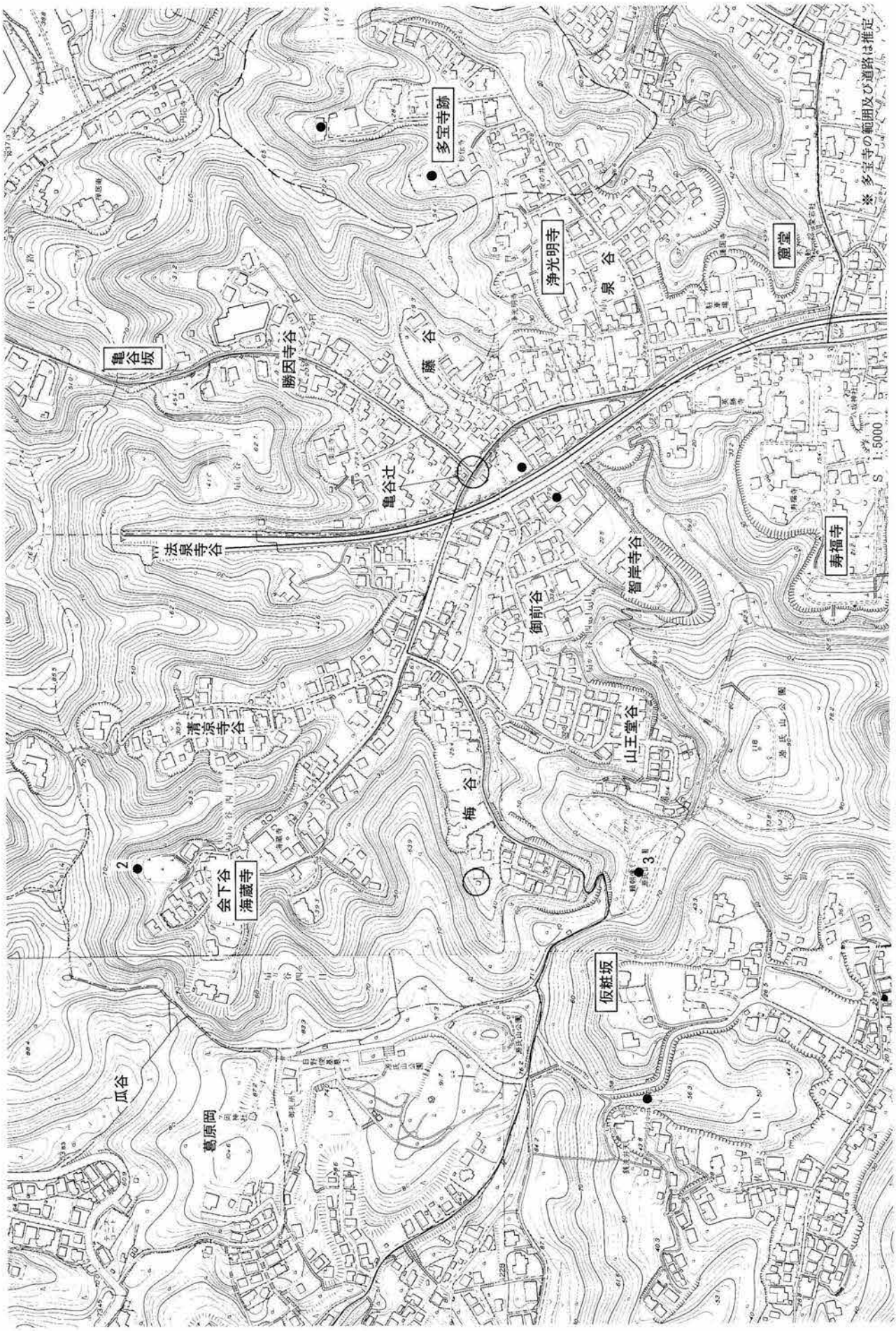

多宝寺跡
浄光明寺
泉谷
廬堂
亀谷坂
勝因寺谷
藤谷
亀谷辻
法泉寺谷
智岸寺谷
御前谷
寿福寺
清涼寺谷
山王堂谷
梅谷
会下谷
海蔵寺
仮粧坂
瓜谷
葛原岡
※多宝寺の範囲及び道路は推定
S 1:5000

図1　遺跡の位置と周辺

との関係も考えられよう。その後近世に入るとこの周辺は農地として利用されていたようであり、天保三（1832）年の成立という「扇ヶ谷村絵図」[註15]によれば梅谷は畠地となっている。そして、この光景は基本的には近代以降もさほど変化を受けることなく、近年の急速な宅地開発を迎えることになるのである。

註

1　『鎌倉市史』考古編、49頁。
2　手塚直樹・河野真知郎「海蔵寺裏山出土の蔵骨器群と土器」『鎌倉考古』13号、1982年。
3　『吾妻鏡』養和元年九月十六日条。
4　新日本古典文学大系、巻第四、岩波書店、1994年。
5　極楽寺から「化粧坂」を経て由比ヶ浜（大鳥居付近）に至るという記述がある。「化粧坂」を越えたとなると不自然であり、また、「化粧坂」から鎌倉方面を見ると梅谷しか望めないのに対し、往時の極楽寺切通しの頂部と考えられている成就院前からは鎌倉の一部を眺望できる。これらのことから記述は「化粧坂」ではなく、極楽寺切通しの誤りではないかと指摘できる。
6　巻第五『真名本曽我物語』1、東洋文庫468、平凡社、1987年。
7　『吾妻鏡』建長三年十二月三日条。
8　「俊基被誅事并助光事」（『太平記』1、巻第二、角川書店、1975年）。
9　菊川英政「鎌倉の葬制－源氏山出土の土壙墓－」『第2回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所・中世都市研究会、1992年。
10　石井進「都市鎌倉における「地獄」の風景」『御家人制の研究』御家人制研究会編、吉川弘文館、1981年。
11　以上は『仮粧坂周辺詳細分布調査報告書（国指定史跡仮粧坂・日野俊基墓周辺の鎌倉街道上ノ道に係わる街道・城郭遺構等の詳細分布調査報告書）』（鎌倉市教育委員会、1996年）の第1章による。

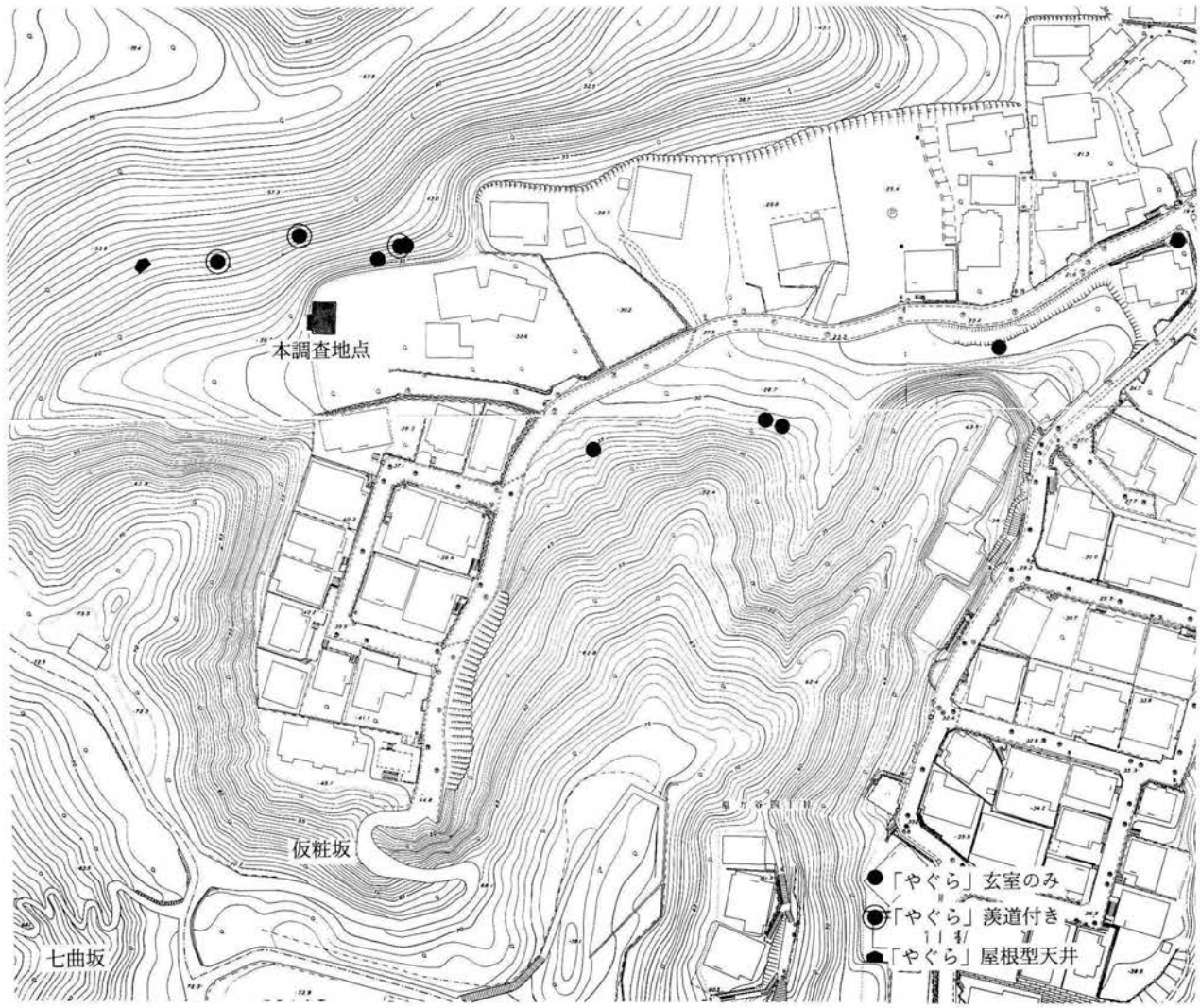


図2　遺跡の位置と梅谷「やぐら」分布図

12　「智真夢記」『鎌倉市史』史料編第二、112号文書。
13　『鎌倉廃寺事典』（貫達人・川副武胤編、有隣堂、1980年）の「新阿弥陀堂」の項を参照。
14　宮田真「扇が谷地域内のやぐら群について」（『鎌倉』50号、1985年）では梅谷内のやぐらを14穴とするが、当稿で述べているやぐらは含まれていない。
15　「扇ヶ谷村絵図」『鎌倉の古絵図』Ⅱ鎌倉国宝館図録第16集、鎌倉国宝館、1969年。

第2章　調査の経過

平成9年11月に鎌倉市教育委員会による確認調査の後、発掘調査実施に際して必要となる土留め工事に多くの時間を要し、ようやく平成10年3月16日から発掘調査が行われた。確認調査の結果から表土及び耕作土（地表下220cmまで）を重機で除去し、掘削深度である地表下310cmまでを調査対象とし、5月2日まで行われた。調査面積は約37㎡。以下、調査の過程を記す。

3月16日　機材搬入、掘削開始
3月18日　1面遺構検出
3月20日　1面平面実測
3月26日　1面全景撮影
3月28日　2面遺構検出

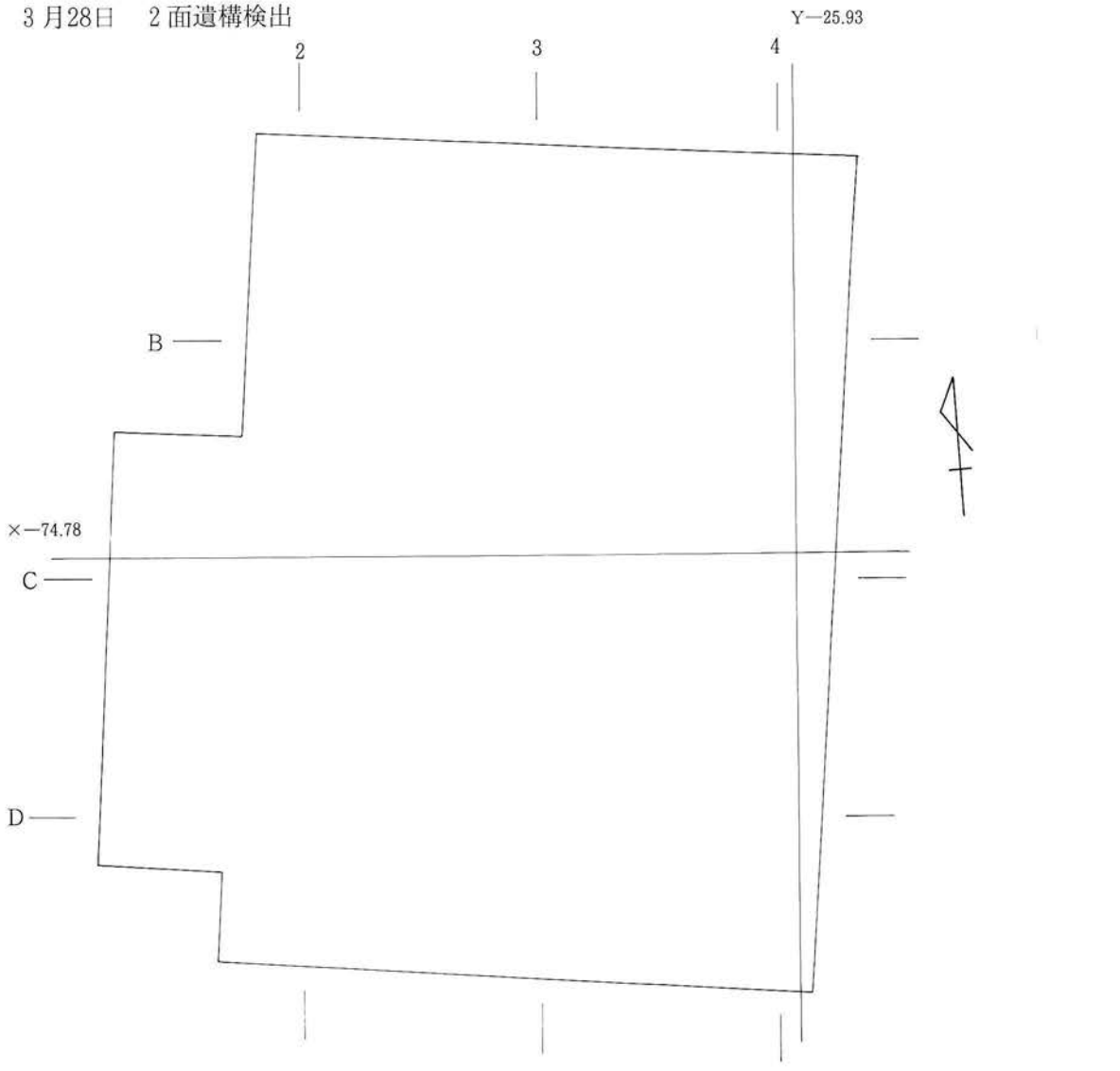


図3　グリッド設定図

4月20日　2面平面実測
4月23日　2面全景撮影
4月27日　3面遺構検出
4月29日　トレンチ掘り下げ
5月 1日　3面全景撮影
5月 2日　撤収

第3章　発見された遺構と遺物

第1節　1面（図4）

砂岩塊（10～20cm大）の地業面である。面は北西から南東に緩傾斜し、海抜は北西で約31.5m、南東で約31.1mを数える。遺構は石列、柱穴、礎板が発見された。

石列

調査区中央に南北に伸びる砂岩塊の石列が発見された。南北5mを測り、ａｂ間とｃｄ間が整然と並べられているように見える。このａとｄの間が溝で、その間に崩れた砂岩塊が埋まったとも解釈できるが、石列の隙間及び1面包含の土とは区別できなかった。ａｄ間は約60cmを測る。性格は不明である。主軸方位はN－7°－Wである。

図4　1面平面図

これとは別に砂岩切石を３つ検出した。このうちの2つはともに一辺40cm、高さ30cmを測り、建物の礎石として復元すると芯々で約200cmとなる。なお、2つの切石上面レベルはほぼ同じの海抜約31.5mである。

2・3－Dグリッドでは礎板列を発見した。芯心で東西170cm、南北50cmを測る。主軸方位はN－3°－Eである。

この他に柱穴が13口発見されたが復元できなかった。

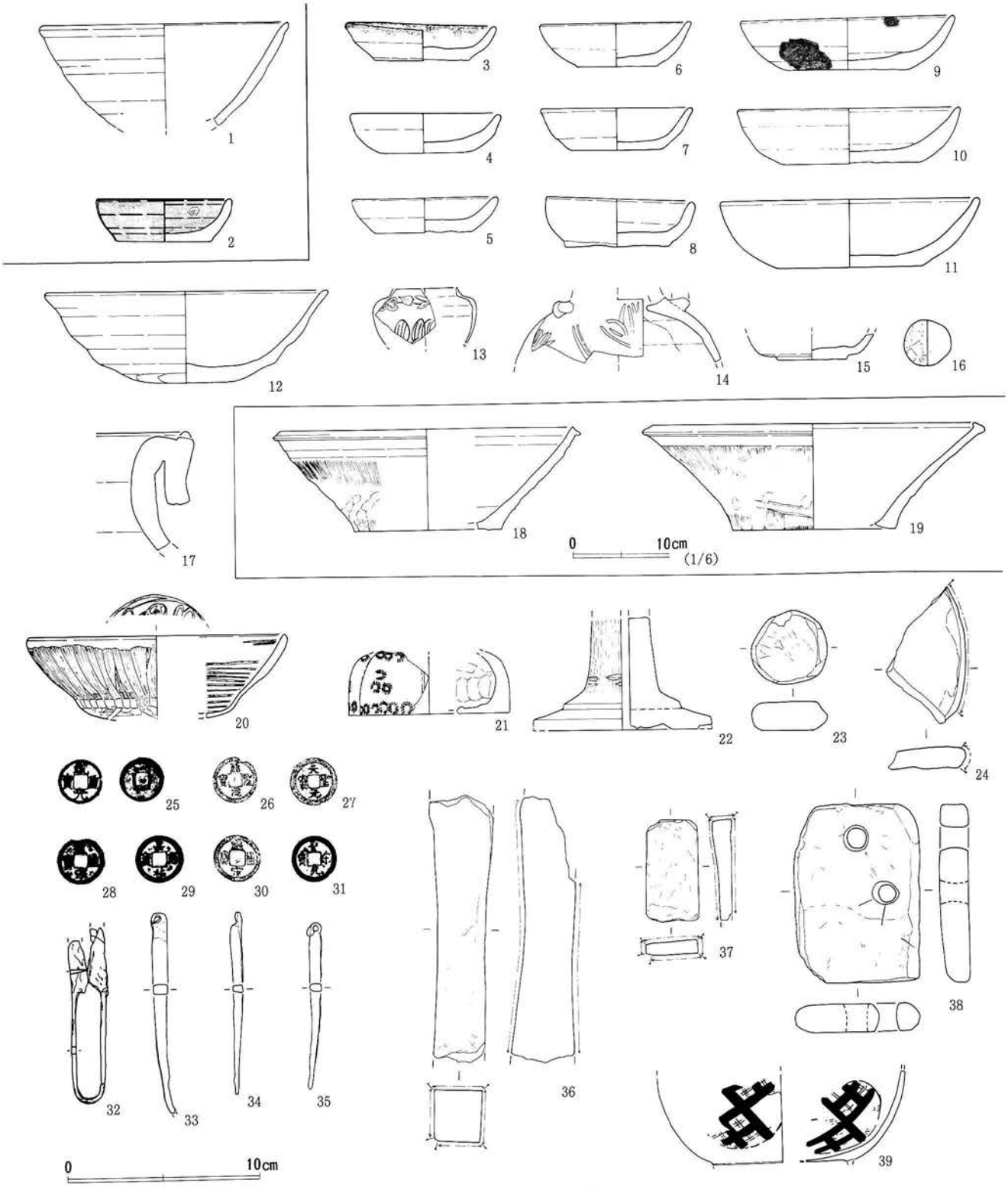


図５　１面出土遺物

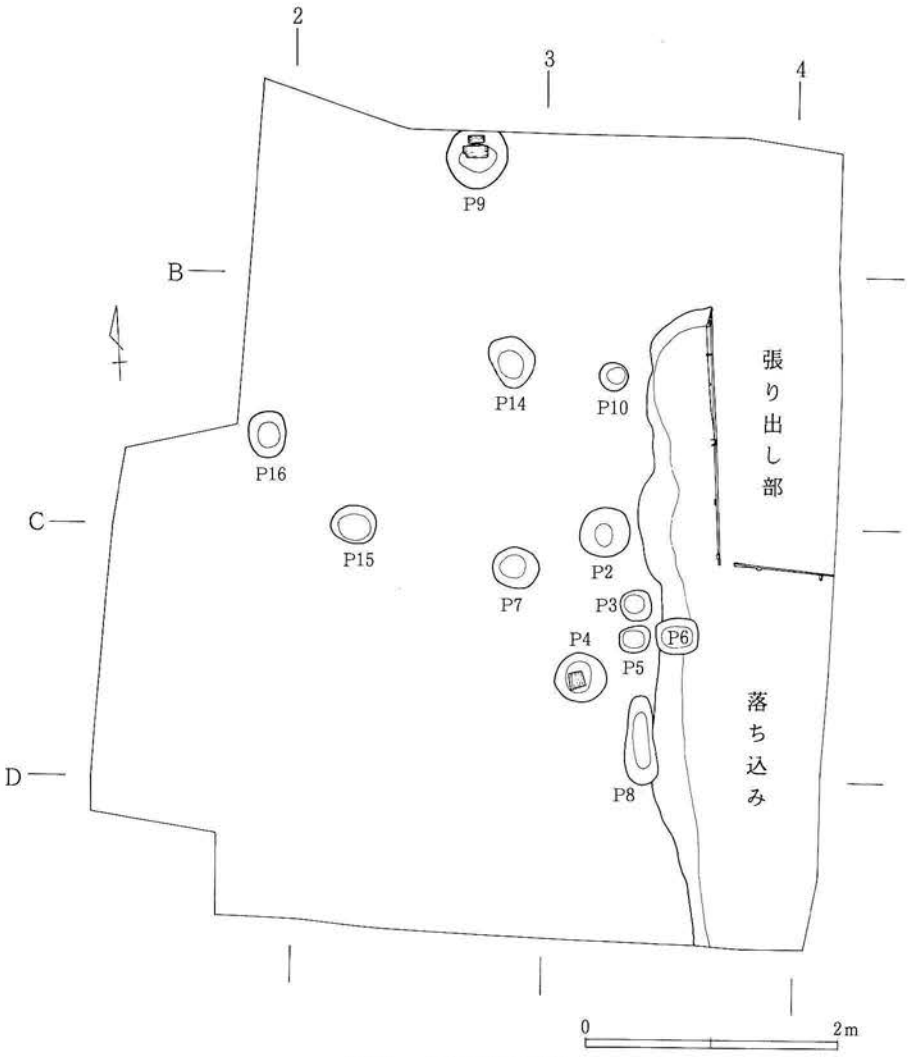


図8　2b面平面図

「張り出し部」（図9）

「張り出し部」は横板と杭で土留めをしており、横板の表面は鉋痕が顕著である。杭は縦板状で、先端を尖らせ、外角を丁寧に丸く加工している。横板は長さ200cm、高さ20cm、厚さ1.5cm。「張り出し部」上面にも粗砂の地業がされているが2b面の地業よりも強固である。

「張り出し部」内からの出土遺物の総計は371点で、内訳はかわらけ（すべてロクロ成形）220点、国産陶磁器3点（すべて常滑窯甕）、土器（すべて火鉢）3点、金属製品（毛抜き）1点、漆器・漆製品4点（椀1、皿1、膳脚1、雲形1）、木製品121点（箸99、不明22）、その他19点（種子11、貝4、獣骨4）である。図10はすべて第8層中より出土した遺物で、40～42はロクロ成形のかわらけ。43は毛抜き。44・45は漆器。44は椀。45は皿で内面朱漆、外面黒色漆で体部外面に手描きの三つ巴文を配する。46～49は木製品。46は調度品の飾りである雲形。47は膳の脚部。48・49は箸。

落ち込み南では「張り出し部」上面と同レベルで多くの建築部材と考えられる板等が発見された（図11）。また、落ち込み際では砂岩塊が疎らではあるが落ち際に集中して据えられていた。なお、落ち込みの主軸方位はN－3°－Wである。

落ち込み内からは多くの遺物が出土した。出土遺物の総計は799点で、内訳はかわらけ（すべてロクロ成形）508点、舶載陶磁器1点（青白磁梅瓶）、国産陶磁器5点（瀬戸窯1、常滑窯4）、土器・土製品7点、銅銭3点、金属製品2点、木製品239点（箸72、折敷2、草履芯3、篦3、栓1、不明153）、漆製品18点（碗8、皿8、櫛1、木偶1）、その他16点（種子14、獣骨2）である。

図12－50～64はロクロ成形のかわらけ。大中小に分けられ、中型は小型・大型に比べると少ないものの若干量の割合はある。65は瀬戸窯入子。66は瓦質火鉢。67はかわらけの底部を転用した円板状製品。68～70は銅銭。68の「五銖」は隋の581年に初鋳されたもので、鎌倉市内での出土率は低い。71は鉄製釘。72は用途不明の骨製品。73～78は漆器で、73・74は皿、75～78は椀である。74の皿の内面のみ朱漆で、それ以外すべて黒漆地である。文様はすべて手描きで75の鶴文は緻密な筆使いである。75は土圧の

ため口縁部が実際よりやや内彎しているがそのまま図化した。79～82は木製品。79は梳き櫛で漆塗りの痕跡は無い。80は木偶。一木造りである。元々、漆塗りの先端卵形であったものを転用し、顔面部分を削りだしている。目、鼻、口は線刻によって表現している。81は箸。82は蓋で、把手部の角を丁寧に丸く加工している。鍋蓋であろうか。

２ｂ面のその他の遺構出土遺物の内訳は、Ｐ２からかわらけ５点・漆器椀１点・種子１点、Ｐ３からかわらけ９点・獣骨１点、Ｐ４からかわらけ４点、Ｐ５からかわらけ３点・漆器椀１点、Ｐ９からかわらけ15点・常滑窯甕１点、P11からかわらけ２点、P12からはかわらけ39点・滑石製鍋２点・獣骨１点、

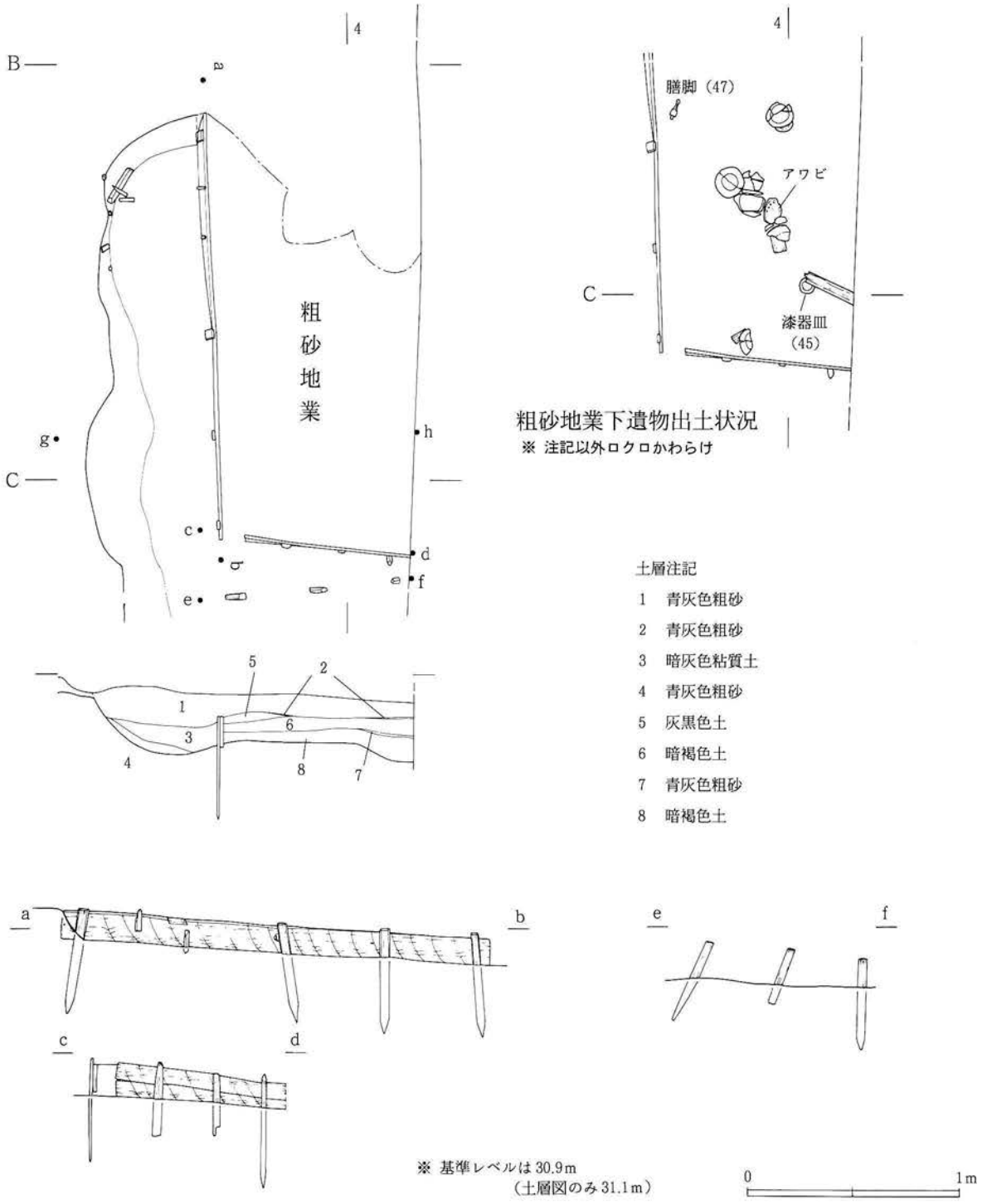


図９　２ｂ面「張り出し部」

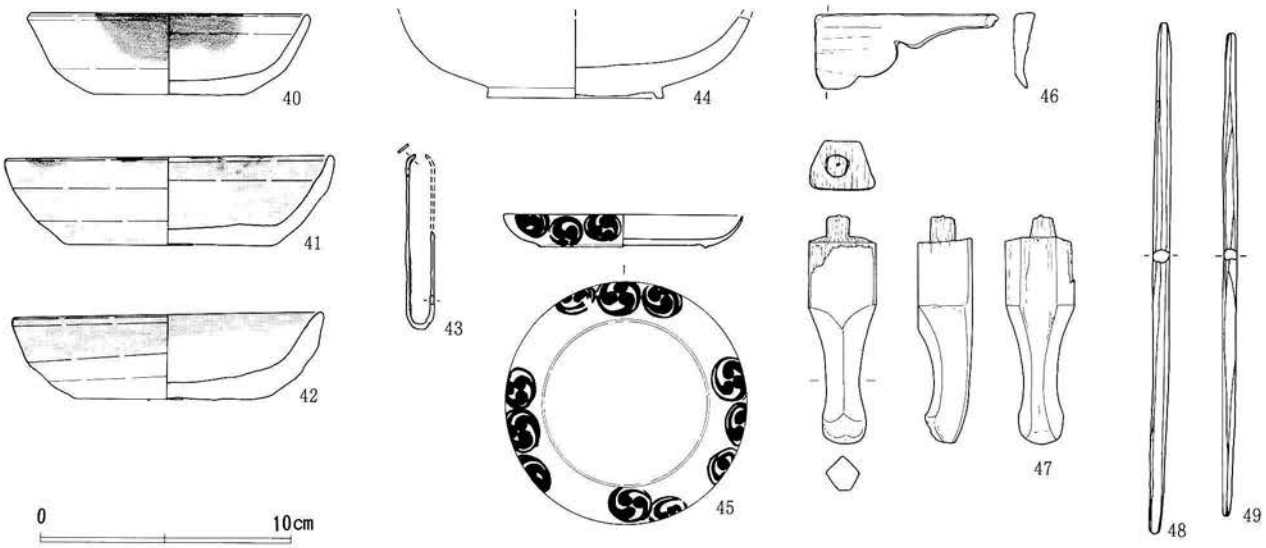


図10　２ｂ面「張り出し部」下層出土遺物

P13からはかわらけ１点、P15からかわらけ８点・軽石11点である。

図12－83・84は漆器椀の口縁部片である。83はＰ２、84はＰ５からの出土。

２面上出土遺物は計4522点で、内訳はかわらけ（すべてロクロ成形）3123点、舶載陶磁器９点（青磁３、白磁３、青白磁３）、国産陶磁器102点（瀬戸窯25、常滑窯76、不明１）、土器土製品58点、銅銭17点、金属製品14点、石製品７点、骨製品３点、木製品1020点（箸724、杓子１、折敷３、下駄２、草履芯７、扇骨１、篦５、曲物３、円板１、形代１、不明272）、漆製品41点（椀21、皿９、蓋１、膳脚２、烏帽子２、櫛３、不明３）、その他128点（種子83、貝１、獣骨43、軽石１）である。

２ａ面上と２ｂ面上出土の遺物は接合するものが多く、併せて掲げた（図14・15）。図14－85～102はロクロ成形のかわらけ。103～105は青磁。103は蓮弁文碗の口縁部片。104は百合口小碗で３分の１が残る。105は折縁鉢の口縁部片。106・107は白磁口兀皿。108～110は瀬戸窯製品。108は卸皿。109は瓶子の底部片。110は入子。111・112は常滑窯製品で111は広口壷、112は鉢。113・114は瓦器質火鉢。113は鍔付きで上面に亀甲花菱文が押印される。115は土器質火鉢。116・117は手づくね成形の白かわらけ。118は用途不明の銅製品。原形は円形で、中央に円形の孔が開く。119～129は銅銭。130は刀子（腰刀）で刀部長18.3㎝を数える。金属部分はほぼ完形である。131は熊本県天草産中砥。132は鹿角製で用途不明である。栓として使用したものか。133は鹿角製の前角で、二次加工のため切断されている。前角とは馬具の一部である。図15－134は漆器皿。135～137は漆器椀。138は木製の蓋で全面黒色漆で塗る。摘み部分は角を面取りし、13面とする。139・140は漆塗り木製の膳の脚部である。141は漆塗り木製品で調度品の一部と考えられる。142・143は櫛で、142は解き櫛で黒色漆が塗られる。143は梳き櫛。144は扇子の骨で５枚（縁１枚と内側４枚）が残る。145・146は草履の芯で藁は残っていない。147～150は箸。151は折敷。152は板杓子。153・154は小型の曲物の蓋板と考えられ、そろぞれ周縁部の一カ所に樹皮紐が通る。155は篦状木製品。156は形代で鳥形と考えられる。157は直径4.2ｃｍの円板状木製品で中央を穿孔している。158は調度品の飾り部分と考えられるが用途不明である。２カ所穿孔し、木釘が残る。

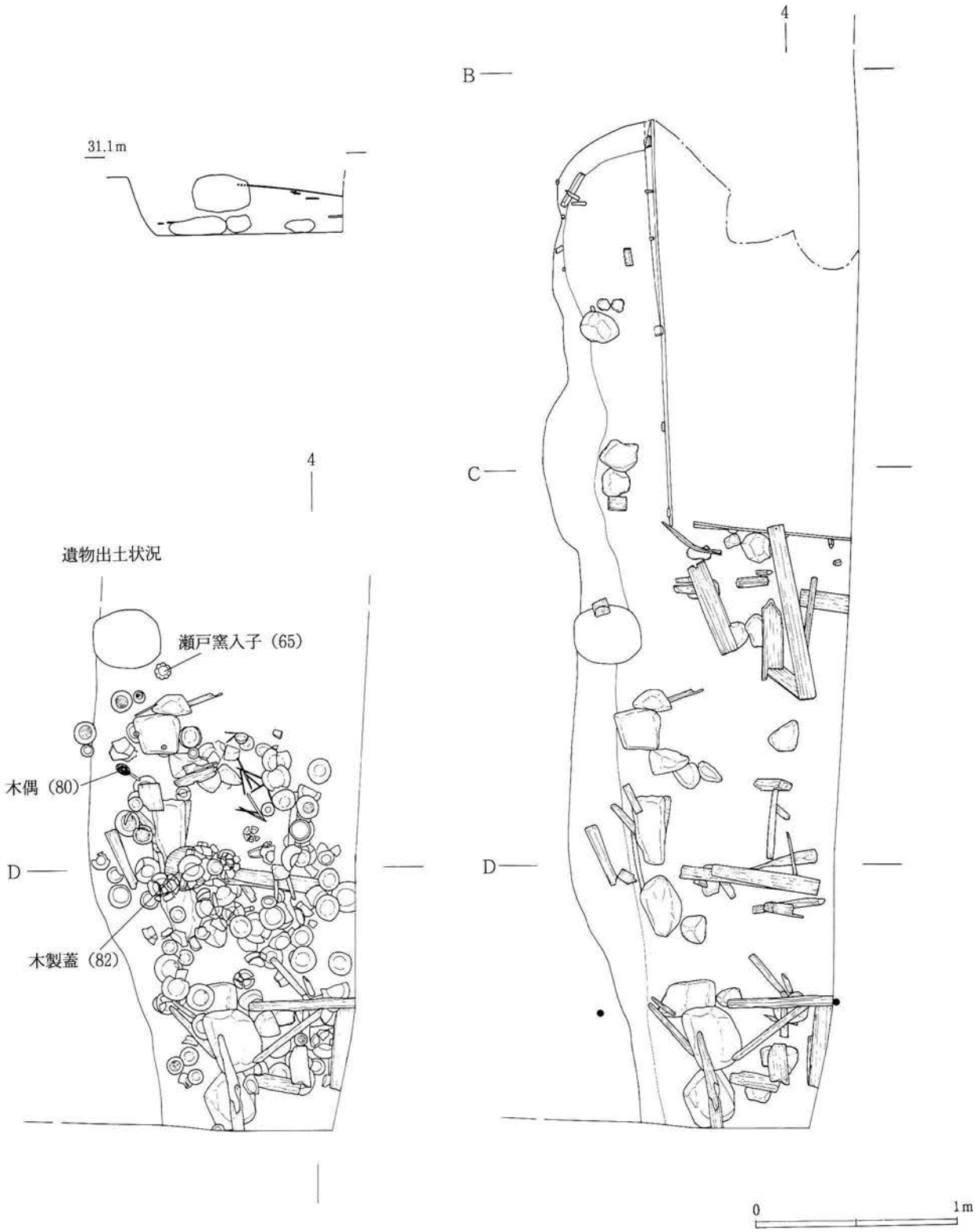


図11　２ｂ面落ち込み

註

建物内部を掘り込み、そこから壁の板材を組み上げる「板壁掘立柱建物」と考えられる。佐助ヶ谷遺跡担当の斎木・瀬田の両氏が本遺跡を実見し、「板壁掘立柱建物」であると指摘された。

斎木秀雄・瀬田哲夫ほか『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団　1993年

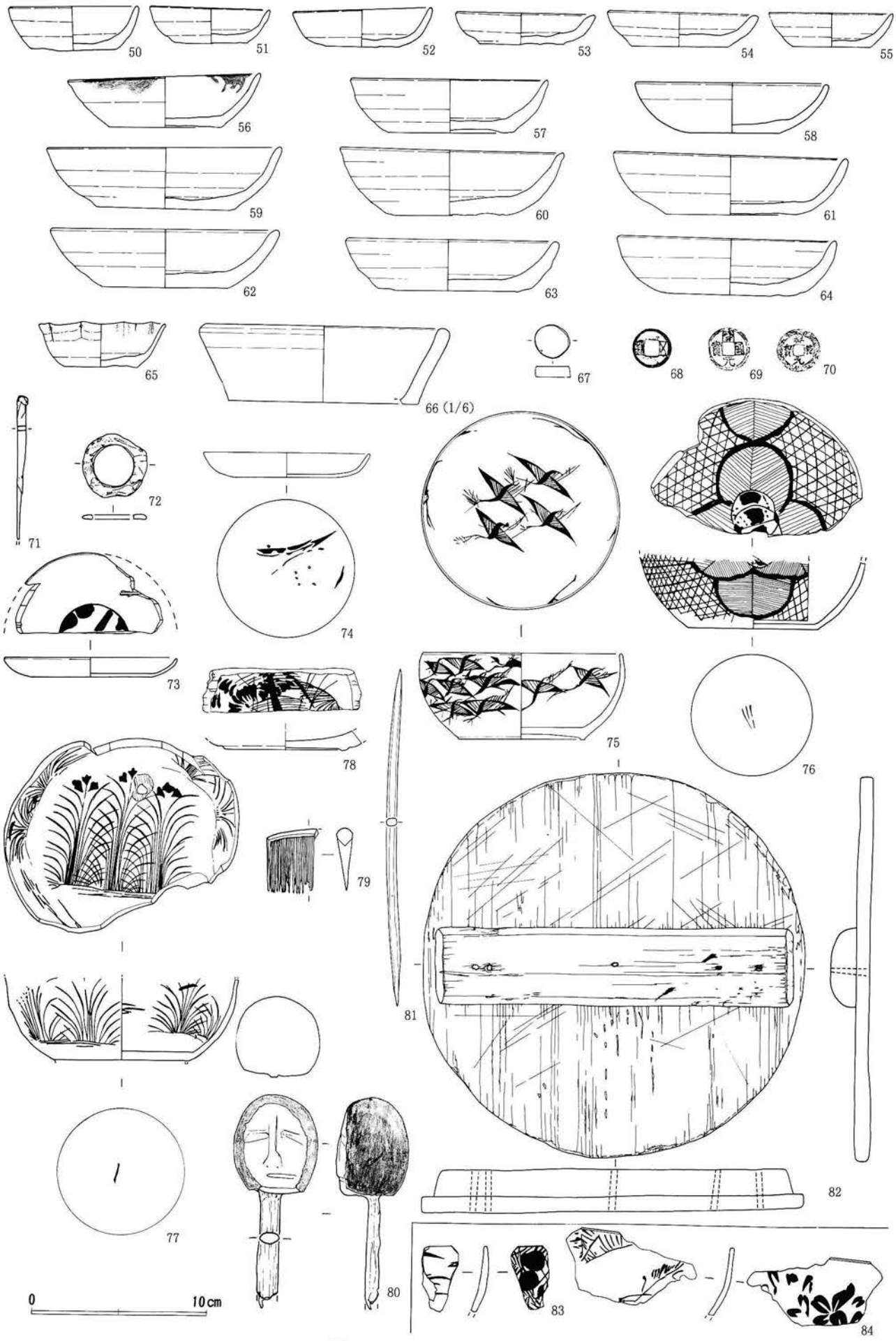


図12　2b面落ち込み出土遺物

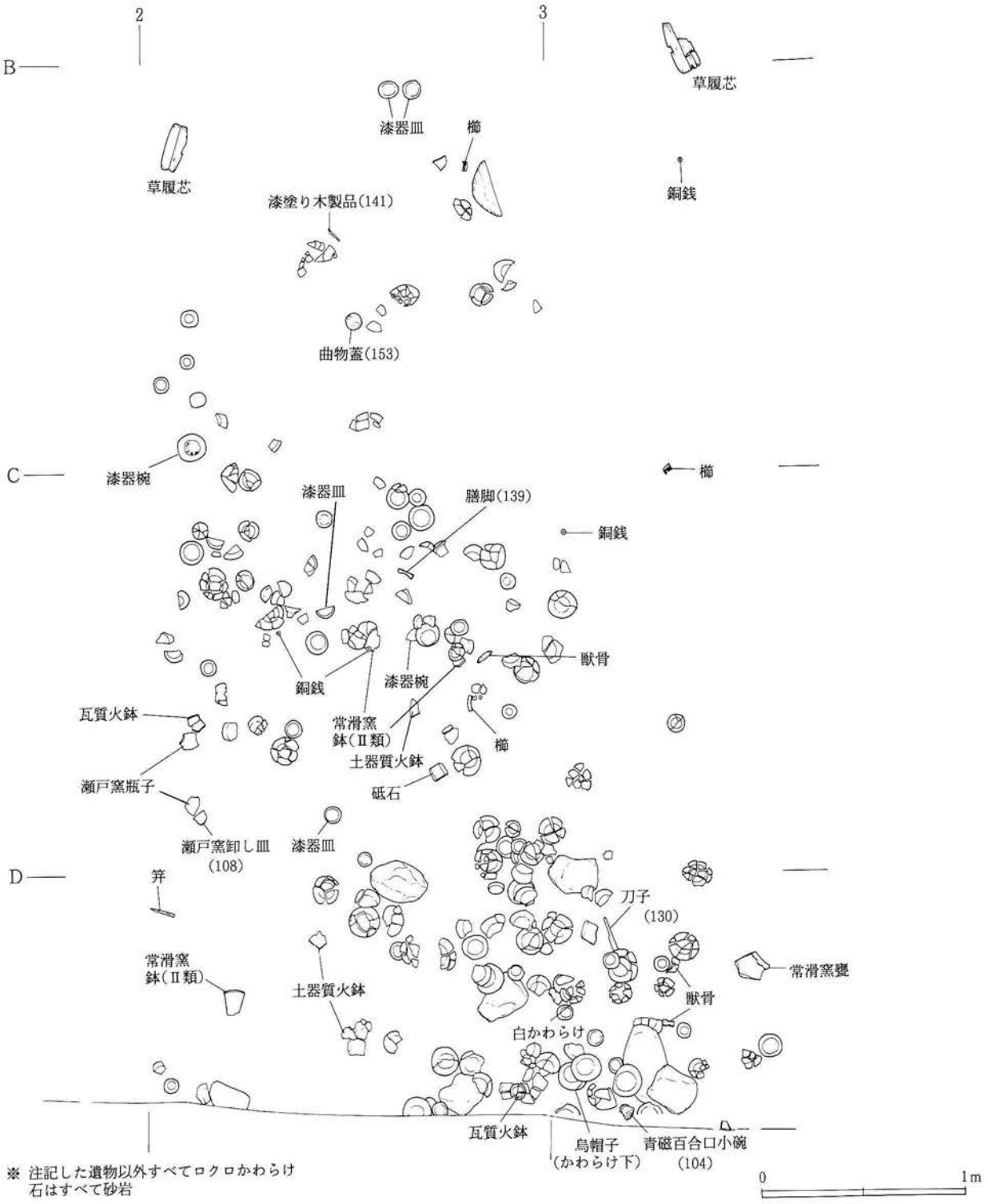


図13　2ｂ面遺物出土状況

第３節　３面（図16）

２ｂ面を掘り下げると３面となる青灰色粗砂の地業面が広がる。面は西から東にわずかに傾斜し、海抜は30.7～30.8mである。図のように掘り方をもたない礎板と、斜めに倒れた角柱２つが検出された。礎板の配置は２a面同様、建物の内側を想起させる。

礎板列（図17）

調査区西半に位置し南北に伸びる。間隔は芯心で40～50㎝を数える。遺構主軸方位はN－15°－Wを。

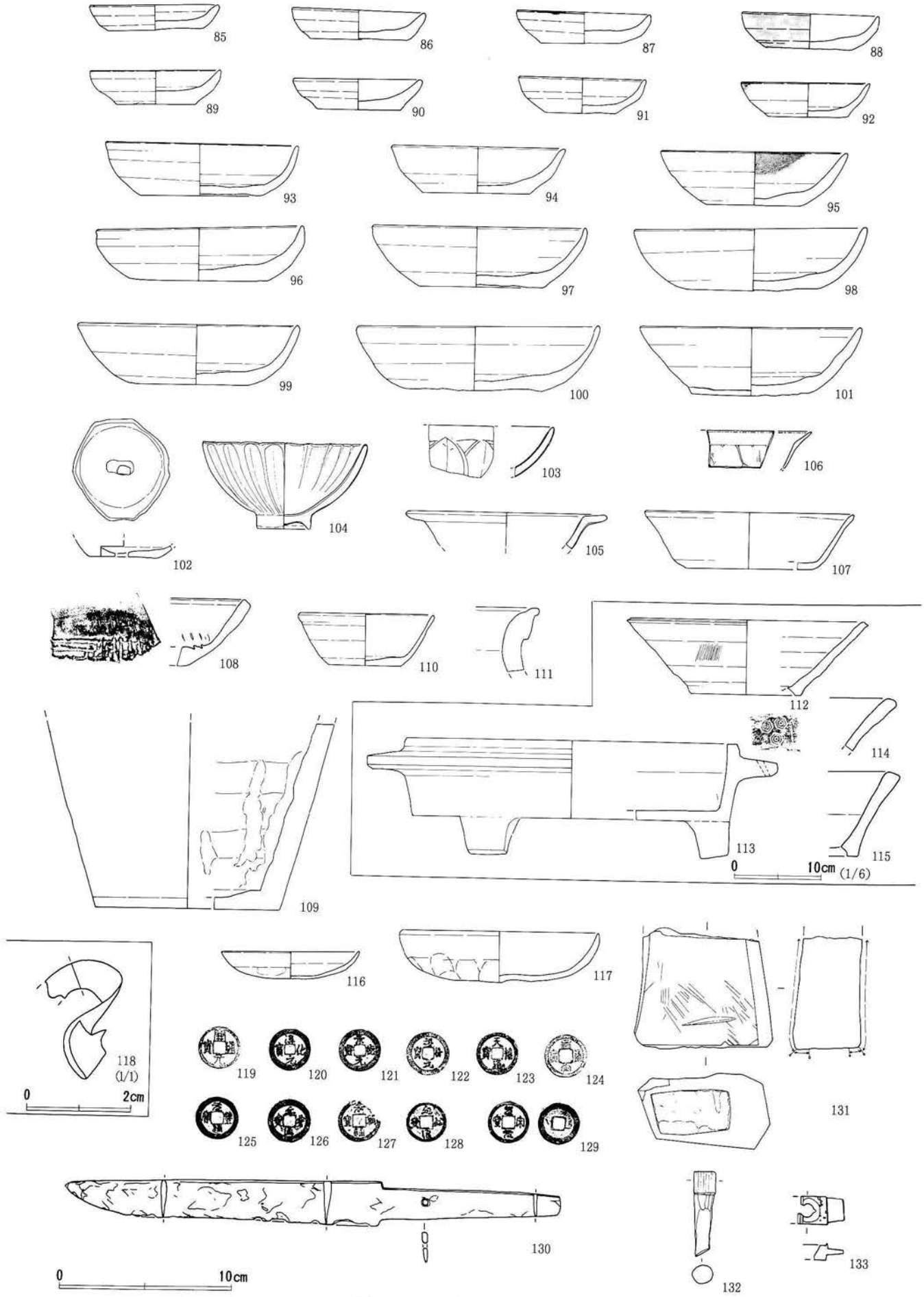

85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0 10cm (1/6)
116
117
118 (1/1)
0 2cm
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0 10cm
131
132
133

図14　2面出土遺物（1）

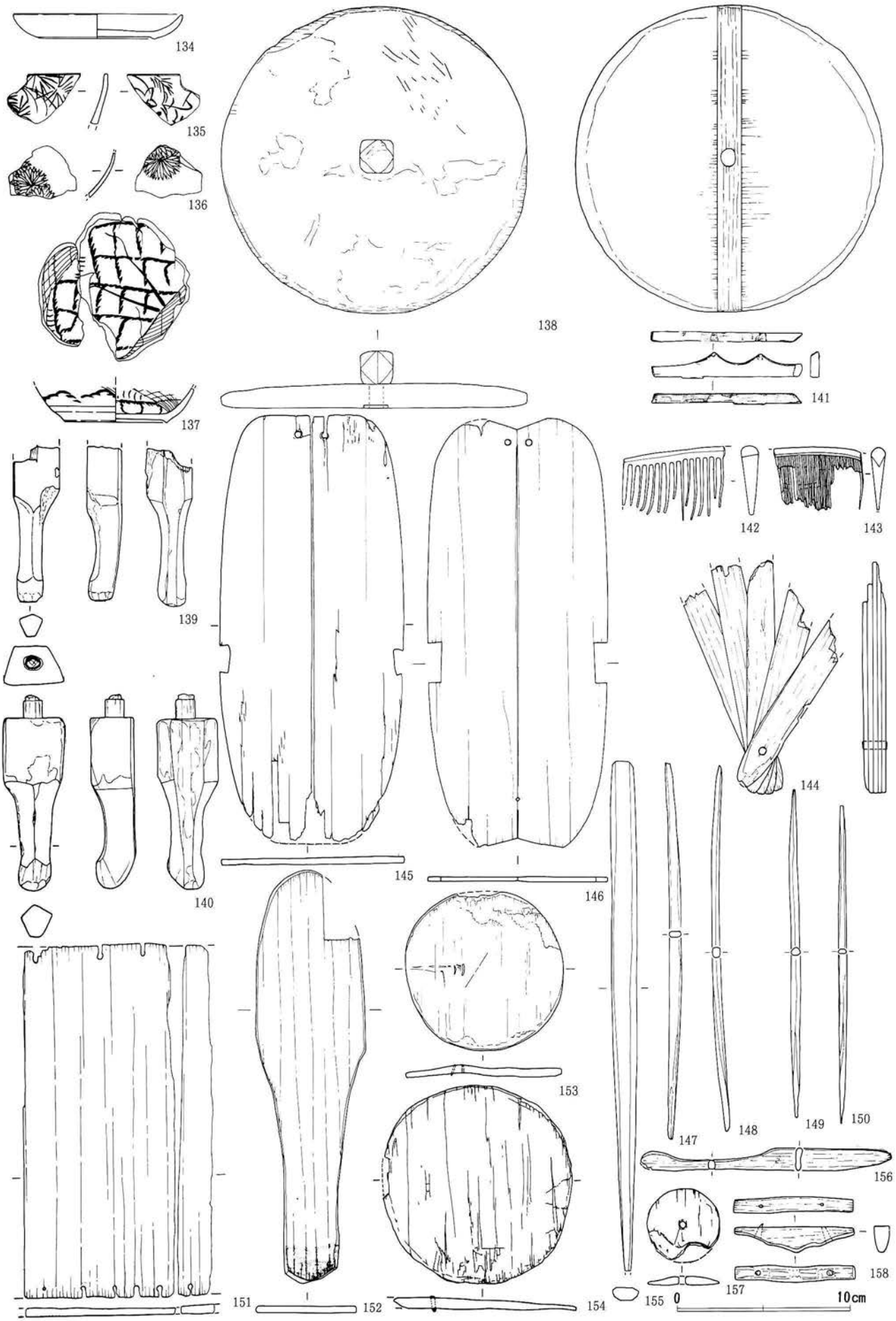

134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
0
10cm

図15　2面出土遺物（2）

図16　3面平面図

図17　3面礎板列

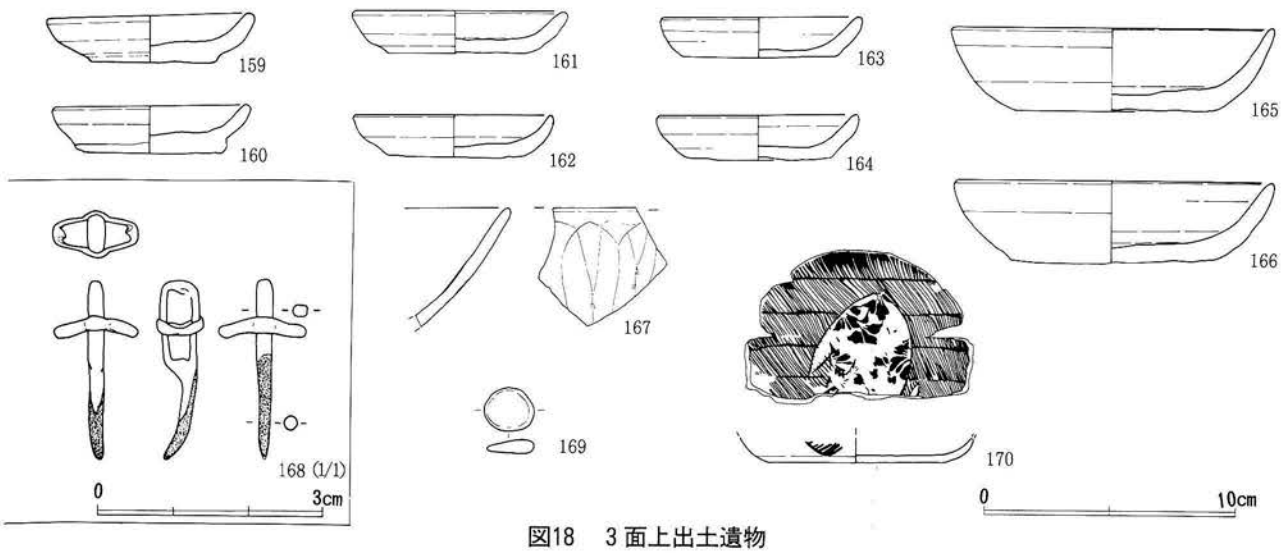


図18　3面上出土遺物

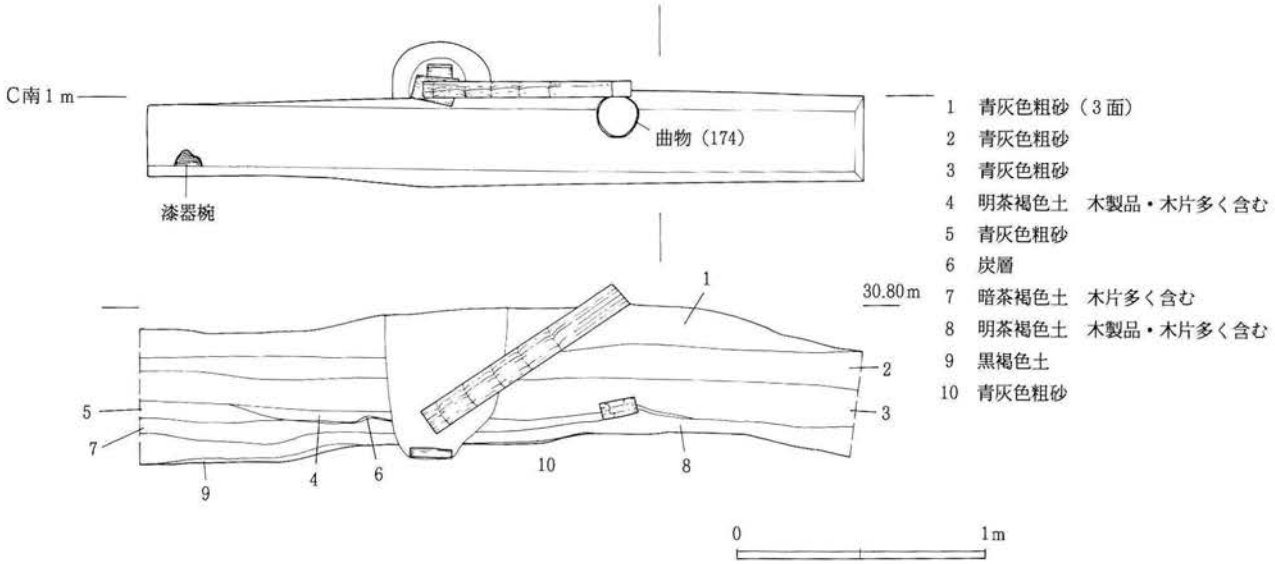


図19　トレンチ

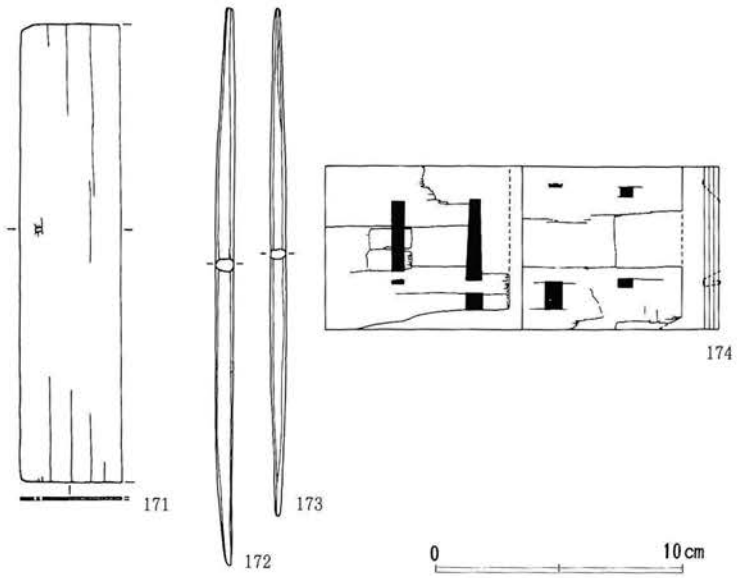


図20　トレンチ出土遺物

3面上出土遺物（図18）は計423点で、内訳はかわらけ（すべてロクロ成形）389点、舶載陶磁器2点（青磁1、白磁1）、国産陶磁器（常滑窯）12点、土器土製品3点、銅銭1点、金属製品1点、石製品（碁石）1点、木製品10点（箸9、草履芯1）、漆製品2点（椀1、皿1）、自然遺物3点（貝1、獣骨2）である。

159～166はロクロ成形かわらけ。167は青磁蓮弁文碗の口縁部片。168は「留め具」(註)と考えられる銅製品で、先端部（実測図スクリーントーン部分）は白銀色を呈し、銀の可能性があるが不明である。169は碁石。170は漆器椀。

註

この「留め具」は鎌倉市内の他地点でも発見されているがすべて骨角製である。

『長谷小路南遺跡』Fig.106－6・7（長谷小路南遺跡発掘調査団　1992年）

『千葉地東遺跡』第598図－111（神奈川県立埋蔵文化財センター　1986年）

『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』由比ヶ浜四丁目4番地30号地点　図39－2（由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団編　鎌倉市教育委員会発行　1996年）

第4節　トレンチ（図19）

3面の調査終了後、調査区中央部の杭沿いに東西280cm、南北40cmのトレンチを設定し、50m下まで掘り下げた。粗砂による地業層と多くの木製品、木片を含む腐食土層が互層をなしている。トレンチ最下層である第10層以下にも地業層が続くと思われる。

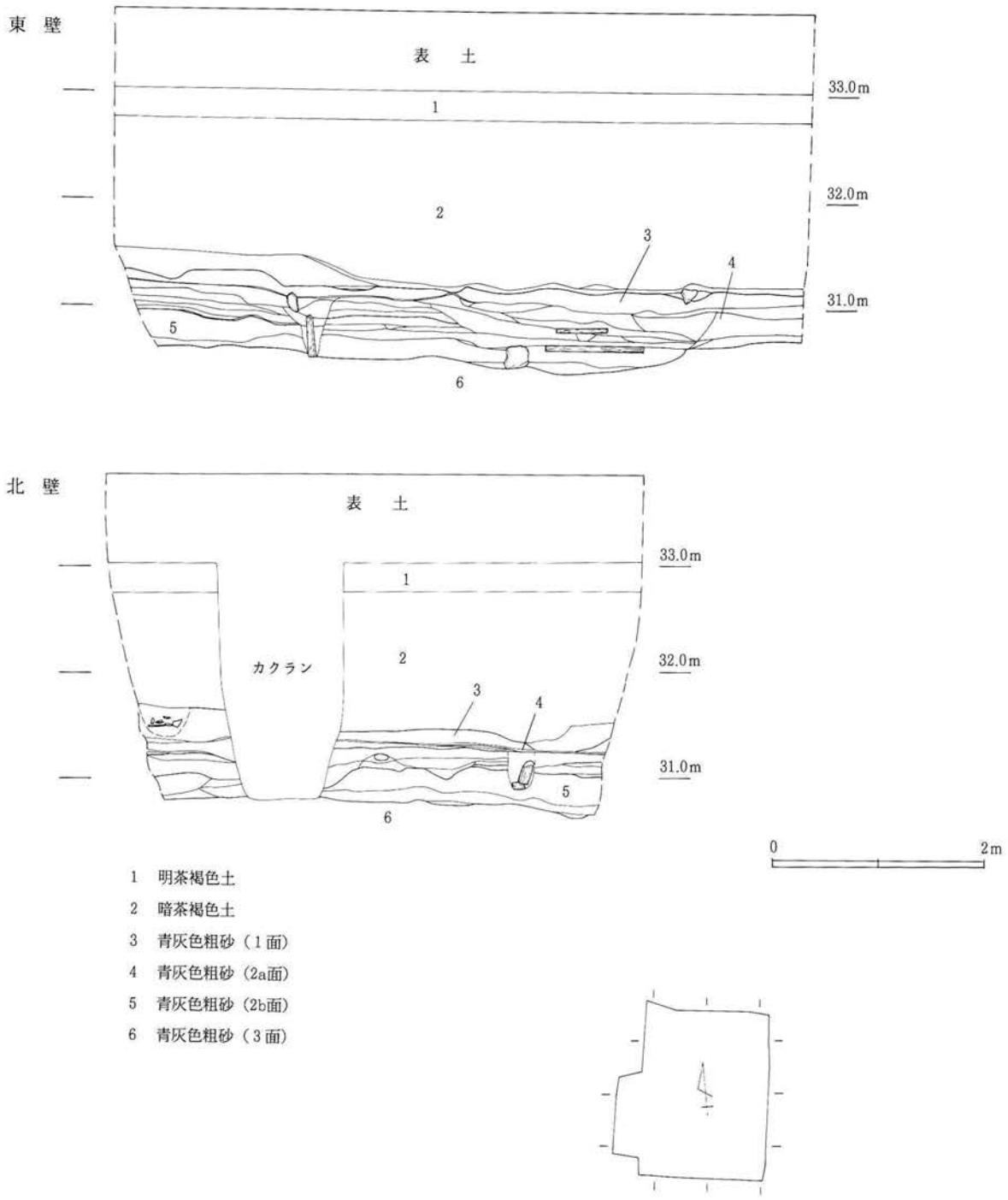


図21 調査区壁土層図

出土遺物（トレンチ内一括・図20）は計183点が出土している。内訳はかわらけ（すべてロクロ成形）60点、常滑窯製品（甕）3点、木製品119点（箸88、折敷19、草履芯10、曲物2）、漆器（椀）1点である。

171は折敷。172・173は箸。174は直径16cmを測る曲物で底板はない。171～173は第8層、174は第7層からの出土である。

第4章　まとめ

今回、この扇ガ谷地区の西半において面的な調査が初めて行われた。それも鎌倉の内と外とを結ぶ街道筋で、都市鎌倉の境界に近いこともあり、調査前から大きな成果が期待された。当初の予想を超え、狭い調査区内から多くの遺物が出土した。中でも木製品・漆器類、建築部材等の有機物が目に付いた。

発見された遺構については、前章において調査成果を述べたが、これらをⅠ期～Ⅲ期の3時期に分け、古い順から述べることとする。なお、最初期をⅠ期としたが、まだ下層にそれ以前の時期の遺構面が存在する可能性が高い。

Ⅰ期

トレンチ及び3面の時期である。手づくね成形のかわらけが1点も出土していなく、かわらけが大中小に分かれる以前の時期であるため、13世紀後半～14世紀初頭という年代幅を与えたい。

前述のとおり、礎板列等は佐助ヶ谷遺跡（現鎌倉税務署）(註1)で発見されたような板壁構造の建物の一部と推定されるが、調査区が狭小なため規模は不明である。

Ⅱ期

2a面及び2b面の時期である。かわらけは大中小の3つのセットに分かれる。また、瀬戸窯製品の卸皿（108）、常滑窯製品の広口壷（111）・片口鉢（112）等の器形と考え併せて14世紀前半という年代を与えたい。

礎板列や杭列、「張り出し部」の主軸方位はⅠ期と比べると東に20°振れているものの土地利用形態は余り変わりないと言える。

Ⅲ期

1面の時期である。出土遺物は少ないが、かわらけと常滑窯製品の甕（17）・片口鉢（18・19）等の器型と考え併せて14世紀中頃から後半という年代幅を与えたい。

遺構（石列）の主軸方位はⅡ期とほぼ同じであるが、土地利用形態が異なる。石列は、時期・規模の点で違うが名越山王堂跡発見の基壇石組み(註2)に相似する。建物と断定できるような礎石列等が無く不明である。

Ⅰ期から通して粗砂による丁寧な地業が繰り返されていることや、多量のかわらけを含む遺物の一括廃棄（Ⅱ期）がなされていること等から庶民の居住区や町屋的な空間とは認められない。また、調査区北の支谷崖面に展開する「やぐら」群との関連性を考慮すると、寺院の可能性を指摘できる。鎌倉時代中期以降、鎌倉における谷戸内の利用は伝承も含め、その多くが寺院である。本調査地点が寺域の一部とすれば、Ⅰ・Ⅱ期の「板壁掘立柱建物」では脆弱なので、寺院の雑務者等の建物と推測できなくもないが考えが飛躍しすぎであろうか。もし本遺跡が寺院跡であるならば「新阿弥陀堂」(註3)との関係を考慮せねばならないであろう。

註

1　斎木秀雄・瀬田哲夫ほか『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団　1993年

2　建物は15世紀中頃から16世紀中頃と比定されている。
斎木秀雄『名越山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団　1990年

3　「頼印譲状」『鎌倉市史』史料編第一、173号文書。
『鎌倉廃寺事典』（貫達人・川副武胤編、有隣堂、1980年）の「新阿弥陀堂」の項を参照。

図版番号	遺物番号	種　別	計　測　値	観　察　事　項
図5	1	瀬戸窯　碗	口径（12.8）	胎土色調；灰褐色　釉色調；灰緑色
	2	かわらけ	口径（7.0）底径（5.0）　器高2.2	成形；ロクロ　外底；回転糸切り　色調；茶灰色　備考；全体火受けている
	3	かわらけ	口径7.9　底径4.9　器高2.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色　備考；口縁煤付着
	4	かわらけ	口径7.9　底径5.0　器高2.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	5	かわらけ	口径7.7　底径5.0　器高1.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	6	かわらけ	口径7.9　底径4.2　器高2.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	7	かわらけ	口径7.9　底径4.5　器高2.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	8	かわらけ	口径7.8　底径5.4　器高2.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	9	かわらけ	口径11.2　底径6.2　器高2.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡茶褐色
	10	かわらけ	口径11.6　底径7.0　器高2.9	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	11	かわらけ	口径13.0　底径7.4　器高3.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；橙茶褐色
	12	白かわらけ質皿	口径（14.6）　底径6.8　器高4.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切→ヘラケズリ　色調；乳白色～淡赤白色
	13	白磁　小壺	口径（3.4）体部最大径（5.4）	胎土色調；白色　釉色調；不透明、乳白色　備考；体部外面に草花文を型押
	14	褐釉　双耳瓶	－	胎土；淡黄白色　釉；淡黄褐色　外面；文様（蓮華文）ヘラ彫り　備考；不遊環の一部残る
	15	瀬戸窯　入子	底径3.6	成形；ロクロ（外底回転糸切り）胎土；灰色
	16	瀬戸窯　陶丸	直径2.5	色調；灰白色　備考；　一部自然釉掛かる
	17	常滑窯　甕	－	胎土色調；灰黒色　器表色調；暗茶褐色
	18	常滑窯　片口鉢（Ⅱ類）	口径（32.4）底径（15.4）　器高10.5	胎土色調；灰色　器表色調；赤茶褐色～茶褐色　調整；外面縦位のハケ調整後、中位～下位に斜位の指頭調整　備考；内面中位～内底磨滅
	19	常滑窯　片口鉢（Ⅱ類）	口径（34.0）底径17.2　器高11.0	胎土色調；灰黒色　器表色調；赤茶褐色
	20	瓦器　碗	口径（13.4）器高（4.3）	高台；無　成形；体部外面上～中位縦位の掻きナデの後、外底へラケズリ　暗文；内底面－連結輪状？、内底面～体部内面－平行線状　色調；黒灰色　産地；畿内和泉型？
	21	瓦器質　小壺	底径（8.4）	形態；輪花状　胎土；淡赤褐色　調整；外面黒色処理、外面3段に渡って菊花文のスタンプ押印、体部内面指頭痕
	22	瓦器質　燭台	底径9.3	胎土色調；灰色　調整；表面黒色処理、柱部外面縦位のヘラミガキ、柱部付け根にほぼ等間隔の横位のキズ
	23	土製品　円板	径3.9　厚1.5	備考；土器質火鉢を転用（色調；淡赤褐色）、用途不明
	24	陶器転用品	長径7.0　短径4.2　厚1.0	備考；常滑窯甕を転用　割れ口1面磨耗（胎土色調；灰色　器表色調；赤茶褐色）
	25	銅銭（乾元重寶）	－	初鋳；唐758年　書体；楷書
	26	銅銭（紹聖元宝）	－	初鋳年；北宋1094年　書体；篆書
	27	銅銭（天聖元宝）	－	初鋳年；北宋1023年　書体；楷書
	28	銅銭（皇宋通寶）	－	初鋳年；北宋1038年　書体；楷書
	29	銅銭（皇宋通宝）	－	初鋳年；北宋1038年　書体；楷書
	30	銅銭（嘉祐通寶）	－	初鋳年；北宋1056年　書体；楷書
	31	銅銭（聖宋元寶）	－	初鋳年；北宋1101年　書体；行書
	32	鉄製品　鋏	残長9.2　握り部〔幅0.4　厚0.2〕刃部〔残幅0.9　厚0.2〕	－
	33	鉄製品　釘	残長10.5　幅0.8　厚0.5	－
	34	鉄製品　釘	残長9.5　幅0.5　厚0.4	－
	35	鉄製品　釘	残長8.7　幅0.7　厚0.4	－
	36	石製品　砥石	残長13.9　幅2.5　厚2.7	種類；中砥　産地；熊本・天草地方
	37	石製品　砥石	長7.3　幅2.8　厚0.8	種類；仕上砥　産地；京都・鳴滝
	38	滑石製　温石	長9.3　幅6.5　厚1.5	備考；鍋転用？孔2カ所開く
	39	漆器　椀	底径（7.4）	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；格子、内外面、朱、手描き
図10	40	かわらけ	口径（11.0）底径6.0　器高3.2	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡茶褐色　備考；口縁に煤付着
	41	かわらけ	口径13.0　底径8.2　器高3.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色　備考；口縁に煤付着
	42	かわらけ	口径12.2　底径7.6　器高3.35	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色　備考；口縁に煤付着
	43	鉄製品　毛抜き	長6.9　上部〔幅0.3　厚0.2〕下部〔残幅0.5　厚0.1〕	－
	44	漆器　椀	底径7.0	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；無
	45	漆器　皿	口径9.6　底径6.6　器高1.3	高台；輪　内面；朱漆　外面；黒色漆　文様；三つ巴文（右回り）、体部外面、朱、手描き
	46	漆塗木製品　調度品（雲形）	長7.3　高3.0　厚1.0	表面；黒色漆　備考；塗り薄い
	47	漆塗木製品　膳脚	全長9.0　幅2.7　厚2.2　ホゾ〔長1.01　径1.0〕	表面；黒色漆　備考；塗り薄い
	48	木製品　箸	長20.2　最大径0.6	－
	49	木製品　箸	長19.1　最大径0.5	－
図12	50	かわらけ	口径7.2　底径4.8　器高2.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙褐色
	51	かわらけ	口径6.7　底径4.2　器高2.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	52	かわらけ	口径6.9　底径4.4　器高1.9	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	53	かわらけ	口径7.8　底径4.4　器高3.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	54	かわらけ	口径7.1　底径4.1　器高2.6	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	55	かわらけ	口径8.3　底径5.5　器高1.9	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	56	かわらけ	口径10.8　底径6.4　器高2.9	成形；ロクロ　外底；回転糸切り　色調；淡褐色　備考；口縁煤付着、器表剥離
	57	かわらけ	口径11.0　底径7.4　器高3.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	58	かわらけ	口径11.8　底径6.7　器高2.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	59	かわらけ	口径13.2　底径7.8　器高3.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；肌色
	60	かわらけ	口径12.5　底径7.1　器高3.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	61	かわらけ	口径13.2　底径7.4　器高3.4	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色

表1　遺物観察表（1）

図12	62	かわらけ	口径12.7　底径6.2　器高3.4	成形；ロクロ　外底；回転糸切り　色調；淡褐色
	63	かわらけ	口径11.9　底径8.0　器高3.2	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	64	かわらけ	口径12.3　底径7.8　器高3.2	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	65	瀬戸窯　入子	口径7.1　底径4.1　器高2.6	輪花型　外底；回転糸切り　色調；灰褐色　備考；出土時、紅の痕跡あり
	66	瓦質　火鉢	口径（28.4）　底径（20.7）　器高7.7	色調；灰色　備考；体部外面上位横ナデ
	67	土製品　円板	径2.0　厚0.65	備考；かわらけ底部を転用
	68	銅銭（五銖）	－	初鋳年；隋581年
	69	銅銭（開元通寶）	－	初鋳年；唐621年　書体；楷書
	70	銅銭（祥符元寶）	－	初鋳年；北宋1009年　書体；楷書
	71	鉄製品　釘	長8.2　幅0.5　厚さ0.3	
	72	骨製品　不明	径3.7　孔径2.2　厚0.35	部位；牛もしくは馬の四肢骨
	73	漆器　皿	口径（9.8）　底径6.6　器高1.0	高台；無　漆；黒色漆　文様；不明、内底中央、朱、手描き
	74	漆器　皿	口径9.6　底径3.9　器高1.4	高台；無　外面；黒色漆　内面；朱　文様；無
	75	漆器　椀	口径11.2　底径7.2　器高4.9	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；鶴、体部外面・内面、朱、手描き　備考；口縁歪み、内湾する。
	76	漆器　椀	口径12.8　底径7.2　器高3.8	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；瓜と格子、体部外面・内面・外底面、朱、手描き
	77	漆器　椀	底径5.7	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；草（不明）、内外面、朱、手描き
	78	漆器　椀	底径7.0	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；植物文、内面のみ？、朱、手描き
	79	木製品 横櫛（梳き）	残長2.2　残幅3.15　棟厚0.9	備考；漆塗の痕跡無し
	80	漆塗木製品　木偶	残長12.1　頭部〔長5.6　幅4.8〕　軸部（幅1.2　厚0.8	顔面；目・口は線刻、鼻は削りだし、髪は黒色漆で表している。備考；一木造り（転用品？）、体部に軸部分を挿入する？漆厚く塗られる
	81	木製品　箸	長20.2　径0.6	両口
	82	木製品　蓋	径21.7　厚0.9　把手部〔長20.7　幅4.5　厚1.5〕	備考；把手部は木釘で留める。板端に樹皮（桜）が残る。
	83	漆器　椀	－	内外面；黒色漆　文様；梅と竹、内外面、朱、手描き
	84	漆器　椀	－	内外面；黒色漆　文様；不明（植物文）、内外面、朱、手描き
図14	85	かわらけ	口径7.5　底径5.4　器高1.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；橙色
	86	かわらけ	口径7.8　底径5.7　器高1.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	87	かわらけ	口径7.8　底径4.6　器高1.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	88	かわらけ	口径8.0　底径5.0　器高2.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	89	かわらけ	口径7.7　底径4.9　器高2.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	90	かわらけ	口径7.6　底径4.8　器高1.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；赤橙色
	91	かわらけ	口径7.4　底径4.0　器高2.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	92	かわらけ	口径7.6　底径4.7　器高2.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡茶褐色　備考；口縁煤付着
	93	かわらけ	口径10.1　底径6.8　器高3.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	94	かわらけ	口径10.6　底径6.4　器高2.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	95	かわらけ	口径10.8　底径5.6　器高3.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色　備考；口縁煤付着
	96	かわらけ	口径11.8　底径8.0　器高3.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	97	かわらけ	口径12.2　底径7.0　器高4.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡茶褐色～淡橙色
	98	かわらけ	口径13.4　底径7.5　器高3.6	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；橙色
	99	かわらけ	口径12.6　底径7.8　器高3.5	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙色
	100	かわらけ	口径14.0　底径8.0　器高3.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色～橙色
	101	かわらけ	口径12.7　底径6.9　器高4.0	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	102	かわらけ	底径4.1	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡橙褐色　備考；底部中央穿孔
	103	青磁　連弁文碗	－	胎土色調；灰白色　釉色調；半透明・草緑色
	104	青磁　百合口小碗	口径（9.6）底径3.2　器高5.0	胎土色調；灰白色　釉色調；半透明・草緑色
	105	青磁　折縁鉢	口径（11.7）	胎土色調；灰白色　釉色調；半透明・草緑色
	106	白磁　口兀皿	－	胎土色調；白色　釉色調；乳白色　内面；連弁文型押
	107	白磁　口兀皿	口径（12.3）底径（7.3）　器高3.2	胎土色調；灰白色　釉色調；乳灰白色
	108	瀬戸窯　卸皿	器高3.9	胎土；黄灰褐色　釉；淡黄褐色　備考；磨耗痕無い
	109	瀬戸窯　瓶子	底径（10.8）	胎土色調；灰褐色　釉色調；灰緑色
	110	瀬戸窯　入子	口径（5.8）　底径4.1　器高3.0	色調；肌色　外底；回転糸切り
	111	常滑窯　広口壺	－	胎土色調；灰黒色　器表色調；灰色
	112	常滑窯　片口鉢（・類）	口径（28.2）底径（12.8）　器高8.7	胎土色調；灰黒色　器表色調；赤橙褐色　調整；外面中位、縦位のハケ調整　備考；内面中位～内底磨滅
	113	瓦質　火鉢	口径（38.8）鍔部径（48.0）底径（37.2）器高13.3	胎土色調；淡赤褐色　調整；横位ナデ後、鍔部側面から体部内面中位にかけて横位のヘラミガキ。外底面砂付着。　文様；鍔部上面に亀甲花菱文（3つで1グループ）
	114	瓦質　火鉢	－	胎土・器表色調；黒灰色　備考；内面及び外面体部上位横ナデ　外面体部中位横　縦位掻きナデ
	115	土器質　火鉢	器高（9.7）	胎土色調；黒灰色　器表色調；黒色　備考；体部内外面横ナデ
	116	白かわらけ	口径（8.0）　器高1.6	成形；手づくね　色調；乳白色
	117	白かわらけ	口径11.4　器高2.95	成形；手づくね　色調；肌白色
	118	金銅製品　不明	径（1.95）孔径（0.75）厚0.01	－
	119	銅銭（開元通寶）	－	初鋳年；唐621年　書体；楷書
	120	銅銭（淳化元寶）	－	初鋳年；北宋990年　書体；行書
	121	銅銭（景徳元寶）	－	初鋳年；北宋1004年　書体；楷書
	122	銅銭（祥符元寶）	－	初鋳年；北宋1009年　書体；楷書
	123	銅銭（天禧通寶）	－	初鋳年；北宋1017年　書体；楷書
	124	銅銭（皇宋通寶）	－	初鋳年；北宋1038年　書体；篆書
	125	銅銭（元豊通寶）	－	初鋳年；北宋1078年　書体；篆書
	126	銅銭（元豊通寶）	－	初鋳年；北宋1078年　書体；行書
	127	銅銭（元祐通寶）	－	初鋳年；北宋1086年　書体；篆書
	128	銅銭（元祐通寶）	－	初鋳年；北宋1086年　書体；行書
	129	銅銭（聖宋元寶）	－	初鋳年；北宋1101年　書体；篆書
	130	鉄製品　刀子	全長28.6　刀部〔長18.3　幅2.5〕　茎長10.3　最大幅1.7　孔径0.3〕厚0.4	－
	131	石製品　砥石	残長7.0　最大幅8.0　厚4.0	中砥　産地；熊本・天草地方

表２　遺物観察表（２）

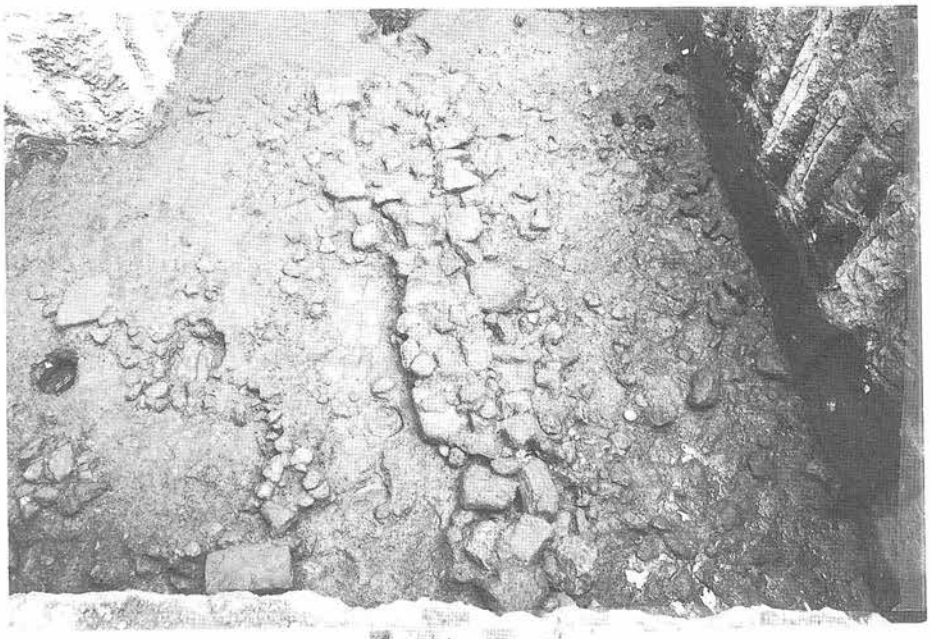
図14	132	骨角製品　不明	長4.9　最大径1.3	備考；鹿角製
	133	骨角製品 前角（武具）	残長2.7　幅1.6　厚0.9−	−
図15	134	漆器　皿	口径（9.7）　底径（6.6）　器高1.4	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；無
	135	漆器　椀	−	内外面；黒色漆　文様；笹、内外面、朱、手描き
	136	漆器　椀	−	内外面；黒色漆　文様；菊花文、内外面、朱、手描き
	137	漆器　椀	底径6.0	高台；輪　内外面；黒色漆　文様；情景文、内外面、朱、手描き
	138	漆塗木製品　蓋	径17.5　高3.3　摘み部〔幅1.9　高1.8〕	備考；全体に黒色漆が塗られるが塗り薄く所々剥落、一部炭化
	139	漆塗木製品　膳脚	残長8.8　幅2.7　厚2.0	表面；黒色漆　備考；塗り薄く、所々剥落
	140	漆塗木製品　膳脚	全長11.1　幅3.5　厚2.5　ホゾ〔長1.0　径1.1〕	表面；黒色漆　備考；塗り薄い
	141	漆塗木製品　不明	残長8.7　厚さ0.5　最大高1.4	表面（1面除く）；黒色漆　備考；調度品の部分
	142	漆塗木製品 横櫛（解き）	残長5.9　残幅4.2　棟厚1.0	表面；黒色漆　備考；漆は薄く塗られる
	143	木製品　横櫛（梳き）	残長6.0　残幅3.6　棟厚0.8	備考；漆塗の痕跡無い
	144	木製品　扇骨	残長13.3　幅1.7　厚0.25　木釘径0.5	備考；5枚残る
	145	木製品　草履芯	長（24.5）　幅10.5　厚0.35　孔径0.4	−
	146	木製品　草履芯	長24.5　幅10.3　厚0.3	−
	147	木製品　箸	長21.6　径0.4〜0.7	−
	148	木製品　箸	長21.0　径0.6	両口
	149	木製品　箸	長18.8　径0.5	両口
	150	木製品　箸	長18.3　径0.3〜0.6	両口
	151	木製品　折敷	長20.3　残幅10.2　厚0.6	−
	152	木製品　杓子	長24.8　最大幅5.8　厚0.4	備考；一部炭化
	153	木製品　曲物　蓋	径9.5　厚0.5	備考；樹皮（桜）残存
	154	木製品　曲物　蓋	径11.5　厚0.6	備考；樹皮（桜）残存
	155	木製品　箆	残長29.2　幅1.4　厚0.8	−
	156	木製品　形代	残長14.4　最大幅1.3	備考；鳥形か？
	157	木製品　不明	径4.2　厚0.5　孔径0.4	形態；円板状
	158	木製品　不明	長6.9　幅1.5　厚0.9	備考；木釘で2ヶ所。調度品の飾り？
図18	159	かわらけ	口径8.2　底径5.0　器高1.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色　胎土；砂質
	160	かわらけ	口径7.7　底径5.8　器高1.9	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	161	かわらけ	口径8.2　底径5.4　器高1.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	162	かわらけ	口径7.8　底径5.4　器高1.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	163	かわらけ	口径7.8　底径6.2　器高1.7	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	164	かわらけ	口径7.5　底径5.8　器高1.8	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	165	かわらけ	口径12.6　底径7.9　器高3.3	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	166	かわらけ	口径（13.5）底径8.0　器高3.3	成形；ロクロ　外底；回転糸切り、スノコ痕　色調；淡褐色
	167	青磁　蓮弁文碗	−	胎土色調；灰白色　釉色調；半透明・灰緑色
	168	銅製品　留め具	長2.3　幅0.5　厚0.2	備考；先端部は別素材で銀の可能性？
	169	石製品　碁石（黒）	径1.7〜2.0　厚0.5	−
	170	漆器　皿	底径7.0	高台；無　内外面；黒色漆　文様；州浜と草、内外面、朱、手描き
図20	171	木製品　折敷	長18.3　残幅4.1　厚0.1	−
	172	木製品　箸	長22.3　最大径0.7	−
	173	木製品　箸	長20.3　最大径0.6	−
	174	木製品　曲物	径16.0　高6.5　側板厚0.2	備考；底板不明、樹皮紐で留める

表3　遺物観察表（3）

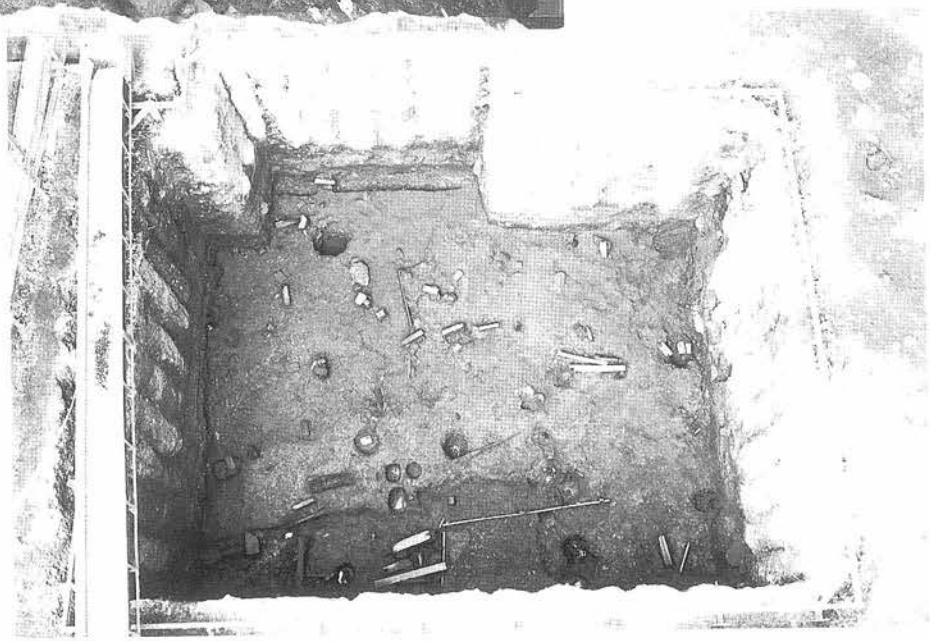
かわらけ	船載陶磁器	国産陶器	土器・土製品	瓦	銅銭	金属製品	石製品	骨製品	木製品	漆器類	その他（獣骨・貝殻・種子）	計
5,249	24	232	72	0	26	29	14	4	1,539	70	178	7,437

表4　遺物総破片点数表

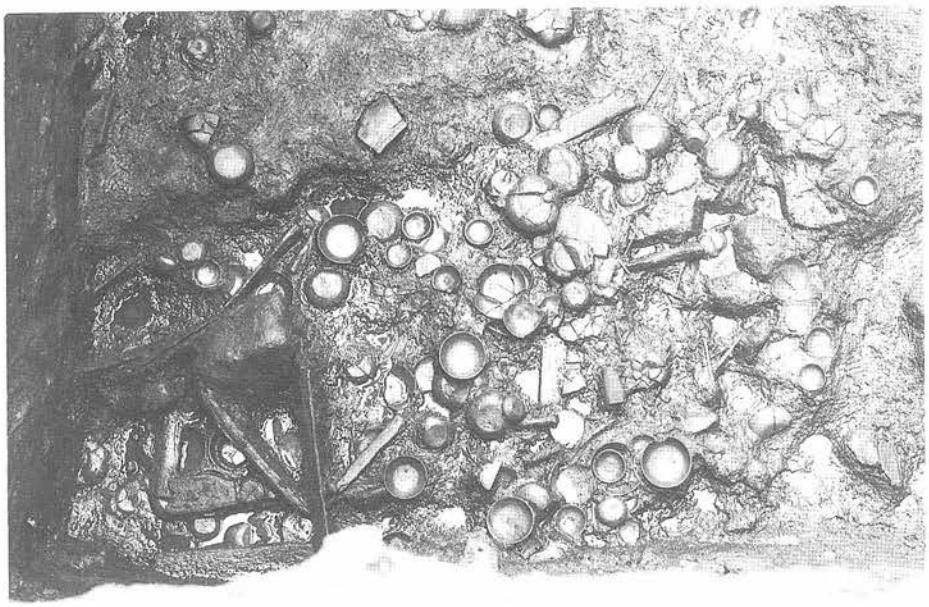
写　真　図　版



1．1面石列（南から）



2．2a面全景（東から）



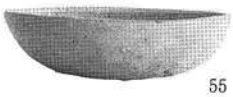
3．2b面落ち込み遺物（東から）

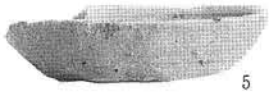
図版 2

163

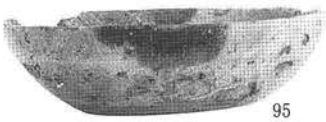
91

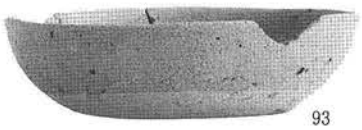
53

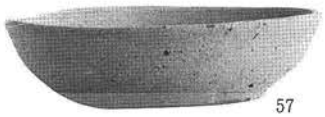

55

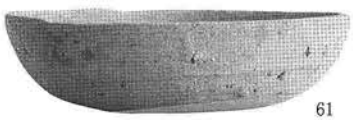

5

3

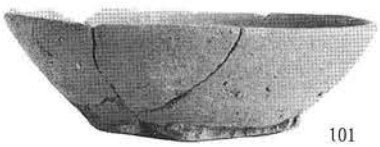

95

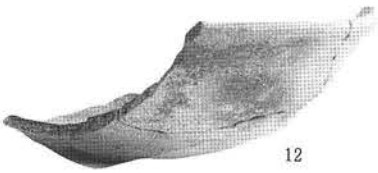

93

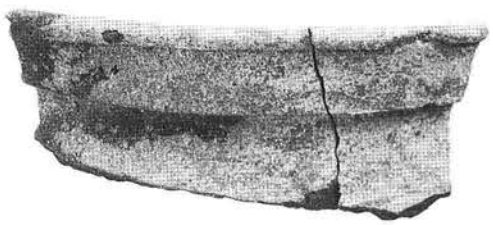

57

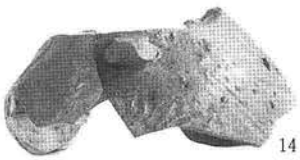

61

98


101


12


111

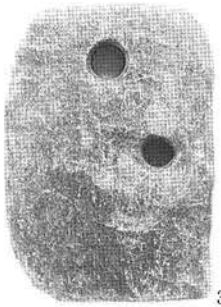

14

65

130

43

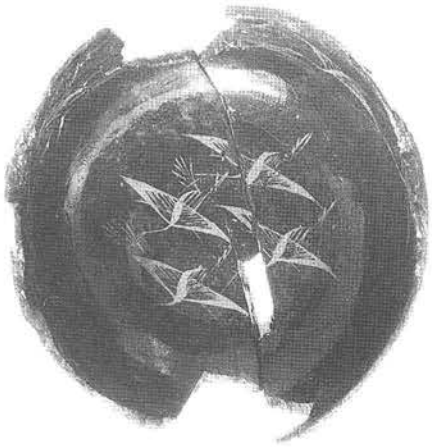
32

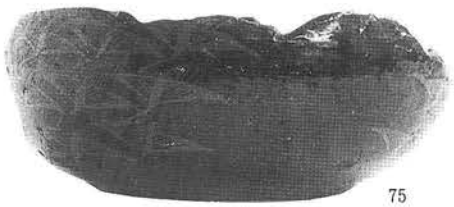

38

168

72

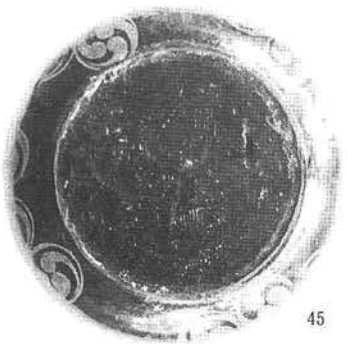
133





75

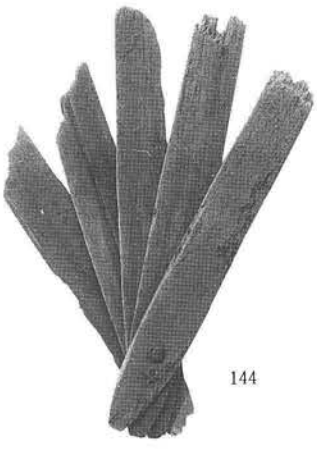
77



45

80

140



144

152

156

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第　分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	16
編集者名	手塚直樹・岡陽一郎・野本賢二
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年３月

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいぞうじきゅういせき 海蔵寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市扇ガ谷四丁目632番３地点	204	2			19980316 ～ 19980502	37㎡	個人専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
海蔵寺旧境内遺跡	寺院	鎌倉・室町時代 13世紀後半 ～14世紀	「板壁掘立柱建物」	かわらけ、舶載陶磁器、常滑窯製品、金属製品、石製品、木製品、漆器類	

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

鎌倉市小町一丁目81番18地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市小町一丁目81番18地点における自己用店舗併用住宅の建設に伴う緊急調査報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は、平成10年５月11日から28日までである。

3．本報の遺構、遺物の縮尺は次の通りである。

①遺構配置図１/80・個別遺構図１/80である。

②遺構図の水糸高は海抜高を示す。

③遺物実測図は1/3を使用している。

4．本報の執筆・編集は高野昌巳が行った。

5．本報の図版作成及び写真撮影は次のものが担当した。

①遺物図版　高野昌巳

②遺構図版　高野昌巳

③遺構写真　高野昌巳

④遺物写真　高野昌巳

6．発掘調査に当たっては、以下の諸機関にご協力を賜った。

・株式会社紅梅組

・社団法人鎌倉市シルバー人材センター

7．調査団編成

担　当　者　宮田　眞

調　査　員　高野昌巳

調査補助員　安達澄代・吉原真智子

調査協力者　池田義春・宮崎　明・山崎一男・渡辺輝彦（シルバー人材センター）

目　　次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 64
第2章　調査経過とグリッド配置・基本土層 …… 67
第3章　検出された遺構及び出土遺物 …… 69
第4章　まとめ …… 72

挿　図　目　次

図1　本遺跡地と周辺遺跡 …… 65
図2　遺跡位置図 …… 66
図3　遺跡全体図 …… 68
図4　表土・攪乱出土遺物 …… 69
図5　溝・土壙・面上出土遺物 …… 70
出土遺物観察表 …… 71

図　版　目　次

PL 1
調査地（南側1/2） …… 75
西壁セクション …… 75
PL 2
調査地（北側1/2） …… 76
調査区南東溝 …… 76
PL 3
溝ベルト …… 77
東壁際土壙セクション …… 77
PL 4
表土攪乱出土遺物 …… 78
溝出土遺物 …… 78
PL 5
溝出土遺物 …… 79
土壙出土遺物 …… 79
面上出土遺物 …… 79

第１章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は、鎌倉市小町一丁目81番18地点に所在する。JR鎌倉駅前のバスターミナルと若宮大路を結ぶ道路の北辺に面し、第一勧業銀行の東に隣接する。駅からは東に約70m、若宮大路二ノ鳥居からは南西に約150mの地点である。

調査地の東約30mにある若宮大路は、鶴岡八幡宮から、由比ヶ浜へと真っ直ぐにのびる八幡宮の参詣路で、鎌倉の町割りの基軸となる道である。若宮大路及び八幡宮は、京都の朱雀大路、大内裏にそれぞれなぞらえて築造されたといわれている。

二ノ鳥居以北の大路中央には、一段高い道がある。葛石を使ったことから、段葛と呼ばれている道で、他に、置き石（おきいし）、作道（つくりみち）などと呼ばれていたようである。

頼朝は治承四年（1180）十月鎌倉に入ると、八幡宮を現在の地に移し、その年の十二月には、自分の住居を営み、家臣にも屋敷地を与えている。その時に道路の整備を行い、曲がった道を真っ直ぐに直した。そして、寿永元年（1182）三月に、頼朝自らが指揮を執り、北条時政以下の御家人らが土石の運搬をして、若宮大路及び段葛を築造した。若宮大路・段葛の築造は、頼朝の都市計画の一部として最初からあったが、月日が過ぎ、妻政子の懐妊を機に、安産祈願として日頃の計画を実行に移したようだ。段葛が築造された当時は、三ノ鳥居から一ノ鳥居まであったとされ、明応4年（1495）の洪水で破壊を受け、幕末には、下馬までとなり、明治時代になってからは、横須賀線の工事で破壊され、二ノ鳥居以南を失ったといわれている。

若宮大路には、騎馬で社地に乗り入れを禁止するための駒留めがあったといわれる。古文書などには釘貫（くぎぬき）と記されているようだ。釘貫とは、広辞苑によると「柱を立て並べて横に貫（ぬき）を通しただけの簡単な門、または柵」とある。また、大路には三箇所に橋が架かっていたようである。それぞれ、上（かみ）、中（なか）、下（しも）の下馬橋と呼ばれた。上の下馬橋は、八幡宮境内の赤橋を指すといわれる。中の下馬橋は、二ノ鳥居前付近、下の下馬橋は、下馬四つ角付近と思われている。

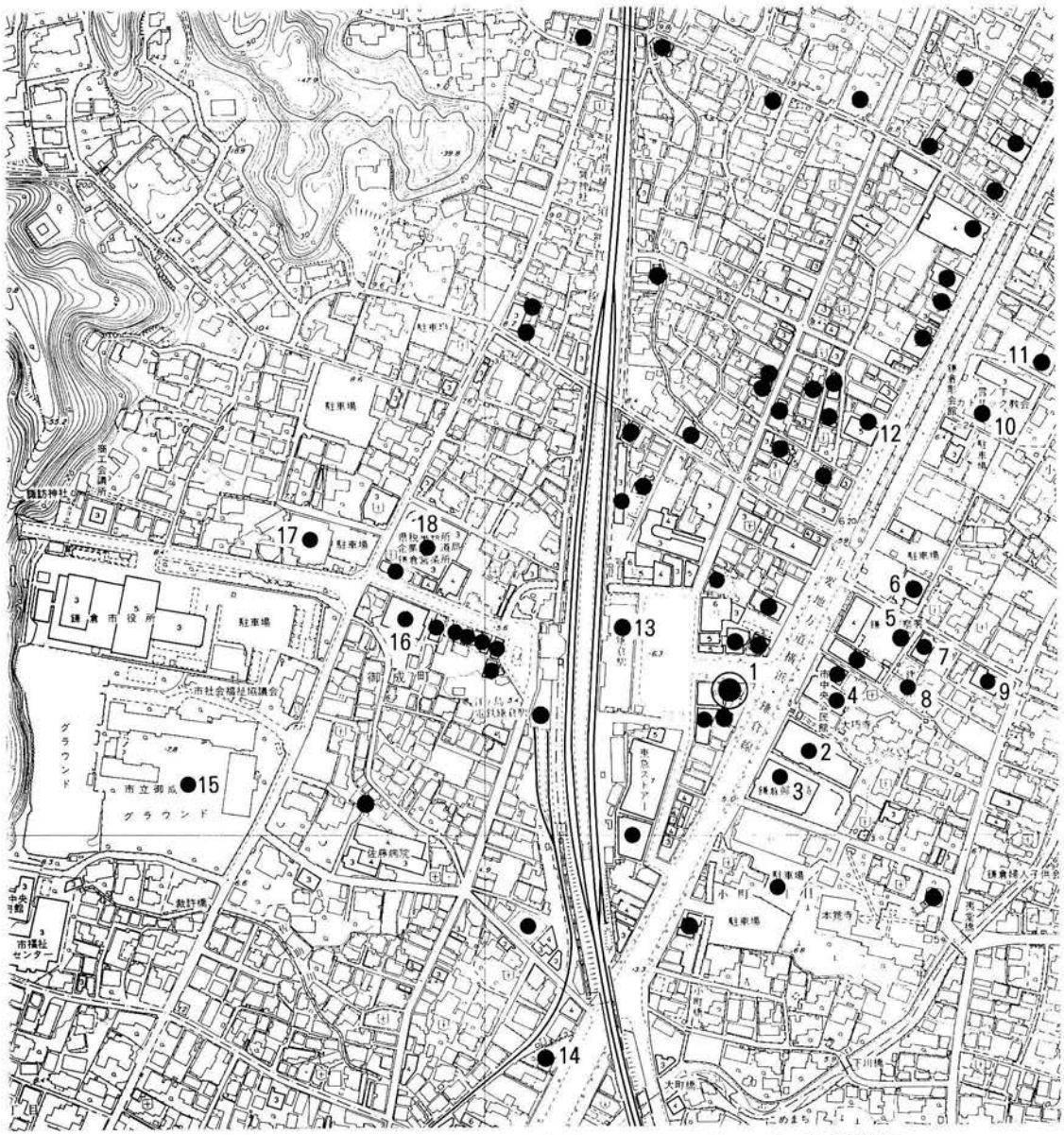
下の下馬橋付近は、鎌倉時代、繁華街として賑わった地域のようである。仁治二年（1241）十一月には、三浦泰村、光村兄弟らと小山長村らが、好色の家（妓楼）で宴会中に喧嘩し、騒動となる事件があったようである。また、江戸時代の元治元年（1864）には、下馬四つ角付近で、イギリス人士官二人が、浪士により斬りつけられ殺害される事件も起こった。

二ノ鳥居付近から小町大路へと出る道があるが、大路からこの道に入るところは小町口と呼ばれる場所である。この小町口の南側には藤内定員邸が、北側には中条家長邸がそれぞれ推定されている。

若宮大路は、冒頭でも述べたように、鎌倉の町割りの基軸といえる道であるが、軍事的な意味も持っていたようである。また、参詣道としての神聖さと、下の下馬の繁華街のような俗っぽさを併せ持つ道である。

《参考文献》

『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（鎌倉市小町一丁目81番8地点）1995年３月　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
『鎌倉事典』白井永二編　1976年３月　東京堂出版
『鎌倉市史』総説編　1979年10月　吉川弘文館
『鎌倉市史』近世通史編　1990年３月　吉川弘文館
『中世鎌倉歴史地図』（鎌倉市民）第７図（小町・大町地区）阿部正道・安田三郎



1．本調査地点
2．(伝)藤内定員邸跡(中央公民館)
3．〃　〃（鎌倉中央郵便局）
4．小町1－309－5地点（松風堂ビル）
5．若宮大路周辺遺跡（鎌倉警察署構内）
6．小町2－345－2地点（雪ノ下教会）
7．若宮大路周辺遺跡（小町サイクルパーク）
8．〃　〃（鎌倉スポーツクラブ）
9．〃　〃（小町1－352－イ外）
10．宇都宮辻子幕府跡（雪ノ下カトリック教会）
11．〃　〃（ユニオン駐車場）
12．若宮大路周辺遺跡（豊島屋）
13．蔵屋敷遺跡
14．若宮大路周辺遺跡（太陽設備）
15．今小路西遺跡（御成小学校）
16．諏訪東遺跡
17．千場地遺跡（紀ノ国屋）
18．千場地遺跡（県税事務所）

図1　本遺跡地と周辺遺跡

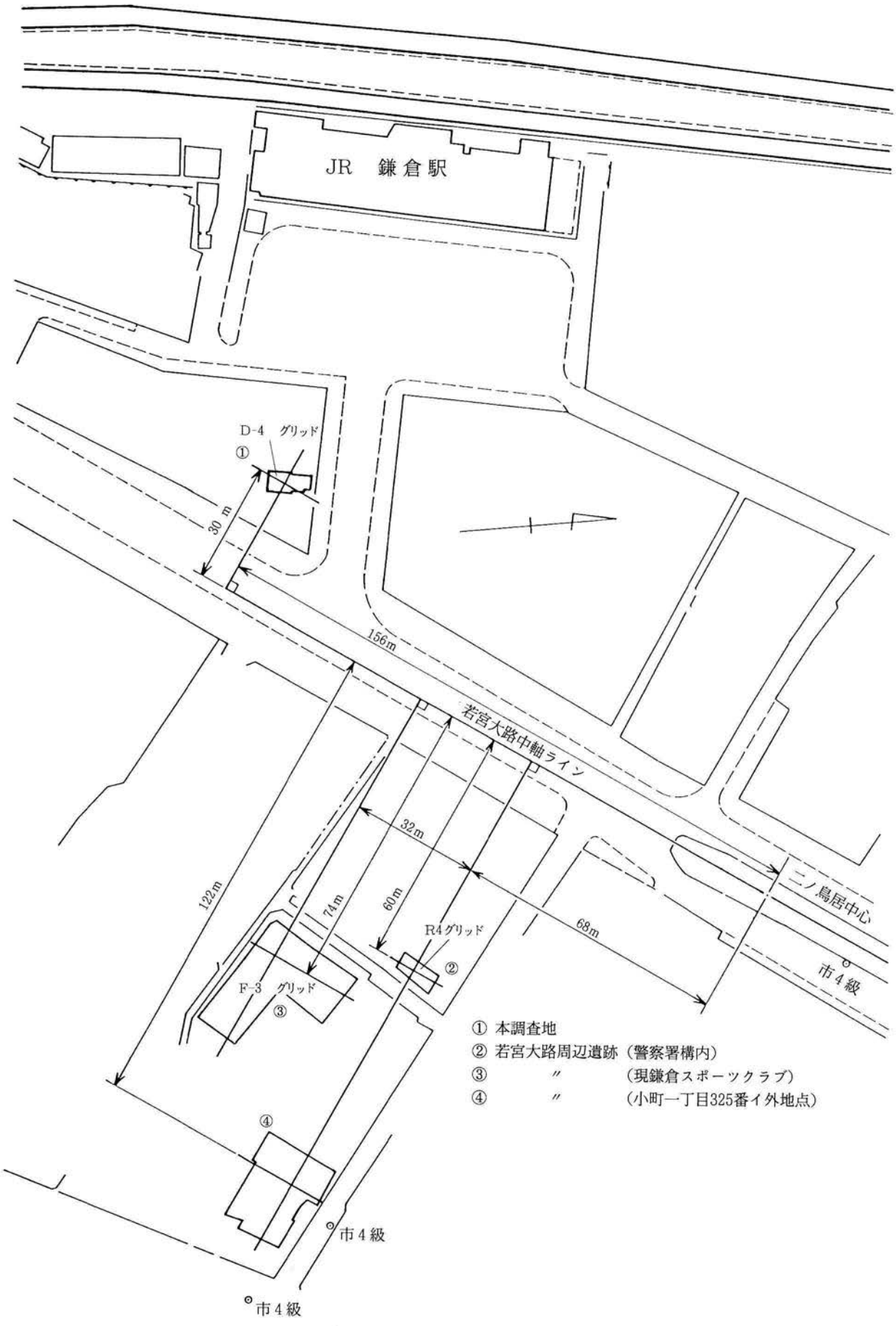

JR 鎌倉駅
D-4 グリッド
①
30 m
156m
若宮大路中軸ライン
32m
122m
74m
60m
68m
R4グリッド
②
F-3 グリッド
③
二ノ鳥居中心
市４級
市４級
④
市４級
① 本調査地
② 若宮大路周辺遺跡（警察署構内）
③ 〃 （現鎌倉スポーツクラブ）
④ 〃 （小町一丁目325番イ外地点）
0
100m

図２　遺跡位置図

第２章 調査経過とグリッド配置・基本土層

調査は、自己用店舗併用住宅建設に伴う事前調査として、平成10年５月11日～28日にかけて実施された。調査面積約48㎡。排土処理の都合上、南側2/3を先行して調査を行い、北側1/3は、南側の調査終了後に調査した。

調査経過

５月11日　南側2/3調査開始。試掘結果に基づき、現地表下約60㎝までの表土スキ取りを重機により行った。暗灰褐色粘質土の中世遺物包含層面が検出されるが、この面は、現代の攪乱を著しく受け、極く僅かにしか遺存していなかった。さらに人力により20㎝掘り下げ黄色砂面（地山）を検出した。

12日　精査及び攪乱壙の掘り下げ

13日　精査及び攪乱壙の掘り下げ
グリッド設定を行なう
溝状の落ち込みを確認、掘り下げを行なう

15日　南側全景撮影（調査区東側清和ビル屋上から）

19日　平面実測及びレベル測量

20日　北側1/3の表土掘削開始（人力）

22日　精査及び、撹乱壙、遺構の掘り下げ

25日　北側全景撮影、平面実測、レベル測量

27日　調査終了

28日　撤収

グリッド

測量の基準となるグリッドは、鎌倉スポーツクラブ、鎌倉警察署構内等の調査地でも用いられた若宮大路中軸ライン（原点は、二ノ鳥居礎石北辺を結ぶラインの中点）を基準として、２×２ｍの方眼を設定した。二ノ鳥居原点から、156ｍ南下し、そこから西へ30ｍの点が、本調査地のＤ－４グリッドである。他に、この若宮大路段葛の中軸ラインを基準としている遺跡は、宇都宮辻子幕府（雪の下カトリック教会）若宮大路周辺遺跡群（小町１丁目325番イ外地点）若宮大路周辺遺跡群（豊島屋）等がある。

グリッドの軸線方向は、磁北に対し34°東に傾く。グリッドの名称は北西隅の杭名とする。

基本土層

現地表下約60㎝までは、表土・撹乱層。表土層の下は、暗灰褐色の中世遺物包含層で、現代の攪乱を著しく受ける。約20㎝の厚みを持つ。かわらけ片、土丹粒、炭化物等を含む。粘性、しまり共普通。この下は、黄色砂地山面で、海抜レベルが5.3～5.6ｍ。北から南へと傾斜する。この黄色砂面で遺構確認を行った。

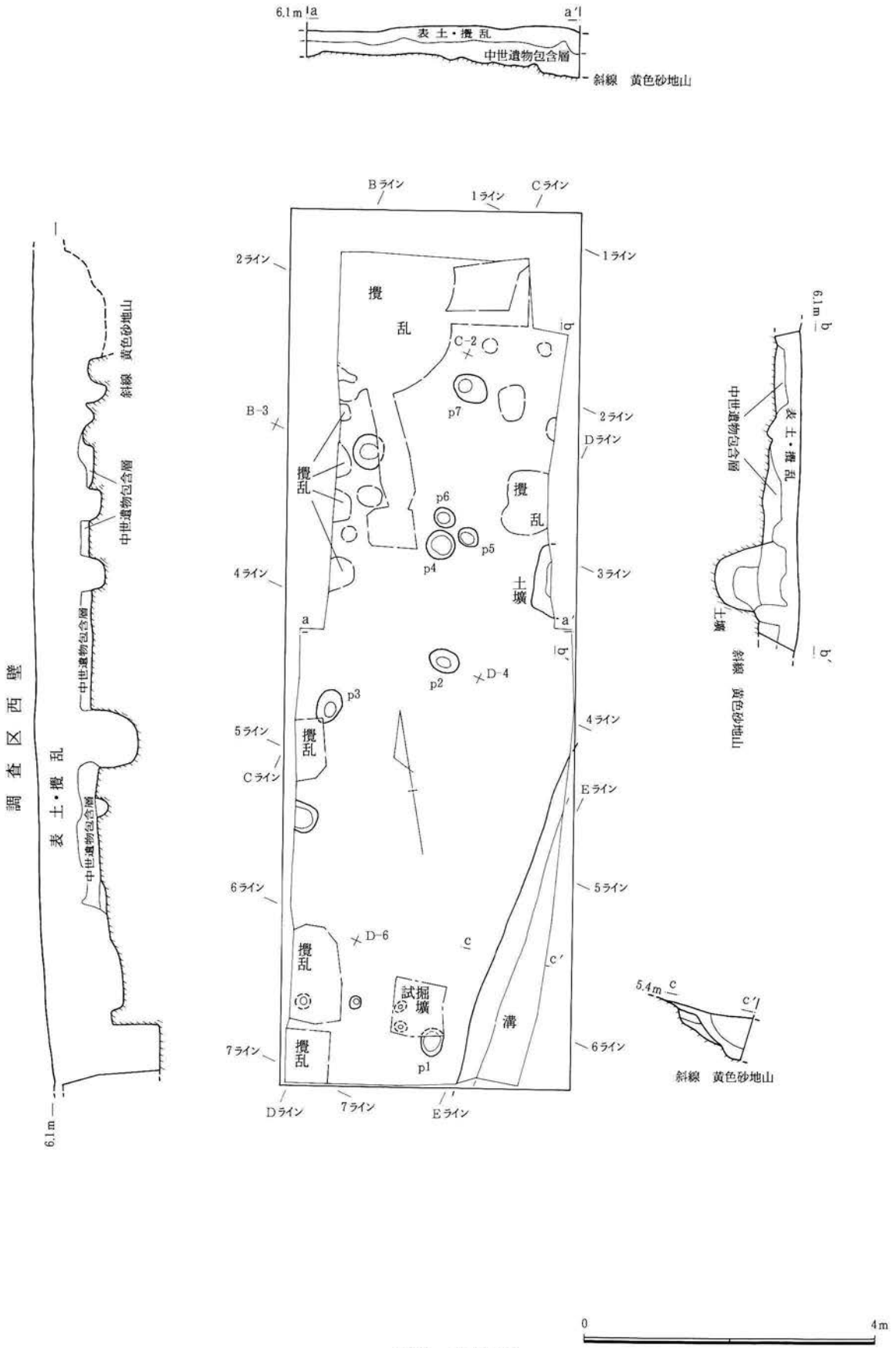

6.1m
a
a′
表土・攪乱
中世遺物包含層
斜線　黄色砂地山
Bライン
1ライン
Cライン
2ライン
1ライン
攪
乱
C-2
p7
B-3
2ライン
Dライン
攪
乱
p6
p5
p4
攪
乱
4ライン
3ライン
土
壙
a
a′
b
b′
p2
D-4
p3
5ライン
攪
乱
4ライン
Cライン
Eライン
6ライン
5ライン
D-6
c
c′
攪
乱
試掘
壙
溝
7ライン
攪
乱
p1
6ライン
Dライン
7ライン
Eライン
調査区西壁
表土・攪乱
斜線　黄色砂地山
中世遺物包含層
中世遺物包含層
中世遺物包含層
6.1m
6.1m
b
b′
表土・攪乱
中世遺物包含層
土壙
斜線　黄色砂地山
5.4m
c
c′
斜線　黄色砂地山
0
4m

図3　全体図

第３章 検出された遺構及び出土遺物

本調査地は、面積約48㎡であるが、実際には攪乱等の破壊を受け、40㎡よりも狭い範囲で遺構確認を行った。また、現地表から、黄色砂地山面までの間も近・現代の破壊を受け、地山面での一括確認となった。検出された遺構は僅かで、調査区南東隅の溝、土壙1、ピット７である。ピット間の関連は見いだせなかった。

溝

調査区南東隅D－４～E－６グリッドで検出された。検出された規模は、南北の長さが約4.7m、東西の幅が最大で約0.9m、検出面からの深さは約0.45m、底部の海抜レベルは約4.6mである。覆土は、上層が暗灰色粘質土、下層が暗茶色粘質土で、土丹粒、かわらけ片、常滑片、炭化物等を含む。しまり、粘性とも普通である。軸線方向は、上端ラインで見ると、若宮大路中軸ラインとほぼ平行である。

土壙

調査区東壁際D－３グリッドで検出された。検出された規模は、南北で約1.0m、東西で約0.25m検出面からの深さは、約0.70mである。覆土は、上層が暗茶色粘質土で、かわらけ片、黄色砂を含む。しまり悪く、粘性あり。下層は、黄色砂層で、かわらけ片を含む。しまり悪い。

出土遺物

遺物は、テンバコにして一箱弱出土した。その内実測し得たものは、表土攪乱層の現代遺物を入れて全部で25点である。

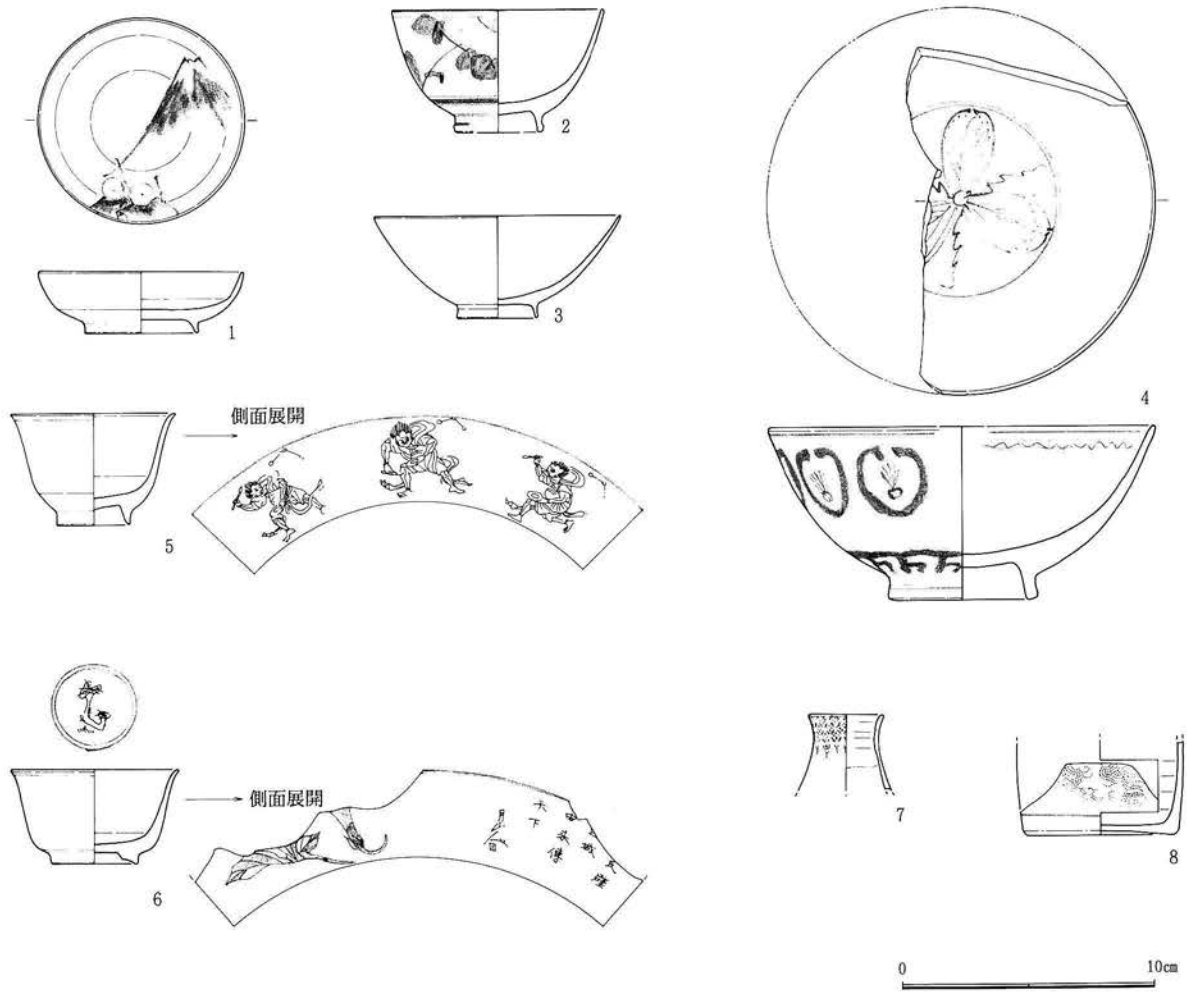


図4　表土・攪乱出土遺物

図４は、表土攪乱層から出土した染付製品で、いずれも近・現代の製品と思われる。特徴のある製品を残し実測をした。１は小皿で、内面に、富士山らしき山と、三度笠姿の旅人風の人物と思われる絵が二人描かれている。２は湯呑みで、外側面に、筆と皿を持った人物（神仏？）が描かれ、人物の上方には、簡単な幾何学的文様が描かれている。3も湯呑みである。外側面には、植物と、漢字の詩のようなものが描かれている。内底見込み部分には、茸が描かれている。４も湯呑み。外側面に植物が描かれている。５は碗である。外側面には蕪のようなものが描かれ、内底見込み部分には、植物が描かれている。６も碗である。内・外面に植物が隙間なく、びっしりと描かれている。７は、徳利の口縁から頸の部分で、８は底部である。同一製品と思われる。７の口縁部付近には、花のようなものが描かれ、８には、点描で雲のようなものが描かれている。

図５－１～11は，調査区南東隅の溝から出土した遺物である。１は、白磁の口兀皿である。口縁部分はやや薄くなり、外反する。２は、常滑こね鉢である。小片のため、口径の復元はできなかった。３も常滑製品の甕で口径の復元には至らなかった。13世紀後半頃の製品と思われる。４は、山茶碗窯系こね鉢の高台付近の小片である。５～10は、糸切り底のかわらけである。６・７・９の側面の立ち上がりは、底部から緩やかに立ち上がり、中間で折れ曲がるように急になる。８は、他の小皿よりやや深みがあり、体部は丸みを持って立ち上がる。10は、薄手で、やや深みがあり、体部は多少稜線は残るものの滑らかな曲線を持ち立ち上がっている。11は砥石である。

図５－12は土壙出土遺物で、糸切り底のかわらけ小皿である。やや肉厚で、側面は強めの曲線を持ち立ち上がる。

図５－13～17は、地山面上から出土した遺物である。13・14はてづくねかわらけ、15・16は糸切り底のかわらけである。13は、薄く浅い器形で、口縁端部に丸みを持つ。14は13よりも深く、強い稜線を持ち、口縁部断面は四角くなる。15は、薄手で、口径と底径との差が少ない。16は、肉厚で、側面は滑らかな曲線で立ち上がる。復元口径は14cmとなった。５は常滑製品で、甕の口縁部小片と思われる。

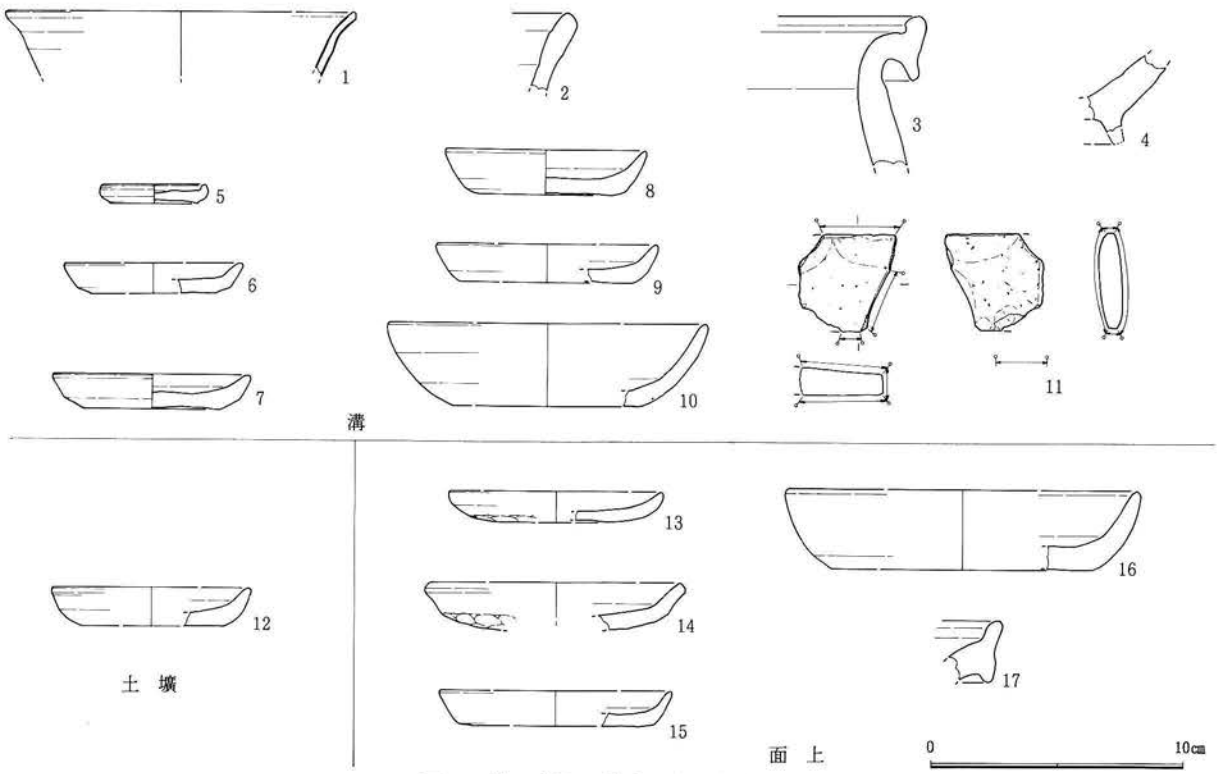


図５　溝・土壙・地山面上　出土遺物

遺構 層位	図版	No.	種別	口径(cm) 長さ	底径(cm) 幅	器高(cm) 厚さ	備考
表土・撹乱層	4	1	染付小皿	8	4.4	2.5	素地・白色、緻密、硬い　釉・やや緑味のある白色、光沢良、透明感普通
		2	染付湯呑み	6.6	2.8	4.5	素地・白色、緻密、硬い　釉・淡緑色、光沢良、透明感普通　他に2点
		3	染付湯呑み	6.7	3.5	3.8	素地・白色、緻密、硬い　釉・灰白色、光沢良、透明感普通　削り出し高台
		4	染付湯呑み	8.4	3.4	4.9	素地・白色、緻
		5	染付碗	15.2	6	6.9	素地・白色、緻密、硬い　釉・青白色、光沢良、透明感普通
		6	染付碗	9.8	3.2	4.1	素地・白色、緻密、硬い　釉・青灰白色、光沢良、透明感普通
		7	染付徳利	復 2.9			素地・褐味白色、緻密、硬い 釉・やや緑味のある白色、光沢良、透明感普通 口縁部
		8	染付徳利		復 5.8		7と同一固体と思われる　底部
溝	5	1	白磁口兀皿	復13.8			素地・淡灰色、黒色の微粒子含む、やや軟質 釉・淡灰緑色、光沢鈍、透明感普通
		2	常滑こね鉢				胎土・淡い赤茶色、長石、石英含む、砂っぽい、表面・淡い茶色
		3	常滑甕				胎土・灰色、長石、石英含む、割れ口凸凹、表面・黒味のある灰色
		4	山茶碗窯系こね鉢				胎土・灰色、長石、石英、黒色微粒子含む、割れ口凸凹
		5	内折かわらけ	復 4.1	復 3.6	0.8	胎土・肌色、微粒子含む、焼成良好、粉質
		6	かわらけ	復 7.2	復 5.0	復 1.2	胎土・肌色、微粒子含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
		7	かわらけ	復 7.6	復 5.6	復 1.4	胎土・暗赤～淡褐色、微砂、白針、雲母片含む、焼成良好、粉質一部煤付着 糸切り底
		8	かわらけ	復 8.0	復 5.4	復 1.8	胎土・褐色、微砂、白針含む、焼成良好、粉質、糸切り底
		9	かわらけ	復 8.8	復 7.0	復1.55	胎土・橙色、微砂含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
		10	かわらけ	復12.6	復 7.3	復 3.3	胎土・橙色、微砂、白針含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
		11	砥石				仕上げ砥？ 粒子やや粗い
土壙	5	12	かわらけ	復 7.8	復 5.7	復1.55	胎土・橙色、微砂、白針含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
地山面上	5	13	かわらけ	復 8.5	復 4.8	復1.25	胎土・肌色、微砂、焼成良好、粉質、手づくね 小片のため寸法不正確1/5の破片
		14	かわらけ	復10.0			胎土・内面肌色、外面褐色、微砂、焼成良好、手づくね 小片のため寸法不正確1/6の破片
		15	かわらけ	復 7.2	復 5.0	復 1.2	胎土・肌色、微砂含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
		16	かわらけ	復14.0	復10.5	復 3.2	胎土・淡い橙色、微砂、白針含む、焼成良好、砂質に近い、糸切り底
		17	常滑甕				胎土・褐味灰色、長石、黒色微粒子含む、割れ口凸凹 内表面・灰黒色 外表面・濃茶色

出土遺物観察表

第4章 まとめ

本調査地は、上層の殆どが現代の削平を受けており、中世遺物の包含層は、部分的に遺存するのみであった。依って、本来の面を追っての調査はできず、地山（黄色砂）面での一括確認となった。しかし、地山面も、上層からの攪乱を受けており、面の遺存状態は決して良好とはいえなかった。

第3章冒頭でも述べたように、本調査地は遺構が少なく、調査面積も狭い。そのため、検出された溝や土壙は、完全な形での検出は望めなかった。

調査区南東で検出された溝は、若宮大路とほぼ平行になる。この溝の性格等ははっきりしないが、今後の周辺地域の調査によっては、明確な事実が見出されるかも知れない。

溝出土の白磁口兀皿は、太宰府出土の輸入陶磁器の形式分類・編年から、Ⅸ・Ⅰ類（13世紀中頃または、前半頃）に相当すると考えられる。また、かわらけは、13世紀中葉～14世紀前葉の製品と考えられる。常滑の甕は13世紀後半頃の製品であろうか。

調査区東壁際の土壙からは、実測ができ、年代を掴めたものは図5-12のかわらけ一片だけである。13世紀末～14世紀前葉の製品と思われる。

面上からは、13世紀前半頃と思われる手づくねかわらけが出土している。（図5-14）。図5-13の手づくねかわらけは、口唇端に丸味があり、胎土は粉っぽい等の特徴から、14の手づくねかわらけよりも新しい13世紀後半の製品と思われる。他の糸切り底のかわらけは13世紀末～14世紀前葉頃の製品であろう。

本調査地の南西に位置する大和証券ビルは、平成3年に発掘調査を行っている。本調査地と同様に、上層は現代の削平を受け、黄色砂面での遺構確認を行っている。方形竪穴建築祉、井戸、溝等が検出され、遺物も本調査地よりも多数出土している。1次調査の撹乱壙からは、15世紀代の遺物や8世紀初頭と見られる須恵器が出土している。

以上の出土遺物の年代から、当遺跡地と周辺の地域は、13世紀前半から15世紀初頭頃までの長い期間に渡り展開されていったと思われる。また、大和証券ビルの調査で出土した古代遺物から、古代の営みがあった可能性も窺わせる。

《参考文献》

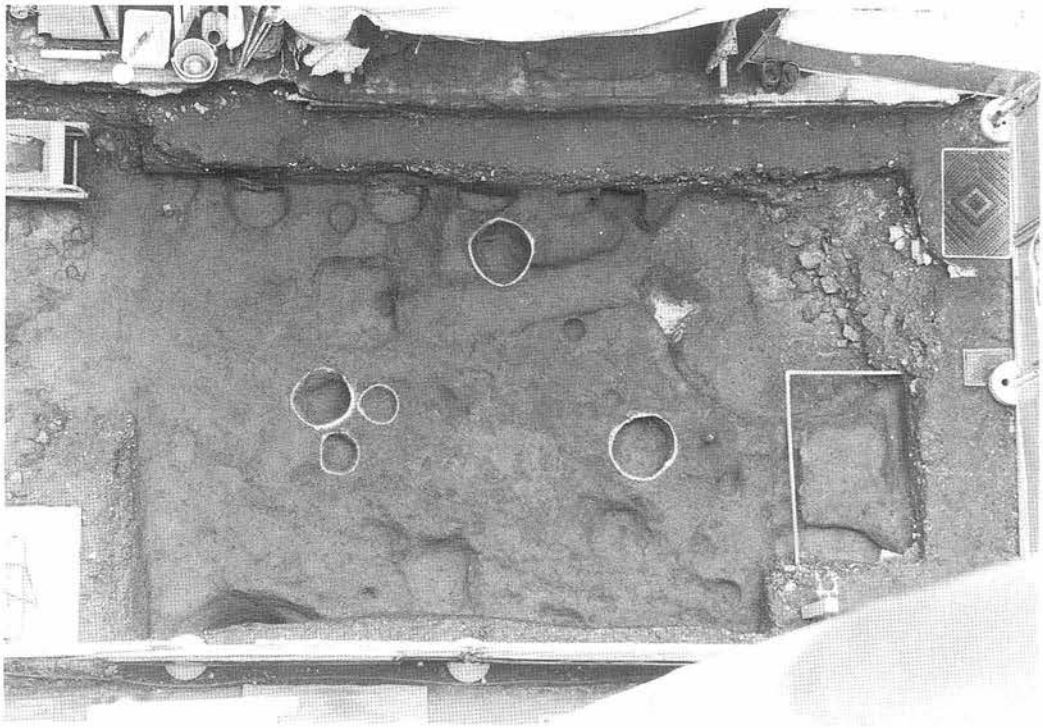
神奈川考古21号（神奈川考古同人会1986年2月）
横田賢次郎・森田　勉　1978年「太宰府出土の輸入陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」
『九州歴史資料館論集』4
中野晴久（常滑市民俗資料館）1994年赤羽・中野『生産地における編年について』
全国シンポジウム「中世常滑焼きをおって」資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（鎌倉市小町1丁目81番8地点）1995年3月若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

写　真　図　版

PL1

◀ 調査地（南側1/2）

▶ 西壁セクション



◀ 調査地（北側1/2）

▶ 調査区南東溝（南から）

胎土は灰色を呈し、硬質である。外体下部はへらなで調整、外底部の糸きりの痕跡は明瞭に遺存する。

29～31は山茶碗窯系捏鉢。29、30は口縁部の破片。31は底部。胎土は29は灰色、30は灰褐色を呈し、共に、長石を含み硬質である。口唇部の形態は、29は円く収め、30は凹が巡る。31の復元された高台径は15.7cmを測る。胎土は灰色を呈し、若干、長石を含み軟質である。外底部は回転へら削り調整、高台は貼付け高台である。内面は摩耗しておらず、使用痕が認められない。

32～40は常滑窯の製品。32、33は壷、34～36は甕、37～40は鉢。32の復元された口径は22.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子が多く混入し、硬質である。口縁部は玉縁状となり、遺存する破片の全面に降灰している。33は底部。復元された底径は9cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、細かい白色粒子を含む精良土である。底部は5mmと薄く、内底面には赤色物が付着している。34の復元された口径は41cmを測る。胎土は灰色を呈し、若干白色粒子を含む。口縁部には凹が巡る。35の復元された口径は23cm、縁帯幅は2cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、白色粒子を交える。36は底部の破片。胎土は灰黒色を呈し長石、軟礫を交える。内底面が摩耗しており、鉢に転用されて使用されたものと思われる。37、39は黒色の胎土に微細な長石をまじえる。37の口縁端部は角張り、39は丸く収まり、外側の口縁部下には窯印を有する。38、40の胎土は淡橙色を呈し、白色粒子、黒色粒子を交える。口縁端部が、両側に押し広げられる。同一個体の可能性がある。41～43は瓦質の手焙り。41の復元された口径は44.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、金雲母、茶色粒子、黒色粒子を含む。器表は黒色処理され、また、ささら状の工具で成形した痕跡を留めているが、剥離が著しい。42の胎土は桃味橙色、43は黒色を呈し、微細な白色粒子を含み、硬質である。図41、1～4は白かわらけの口縁部。1の復元された口径は18cmを測る。胎土は白色を呈し、白色礫を含む粉質な精良土である。外体部は横ナデ、下部は指頭による成形である。器表は、若干ざらつく。2の復元された口径は9.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、白色礫、微細な黒色粒子を含み、粉質である。1と同様な成形であるが、器表は滑らかである。3、4は2と同様な胎土であるが、3は口唇端部が内側に折れ曲がり、4は丸く収まる。

5は瓦質製品。復元された最大胴径は5.6cmを測る。胎土は粉質で、微細な黒色粒子を交え、淡灰色を呈する。内部は煤けており、外体部には花文様の連続スタンプ文が巡る。

6は不明土製品。かわらけ質で中央に孔を有する。恐らく円形になると思われる。復元された直径は20cm、厚さは2～1.2cm、孔の直径は2.2cmを測る。中央部が最も厚い。

7～9は瓦。7は丸瓦、8、9は平瓦。7は厚さ2.2cmを測る。胎土は灰色で、灰色礫、白色粒子を含み軟質である。

凸面はなでられ、凹面には布目痕が遺存する。8は厚さ1.3cmと薄い。胎土は灰黒色を呈し、白色粒子、雲母が混入する。凸面にササラ状の工具で成形した痕跡を留める。9の厚さは2.2cmである。胎土は灰色を呈し、雲母を多く混入する。凸面には細い縄目叩き文が遺存している。

10～12は鉄製品、釘。

13は北宋銭。元豊通宝。

14～16は石製品。14は滑石鍋。復元された口径は25.4cm、厚さは1～1.3cmを測る。上鍔、下鍔は共1cmを測る。外体部には丸ノミによる調整痕が認められ、また、炭化物が一面に濃く付着している。15は砥石。石質は安山岩系である。産地は不明。3面に使用痕が認められる。

16は安山岩系の石臼。

17、18は骨製飾板。裏側に斜め方向の無数の傷痕が遺存し、径2.5mmの孔が17は中央に1孔、18は恐らく4隅に各1孔、計4孔遺存したと思われる。若干反り気味で、表側が凸状を呈している。17には花文様を刻み、18は無紋である。

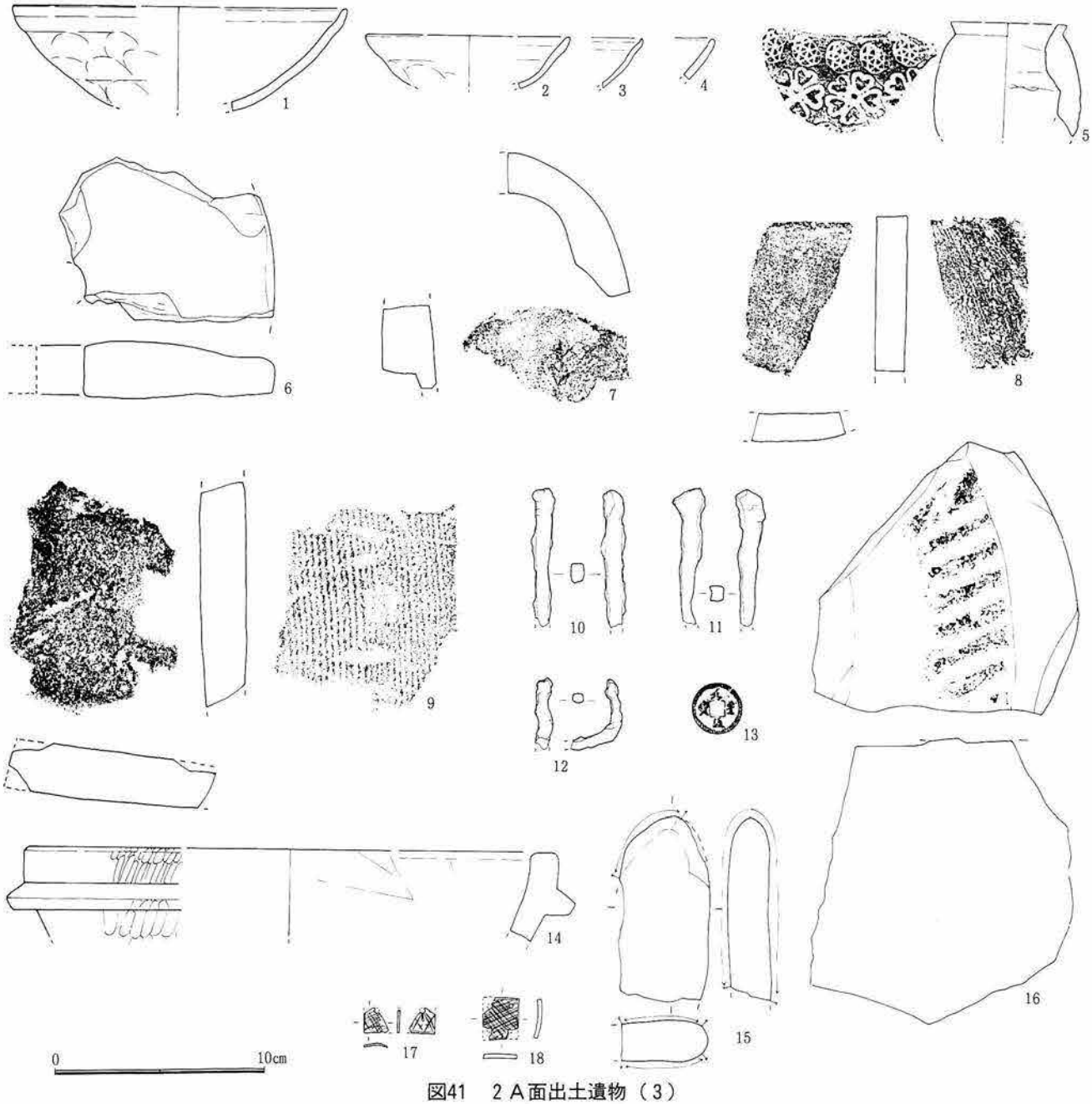


図41　２Ａ面出土遺物（３）

２Ｂ面の検出遺構と出土遺物（附図３）

玉砂利遺構４・５・礎石建物（図42）

これらの遺構群は、調査区南側、Ｇ～Ｈ－13グリッド内において、海抜14ｍ前後で検出された。0.5ｍの空間を挟んで、並行して検出された。玉砂利遺構４は西側に、玉砂利遺構５が東側に位置している。

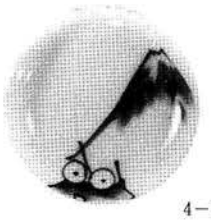
玉砂利遺構４の検出された範囲は0.8ｍ四方を前後測る。密度の低い平面的な広がりが検出された。平坦に敷かれており、厚さは５～10㎝程度である。この玉砂利遺構は、全面に広がったものではなく、部分的に広がった小規模な範囲を随所に検出した。総じて、密度が薄く粗い化粧の様相である。玉石は、５～50㎜大きさの一定しないものが敷かれていた。また、この遺構の南側には、50×40×20㎝の庭石の様相を呈した石が据えられていた。

玉砂利遺構５の検出された範囲は南北1.8ｍ、東西１ｍを測る。平坦で、かなり濃密に化粧された様相をもっち、厚さは10㎝程である。遺存状態は比較的良好である。玉石は、玉砂利遺構４と同様に、５

PL 3

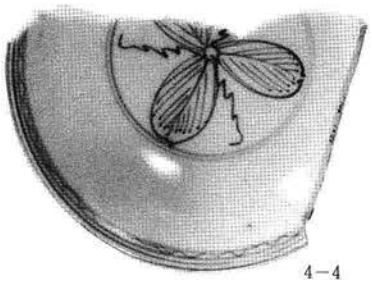
◀ 溝ベルト（北から）

▶ 東壁際土壙セクション

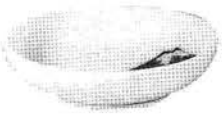


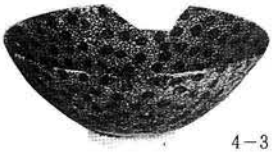
4－1

4－2



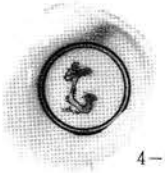
4－4





4－3

4－5



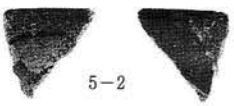
4－6

4－7

4－8

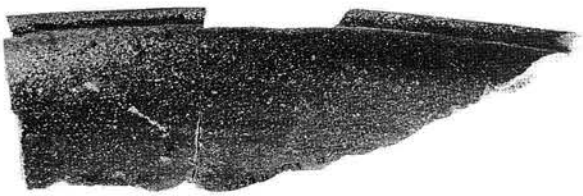
表土・攪乱出土遺物

5－1

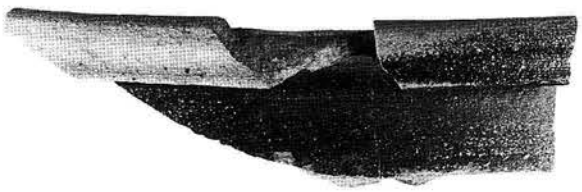


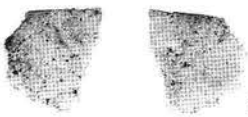
5－2

5－4



5－3





5－11

溝出土遺物

PL 5

5－5

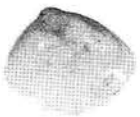
5－6

5－7

5－8

5－9

5－10



溝出土遺物

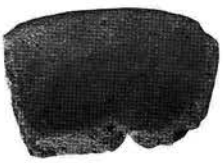
5－12

土壙出土遺物

5－13

5－14

5－15



5－16

5－17

面上出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高野昌巳
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
若宮大路周辺遺跡群（わかみやおおじしゅうへんいせきぐん）	鎌倉市小町（かまくらしこまち）一丁目81番18地点	204	242			1998.05.11 ～ 1998.05.28	48㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	土壙 溝	かわらけ 常滑 磁器	

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町一丁目198番6

例　言

1．本報は、鎌倉市雪ノ下一丁目198番６地点における個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2．発掘調査は、1998年６月８日から同年９月14日までの期間、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査対象面積は約120㎡である。
4．現地での調査体制は以下の通りである。

主任調査員　菊川英政
調　査　員　小林重子・高野昌巳
調査補助員　兼行佻枝・杉山知恵子・松原康子
諸星真澄・渡辺真之・橋本悠生
協力機関名　㈳鎌倉市シルバー人材センター
㈱鎌倉日本土木
㈱朝日航洋

5．整理作業および本書の作成は以下の分担で行なった。

遺物水洗　㈳シルバー人材センター
遺物実測　兼行佻枝・杉山知恵子・石元道子・山田明子
挿図作製　（遺構）小林重子
（遺物）菊川英政・石元道子・山田明子・柏崎祐充
図版作製　菊川英政・小林重子

6．本文は、第一章・１と第四章・２を菊川、第三章を兼行、その他を小林が執筆し、編集は小林が担当した。
7．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

現地調査および資料整理に際しては、次の諸氏・各諸機関から貴重な御教示を賜った。（順不同・敬称略）
吉田章一郎（青山学院大学名誉教授）、大三輪龍彦（鶴見大学教授）、三山　進（跡見学園女子大学名誉教授）、内藤浩之・松尾宣方（鎌倉国宝館）、河野真知郎（鶴見大学教授）、手塚直樹・斉木秀雄（鎌倉考古学研究所）、宗臺秀明（東国歴史考古学研究所）

本 文 目 次

第１章　調査の概要 …… 85
　第１節　調査地点の位置と環境 …… 85
　第２節　調査の経過と方法 …… 87
　第３節　層序と生活面 …… 87
第２章　検出遺構 …… 90
　第１面の遺構 …… 90
　第２面の遺構 …… 95
　第３面の遺構 ……100
　第４面の遺構 ……106
　第５面の遺構 ……115
　第６面の遺構 ……116
　第７面の遺構 ……121
第３章　出土遺物 ……123
　第１節　出土遺物と整理の概要 ……123
　第２節　出土遺物 ……123
第４章　まとめ ……175
　第１節　遺構の特徴と年代 ……175
　第２節　出土遺物について ……176

挿 図 目 次

図１　遺跡範囲と調査地点 …… 86
図２　調査区設定図 …… 88
図３　土層堆積状態図 …… 89
図４　一面全体図 …… 91
図５　溝１ …… 92
図６　溝２ …… 93
図７　建物１、礎板列、断面図 …… 94
図８　二面全体図 …… 96
図９　溝３・４・５ …… 97
図10　木組遺構１上層 …… 98
図11　木組遺構１完掘状況 …… 99
図12　建物２柱穴列　断面図 ……100
図13　三面全体図 ……101
図14　溝６ ……103
図15　建物３～５、断面図 ……104
図16　木組遺構２・３、土壙２・３ ……105
図17　四面全体図 ……107
図18　溝７検出状況 ……109
図19　溝７完掘状況 ……110
図20　建物６ ……111
図21　建物７、礎板列、断面図 ……112
図22　木組遺構４・５・７ ……113
図23　五面全体図 ……114
図24　柱穴列、断面図 ……115
図25　六面全体図 ……117
図26　溝８・９、溝概念図 ……118
図27　柱穴列・礎板列、断面図 ……119
図28　土塁、断面図 ……120
図29　柱穴列・７、礎板列７・８断面図 ……121
図30　七面全体図 ……122
図31　溝１・２および生活面上の遺物（１） …130
図32　溝１・２および生活面上の遺物（２） …131

図33　溝１・２および生活面上の遺物（3）……132
図34　かわらけ溜り１（1）……133
図35　かわらけ溜り１（2）……134
図36　溝３・４、木組遺構１の遺物（1）……135
図37　溝３・４、木組遺構１の遺物（2）……136
図38　溝６、木組遺構２の遺物……137
図39　かわらけ溜り３、土壙の遺物（1）……138
図40　かわらけ溜り３、土壙の遺物（2）……139
図41　溝７の遺物（1）……140
図42　溝７の遺物（2）……141
図43　溝７の遺物（3）……142
図44　溝７の遺物（4）……143
図45　溝７の遺物（5）……144
図46　溝７の遺物（6）……145
図47　建物６、かわらけ溜り、土壙の遺物（1）…146
図48　建物６、かわらけ溜り、土壙の遺物（2）…147
図49　溝８の遺物……148
図50　かわらけ溜り８、土壙、溝、溝状遺構の遺物…149
図51　柱穴、表面採集の遺物……150
図52　一面上包含層の遺物（1）……151
図53　一面上包含層の遺物（2）……152
図54　一面上包含層の遺物（3）……153
図55　一面上包含層の遺物（4）……154
図56　一面上包含層の遺物（5）……155
図57　一面上包含層の遺物（6）……156
図58　二面上包含層の遺物（1）……157
図59　二面上包含層の遺物（2）……158
図60　二面上包含層の遺物（3）……159
図61　三面上包含層の遺物（1）……160
図62　三面上包含層の遺物（2）……161
図63　三面上包含層の遺物（3）……162
図64　三面上包含層の遺物（4）……163
図65　三面上包含層の遺物（5）……164
図66　三面上包含層の遺物（6）……165
図67　四面上包含層の遺物（1）……166
図68　四面上包含層の遺物（2）……167
図69　四面上包含層の遺物（3）……168
図70　五面上包含層の遺物（1）……169
図71　五面上包含層の遺物（2）……170
図72　六面上包含層の遺物（1）……171
図73　六面上包含層の遺物（2）……172
図74　六面上包含層の遺物（3）……173
図75　六面上包含層の遺物（4）……174
図76　遺構変遷図……180
図77　本遺跡と周辺の遺跡……181

図　版　目　次

図版１　一面の遺構……185
図版２　一面の遺構……186
図版３　二面の遺構……187
図版４　二面の遺構……188
図版５　三面の遺構……189
図版６　三面の遺構……190
図版７　四面の遺構……191
図版８　四面の遺構……192
図版９　四面の遺構……193
図版10　五面の遺構……194
図版11　六面の遺構……195
図版12　六面の遺構……196
図版13　七面の遺構、他……197
図版14　遺物出土状況（漆椀・皿、他）……198
図版15　遺物出土状況（漆椀・皿、他）……199
図版16　遺物出土状況（漆椀・皿、他）……200
図版17　遺物出土状況（漆椀・皿、他）……201
図版18　遺物出土状況（漆椀・皿、他）……202
図版19　出土遺物（漆器、木製品）……203
図版20　出土遺物（金属製品、他）……204
図版21　自然遺物（貝）……205
図版22　自然遺物（鳥・獣・魚骨）……206
図版23　自然遺物（種子、他）……207

第１章　調査の概要

第１節　調査地点の位置と環境

若宮大路周辺遺跡群は鎌倉中央低地の北半分を占め、鶴岡八幡宮から由比ヶ浜に至る現在の若宮大路を中軸として、その東西両側を含む広い範囲（図１ａ網掛け部分）を指している。現況地形図では遺跡の北辺中央（八幡宮社頭）で海抜10m、南辺中央（下馬交差点）で海抜４m、若宮大路中央の二の鳥居付近で海抜６m、遺跡の東辺および西辺の中央で海抜８m前後を計測し、北から南へ傾斜するとともに東西両側からも若宮大路に向かって僅かに傾斜する地形となっている。ところが、これまでの調査成果から中世地山とされる基盤層とその海抜値を調べると、若宮大路の東側一帯（滑川右岸からＪＲ鎌倉駅付近）では薄い黒褐色粘土層下に黄褐色の河成砂層が堆積する海抜７～９m程の微高地となっており、若宮大路の西側一帯のうち、北西部は扇ヶ谷川の流路に沿って厚い黒褐色粘土層が堆積する海抜 5.5～6.5m程の低湿地、南西部は海岸砂丘の一部が御成小学校の正門付近に張り出し校庭部分で海抜 6.0～6.5m程の後背湿地となっていたことが判った。また、遺跡の南辺中央（下馬交差点）からＪＲガード付近にかけては海抜2.5～3.0mと最も海抜値が低く、滑川河口から深く湾入した潟湖あるいは低湿地となっていたようである。

さて、調査地点は遺跡範囲の北西部にあり、若宮大路と扇ヶ谷川とのほぼ中間に位置（図１ｂ参照）している。東側には北条時房・顕時邸跡とされる一画があり、北側山裾には源頼朝の入府以前から存在したと伝えられる「窟堂」（巌窟不動）がある。この窟堂については『吾妻鏡』に火災や事件の記事が頻繁に見え、文治四年（1188）正月一日には佐野太郎基綱の窟堂下の宅が焼亡して人屋数十宇が罹災したのをはじめ、承久二年（1220）正月二十九日と三月九日に窟堂辺りが焼け、進士判官代（橘隆邦）と工藤右衛門尉の家の他に民居数十宇が延焼している。更に、寛喜元年（1229）十二月二十五日に窟堂下辺りが焼け、正嘉二年（1258）正月十七日には甘縄の秋田城介（安達）泰盛宅から出火した炎が南風に煽られて窟堂とその辺りの民屋を焼失し、弘長三年（1263）四月七日には地蔵堂（窟堂の山の中壇にあったという松源寺の前身）に隠れていた群盗を生け捕るために窟堂の辺りが騒動したとある。また、建長三年（1251）十二月三日に小町屋や売買設けを許可した「亀谷辻」、文永二年（1265）三月五日に町屋免許の地とした「武蔵大路下」もさほど遠からぬ場所と考えられ、調査地点を含む一帯は武家屋敷と民家が雑居する繁華な地域であったと推察できる。

ところで、若宮大路と今小路を結ぶ東西の路は、貞享年間（1684～87）に描かれた「寿福寺領地図」（『鎌倉の古絵図』・鎌倉国宝館）に３本あり、北から「巌窟堂路」「綾小路」「小町路」と記されている。「巌窟堂路」は先の窟堂前の路で、『鎌倉市史／総説編』では八幡宮西南角から寿福寺門前に抜け仮粧坂に至るこの道筋を武蔵大路に比定している。また、「綾小路」は調査地点の南側を通る路、「小町路」は今小路から若宮大路二の鳥居前に出る路である。これら３本の路の名は中世史料になく、現在も使われていない。なお、調査地点の南側を若宮大路と平行し南北に通る路は、明治四年（1871）の「鶴岡八幡宮境内絵図」（『鎌倉の古絵図』・鎌倉国宝館）や明治十五年（1882）の陸軍部測量図の「雪之下村」を見ると八幡宮西南角から綾小路までしかなく、それ以南の通称「小町通り」は横須賀線の開通した明治二十二年（1889）以後に通じた路と判る。この頃、路の両側は田んぼばかりで、観光客相手の旅館や土産物屋は若宮大路沿いに数軒あったに過ぎない。段葛ももとは松や梅の他えぼた等の雑木が生えていたが、日露戦争後に奇麗にし桜を植えた（『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会）のだという。調査地点はこうした立地と環境の中にある。

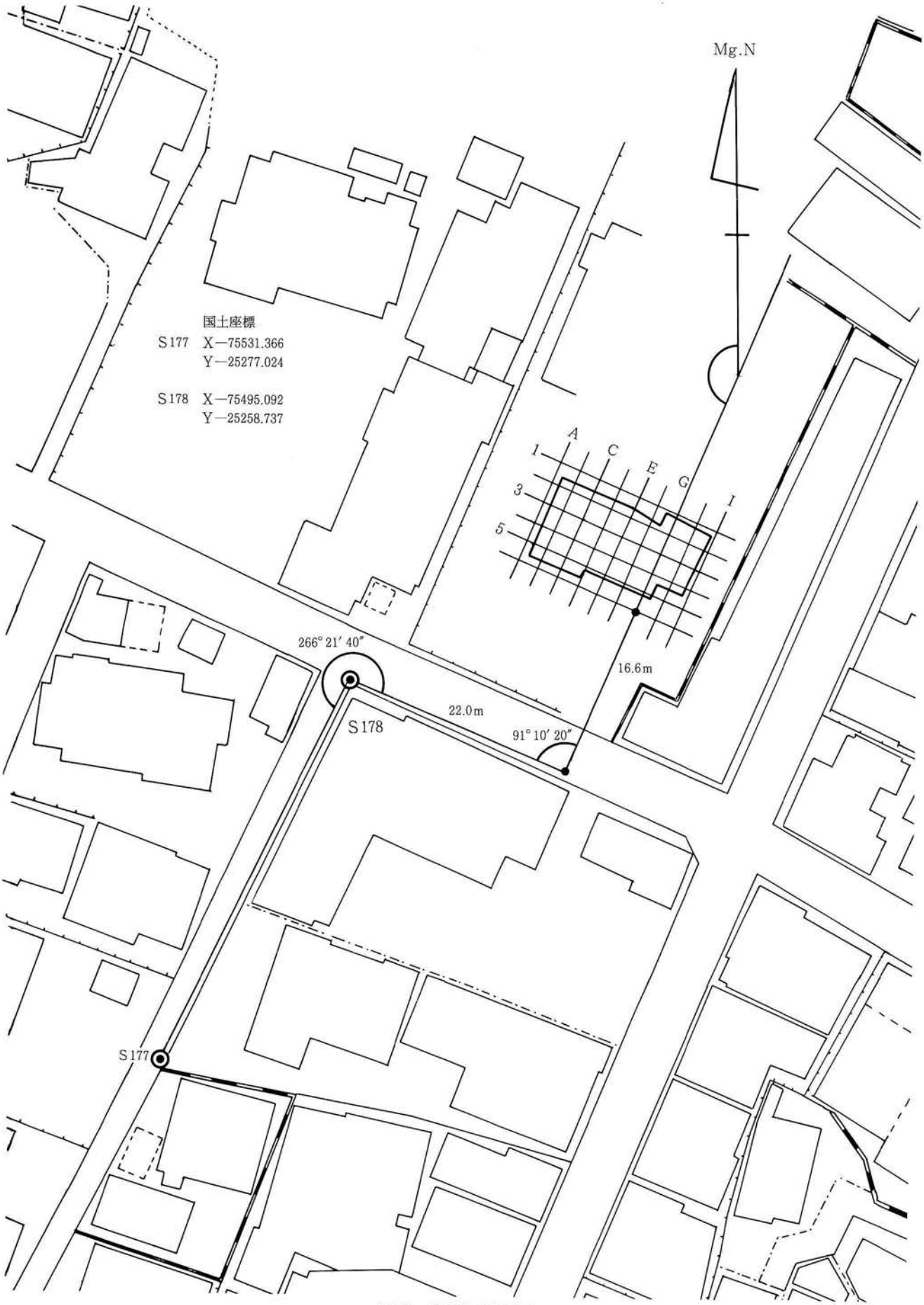
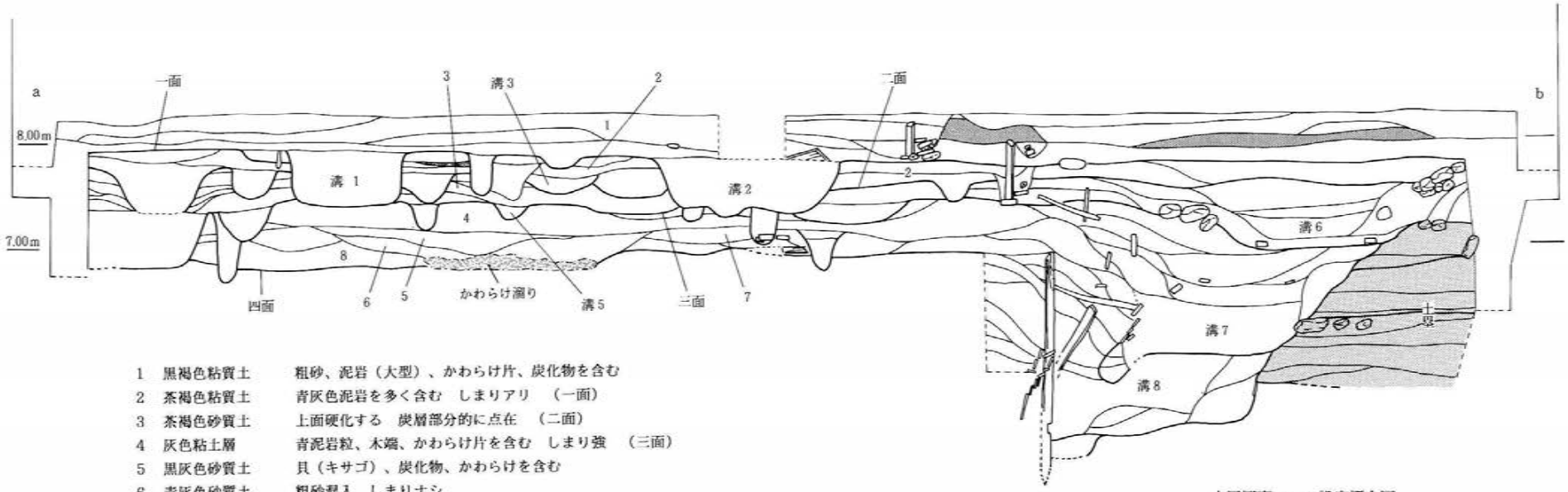
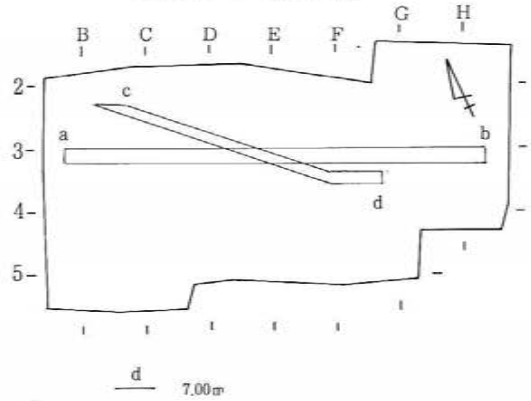

Mg.N
国土座標
S177 X—75531.366
Y—25277.024
S178 X—75495.092
Y—25258.737
A
C
E
G
I
1
3
5
266° 21′ 40″
22.0m
S178
91° 10′ 20″
16.6m
S177

図2　調査区設定図



1 黒褐色粘質土 粗砂、泥岩（大型）、かわらけ片、炭化物を含む
2 茶褐色粘質土 青灰色泥岩を多く含む しまりアリ （一面）
3 茶褐色砂質土 上面硬化する 炭層部分的に点在 （二面）
4 灰色粘土層 青泥岩粒、木端、かわらけ片を含む しまり強 （三面）
5 黒灰色砂質土 貝（キサゴ）、炭化物、かわらけを含む
6 青灰色砂質土 粗砂混入 しまりナシ
7 茶褐色土 かわらけ粒、炭化物を含む
8 灰褐色粘質土 青泥岩粒、木片を含む
9 黒褐色砂質土 泥岩粒、貝殻粒、炭（多量）に含む （四面）
10 暗灰褐色砂質土
11 泥岩版築層
12 暗茶褐色粘質土 炭を多く含む
13 暗茶褐色粘土 木片を少量含む しまりナシ
14 粗砂層 貝を含む （五面）
15 茶褐色粘土 多量のハシを含む 木器層を挟んでいる
16 灰褐色砂層 微量の木片を含む （六面）



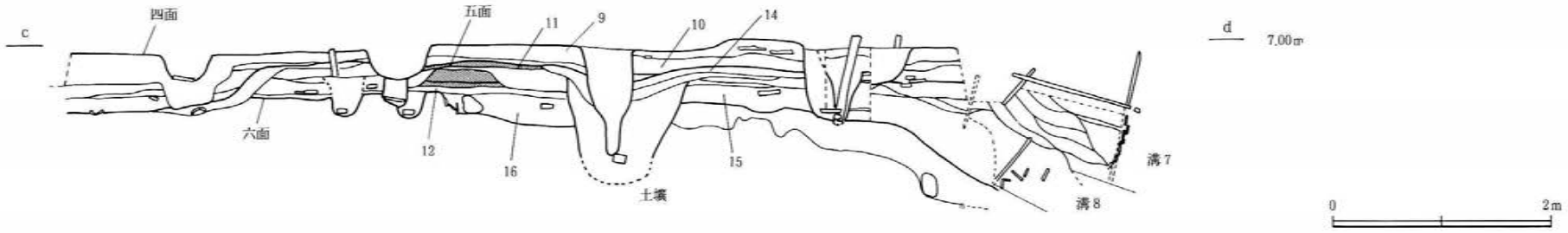


図3 土層堆積図

第２章　検出遺構

第１面の遺構（図４）

重機での表土削除後、30cm程堆積する灰色粘土層（田んぼ土）を取り除き黒灰褐色砂質土層を検出した。層中からはかわらけの破片、瀬戸製品が多く出土しており中世包含層であることを確認し、30cm程掘り下げ遺構の確認および茶灰褐色粘質土の生活面を検出し一面とした。一面の海抜高は約7.8mである。検出した遺構としては溝２条、通路状遺構、かわらけ溜り、柱穴列、礎板列などがある。

溝１（図５）；調査区西側Ｃラインで検出した。規模は上幅が100cm～140cm、底部幅65cm～90cm、確認面からの深さ約43cmである。底部海抜高は北端で7.53m、南端で7.41mを測り北から南に流れ、南北両端は調査区外に延びる。底面には土台角材を配した痕跡が見られ、木組み構造の溝であったと思われる。覆土は大半を暗青灰色砂質土が占めており、下層には腐蝕土および粗砂を含む砂層が堆積する。

溝２（図６）；調査区ほぼ中央Ｅラインで検出した。溝１の東肩から溝２の西肩までおおよそ230cmの距離である。規模は掘り方の上幅で150cm～160cm、底部幅100cm～120cm、確認面からの深さは約50cmである。底面の海抜高は北端で7.4m、南端で7.3mを測り、北から南に流れる。覆土は上層に暗灰褐色砂質土、中層に明茶褐色腐蝕土、下層に黒褐色粘質土が堆積している。

底部にはホゾ穴をもつ土台角材が２本平行に設置されており、上層からは横板に使用した板材を２枚確認した。土台角材の芯々幅は約50cmを測り溝本体の規模が幅50cm、深さ50cm以上の木組み構造の溝であることが判った。なお、土台角材に穿たれたホゾ穴は全て貫通している。

土台角材、横板の寸法は以下の通りである。

〈A〉土台角材：長さ395cm　幅7.0cm　厚さ3.5cm　ホゾ穴8.0cm×4.0cm　ホゾ間隔32cm～40cm
〈B〉土台角材：長さ412cm　幅7.0cm　厚さ4.0cm　ホゾ穴8.0cm×4.0cm　ホゾ間隔約40cm
〈C〉横　　板：長さ190cm　幅15cm　厚さ2.0cm
〈D〉横　　板：長さ197cm　幅24cm　厚さ2.0cm

通路状遺構（図７）；溝２より東側は北に青砂層面、建物の柱の沈下防止の為の板材（礎板）が多く見られ、南側にはかわらけ溜り１が広がる状況であった。その中央をやや粗ではあるが中小の泥岩で版築された範囲が横断しており、版築範囲の南北には木組みの土留めが見られ通路状遺構として捉え調査した。

通路状遺構は、ほぼ３～４ライン間を調査区東壁から西に４m程延び消滅し、幅は良好な部分で約80cm、厚さは20cm弱であった。木組みの土留めは良好な部分で、長さ26cm～49cm、幅８cm～13cm、厚さ0.6cm～1.0cmであり、おおよそ20cmの間隔で板留めの杭で止められていた。

建物１（図７）；調査区東側北壁付近で形状および配置に統一性のある板を検出した。間隔は約180cmを測り、板材上面の海抜高は7.92m～8.03mでほぼ平均した高さにある。建物の柱の沈下防止の為に据えられる礎板と考え掘立柱建物として扱った。建物は北に広がる可能性が強く、規模は明確には掴めないが２間×１間以上のものであろう。また調査区東壁沿いには南北方向に長さ99cm、幅４cm、厚さ2.5cmの横板と長辺7.5cm、短辺６cm、長さ28cmの柱（柱１）が検出されており、これらは建物の軸線とは若干のズレが生じる。建物に帰属する施設の一部または部屋の間仕切りとも考えられるがはっきりしたことは判らない。

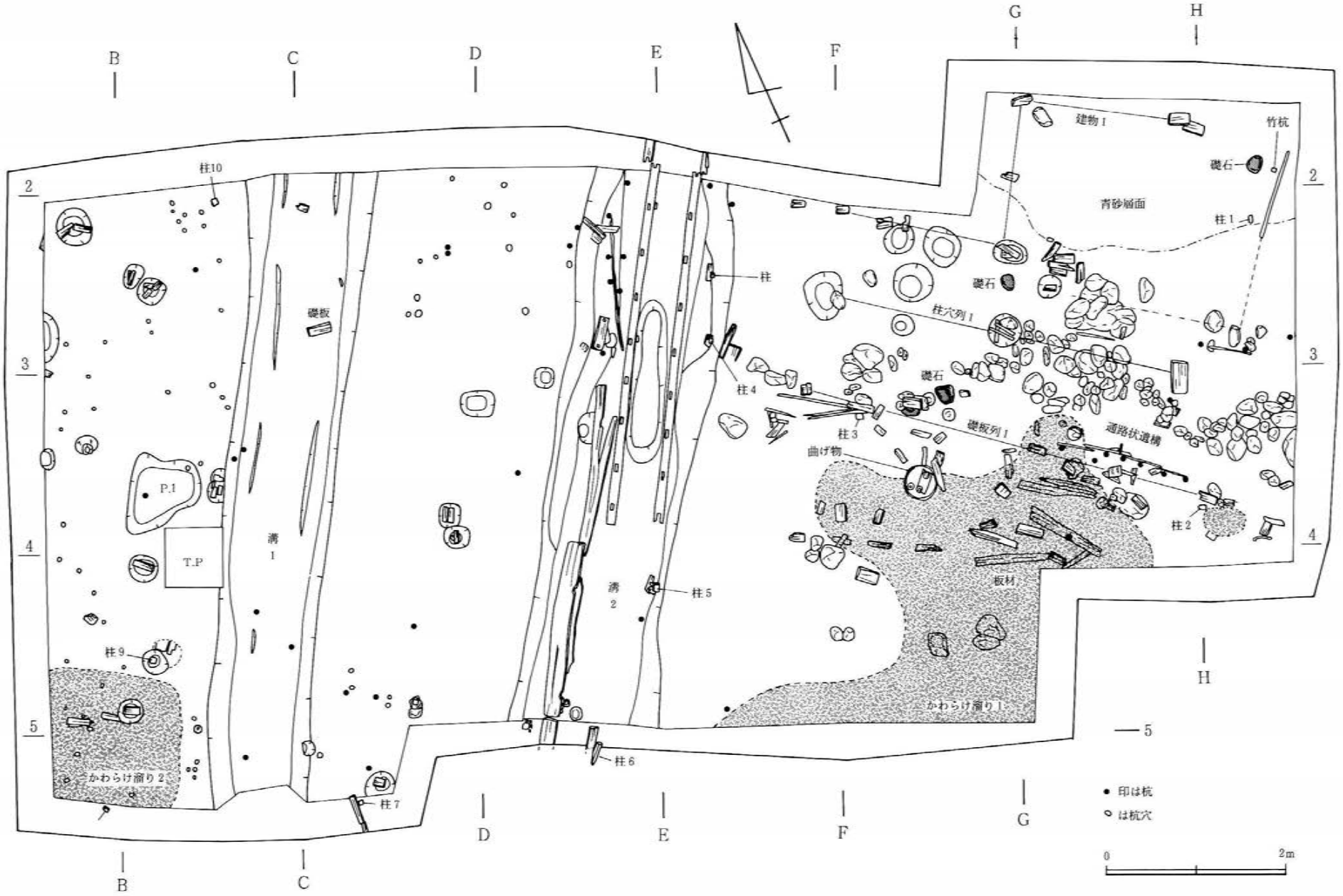

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
柱10
建物1
竹杭
礎石
青砂層面
柱1
柱
礎石
柱穴列1
礎板
柱4
礎石
柱3
礎板列1
通路状遺構
曲げ物
P.1
T.P
溝1
溝2
柱5
柱2
板材
柱9
かわらけ溜り1
かわらけ溜り2
柱6
柱7
印は杭
は杭穴
0
2m

図4　一面全体図

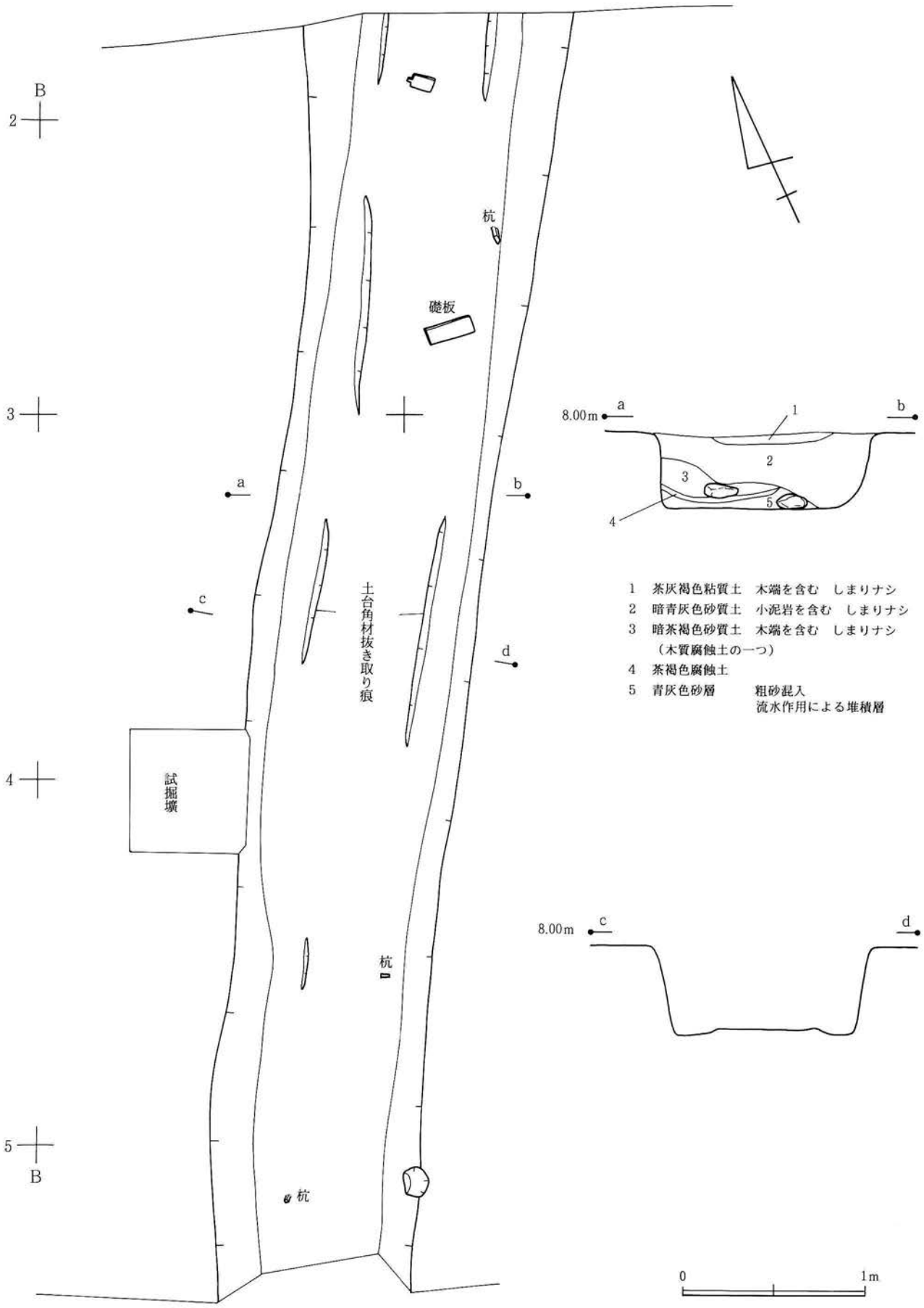

B
2
3
4
5
B
杭
礎板
a
b
c
d
土台角材抜き取り痕
試掘壙
杭
杭
8.00m
a
b
1
2
3
4
5
1　茶灰褐色粘質土　木端を含む　しまりナシ
2　暗青灰色砂質土　小泥岩を含む　しまりナシ
3　暗茶褐色砂質土　木端を含む　しまりナシ
（木質腐蝕土の一つ）
4　茶褐色腐蝕土
5　青灰色砂層　粗砂混入
流水作用による堆積層
8.00m
c
d
0
1m

図5　溝1

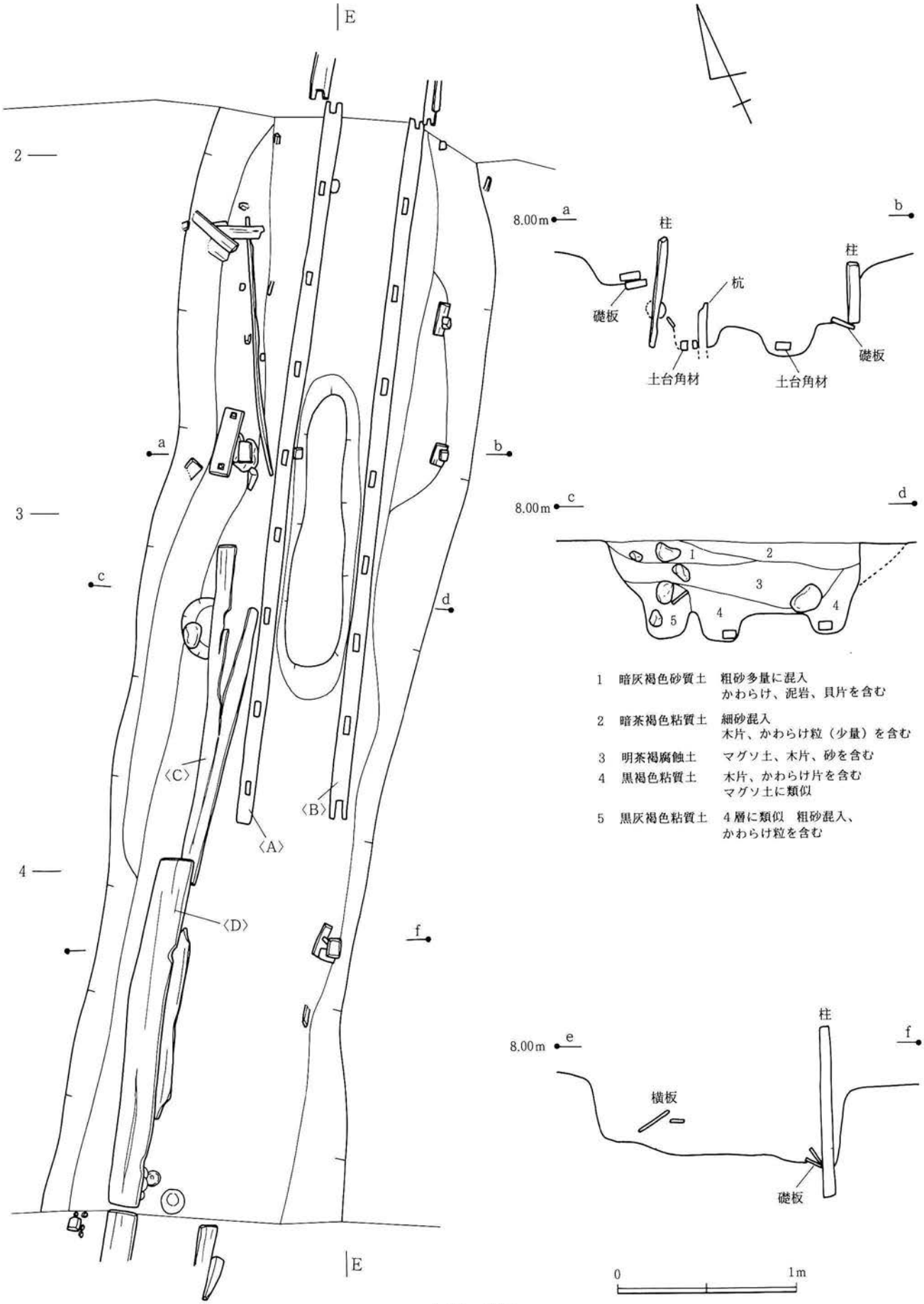

E
2
3
4
a
b
c
d
f
〈A〉
〈B〉
〈C〉
〈D〉
8.00m
柱
杭
礎板
土台角材
1 暗灰褐色砂質土 粗砂多量に混入 かわらけ、泥岩、貝片を含む
2 暗茶褐色粘質土 細砂混入 木片、かわらけ粒（少量）を含む
3 明茶褐腐蝕土 マグソ土、木片、砂を含む
4 黒褐色粘質土 木片、かわらけ片を含む マグソ土に類似
5 黒灰褐色粘質土 4層に類似 粗砂混入、かわらけ粒を含む
e
横板
0
1m

図6　溝2

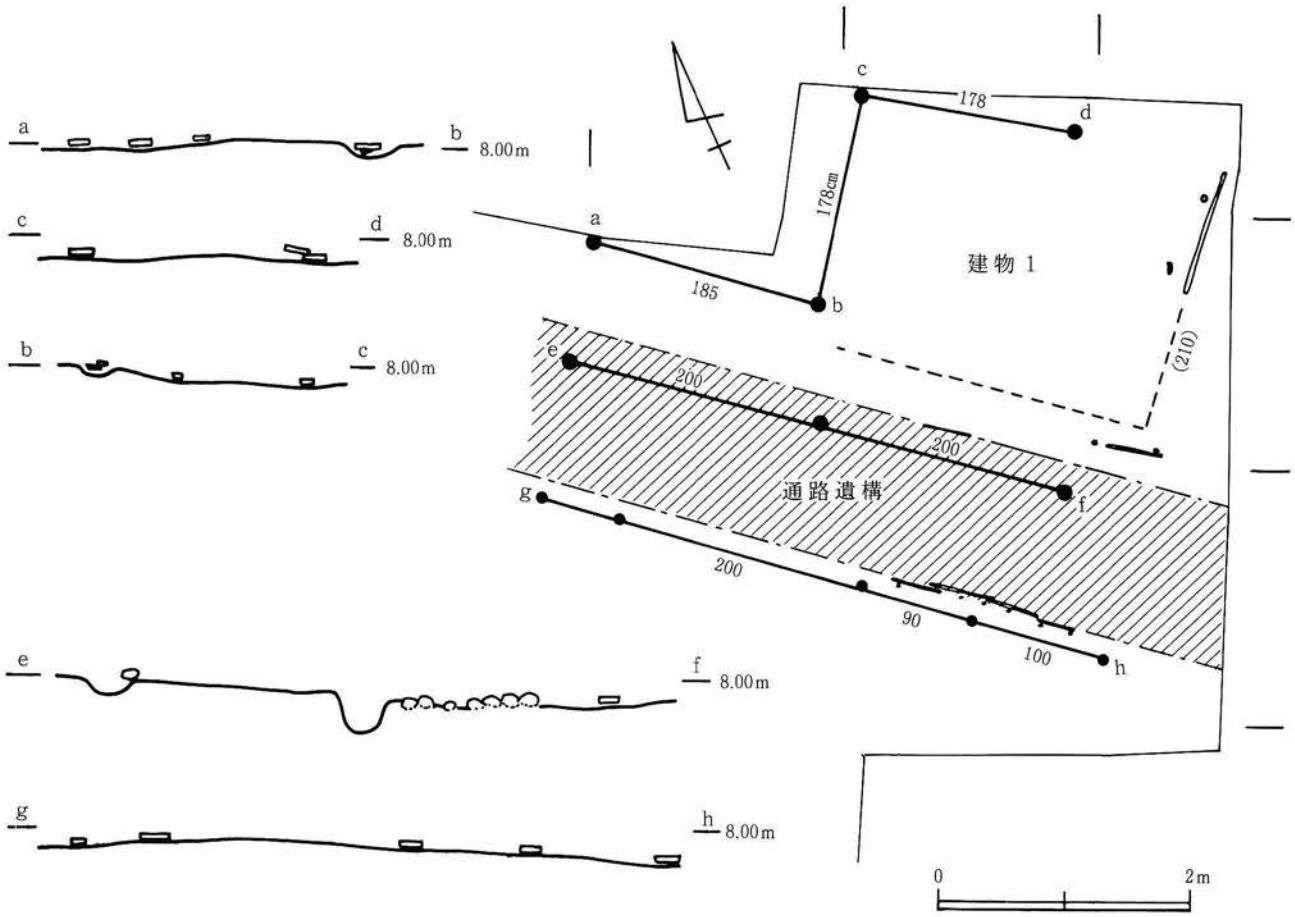


図7　建物1、柱穴列1、礎板列1、断面図

柱穴列1（図7）；通路状遺構北側に2口の柱穴と柱の沈下防止の為の礎板を確認した。間隔は200cmと等間隔であり、礎板も掘り方をもっていたと考え、あえて柱を据えた穴の並びとした。柱穴底部および礎板上面の海抜高は7.8m～7.7mと平均した高さであるどのような施設であったかは不明である。

礎板列1（図7）；通路状遺構の南際に沿う形で、調査区東から溝2に向かい同一線上に並ぶ礎板を検出した。礎板間隔は不均衡ではあるが、礎板上面の海抜高が7.92m～8.03mと平均した高さであること、並びの方向性、背後のかわらけ溜り等の検出状況から見て、何らかの遺構に伴う礎板と考え礎板列とした。礎板の寸法は幅7cm～12cm、長さ13cm～25cm、厚さ1.5cm～4cmと規格性をもたない。

かわらけ溜り1；調査区南東部、通路状遺構の南側で検出した。確認できた範囲は東西に4.5m、南北に3.5mで南端が調査区外に延びるため全体規模は不明である。短期間に廃棄されたものと考えられる。かわらけの下からは箸、折敷、曲げ物などの木製品が多く検出されている。確認海抜高は7.86mである。

かわらけ溜り2；調査区南西隅で検出した。確認できた範囲は東西方向に西壁から140cm、南北方向に南壁から150cmであり南辺、西辺は調査区外に延びるため全体規模は不明である。出土状況は完形品は少なく破片が大半を占めており、堅く叩き締め版築されたような状態である。

第２面の遺構（図８）

一面構築土である茶褐色粘質土を20㎝程掘り下げると、部分的に広がる炭層面が見られた。炭層を剥がしつつ遺構の検出を行い、海抜高7.7ｍ～7.8ｍで遺構確認をし二面とした。生活面を成す土質は調査区の西と東では若干異なり、西側は貝殻粒を混入する茶褐色砂質土、東側では貝粒を含む暗灰茶褐色粘質土となるがいずれもしまりをもっている。検出した遺構は溝２条、木組遺構（囲炉裏）、柱穴が挙げられる。

溝３（図９）；調査区中央やや西寄り、Ｄライン上で検出した。規模は上幅65㎝～80㎝、底部幅50㎝～60㎝、確認面からの深さは18㎝～25㎝と浅い溝である。断面は逆台形であり、底部海抜高は北端で7.43ｍ、南端で7.32ｍを測り、一面で検出した溝１とほぼ平行し北から南に流れる。底部からは土台角材および角材を抜き取った痕跡も見られず素掘りの溝と思われる。覆土は木片を含むしまりのない茶灰色砂質土で埋められている。

溝４（図９）；溝３の南西に位置する。上幅30㎝、底部幅16㎝、確認面からの深さ32.9㎝～38.8㎝であり、確認できた長さは２ｍで南端は調査区外に延びるため全長は不明である。底部海抜高は北端で7.26ｍ、南端で7.19ｍを測り、北から南に流れる。また、溝内東際に２本の杭が確認されており、北側の杭の規模は長辺８㎝、短辺4.5㎝、長さ56.5㎝、南側の杭は長辺４㎝、短辺３㎝、長さ53.5㎝であり、杭の間隔は85㎝である。覆土は木片、腐蝕土が混入する暗灰色粘質土で２層に分かれる。類似する覆土ではあるが上層に腐蝕土が多く混入している。

建物２（図12）；溝３の西側で検出した。やや強引ではあるが溝１にかかる部分は土層観察ベルト北側で礎板が確認されている事から、削平されたものと考え、１間×２間の掘立柱建物として捉えた。

柱穴間隔は185㎝～190㎝であり、確認面からの深さは35㎝～40㎝と平均している。なお、柱穴底部には礎板は設置されていなかった。

木組遺構１（図10，11）；調査区南西隅で検出した。全体に薄い炭層が方形に広がり、南辺と東辺に上部焼失の板材を発見した。形状は一辺130㎝の方形と考えられ、確認面からの深さは約20㎝、底部の海抜高は約7.46ｍを測る。炭層の上には漆器皿、かわらけを入れた底なしの曲げ物が点在し、覆土は貝殻を少量含む暗茶褐色土と暗灰褐色粘土である。板材は、長さは20㎝～30㎝、幅５㎝～10㎝、厚さ0.5㎝の規模のものが20数枚Ｌ字状に並んでおり、板材の下端は平坦であり上部は焼失している。

この遺構は形状からみて囲炉裏と推察できる。しかし覆土からは炭化物や焼土といった火所としての使用痕は見られず、木組内に鉢形手焙りを設置して使用する形態のものとも思われるがはっきりしたことは判らない。

また、底部北側からは、長辺125㎝、短辺110㎝、確認面からの深さ20㎝～25㎝の方形の掘込みが見られた。覆土は木器層と貝殻層に分かれており、木器層は多量の箸、折敷片、木っ端で占められ、貝殻層は殆どがハマグリで充填していた。一時期囲炉裏として使用し、作り替えのため大量に出たゴミを投げ入れたものであろうか。

ピット２（図29）；調査区北東で検出した。直径約90㎝、確認面からの深さ約30㎝を測る。上場周縁に20㎝大泥岩が見られるが、泥岩版築面の流れと思われる。また、内部から出ている杭は溝６に伴う束柱の頭が露呈したものである。

泥岩版築面；調査区東壁沿いに検出した。確認幅は50㎝～95㎝、南北に延びており20㎝～30㎝大の泥岩で疎ではあるものの構成されている。確認海抜高7.6ｍを測り、調査区中央付近まで泥岩が点在している。

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
礎石
板材
礎板
泥岩版築面
P.2
P.15
P.17
P.19
土層観察ベルト
P.14
P.12
P.13
P.11
P.8
T.P
P.7
P.3
建物2
溝3
溝4
木組遺構1
P.27
P.26
P.28
P.25
• 印は杭
0
2m

図8　二面全体図

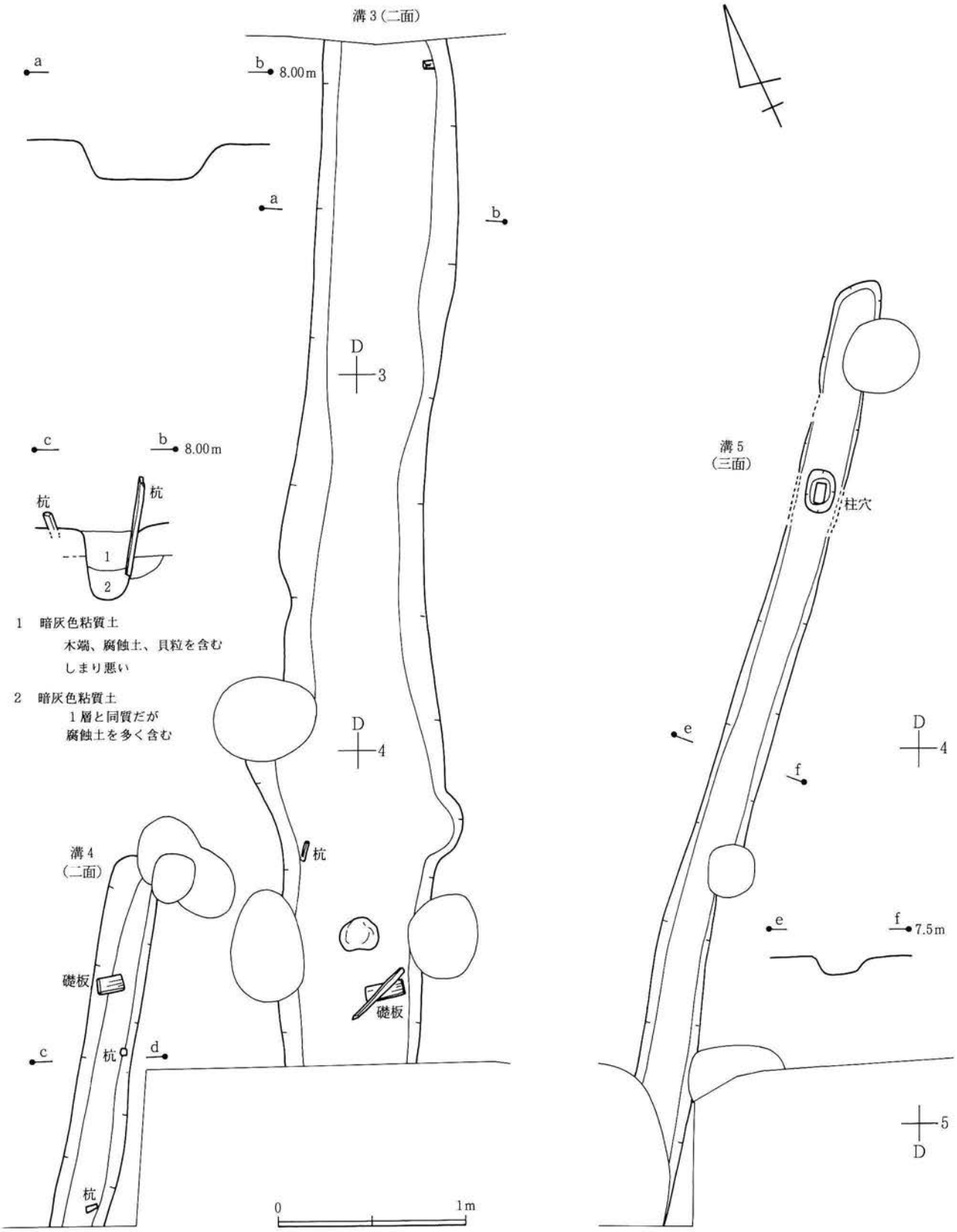
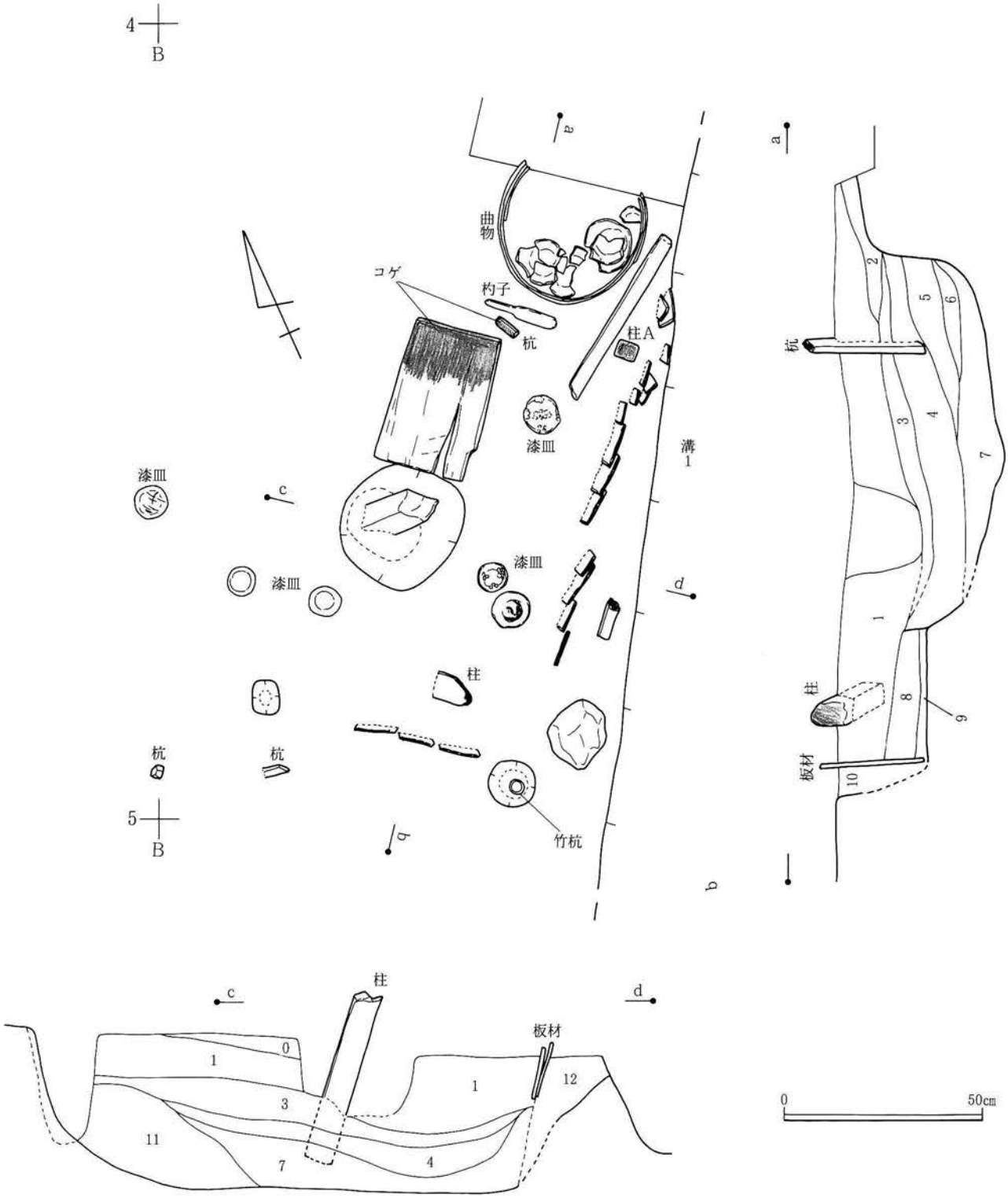
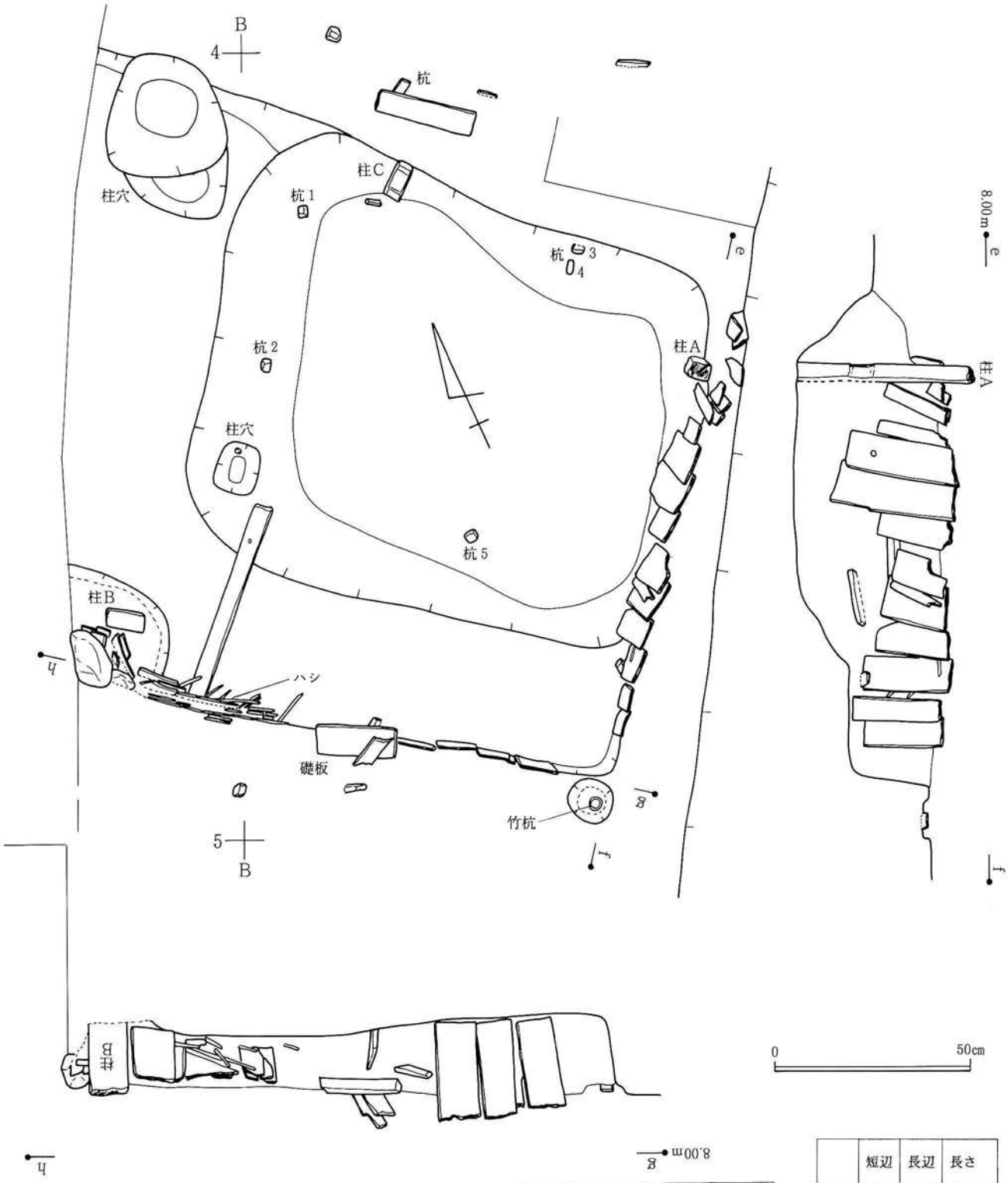

溝3（二面）
a
b
8.00m
a
b
D
3
c
b
8.00m
杭
杭
1
2
1　暗灰色粘質土
木端、腐蝕土、貝粒を含む
しまり悪い
2　暗灰色粘質土
1層と同質だが
腐蝕土を多く含む
D
4
溝4
（二面）
杭
礎板
礎板
c
杭
d
杭
0
1m
溝5
（三面）
柱穴
e
D
4
f
e
f
7.5m
5
D

図9　溝3、4、5



0	暗褐色土	木端、貝殻片を含む　硬化する	
1	暗茶褐色土	貝殻（ハマグリ、キサゴ）を少量含む　しまりナシ	
2	暗灰褐色土		
3	木器層	多量のハシ、折敷片、木端を含む	
4	貝殻層	多量のハマグリで構成、キサゴを微量に含む	
5	1層と同		
6	4層と同		
7	1層と同		
8	暗茶褐色土	1層と類似　貝殻ナシ　しまりナシ	
9	木質腐蝕土		
10	8層と類似		
11	暗灰褐色砂質土	凝灰岩ブロック＋木質腐蝕土	
12	茶褐色土	やや砂質　しまりナシ	

図10　木組遺構1（検出状況）



	短辺	長辺	長さ	備考
柱A	4.0	6.0	(45)	上端部コゲ
B	5.0	10	(20)	〃
C	4.5	9.5	22	上端面凹状

（単位：cm）

	短辺	長辺	長さ
杭1	2.5	3.0	(7.0)
2	3.0	3.0	(5.0)
3	1.5	3.5	(13.0)
4	1.5	4.0	(16.0)
5	3.0	3.0	(6.0)

図11　木組遺構1（完掘状況）

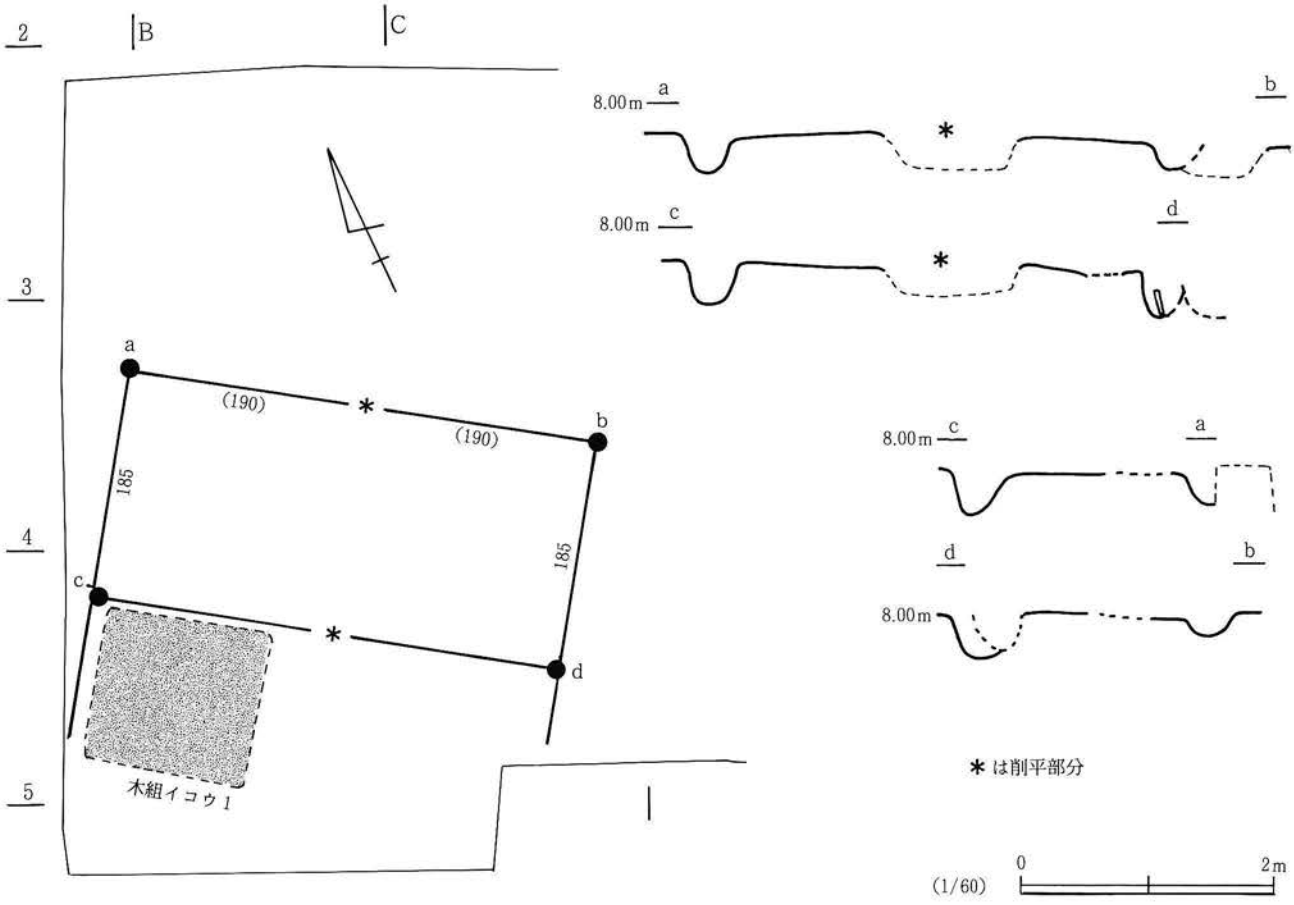


図12　建物２、断面図

第３面の遺構（図13）

２面から約20cmほどを掘り下げ暗茶褐色土の整地層を検出した。柱穴、溝等の遺構を確認し、３面とした。海抜高は7.45mである。検出遺構は溝、掘立柱建物、木組み遺構、土壙が挙げられる。

溝５（図９）；調査区西寄りＣ・Ｄライン間で検出した。上幅30cm、底部幅16cm、確認面からの深さは2.1cm～14.2cmである。確認できた長さは4.9m、南端は土壙に切られている。溝として捉えたが深さも浅く、溝内から礎板を伴う柱穴が確認されており、建物内の間仕切り塀の掘込みの可能性も考えられる。

溝６（図14）；調査区東端で検出した。規模は上幅180cm、確認面からの深さは30cm～40cm、南北端は調査区外に延びる。

底部からは土台角材、梁、束柱を確認し、木組み構造が若宮大路側溝と同様の箱形のものであったと推定できる。土台角材の下には30cm大の泥岩が沈下防止のための礎石として設置されている。土台角材の規模は長さ390cm～410cm、幅8.5cm、厚さ４cmであり、おおよそ50cm間隔に８cm×４cmのホゾ穴が穿たれている。平行に配置された土台角材の芯々間は約1mであり、溝本体の幅が1mであったことがわかる。梁として使用している材は規格を持たず、設置間隔はまばらである。また、ホゾに残る束柱の長さから推して溝の深さは50cm以上であったと思われる。溝覆土は殆ど砂質土と腐蝕土で占められていた。

溝本体の西に見られる控え材は、溝６に伴うものではなく四面検出の溝７に伴う控え材である。

建物３（図15）；調査区中央西寄りで検出した。東西に２間、南北に２間の規模を有する。柱間隔はほぼ200cmで統一されており、半数の柱穴には柱の沈下を防ぐ礎板が設置されている。礎板上面の海抜高は7.2m～7.3mとほぼ平均しているが、柱穴の深さは13cm～28cmと幅がある。

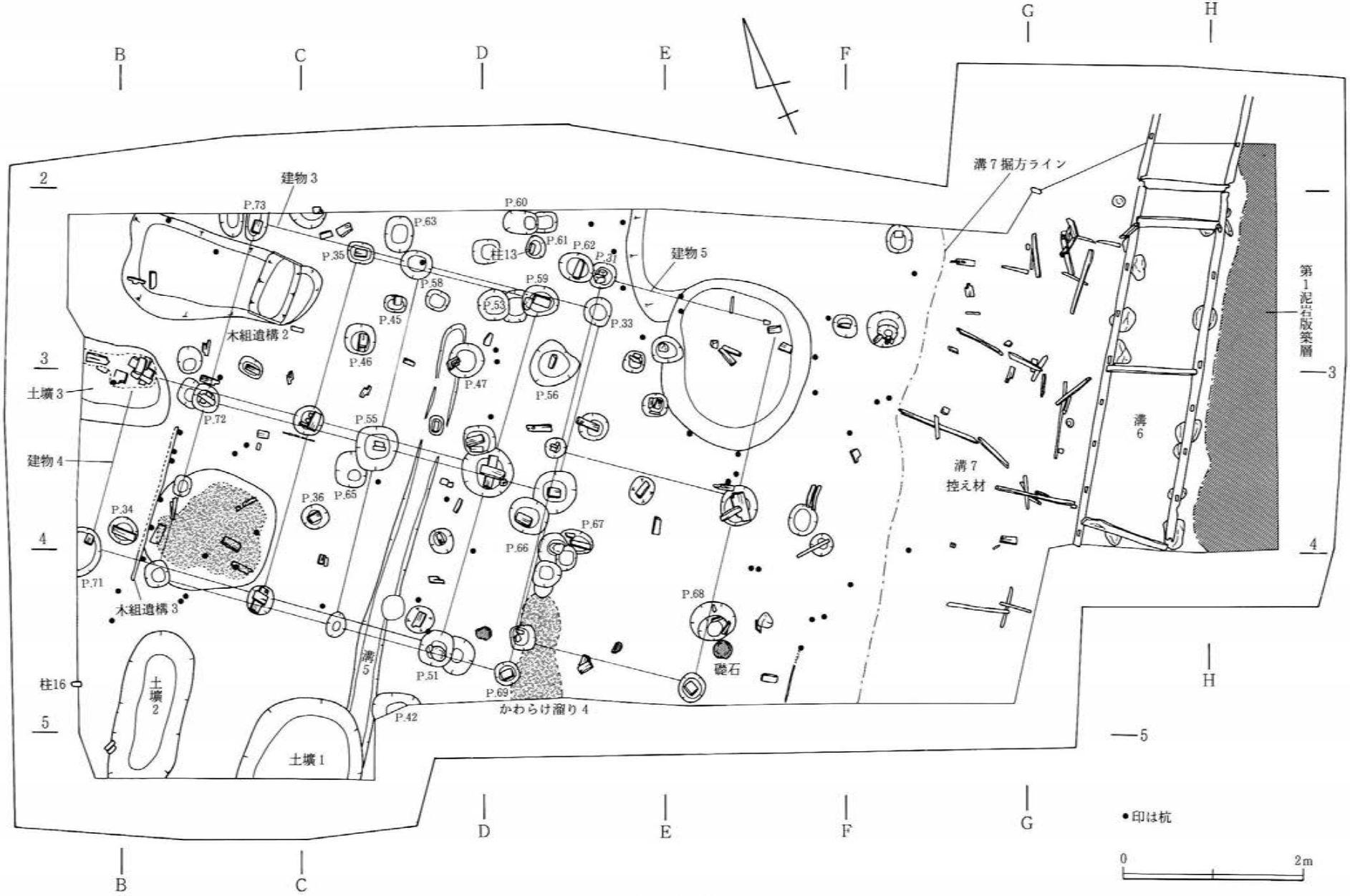

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
建物3
建物4
建物5
土壙3
柱13
柱16
木組遺構2
木組遺構3
土壙1
土壙2
溝5
溝6
溝7
溝7掘方ライン
溝7控え材
第1泥岩版築層
かわらけ溜り4
礫石
P.31
P.33
P.34
P.35
P.36
P.42
P.45
P.46
P.47
P.51
P.53
P.55
P.56
P.58
P.59
P.60
P.61
P.62
P.63
P.65
P.66
P.67
P.68
P.69
P.71
P.72
P.73
●印は杭
0
2m

図13　三面全体図

建物４（図15）；上記の掘立３に重なる形でやや東よりに検出した。東西に２間、南北に２間の規模である。全ての柱穴には礎板が設置されており、柱間隔は微妙なズレはあるものの200㎝（６尺６寸）を測る。礎板上面の海抜高は7.35ｍ～7.25ｍで10㎝前後の高低差はあるものの概ね平均している。

建物５（図15）；調査区ほぼ中央で検出した。１間×２間と小屋的な要素の強いものであり、建物４に付随するものとも捉えられるが、建物として扱った。底部には柱の沈下防止、高さ合わせのための礎板及び礎石が設置されており、柱間隔は200㎝～210㎝、礎板上の海抜高は約7.2ｍと平均している。

木組遺構２（図16）；調査区北西Ｂ-２グリッド付近で検出した。長辺220㎝、短辺70㎝、確認面からの深さ13㎝の隅丸長方形の浅い遺構の一部である。平面形状は短辺40㎝、長辺70㎝、確認面からの深さ約14㎝の緩やかに落ち込む隅丸長方形、南北辺に長さ35㎝～36㎝、幅15㎝～17㎝、厚さ２㎝の板が配置されている。板の確認海抜高は7.42m～7.45m、底部海抜高は7.23mである。覆土は２層に分かれ、上層は木片、かわらけ片を若干含む茶褐色粘質土、下層は腐植土である。用途については不明である。

木組遺構３（図16）；調査区西端、Ｂ-４グリッド付近に位置する。南北方向に長さ178㎝、幅13㎝、厚さ２㎝の横板を検出し木組み遺構とした。東面には横板を止める為の細杭が６本見られ、ほぼ35㎝間隔で設置されている。杭の規模は長辺2.5㎝、短辺1.5㎝、長さ約20㎝である。また、横板の西面は全体に火を受けた痕跡がみられた。木組は単独であり用途不明である。

かわらけ溜り３（図16）；木組み遺構３に東接して検出した。径約130㎝、確認面からの深さ40㎝の不正円形である。底部海抜高は7.05mである。上層に薄く炭層が広がり、その下からかわらけが底部まで充填していた。かわらけは殆どが完形品であり、一括廃棄されたものと思われる。出土したかわらけは殆どが橙色を呈し、形に歪みをもっている。

かわらけ溜り４；調査区中央南端で検出した。範囲は東西約50㎝、南北に110㎝であるが南端は調査区外に延びる。確認海抜高は7.25mである。明確な掘込みはなく、空閑地に一括廃棄されたものと思われる。

土壙１（図16）；調査区南西で検出した。南側は調査区外に広がっており、確認できた規模は東西軸で約120㎝、南北軸で90㎝である。深さは確認面から約28㎝とやや浅いものである。土壙内からは漆皿、ものさし、板草履の芯、銭等の遺物が出土している。

土壙２（図16）；土壙１の西隣で検出した。南北に長い楕円形である。規模は南北に約180㎝、東西に70㎝、確認面からの深さは約43.5㎝である。土壙内から見つかった遺物はかわらけが殆どである。

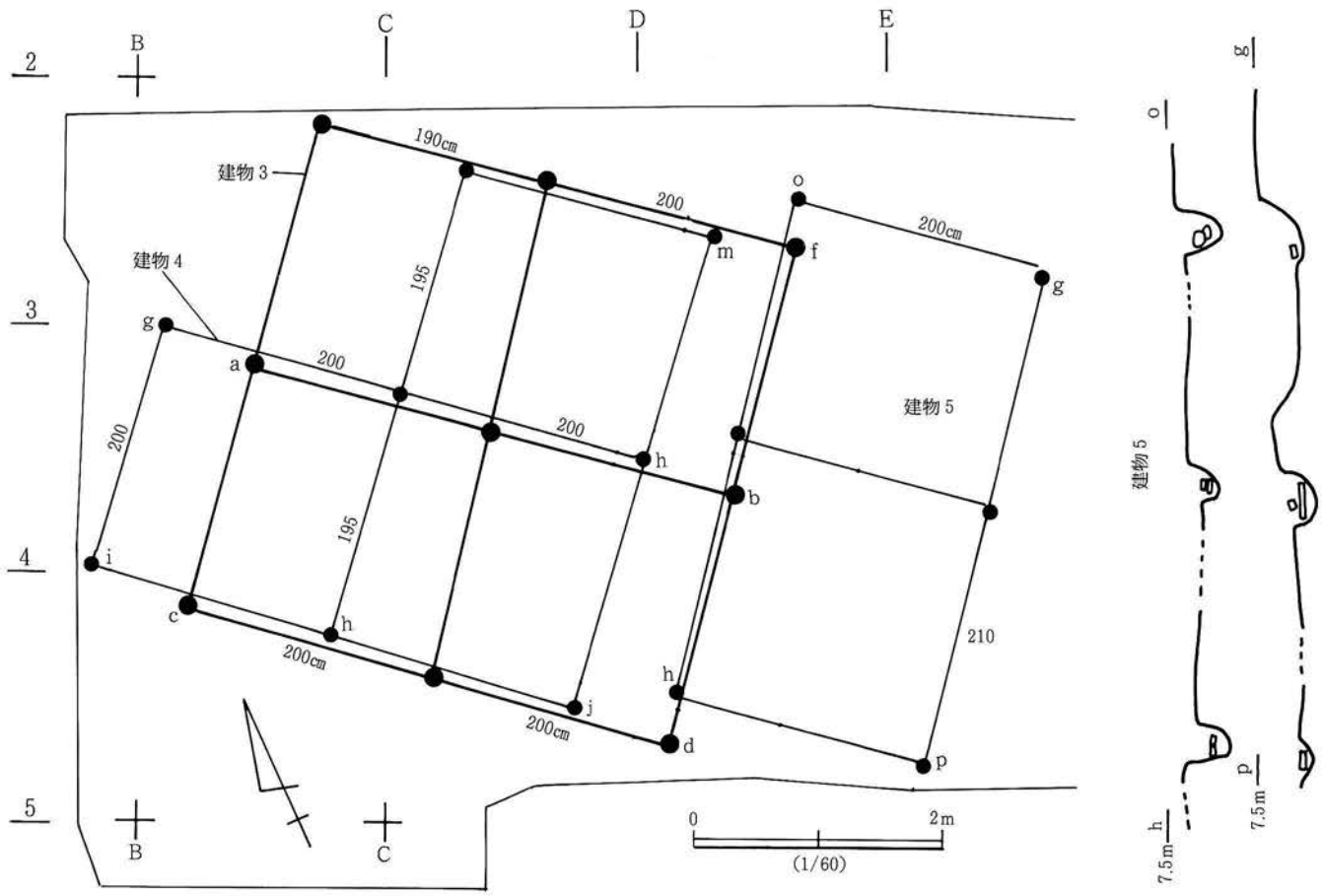
土壙３（図16）；調査区西際で検出した。西側は調査区外に延び、形状は楕円形と思われる。南北に90㎝、東西で確認できた長さは１ｍ、確認面からの深さは約48.7㎝である。北側上面は礎板をもつ柱穴と重複しており、正確な形状はつかめていない。

土壙４（図16）；調査区中央やや北寄りで検出した。南北に190㎝、東西に150㎝、確認面からの深さ約20㎝と浅い。覆土はしまりのない褐色土であり腐蝕土も多く混入していた。底部付近からは礎板、柱が見られ柱穴を壊して掘られたものであろう。

第１泥岩版築面；二面泥岩版築面のほぼ直下で検出した。確認できた幅は西壁から40㎝から90㎝で二面の版築面より15㎝程東に広がっている。南北端は調査区外に延びると思われる。上面はやや粗い部分も見られるが全体に20㎝～30㎝大の泥岩を突き固めた形で構成されており、厚さは30㎝程である。当初、道路遺構として調査したが泥岩版築が厚く堅固なものであり、調査区東壁の断面では10㎝に充たない砂質土を挟み泥岩版築層が見られたこともあって土塁状の遺構ではないか推察し、土塁状遺構とした。

G
H
土台角材
かわらけ
梁
束柱
アワビ
泥岩
梁
かわらけ
泥岩
控え梁
(溝7)
控え梁
(溝7)
梁
控え梁
(溝7)
2
3
4
第一泥岩版築面
(土 塁)
7.5m
束柱
梁
束柱
土塁
泥岩
土台角材
0
1m

図14　溝6


B
C
D
E
2
3
4
5
建物3
建物4
建物5
190cm
200
200cm
195
210
0
2m
(1/60)
7.5m

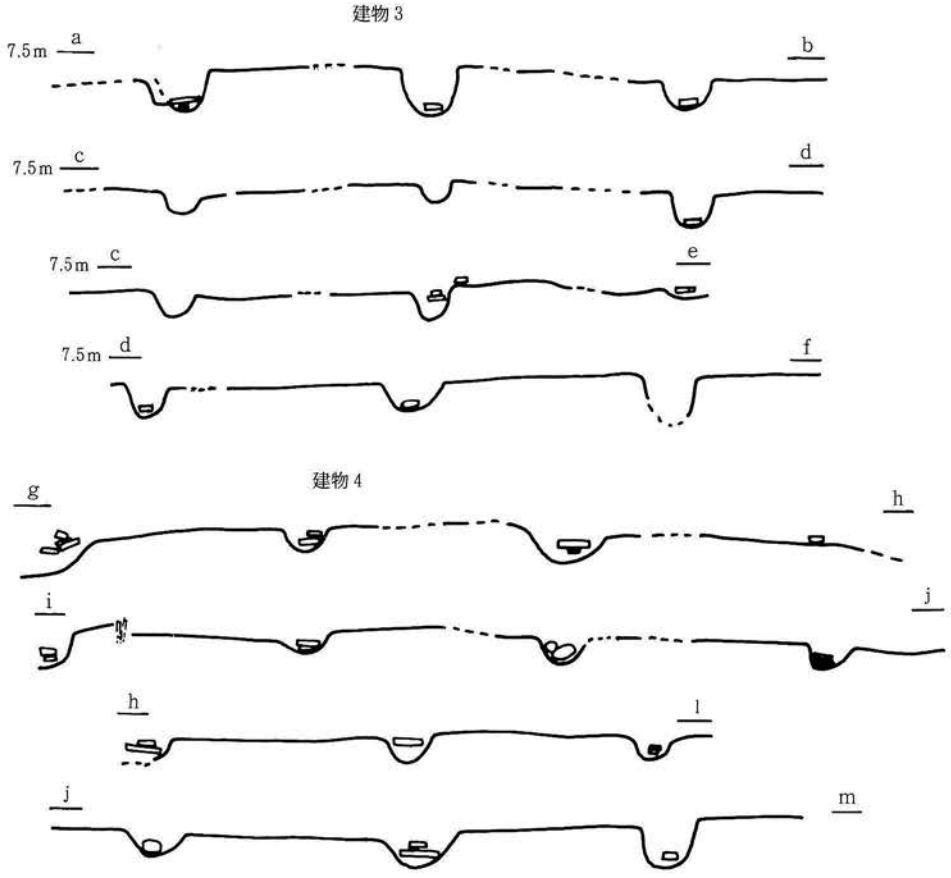

建物3
建物4
7.5m

図15　建物3～5、断面図

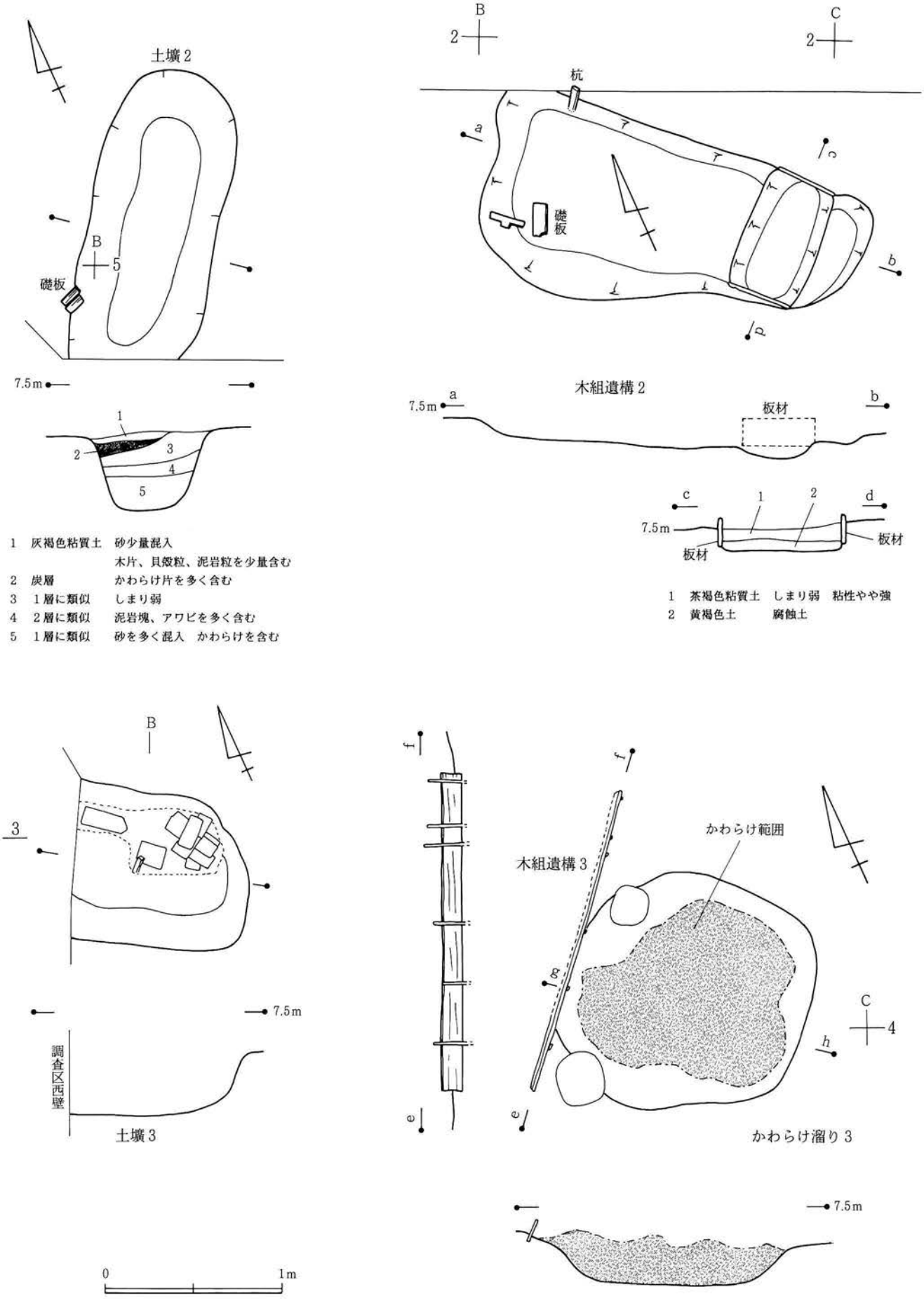


図16　木組遺構2・3、土壙2・3、かわらけ溜り3

第4面の遺構（図17）

三面より50㎝程掘り下げ、溝、建物等の遺構を確認し、四面とした。海抜高は6.95m～6.8mである。検出した遺構は溝、建物、木組み遺構、土壙、礎板列、かわらけ溜り、柱穴である。

溝7（図18，19）；調査区東で検出した。掘り方幅は2.4m、木組み幅約150㎝、深さ約90㎝、底部海抜高は5.95mである。南北端は調査区外に延びる。木組みの構造は杭を土中に打ち込み、これに板材を網代状に組み合わせた柵状のものである。木組み構造は西側のみの検出であり東側では発見されていない。また横板にホゾ穴をあけ裏側から控え梁を通し留め木で固定する、控え材が見られた。この控え材は調査区南北のほぼ中央付近から控え梁の抑え木の構造が変わり、木組みの部分に50㎝程の空間が生じている。残りの良好な部分で控え材の間隔は90㎝程であった。

建物6（図20）；調査区西端でL字状に配置された横板を検出した。横板はずり落ちた形で3枚程重なり合って発見されており、確認できた横板の長さは東西方向では200㎝、南北方向で165㎝の規模である。底部からは東西方向に並ぶ床板が深さ15㎝のところで検出されており、床面上からはかわらけが数点、放置された状況で見られた。床面の海抜高は6.74mである。この建物は土台角材を持たず、壁板を縦に積み重ね杭で留める構造で、床板の沈み込みを防ぐため所々に礎板が設置されている。また、床面で検出したかわらけは取り上げの際の不手際で図示できなかった。

なお、建物の北側調査区西壁に張り付く形で木組が検出しており、構造、レベルから考えて建物6に帰属するものと思われる。

建物7（図21）；調査区北西、建物6の東で検出した。東西に2間以上、南北に1間以上の規模をもつと思われる。礎板を設置した柱穴と礎板の配列であり、柱間隔も東西方向は200㎝、南北方向は210㎝とやや異なる。礎板上面の海抜高は6.7m～6.85mとバラツキがある。この建物7は上記の建物6と重複する部分があり建物6の一部もしくは付随する施設の可能性が高いと思われる。

柱穴列2（図21）；建物7の南で4口検出した。間隔は195㎝～200㎝で、建物7の北側の柱穴と平行し、規則性を持つため柱穴列とした。建物7に関連した施設の一部とも考えられる。

礎板列2（図21）；土壙5の東側で検出した。50㎝～55㎝の間隔で東西方向に延びる。礎板上面の海抜高はほぼ平均しており6.85m～6.8mである。礎板列の北には木組遺構5が検出されており、両者の関連から見ると板塀の基礎施設とも思われるが、礎板の並びだけでは何とも云えない。

木組み遺構4（図22）；土壙5の東側で検出した。大きさの異なる縦板を細い角材で留めており、釘および釘穴が遺存していた。板材は幅3㎝～12㎝、長さは7㎝～10㎝と規格性はなく、廃材を利用したものであろう。板材は上端面から北面にかけて焼け焦げた跡がみられた。焼け落ちた板塀の残痕とも考えられるが不明木組みである。

木組み遺構5（図22）；調査区南西南壁付近で検出した。確認海抜高は6.7mである。幅3㎝～8㎝、長さ10㎝の板がL字状に並ぶ。板材の端面は焼失している。木組みの一辺は50㎝であり内部からは焼土も見られた。囲炉裏とも思われるが南西側で板材を確認することができず、囲炉裏とするには不十分であった。用途は不明である。

かわらけ溜り5（図17）；調査区中央やや西よりで検出した。東西に230㎝、南北に80㎝の範囲で広がる。明確な掘り方を持たず浅い凹地に投棄されたものと思われる。

かわらけ溜り6（図17）；調査区中央南寄り、かわらけ溜り5の南東で検出した。東西に80㎝、南北に110㎝の範囲にかわらけが広がる。かわらけ溜り5と同様掘り方を持たない。

かわらけ溜り7（図17）；調査区北西隅で検出した。東西に60㎝、確認できた南北範囲は60㎝であった。やはり掘り方は確認されておらず、空閑地に廃棄されたものであろう。

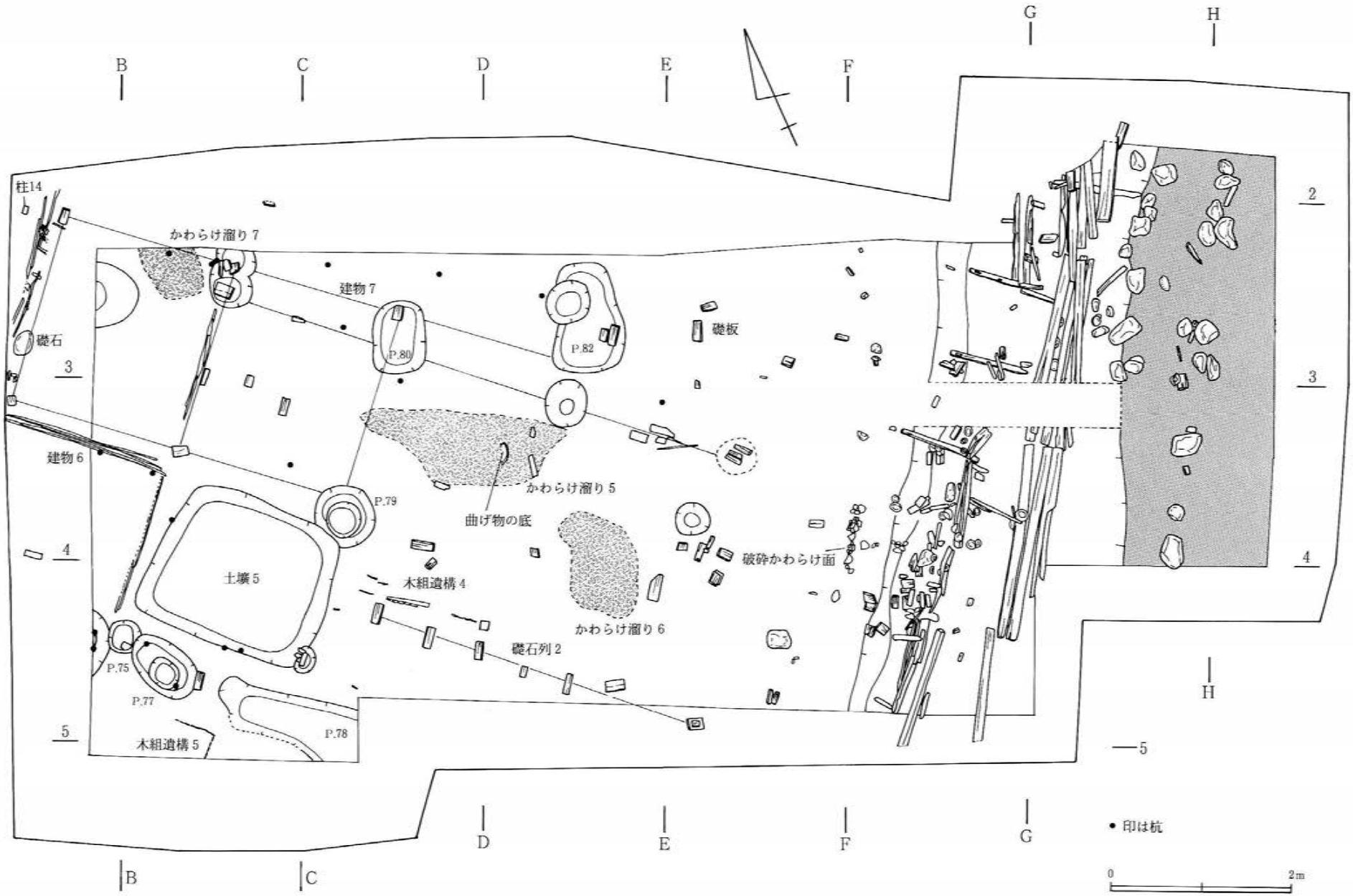

B
C
D
E
F
G
H
柱14
かわらけ溜り 7
建物 7
礎石
礎板
P.80
P.82
3
建物 6
P.79
かわらけ溜り 5
曲げ物の底
4
土壙 5
木組遺構 4
破砕かわらけ面
かわらけ溜り 6
礎石列 2
P.75
P.77
P.78
5
木組遺構 5
2
3
4
5
• 印は杭
0
2m

図17　四面全体図

土壙5（図29）；掘立柱建物の東隣、三面かわらけ溜り3の下で検出した。平面形状は長辺195㎝、短辺170㎝の隅丸方形、確認面からの深さは約25㎝である。覆土内からは多量のかわらけが出土している。

第2泥岩版築面（図28）；第1泥岩版築面直下で検出した。上面には三面溝6の土台角材の礎石として使われた30㎝大泥岩列が見られ、堅く叩き締められた茶褐色砂質土が8㎝程堆積する。この間層の下からは20㎝～30㎝大の泥岩で構築された版築面が表出する。厚さは約30㎝で隙間には泥岩粒が埋め込まれ、堅く叩き締められている。幅は西壁から110㎝である。泥岩版築層は青灰色砂と厚さ15㎝の堅く締まる青灰色粗砂層の上に構築されている。土塁の側面からは土留めに使われたと考えられる杭が6本確認されている。

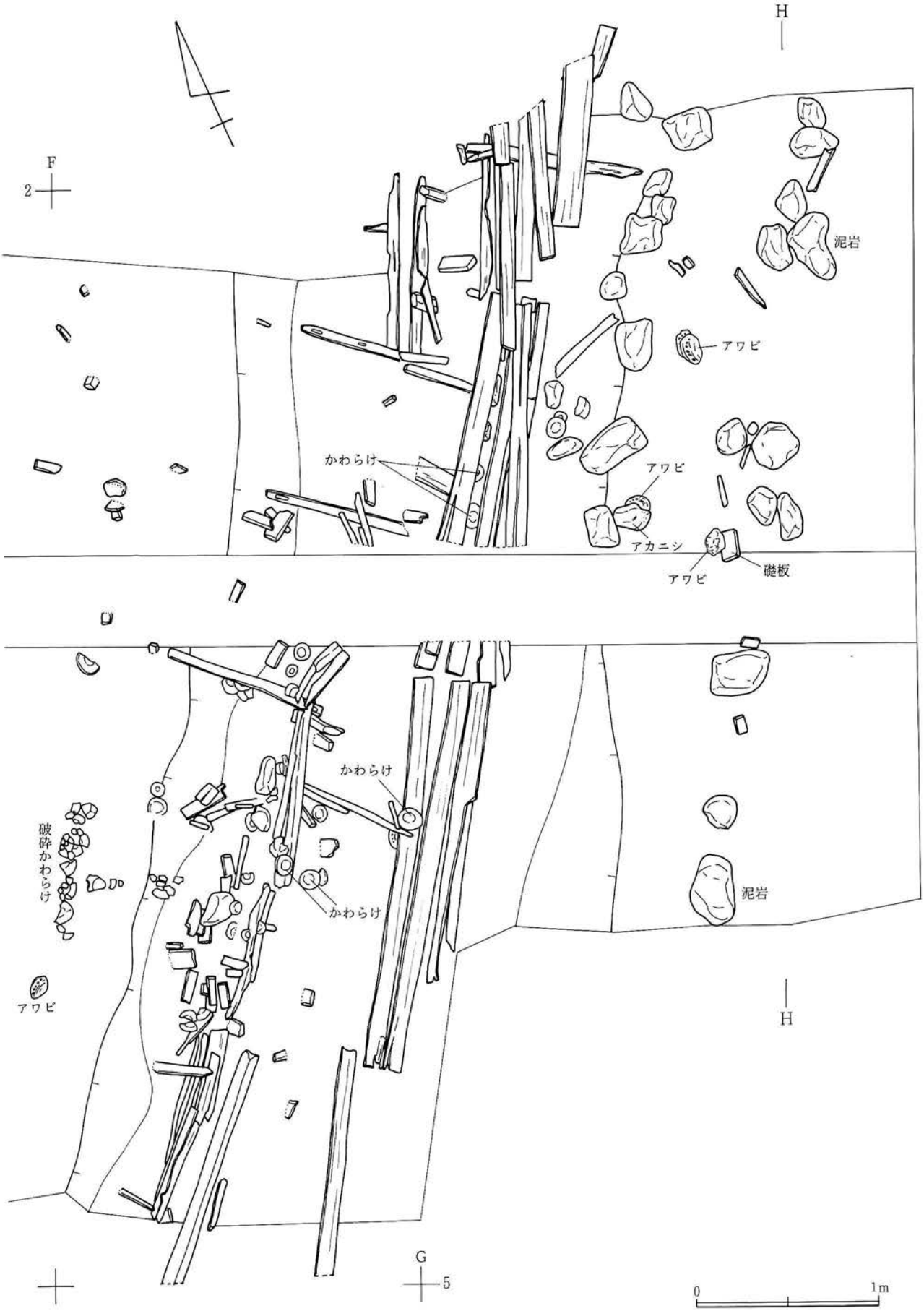


図18　溝７検出状況

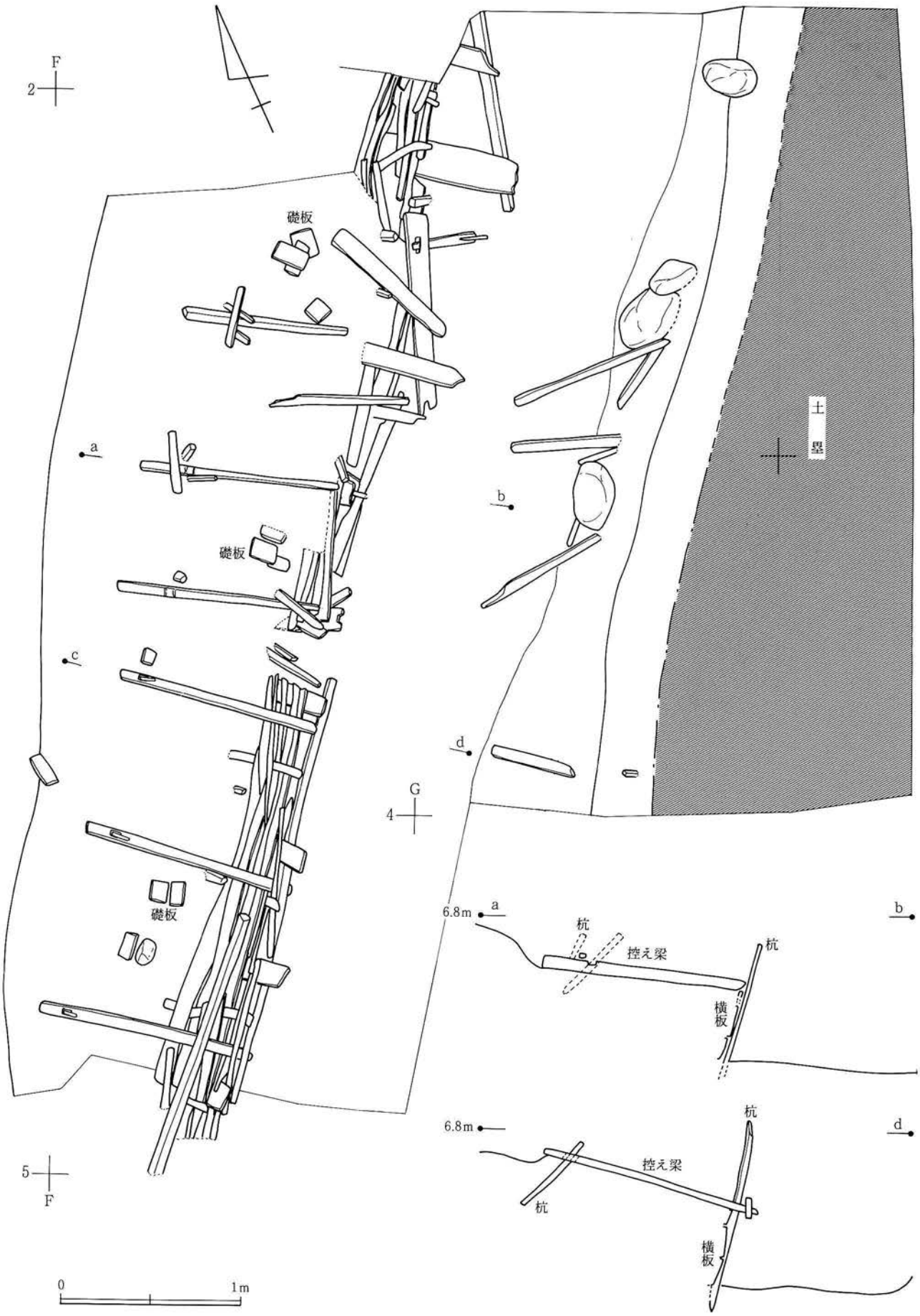


図19　溝7

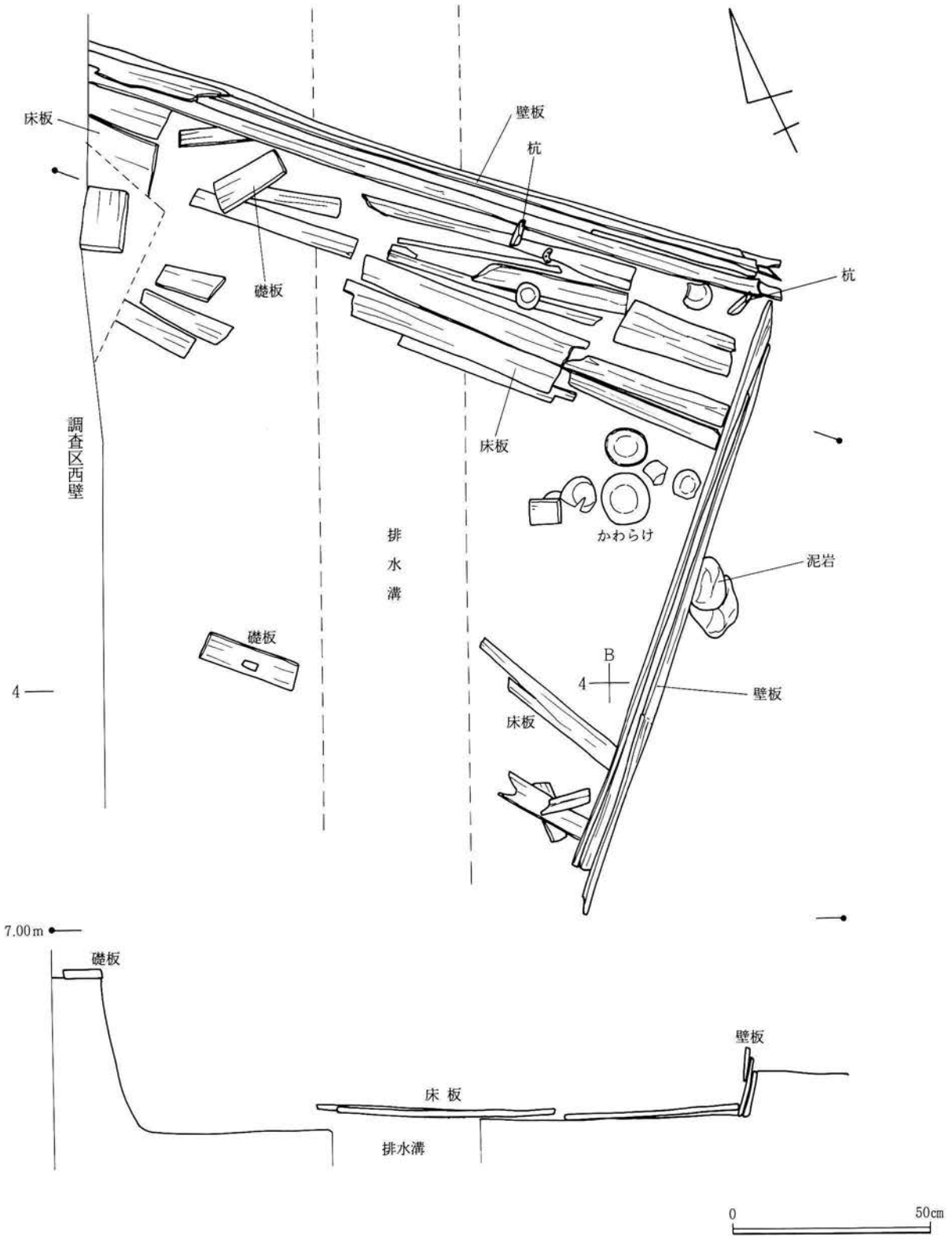
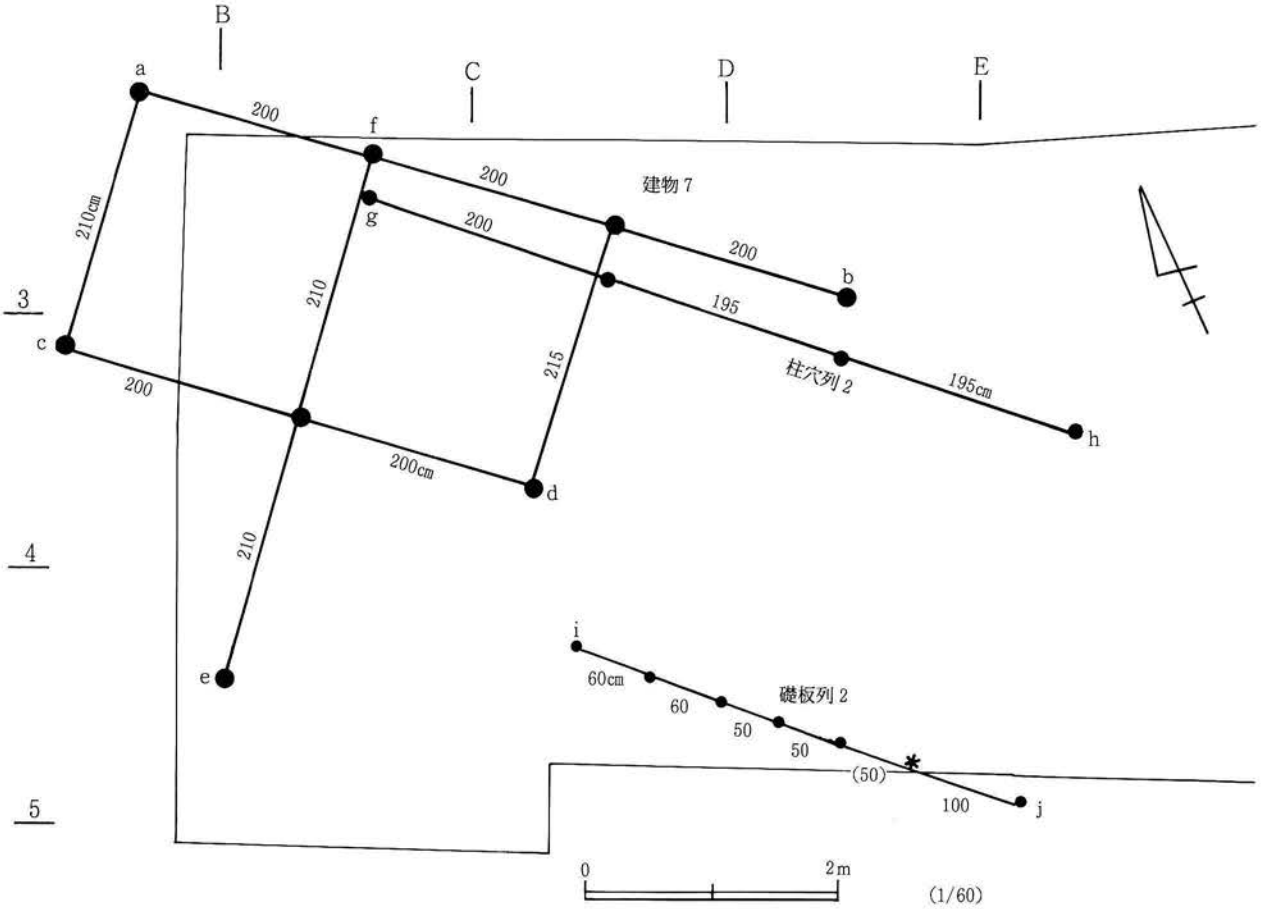

床板
壁板
杭
礎板
杭
床板
調査区西壁
排
水
溝
かわらけ
泥岩
礎板
B
4
4
壁板
床板
7.00m
礎板
壁板
床 板
排水溝
0
50cm

図20　建物 6



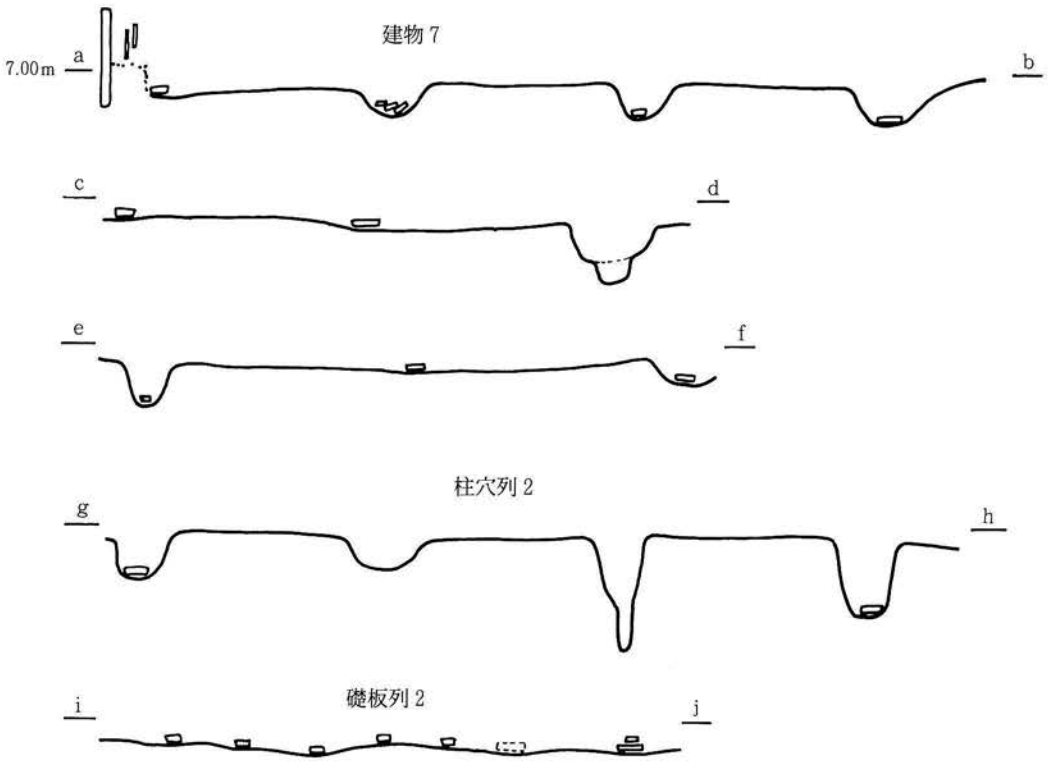


図21　建物 7、柱穴列 2、礎板列 2、断面図

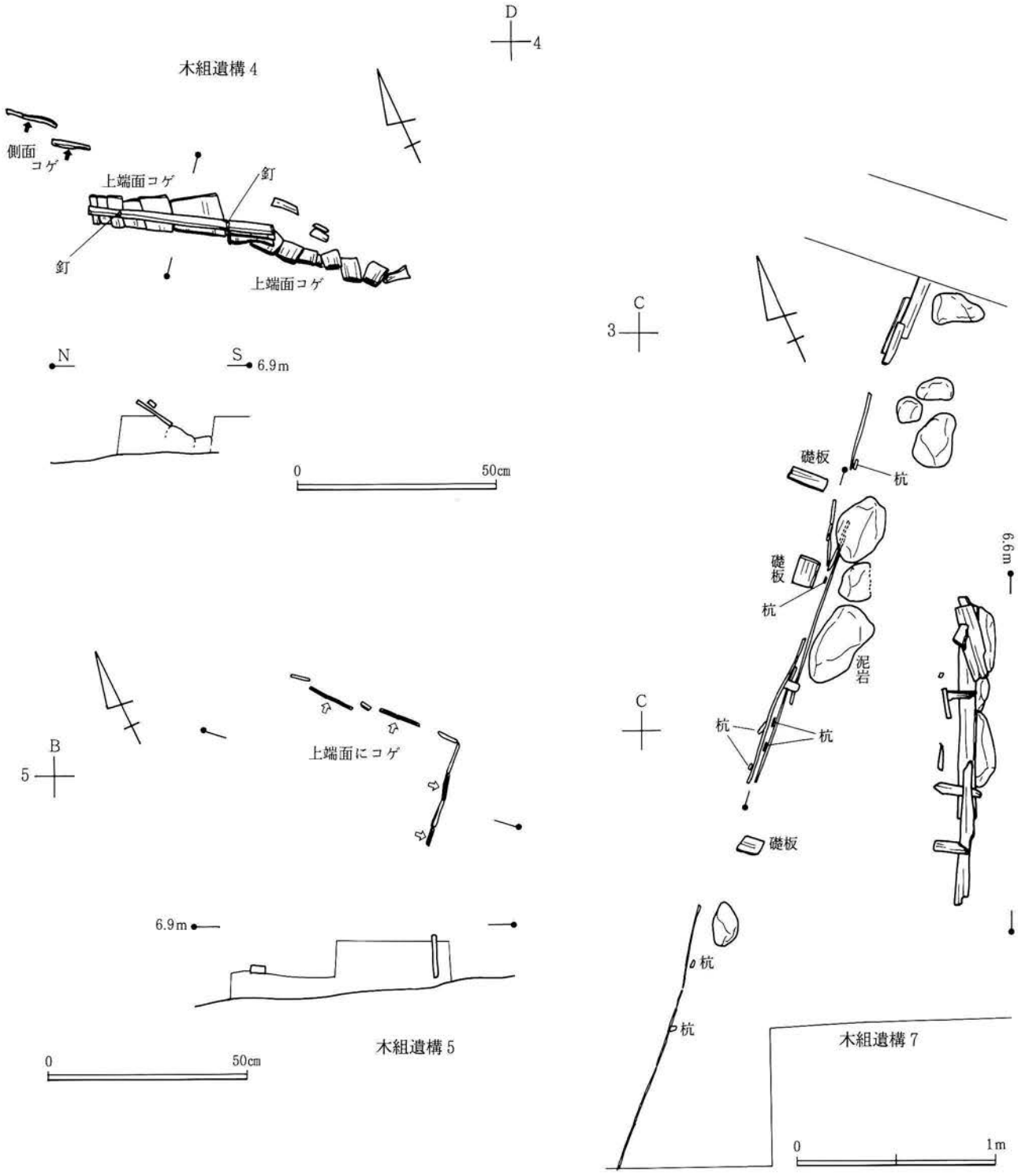

D
4
木組遺構4
側面
コゲ
上端面コゲ
釘
釘
上端面コゲ
N
S
6.9m
0
50cm
C
3
礎板
杭
礎板
杭
泥岩
6.6m
C
杭
杭
礎板
B
5
上端面にコゲ
6.9m
杭
杭
木組遺構5
木組遺構7
0
50cm
0
1m

図22　木組遺構4・5・7

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
貝溜り
礎板
礎板
礎板
土壙6
柱16
柱18
泥岩版築面
建物6
柱穴列3
溝7
木組遺構5
木組遺構6
柱15
●印は杭
0
2m

図23　五面全体図

第五面の遺構（図23）

黒褐色粘質土を20㎝程掘り下げたところで、青灰色泥岩面を検出し、広がりを確認した。調査区西側に広がっており版築された状態であった為、五面として捉えた。検出した遺構は木組遺構、柱穴列のみであるが、六面から四面への移行段階として整地または地業された面であろう。

青灰色泥岩版築面（図24）；調査区西に広がる。確認できた範囲は南北に5.1m、東西に2.5m、版築面は粗砂を含む小泥岩で粗めに構成されている。厚さは10㎝前後である。確認海抜高はおおよそ6.8mで、四面検出の建物６の床面と同レベルであり、建物６の東隣に広がることなどから考え併せると建物に伴う土間的な空間とも捉えることができる。

木組み遺構６（図23）；調査区南西部、青灰色泥岩版築面の東端に長さ80㎝～82㎝、幅５㎝～８㎝、厚さ0.5㎝～1.5㎝の横板３枚と幅1.5㎝、厚さ0.3㎝、確認できた長さ13㎝の横板１枚を検出した。四面の遺構との関連性も考えられたが用途は不明である。

柱穴列３（図24）；調査区ほぼ中央、青灰色泥岩版築面の東で検出した。南北方向に柱穴２口と礎板１枚が200㎝の間隔をもって並ぶ。礎板上面の海抜高は6.6m～6.7mである。なお、南に位置する柱穴には柱が残されていた。柱の規模は一辺が10㎝、長さ30㎝、上端面はコゲている。

貝溜り（図23）；調査区中央北で検出した。直径約50㎝の範囲にハマグリの殻が寄せ集められる形で大量に見られた。掘り方は見られず窪地状の空間に廃棄されたものであろう。キサゴも微量ではあるが混じっていた。

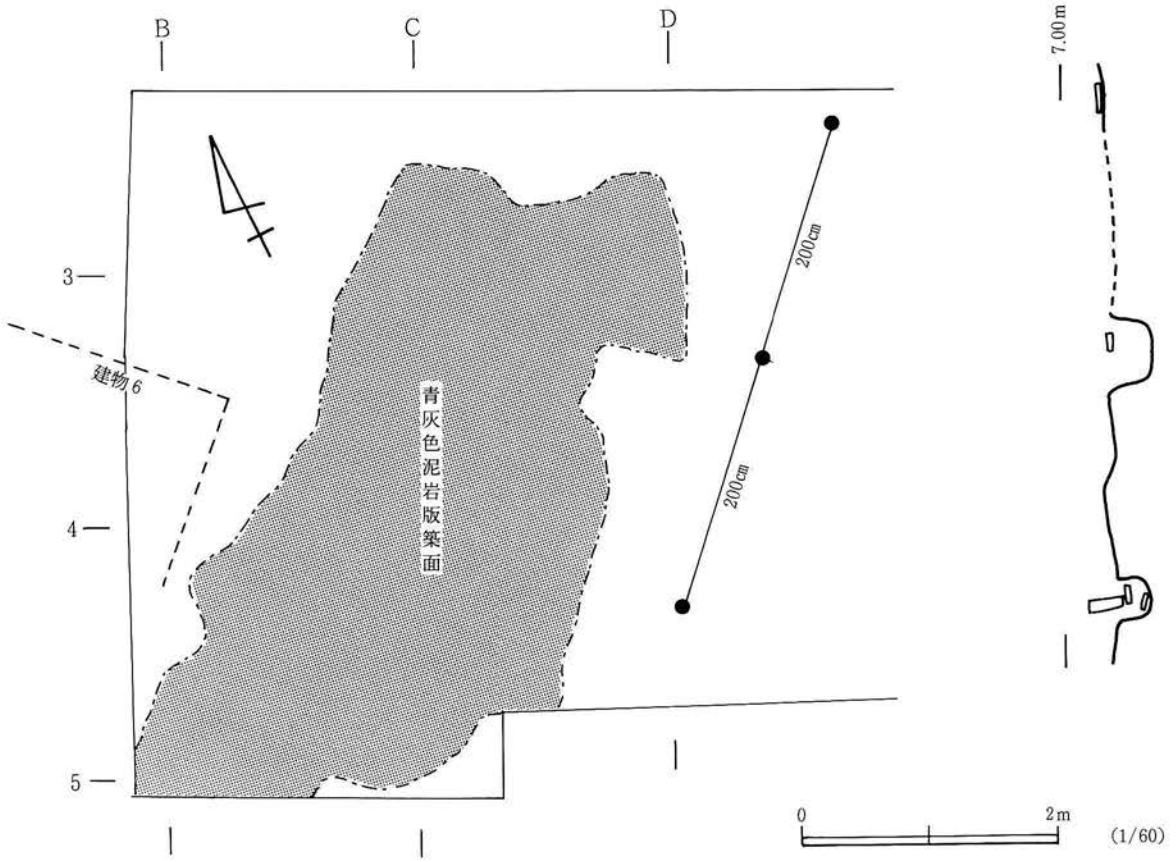


図24　柱穴列３、断面図

第６面の遺構（図25）

五面下約20㎝で層厚５㎝の薄い粗砂層を検出、この層を剥がしたところで遺構を検出し、六面とした。検出した遺構は溝、木組み遺構、柱穴列、礎板列、土壙である。

なお、北壁崩落のため調査範囲は当初の三分の二程度となった。

溝８（図26）；溝７から約60㎝西で検出した。掘り方幅約2.4ｍ、底部幅おおよそ２ｍ、確認面からの深さは約80㎝、底部海抜高は5.3ｍである。構造は溝７と同様の作りであり、木組み構造は東側には見られず土塁状遺構の西側を溝の東肩として併用している。覆土は貝殻粒、泥岩粒を含む砂層と茶褐色の腐植土で構成され、底部には砂礫層が見られる。

建物８（図27）；調査区中央で４口検出した。南北軸の間隔は160㎝、東西軸では100㎝とやや長方形を成している。物置小屋のようなものであろうか。柱穴の確認面からの深さは30㎝～40㎝、底部海抜高は6.1ｍと平均している。

木組遺構７（図22）；調査区西側で検出した。おおよそＣライン沿いに南北に縦断するが、南側の遺存状態は極めて悪い。遺存状況の良好な部分で横板の幅は10㎝程度であり、長さは102㎝～142㎝、厚さは0.5㎝～1.5㎝である。木組の西、中央より北には礎板がある程度の規則性をもって配置されており、木組み遺構を建物と捉えるならば床の沈下防止の礎板とも考えることもできる。

柱穴列４（図27）；調査区西側で検出した。90㎝の間隔をもって東西方向に３口並んでいる。柱穴の直径は約25㎝、確認面からの深さは13.3㎝～31.5㎝と１口のみ深い。

柱穴列５（図27）；柱穴列２の南で検出した。ほぼ190㎝の間隔で東西方向に３口並ぶ。平面形状は直径30㎝～50㎝の円形を呈し、確認面からの深さは25㎝～36㎝とバラつきがある。底部海抜高は6.2ｍ～6.03ｍである。

礎板列３・４・５（図27）；調査区西北、木組遺構７の西に集中して検出した。礎板間隔が同一のものを結んで３～５までの番号を付したが、それぞれが遺構の一部とは考え難い。木組遺構７が建物の壁板と捉えると、床板に伴う沈下防止の為の礎板群の可能性も考えられる。礎板上面の海抜高は6.5ｍ～6.6ｍとほぼ平均している。

かわらけ溜り８（図25）；調査区中央で長軸60㎝、短軸50㎝の楕円の範囲にかわらけを中心とした遺物がまとまって発見された。はっきりした掘込みはなく、浅い窪地状の空閑地に一括廃棄したと考えられる。

第３泥岩版築面（図28）；第２泥岩版築面の直下で検出した。西壁より幅約170㎝で、西端には形の揃った泥岩が配置されている。端面の内側は暗灰褐色粘質土を混入し、約10㎝大の泥岩を中心に構築され堅く突き固められている。上面は平坦である。泥岩版築層の厚さは西側端部で20㎝、調査区西壁付近では８㎝と薄くなっている。西端泥岩の直下40㎝のところからは土留めの板材が確認されている。

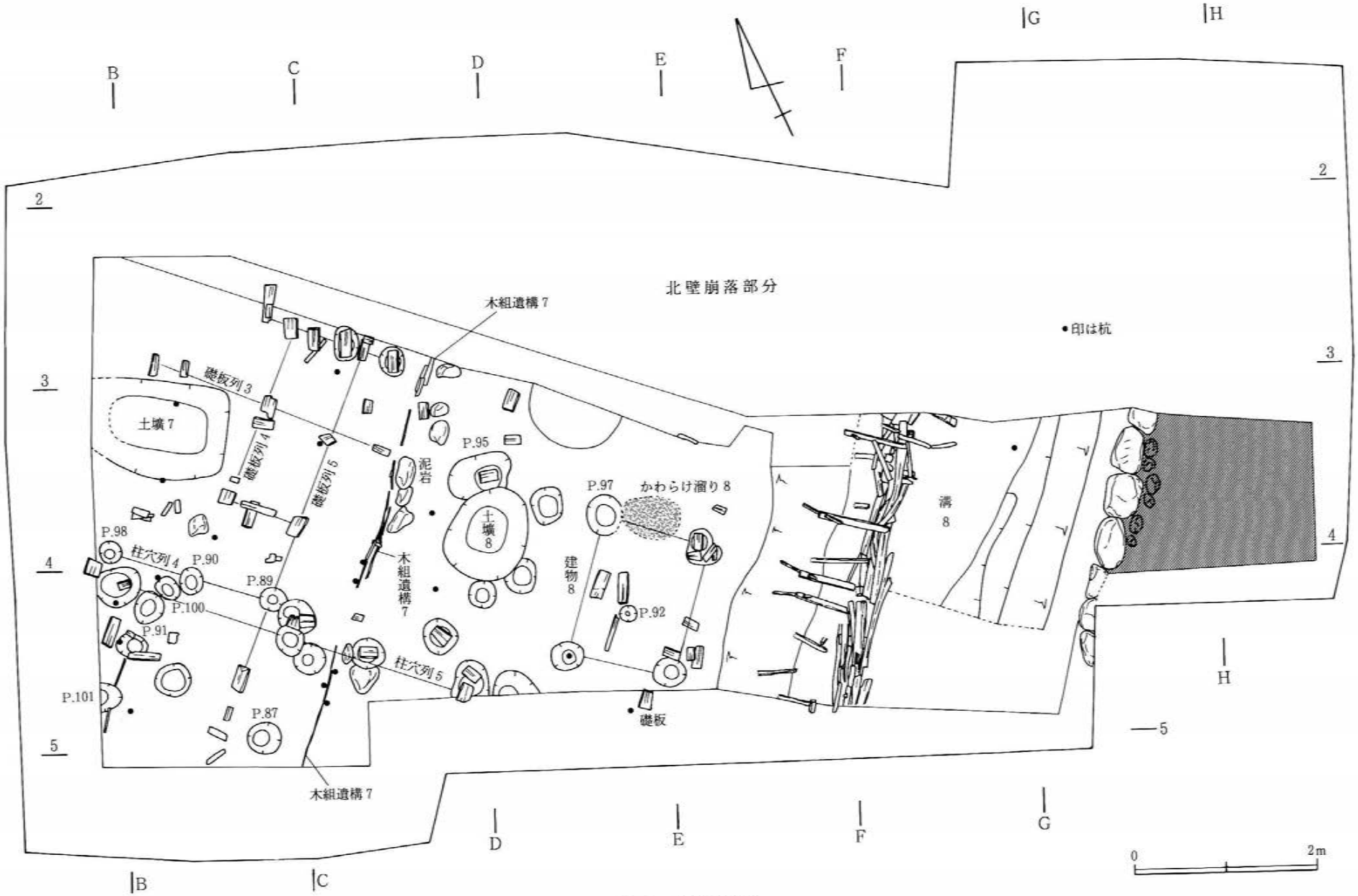

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
北壁崩落部分
●印は杭
木組遺構7
礎板列3
礎板列4
礎板列5
土壙7
泥岩
P.95
土壙8
P.97
かわらけ溜り8
溝8
建物8
P.98
柱穴列4
P.90
P.89
P.100
P.91
P.101
P.87
柱穴列5
P.92
礎板
木組遺構7
0
2m

図25　六面全体図

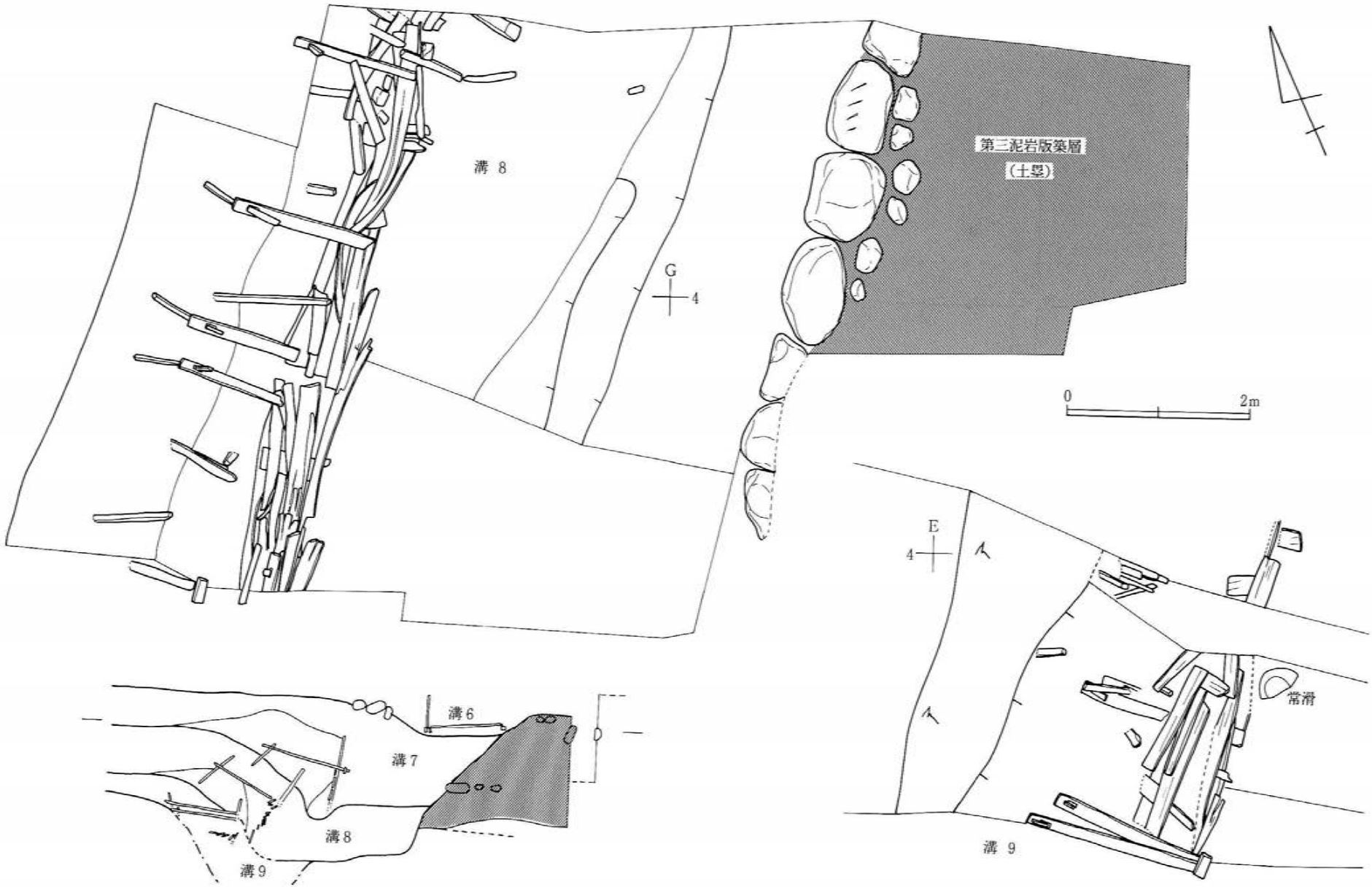
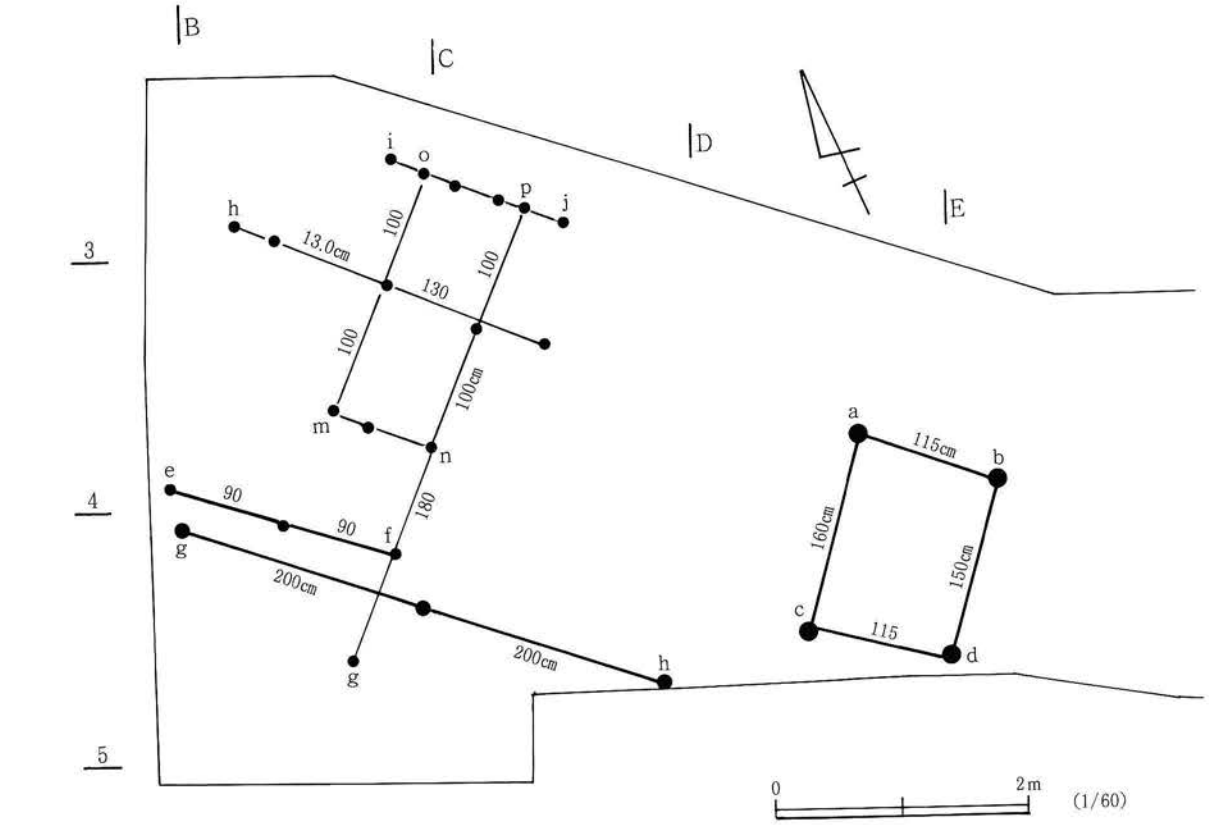


図26　溝８・９　溝断面概念図



建物 8

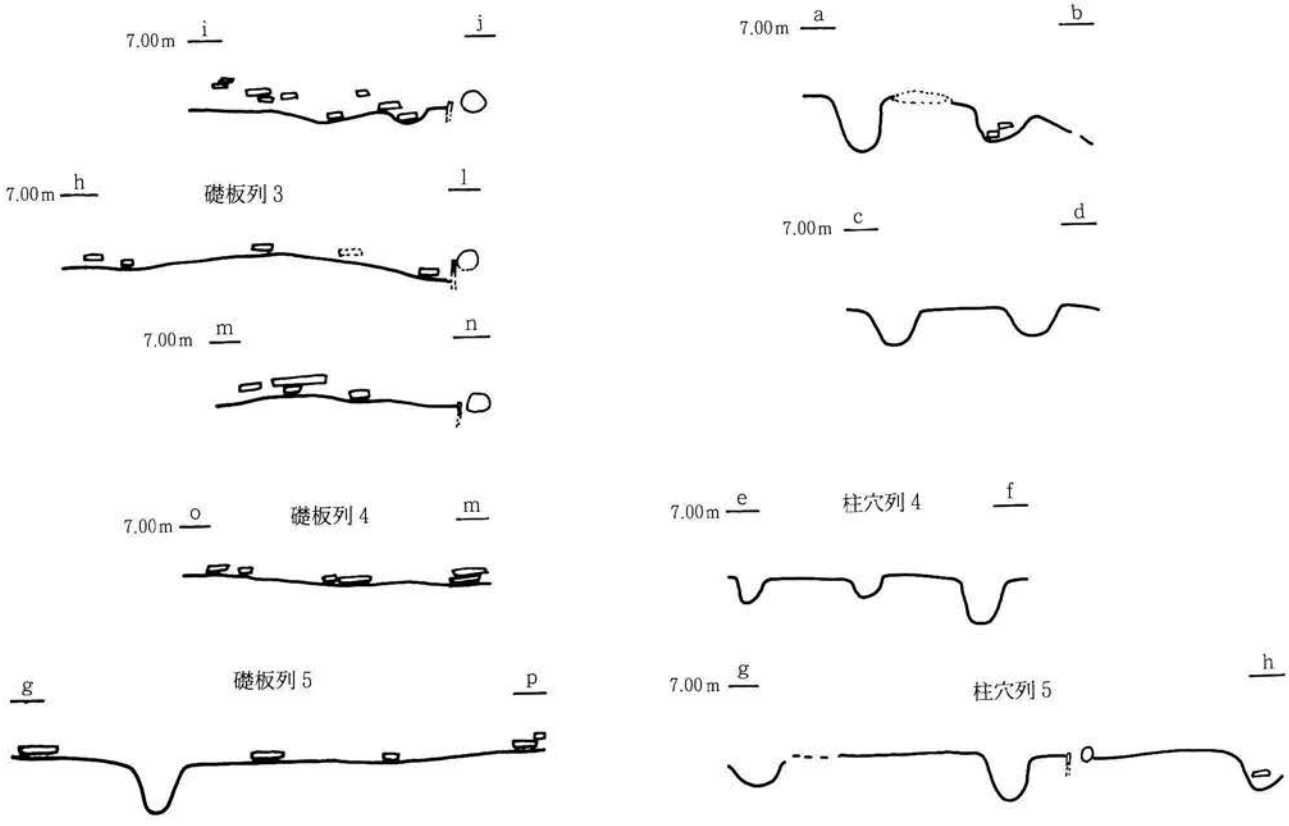


図27　建物 8、柱穴列 4 ・ 5、礎板列 3 ～ 5

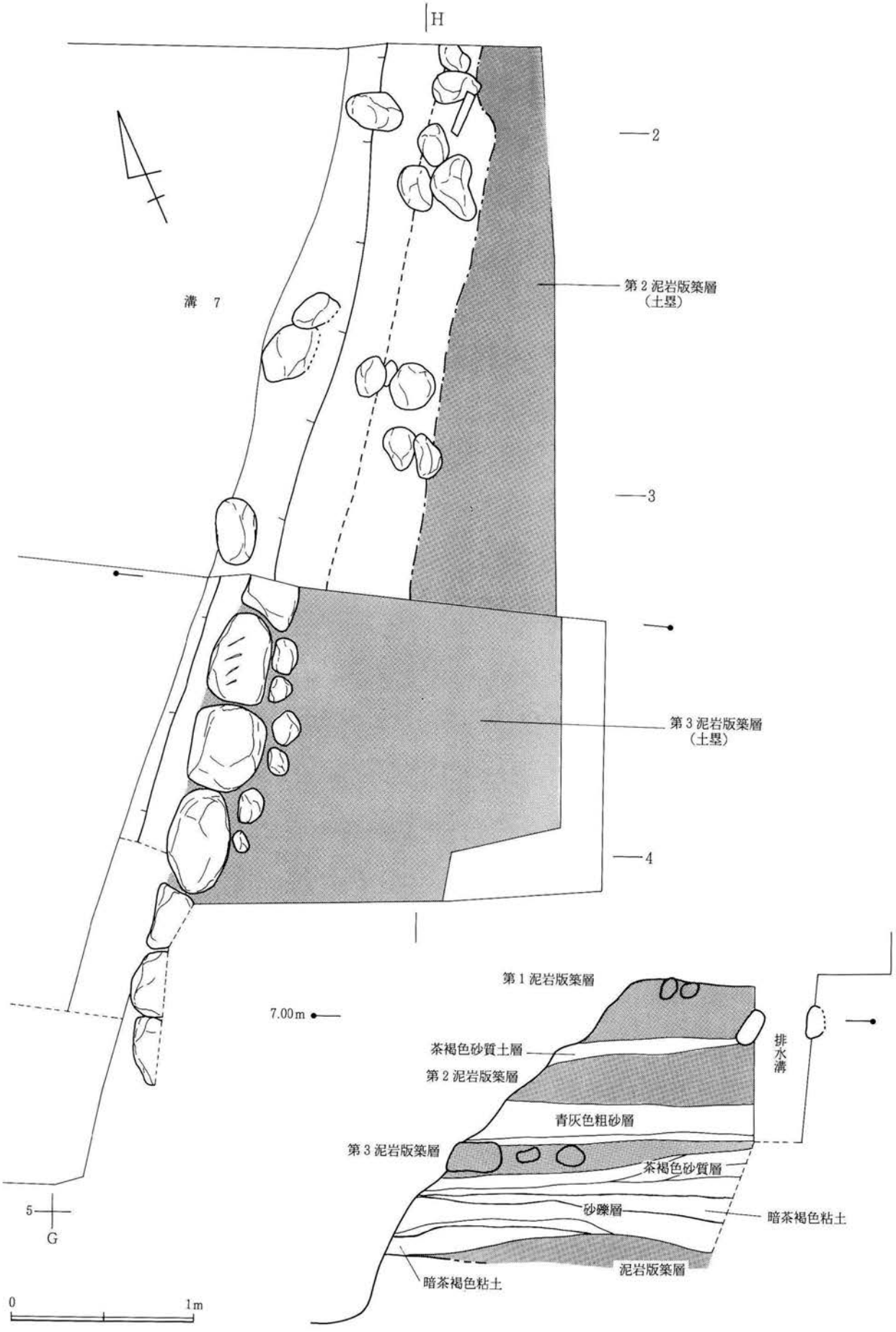

H
2
溝 7
第2泥岩版築層
(土塁)
3
第3泥岩版築層
(土塁)
4
5
G
0
1m
7.00m
第1泥岩版築層
茶褐色砂質土層
第2泥岩版築層
青灰色粗砂層
第3泥岩版築層
茶褐色砂質層
砂礫層
暗茶褐色粘土
泥岩版築層
暗茶褐色粘土
排水溝

図28　土塁、断面図

第７面の遺構８（図31）

七面は調査壁崩落により極めて狭い範囲での発掘調査となった。20cm程で遺構を確認し七面とした。七面では複数の礎板および柱穴を検出するに留まった。おもに礎板は調査範囲の北で、柱穴は南に多く見られる状況であった。

溝９（図26、29）；六面溝８の検出時に、控え杭の一部を確認した為トレンチ状に掘り下げ、横板および杭を検出した。溝７・８同様網代状の木組み溝である。

溝状遺構；調査範囲内の東と西側で検出した。いずれも南北方向に調査区を縦断しており、東側は東に、西側は西に緩やかに落ち込んでいる。高低差は20cm弱と浅く、西と東の間隔は150cmである。また、西側の溝状遺構からは手づくね形成のかわらけ、木製品等の遺物が出土している。

柱穴列６（図29）；調査範囲のほぼ中央から南にＬ字状に検出した。柱穴の底部には礎板が設置されており、確認面からの深さは30cm～40cm、礎板上部の海抜高は5.8m～5.9mとほぼ平均している。柱穴の間隔は200cm～210cmを測り南西方向に広がる建物の一部と考えられる。

柱穴列７（図29）；柱穴列１の南で検出した。２口で列とするには強引であるが、礎板の設置、形状、方向等から柱穴列として捉えた。柱間隔はいずれも210cm、礎板の海抜高は5.7m～6.0mである。

礎板列６・７（図29）；調査範囲のほぼ中央を南北に縦断するかたちで２列確認した。平行する礎板間隔は70cm、南北方向の並びも70cm～80cmの間隔を保つが南側では不規則になる。礎板の規模は長辺が20cm、短辺が10cm～15cmであり、上部海抜高は6.2m～6.3mと平均している。

柱穴列、礎板列は軸方向、間隔共ある程度の規則性を持っており、何らかの遺構として形になると考えられる。しかし、狭い範囲での確認の為想定するまでには至らなかった。

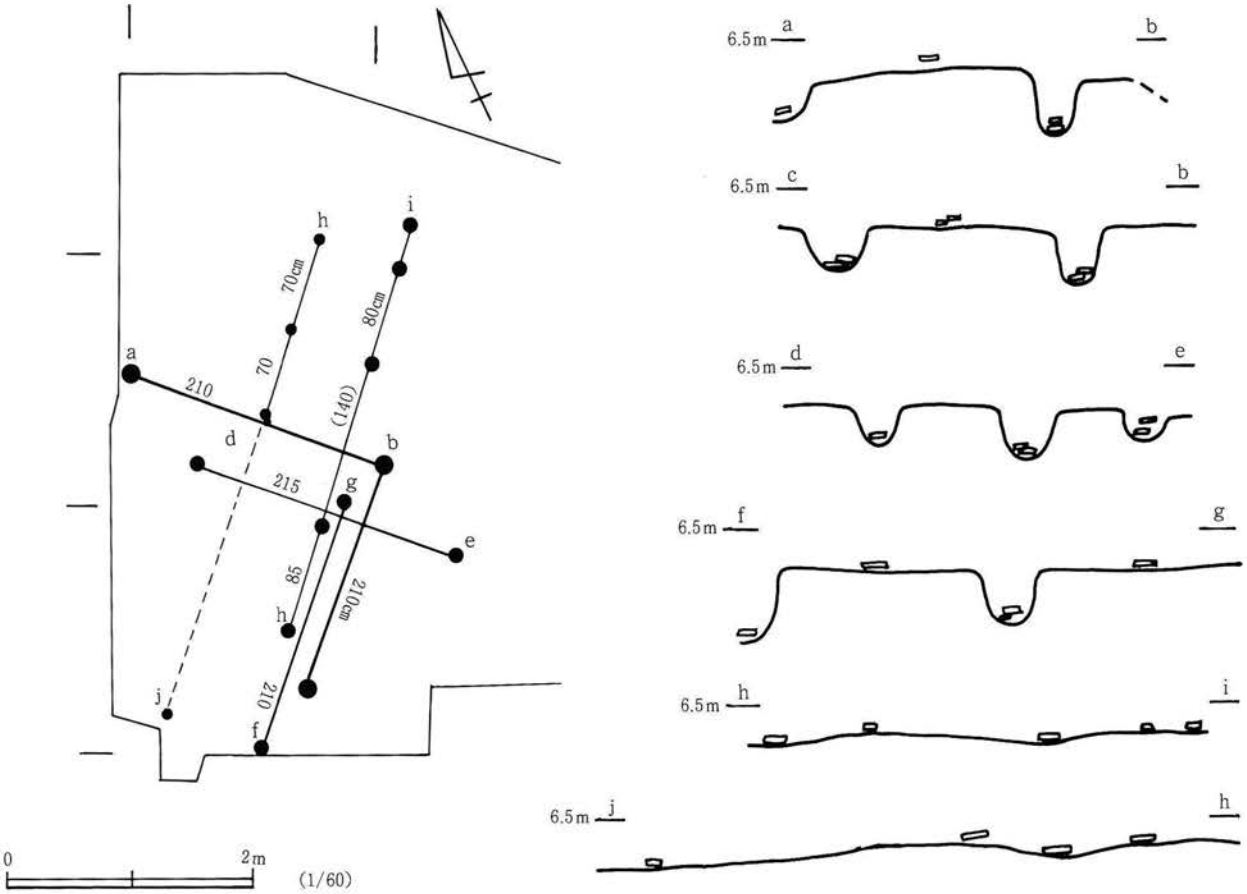


図29　柱穴列６・７、礎板列７・８、断面図

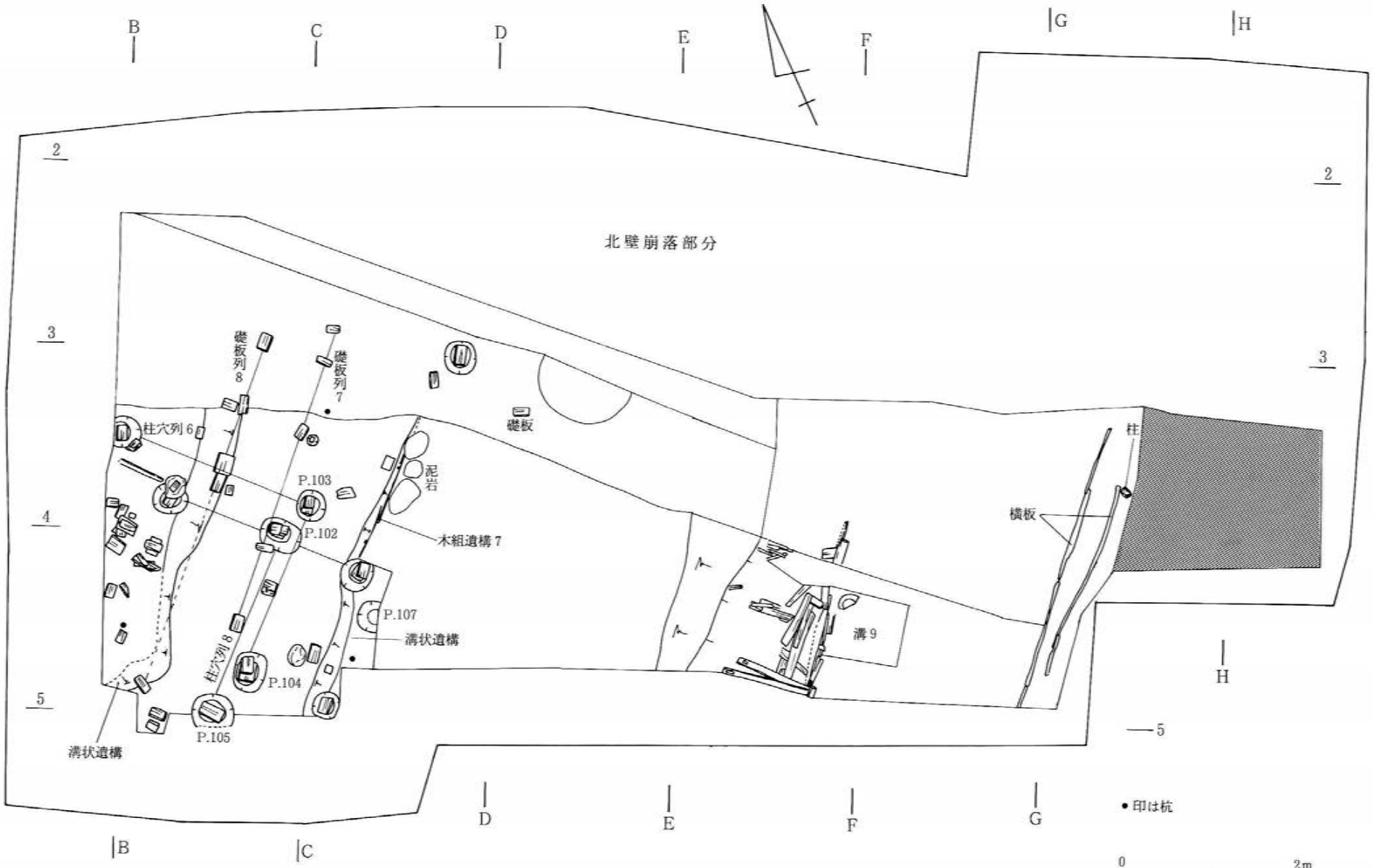

B
C
D
E
F
G
H
2
3
4
5
北壁崩落部分
礎板列8
礎板列7
柱穴列6
礎板
泥岩
P.103
P.102
木組遺構7
P.107
溝状遺構
柱穴列8
P.104
P.105
溝状遺構
横板
柱
溝9
• 印は杭
0
2m

図30　七面全体図

第３章　出土遺物

第１節　出土遺物の概要

遺物総量は整理箱（内法：33.5×53.5×14.5㎝）にして162箱が出土している。出土遺物は土器［糸切り底のかわらけ皿、手捏ね成形のかわらけ皿、かわらけ質の小壺、小型の手焙り、伊勢系土鍋の破片、瓦器の碗、香炉・三足鍔釜、早島式坏など］、陶器［常滑では壺甕類・捏鉢・鍔釜。瀬戸製品では小壺・四耳壷・折縁皿・入子・卸し皿・天目碗・天目台・盤・行平鍋・洗・皿。山茶碗窯では捏鉢・山茶碗・山皿、魚住捏鉢、備前摺り鉢、渥美の甕・捏鉢、亀山の甕］、舶載陶磁器［青磁では碗・鉢、白磁では碗・皿、青白磁では瓶子・合子・香炉・器台・小皿、天目碗も少数ではあるが出土している。陶器では褐釉四耳壷・黄釉・緑釉盤など］、金属製品［鉄製品では釘・掛け金・鎹・錐・火箸・燧金・毛抜き・縫い針・天秤皿・仏像等］、骨製品笄［笄・鑿（こじり）・シオデ（しおで）］、石製品［硯・砥石・滑石鍋とその転用品（温石・スタンプ）］、木製品［箸・杓子・曲げ物桶・漆椀・漆皿・折敷・膳脚・雲形肘木・下駄・板草履の芯・櫛・独楽・毬杖の毬・刀子の鞘・弓・手押木・紡織具の部材・刷毛・ヘラ・物差し・鋤・鍬・形代］、貝製品［螺鈿細工の小鳥・ヤコウ貝］、材質不明品［念珠の母指］、自然遺物［貝殻・骨・鱗・種子（第四章２項参照）］である。

報告にあたり、遺物を選別した。多量に出土したかわらけ皿は完形品、略完形品のみを測図し、遺存状態の良好な木製品・金属製品や骨・石・貝製品についてはできる限り掲載するようにした。なお、箸については多量に出土したため、完形品のみの数量と寸法を記載するに留めた。

各面の遺構、包含層から出土した遺物は図示した遺物を含めた破片数を集計した。遺物説明の前に列記した、特にかわらけ皿については大皿・小皿に分け、糸切りの終結部（渦状の痕跡）を一個体の目安として固体数を数え、更に完形品１個体の平均重量が判る資料については、総重量から推定される個体数を割り出しておいた。

なお、紙面の関係上遺物の説明は大半を省略した。

第２節　出土遺物

［一面］

溝１（図31－１～17）

かわらけ大皿は31個体（7,880g）、小皿は29個体（1,410g）である。本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で約100g、小皿で約45gであり、この数値からおそらく大皿は78個体、小皿は31個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類３点（青磁碗２、白磁皿１）、瓶子・盤類１点（黄釉１）であり、国産陶磁器は壺・甕類17点（常滑17）、碗・皿類２点（瀬戸入子１、盤１）、捏鉢２点（常滑１、山茶碗窯１）、手焙り１点（瓦器質１）、瓦２点、瓦器碗１点、石製品２点（砥石１、常石鍋１）であった。

図31－２のかわらけ皿は漆の取り皿として使用したと思われる。14は鍋の弦で鉄製である。

溝２上層（図31－18～39、図32－40～54）

かわらけ大皿は71個体（14,500g）、小皿は41個体（2,010g）である。本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で約152.5g、小皿で46.5gであり、この数値からおそらく大皿は95個体、小皿は43個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類11点（青磁11）、瓶子・盤類１点（黄釉１）を数えた。国産陶磁器では壺・甕類19点（常滑18・亀山１）、碗・皿類４点（瀬戸卸皿２、入子２）、捏鉢３点（常滑１、山茶碗窯１、

魚住１）、手焙り４点（瓦質４）、石製品２点（滑石鍋２）であった。

図32－50は骨製品、刀装具の一つである鹿角製の鐺（こじり）であろう。

溝２下層（図32－55～78、図33－79～96）

かわらけ大皿は102個体（15,240g）、小皿は71個体（2,640g）である。本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で149.1g、小皿で48.0gであり、この数値からおそらく大皿は102個体、小皿は55個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類２点（青磁碗１、白磁皿１）、瓶子・盤類１点（青白磁１）であり、国産陶磁器では壺・甕類10点（常滑９・亀山１）、捏鉢１点（山茶碗窯１）、手焙り４点（土器質２、瓦質１）、瓦器椀１点が出土している。

図33－89は毬杖の毬である。中心をやや外れたところに３～５㎜程度の孔が穿たれている。

かわらけ溜り１（図34・35－１～258）

かわらけは大皿で108個体（17,390g）、小皿では214個体（12,060g）である。本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で140g、小皿で41.4gであり、この数値からおそらく大皿は124個体、小皿は291個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類２点（青磁碗１、鉢１）、手焙り１点（瓦質１）、石製品２点（砥石１、滑石鍋１）であった。

図35－255は瀬戸の入子、258は瓦器質の三足付き羽釜で口径は4.8㎝である。259は如来立像、総高は22.5㎝であり背面には光背の接続痕が見られた（原寸で図示）。

［二面］

溝３（図36－１～４）

かわらけ皿は大皿で９個体（1,650g）、小皿で４個体（490g）であった。本遺構には完形品が見られず１個体の平均重量を算出することができなかった。

舶載陶磁器では碗・皿類１点（青磁鉢１）、国産陶磁器では壺・甕類19点（常滑19）、硯が１点出土している。

溝４（図36－５～７）

本遺構からは破片および完形のかわらけ皿は見られず、舶載陶磁器、国産陶磁器等の遺物の出土していない。

木組遺構１（図36－８～20、図37－21～48）

かわらけ皿は大皿で25個体（3,740g）、小皿で15個体（1,250g）であった。本遺構には完形品が見られず１個体の平均重量を算出することができなかった。

舶載陶磁器では碗・皿類６点（青磁椀、白磁皿２）、国産陶磁器では壺・甕類11点（常滑11）、碗・皿類１点（瀬戸入子１、盤１）、手焙り２点（瓦質２）が出土している。

図36－15、16は２個一組のような形状であり、16は抱き合わせで出土している。17、18は重なり合って出土した。17は一端が鉋の刃のように鋭く削られており、18は一端を鋸の刃のように削り、７箇所に孔が穿たれているが貫通していない箇所も見られた。

箸状木製品の数量は245本、両口のものが240本、片口が５本を数えた。寸法は一番長いもので23㎝、短いもので14㎝であり、18～23㎝のものが多く見られた。いずれも用途不明の製品である。

図37－45～47は48の曲げ物の内と横で発見された遺物である。

［三面］

溝６（図38－１～12）

かわらけは大皿で31個体（5,040g）、小皿14個体（710g）を数えた。本遺構のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で185g、小皿で60gであり、この数値からおそらく大皿は27個体、小皿は11個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類１点（白磁皿１）、国産陶磁器では壺・甕類７点（常滑７）、手焙り１点（土器質１）、鍔釜１点が出土している。

溝６掘り方（図38－13～18）

出土かわらけ皿は大皿で３個体（320g）、小皿で１個体（10g）を数えた。本遺構出土のかわらけは破片のみの出土であり、完形品１個体の重量は計測できなかった。

他の出土遺物は舶載陶磁器では碗・皿類３点（青磁碗２、白磁皿１）、国産陶磁器では壺・甕類１点（常滑１）、瓦１点、不明瓦器製品１点であった。

図38－13は表面に黒漆が塗られ、一部に朱漆で文様らしきものが描かれており、先端には焼痕が残っている。

木組遺構２（図38－19～34）

本遺構出土のかわらけについては破片であり、個体数および重量の算出はしていない。その他の遺物についても分類と点数は集計しなかった。

かわらけ溜り３（図39－１～73、図40－74～101）

出土かわらけは大皿で643個体（87,370g）、小皿801個体（37,130g）を算出した。本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の重量は大皿で143.3g、小皿で38.4gであり、この数値からおそらく大皿は610個体、小皿は966個体程度が含まれていたと考えられる。

その他の遺物については舶載陶磁器では碗・皿類１点（青磁鉢１）、国産陶磁器では壺・甕類１点（常滑１）、滑石１点が出土している。

土壙１（図40－102～106）

本遺構からは、かわらけ皿および陶磁器類の出土は見られなかった。

図40－104は物差しである。一目盛は3.0～3.5cmで平均ではない。

［四面］

溝７（図41－１～41）

出土かわらけは大皿350個体（48,510g）、小皿184個体（8,370g）、本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で166.9g、小皿で43.3gであった。この数値からおそらく大皿は290個体、小皿は193個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器では碗・皿類３点（青磁碗２、白磁皿１）、壺・瓶類１点（白磁１）、国産陶磁器では壺・甕類94点（常滑92・亀山１、瀬戸１）、捏鉢21点（常滑３、山茶碗窯18）、手焙り３点（土器質２、瓦器質１）、鍔釜１点、瓦３点、砥石１点、泥岩製円盤１点であった。

図41－21は紡織具（糸巻き）の枠木と思われ上下の孔には木釘が遺存している。

箸状木製品の数量は169本、（両口箸84本、片口箸85）、寸法は一番ながいもので24cm、短いもので15cm、数量的には19～23cmのものが多く見られた。

溝７上層（図42－42～115、図43－116～132）

出土かわらけは大皿153個体（19,820g）、小皿126個体（5,690g）であり、本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で129.4g、小皿で46.6gであった。この数値により、おそらく大皿は153個体、小皿は122個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は碗・皿類５点（白磁口兀３、不明２）であり、国産陶磁器では壺・甕類40点（常滑40）、

碗・皿類１点（山茶碗１）、捏鉢８点（常滑３、山茶碗窯５）、手焙り２点（土器質２）、瓦１点、硯１点であった。

図42－57はかわらけ質の製品で、手焙りとも考えられる。68は縫い針で全長57㎜、最大径1.35㎜、針の目処は0.5㎜程でしっかり残っている（原寸で図示）。73は大形の釘で布団針もしくは畳針とも思われる。

溝７下層（図43－133～163、図44－164～233、図45－234～243）

出土かわらけは大皿438個体（62.560g）、小皿320個体（15,420g）であり、本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で145.1g、小皿で47.6gであった。この数値により、おそらく大皿は431個体、小皿は324個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は碗・皿類11点（青磁碗11）、壺・瓶類５点（白磁１、青白磁３、褐釉１）であり、国産陶磁器では壺・甕類70点（常滑68・渥美２、瀬戸１）、碗・皿類３点（山茶碗２、山皿１）、捏鉢18点（常滑８、山茶碗窯10）、瓦１点、砥石３点であった。

図44－214は縫い針で残長55㎜、最大径1.5㎜、目処は折損している（原寸で図示）。215は船釘であろうか。216は灯明台の一部か、復元径は7.4㎝である。217、218は銅製品。217は飾り金具と思われる。218は調度品の座金、七宝の透かし文様が施されている。図45－243は不明の骨製品。断面は蒲鉾形をしており、両端に孔が穿たれている。武具に付く鞐（こはぜ）とも考えられる。

溝７掘り方（図45－244～283、図46－284～349）

出土かわらけは大皿613個体（79,000ｇ）、小皿337個体（22,160ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１固体の平均重量は大皿で144.7ｇ、小皿で49.0ｇであった。この数値により、おそらく大皿は546個体、小皿は452個体程度が含まれていたと考えられる。また、手づくね成形のかわらけ皿は大小で10点（160ｇ）を数えた。

舶載陶磁器は碗・皿類12点（青磁碗５、白磁碗１、皿３）であり、国産陶磁器では壺・甕類106点（常滑102、渥美４）、碗・皿類２点（山茶碗１、入子１）、捏鉢22点（常滑４、山茶碗窯18）、手焙り６点（土器質４点、瓦器質３）、鍔釜２点、瓦５点、土器質壺１点、滑石１点であった。

図45－269は胎土がかわらけ質の小壺である。288は転用品で物差しとして使用されたと考えられる。刻みの間隔は3.5㎝である。箸状木製品の数量は162本（両口箸127、片口箸35）であり、寸法は18～24㎝の物が多く見られた。

図64－300は丸根の鏃、343は縫い針である。残長54㎜、最大径1.25㎜、目処は欠損している（原寸で図示）。

建物６（図47－１～10）

本遺構では図示した以外の出土遺物はない。

かわらけ溜り５（図47－11～55、図48－56～60）

出土かわらけは大皿188個体（29,370ｇ）、小皿132個体（7,350ｇ）を数える。本遺構では完形のかわらけ皿は出土していない。

舶載陶磁器は碗・皿類１点（青磁碗１）であり、国産陶磁器では壺・甕類８点（常滑８）、碗・皿類１点（早島１）、鍔釜１点、滑石１点であった。

かわらけ溜り６

図示できる遺物はないが、かわらけ皿の個体数と重量、他の出土遺物の点数を記載しておく。

かわらけ大皿は35個体（24,180ｇ）、小皿44個体（1,700ｇ）を数える。本遺構では完形のかわらけ皿は出土していない。国産陶磁器では壺・甕類２点（常滑２）、捏鉢１点（山茶碗窯１）と少量であった。

かわらけ溜り7（図48－61、62）

出土かわらけは大皿25固体（2,860ｇ）、小皿28固体（1,335ｇ）を数える。本遺構でのかわらけ皿完形品１個体の平均重量は小皿は42.5ｇであり、この数値から小皿は31個体程度が含まれていたと考えられる。大皿については完形品が無く算出できなかった。

舶載陶磁器は壺・甕類１点（白磁１）であり、国産陶磁器では捏鉢２点（山茶碗窯２）であった。

土壙5（図48－63～85）

出土かわらけは大皿65個体（11,020ｇ）、小皿81個体（3,840ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１固体の平均重量は大皿で160.0ｇ、小皿で46.7ｇであった。この数値により、おそらく大皿は69個体、小皿は82個体程度が含まれていたと考えられる。

国産陶磁器では壺・甕類15点（常滑15）であり、胎土がかわらけ質の円盤１点がある。

図48～85は建具または家具の部材と考えられる。全長40.8㎝、釘穴が２箇所確認されており、１箇所には木釘が遺存している。

［六面］

溝8（図49－１～41）

出土かわらけは大皿78個体（9,750ｇ）、小皿35個体（1,690ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１固体の平均重量は大皿で145ｇ、小皿で60ｇであった。この数値により、おそらく大皿は67個体、小皿は28個体程度が含まれていたと考えられる。また、手づくね成形のかわらけ皿は大小で10点（160ｇ）を数えた。

舶載陶磁器は碗・皿類１点（青磁碗１）であり、国産陶磁器では壺・甕類58点（常滑54、渥美４）、碗・皿類１点（山茶碗１）、捏鉢12点（常滑５、山茶碗窯７）、滑石１点であった。

図25－25は曲げ物の蓋で桜皮の取っ手が遺存している。32は鉄製品で天秤の皿か、口縁直下に１箇所穿孔が見られる。33はまな箸（広辞苑によると「真魚箸」、魚を調理する時に使用する箸）であろうか。

溝8掘り方

図示した遺物はないが、かわらけ皿の個体数と重量、他の出土遺物の点数を記載しておく。

出土かわらけは大皿18個体（2,590ｇ）、小皿９個体（470ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１固体の平均重量は大皿で160ｇ、小皿で60ｇであった。この数値により、おそらく大皿は16個体、小皿は８個体程度が含まれていたと考えられる。

その他の出土遺物の点数は国産陶磁器では壺・甕類18点（常滑18）のみである。

かわらけ溜り8（図50－１～19）

出土かわらけは大皿28個体（3,710ｇ）、小皿19個体（1,090ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１固体の平均重量は大皿で155.6ｇ、小皿で56.7ｇであった。この数値により、おそらく大皿は24個体、小皿は19個体程度が含まれていたと考えられる。また、手づくね成形のかわらけ皿は大小で４点（250ｇ）を数えた。

土壙7（図50－20～26）

本遺構では図示した以外の出土遺物はない。

［七面］

溝9（図50－27～31）

出土かわらけは大皿３個体（630ｇ）、小皿１個体（120ｇ）であり、完形品はない。また、手づくね成形のかわらけ皿は３点（160ｇ）出土している。

国産陶磁器の出土点数はは壺・甕類３点（常滑３）、鍔釜１点、瓦１点を数えた。

溝状遺構（図50－32～40）

本遺構では図示した以外の遺物はない。

柱穴・表面採集の遺物（図51－１～28）

図51－１、２はかわらけ質の土製品、ともに小型の手焙りと考えられるがよく判らない。１は穴の開けられた三足の脚をもち、内定面には十字を組み合わせた線刻文様が見られる。23圭頭、呪符の可能性も考えられるが墨痕は見られなかった。24は鉄製の天秤皿であろうか。28は銅製品、飾り金具あるいは刀装具の芝引（しばひき）であろうか。

一面上包含層（図52～57－１～260）

出土したかわらけは、大皿861個体（13,793ｇ）、小皿532個体（2,407ｇ）であり、本遺構出土のかわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で154.0ｇ、小皿で51.6ｇであった。この数値によりおそらく大皿は922個体、小皿は543個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は瓶子・盤類１点（白磁１）であり、国産陶磁器では捏鉢２点（山茶碗窯２）であった。

その他出土遺物の破片点数は、舶載陶磁器では碗・皿・鉢類17点（青磁碗６、鉢２、白磁碗２、皿５、青白磁２）、壺・瓶類２点（白磁２）、盤類４点（緑釉１、黄釉３）、国産陶磁器では壺・甕類22点（常滑15、瀬戸６、亀山１）、瀬戸・山茶碗窯の碗・皿類43点（折縁18、卸皿７、天目６、天目台１、盤１、入子・山皿類10）、捏鉢・摺り鉢30点（常滑18、山茶碗窯７、備前４、魚住１）、手焙り11点（瓦質11）、土製品２点（鍋２）、瓦２点、瓦器８点、石製品17点（砥石11、硯１、滑石５）、擦り常滑４点が出土した。

図53－100～121は瀬戸製品である。図55－161は手づくね成形の土器である。灰白色の硬質な胎土で搬入品であろう。灯明皿として使用している。162は土製灯明台の脚部。163は土製手びねりの人形。175は鳴滝産の仕上げ砥、176、177は上野産の中砥である。図56－184～245は62枚を連ねた緡状態で出土した。

二面上包含層（図58～図60－１～132）

出土したかわらけは、大皿235個体（42,130ｇ）、小皿200個体（7,670ｇ）である。本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で160ｇ、小皿で45.7ｇであり、この数値により、おそらく大皿は263個体、小皿は168個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は碗・皿類21点（青磁碗19、白磁碗１、皿１）、壷・瓶類９点（青白磁５、黄釉２）、その他（不明１、青磁香炉１）であり、国産陶磁器では壺・甕類118点（常滑106、亀山８、瀬戸４）、碗・皿類39点（瀬戸17、山茶碗３、山皿３、入子５）、捏鉢17点（常滑７、山茶碗窯10）・摺り鉢１点（備前１）、手焙り５点（土器質１、瓦器質４）、瓦４点、石製品14点（砥石９、滑石５）、不明１点であった。図58－45は縫い針であろうか。全長41㎜、太さ1.4㎜、針目は欠損している。（原寸で図示）。97は骨製品、馬具のシオデである。菊花を重ねた文様が線刻されている。100は上野産の中砥である。図60－114、115は毬杖の毬である。

三面包含層（図61～図66－１～268）

出土したかわらけは、大皿671個体（105,530ｇ）、小皿449個体（19,910ｇ）である。本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で144.8ｇ、小皿で47.1ｇであり、この数値により、おそらく大皿は728個体、小皿は422個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は碗・皿類27点（青磁碗22、把手１、白磁碗１、皿３、天目１）、壷・瓶類８点（青白磁３、黄釉４、褐釉１）、その他（青磁１）であり、国産陶磁器では壺・甕類170点（常滑166、渥美３、亀山１）、碗・皿類14点（瀬戸７、入子４、山茶碗３）、捏鉢71点（常滑26、山茶碗窯45）、手焙り９点

（土器質４、瓦器質５）、鍔釜１点、瓦８点、石製品16点、（砥石５、硯２、滑石９）、であった。

図63－96は羽子板、黒漆の残痕が見られる。97、98は鍬、小型のものでまじないに使われた物であろうか。図64－117、118は鏑と思われる製品である。122、123は毬杖の毬。図65－136は板草履の芯、かなり小型であり形代と考えられる。149は螺鈿細工の小鳥、目や翼は漆で描かれている。螺鈿の素材は不明である。

四面包含層（図67～図69－１～172）

出土したかわらけは、大皿936個体（153,110ｇ）、小皿1,013個体（50,960ｇ）である。本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で163.2ｇ、小皿で47.1ｇであり、この数値により、おそらく大皿は938個体、小皿は1,082個体程度が含まれていたと考えられる。

舶載陶磁器は椀・皿類28点（青磁碗14、白磁皿14）、瓶子・盤類１点（白磁１）であり、国産陶磁器では壺・甕類106点（常滑103、渥美３）、碗・皿類２点（瀬戸盤１、早島１）、捏鉢33点（常滑４、山茶碗窯29）、手焙り４点（瓦器質４）、鍔釜７点、瓦２点、土製品２点、（盤１、壺）、石製品４点（砥石３、滑石１）であった。

図69－149は物差し、おおよそ一寸（約3.3㎝）刻みに目盛りを刻んでいる。157は弓、三枚打の弓幹である。

五面包含層（図70～図71－１～90）

出土したかわらけは、大皿164個体（28,880ｇ）、小皿198個体（10,770ｇ）であり、本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で160ｇ、小皿で53ｇであった。この数値により、おそらく大皿は180個体、小皿は203個体程度が含まれていたと考えられる。また、手づくね成形のかわらけは大皿で20個体（780ｇ）、小皿15個体（550ｇ）を数えた。

舶載陶磁器は椀・皿類６点（青磁碗４、白磁皿１、青白磁１）、瓶子・盤類４点（青磁１、白磁１、青白磁２）であり、国産陶磁器では壺・甕類74点（常滑72、渥美２）、碗・皿類１点（瀬戸入子１）、捏鉢18点（常滑５、山茶碗窯13）、土製品１点、（錘１）、石製品１点（滑石１）であった。

図70－17は青白磁の器台である。図71－50～53は縫い針である。

六面包含層（図71～図75－１～135）

出土したかわらけは、大皿132個体（22,330ｇ）、小皿143個体（8,430ｇ）である。本遺構かわらけ皿完形品１個体の平均重量は大皿で165.6ｇ、小皿で47.1ｇであり、この数値により、おそらく大皿は135個体、小皿は179個体程度が含まれていたと考えられる。また、手づくね成形のかわらけは大皿で150個体（3,880ｇ）、小皿で111個体（2,370ｇ）を数えた

その他の出土遺物の点数は舶載陶磁器では椀・皿類12点（青磁碗12）、瓶子・盤類１点（青白磁合子１）、国産陶磁器では壺・甕類262点（常滑241、渥美21）、碗・皿類４点（瀬戸碗１、山茶碗２、山皿１）、捏鉢21点（常滑１、山茶碗窯20）、手焙り２点（瓦質２）、土製品１点、（鍔釜１）、瓦２点、石製品６点（砥石３、硯２、滑石１）、坩堝1点であった。

図72－44はリング状の骨製品、加工途中のものなのか用途は不明である。図74－75は人形、目と口が見られる。

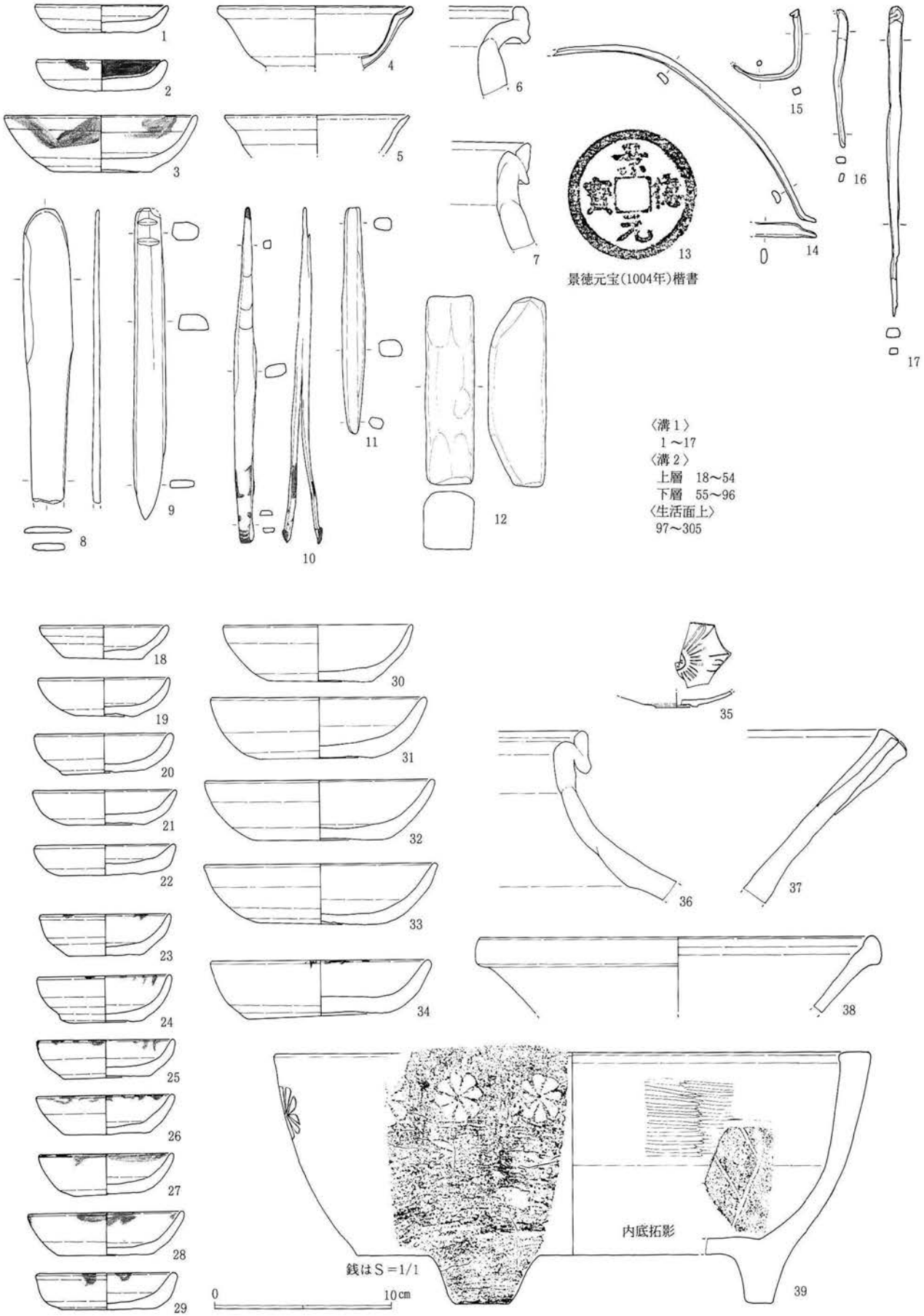
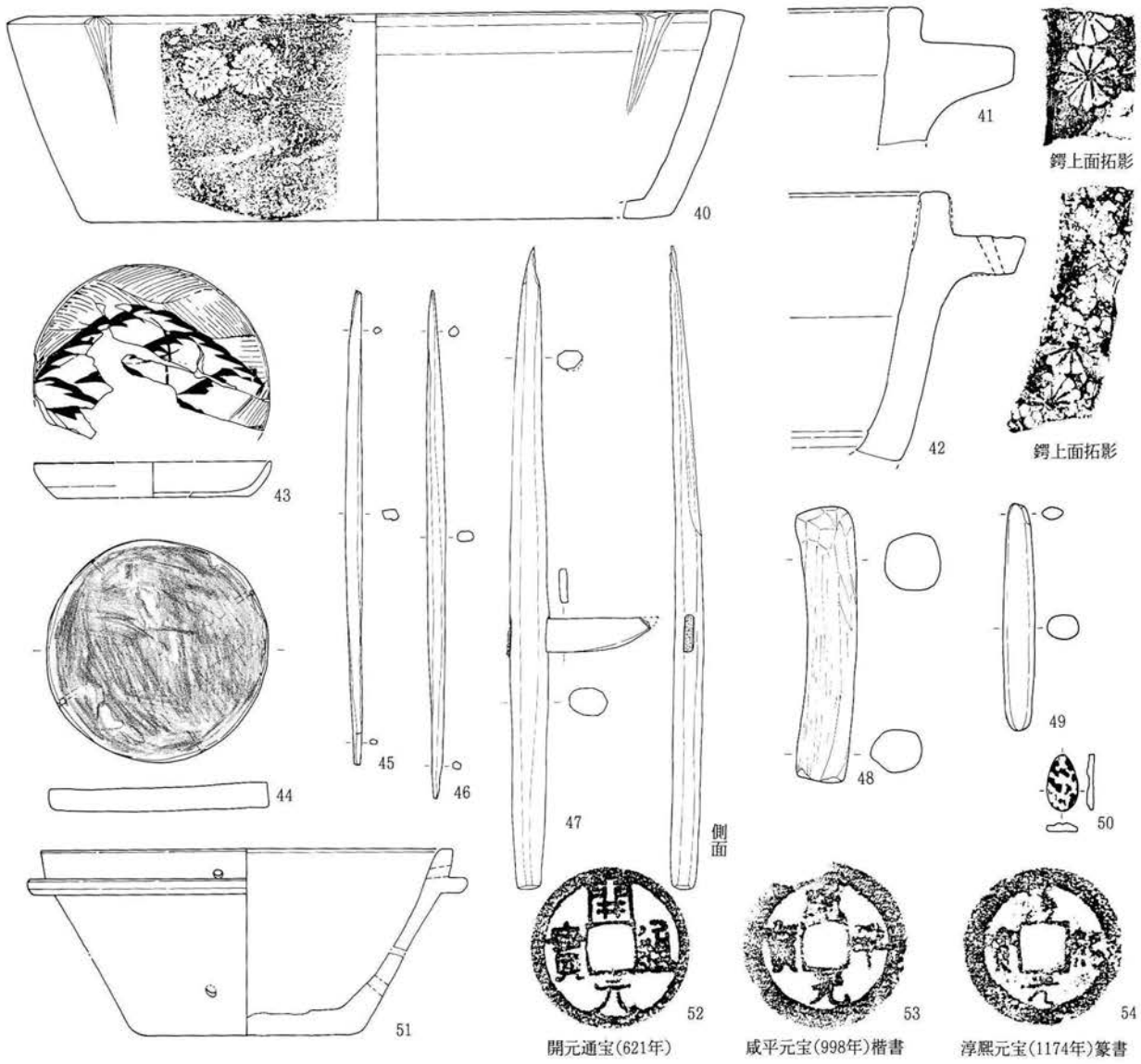


図31　溝1・2および生活面上の遺物（1）



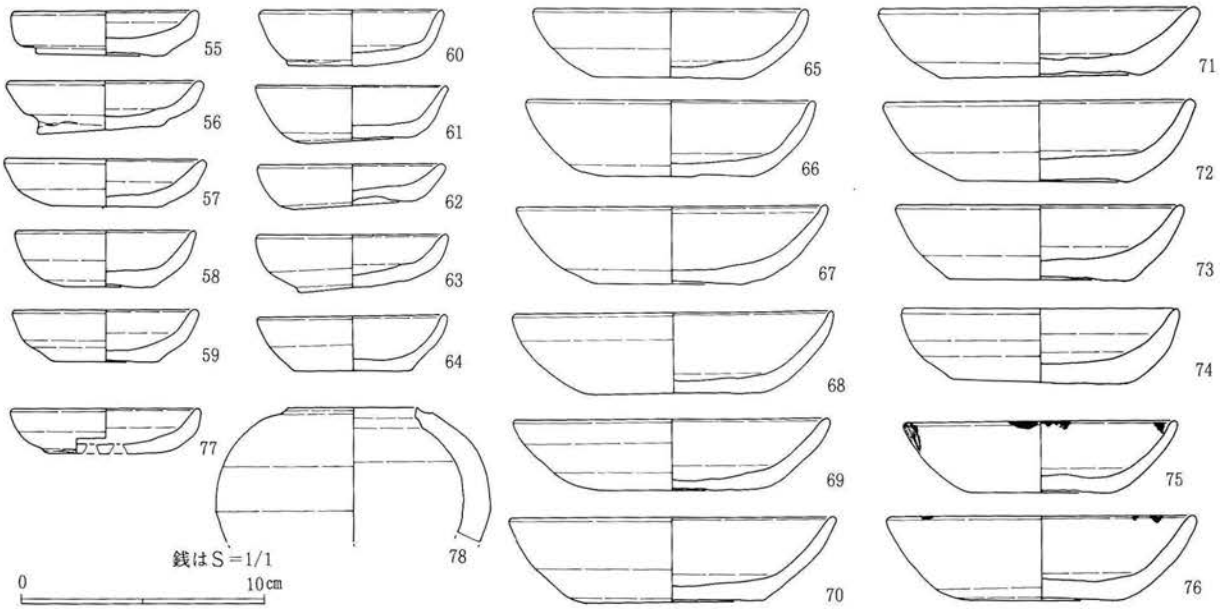


図32　溝１・２および生活面上の遺物（２）

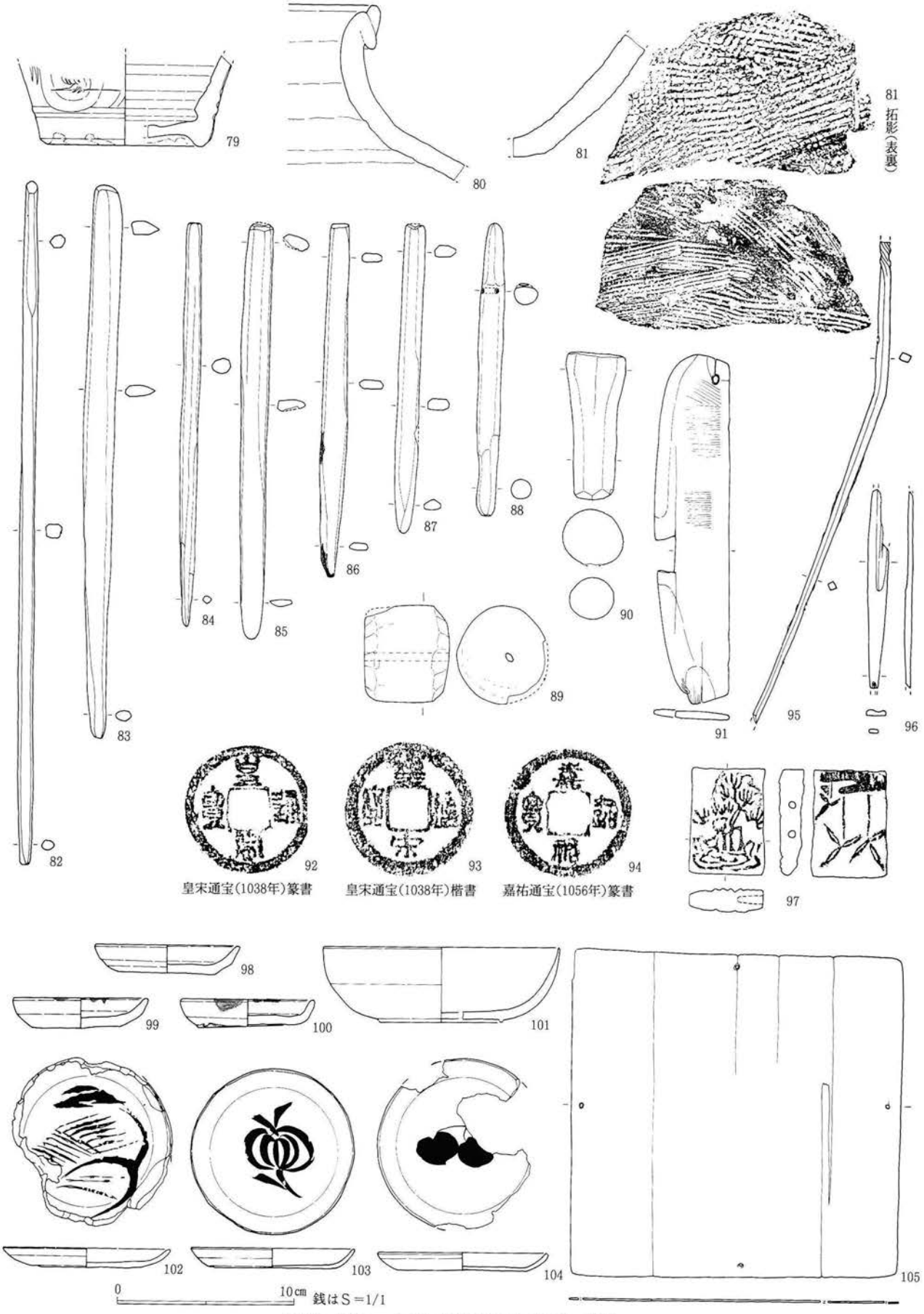


図33　溝１・２および生活面上の遺物（３）

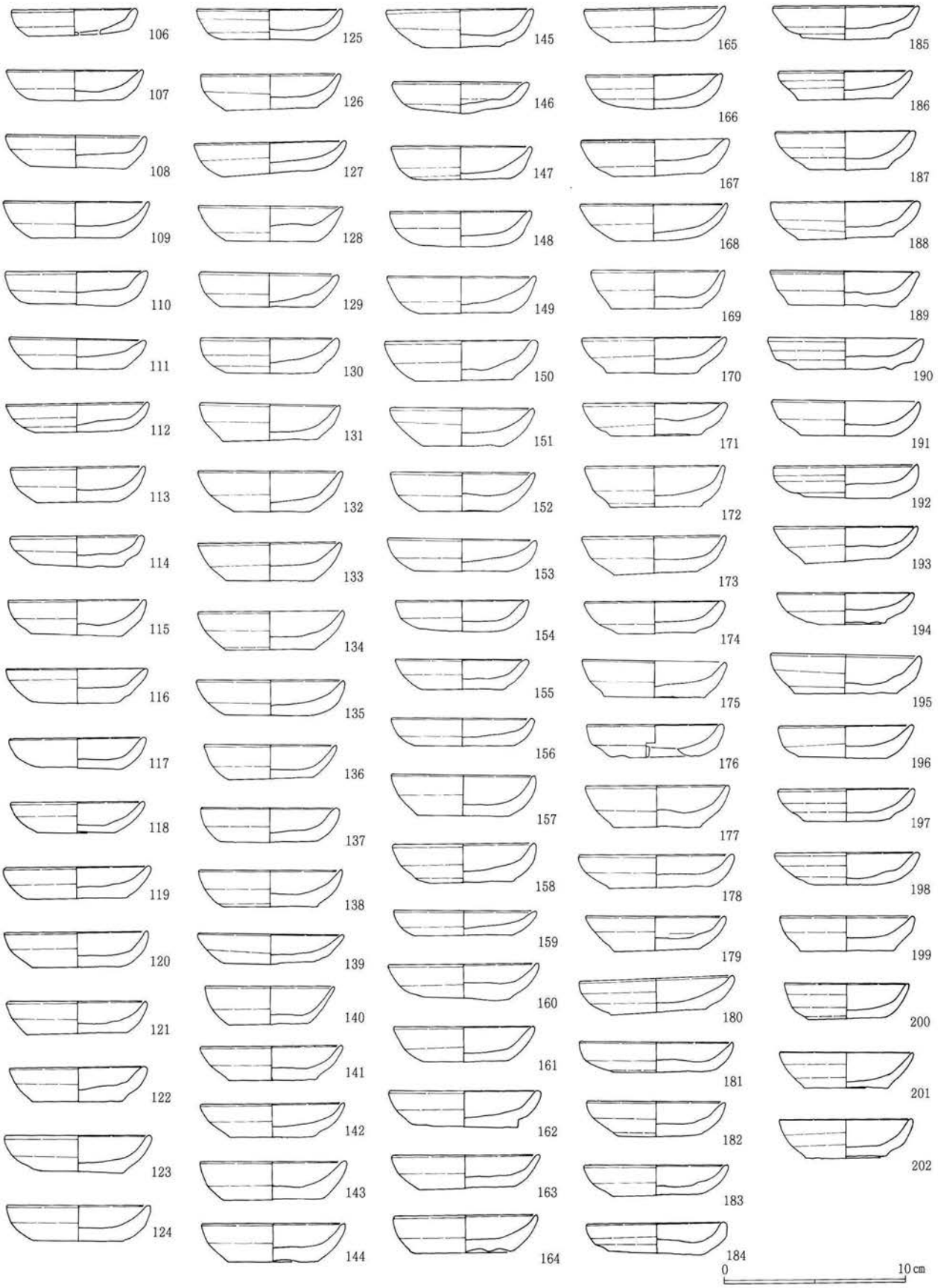


図34　かわらけ溜り１の遺物（１）

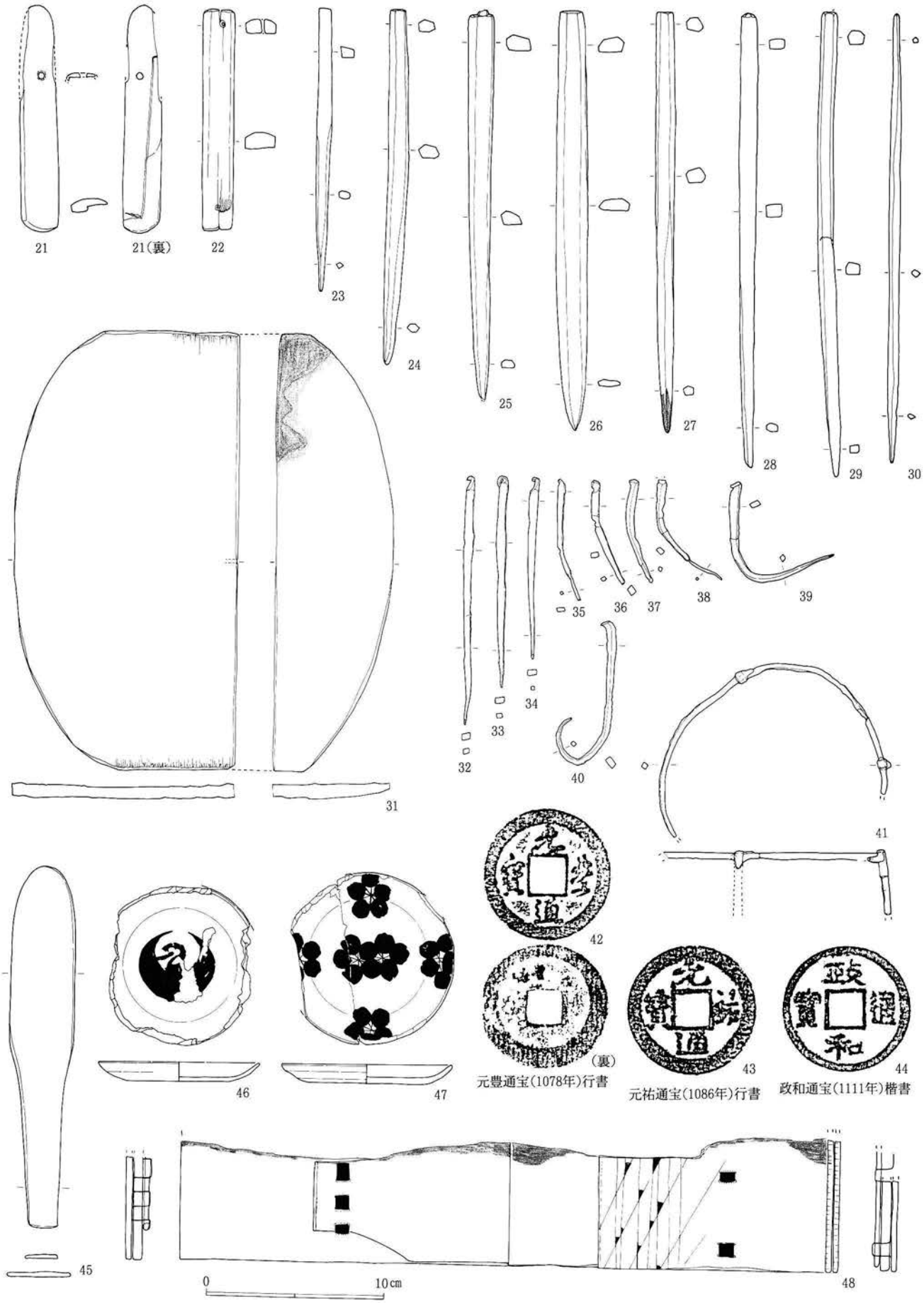


図37　溝３・４木組遺構１の遺物（２）

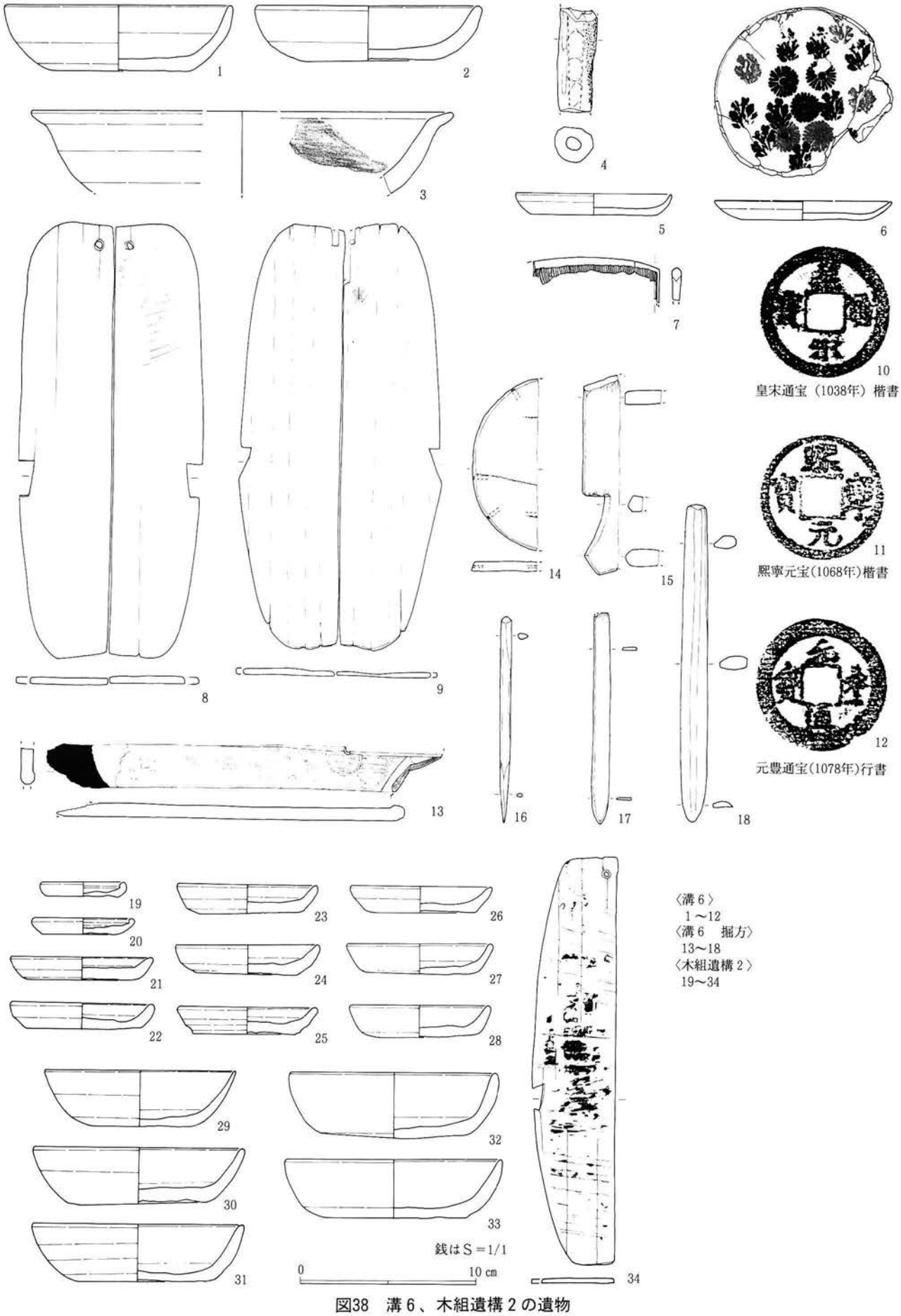


図38　溝６、木組遺構２の遺物

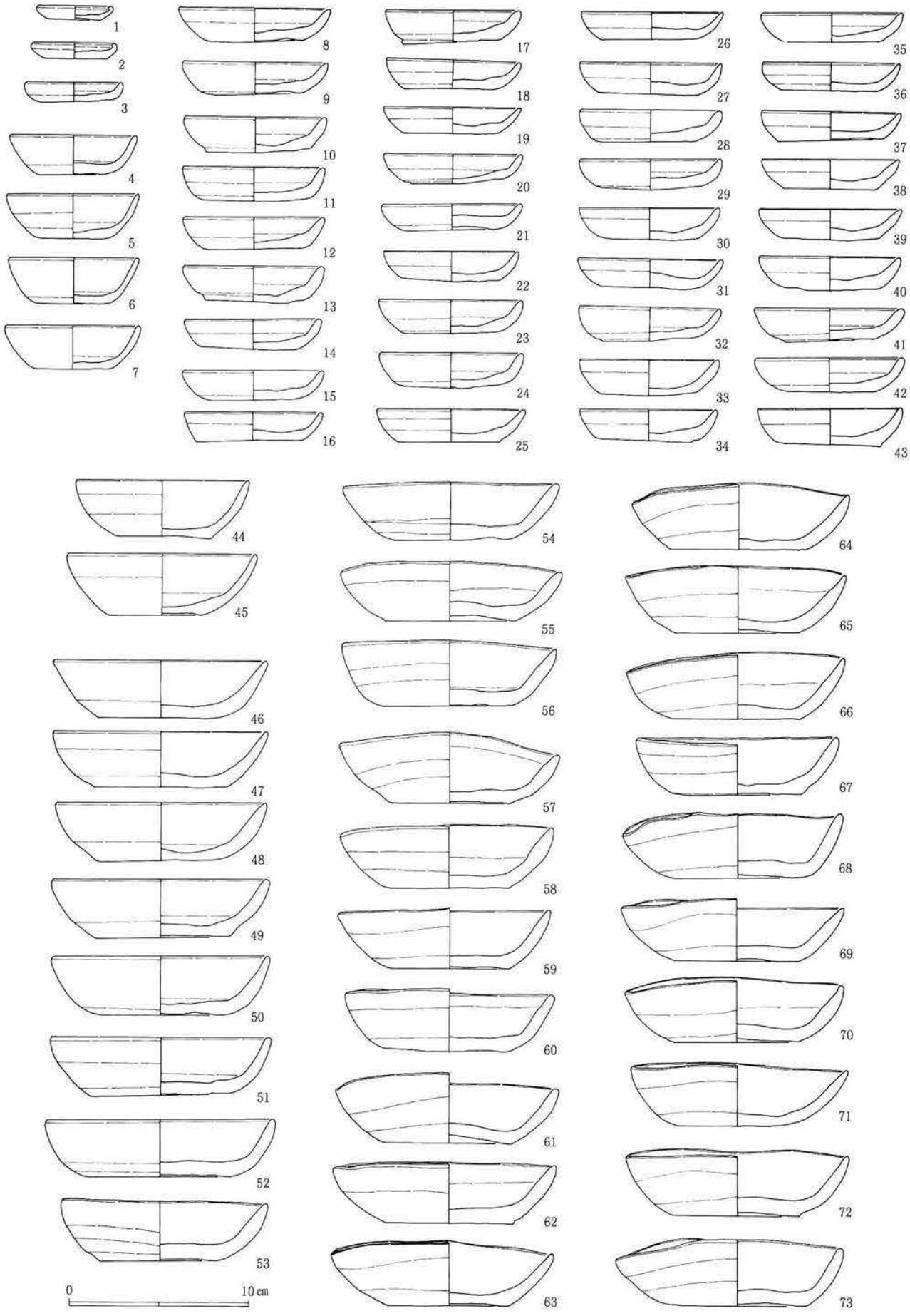


図39　かわらけ溜り３、土壙の遺物（１）

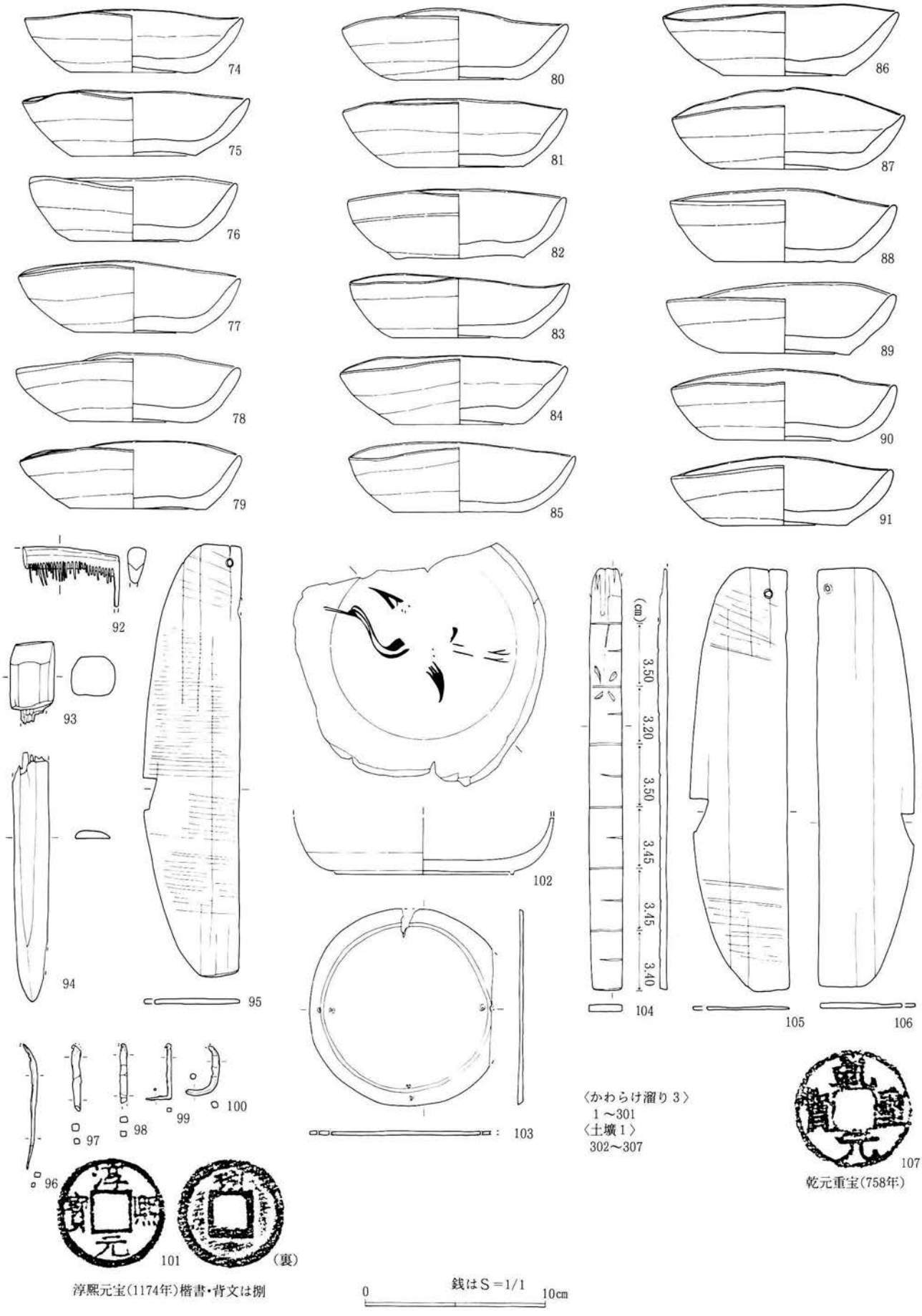


図40　かわらけ溜り3、土壙の遺物（2）

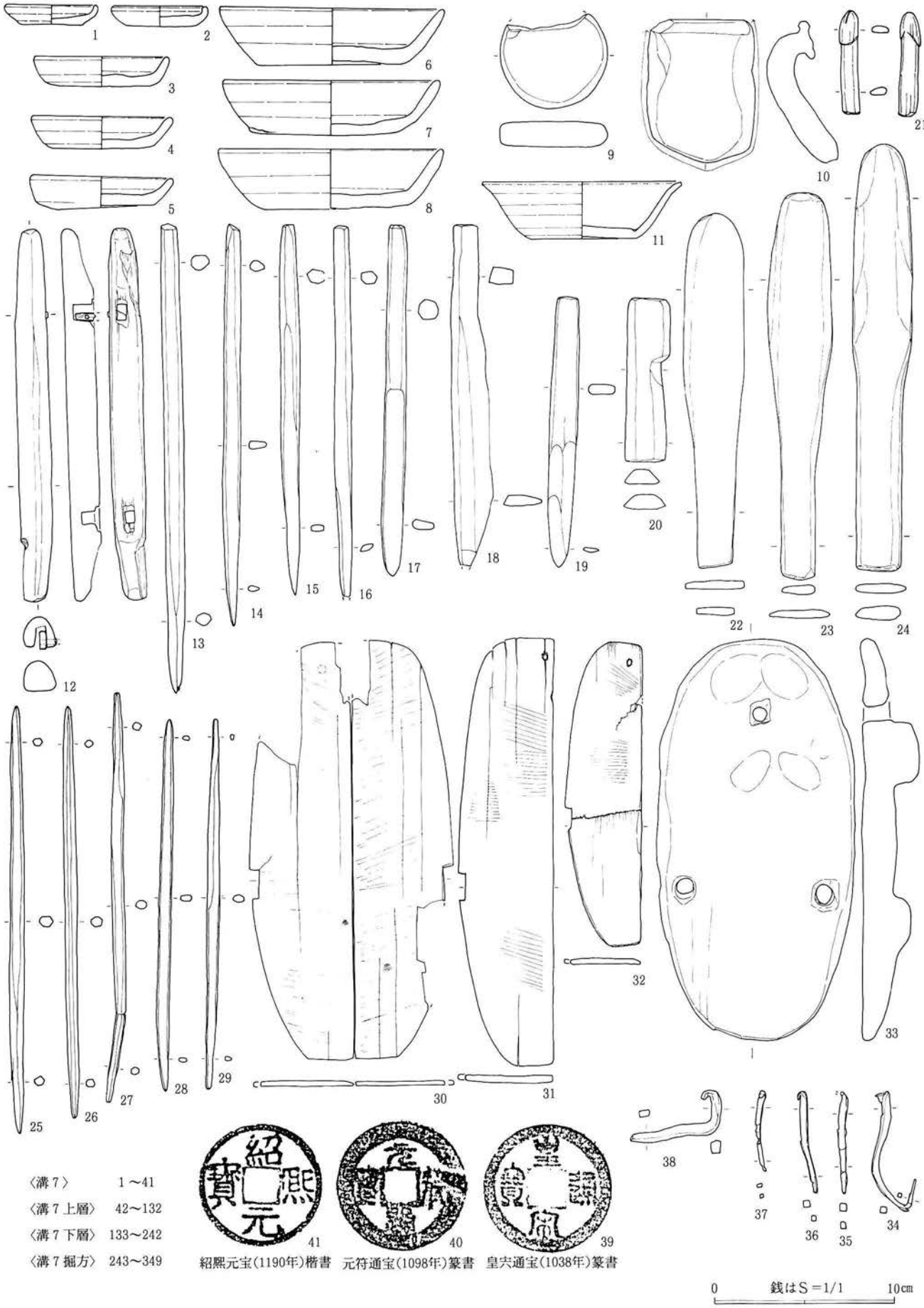

〈溝７〉　1～41
〈溝７上層〉　42～132
〈溝７下層〉　133～242
〈溝７掘方〉　243～349
紹熙元宝(1190年)楷書
元符通宝(1098年)篆書
皇宋通宝(1038年)篆書
0　銭はS＝1/1　10cm

図41　溝７の遺物（１）

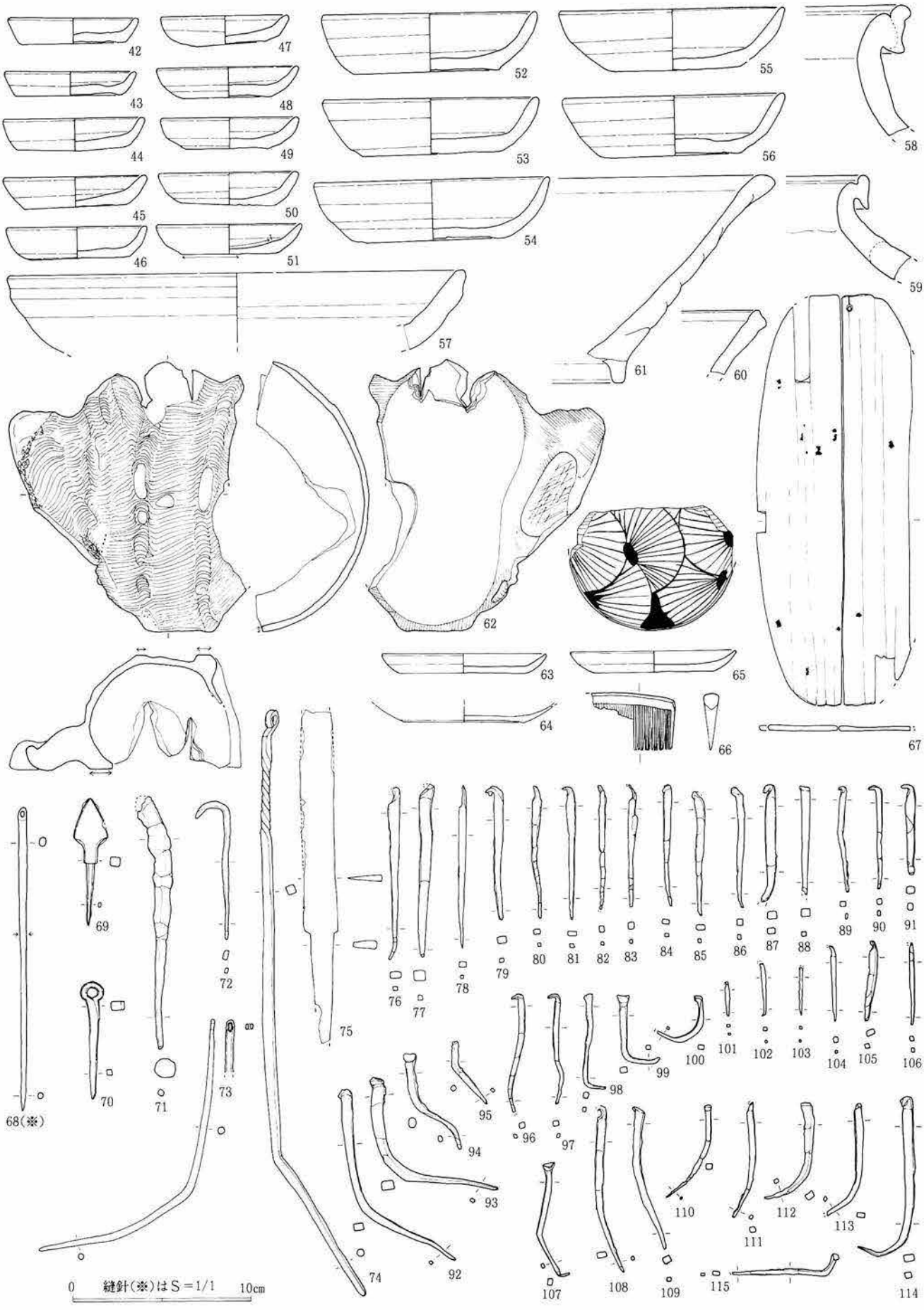
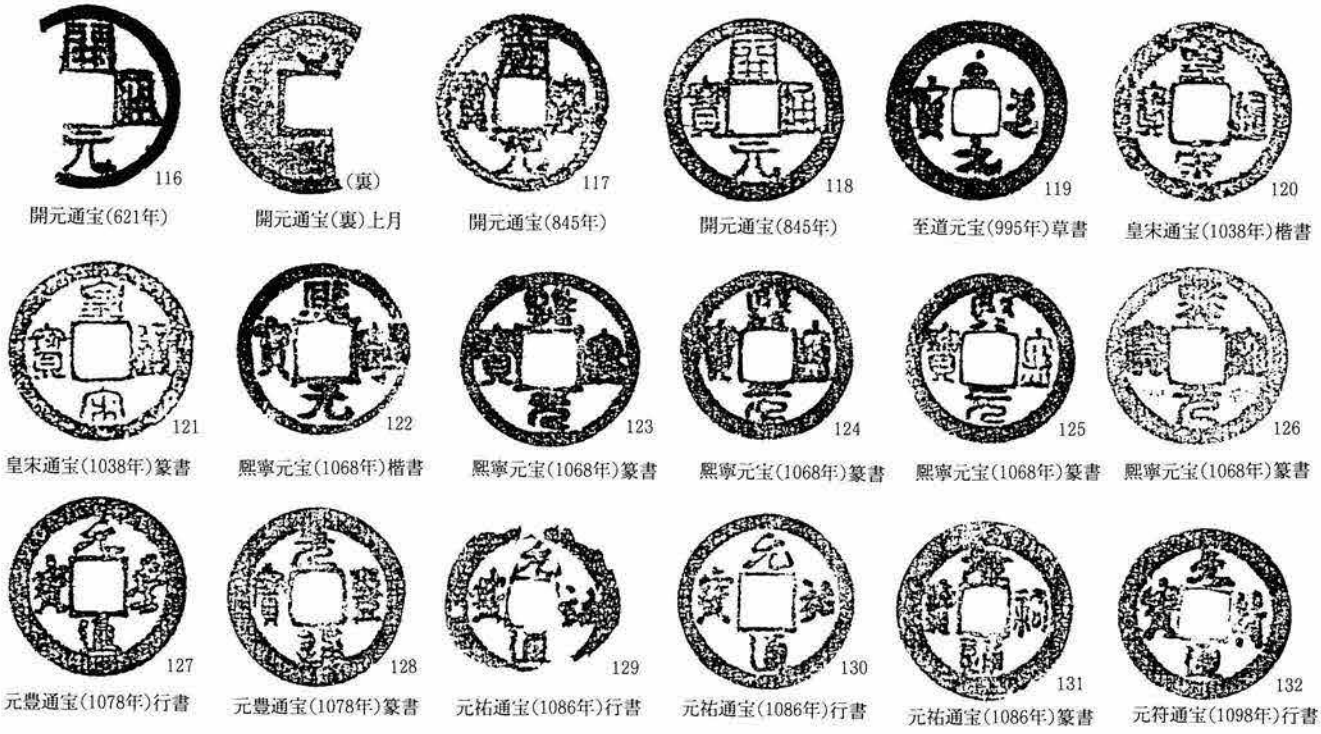

42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68(※)
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0 縫針(※)はS＝1/1 10cm

図42　溝７の遺物（２）


116
開元通宝(621年)
(裏)
開元通宝(裏)上月
117
開元通宝(845年)
118
開元通宝(845年)
119
至道元宝(995年)草書
120
皇宋通宝(1038年)楷書
121
皇宋通宝(1038年)篆書
122
熙寧元宝(1068年)楷書
123
熙寧元宝(1068年)篆書
124
熙寧元宝(1068年)篆書
125
熙寧元宝(1068年)篆書
126
熙寧元宝(1068年)篆書
127
元豊通宝(1078年)行書
128
元豊通宝(1078年)篆書
129
元祐通宝(1086年)行書
130
元祐通宝(1086年)行書
131
元祐通宝(1086年)篆書
132
元符通宝(1098年)行書

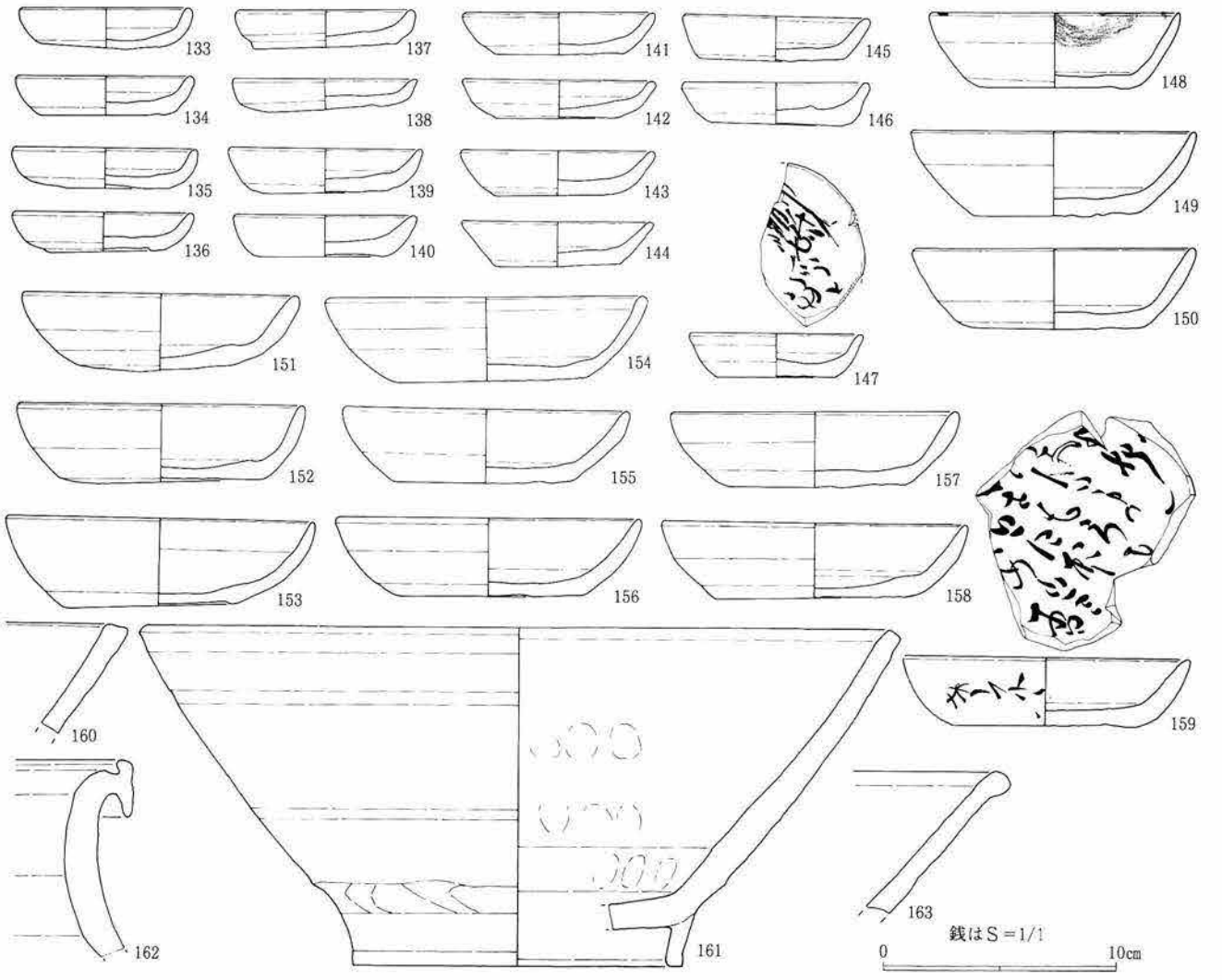
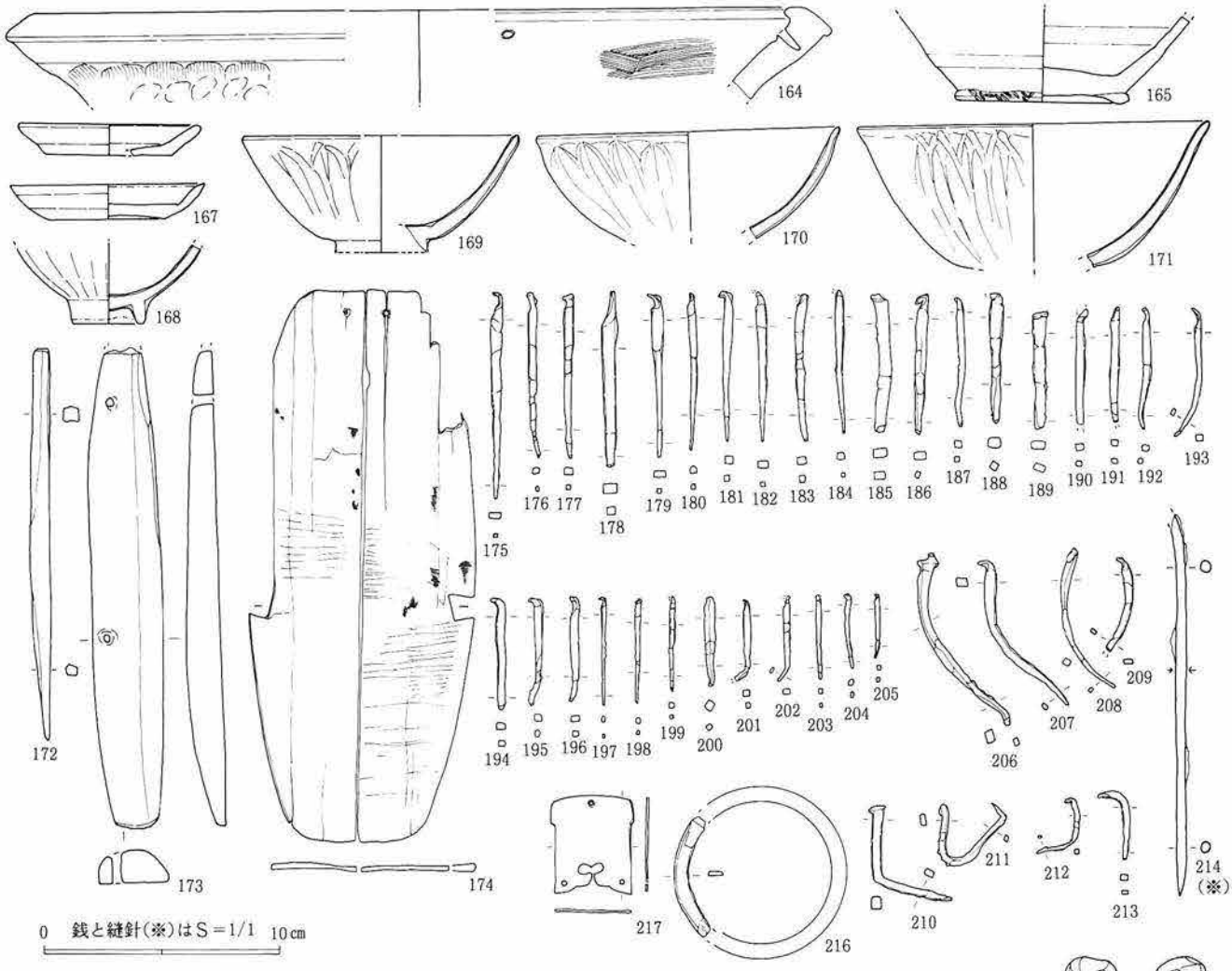

133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
銭はS＝1/1
0
10cm

図43　溝7の遺物（3）


164
165
167
169
170
171
168
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
211
212
213
214
(※)
217
216
210
0 銭と縫針(※)はS＝1/1 10cm

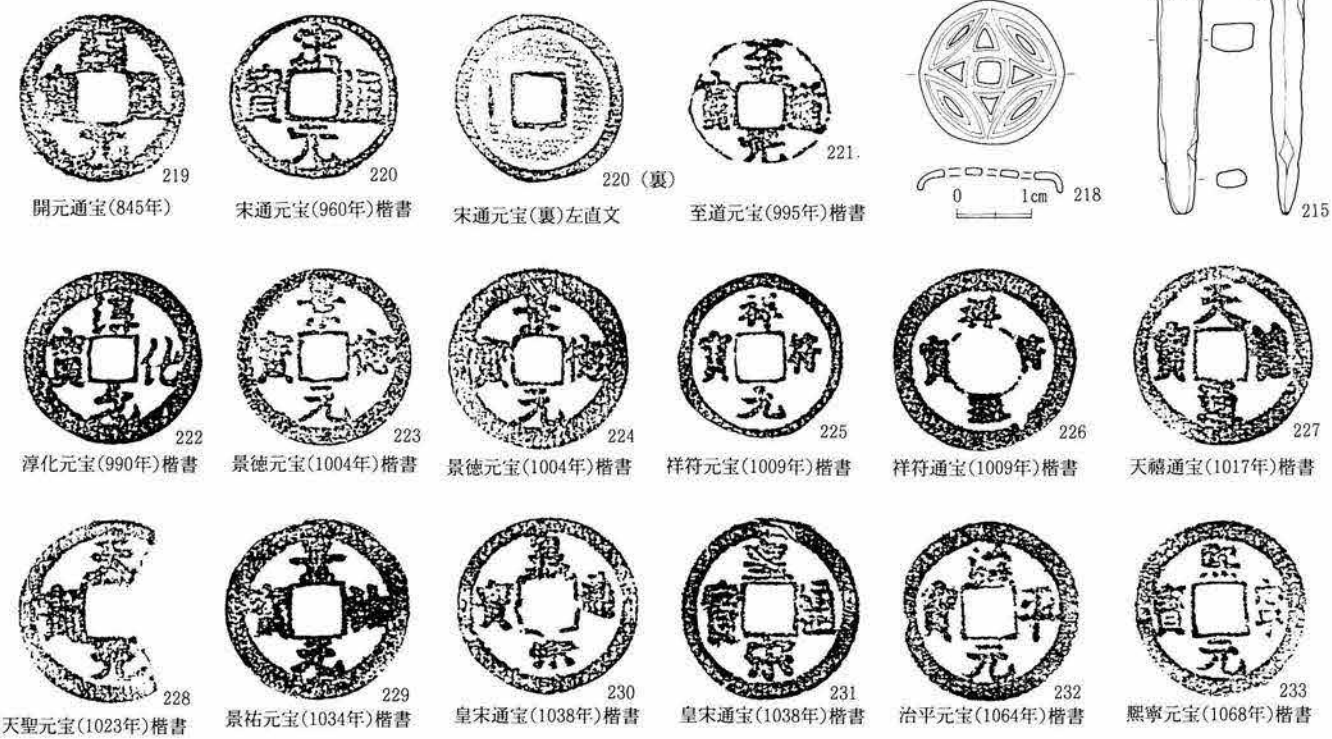

219
開元通宝(845年)
220
宋通元宝(960年)楷書
220（裏）
宋通元宝(裏)左直文
221
至道元宝(995年)楷書
0 1cm
218
215
222
淳化元宝(990年)楷書
223
景徳元宝(1004年)楷書
224
景徳元宝(1004年)楷書
225
祥符元宝(1009年)楷書
226
祥符通宝(1009年)楷書
227
天禧通宝(1017年)楷書
228
天聖元宝(1023年)楷書
229
景祐元宝(1034年)楷書
230
皇宋通宝(1038年)楷書
231
皇宋通宝(1038年)楷書
232
治平元宝(1064年)楷書
233
熙寧元宝(1068年)楷書

図44　溝７の遺物（４）

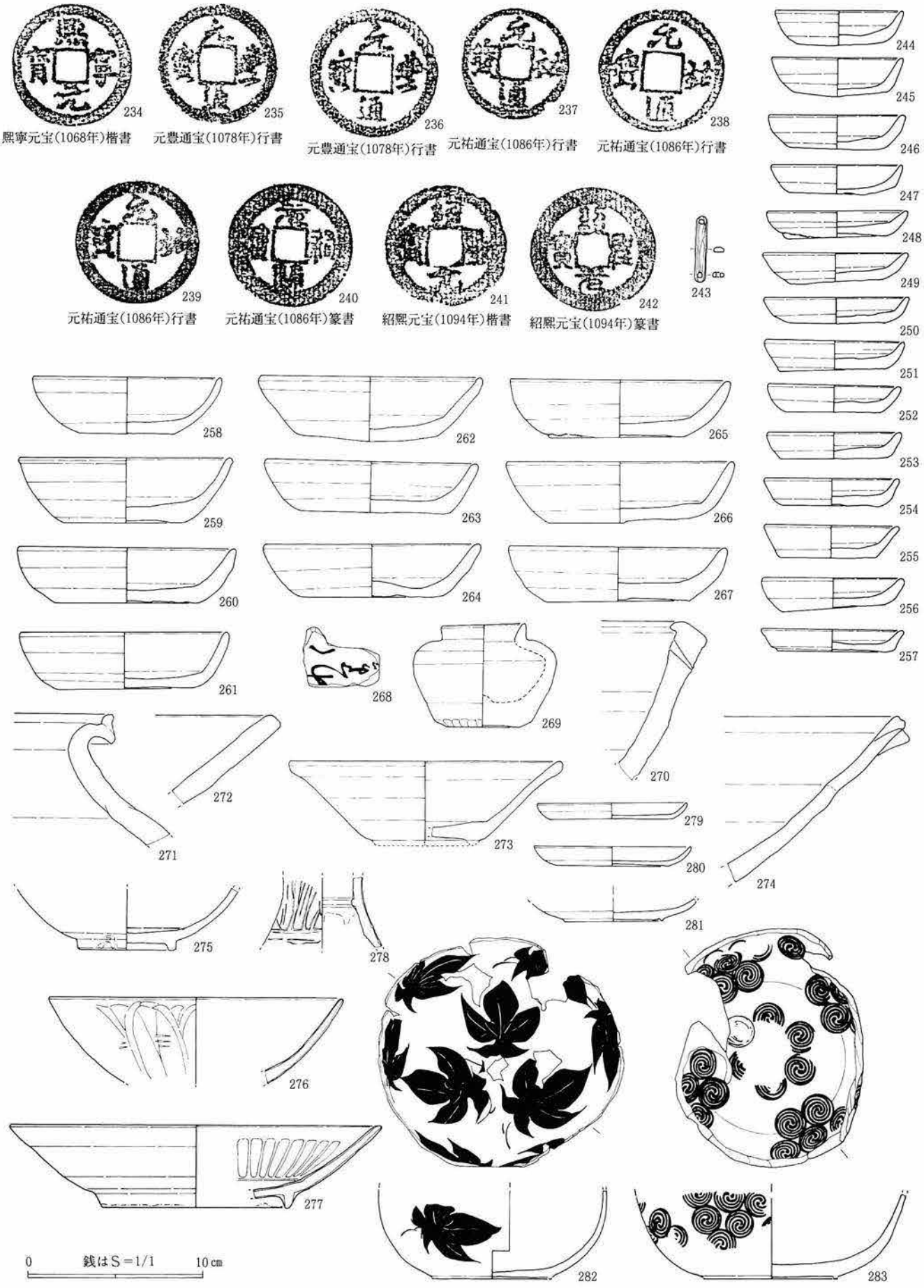

234
熙寧元宝(1068年)楷書
235
元豊通宝(1078年)行書
236
元豊通宝(1078年)行書
237
元祐通宝(1086年)行書
238
元祐通宝(1086年)行書
239
元祐通宝(1086年)行書
240
元祐通宝(1086年)篆書
241
紹熙元宝(1094年)楷書
242
紹熙元宝(1094年)篆書
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
0 銭はS＝1/1 10cm

図45　溝７の遺物（５）

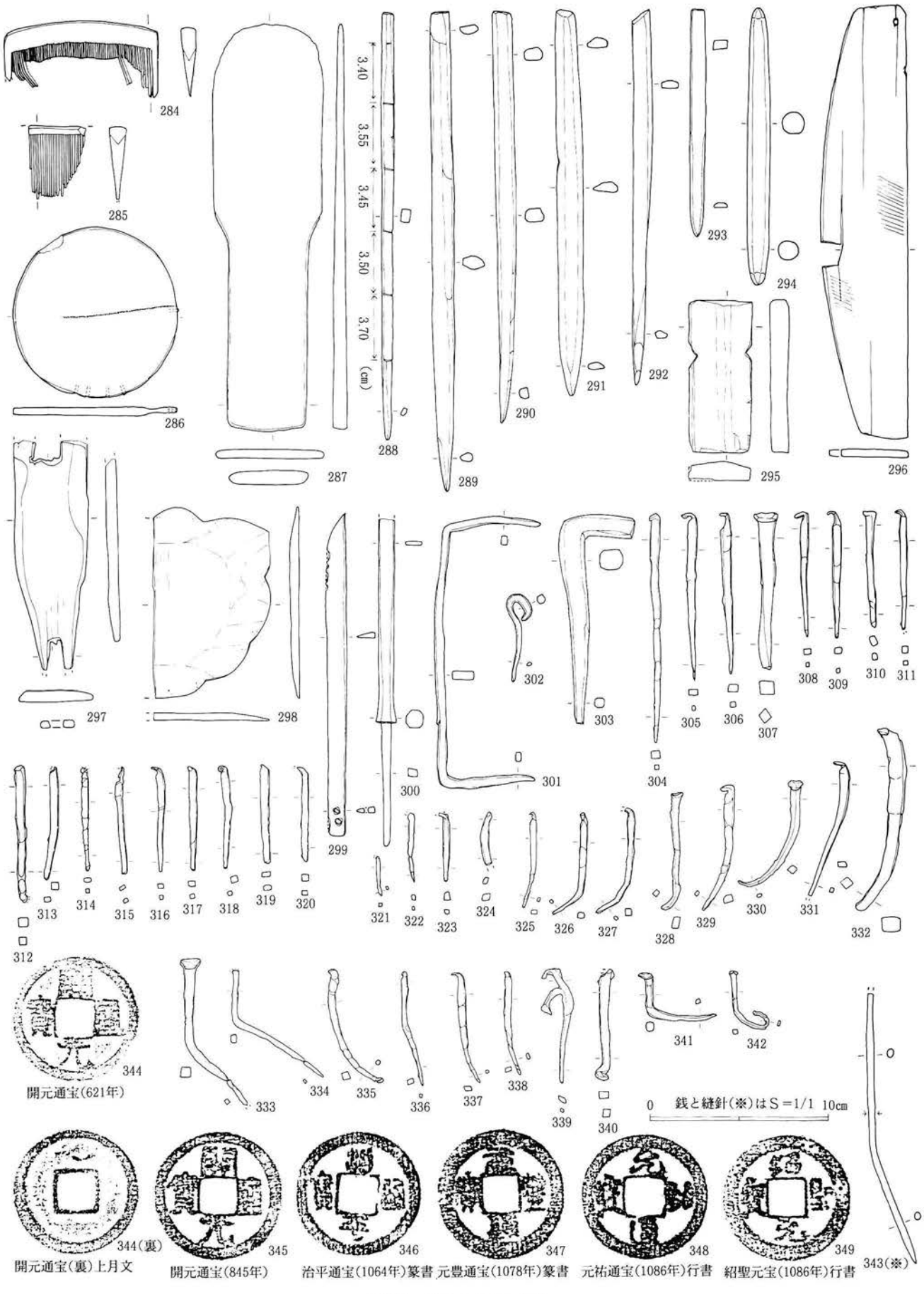

3.40
3.55
3.45
3.50
3.70
(cm)
開元通宝(621年)
0 銭と縫針(※)はS=1/1 10cm
開元通宝(裏)上月文
開元通宝(845年)
治平通宝(1064年)篆書
元豊通宝(1078年)篆書
元祐通宝(1086年)行書
紹聖元宝(1086年)行書

図46　溝７の遺物（６）

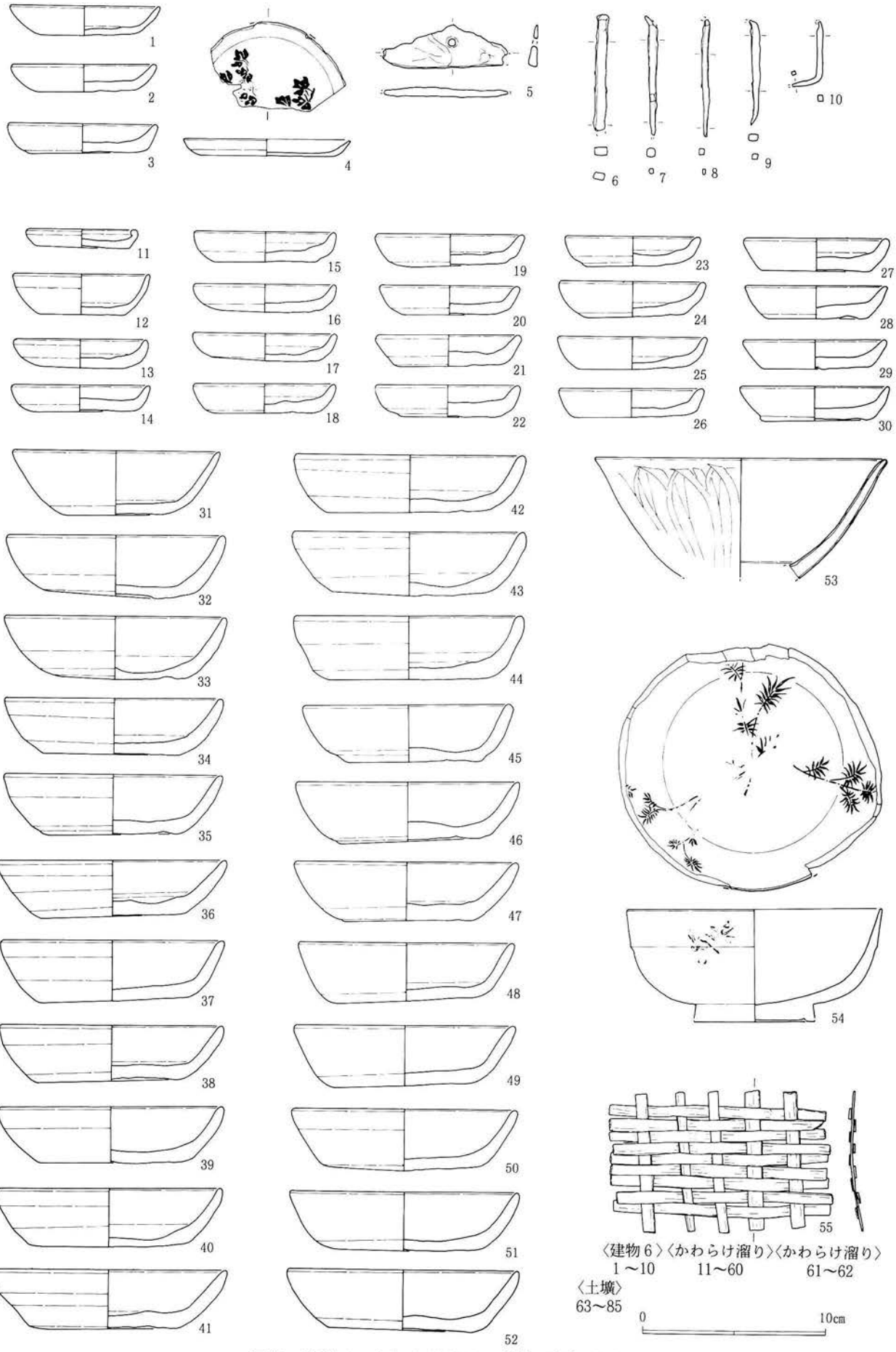


図47　建物６、かわらけ溜り、土壙の遺物（１）

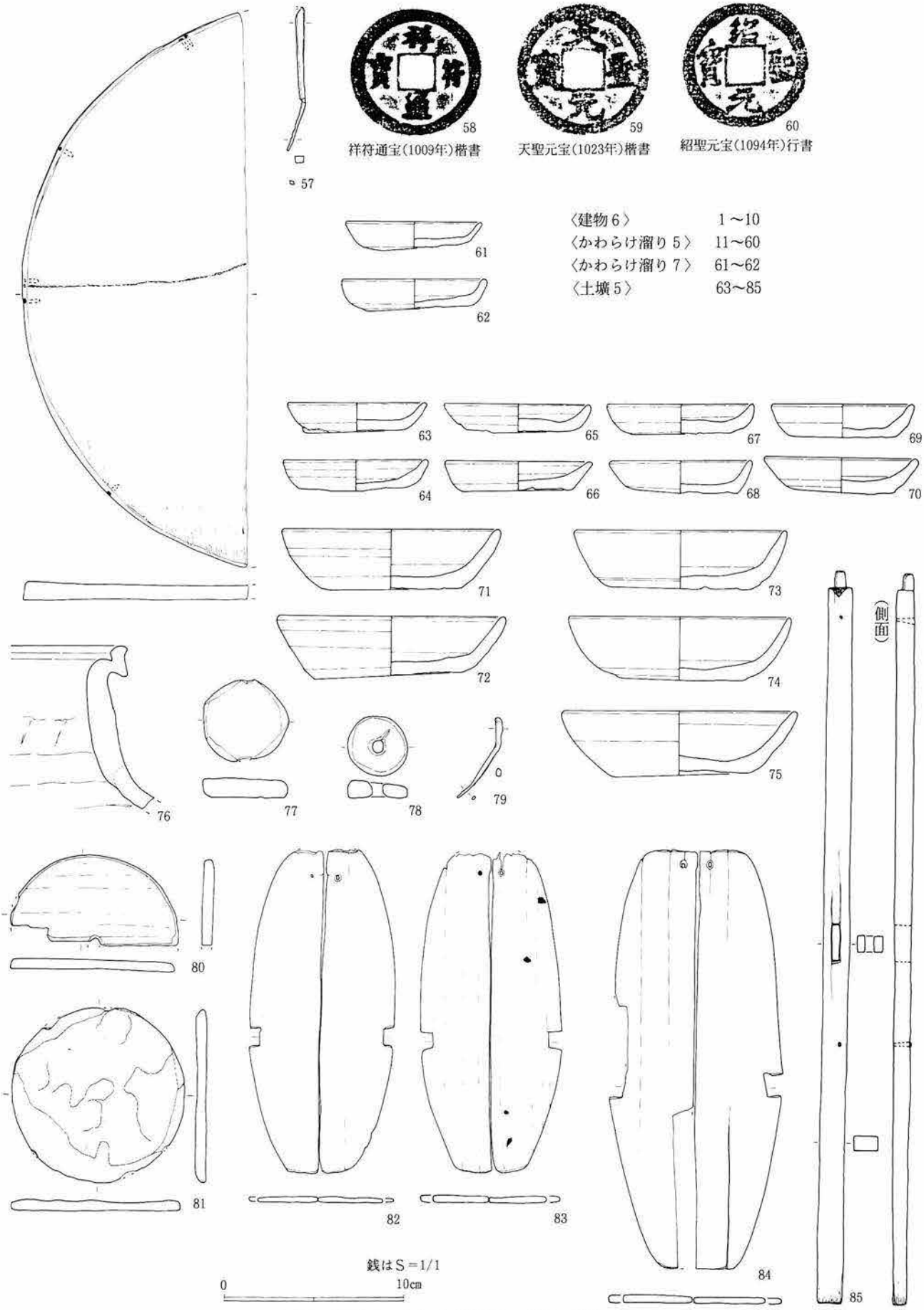


図48　建物６、かわらけ溜り、土壙の遺物（２）

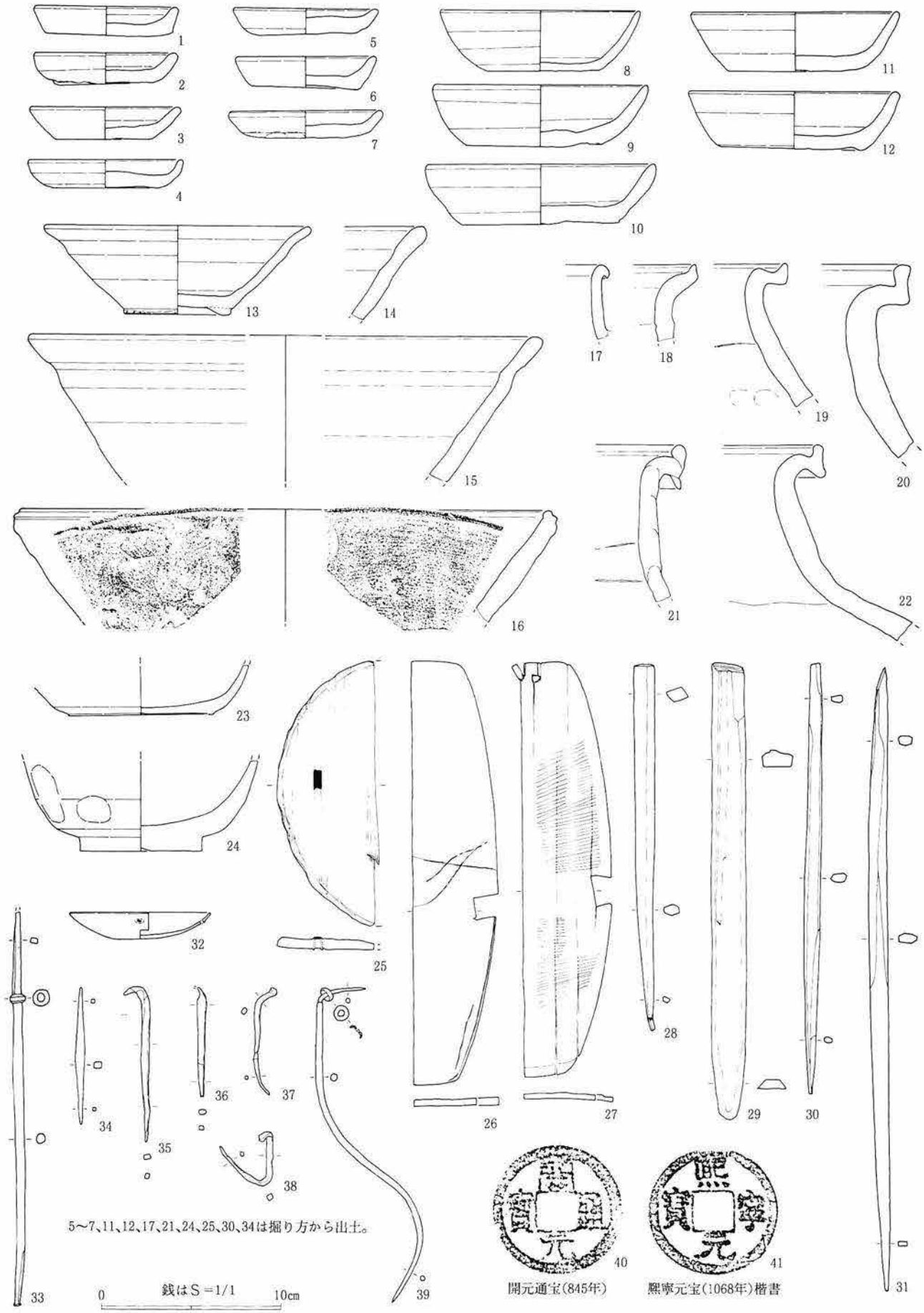

5～7、11、12、17、21、24、25、30、34は掘り方から出土。
0
銭はS＝1/1
10cm
開元通宝(845年)
熙寧元宝(1068年)楷書

図49　溝8の遺物

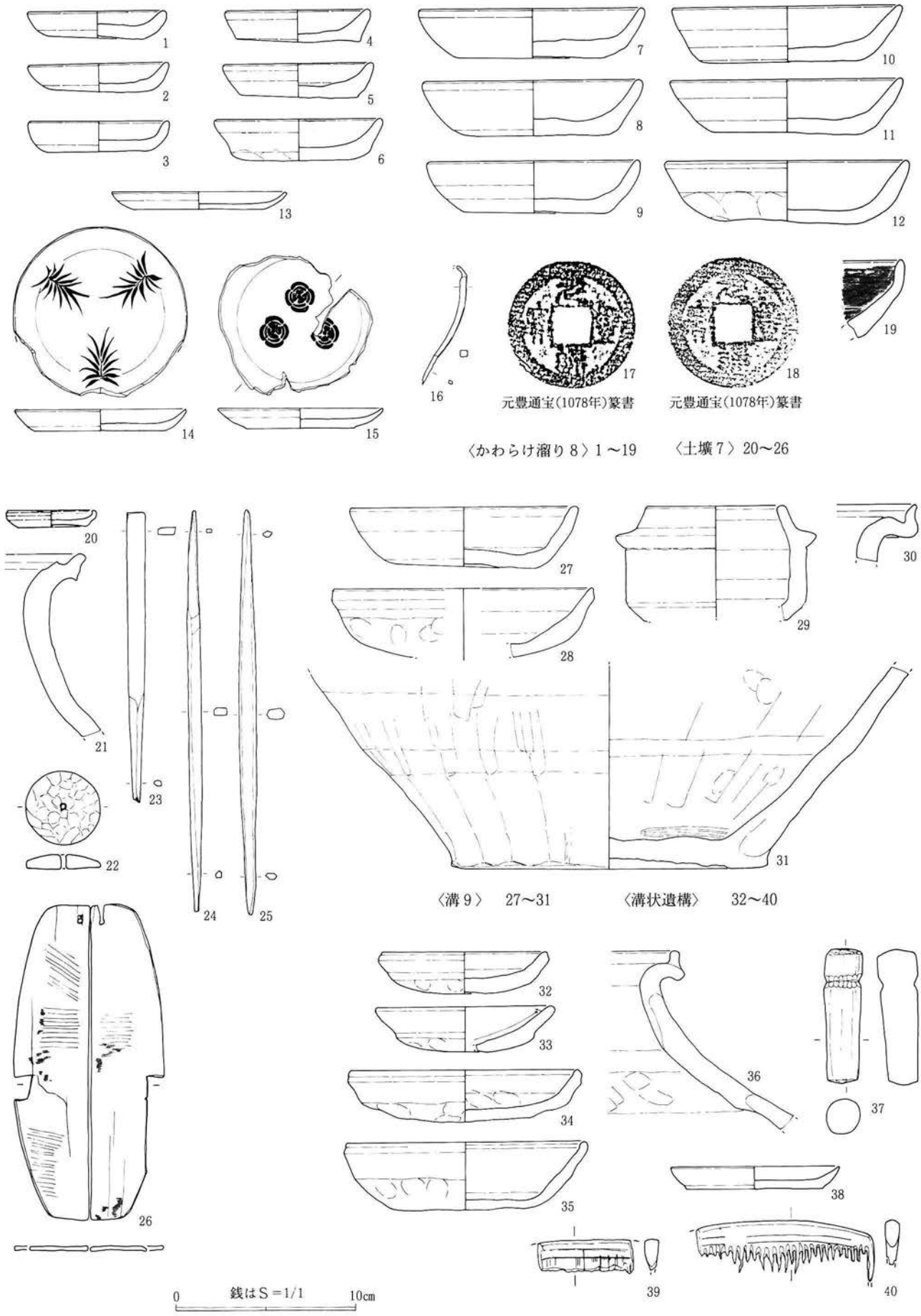


図50　かわらけ溜り８、土壙、溝、溝状遺構の遺物

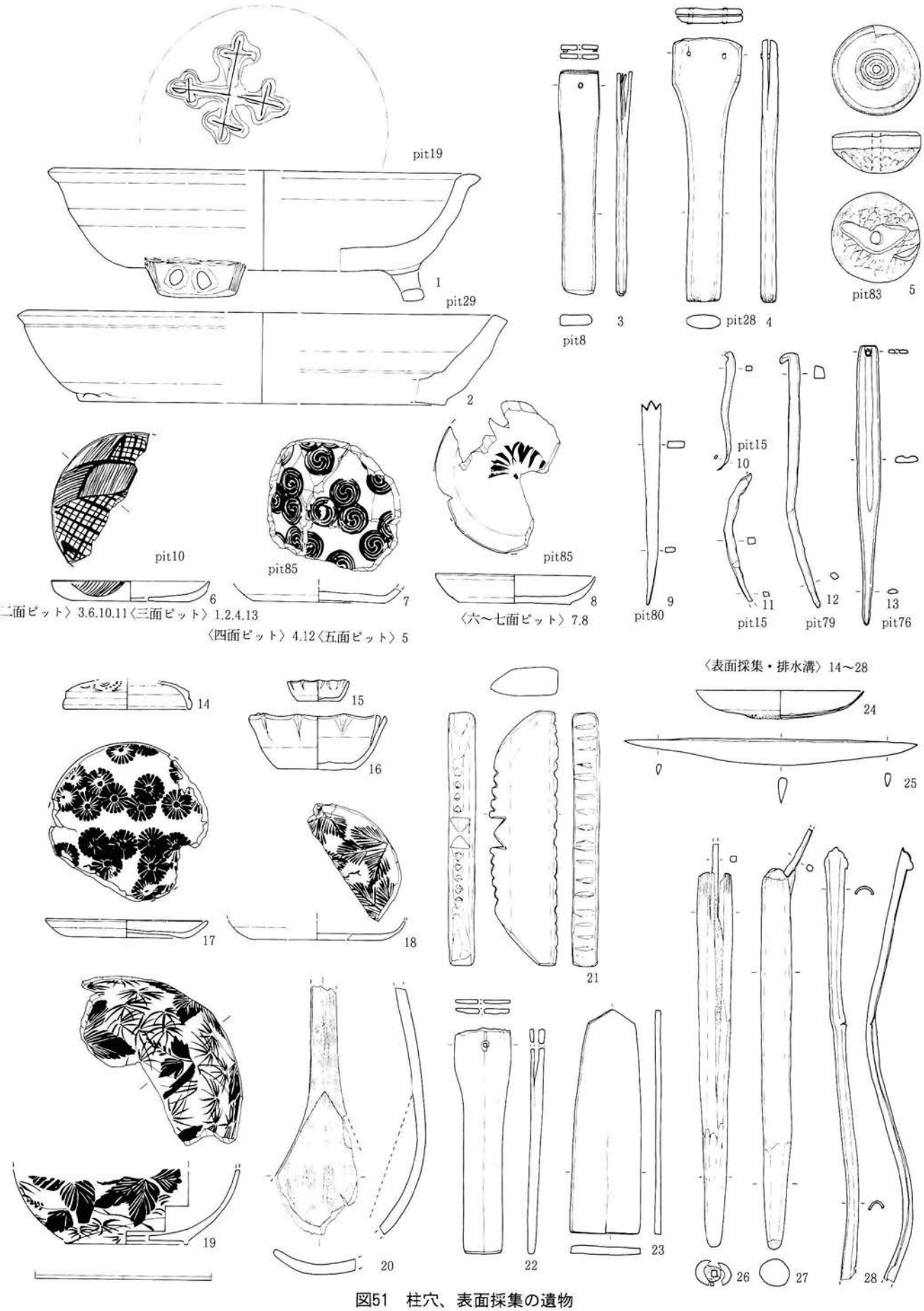


図51　柱穴、表面採集の遺物

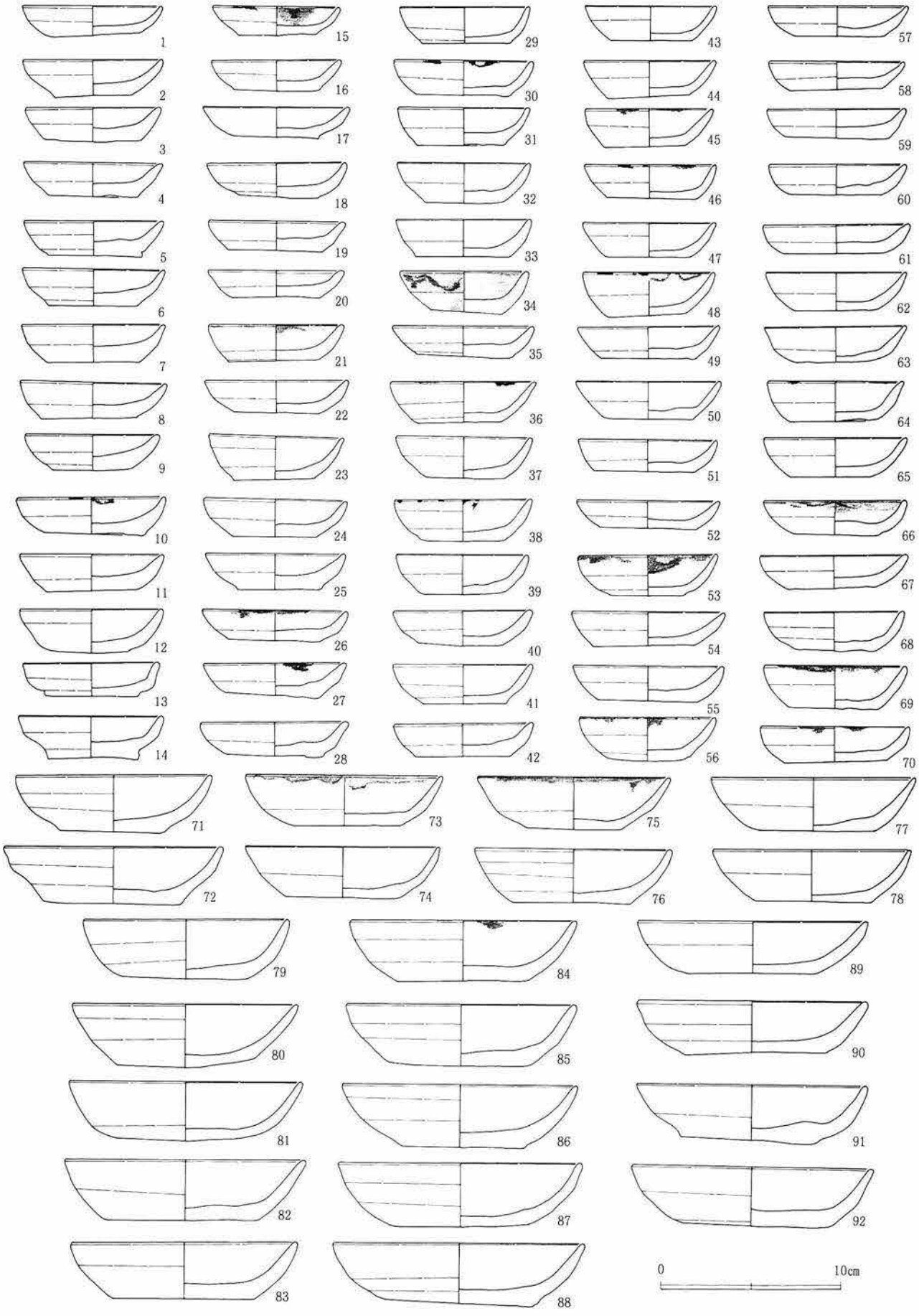


図52　一面上包含層の遺物（1）

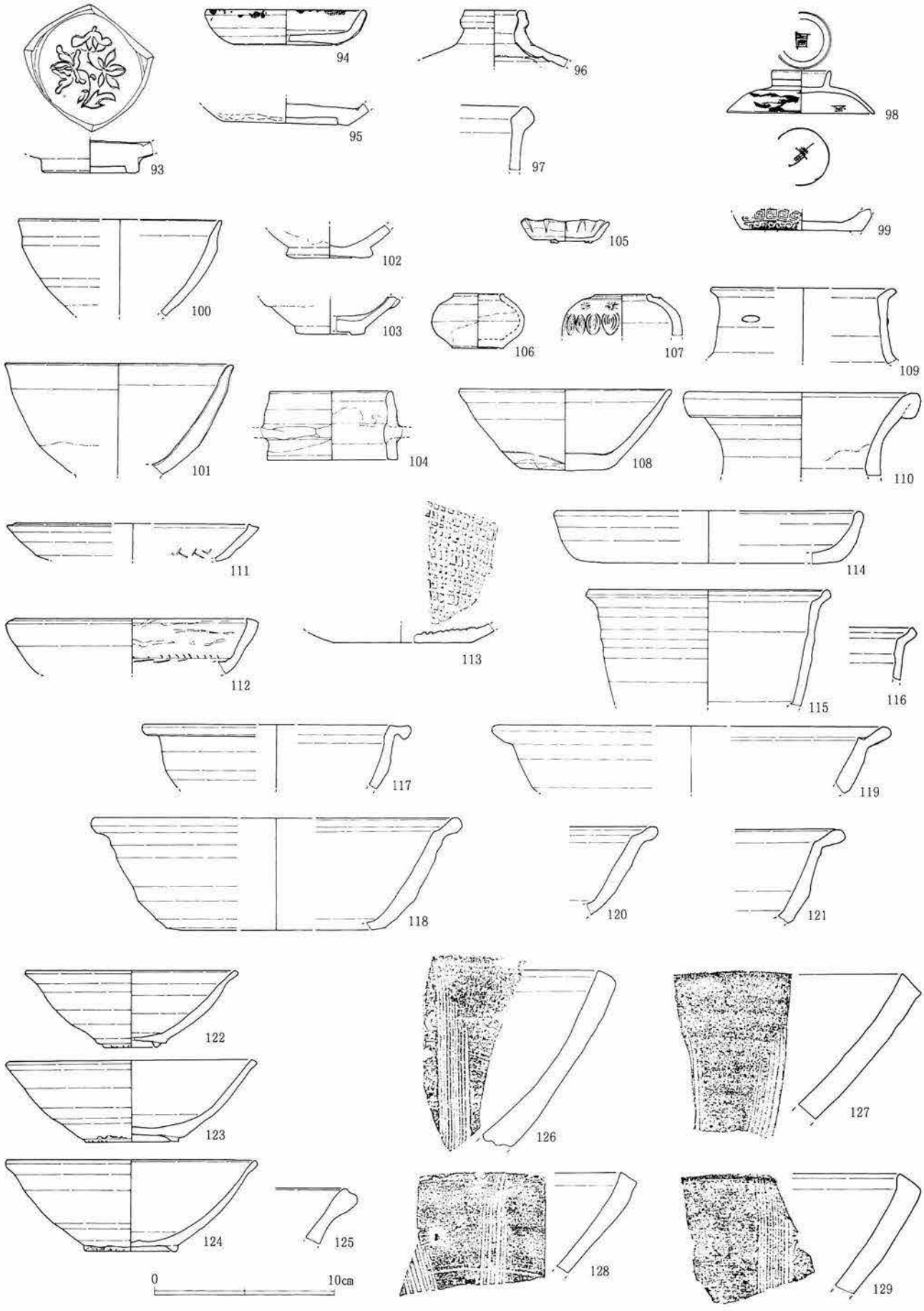


図53　一面上包含層の遺物（２）

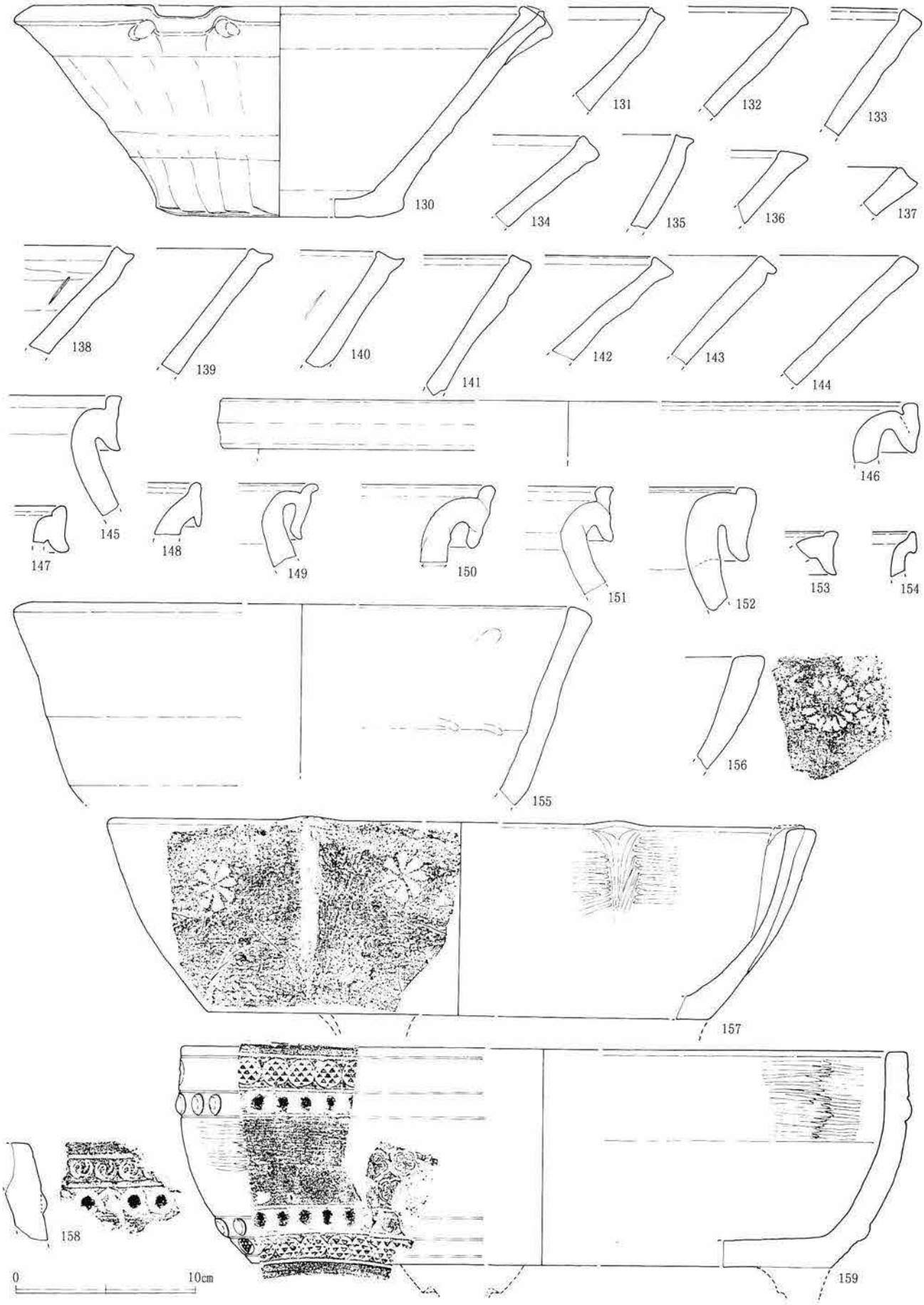


図54　一面上包含層の遺物（３）

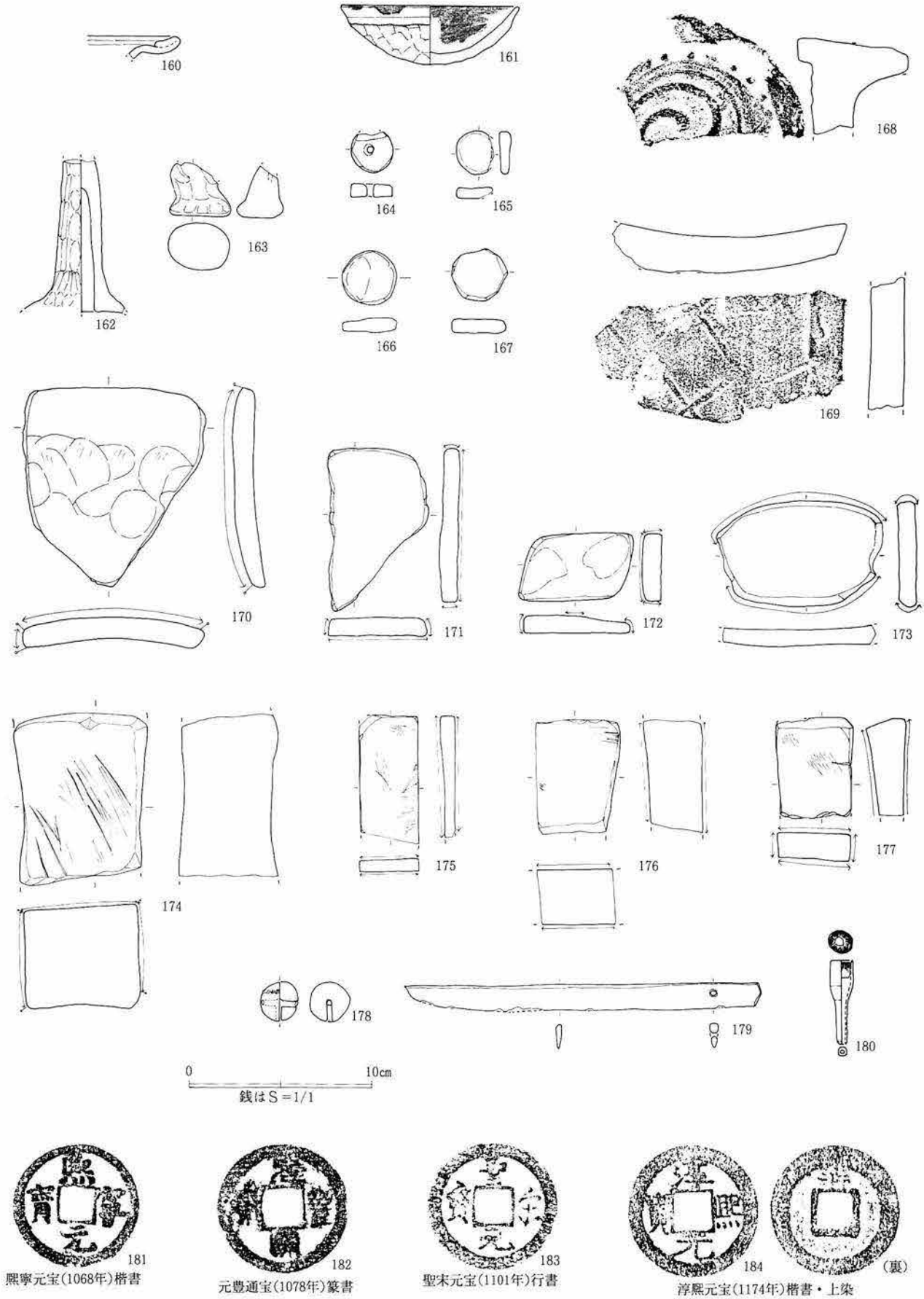
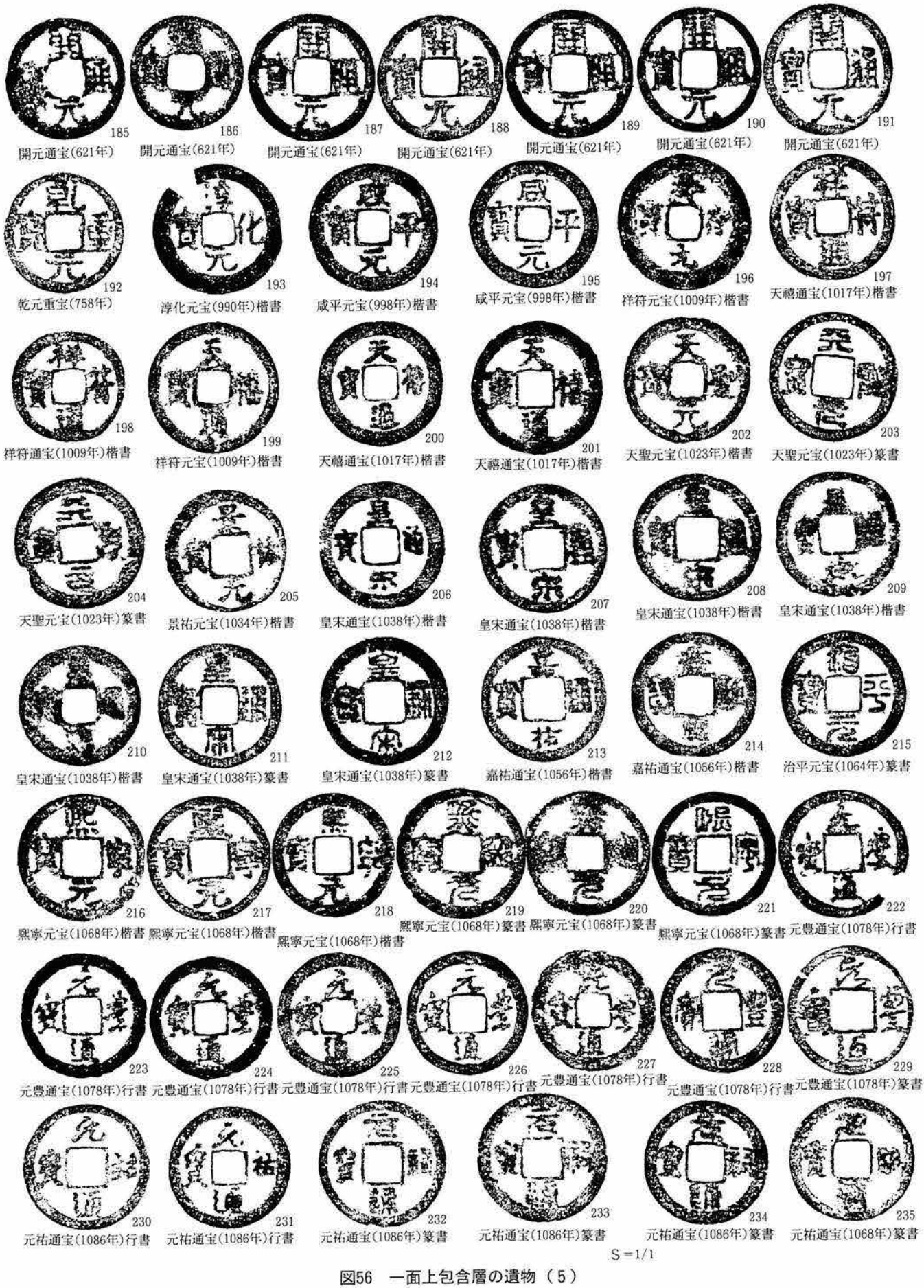
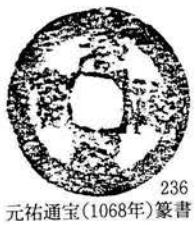


図55　一面上包含層の遺物（4）



S=1/1

図56　一面上包含層の遺物（5）


236
元祐通宝(1068年)篆書

237
紹聖元宝(1094年)篆書

238
紹聖元宝(1094年)行書

239
元符通宝(1101年)行書

240
聖宋元宝(1101年)行書

241
聖宋元宝(1101年)行書

242
大観通宝(1107年)楷書

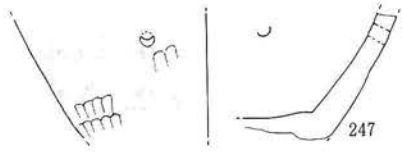
243
大観通宝(1107年)楷書

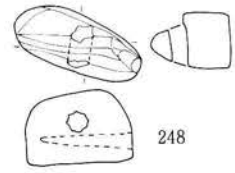
244
政和通宝(1111年)楷書

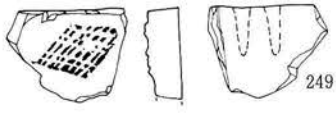
245
政和通宝(1111年)篆書

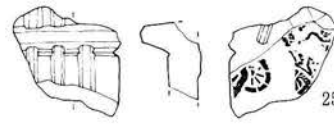
246
淳熙元宝(1174年)楷書

(裏)
背上月・下星

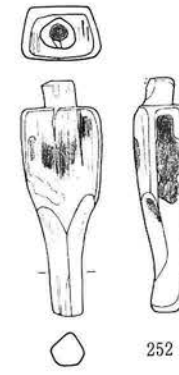

247

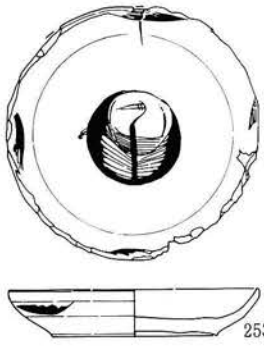

248

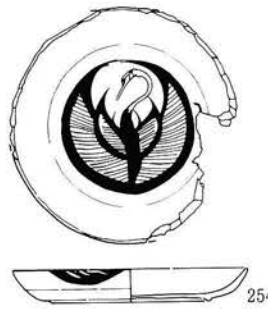

249

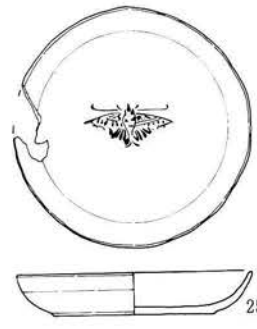

250

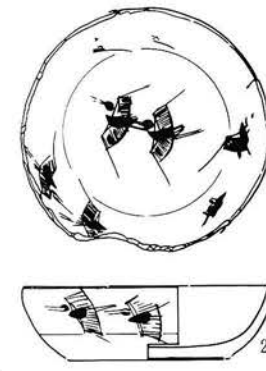
251

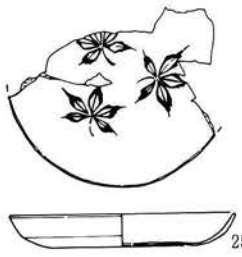

252

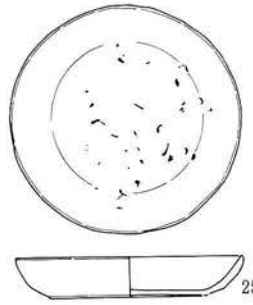

253

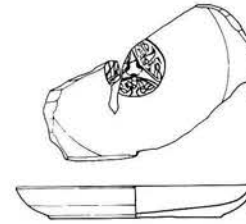

254

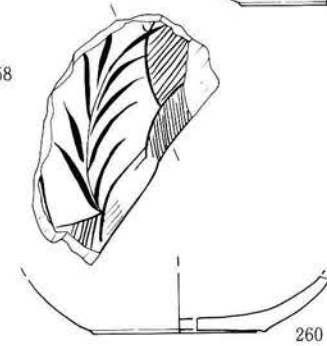

255

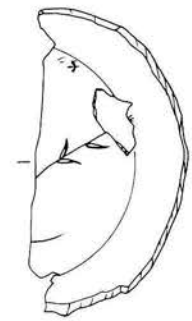

256

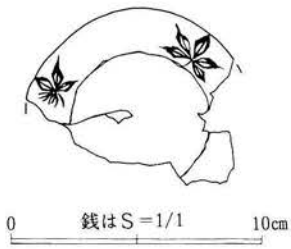

257


258


259


260


261



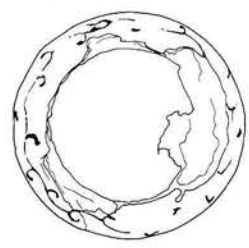


図57　一面上包含層の遺物（6）

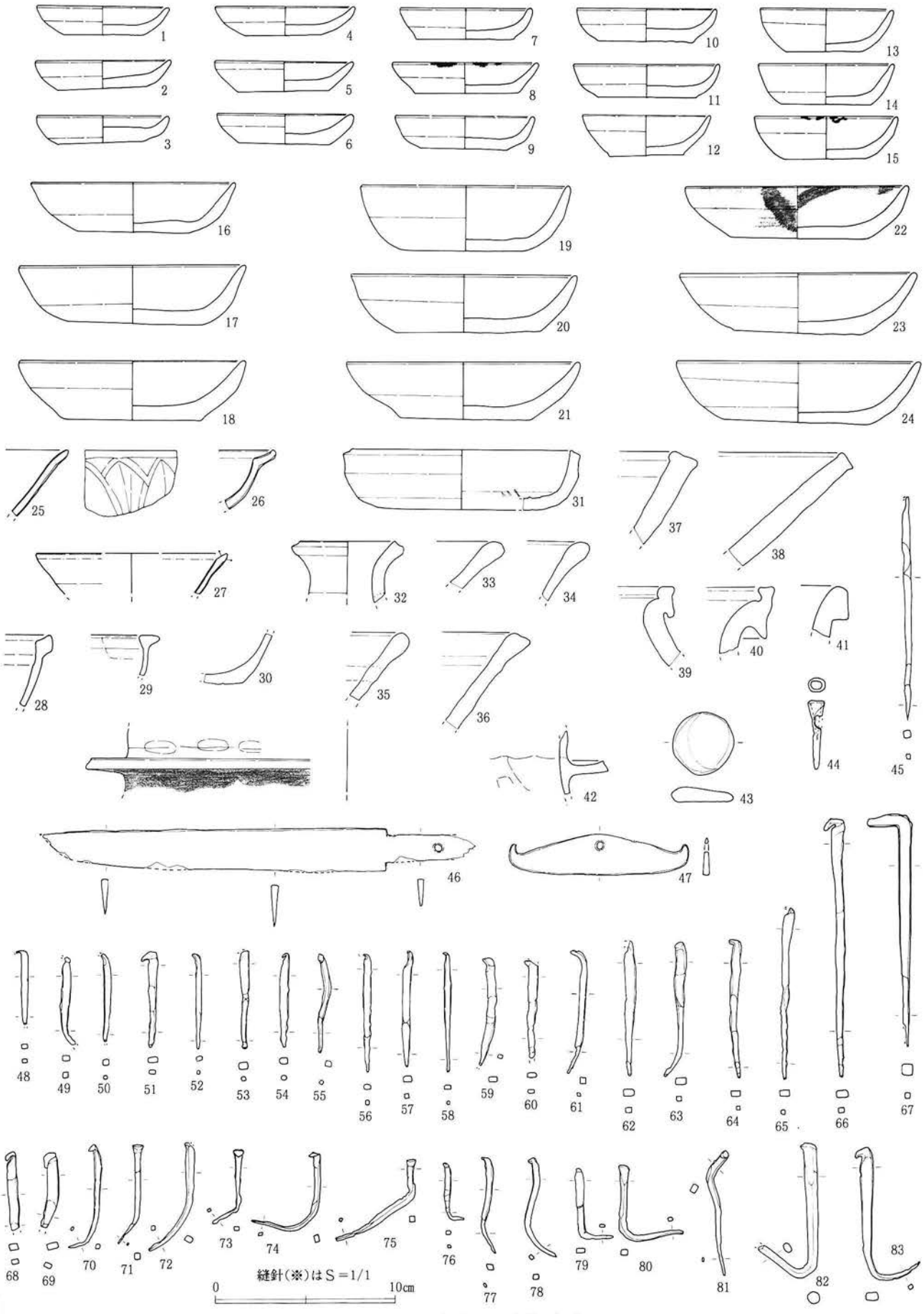
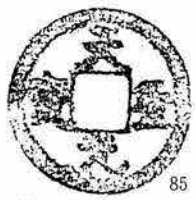


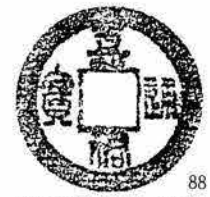
図58　二面上包含層の遺物（1）

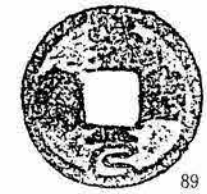
84
景徳元宝(1004年)楷書

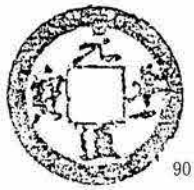

85
天聖元宝(10234年)楷書

86
明道元宝(1032年)篆書

87
皇宋通宝(1038年)楷書


88
嘉祐通宝(1056年)篆書


89
熙寧元宝(1068年)篆書

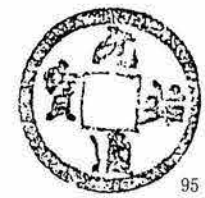

90
元豊通宝(1078年)行書

91
元豊通宝(1078年)行書

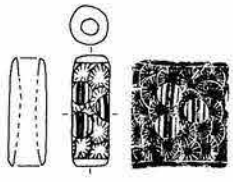
92
元豊通宝(1078年)行書

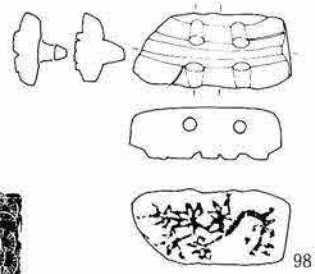
93
元祐通宝(1093年)行書

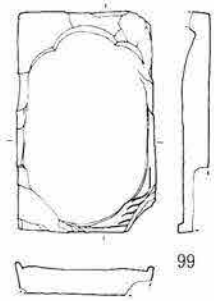
94
元祐通宝(1093年)行書

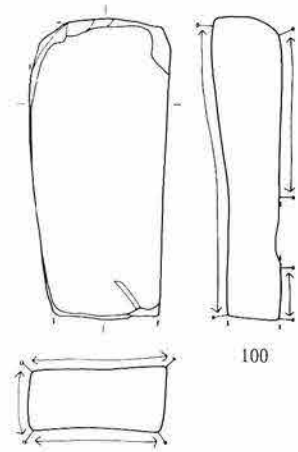

95
元祐通宝(1093年)篆書

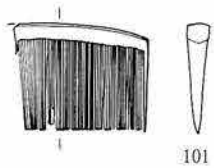
96
元祐通宝(1093年)篆書

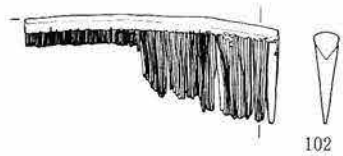

97


98

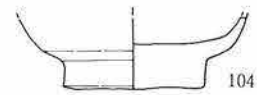

99

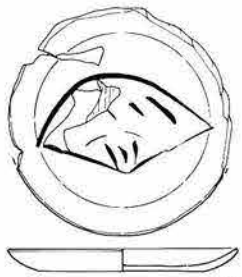

100


101

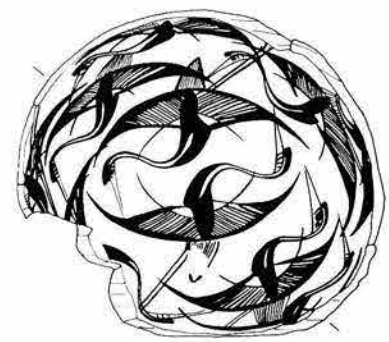

102

103

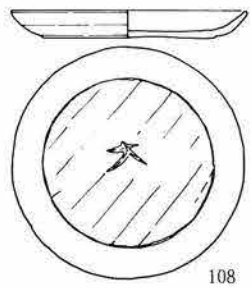

104


105

107



106


108

109

図59　二面上包含層の遺物（2）

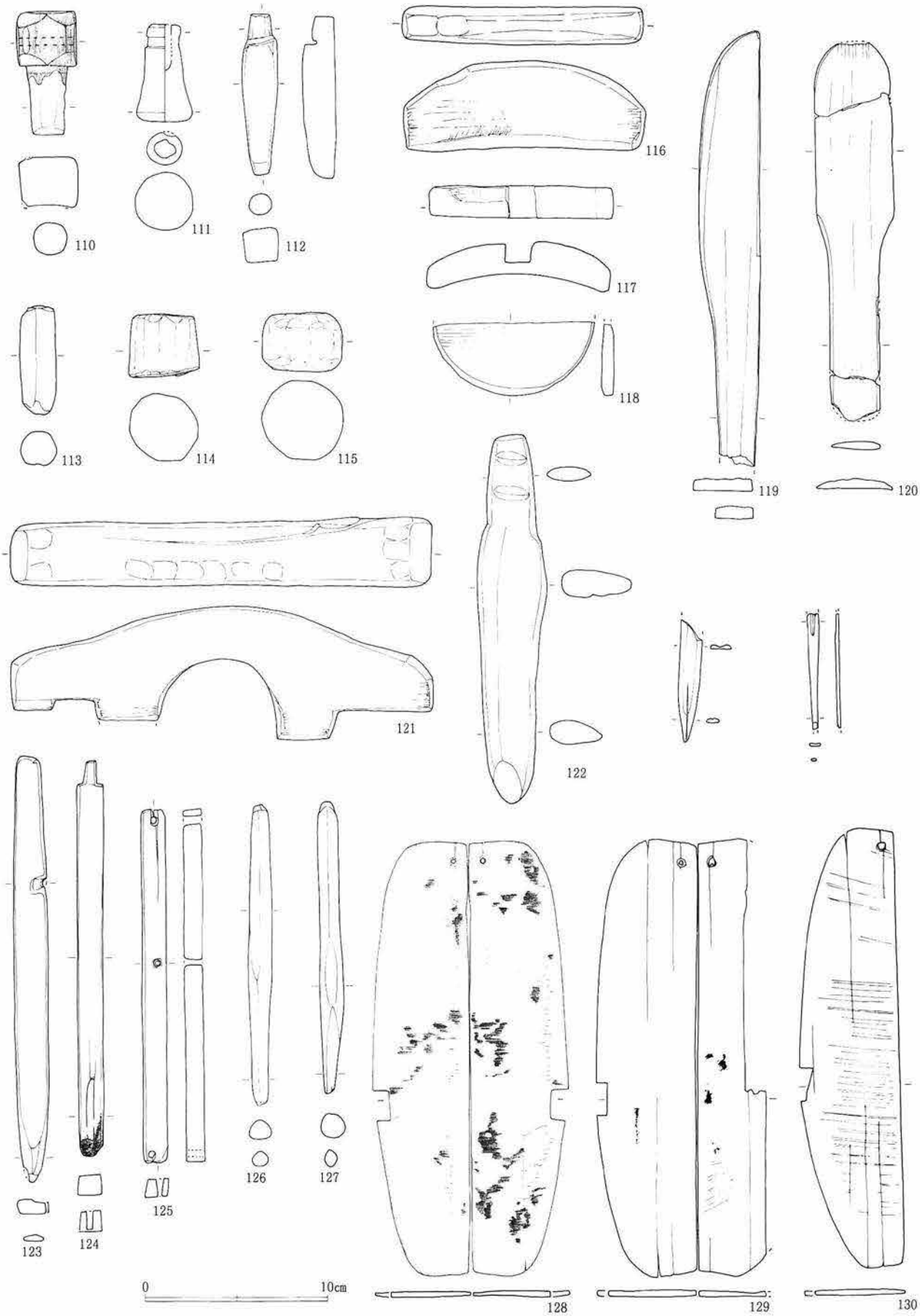


図60　二面上包含層の遺物（3）

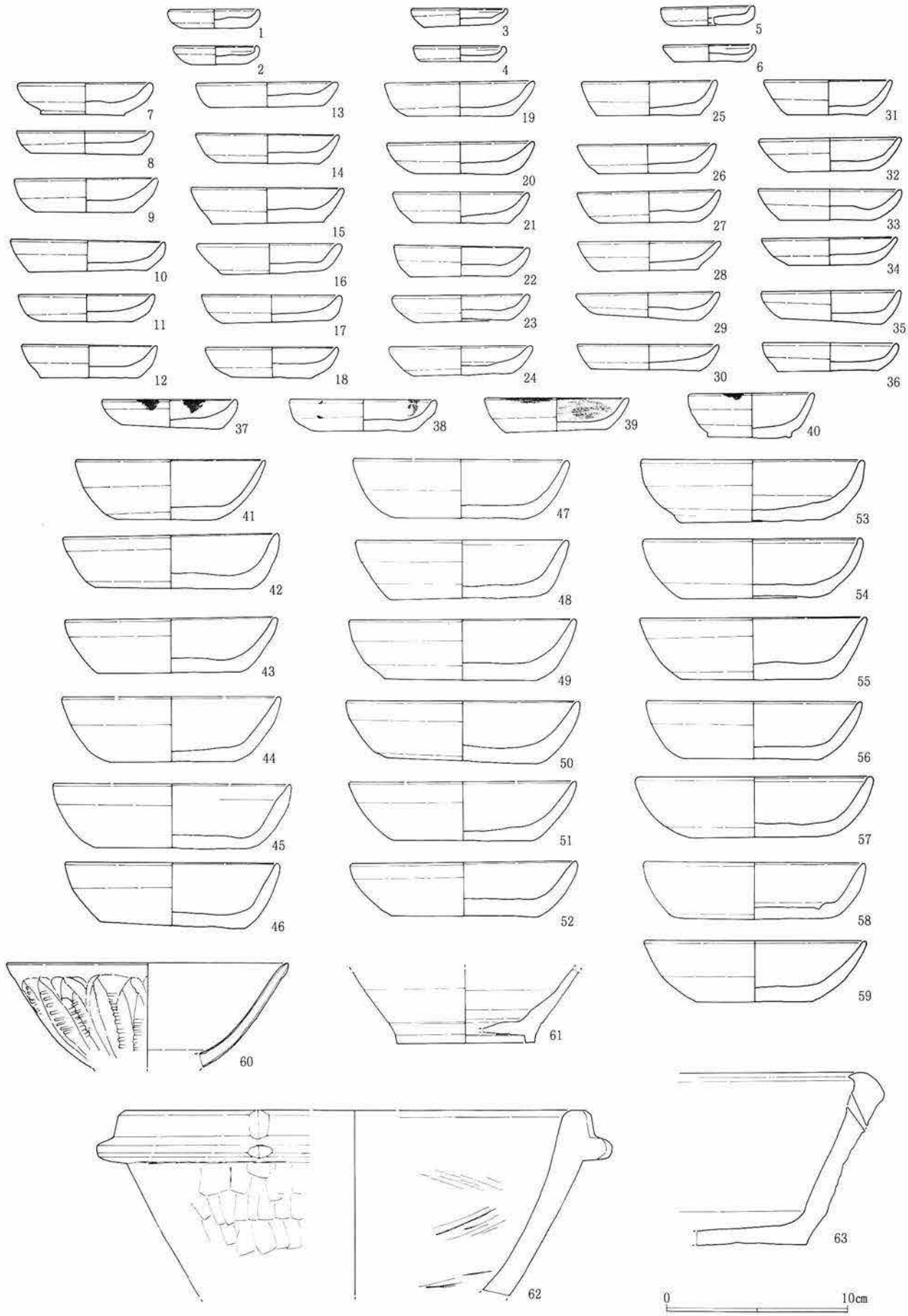


図61　三面上包含層の遺物（1）

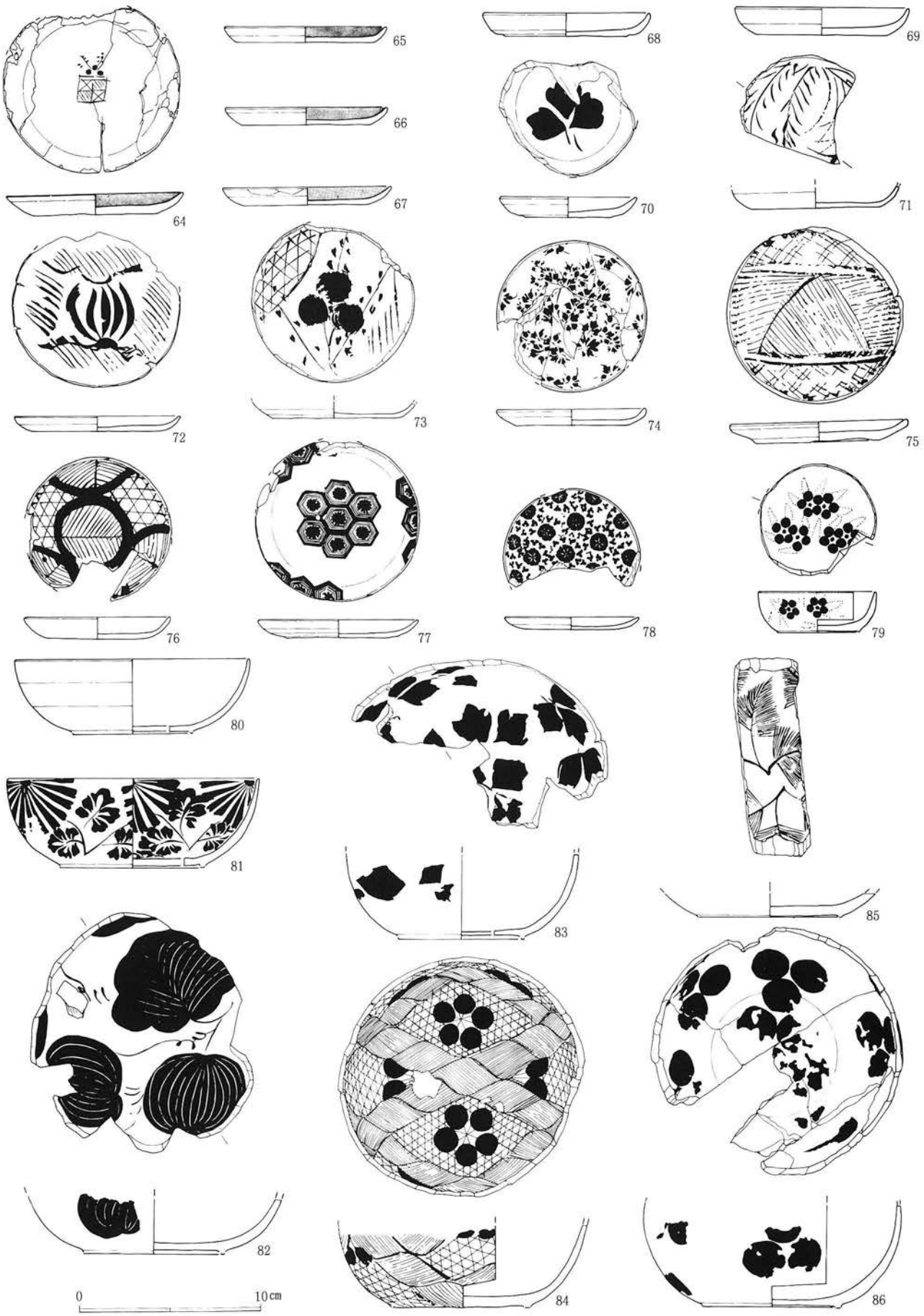


図62　三面上包含層の遺物（２）

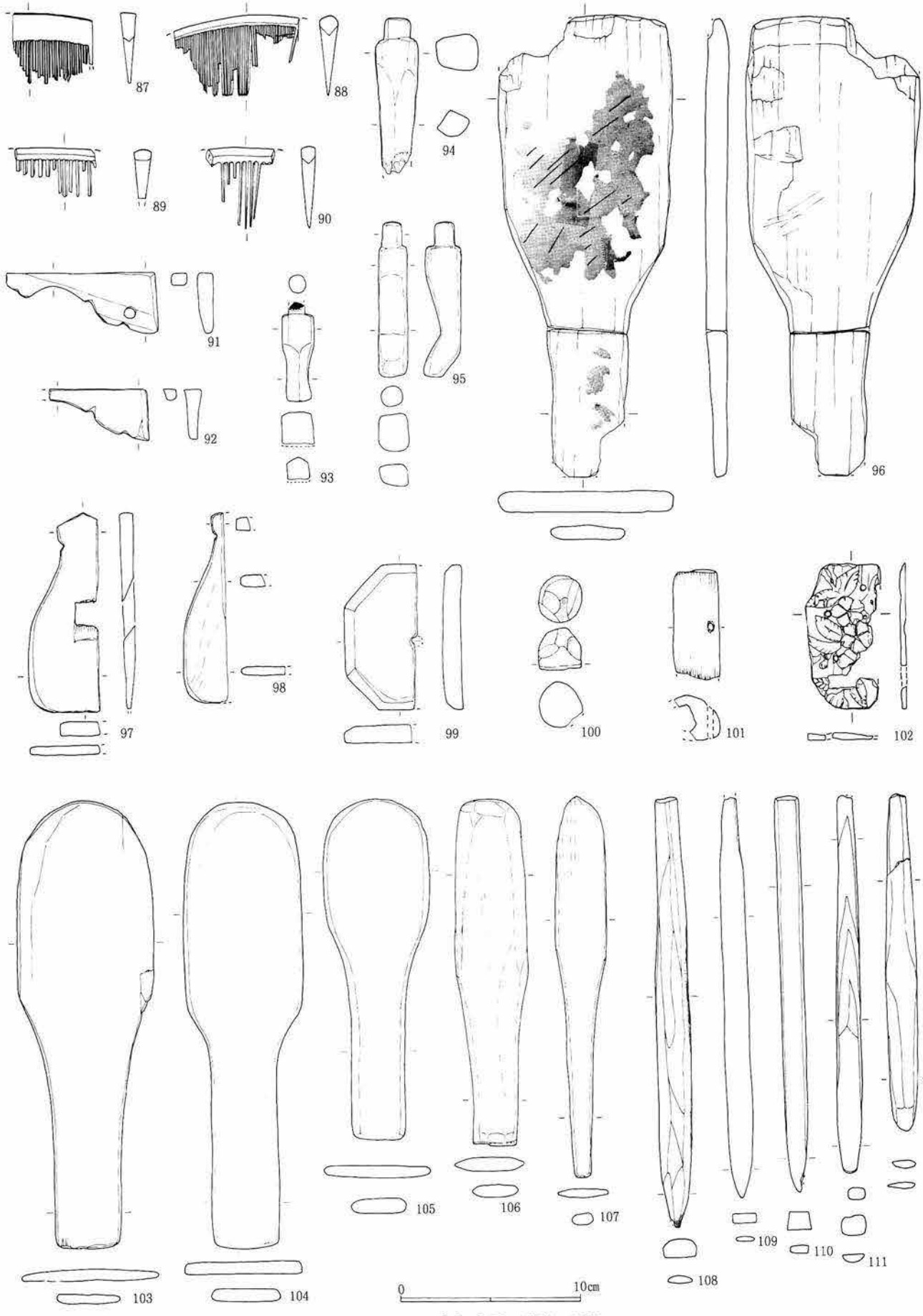


図63　三面上包含層の遺物（３）

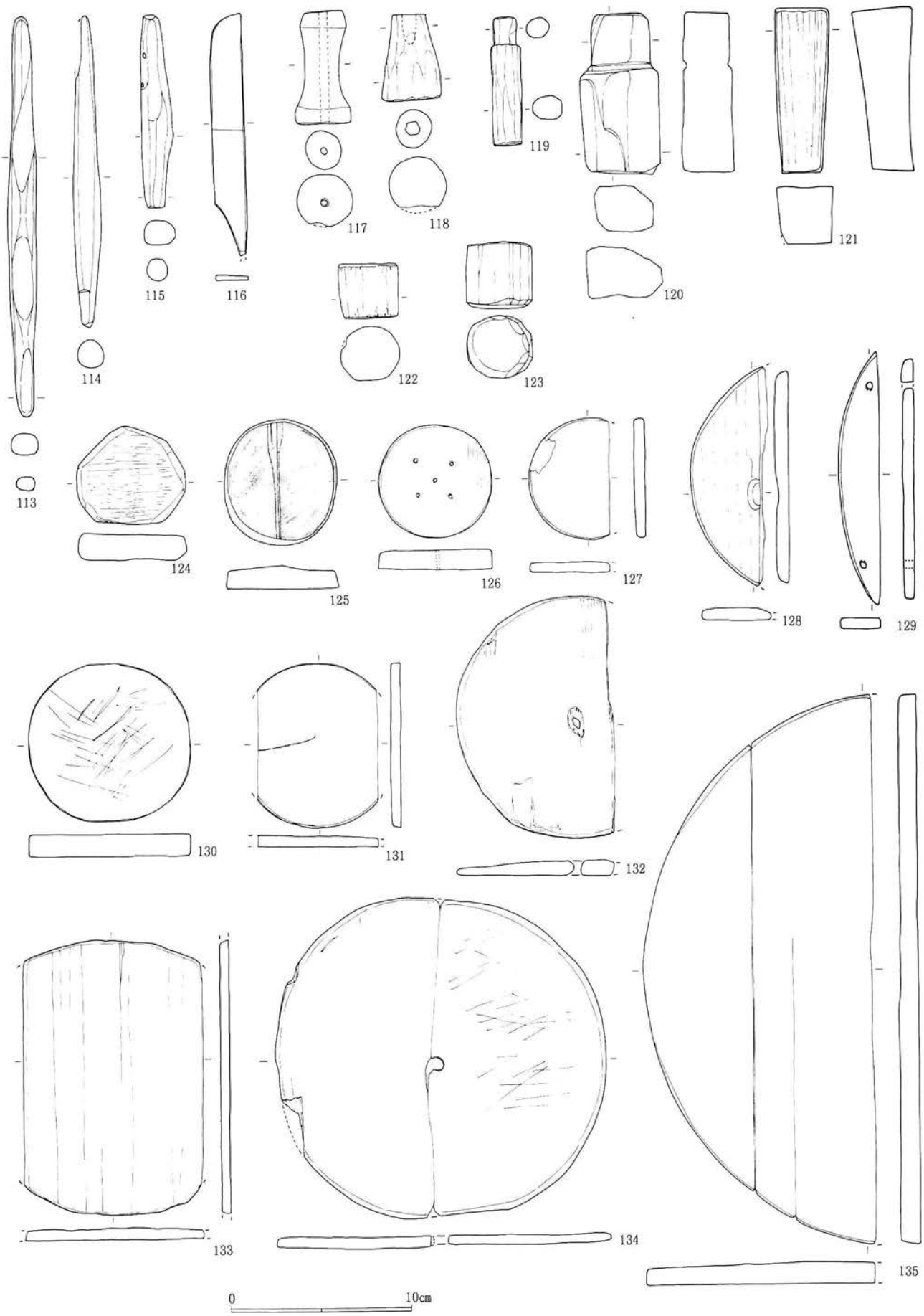


図64　三面上包含層の遺物（４）

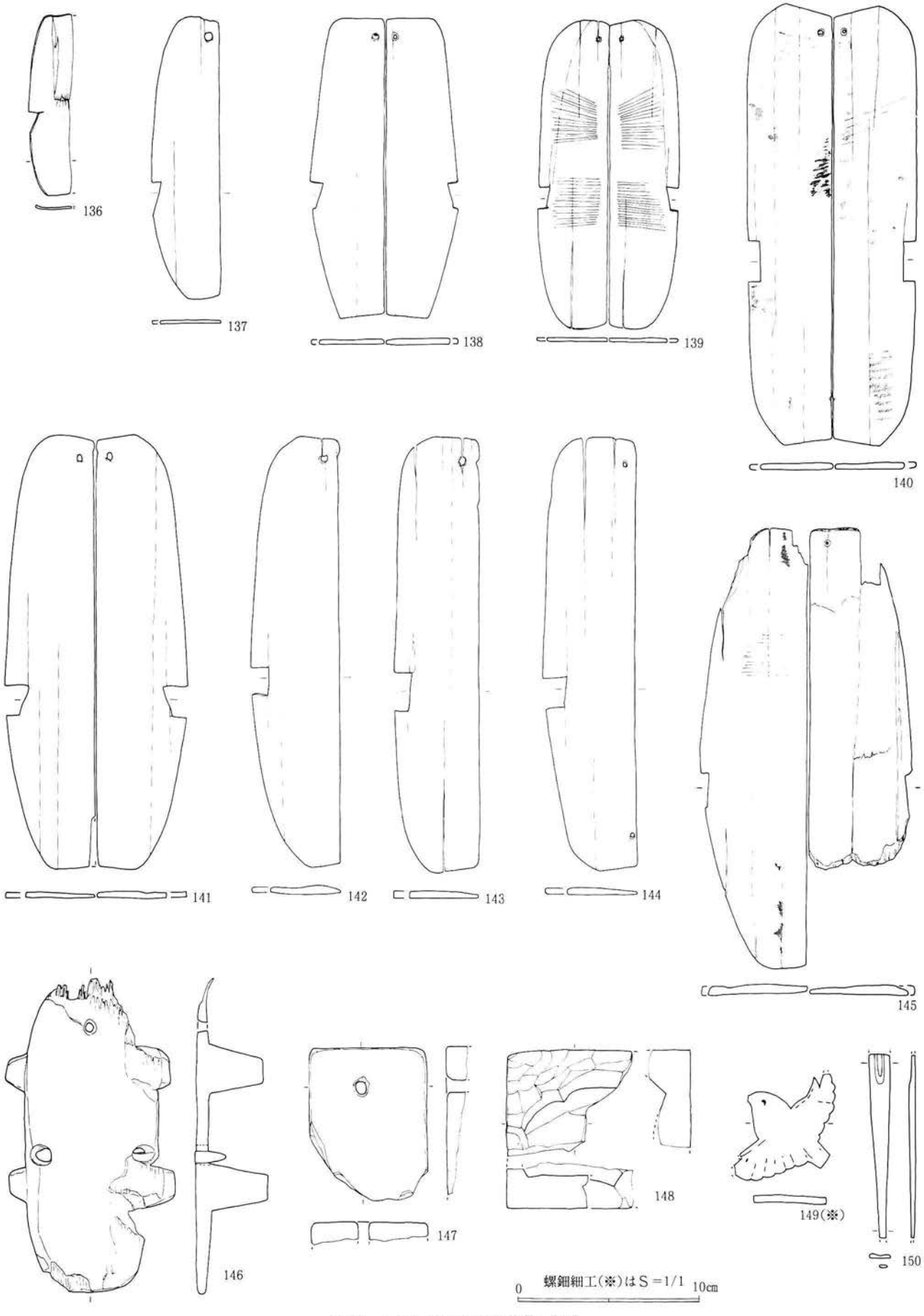


図65　三面上包含層の遺物（５）

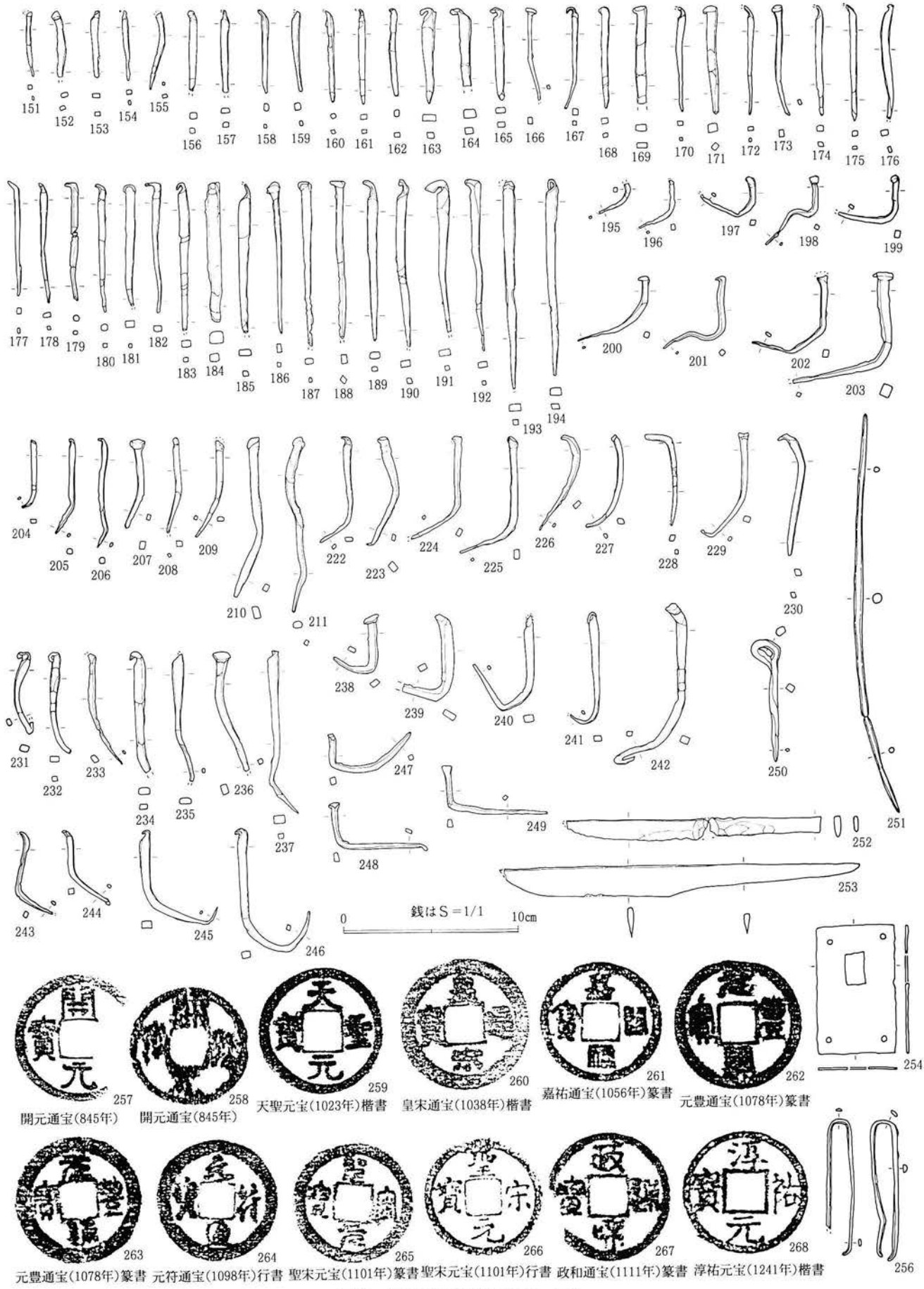


図66　三面上包含層の遺物（6）

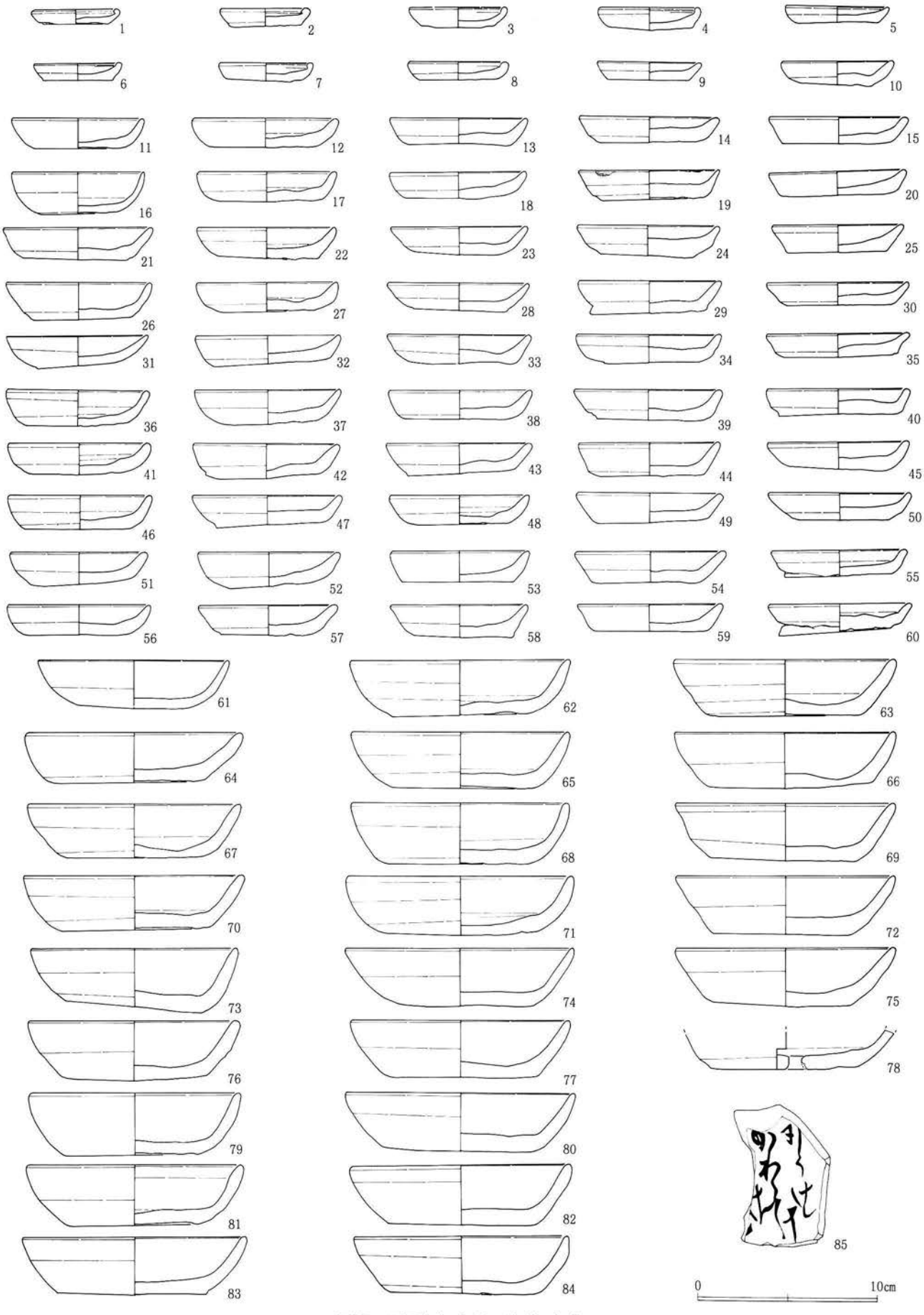
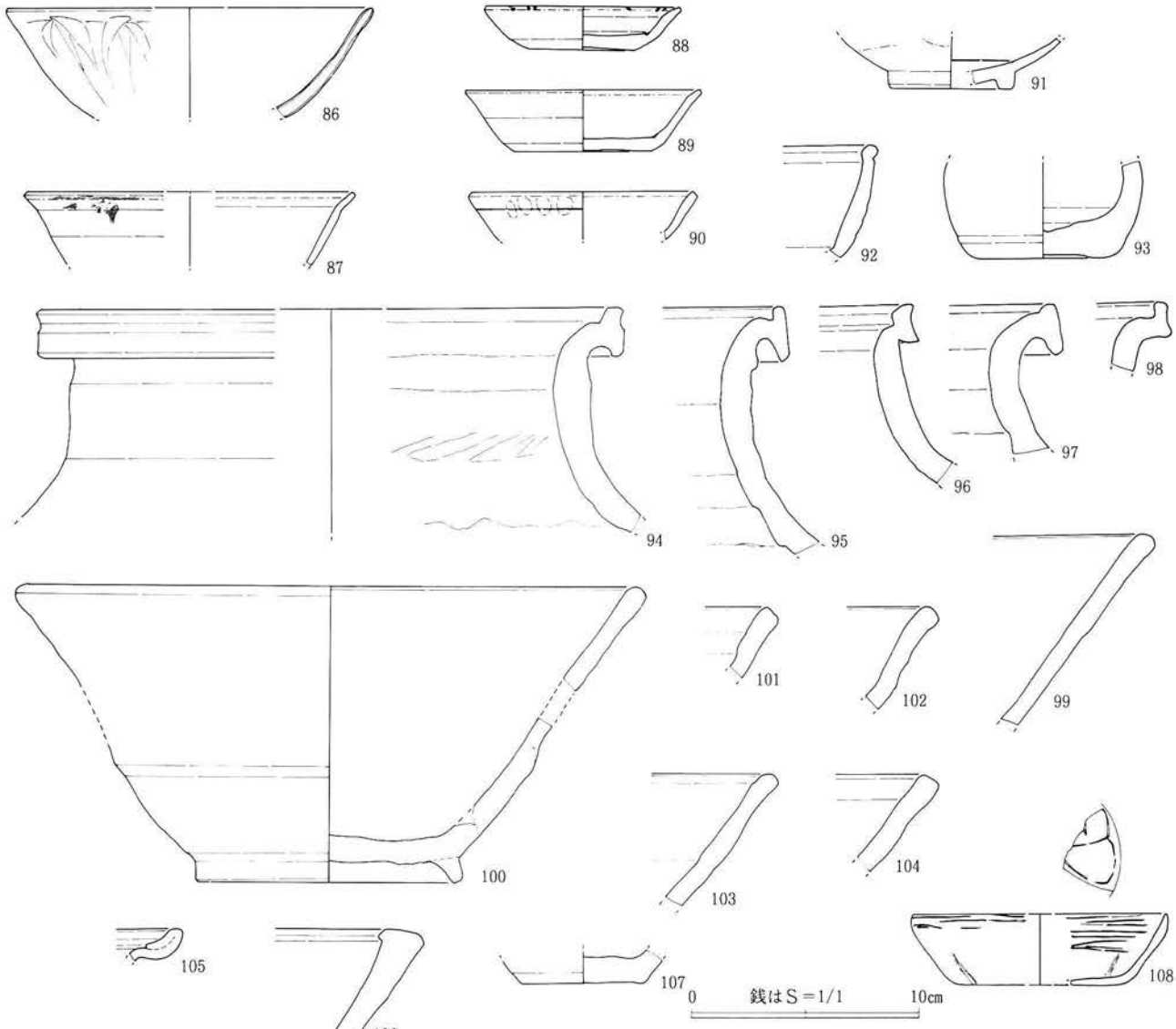
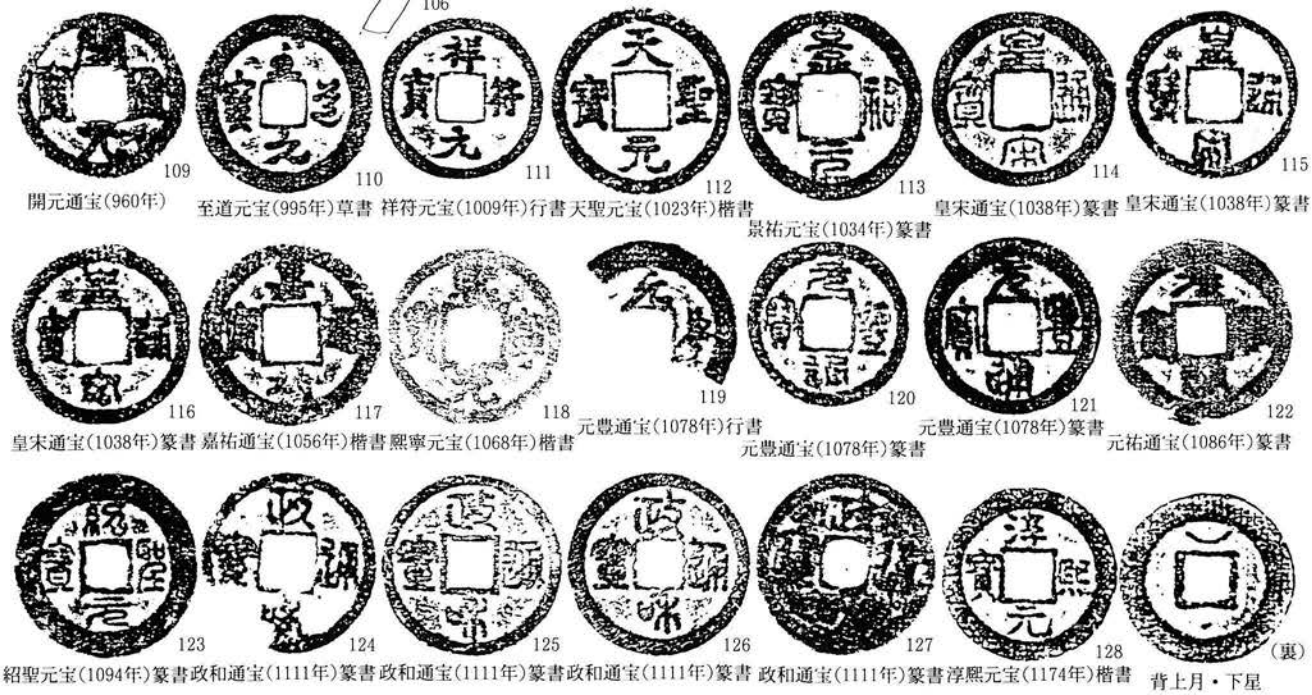


図67　四面上包含層の遺物（1）





開元通宝(960年)　至道元宝(995年)草書　祥符元宝(1009年)行書　天聖元宝(1023年)楷書　景祐元宝(1034年)篆書　皇宋通宝(1038年)篆書　皇宋通宝(1038年)篆書

皇宋通宝(1038年)篆書　嘉祐通宝(1056年)楷書　熙寧元宝(1068年)楷書　元豊通宝(1078年)行書　元豊通宝(1078年)篆書　元豊通宝(1078年)篆書　元祐通宝(1086年)篆書

紹聖元宝(1094年)篆書　政和通宝(1111年)篆書　政和通宝(1111年)篆書　政和通宝(1111年)篆書　政和通宝(1111年)篆書　淳熙元宝(1174年)楷書　背上月・下星

図68　四面上包含層の遺物（2）

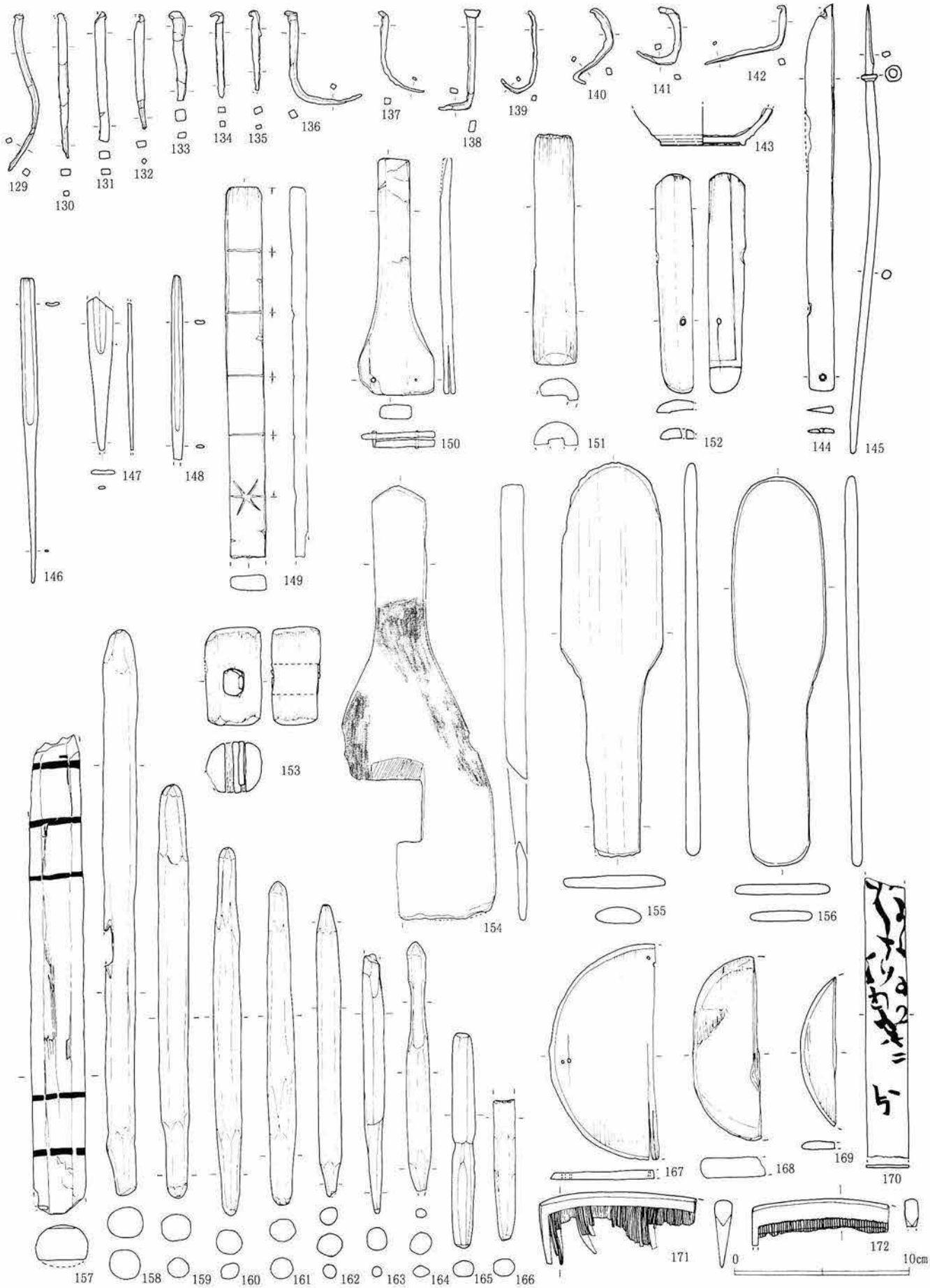


図69　四面上包含層の遺物（3）

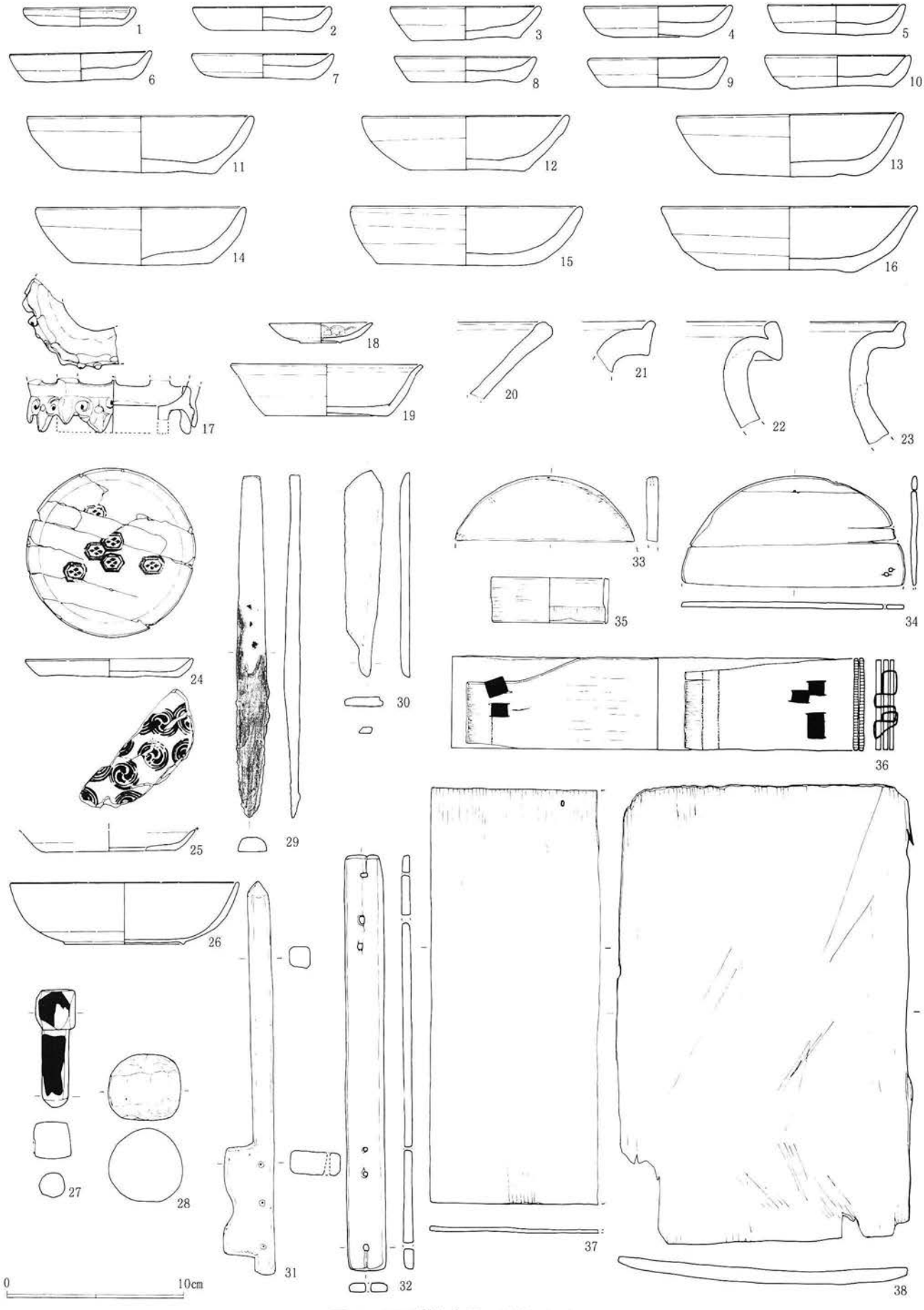


図70　五面上包含層の遺物（１）

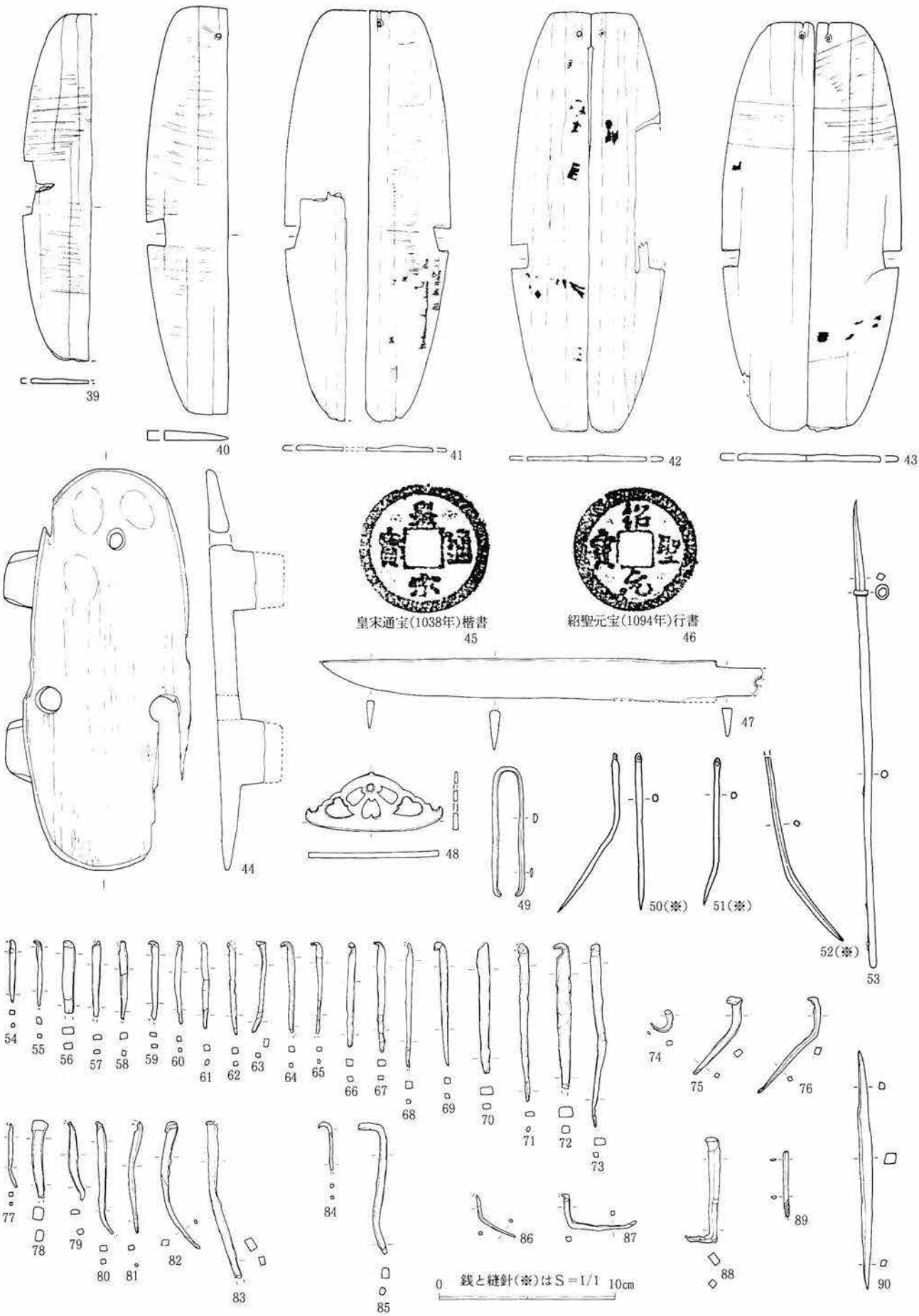


図71　五面上包含層の遺物（２）

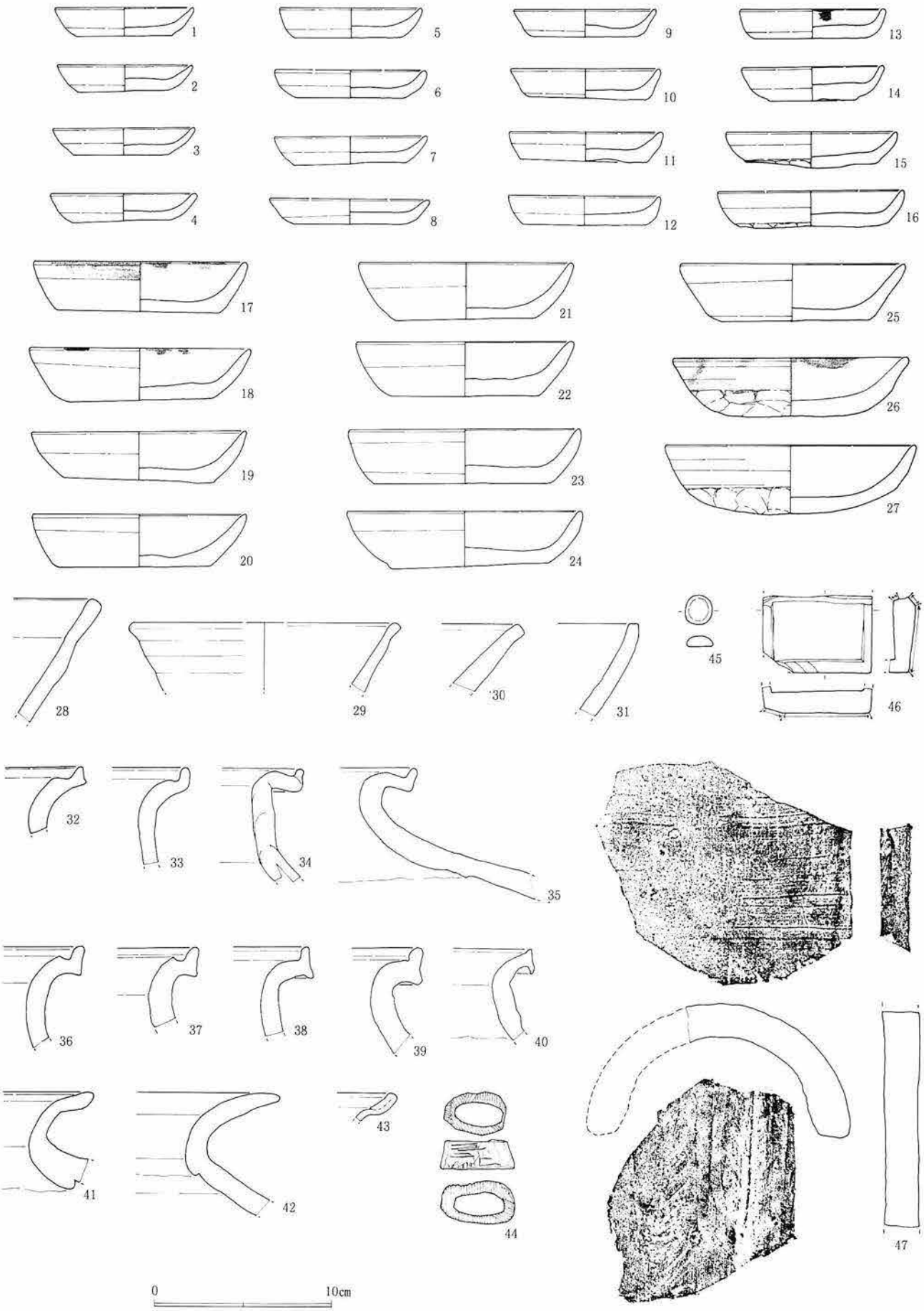


図72　六面上包含層の遺物（1）

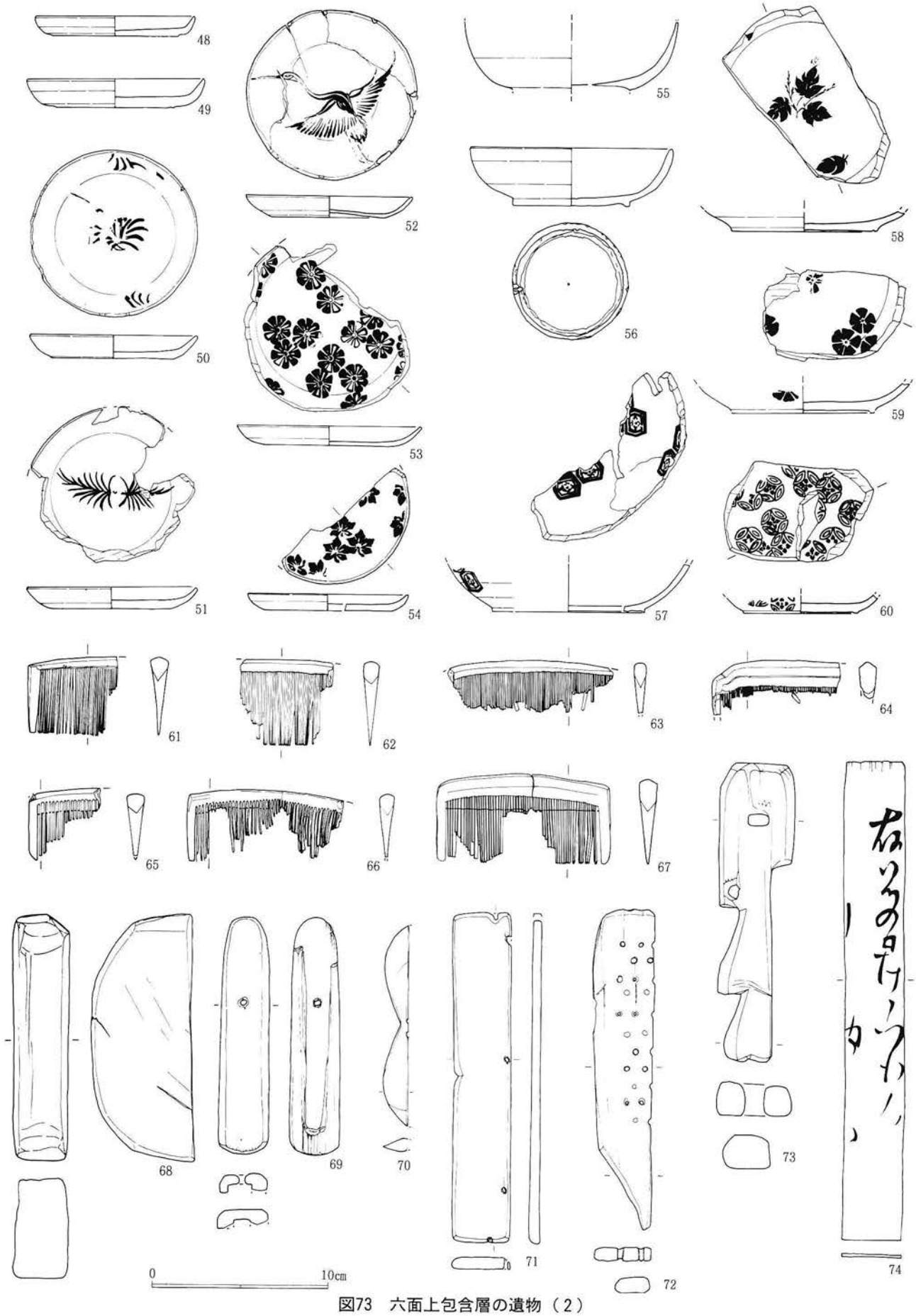


図73　六面上包含層の遺物（２）

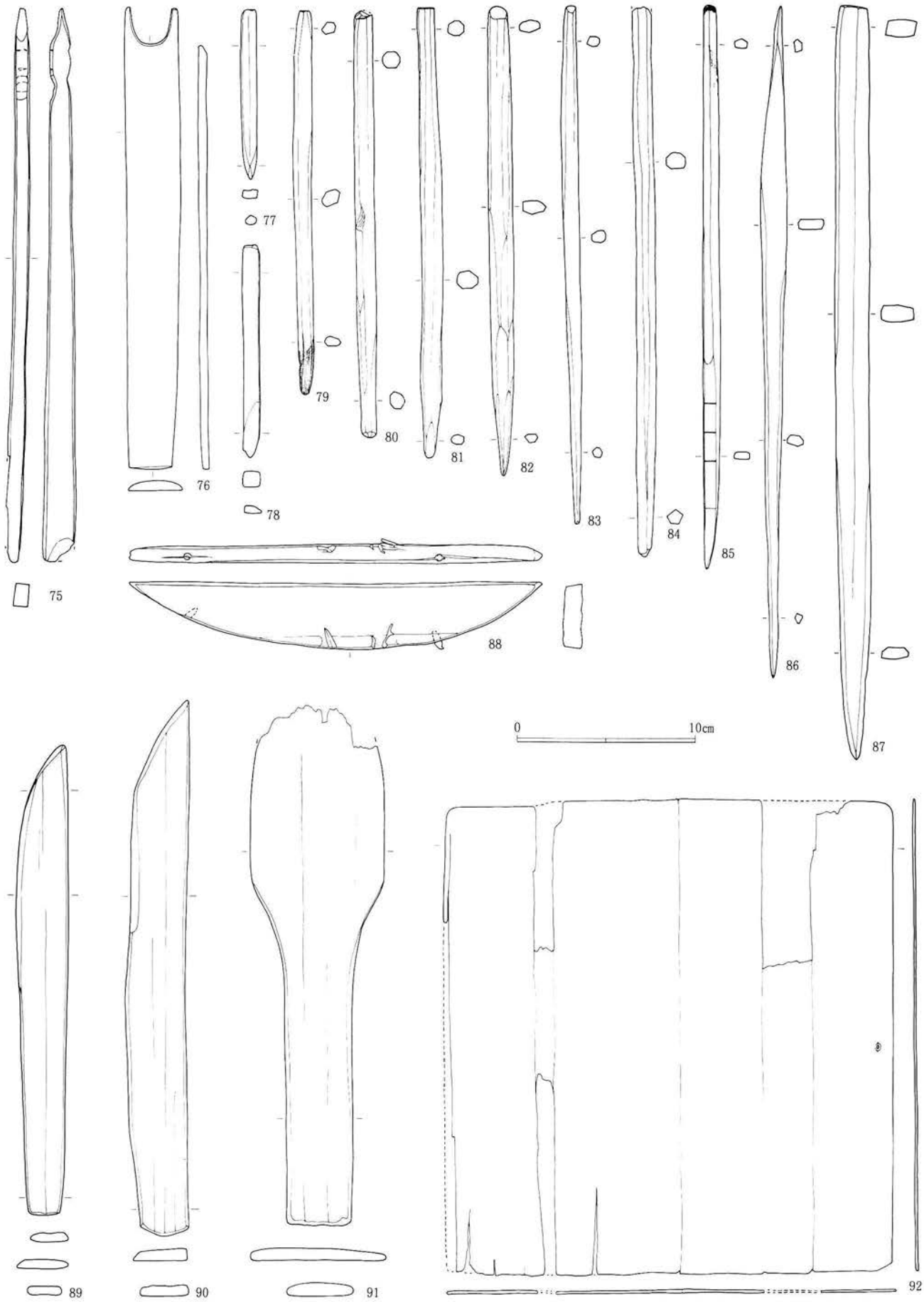


図74　六面上包含層の遺物（３）

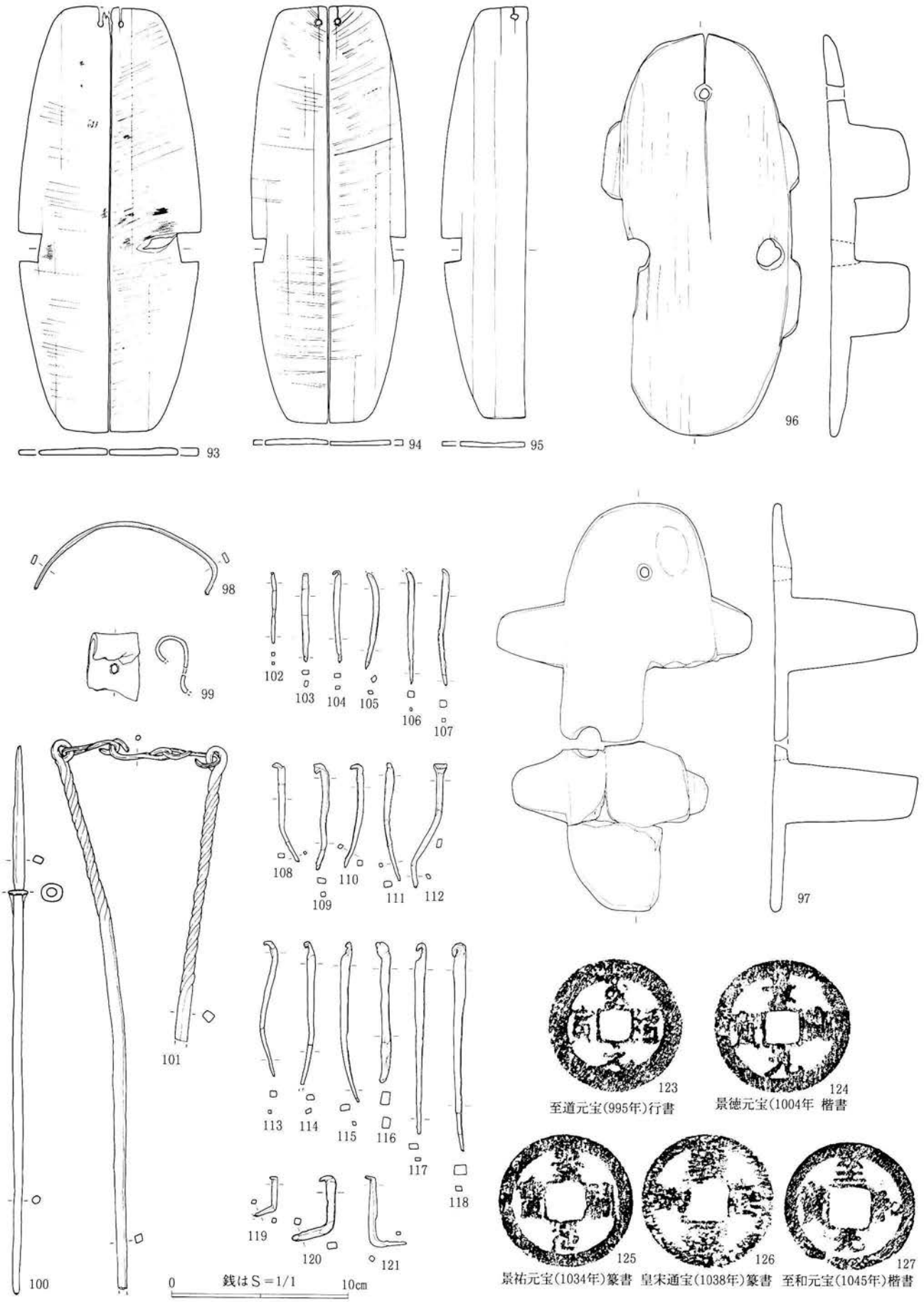


図75　六面上包含層の遺物（４）

第4章　まとめ

第1節　遺構の特徴と年代

一面では調査区中央西寄りに溝が2条、東には通路状遺構、建物、広範囲に広がるかわらけ溜りを発見した。遺構の軸方位はほぼ若宮大路に平行にしており、溝2条のうち中央で発見された溝には土台角材および横板が遺存しており木組み溝であることが判明した。この溝は北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9・図83地点8）で発見されている南北溝と溝東肩で約54mの距離にある。また、溝底部の海抜高は本地点の溝で7.3m～7.4m、地点8の溝では7.36m～7.45mと近い数値を示している。

二面では溝を境に西に建物を確認した程度で、溝の東側では遺構は発見されなかった。建物の南には囲炉裏と考えられる遺構（木組遺構1）が見られ、この囲炉裏は一辺130cmと今までに鎌倉市内の調査で検出された囲炉裏と較べてやや大きく、低部には掘り込みが見られ、貝、木片等の生活廃棄物で埋められていた。この掘り込みも一時期囲炉裏として使用されたものであろう。

三面では溝が調査区の東端で検出されており、掘立柱建物が調査区の三分の二を占めるようになってくる。溝からは土台角材、梁材、束柱が見られ、箱形の堅牢な構造の木組み溝であったことが窺える。この溝は若宮大路側溝と同様の構造であろう。大路側溝との距離は土台角材東で約115mであり、本地点の溝の底部海抜高は6.86m～6.96m、北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目274番2・図83地点7）では6.75m～6.84mを測り、やや近い数値を示している。また、この溝は遺存する束柱から50cm以上の深さがあったと思われ、実際に使用された時期は二面であった可能性も考えられる。

建物は溝の西側に広がるが、南端には土壙が見られ建物は北西に延びていたのであろう。また、かわらけ溜り、木組み遺構は検出レベルで見ると建物が建てられる以前のものと思われる。

四面では溝が三面に比べ50cm程西で検出され、はっきりとした建物は調査区西壁付近で確認されている。溝と建物の間には柱穴列、礎板列が見られ、屋敷内の一部もしくは裏庭といった施設が考えられる。

溝は三面までの大路側溝に近い箱形の木組み遺構ものとは異なり、網代状の側板を杭で支える木組み構造である。この構造は政所跡（雪ノ下三丁目966番1地点）で発見された南北大溝と同構造であり、千葉地東遺跡では河川の護岸施設に使用されている。この網代構造の溝は七面までに三回作り直されており、溝の作り替えは生活面の変化（建物等の配置）とほぼ一致している。

建物は三面で見られた掘立柱建物とは異なり、調査区西端で板囲建物が検出されている。

五面は柱穴列を境に東に溝、西に泥岩版築面が見られる。溝はこの時期に一部修理が成されたのであろう。完掘状況を見ると控え梁の構造が北側と南側とでは変わっている。北側は控え梁の上に抑えの材を置き、両脇を杭で留めるもので、南側は控え梁にホゾ穴をあけホゾに杭を打ち込む構造であり、控え梁の変わり目付近では溝本体に50cm程の隙間があり、隙間部分を大型泥岩で埋めた痕跡がみられた。

調査区西側に広がる泥岩版築面は柱穴列を境に東側では確認されていない。この泥岩版築面は建物6の床板と同レベルであり、建物6は五面時に建設されたものと思われる。泥岩版築面の広がりと柱穴列の関係から見て、柱穴列の西側が屋敷の敷地内になるのではないだろうか。

六面では溝の作り替えが行われ、約50cm西で検出されている。構造は溝7同様網代状の木組み構である。溝の西側には小屋的な建物、土壙が確認されている。また、五面の泥岩版築面と柱穴列の間付近に木組遺構が検出されている。木組遺構の西には礎板、柱穴が広がっており、この木組遺構を板囲い建物の一部と考えると、建物は西に広がっているのであろう。

七面は六面検出の木組遺構から西側と、溝8の南部分をトレンチ状に掘り下げる調査にとどまった。トレンチ状に掘り下げた部分からは、木組み構の一部を検出した。網代状に組まれた木組み構であり、

溝８から西へ約50cmほどずれている。網代状の木組み構は、七面まで少なくとも３回の作り替えが行われたことが確認できた。

木組遺構の西には柱穴列、礎板列が見られ、何らかの居住施設があったのではないだろうか。

これまで一面から七面までの遺構の変化を挙げたが、七面から四面までは網代構造の木組み構に伴う生活空間であり、溝の作り替えに伴い居住空間に変化がもたらされている。しかし、三面の溝は構造も若宮大路側溝と同じ箱形に変化し、網代状木組み構の東肩でもあった土塁の一部を削平しての作り替えである。この時期に街割りが大きく変化したのではないだろうか。

また、出土遺物から年代を見ると、一面、二面は14世紀中葉、三面では口径4.5cm～5.0cmの内折れの小型かわらけ皿が出土してきており、14世紀前葉から13世紀後葉が比定できよう。四面、五面では、かわらけ皿は側面が丸みを帯びる口径13cm前後のものが多く、少数ではあるが鉢形の手焙りが出土しており、13世紀後半に当たると思われる。六面では手づくね成形のかわらけ皿が出土し、小型のかわらけ皿は器高の低い、口径、底径差の少ないものが目立つ。また、渥美の甕も出土しており、13世紀後葉から13世紀中葉、七面は手づくね成形のかわらけ皿が殆どであり、13世紀中葉に当たると思われる。

本遺跡では溝構造における街割りの変化、溝の作り替えがどの程度の時間を置いて成されたか、またそれに伴う居住空間の変化が見てとれた。一体どのような人々がこの空間に住まっていたのだろうか。環境、検出遺構、遺物を考え併せると、武家階級もしくはある程度の財力を持った庶民階層の人々が思われる。今後、本遺跡付近の発掘調査の成果に期待したい。

第２節　出土遺物について

遺物総数は整理箱にして162箱を数える。その内訳はかわらけ皿、国産陶磁器、舶載陶磁器、漆／木製品、金属製品、瓦／土製品、石製品、貝／骨製品、自然遺物である。すべてに言及することが困難なため、分類と集計作業のできた遺物を取り上げておく。

【漆製品】

食膳具（漆碗・漆皿・壺杓子）のほかに家具調度（膳脚・雲形肘木）、装身具（櫛・烏帽子）、容器（曲げ物の底板）、遊具（羽子板、独楽）がある。なお、烏帽子は遺存状態が悪く採取できなかった。

○ 漆碗・漆皿

本地点からは完形もしくは略完形37点を含む232点の漆碗・漆皿が出土した。正確な個体数や椀：皿の比率は判らないものの、出土点数の多さと文様の豊富さに関しては佐助ヶ谷遺跡（現、鎌倉税務署）・千葉地遺跡（現、紀ノ国屋）・諏訪東遺跡（現、富士銀行）などと同様に、市内でも有数の遺跡として数えることができる。

漆碗・漆皿は一面～七面までの包含層・遺構覆土・排水溝から出土している。三面での出土点数が60点と最も高く、三面を境にそれ以前の四面～六面では平均23点前後、それ以後の一面～二面では40点強が出土しており、時期的な推移の中で漆碗・漆皿の保有点数に変化のあったことが推測できる。一方、文様種別ごとの出土傾向としては、無文と手描き文がそれぞれ三面での17点と38点を最多とし、無文はその前後の時期に大きな変化が見られないのに対し、手描き文は四面～六面で平均９点程であったのが、一面～二面で30点強と大幅に増加している。また、印判文は手描き文とは反対に、六面での７点を最多として漸次減少している。一般に印判文は手描き文より後出し、施文工程の簡略に伴い多用され数量的にも増加すると考えるが、本地点でのこうした傾向は、遺跡の性格あるいは居住者の嗜好によるものであろうか。なお、漆碗・漆皿の出土傾向は細片を含めた破片点数をもとにしており実数を正確に反映しているかは不安であるが、総点数232点中に占める文様種別の割合は、無文３（63点）：手描き文６（140

点）：印判文（29点）である。

【金属製品】

銅製品には銭と家具調度の飾り金具類（縁飾り・座金）、鉄製品には多量の釘類（釘・両頭釘・鎹・掛金の壺金具）、のほかに日用品（刀子・燧鉄・毛抜き・縫針）、煮炊調理具（鍋弦・五徳・火箸・まな箸）、工具（錐）、武具（鏃）、その他（天秤皿・如来立像・建具調度の金具）などの多種多様な製品が見られた。

○銭

総数237枚が出土した。一面では緡状態（図版18参照）で見つかった62枚を含む92枚、二面は23枚、三面は20枚、四面は溝７出土を含む78枚、五面は４枚、六面は８枚が出土し、層位不明の資料（排水溝・表面採集）として12枚がある。緡のちぎれと溝７の出土銭を除くと一面で30枚、二面～四面で20～25枚程となり、五面と六面が10枚にも満たないことと比較すれば格段に多いことが判る。鎌倉での銭の出土状況は、商業活動の活発化と貨幣経済の浸透に伴って13世紀後半から増加し、14世紀に入ると激増する傾向にあるが、本地点の出土状況もこれに矛盾するものではない。ところで、『吾妻鏡』建長五年（1253）十月十一日の条には薪・馬草等の価格について「炭一駄代百文、薪三十束／三把別百文、萱木一駄／八束代五十文、藁一駄／八束代五十文、糖一駄／俵一文代五十文」と定めており、応永二年（1395）の金沢称名寺・金堂造営工事では一日分の賃金として大工に三十文、人夫に五文（「称名寺金堂造営人夫仕洒直注文」）が支払われた。こうした例から62枚の銭は相応の価値があったはずである。数枚なら見落とすこともあろうが、どうして生活面上に落ちた緡のちぎれを拾わなかったが不思議である。

○鉄　釘

総数455枚が出土した。そのうち包含層からは約半数にあたる231点（一面３点、二面44点、三面103点、四面19点、五面45点、六面10点、七面７点）、残る半数のうち溝７からは、170点（覆土130点、掘り方40点）もの釘が出土している。これらの釘の多くは完形に近く錆もほとんど見られないため、鎌倉で最も良好な資料となるものである。細かな観察は行っていないが、形態別に見ればほぼ真っ直ぐなもの131点（未使用５本を含む）、不規則にねじれ曲がるもの148本、規則的ともいえる曲がり方をするもの122本、その他折損品54本が見られた。規則的な曲がり方をするもの122本の釘にはいくつかの類型が見られ「く」形に緩く屈折するもの、直角に屈折するもの（頭部近くで屈折、中央で屈折、先端近くで屈折）、「し」形に似て緩く曲がるもの、「し」形に強く曲がり釣針に似るもの（図版20参照）がある。釘抜きのない当時とすれば、これらの各種の曲がり形は木材どうしをねじったり、てこを応用して釘を抜く際のやり方に起因すると思うが、打ち込まれた部材の太さや位置でも異なるであろうし、まったく別の用途（釣針等）に使われた可能性も考えられる。なお、ほぼ真っ直ぐな釘の頭部を除いた長さは1.6～16.5cmまでの各種あり、なかでも3.3～8.8cmの長さが多いものの特に集中する傾向はなく、長さについての規格は窺えなかった。

○刀子・鏃

刀子は折損品を含めて10本が出土した。形態のわかるもののうち、細身で区（まち）のないものは全長18.0cm、19.6cm、21.7cmの３本（図47－299、図60－178、図74－144）があり、現在のナイフと同じ使われ方をしたものであろう。また、区のあるものは刃部長18.8cmと21.8cmの２本（図63－46、図76－47）があり、腰刀として身につけていたものと思われる。腰刀は貴族や僧侶を除くあらゆる身分の物が持っていたようで、打刀や太刀に比べて遺跡からの出土例は多い。なお、木製品の中に刀子の把木３点（図38－21、図74－152、図78－69）、鞘の可能性のあるもの１点（図79－76）が出土している。

鏃は平根（図43－69）と丸根（図47－300）の２点があり、三つ又（図53—62）のものは鏃と趣が異

なるため工具の一種ではないかと考える。なお、木製品の中に鏑（かぶら）の可能性のあるもの３点（図65－111、図69－117、118）と弓と思える断片１点（図74－157）が出土した。本来、鏑は先端に雁股の鏃を取り付け鏑矢とするが、犬追物などにはそのまま使用したようである。また、弓は木芯の両側に竹を貼る三枚打と呼ばれる形態である。

これらの他に、武具・刀装具の可能性あるものとして骨製の鞭（しおで、図64－97）・鞘（こはぜ、図46－243）・鐺（こじり、図33－50）、銅製の小札（こざね、図45－217）、芝引（しばひき、図56－58）が見られるが、鞭は紅刷毛の軸、小札と芝引は調度の飾り金具にも似ており、個々の用途は確定できない。

○如来立像

多量のかわらけ皿に混じって排水溝から出土したが、排水溝を掘削した時期と位置から推して、一面「かわらけ溜り１」の遺物として間違いない。総高2.25cmを計測する鉄製の如来立像（図56—51）で、印相が不明瞭なため釈迦か阿弥陀か判別できない。かつて永福寺の僧坊の一つではないかとされる遺跡（「永福寺跡—二階堂字獅子舞613番４外他地点—」1998年）から銅製の如来立像（総高2.0cm）が出土しており、材質が違うものの鎌倉では２例目の発見となる。こうした小形の如来像は、おそらく鋳型で量産され、厨子や袋に収め念持仏として携行する守り札的なものであろう。なお、同じ一面レベルで念珠の母指（材質不明、図56－72）も出土している。

この他、さまざまな「まじない」に関わる遺物として木製の人形（図79－75）、鳥形（図33－47）、陽物（図42－21）があり、ミニチュアの鍬（図68－97、98）や板草履（図70—136）も形代の可能性がある。また、子供の健やかな成長を願う遊戯具として毬杖（ぎっちょう）の毬（図34－89、図65－115、図75－28）、独楽（図53－64）、羽子板（図68－96）が出土した。なお、土製の小壺（図46－269）は溝７掘り方に正置状態で埋められており、何らかの「まじない」に関わる遺物と考えている。

【自然遺物】

貝殻、鳥獣魚骨、鱗、植物種子、蛹の外殻がある。正確な鑑定を受けていないため、多くは写真掲載（図版21～23参照）にとどめ細かな分類は行わなかった。

○貝殻

整理箱にして13箱が出土した。貝は食物として入手し、殻は土壙や溝あるいは整地層に混ぜて捨てられている。これら貝殻には直接火を受けたものがなく、身は刺身か茹でてあるいは身を取り出し焼いて食べたと考えられる。また、大形で殻の厚いアカニシは、身を引き出し易くするため背面が大きく割られているのが特徴である。包含層および溝７から出土した貝殻の種別と点数は次の通りである。

・二面上包含層（アカニシ６・アワビ３・キサゴ４・トコブシ１／イガイ１・シオフキ１・ハマグリ13）

・三面上包含層（アカニシ19・アワビ26・ウミナ３・キサゴ121・サザエ７・ツメタガイ５・トコブシ１・バイ15・バテイラ１・ヘビガイ１／アサリ３・イガイ２・カガミガイ１・サルボウ１・シオフキ１・シジミ１・ハマグリ230）

・四面上包含層（アカニシ６・アワビ10・キサゴ19・コシダカガンガラ１・サザエ２・ツメタガイ１・トコブシ１・バイ１／イガイ１・ハマグリ105）

・五面上包含層（アカニシ９・アワビ15・キサゴ３・サザエ５・トコブシ３・バイ６／イガイ１・ハマグリ54）

・六面上包含層（アカニシ11・アワビ27・キサゴ12・サザエ９・タカラガイ１・トコブシ６・バイ１・バテイラ１／イガイ２・カガミガイ１・サルボウ２・シオフキ２・ハマグリ74）

・溝７覆土（アカニシ32・アワビ51・ウミニナ３・キサゴ18・サザエ14・ダンベイキサゴ４・ツメタガ

イ５・トコブシ２・バイ６／イガイ５・カキ３・サルボウ２・シオフキ３・ハマグリ140・ベンケイガイ１）

・溝７掘方（アカニシ12・アワビ26・キサゴ15・サザエ９・ツメタガイ４・トコブシ５・バイ７／サルボウ１・シオフキ１・ハマグリ189）

これを見ると巻き貝ではアワビとアカニシ、二枚貝ではハマグリが好んで食されたようである。特にアワビは殻長20cmを超えるものが多く、サザエに比べて数量も勝っている。アワビが現在と同様に尊重される食材とすれば、鎌倉市街地でこれほど多くのアワビが出土した遺跡はなく、居住者の身分や性格を反映する資料となるかもしれない。一方、特定の貝殻が多量に出土した遺構には次のものがある。

・木組遺構１（アカニシ３・アワビ２・ウミニナ２・キサゴ92・コシダカガンガラ１・バイ１／イタヤガイ１・サルボウ３・シオフキ15・ハマグリ2680）

・貝溜り（キサゴ３／シオフキ４・ハマグリ144）

両遺構とも貝殻層中に間層がないため、多量の貝を一時あるいは短期間のうちに食し捨てたことが判る。木組遺構１では実に1340個体、貝溜りでは72個体ものハマグリが集積（図版４・10参照）していた。

他に特筆すべきは、溝７覆土からヤコウガイ（図43－62）が出土したことである。ヤコウガイは奄美以南の水深20～40mの海域に棲息しおの美しい光沢から螺鈿の材料とされるが、本遺跡には製品（坏？）として搬入されたようである。なお、螺鈿細工の小鳥（図70－149）も１点出土している。

○鳥獣魚骨、鱗

整理箱にして４箱分が出土した。トリ・ウマ・イルカ・タイ・コウイカ・サメと見られる骨の他は、まったく分類・識別（図版22・23参照）できなかった。また、獣骨の中に解体時の切り傷を残すものもあるが、骨製品の加工材を得るためか、食用にするため解体したのか判別は困難である。

史料から当時の食材を調べると、魚類では鯛・鯉・鮒・鰈・鰹・鮭・鱒・鯵・トビウオ・イシモチ・烏賊・蛸・海豚（イルカ）など、鳥類では山鳥・鶫（ツグミ）・鶉（ウズラ）・雉（キジ）、獣類では兎・猪・鹿・熊・狸など（渡辺　実著『日本食生活史』吉川弘文館）が見える。牛や馬の肉は食用にならなかったようで、溝７出土のウマの頭骨（図版22）は解体後にゴミとして投棄されたか、まじない的な要素があったかもしれない。

○植物種子、蛹の外殻

採取できた量はわずかある。貝殻と同様に一面～六面までの包含層や遺構覆土にほぼ共通した種子が見られた。最も多いのは桃136点、次いで胡桃51点がある。松（溝７）・梅（溝８、六面包含層）・栗（溝７、六面包含層）は数点に留まり、瓜（溝６、溝７）の他に粟・稗に似た雑穀（土壙７、五面包含層）も確認した。なお、蛹の外殻は三面木質腐蝕土から得たが種名は不明である。（図版23参照）

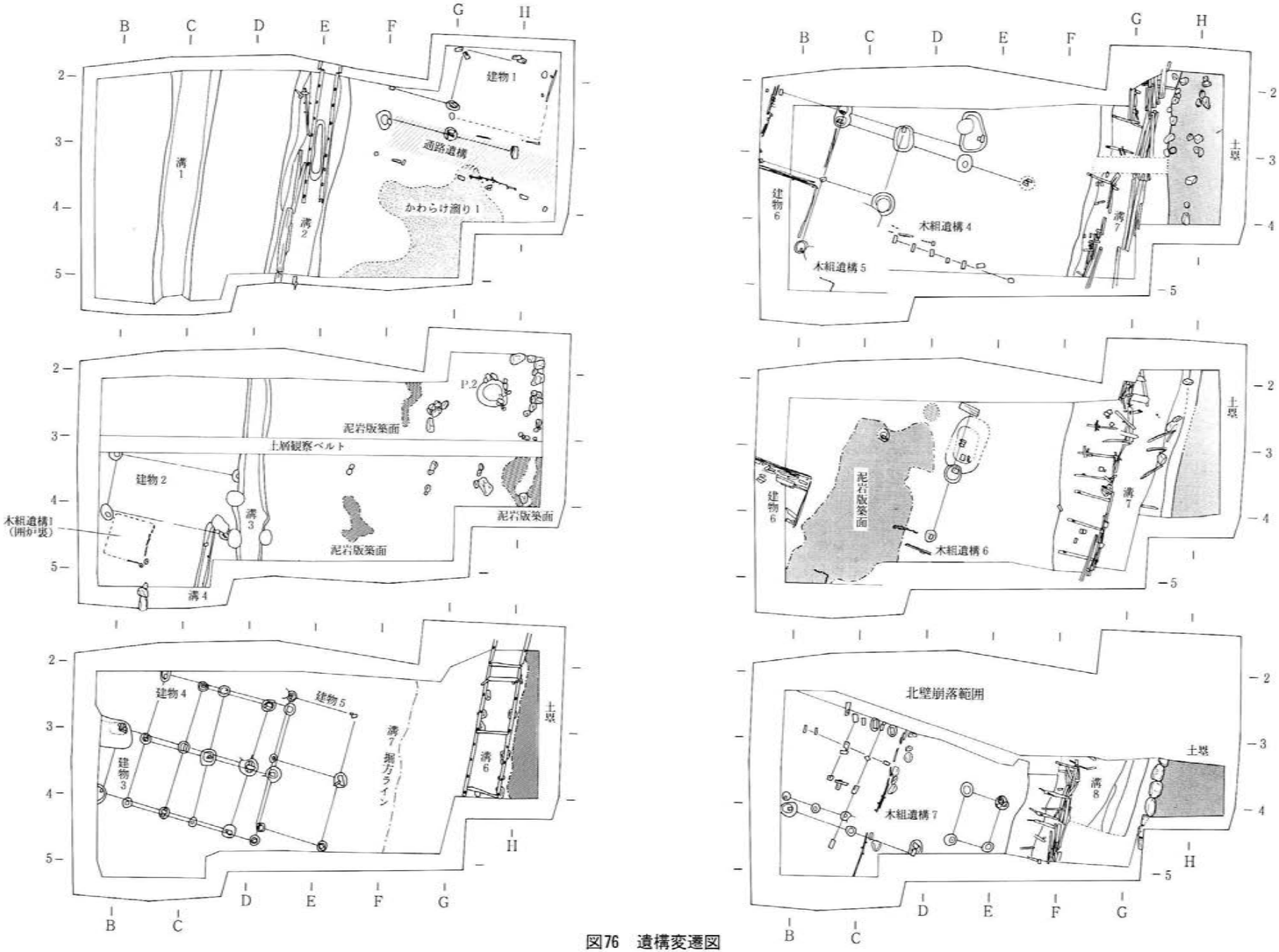

建物1
通路遺構
かわらけ溜り1
溝1
溝2
P.2
泥岩版築面
土層観察ベルト
建物2
溝3
木組遺構1
(囲炉裏)
溝4
建物4
建物5
建物3
溝7 掘方ライン
溝6
土塁
建物6
木組遺構4
木組遺構5
溝7
木組遺構6
北壁崩落範囲
木組遺構7
溝8

図76　遺構変遷図

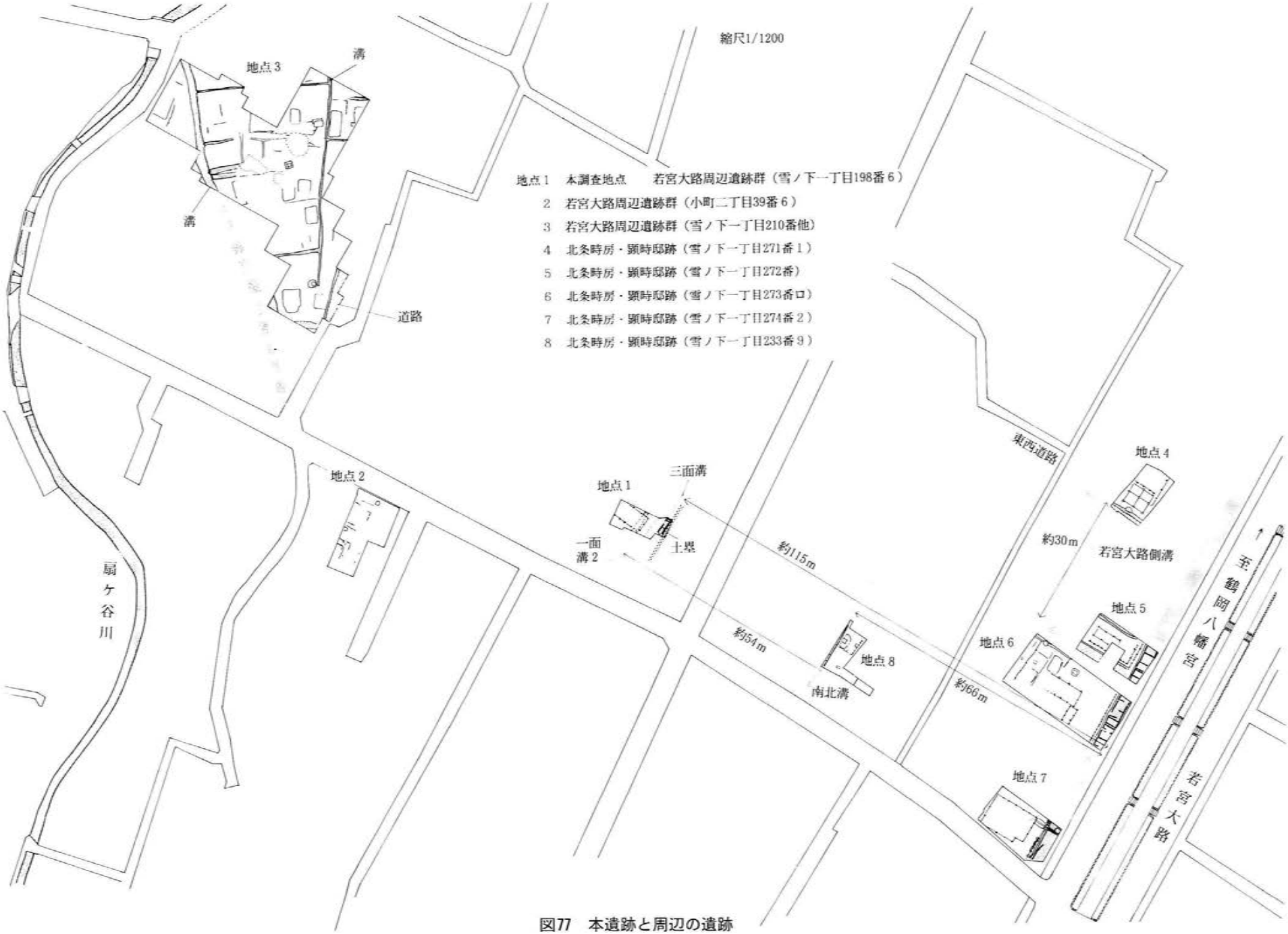
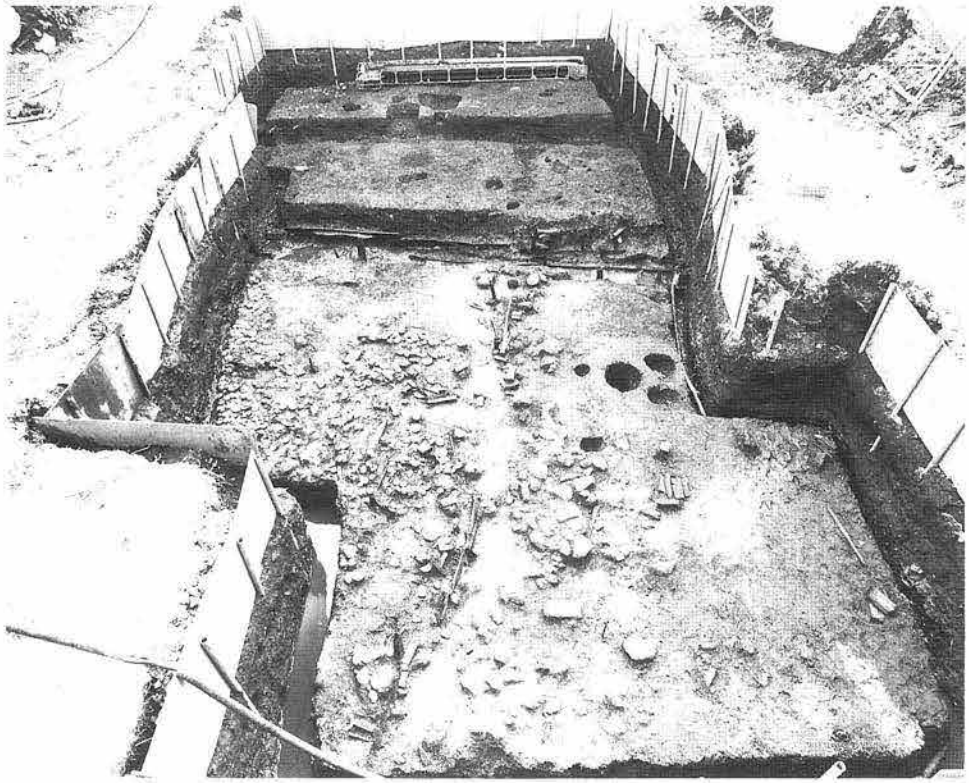


図77　本遺跡と周辺の遺跡

写　真　図　版

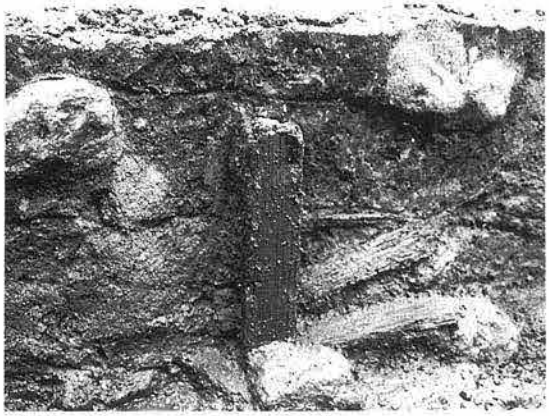


一面全景（東から撮影）

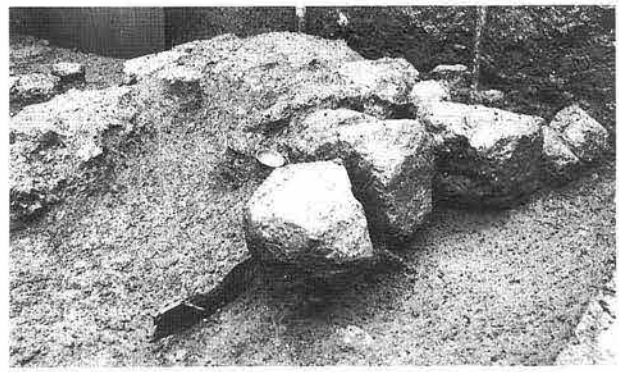
画面手前（東半部）と奥（西半部）で、遺構の様相に違いが見られる。

かわらけ溜り 1

通路状遺構の木組み



柱 3　柱穴掘り方は確認できない

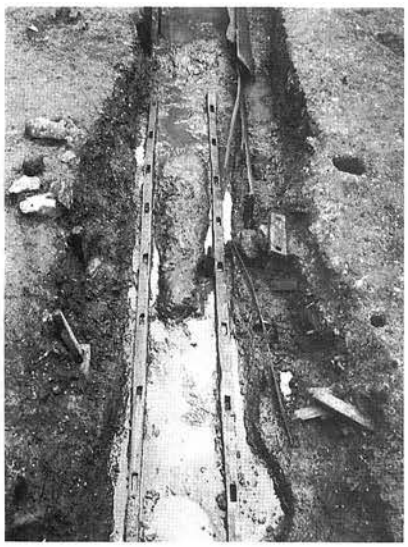


一面検出の前段階で見つかった石組み

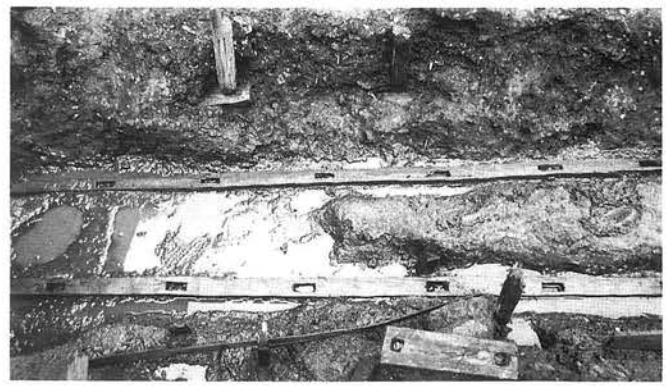
図版 2

溝 1（左）と溝 2（右）の他に、南西部角隅でかわらけ皿が集中して見つかった。

一面西半部の状態（南から撮影）



溝 2（北から撮影）

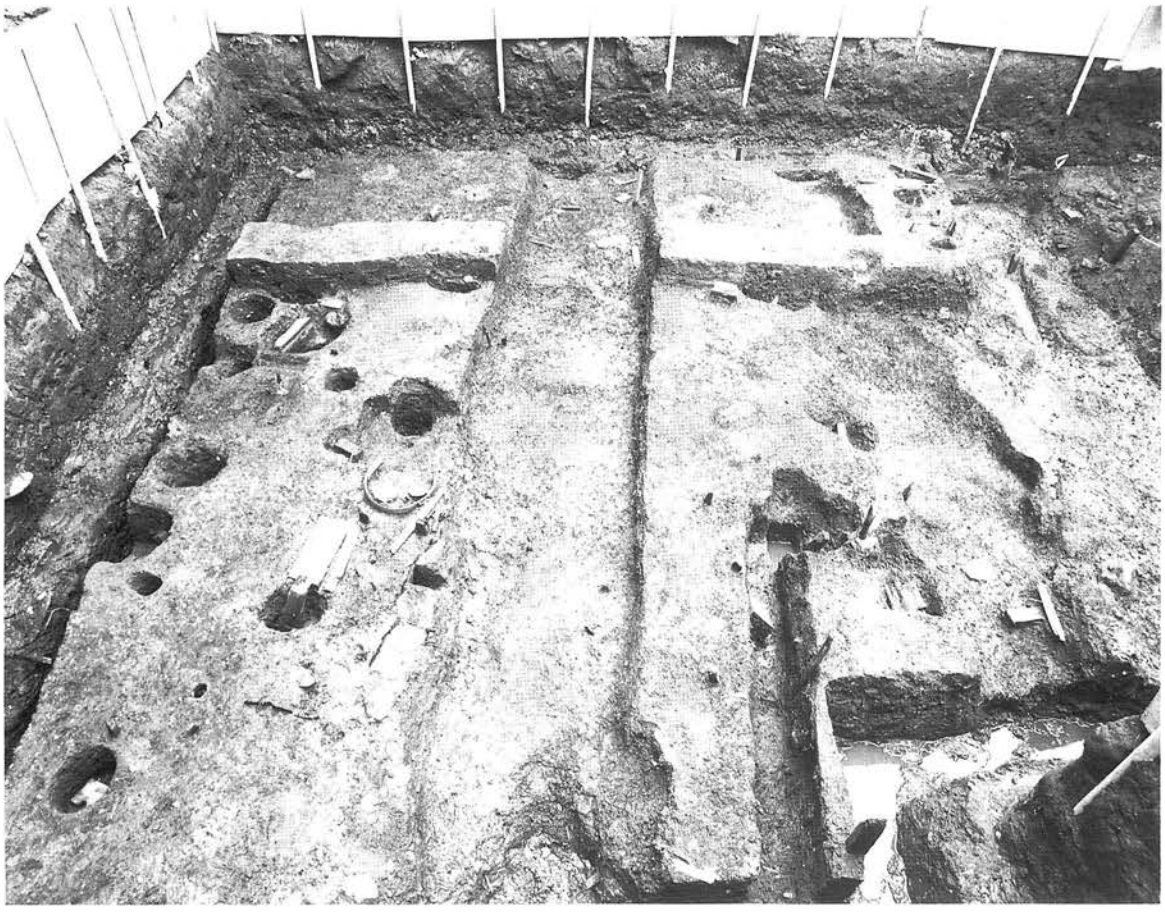


溝 2 土台角材

かわらけ溜り 2　堅く版築され潰れていた。

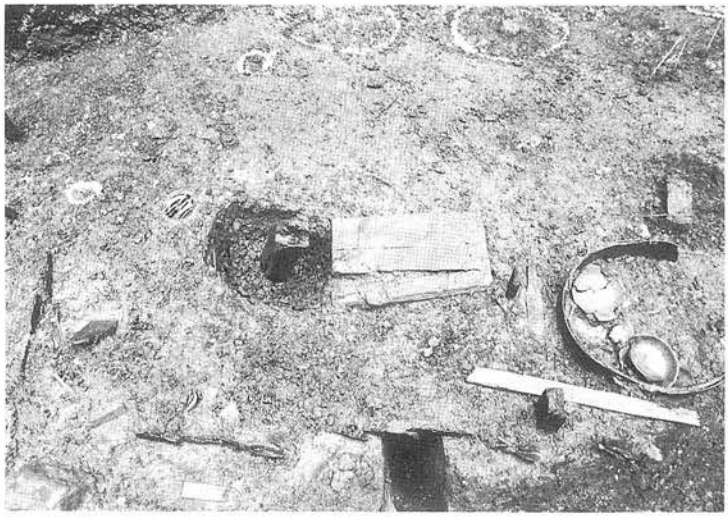
溝 2 東肩部に散在する遺物

溝の埋め土であり、目立った遺構は見られない。
二面東半部の状態（南から撮影）



旧溝1の西肩に木組遺構1を確認した。
二面西半部の状態（南から撮影）

図版 4



木組遺構 1 、L形に埋められた板と柱は上端が焼け焦げていた。

同左部分、曲げ物、かわらけ皿、板杓子。

木組遺構 1 内部の調査

同左、多量のハマグリに混じって木製品も出土。

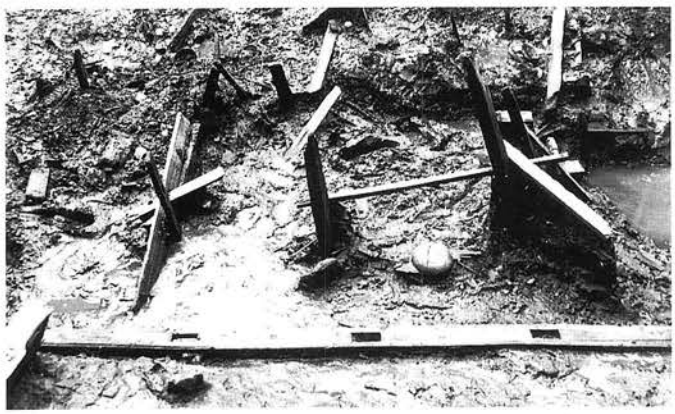
木組遺構 1 完掘状態

同左部分、板材は箸を突き通し固定されていた。

三面全景（東から撮影）

溝 6 土台角材、東端は土塁の一部

同上部分



溝 6 西側の木組み（四面溝 7 の控え材）

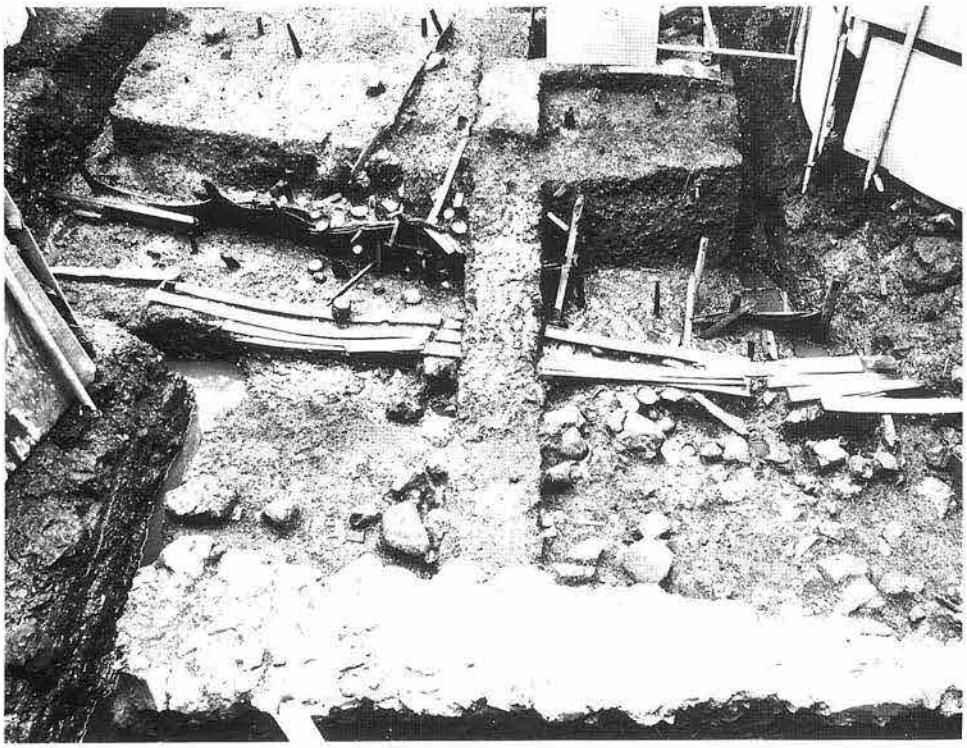
同上部分

柱13（P. 61）縁にあるのは手焙り片。

図版 6

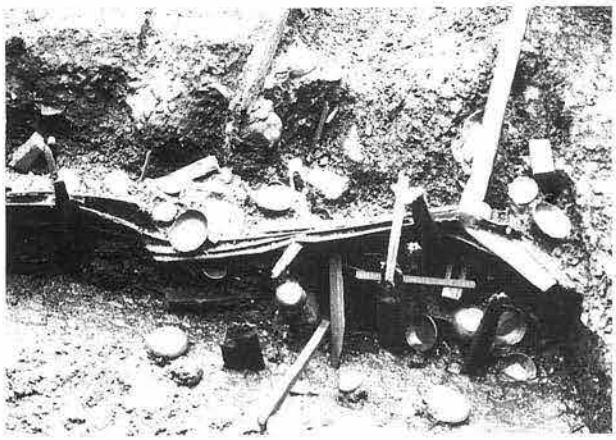
三面西半部の状態（南から撮影）一、二面で確認できない多数の礎板が見つかった。

杭止めの横板（木組遺構 3）に接する土壙（かわらけ溜り 3）。

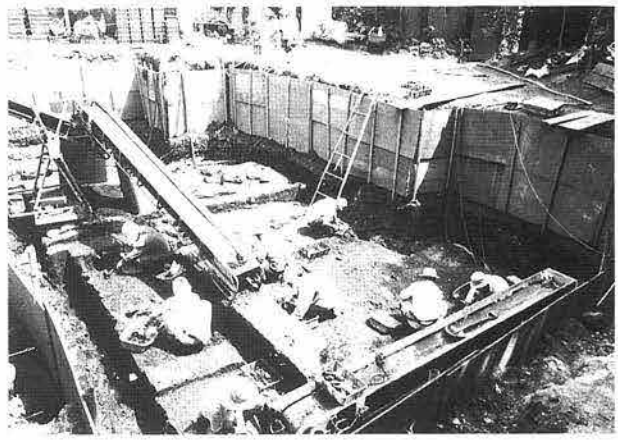


四面東半部の状態（東から撮影）

土層観察ベルトを残し、溝6下部を掘り下げた様子。画面手前は土塁の一部。



同上部分、倒壊した溝7護岸と出土遺物

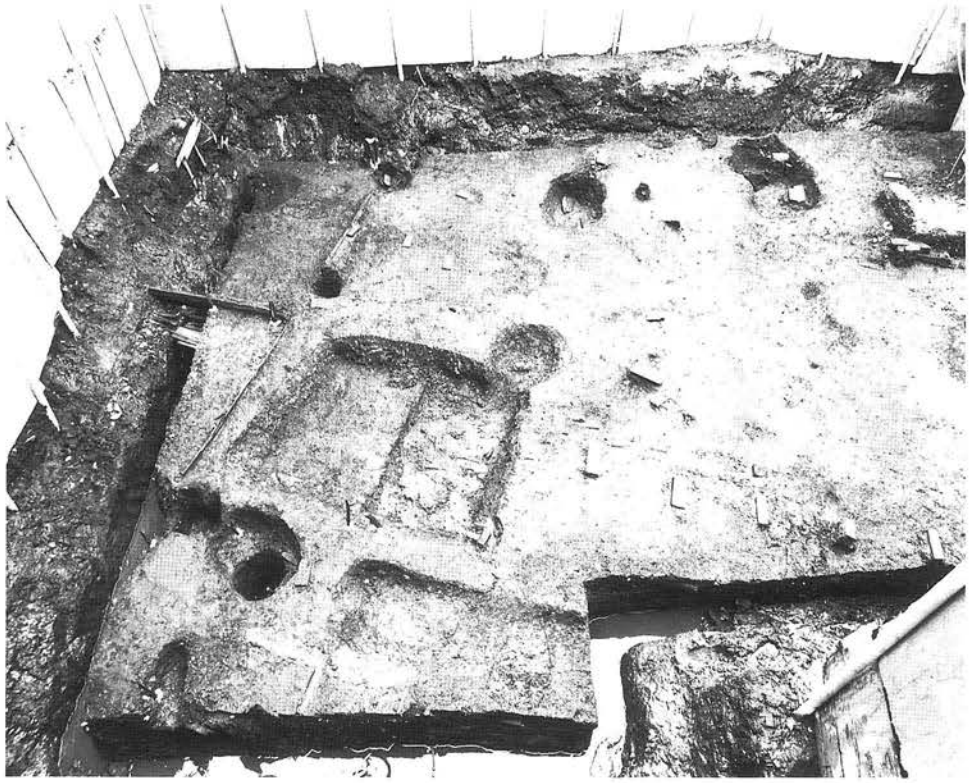


四面の検出作業風景

かわらけ溜り5

かわらけ溜り7

図版 8



四面西半部の状態（南から撮影）

生活面上に散在する礎板と建物の壁と思える板列（建物6、木組遺構4・5）が見つかった。

建物 6 内部の状態（西から撮影）

同左、床板周辺に残るかわらけ皿。

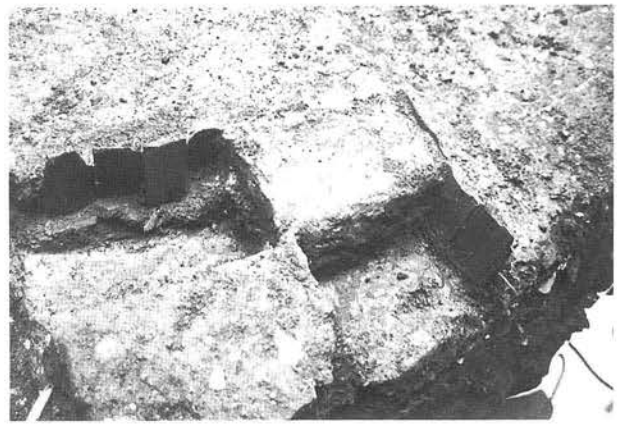
同上（南から撮影）床下の溝は排水溝

同左、壁（間仕切り）板は杭で固定されている。

四面西半部の状態（西から撮影）

画面手前は板囲いの建物（建物6、内部未完掘）、白線で示した箇所は木組遺構4と5である。

建物 6 の一部か（調査区北西角の壁面）



木組遺構 5 （内部を市松状に切って調査）

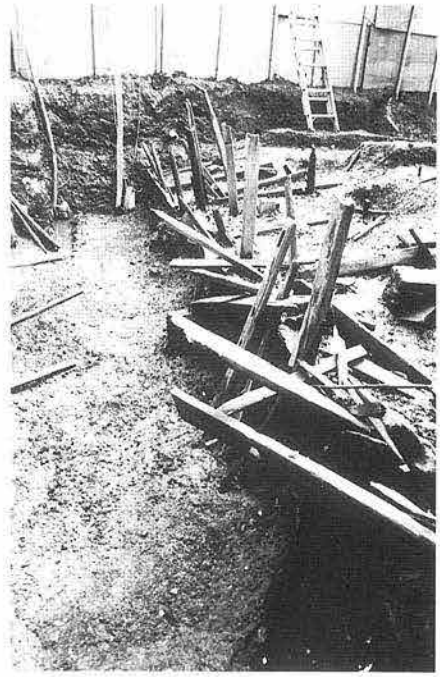
木組遺構 4

先端の焼けた柱17（木組遺構 4 の西端）

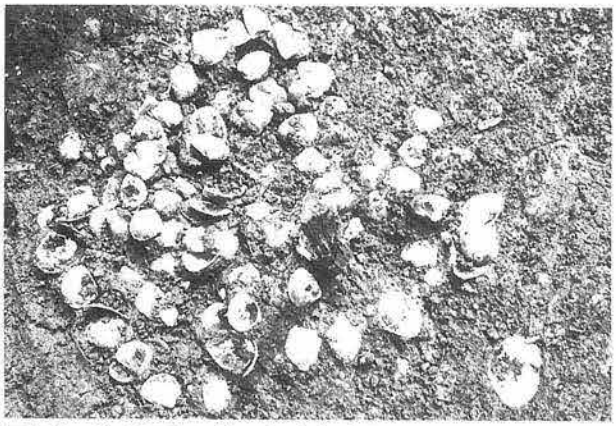
図版10

溝7の東側は土塁に接し、西側は木組によって護岸されていた。
五面東半部の状態（南から撮影）

溝7の護岸（画面の左右で控え材の構造が異なる）

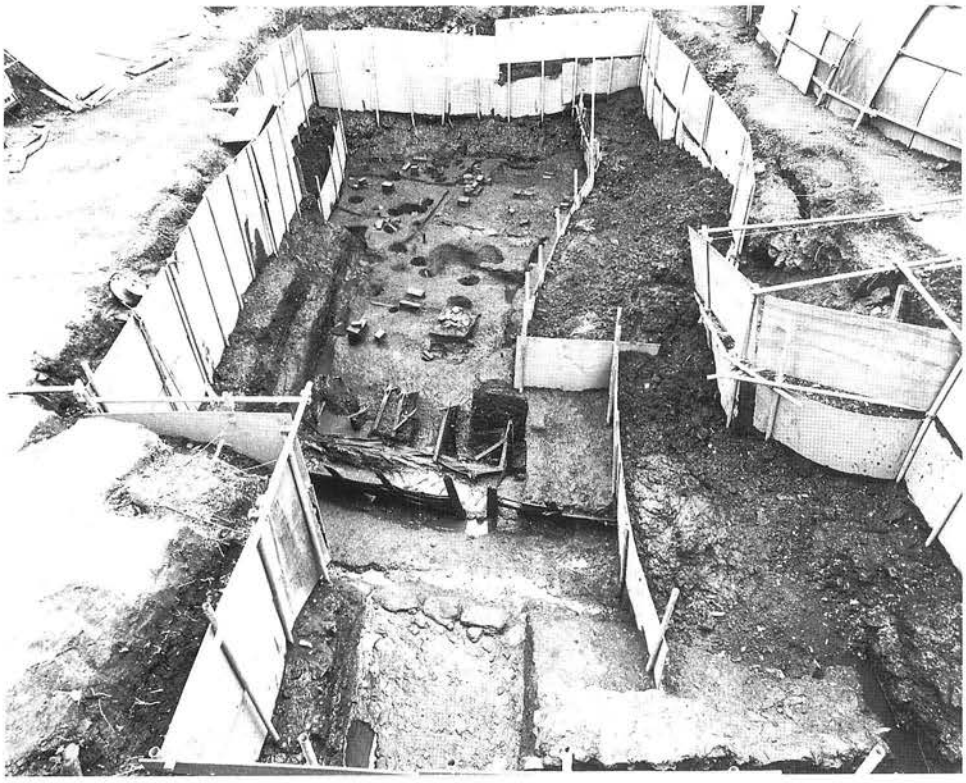


同左、西側からの土圧で倒壊した様子



貝溜り（生活面上に捨てた食物残滓、ハマグリ）

五面掘り下げの際に見つかった多量の木製品

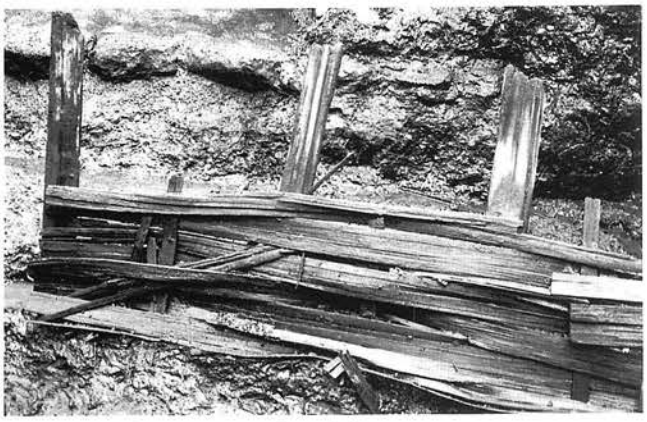


六面全景（東から撮影）

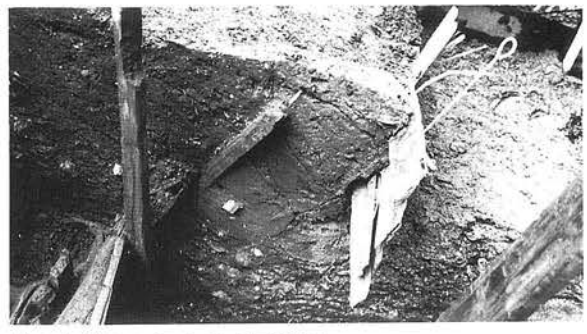
調査区壁の崩落により、調査面積は大幅に減少している。

溝7護岸を残し、西側の溝8を調査する。

画面右が溝7の護岸、左が溝8の護岸と控え材である。



同上、掘り方側から見た溝7護岸

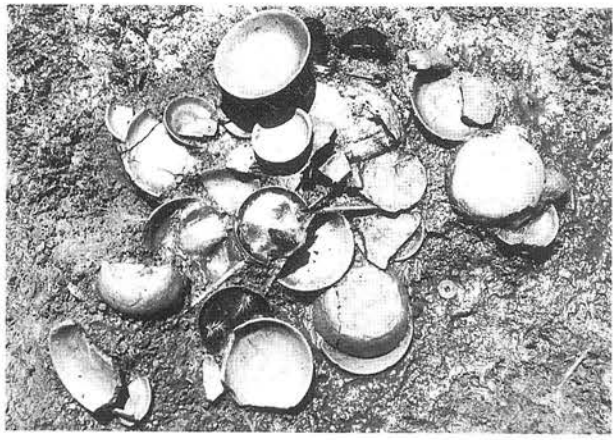


溝7と溝8にかかる土層断面

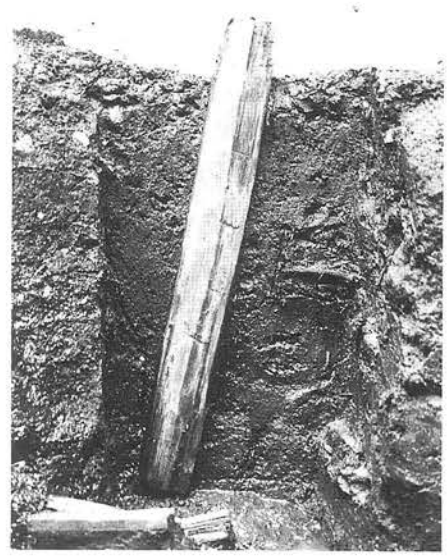
図版12

六面西半部の状態（南から撮影）

画面中央の板列（木組遺構7）を境に、右側は砂質土で固められ、左側は軟弱な粘質土であった。



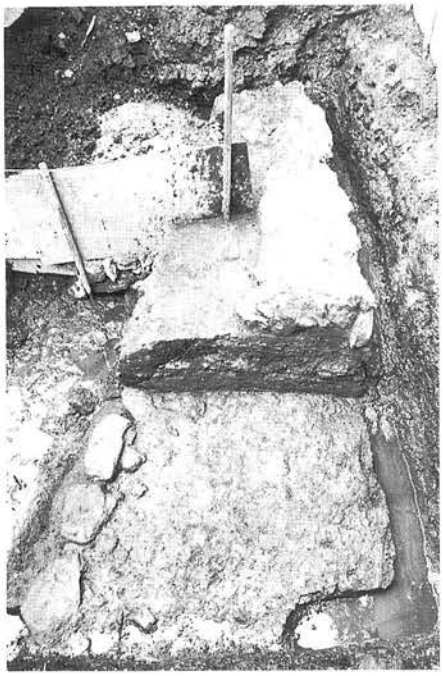
かわらけ溜り8



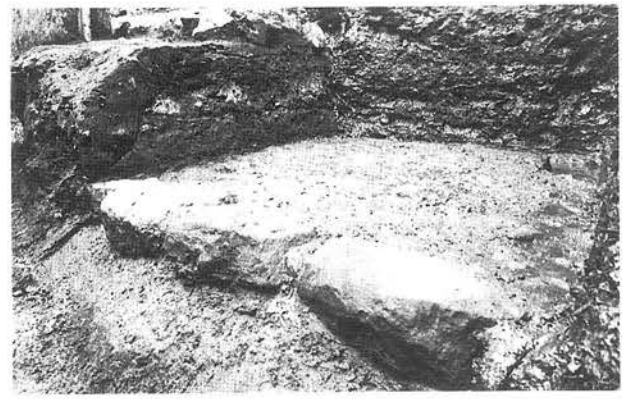
柱18断面、確認面（五面）より約20cm下に柱穴の掘り方が見える。

溝8護岸（調査区北側）

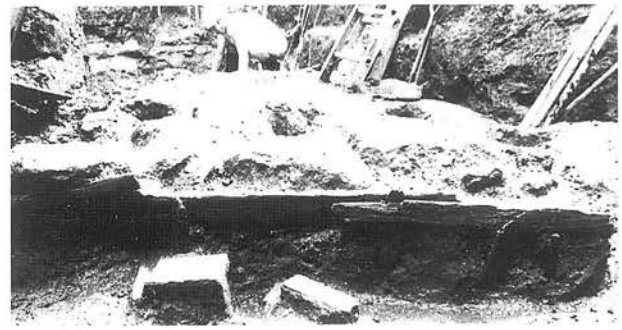
同左（調査区南側）



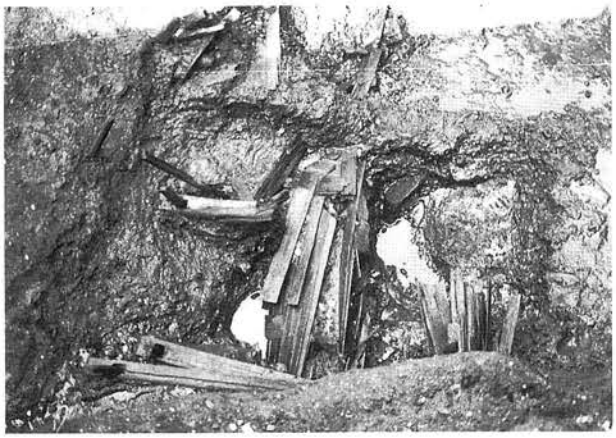
土塁の調査（南側を基底部まで掘り下げた状態）



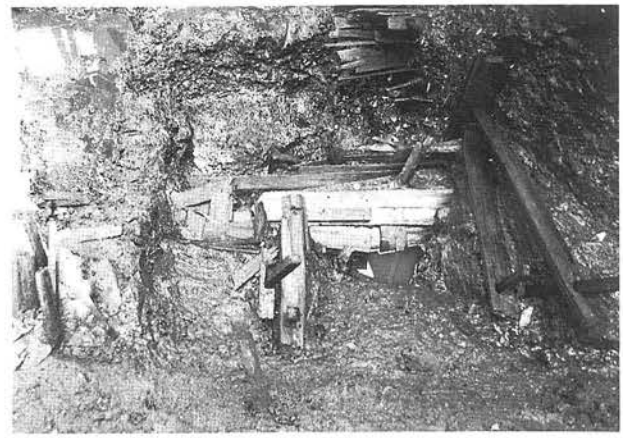
同左（基底部縁石と土塁の断面）



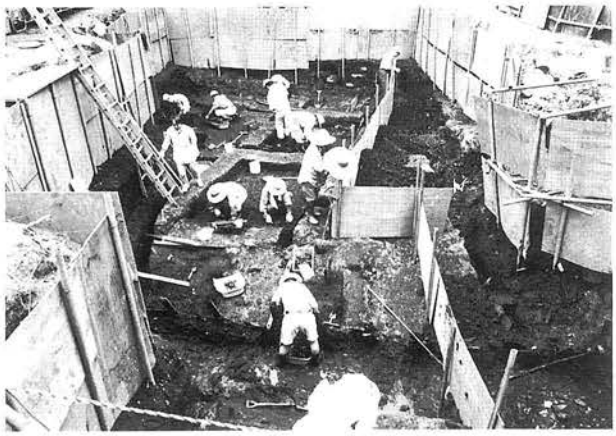
木組遺構７（西側粘質土を掘り下げて撮影）



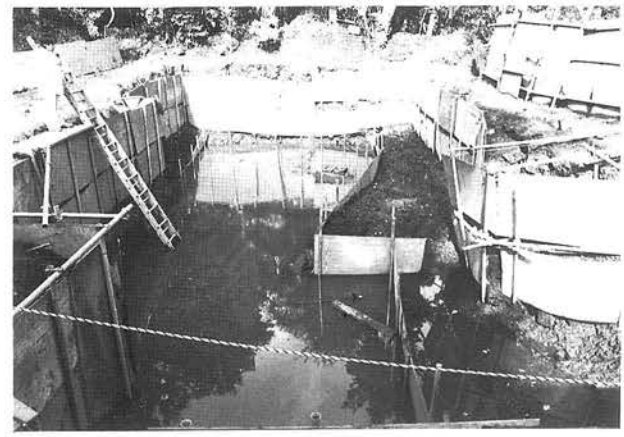
溝９護岸（七面、小範囲での確認に留めた）



同左（西側から撮影）

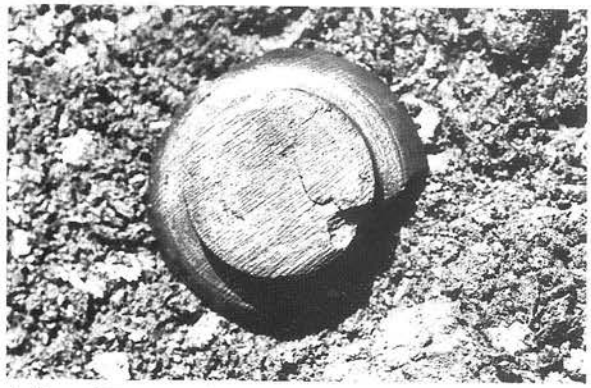


発掘調査風景（六面検出作業）



８月末の雨により冠水した状態

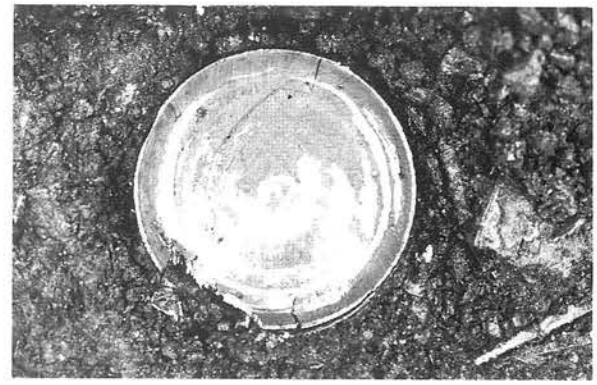
図版14



木地皿（図64－104）

黒漆皿（図67－68）

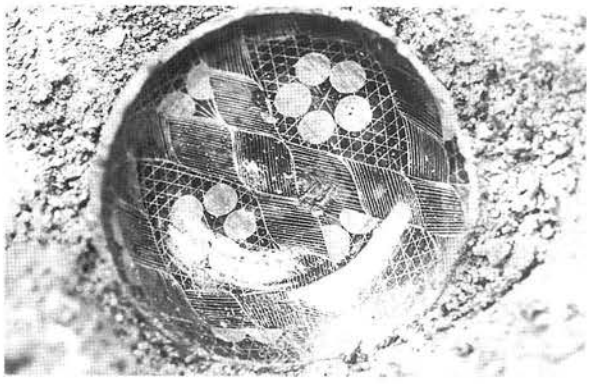
黒漆内朱皿（図67－65）



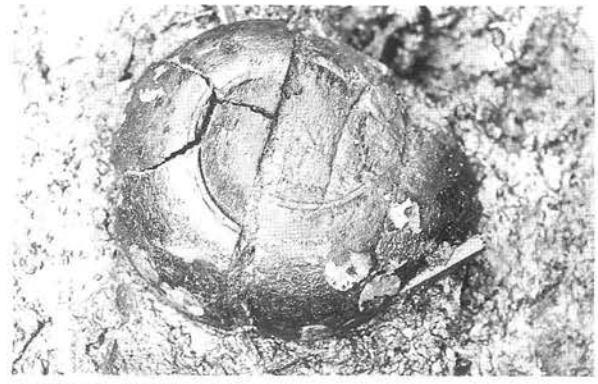
黒漆内朱皿（図67－67）

枝菊文椀（図67－81）

瓜文椀（図67－82）

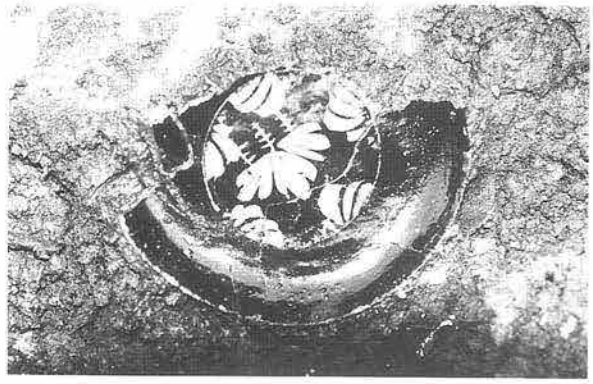


梅花、波、籠目文椀（図67－84）

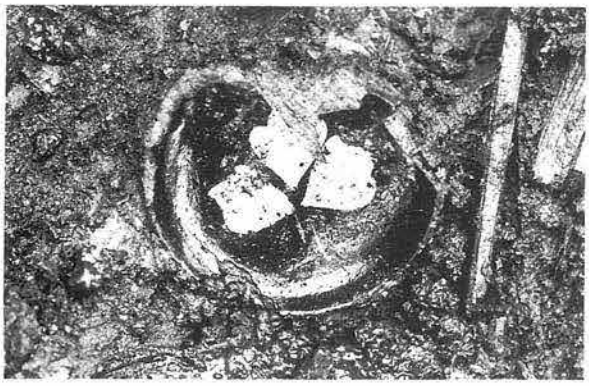


花文？椀（図67－86）

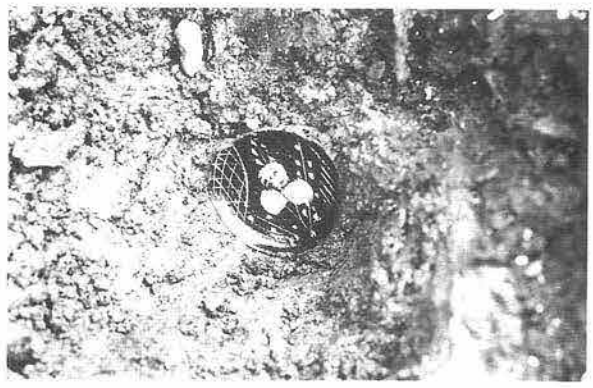
柏葉、笹文皿（未測、二面上包含層出土）



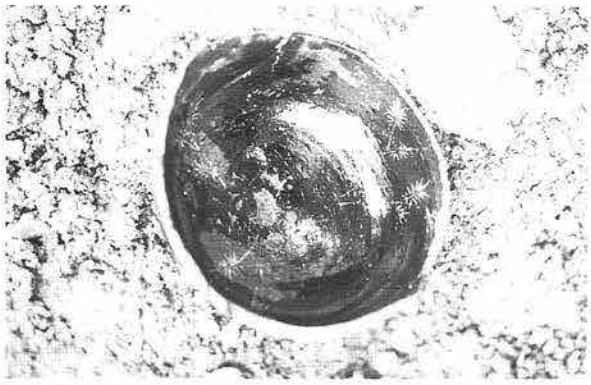
桐丸文皿（図64－107）



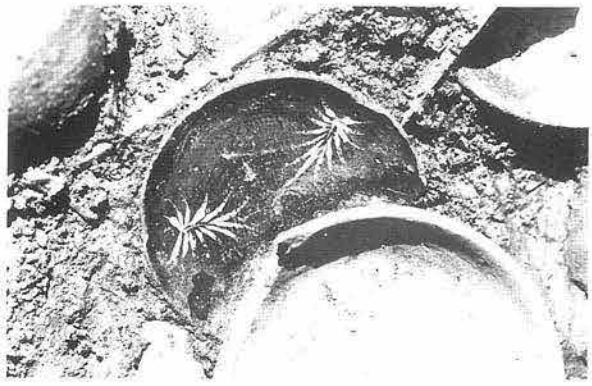
梶葉文皿（図67－70）



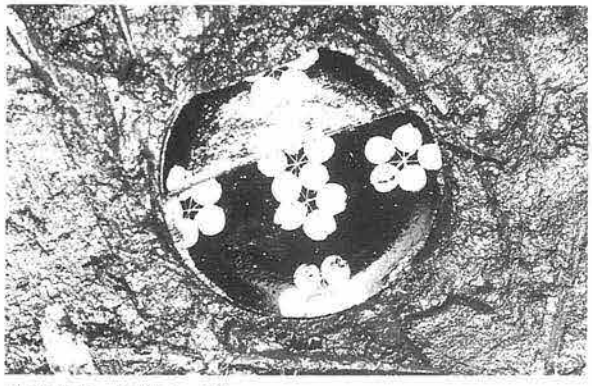
籠目、花文皿（図67－73）



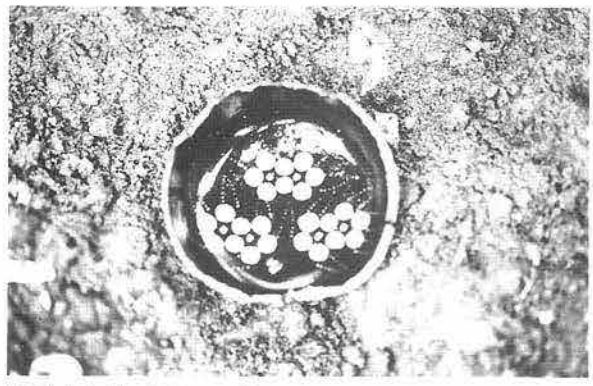
笹文椀（図48－54）



笹文皿（図51－14）

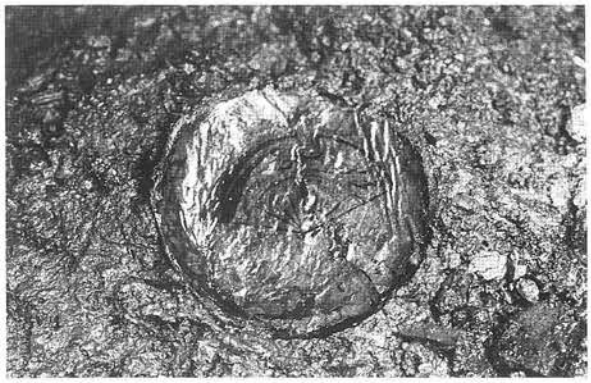


梅花文皿（図38－47）

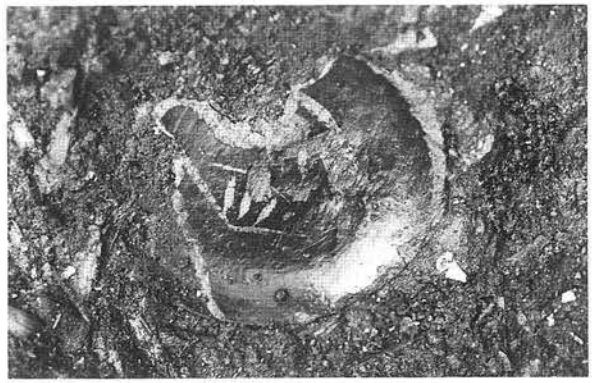


梅花文小椀（図67－79）

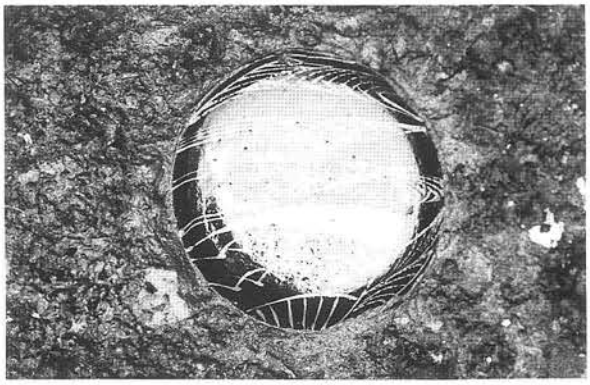
図版16



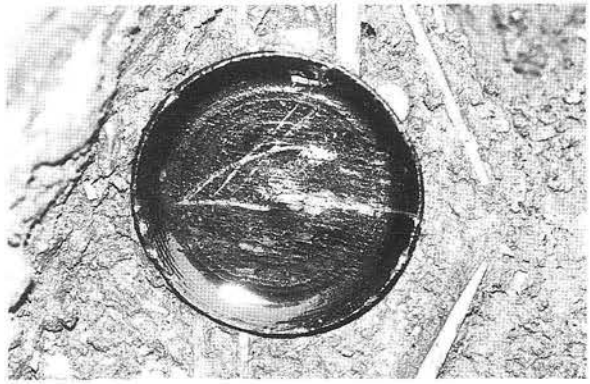
扇文皿（漆被膜、一面上包含層出土）



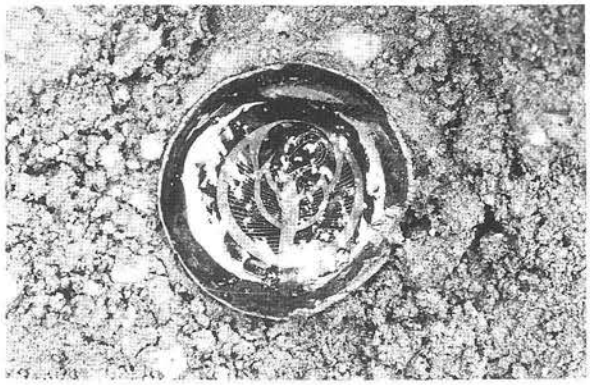
扇文皿（図64－105）



扇、流水文皿（図37－ 9 ）

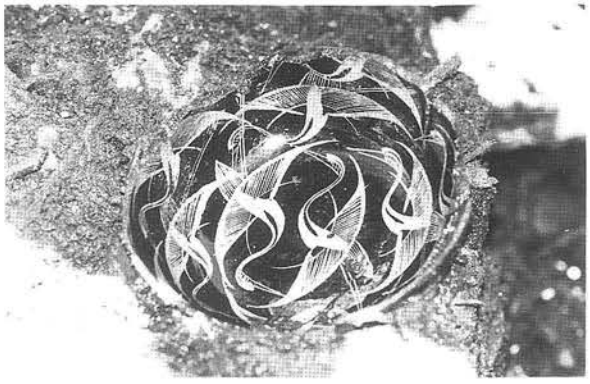


扇文皿（図37－10）

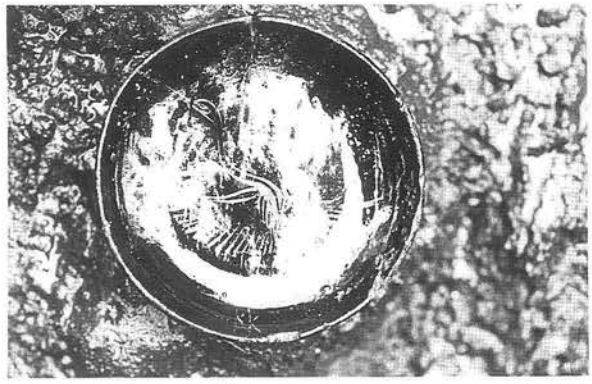


鶴丸文皿（図62－253）

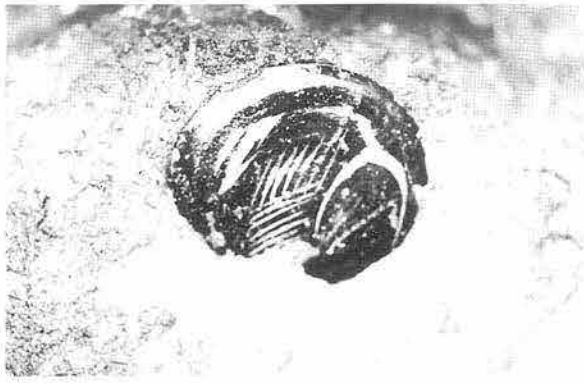
鶴丸文皿（図62－252）



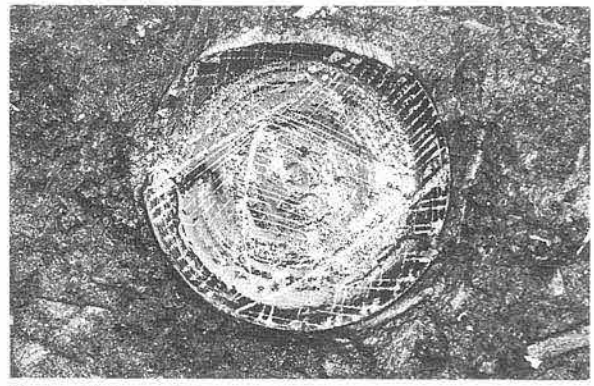
飛鶴文椀（図64－109）



飛鶴文皿（図78－52）

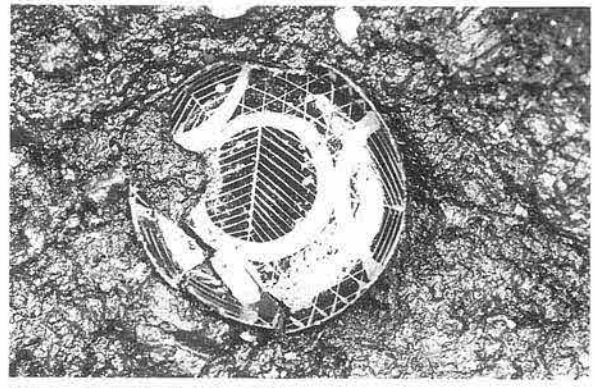


洲浜、鳥、水文皿（図34－102）

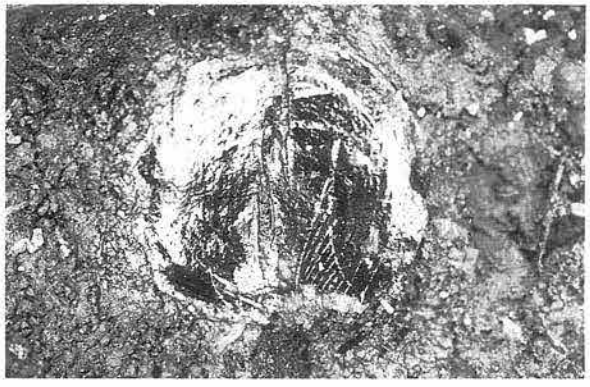


籠目、波文皿（図67－75）

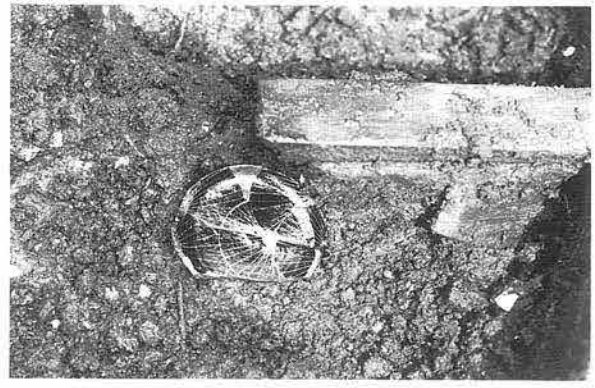
土波、松文皿（図37－11）



篭目、円文皿（図67－76）

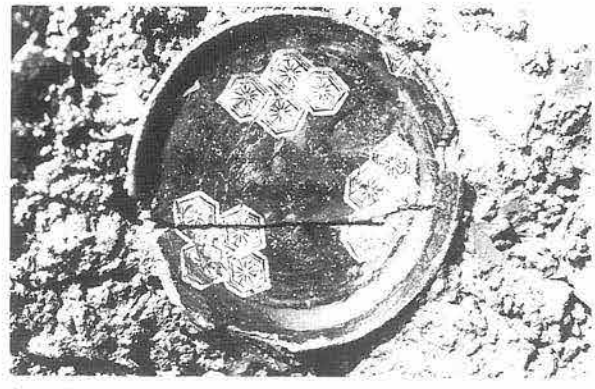


文様不明皿（未測、三面上包含層出土）



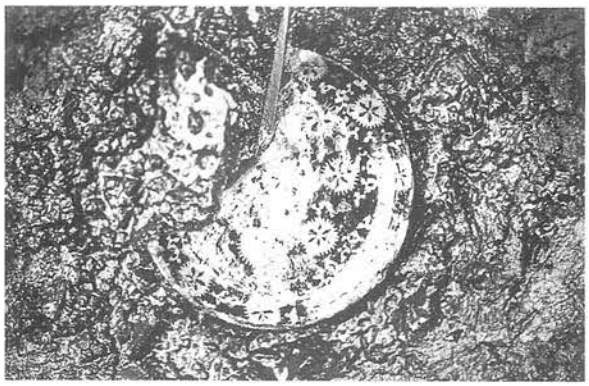
片輪車文皿（図43－65）

亀甲菊花文皿（図67－77）

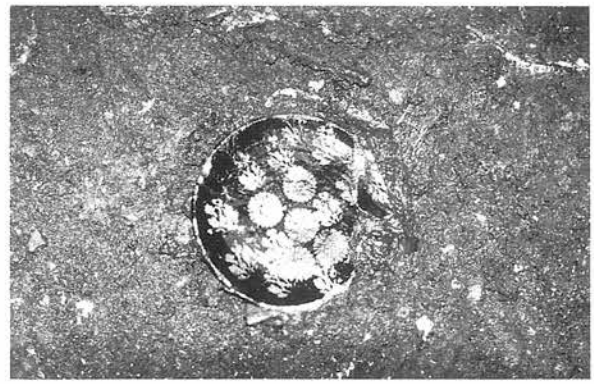


亀甲花文皿（図37－12）

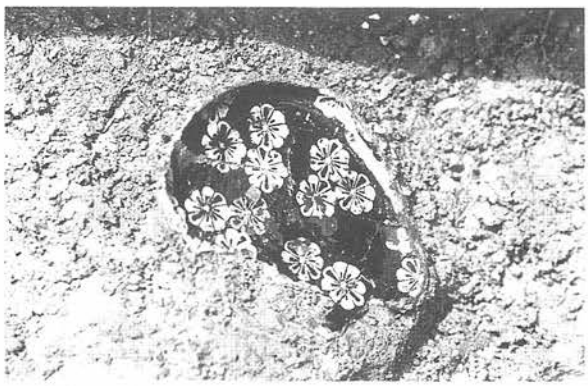
図版18



撫子、洲浜文皿（図67－78）



菊花、菊枝文皿（図39－６）

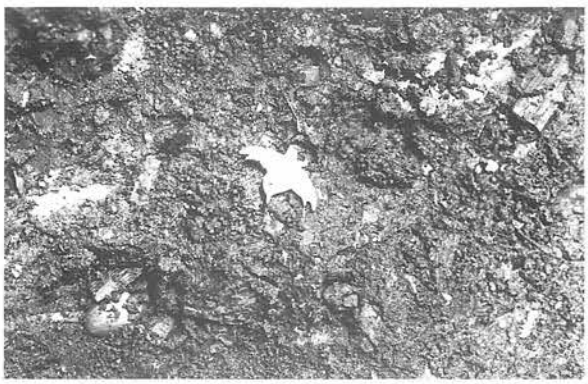


花文皿（図78－53）

木瓜文皿（図51－15）

緡銭のちぎれ（一面上出土）

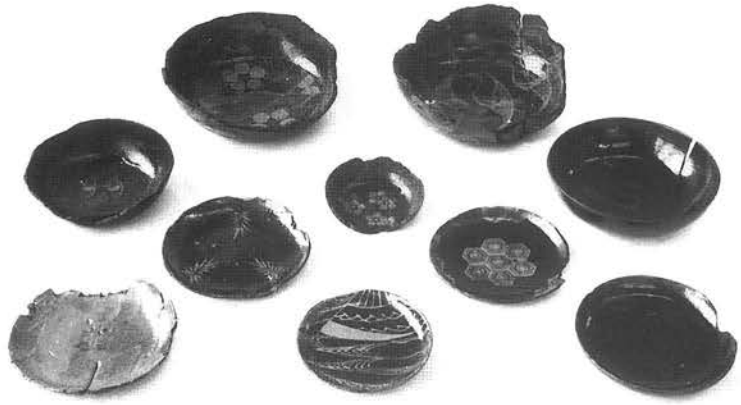
ヤコウガイ（溝７出土）



螺鈿細工の小鳥（三面上包含層出土）

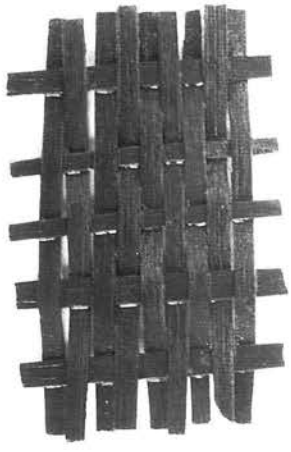
馬頭骨（溝７出土）

朱漆塗の羽子板
（図68－96）



漆椀、漆皿（口絵写真と同じ）

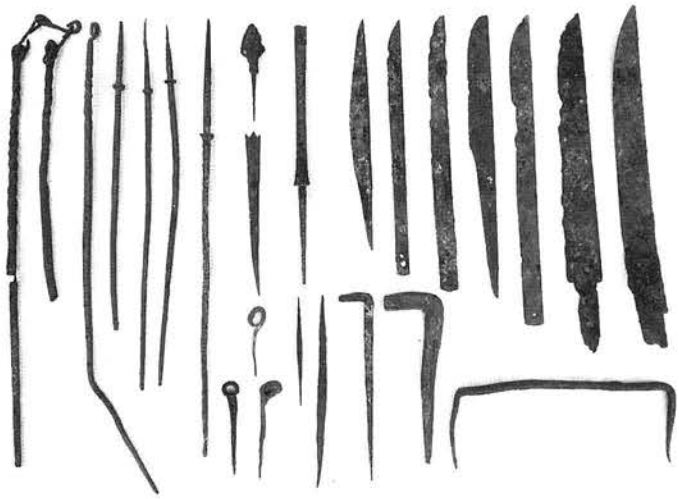
黒漆塗の横櫛



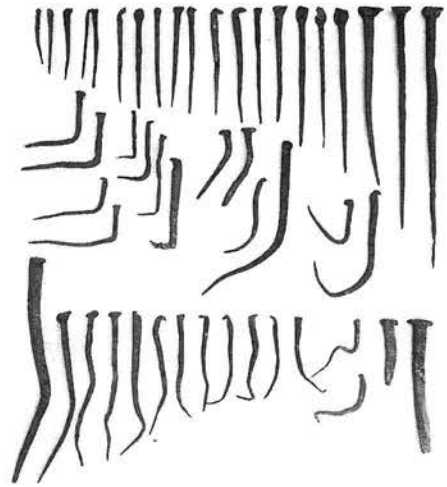
用途不明の木製品
（図48－55）
（図68－102）

箸（木組遺構１出土）

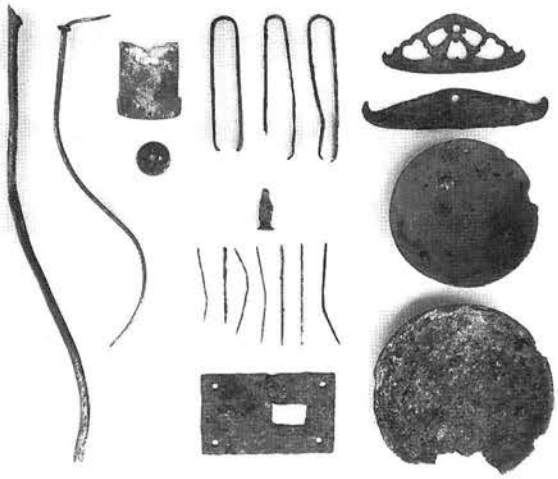
図版20



鉄製品（左から、火箸、まな箸、鏃、刀子、異形釘、鎹）

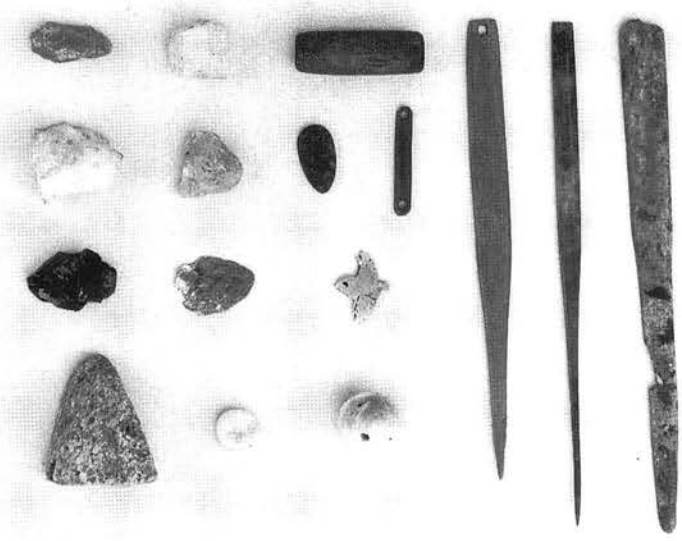


鉄釘（折れ曲がりの類型）



左四点は銅製品（飾り金具、座金など）
他は鉄製品（毛抜き、如来像、縫針、燧金、天秤皿など）

同左、部分（如来像、縫針）



石、骨、貝製品

左列上四点は石英（燧石）

下四点は黒曜石、雲母、軽石、石英（用途不明）

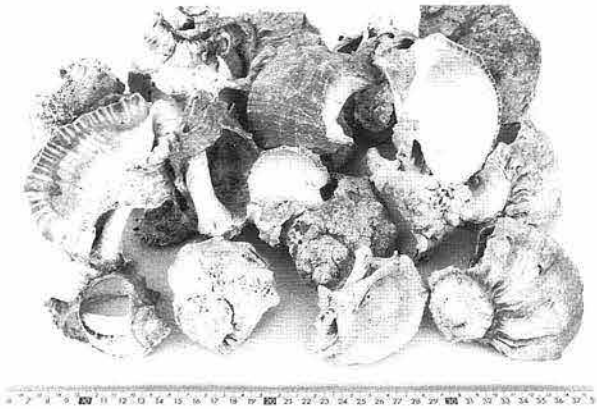
中列上三点は骨製品（鞣、鑢、靭か）

下二点は螺鈿細工の小鳥と材質不明の念珠母指

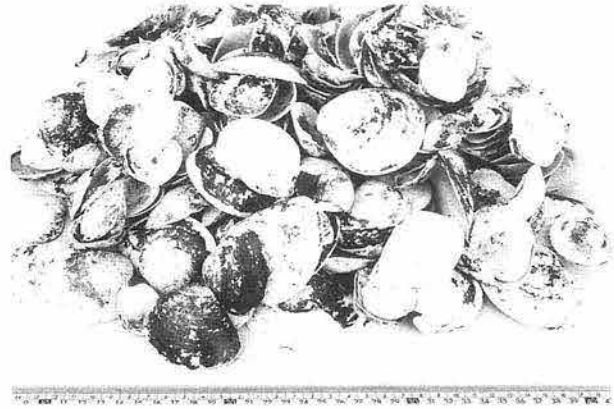
右列三点は骨製品（笄）

自然遺物（アワビ、溝７出土）

自然遺物（サザエ、溝７出土）

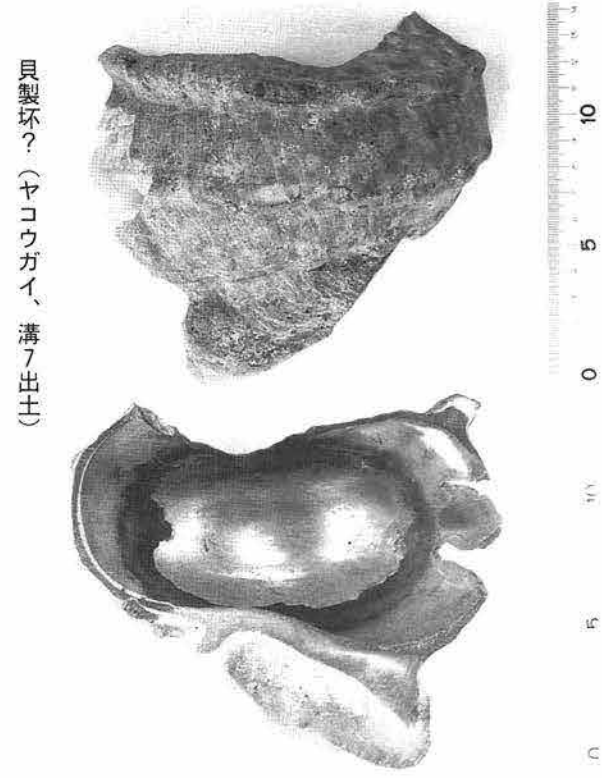


自然遺物（アカニシ、溝７出土）



自然遺物（ハマグリ、木組遺構１出土）

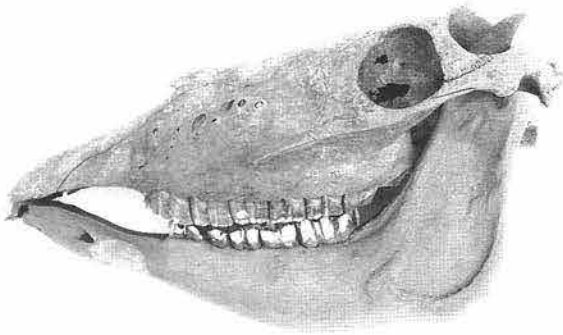
自然遺物（左上から、ツメタガイ、バイ、キサゴ、バテイラ、トコブシ、アサリ、ウミニナ？、タカラガイ、ヘビガイ、イガイ、シオフキ、シジミ、サルボウ、カガミガイ、カキ）



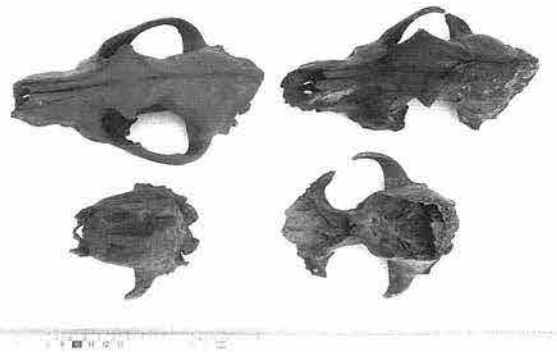
貝製坏？（ヤコウガイ、溝７出土）

自然遺物（貝）

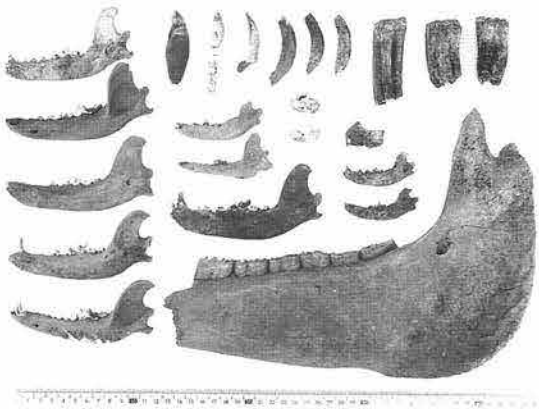
図版22



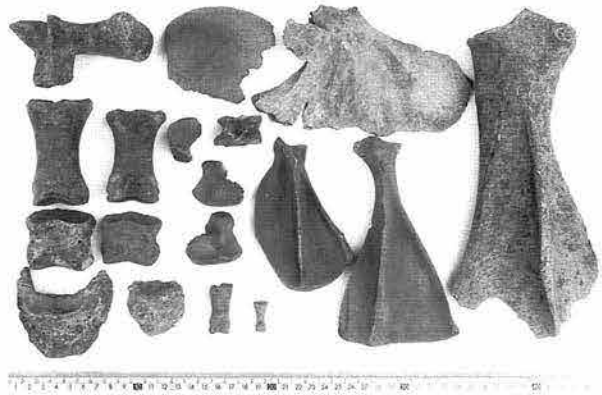
自然遺物（ウマ頭骨、溝７出土）



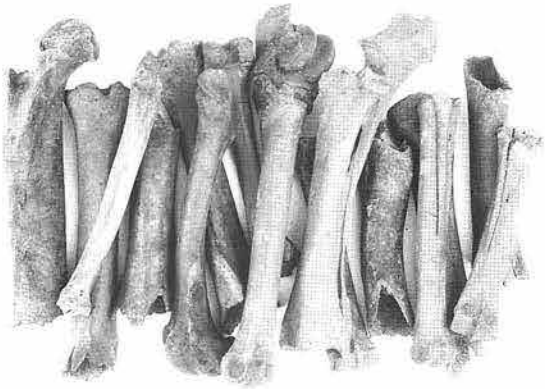
自然遺物（頭骨）



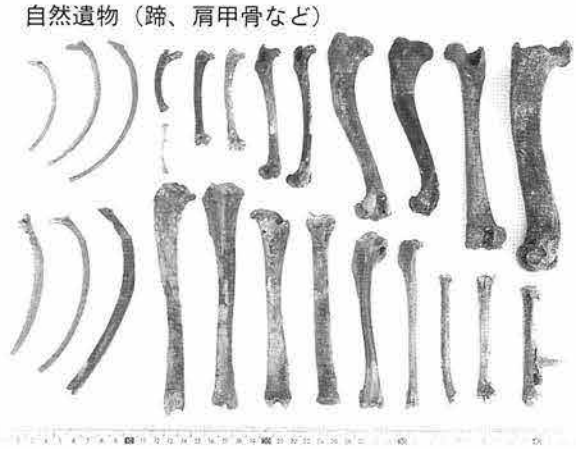
自然遺物（下顎骨、歯牙など）



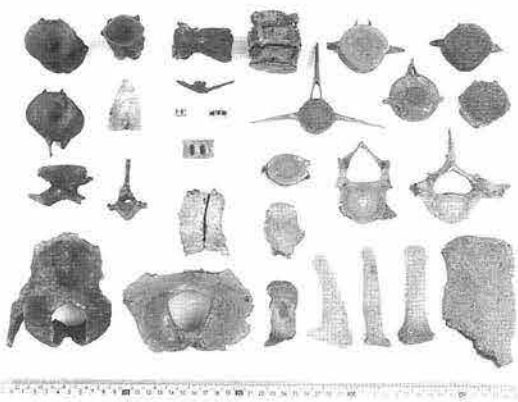
自然遺物（蹄、肩甲骨など）



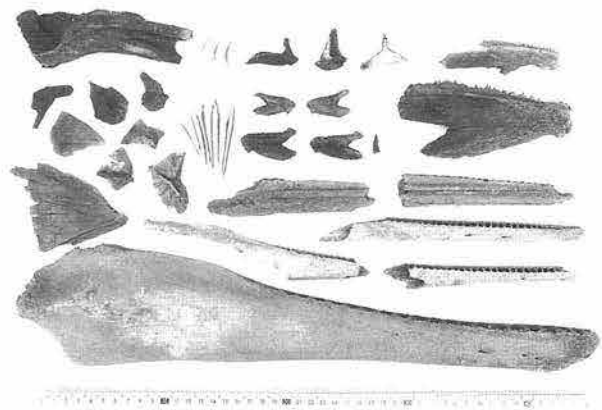
自然遺物（大形の四肢骨）



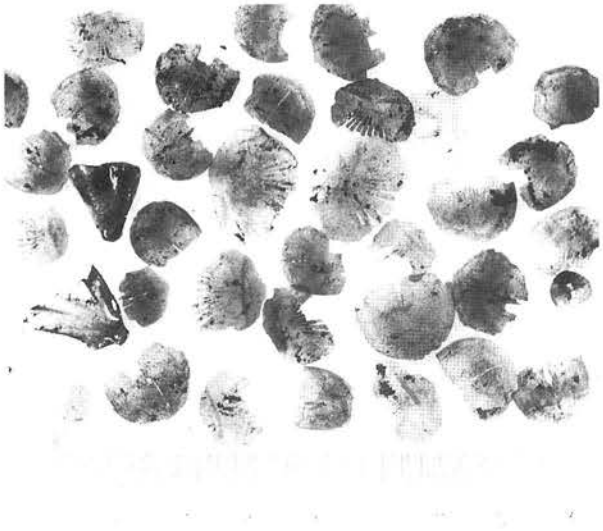
自然遺物（小形の肋骨、四肢骨など）



自然遺物（椎骨他、イルカ、魚類含む）



自然遺物（イルカ、魚類の顎骨、鰓骨など）



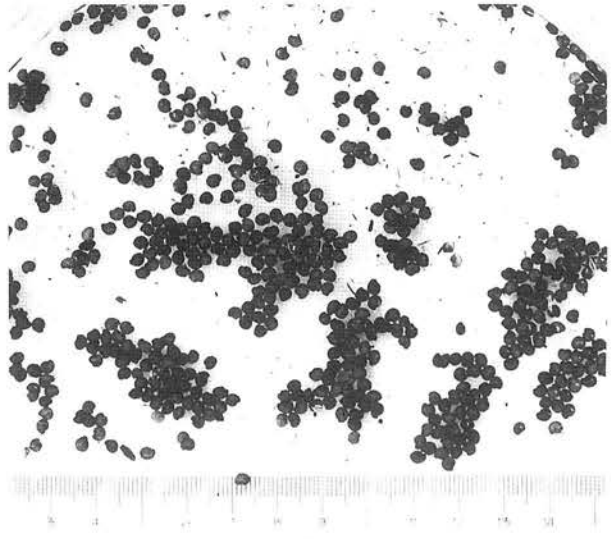
自然遺物（魚鱗、六面上包含層出土）

自然遺物（蛆の外殻、三面上包含層出土）

自然遺物（桃の種子）

自然遺物（栗、瓜の種子、溝 7 出土）

自然遺物（瓜の種子、溝 6 出土）



自然遺物（雑穀類、土壙 7 出土）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林重子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路 周辺遺跡群	かながわけん かまくらし ゆきのした 神奈川県 鎌倉市 雪ノ下 一丁目198番6	204	№242	35° 19′ 09″	139° 33′ 20″	1998.06.08 ～ 1998.09.14	約120㎡	個人専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路 周辺遺跡群	都市	中世	掘立柱建物 板囲い建物 溝 土墓	かわらけ 舶載陶磁器 国産陶器 漆器・木製品 金属製品 石製品 瓦 骨魚製品 自然遺物	

田楽辻子周辺遺跡（No.33）

鎌倉市浄明寺一丁目661番外

例　　言

1．本書は、鎌倉市浄明寺一丁目661番における宅地造成及び個人専用住宅建設に伴う国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査は、鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査は平成10年7月30日から同年10月20日にかけて実施した。調査対象面積は254.34㎡である。出土品には鎌倉市教育委員会が保管している。

4．調査団編成は以下のとおりである。

調査の主体　鎌倉市教育委員会

調 査 担 当　　宮田　真（鎌倉考古学研究所・日本考古学協会会員）

調　査　員　　高野昌巳　森孝子　諸星真澄

調査補助員　　宇賀神雅子　安達澄代　吉原真智子　財満幸恵　中内裕子

調査協力者　　河原龍雄 渡辺久夫 吉本修三 大内宏　山下俊明 大戸迫猛（鎌倉市高齢者事業団）

5．本書の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

①遺構配置図・個別遺構図　1/40　1/80

②遺構図の水糸高は海抜高を示す。

③遺物実測図は1/3、1/6の縮尺を使用している。

6．遺物実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界 ―・―・―・―・―・―・―　使用痕 ⊢⟷⊣

調整点の変化 ―― ―― ――　加工痕 ⊢⋯⋯⊣

7．本書の執筆は 森孝子 が担当した。

8．本書の図版作成及び写真撮影は次のものが担当した。

①遺物図版　　河内令子　宇賀神雅子　吉原真智子　安達澄代　堀川浩通　森　孝子

②遺構図版　　高野昌巳　森孝子

③遺構写真　　高野昌巳　森孝子

④遺物写真　　森　孝子

9．発掘調査および出土遺物整理にあったては以下の諸氏、諸機関に御教示、御協力を賜った。

鎌倉考古学研究所　鎌倉市教育委員会

10．全景撮影はポール撮影を木村美代治に依頼した。

11．また、調査に際して多大なご協力をいただいた施主、及び調査の付設土工事を担当して頂いた（株）高橋組に深く感謝の意を表する。

目　　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 214
第２章　調査経過とグリッド配置 …… 217
第３章　検出遺構と出土遺物 …… 220
第４章　まとめ …… 290

図　版　目　次

図１　本調査地点と周辺遺跡 ……215
図２　市４級基準点との合成
　　及びグリッド配置 ……218
図３　基本層序 ……219
１面（図４～26）
図４　窪地１・２・３ ……221
図５　窪地１・２・３出土遺物 ……223
図６　溝１・道１ ……225
図７　道１出土遺物 ……226
図８　溝１出土遺物（１） ……227
図９　溝１出土遺物（２） ……228
図10　溝２ ……229
図11　溝２出土遺物（１） ……230
図12　溝２出土遺物（２） ……231
図13　溝４ ……231
図14　溝４かわらけ出土状況 ……232
図15　溝４出土遺物（１） ……233
図16　溝４出土遺物（２） ……234
図17　溝４出土遺物（３） ……235
図18　溝４出土遺物（４） ……237
図19　溝４出土遺物（５） ……238
図20　土壙６ ……239
図21　土壙６出土遺物 ……239
図22　井戸３ ……240
図23　井戸４ ……240
図24　井戸３・４出土遺物 ……240
図25　表土層出土遺物 ……240
図26　１面出土遺物 ……242
２Ａ面（図27～41）
図27　玉砂利遺構１・２・３ ……243
写真１　玉砂利遺構１ ……243
写真２　玉砂利遺構１ ……244
写真３　玉砂利遺構１ ……244
図28　玉砂利遺構１・２・３出土遺物 ……245
図29　かわらけ溜り１・２ ……246
図30　かわらけ溜り１出土遺物 ……247
図31　かわらけ溜り２出土遺物 ……247
写真４　据甕半截状況 ……247
図32　据甕 ……218
図33　据甕出土遺物 ……249
図34　土壙３・５・７ ……249
図35　土壙３・５・７出土遺物 ……250
図36　井戸１ ……251
図37　井戸２ ……251
図38　井戸１・２出土遺物 ……251
図39　２Ａ面出土遺物（１） ……252
図40　２Ａ面出土遺物（２） ……254
図41　２Ａ面出土遺物（３） ……256
２Ｂ面（図42～55）
図42　玉砂利遺構４・
　　玉砂利遺構５及び礎石建物 ……257
写真５　玉砂利遺構４ ……258
写真６　玉砂利遺構５と礎石建物 ……258
図43　玉砂利遺構５出土遺物 ……259
図44　溝３・５・６・柵列１・２ ……260
図45　溝３出土遺物 ……261
図46　溝５出土遺物 ……261
図47　溝６出土遺物 ……262
図48　柵列１・２出土遺物 ……262
図49　溝７ ……262

図50　溝７出土遺物 ……262
図51　溝８ ……263
図52　溝８出土遺物 ……263
図53　溝13 ……263
図54　土壙８・９・10・19 ……263
図55　土壙８・８・９・10出土遺物 ……264
２Ｃ面（図56～66）
図56　玉砂利遺構６・７ ……265
写真７　玉砂利遺構６ ……265
図57　玉砂利遺構６・７出土遺物 ……266
図58　道３ ……267
図59　かわらけ溜り３・玉砂利遺構８ ……268
図60　かわらけ溜り３出土遺物（１） ……270
図61　かわらけ溜り３出土遺物（２） ……271
図62　かわらけ溜り３出土遺物（３） ……272
図63　かわらけ溜り３出土遺物（４） ……273
図64　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（１） ……274
図65　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（２） ……275
図66　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（３） ……276
３面（図67～84）
図67　溝11 ……271
図68　溝11出土遺物 ……277
図69　道２ ……278
図70　溝９・12 ……278
図71　溝９出土遺物 ……278
図72　溝12出土遺物 ……279
図73　溝14 ……279
図74　溝14出土遺物 ……279
図75　渥美溜り１・２ ……280
図76　渥美溜り１出土遺物 ……281
図77　井戸５ ……281
図78　井戸６ ……281
図79　井戸５・６出土遺物 ……281
図80　土壙11・12・14・15・
23・25・26・28 ……282
図81　土壙11・12・14・15・23・
25・26・28面出土遺物 ……283
図82　３面出土遺物（１） ……284
図83　３面出土遺物（２） ……285
図84　３面出土遺物（３） ……287
図85　中世層出土の古代遺物 ……288

写　真　目　次

PL.１　Ａ．調査地点（北から）
Ｂ．重機による掘削（北から）
PL.２　Ａ．ベルトコンベアー設置完了（南から）
Ｂ．現代の撹乱を完掘した調査地点（南から）
PL.３　Ａ．玉砂利遺構１　かわらけ溜り１（南）
かわらけ溜り２（北）（西から）
Ｂ．かわらけ溜り１（東から）
PL.４　Ａ．かわらけ溜り２（南から）
Ｂ．Ｇ－17グリッドに検出された
庭石と礎石（西から）
PL.５　Ａ．Ｆ－16グリッドに検出された掘鑿（西から）
Ｂ．土壙３（東から）
Ｃ．同左覆土土層
PL.６　Ａ．道１・溝１・２・４近景（東から）
Ｂ．同上（西から）
PL.７　Ａ．溝２（南から）
Ｂ．溝２覆土セクション（東から）
PL.８　Ａ．溝４（北から）
Ｂ．溝４上層かわらけ溜り（南から）
PL.９　Ａ．溝４上層かわらけ溜り下出土
瀬戸仏華瓶（南西から）
Ｂ．溝４下層かわらけ溜り（南西から）
PL.10　Ａ．井戸１（西から）
Ｂ．井戸４（南から）
PL.11　Ａ．井戸２・３（東 南井戸２　北井戸３）
Ｂ．井戸３覆土セクション（北西から）
PL.12　Ａ．溝３・５・６・７・柵列（北から）
Ｂ．同上（南から）
PL.13　Ａ．溝３・５・６・７近景（南から）
Ｂ．溝７近景（南から）

PL.14 A．溝８（西から）
B．同上近景（南から）
PL.15 A．溝13（西から）
B．B～D－15～17グリッド２B面（西から）
PL.16 A．玉砂利遺構７・かわらけ粉砕地業（南から）
B．かわらけ溜り３・玉砂利遺構８（西から）
PL.17 A．かわらけ溜り３・玉砂利遺構８（南から）
B．２面全景（南から）
PL.18 A．調査地点より北方向を望む
B．３面覆土より検出された常滑窯の壷（東から）
PL.19 A．３面覆土より検出された渥美窯の甕（渥美溜り２）（南から）
B．３面覆土より検出された刀子（東から）
PL.20 A．調査区北半分遺構検出状況（南から）
B．３面渥美溜り１（南西から）
PL.21 A．３面溝９（南から）
B．３面道２（北から）
PL.22 A．３面道２（西から）
B．３面溝12（西から）
PL.23 A．３面Ⅱ区全景（西から）
B．３面溝14（北から）
PL.24 A．３面井戸６（南から）
B．３面溝１１（北西から）
PL.25 A．３面F～I－８～10グリッド全景（西から）
B．３面F～I－９～11グリッド全景（西から）
PL.26 A．３面F～I－11～16グリッド全景（西から）
B．３面D～E－15～17グリッド全景（西から）
PL.27 A．３面D－１～２グリッド全景（南から）
B．同上に検出された土壙（南から）
PL.28 窪地１・３　道１　溝１（１）出土遺物
PL.29 溝１（２）溝２　溝４（１）出土遺物
PL.30 溝４（２）土壙６　井戸３出土遺物
PL.31 井戸４　表土層　１面　出土遺物
PL.32 玉砂利遺構１・３　かわらけ溜り１・２　土壙３・７出土遺物
PL.33 井戸１・２　２A面（１）出土遺物
PL.34 ２A面（２）玉砂利遺構５出土遺物
PL.35 溝３・５　柵列２　土壙９・玉砂利遺構６・７　かわらけ溜り３（１）出土遺物
PL.36 かわらけ溜り３（２）２B・C面（１）出土遺物
PL.37 ２B・C面（２）溝11・12・14　道２　渥美溜り１出土遺物
PL.38 ３面出土遺物
PL.39 中世層出土遺物の古代遺物

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は、鎌倉市浄明寺一丁目661番地点に所在する。本遺跡地は北隣して現在の「田楽辻子」が東西に走り、その辻子の北側を滑川が西流している。また、この地点は、釈迦堂ケ谷を形成する西側山脈の先端に位置しており、西方には大御堂ガ谷が広がっている。調査地点はこの２つの谷の中間地点に位置している。遺跡の名称ともなっている「田楽」の名称は、「『相良家文書』正応三年五月八日付けの相良頼俊の譲状の中に、鎌倉の釈迦堂の前の地として、「その四至を注してでんがくが地とみえ」とその名が記されている。また、高柳光寿氏は、平安時代から行われている民間芸能である田楽は、鎌倉時代の祭礼の際にはかなり定着しており、この地に田楽の舞人の住まいがあったことに由来してのことであろうと推定している。また、氏は、この辻子が滑川の南を東南方向、宅間ケ谷にぬけると想定している。[註１]近年の発掘調査において、1989年に行われた、本遺跡地に東隣する図１－２地点で、15世紀から16世紀の土壙、井戸跡などの遺構群と伴に、現在の「田楽辻子」と重複して15世紀の道が検出され、現在の田楽辻子が室町時代の道筋を踏襲していることが確認されている。[註２]この道は、泥岩を10cm前後に築き固めて舗装面としており、また、６回の改修工事がなされるなど、公道の要素が非常に強いものであったと報告している。

本遺跡地、西方、直線距離にして150ｍに位置する大御堂ガ谷には、源頼朝が文治元年（1185）父義朝の報恩のために、その廟所として建立した勝長寿院があったといわれている。承久元年（1219）実朝が殺されるや、実朝はこの境内に葬られ、政子はその追福のために、同年、五仏堂を建立、貞応２年（1223）持仏堂を新築した。やがて嘉禄元年（1225）、政子も死ぬと当寺に葬られるなど、勝長寿院は源氏の菩提所的な寺であったことを窺わせる。康元元年（1256）12月に類焼し、翌年８月、北条一族の手によって、本堂、弥勒堂、五仏堂、三重塔が再建されたようである。これらの位置は現在不明であるが、大御堂カ谷は全体が境内であったと推定されている。以後、室町時代も鎌倉御所により厚く保護されたが、康正元年（1455）足利成氏が古河に敗走したころから、次第に衰えていったといわれている。[註１]

また、さらに西方450ｍには、史跡東勝寺跡（図１－４、５）がある。この寺は北条泰時が母の追善のために、その墳墓の傍らに建立したものである。また、元弘３年（1333）、高時以下、総勢874人が自害し、この時、寺は炎上したと伝えられている。４地点における、平成９年の調査では、東勝寺の主要伽藍と思われる梁間４間×桁行７間（以上）の総柱式建物が検出されている[註３]。

本遺跡地南方、釈迦堂ケ谷には、北条泰時が、亡父義時の追善供養のために、釈迦堂を建立したと伝えられている。また、その名がこの谷の名前の由来となったといわれている。この谷奥には、「宝戒寺普川国師入定窟」と称する大規模なやぐらを中心とする、やぐら群があったが、現在は宅地造成で主要部は崩れてしまっている。この近辺の調査では、６地点で鎌倉～室町期の建築遺構、掘鑿等が検出されている[註４]。７地点では、尾根部分を切り崩し、谷内を埋めるといった大規模な造成をした後に、建物の構築をしており、発掘調査において、14世紀～15世紀の遺構を確認している[註５]。また、釈迦堂口切通西方、８地点では14世紀中頃～16世紀初頭にかけての寺院遺構が検出されている[註６]。

本遺跡地北方450ｍには、菅原道真を祭神として長治元年（1104）に開かれ、後、鎌倉幕府の鬼門鎮守の社となった荏柄天神社がある。その南方300ｍに位置する９地点の発掘調査では、13世紀～16世紀までの多数の柱穴群が検出され[註７]、また、10地点では13～14世紀の屋敷址が確認されている[註８]。

北西方向には大倉幕府跡（12地点）がある。この地は源氏三代の将軍が、嘉禄元年（1225）までの45年間、幕政に当てた場所である。近辺の調査では、13地点において、主に鎌倉前期と思われる溝、柵列、柱穴群、古代の５件の住居址等の検出[註９]、14地点では12世紀末～14世紀初頭の溝等の遺構が確認されて

1．本調査地点
2．釈迦堂田楽辻子遺跡
3．勝長寿院跡
4．史跡・東勝寺跡
5．東勝寺跡
6．釈迦堂遺跡
7．浄明寺釈迦堂遺跡
8．名越・山王堂遺跡
9．横小路周辺遺跡
10．向佳柄遺跡
11．佳柄天神社
12．大倉幕府跡
13．大倉幕府周辺遺跡跡
14．〃
15．南御門遺跡
16．〃　B遺跡

図1　本調査地点と周辺遺跡

ている[註10]。

また、西方の河岸段丘上にある15、16地点では、宮ノ台期の弥生時代の集落が検出されている[註11]。

以上、本遺跡地周辺の様相を鳥瞰してみると、歴史時代の早い時期から現在に至るまで、人々が連綿と生活を営み、また、特に、国の政治の中心であった鎌倉時代には、かなり重要な地域であったのであろうと思われる。本遺跡地周辺が、鎌倉幕府と重要な関わりのあった地域であり、また、前述の発掘調査の成果からも、御所近辺には有力御家人の居館、または、寺社等があったであろうことは想像に難くない。本調査地点は歴史的に非常に重要な場所であったと思われる。

註1 白井永二編「鎌倉事典」東京堂出版1976年
註2 手塚直樹「釈迦堂田楽辻子遺跡」釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団 1990年
註3 菊川英政「鎌倉市史跡東勝寺」第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会 1998年
註4 発掘調査団「釈迦堂跡」発掘調査団 1972年、1973年
註5 手塚直樹「浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡」浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団 1989年
註6 斉木秀雄「名越・山王堂跡発掘調査報告書」山王堂跡遺跡発掘調査団 1990年
註7 菊川英政「横小路周辺遺跡群」『鎌倉市緊急調査報告6』鎌倉市教育委員会 1990年
註8 馬淵和雄「向荏柄遺跡発掘調査報告書」向荏柄遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会発行1990年
註9 馬淵和雄「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市緊急調査報告9』鎌倉市教育委員会 1993年
註10 菊川英政「大倉幕府周辺遺跡」『鎌倉市緊急調査報告7』鎌倉市教育委員会 1991年
註11 鎌倉考古学研究所「掘り出された鎌倉」鎌倉考古学研究所 1981年

第２章　調査経過とグリッド配置

（１）調査経過

調査地は鎌倉市浄明寺一丁目661番外に所在する。本調査は、宅地造成及び個人専用住宅建設に伴う事前調査として、平成10年７月30日～同年10月20日まで、およそ２カ月半に渡り実施された。調査面積は254.34㎡である。調査経過の詳細は以下の通りである。

７月30～31日　調査区設定（Ⅰ区）　株式会社高橋組の協力を得て、調査区の打ち出し、並びに重機により掘削を開始。確認調査のデーターに基づき、表土下40～50cm（第１面の上面レベル）を目安に表土を剥ぎ取る。２日間でほぼ完了。

８月３日　前日、梅雨明け、本日より調査開始、調査区内に、測量のためのグリッド設定、発掘作業用ベルトコンベアー到着。

８月４～12日　作業員（シルバー人材センター）５名参加。ベルトコンベアーの設置完了後、人力による掘削開始。１面は土丹地業を随所に行っており、また、土丹不足分を土により補足しながら造成していることを確認。また、調査区北側に、現在の田楽辻子と重複する道（道１）、及び側溝を一部検出。

８月13日　表土除去後の調査区内の全景撮影。

８月17日　第１面実測、かわらけ溜り（溝４上層）の遺構確認後半截・写真・土層記録。

８月18～30日　第１面実測終了後、南側より面を下げる。かわらけ溜り１、２、玉砂利敷遺構１～５確認・埋甕検出・大規模な掘方を伴う礎石（土壙３）検出・溝４上層のかわらけ溜り全掘し各遺構ごとに写真撮影実測。

８月31～９月４日　調査区北側→大型溝の検出（溝１、２）　中央部→土丹地業面検出　南側→玉砂利敷き遺構・庭石風石塊・縦横に走る数条の細い溝（庭園の遣水の様相）の確認。

９月８～９月11日　調査区中央部の土丹地業は１面の掘残しと判明し、写真、図面の後掘り下げる。南側地区は井戸１、２掘完掘。

９月12～９月15日　溝４確認、井戸３検出。

９月16日　台風５号、午前４時30分、静岡県御前崎に上陸、通過は早いが現場はプールの様相を呈する。午前中、現場の水抜き、午後、溝１、２写真撮影後、溝の南側精査（柵列の有無の確認）

９月17日～20日　調査区の南側（溝３、５、６、７、柵列）、写真撮影及び実測、北側は道路状遺構（道３）検出、溝１、２の個別撮影及び実測、土丹地業面の検出、中央部は礎石４石、土壙６、７、玉砂利敷き遺構６を検出　調査区北西部（攪乱）はトレンチ調査で土壙状の落ち込み確認。

９月21日　台風８号の影響で、雨の中の作業　北側は土丹地業面の精査、及び遺構（溝８、土壙８、９、１０）の検出、調査区北西部（攪乱）はトレンチを拡張する。

９月22日　台風７号の影響で、悪天候の中の作業　北側は土丹地業面上の遺構の写真撮影、及び平面実測。

９月23日～25日　南側玉砂利敷遺構８、かわらけ溜り３検出　北側土丹地業面を除去し20cm前後掘り下げる。

９月26日　南側地区玉砂利敷遺構８、かわらけ溜り３写真撮影

９月28日　南側地区玉砂利敷遺構８、かわらけ溜り３実測　中央部地区玉砂利敷き遺構７、かわらけ粉砕地業面検出。

９月29日　北側地区溝９（南北溝）検出、及び両域の焦土面の確認、南側地区精査、及び遺構の掘り上げ。Ⅱ区調査区掘削開始。

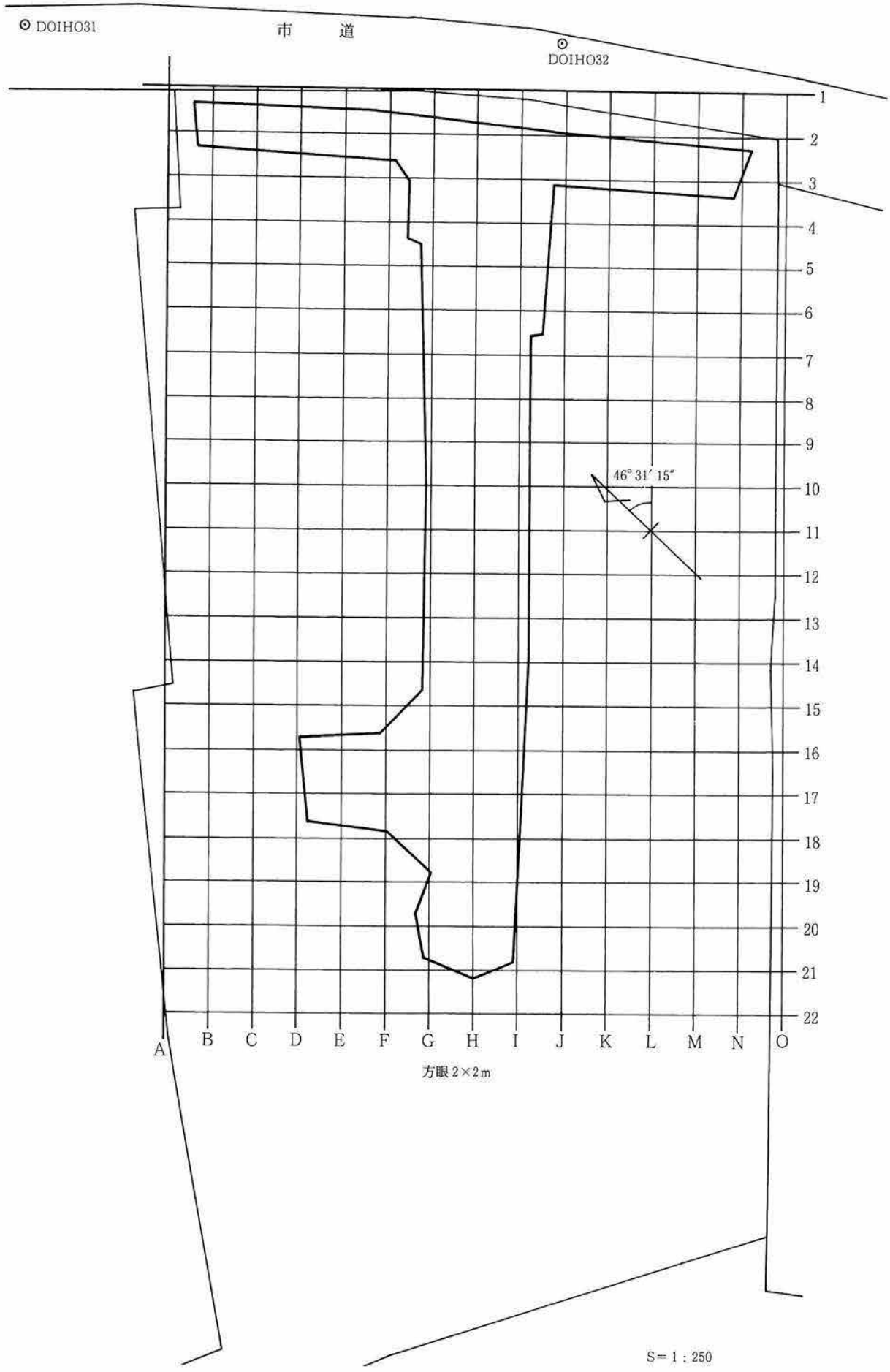


図2　市4級基準地点との合成及びグリッド配置図

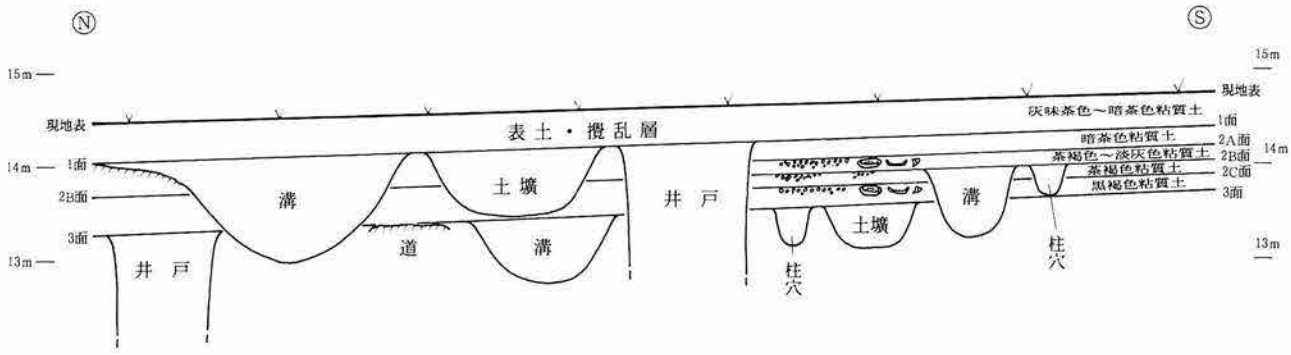


図3　基本土層

9月30日～10月1日　台風9号の悪天候のなかでの作業 北側地区道2、溝9、玉砂利敷き遺構7及び土丹粉砕地業、土壙11の写真撮影、後、平面実測、南側地区遺構の検出、掘り上げ。

10月2～5日　Ⅱ区調査区地区道路1・溝1の延長部分を確認、南側地区遺構の平面実測　中央部地区焦土面まで下げ遺構の検出（通路状遺構［路3］、溝11、柱穴等）

10月6日　雨の中ポールによる全景撮影。終了後、玉砂利敷遺構7、及び土丹粉砕地業、玉砂利敷遺構8、かわらけ溜り3半截、中央部地区精査及び掘り上げ、南側地区実測（取り付け道路回転部分）

10月7日～15日　北側、中央部地区精査及び掘り上げ（溝11、12、井戸5、柱穴等、）南側→取り付け道路回転部分実測後、掘り下げ、遺構の検出、玉砂利敷遺構8、かわらけ溜り3を取り上げ最終面まで下げて、遺構の検出及び掘り上げ、Ⅱ区→遺構の検出及び掘り上げ（溝13、14、井戸6、柱穴等）、北壁、東壁、西壁土層記録及び写真撮影

10月16日　台風10号の影響で悪天候の中の作業 遺構はほぼ掘り上がる。作業員は今日で終了。

10月17日　台風10号の影響での大雨の中の作業、Ⅰ区中央部及びⅡ区の平面実測、東壁土層記録　ベルトコンベア撤収

10月19日　Ⅱ区地区全景撮影、東壁土層記録、及び写真撮影にて中世までの調査終了 古代の調査地区調査区南側の現代の池により、撹乱された地点の土層により古代面が存在していないことを確認し調査は完了 器材の整理

10月20日　器材、備品等撤収 現場終了

（2）調査方法

調査区北西方向に任意の1点を設け座標の原点（X＝0，Y＝0）とした。南北方向をX軸、東西方向をY軸として、2mごとにX軸は北から1，2，3，4，5，・・・・、Y軸は西からA，B，C，D，E，・・として2m四方のグリッドを組み測量の基準とした。なおグリッドの名称は北西隅とする。また、磁北に対するYの軸線方向はN－46°31′15″－Eである。

本遺跡地を地形図上に合成するために、4級基準点DOIH032（X＝17.825，Y＝－2.861）、同DOIH031（X＝－6.647，Y＝－2.581）を用いた。

（3）基本土層（図3）

調査地点は南側の滑川方向に緩く傾斜しており、現地表の海抜は南側で14.5m、北側で14.8mである。遺構面は大別して3面が検出された。層序は1層（表土・撹乱層）2層（灰味茶色～暗茶色粘土層・遺物の混入多く比較的締まる）3層（暗茶色粘質土。焦土が混入しあまり締まらない。）4層・5層（茶褐色粘土層。粘性が強く、比較的締まる）6層は（黒褐色粘土層の中世地山層）である。

第３章　検出された遺構と遺物

検出されたのは中世期（13世紀代～15世紀代）の遺構群であり、生活面はかなり細分化されていたが、大別して３面が検出された。出土した遺物は当該期のものと、若干の古代（奈良・平安）、古墳時代、弥生時代の土器である。

中世第１面は、主に調査区北側に展開しており、道、溝群を中心とした遺構群で、南側は、閑散とた様相を呈しており、検出されたのは、土壙１基、井戸２基等である。

中世第２面は、かなり細かい文化層に別れていたが、各面は、遺物から判断して時期差はあまりない。本稿では、数度に渡り張替が行われたと思われる、玉砂利敷遺構に注目して、その層位で生活面の分層を行い、３時期を確認した。新しい遺構面から２Ａ・２Ｂ・２Ｃ面とした。２Ａ面は、１面下20cm前後で検出された。この遺構面は、１面時の道、溝及び窪地の撹乱を受けたため、調査区の北側では検出されず、南側に遺存していた。検出された遺構は、玉砂利遺構３カ所、井戸址２基、かわらけ溜り２カ所、土壙、据甕等である。また、２ｍ四方の弱い粉砕かわらけ事業面が確認された。

２Ｂ面は、２Ａ面より20cm下に検出された遺構面で、全体的に土丹地業が施行されており、北側はかなり強固な事業面が確認された。この遺構面上からは、遺構群のまとまった展開が確認された。検出されたのは、玉砂利敷遺構２カ所、４個の礎石群、柵列２カ所、溝６条（南北溝５条、東西溝１条）、柱穴群である。

２Ｃ面は、２Ｂ面より15cm下に検出され遺構面で、この面からは、炭の広範囲な広がりが検出され、火災をうけた様相がみられる。また、強固に土丹版築を施し、通路を造作している。検出されたのは、広範囲にわたる玉砂利敷遺構が３カ所、東西６ｍ南北２ｍの広がりをもつかわらけ溜りが１カ所である。

中世第３面は、中世地山である黒褐色粘質土層上に展開しており、最も多くの遺構群が検出された時期である。また、焦土の痕跡も随所に確認され、火災を受けた様相を窺わせる。検出されたのは、東西、南北方向に走る土地の区画溝、道路、多数の柱穴群、土壙、井戸跡等である。

以下各時期の遺構と遺物について詳細を述べる。

（１）中世１面の遺構と遺物（附図１）

中世１面は、表土・撹乱層を40～50cm前後を取り除て、検出された遺構面で、北側では海抜14ｍ前後、南側では海抜14.35ｍ付近に検出された。検出された遺構は、窪地３箇所、道１条、３条の溝群、井戸２基、土壙１基である。遺構群は、調査区北側に集中して展開しており、南側は閑散とした様相を呈する。遺構の覆土には、概ね大型土丹塊が多量に投棄されており、若干の炭化物が混入している。

窪地１・２・３（図４）

窪地１・２・３は、調査区中央から北側、Ｊ～Ｈ－８～14グリッドにおいて海抜13.9ｍ前後で検出された遺構群である。大きな抜跡状を呈しており、大型土丹塊を覆土としていた。名称は、北側より窪地１、２、３となる。

掘方規模は、窪地１、２は共に、南北は調査区外に延び不明となり、東西は各々4.1ｍ、4.9ｍを測る。窪地３は東西4.6ｍ、南北2.1ｍを測り、平面形は、南北を長軸とする長方形を呈する。

窪地１・２の側壁は、緩やかな勾配をもって立ち上がり、また、窪地３は直立して立ち上がる。３基共に、底部は平坦であり、深さは、確認面より窪地１・２は、50～40cm、窪地３は20cmを測る。

覆土は３基共に同様なものであり、すべてに、15cm大以上の土丹塊が多量に投棄され、側壁との間に、暗茶色粘土が流れ込んでいる。覆土は比較的締まっている。

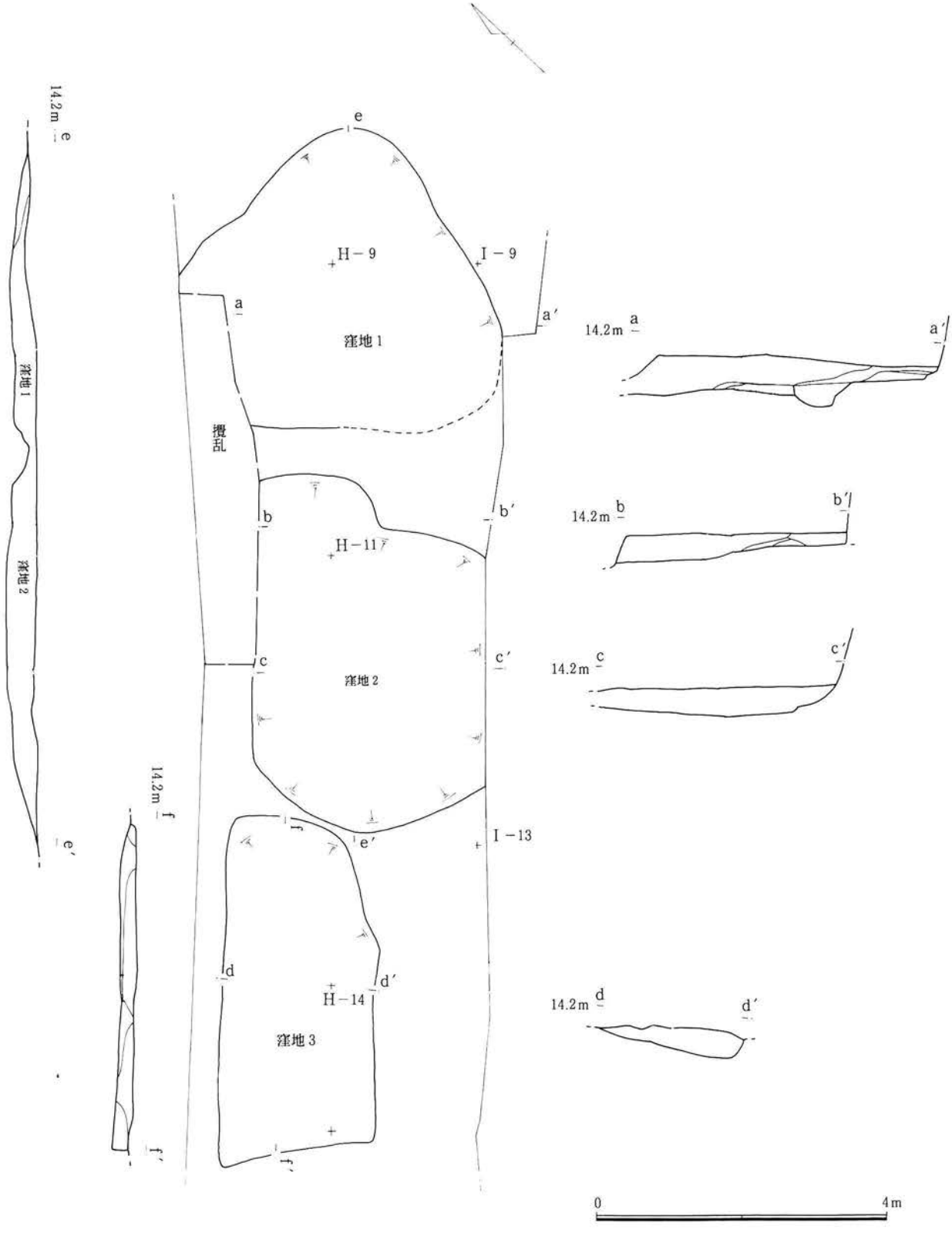


図4　窪地1・2・3

窪地1出土遺物　（図5　1～16）

1～7はロクロ成形のかわらけ。ここで検出されたかわらけの胎土は、概ね、粉質で、雲母、白色粒子を含み、色は肌色～橙色を呈し、焼成は良好である。1は大皿。口径13cm、底径7.2cm、器高3.2cmを測る。体部は、底部より真っすぐに外反して、大きく開いて立ち上がる。体部1/2より器肉を10mmから5mmと半分に引き伸ばす。2、3は中皿、口径9.3cm9.2cm、底径5.6cm5.8cm、器高2.8cm2.7cmを測る。体

部は外反して開き、口唇部は端反となる。4～6は小皿。4の口径は7.8cm底径6.8cm器高1.5cmを測る。側壁は、底部より、やや内湾気味立ち上がり、口唇部は内向している。下層からの混入。5は口径6.9cm底径3.2cm器高2.5cmを測る。胎土は粉質で、雲母、礫、黒色粒子を混入し、色は淡橙色を呈する。器肉が7～10mmと、ぼってりと厚い。体部は開いて立ち上がる。6は口径6cm、底径3cm、器高2.4cmを測り、5の小型版である。内外面に炭が付着しており、灯明皿として使用された痕跡を留める。7は穿孔かわらけ。口唇部より6mm下に、直径8mmの孔を上向きに穿ち、外側から内側にロート状にすぼまる。

8は青白磁、梅瓶の胴部の破片。素地は白色を呈し、黒色粒子を含み、ガス孔が観察される。釉調は、水青色で、釉を素地が透けるほど薄く掛ける。器表には、渦文様が配され、再火を受け失透している。

9～11は瀬戸窯の製品。9は灰釉の壺の頸～肩部。肩部には耳が付く。復元された頸径は8.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子を多く含み、比較的精緻である。口縁は頸部から、やや外反気味に立ち上がる様相を示す。内面には指頭に依る調整痕が認められる。10、11は灰釉平碗。10の復元された口径は18.8cmを測り、胎土は灰色を呈し、白色粒子を多く含み粗い。11は口縁部の破片。胎土は灰色を呈し、若干の白色粒子を含むが、非常に精緻である。

12は瓦質の風炉。復元された底径は21.2cmを測る。胎土は灰桃色を呈し、白色、黒色粒子を多く含み、粗く、ざっくりしている。外底下部には、2本の縦方向の隆起線により仕切り、内に花模様のスタンプ文を配する。全部で16個付くと思われる。体内部には多量の炭が付着している。体外部にも付着していたと思われるが、剥離が著しく痕跡を留めるのみである。

13は平瓦。24×17cmを遺存。厚さは2cmを測る。胎土は灰色を呈し、比較的精緻である。端縁部は面取りされない。凸部に縄目叩き文、凹部に布目の圧痕を留める。

14は研磨痕のある瀬戸窯製品の破片。

15は北宋銭「熙寧元宝」。

16は砥石の破片、鳴滝産、仕上げ砥。1面のみの使用痕が認められる。

窪地2出土遺物　(図5　17、18)

17は常滑窯の甕の底部の破片。胎土は灰色を呈し、白色粒子を多く含む。体内部は、全面に降灰する。

18は鉄製品、釘。7.3cmを遺存。太さは6mm四方で、頭頂部は厚さ5mm、長さ1.5cmを測る。

窪地3出土遺物　(図5　19～27)

19～23はロクロ成形のかわらけ。胎土は橙色を呈し、概ね粉質で、雲母、茶色粒子、白針を混入し、焼成は良好である。19は大皿、口径12cm底径8cm器高3.7cmを測る。側壁は、底部より真っすぐに、若干開き気味に立ち上がり、口唇部は端反となる。20は中皿、口径10.8cm底径6.2cm器高3.9cmを測る。体部は、外反して真っすぐに、開いて立ち上がる。灯明皿。21～23は小皿。口径7～6.8cm底径4.8cm器高2cmを測る。体部は、底部より真っすぐに立ち上がり、口唇部は肥厚する。24は常滑窯の鉢の口縁部、片口の部位の破片である。胎土は橙色を呈し、砂粒を含む。体内部～体外部1/2まで降灰する。

25は平瓦の破片。8.1×7cmを遺存し、厚さは2cm前後を測る。胎土は灰色を呈し、黒色、白色粒子を含み、ざっくりと粗い。凸部には、三つ鱗叩き文を留める。

26は研磨痕のある常滑窯の製品の破片。

27は鉄製品、釘。

道1・溝1　(図6)

道1は、東西に走り、調査区北壁際に於て、現在の道である『田楽辻子』に重複して、E～M－2グリッドに渡って検出された。路肩の南側は調査区内で確認されたが、北肩は調査区外に在る。また、この路面上には、直接表土層がかぶさっていたため、旧状は保たれていない。

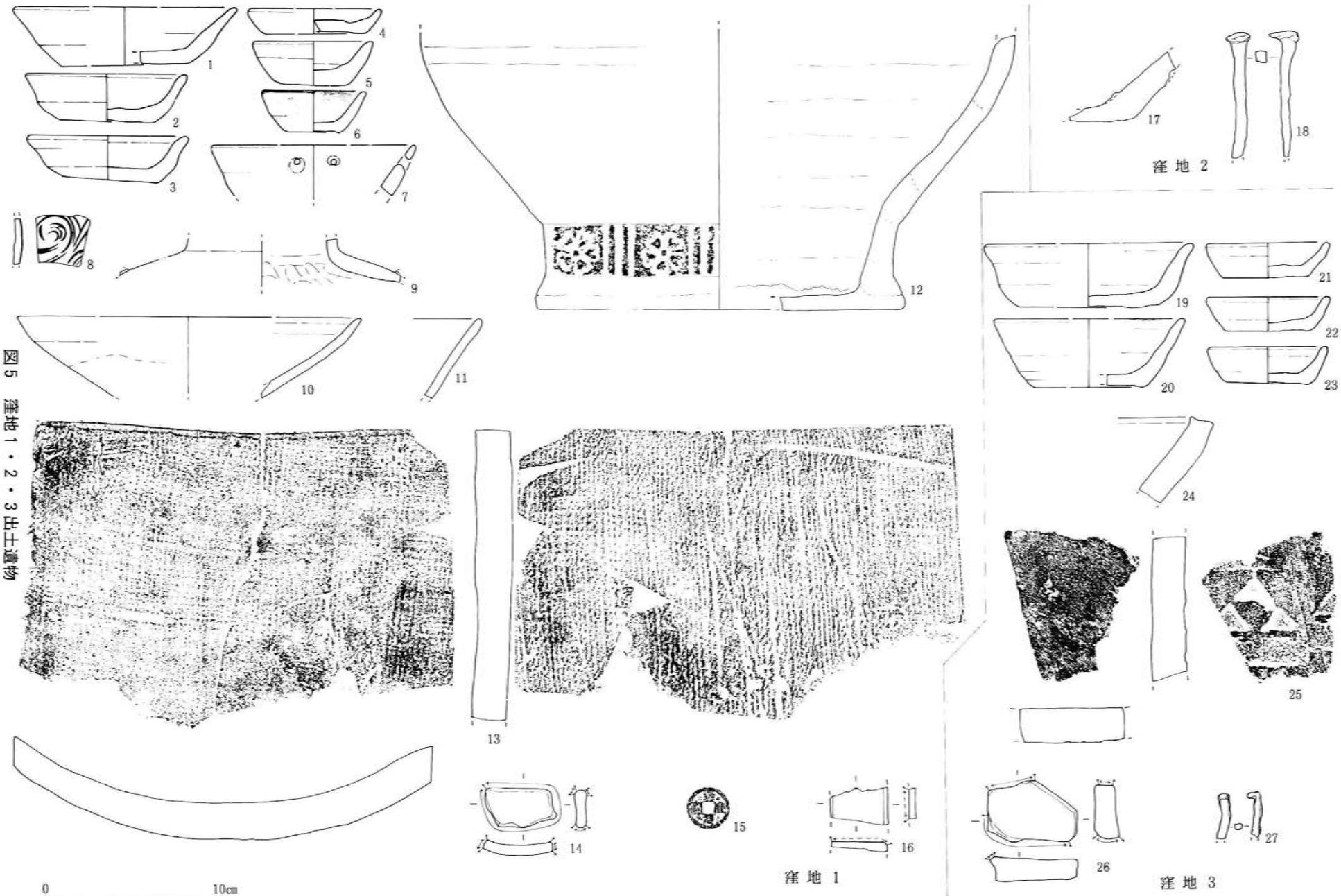


図5　窪地1・2・3出土遺物

検出された東西の長さは16.5mを測り、全幅は不明であるが、確認されたのは最大で1.3mまでの範囲である。この道は、土丹を突き固めて造成しており、厚さは20cm前後が確認された。路面には、2度の張り増しの痕跡を留めていた。この道は東から西に緩やかに傾斜しており、その比高差は15cmである。

溝1は、海抜13.9m前後で、道1の南側に道に沿って検出された。道の南側の側溝である。側溝は、道の両側に付くと思われるが、北側の側溝は調査区外北となる。この溝は、F～I－3グリッドの東西6mの間で、溝の南肩が確認されているが、その地域以外は、調査区外南にある。検出された掘方規模は、東西の長さ16.5m、上端幅は2.8m、下端幅は0.9～1.5mを測り、西側に向かって広がってゆく様相を呈する。深さは、確認面より80cm前後を測る。断面はU字型～逆台形を呈し、底部は平坦で、側壁は真っすぐ開いて立ち上がる。

底部はH－2グリッド内で、大きく撹乱を受けており、その範囲は、東西、南北各々1.5mを測り、溝の底部より15cm前後深い。また、F－4グリッド内では、杭跡状の小穴が8口検出された。直径10cm前後、深さは検出面より10cm前後である。

溝1の覆土は茶褐色粘質土層で、凹レンズ状に堆積しており、大別して3層に分かれる。第1層は中央部に大型の土丹塊（10～30cm大）、炭化物が多量に投棄されている。第2層は、その下層で、上層より若干細かくした土丹を含み、共にあまり締まらない。第3層は壁際付近で、砂を含んだ暗い茶褐色粘質土が堆積しており、層中には若干の土丹粒子、かわらけ細片、炭化物を含み、締まりはさほど良くない。この遺構群の東西の軸方向はN－140°－Eである。

道1出土遺物（図7）

1～4はロクロ成形のかわらけ。1、2は中皿、3、4は小皿。中皿の口径は11.3cm、10.5cm、底径6cm、7cm器高3.3、3.1cmを測る。胎土は粉質で、橙色を呈し、白針、雲母、赤色粒子を含み、焼成は良好である。側壁は開いて真っすぐに立ち上がる。3の口径8.9cm、底径5.8cm、器高1.8cmを測り、胎土は砂質気味で肌色を呈し、白針、雲母、赤色粒子を含む。体部1/2に明瞭な稜線が入り、底部に向ってすぼまる。下層からの混入。4の口径7.4cm、底径4.7cm、器高2.1cm、胎土は粉質で、橙色を呈し、白針、雲母、赤色礫を含む。口唇端部は若干外反する。

5は瓦質の風炉の口縁部の破片。胎土は淡桃色を呈し、砂が混じる。器表は磨かれ、黒色処理される。口唇外端と、その下に、凸帯を巡らし、その中に縦線模様を意匠する。

6は北宋銭、『聖宋元宝』

溝1出土遺物（図8、9）

図8、1～35はロクロ成形のかわらけ。1～9は大皿、10～17は中皿、18～26は小皿、27～34は極小のかわらけ、35は穿孔かわらけである。胎土は、概ね粉質で、橙色を呈するが、7は肌色系である。胎土には白針、雲母、茶色粒子を含み焼成は良好である。内底部のなでは強いが、かなり雑で、そのため器肉の厚さは、均一とはならず、器型のゆがみも比較的多い。また、底部の糸きりの痕跡は不明瞭で、すのこ痕の凸凹が顕著である。大皿の口径は14.4～11.9cm、底径9.2～7cm器高4.3～3.2cmを測り、側壁は外反して真っすぐに立ち上がる。4、7、8は、体部中程より外側に引き上げられる。6は体部が丸味を持ち、側面観が異なる。

中皿の口径は10.5～8.9cm、底径7.2～5.3cm、器高3.0～1.8cmを測る。器型の側面観は逆台形、若しくは四角であり、側壁は開いて真っすぐに立ち上がる。12、14、17は口唇部が肥厚し、端反となる。11、13は、器肉が1cm前後と、厚くぼったりとしている。15、16は体部に丸味を残し、前時期のタイプである。15は灯明皿。小皿の口径は7.9～6.4cm、底径4.7～3.6cm、器高2.5～1.8cmを測る。側面観は逆台形、若しくは、体部の器肉が薄く丸味をもつ碗型である。19、25は内底部の指ナデが強いため、底部の器肉

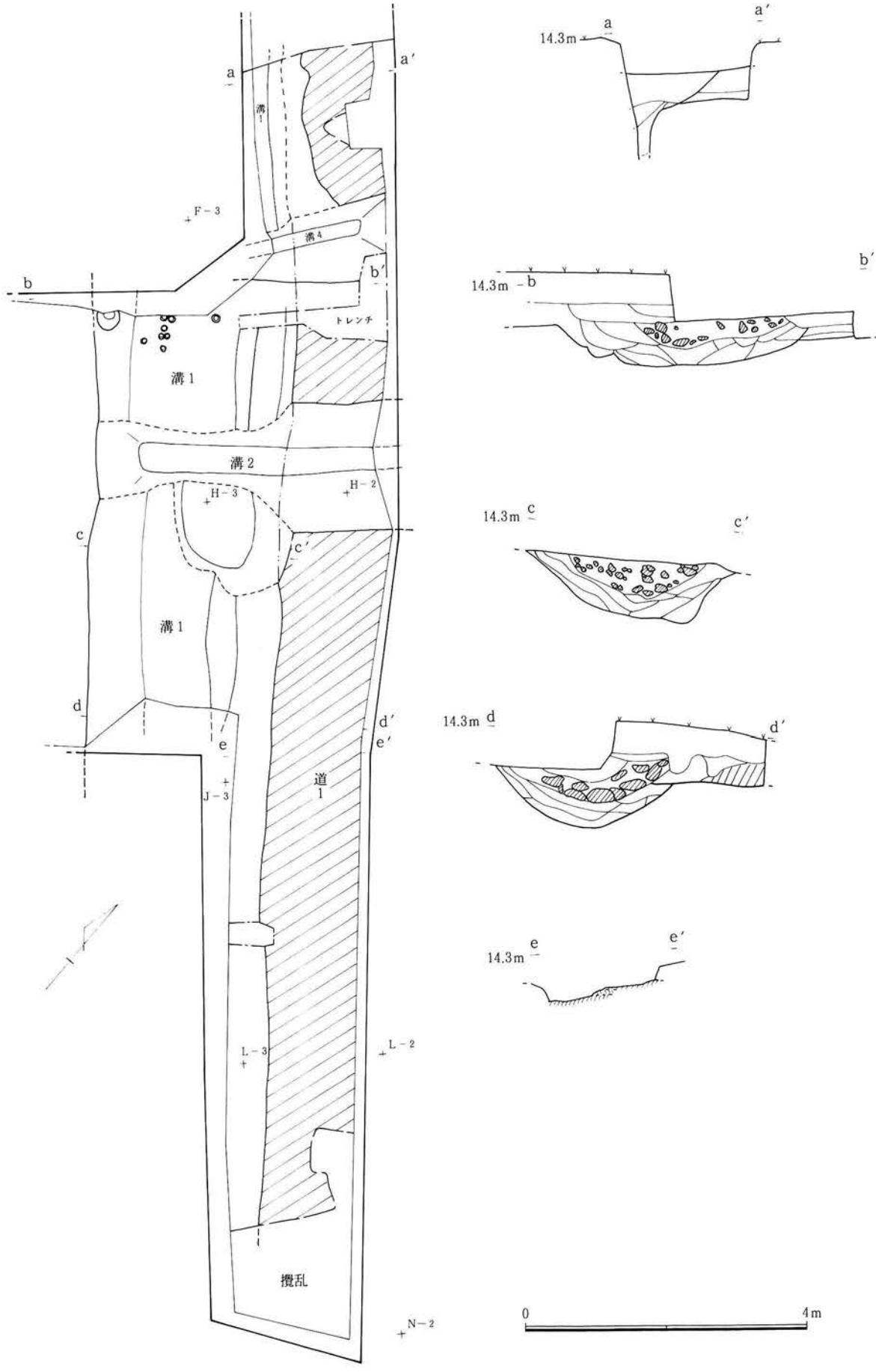


図6　溝1・道路1・溝2・溝4

肉が薄く、側壁が外反気味となる。23は灯明皿。

極小かわらけの口径は6㎝以下で、底径4.7～3.9㎝、器高2.1～1.4㎝を測り、小皿と同様の側面観をもつ。

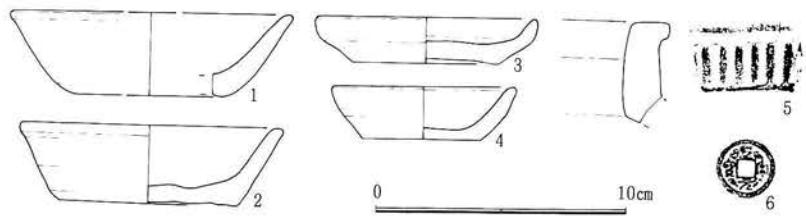


図7　道1出土遺物

36～38は磁器。36、37は青磁。36は劃花文碗の口縁部の破片。素地は灰色を呈し、白色粒子を含み、ガス孔が観察される。釉調は灰緑色を呈し、透明度、艶共に良い。内面には花文を片彫りしており、引掻いたような傷痕が観察される。器表外面には、貫入が若干認められる。37は皿の底部。素地は灰白色を呈し、黒色粒子を含み、ガス孔が多く、粘性があり精緻である。全体に施釉されており、色調は黄緑色を呈し、失透している。内底面には花文を浮彫りし、外底部は、蛇の目様に、釉はげとなる。38は白磁、口冗碗の口縁部の破片。素地は白色を呈し、黒色粒子を多く含み、釉調は灰白色を呈する。透明度は低いが、艶は良い。

39、40は瀬戸窯の製品。39は灰釉碗。復元された口径は15.2㎝を測る。胎土は灰色、釉調は灰緑色を呈し、口唇部は端反となる。40は黒釉天目台。復元された高台径は6.8㎝を測る。胎土は茶味灰白色を呈し、釉は全体にハケにより施釉されており、畳付及び高台内部には、施釉されない。

41は、山茶碗窯系捏鉢の底部の破片。胎土は灰色を呈し、細かい長石を交え、比較的粘性がある。貼付高台であり、外底部はへら削り調整を施す。内面は摩滅せず、使用の痕跡は認められない。

42、43は常滑窯の製品。42は甕の口縁部の破片。胎土は灰黒色を呈し、細かい長石を多く交え、硬質で粗い。縁帯は幅4.5㎝、頸部とわずかな透間を残して密着する。43は鉢の底部。復元された底径は13㎝を測る。胎土は淡橙色を呈し、若干、長石を交え、軟質で、やや粘性をもつ。内底面は摩滅が顕著で、使用した痕跡を窺わせる。

44は研磨痕のある陶片。山茶碗窯系捏鉢の体部の破片で、平面形は三角形を呈し3辺を使用している。

図9、1～12は瓦。1は道具瓦。2～7は丸瓦、8～12は平瓦。1の胎土は、紫味灰色を呈し、胎土中には、白針、茶色粒子が混入し、軟質である。器表は黒色を呈し、へら状の工具で成形をしている。2は図下部に、玉縁部が付く。器厚2.4㎝、胎土は灰色を呈し、白色粒子、暗灰色礫を含み、硬質で、がさつき粗い。凸部は無紋、凹部に布目の圧痕を微かに残す。3は軟質の白色礫を含んだ胎土で、凹面には布目圧痕、凸面は工具でなで成形を施している痕跡が確認される。器厚2.5㎝。4は玉縁部。黒色の硬質の胎土で器表も黒色を呈する。端部にはへら状工具、ささら状工具で成形した痕跡を留める。凸面はなでられ、叩目は消されている。6も2と同様に、玉縁部が図下に付く。胎土は白灰色を呈し、白針が混入する。断面には、粘土紐巻上げの痕跡を留める。凹面には布目痕が遺存し、凸面はなでられ、叩目は消されている。器厚2.1㎝前後。7は側縁端部に面取りが施されており、肉薄である。端縁部も1㎝前後と薄い。胎土は灰色を呈し、灰色礫を多く含む。8の胎土は白色で、黒色礫を多く含み、やや硬質で、砂質に富む。凸面には、花菱の叩目がある。器厚2.8㎝前後を測る。9の側縁端部、及び端縁部は、面取りが施されており、丸味を持ち、端正である。胎土は暗灰色を呈し、あまり混入物が観察されないが、雲母、白針を若干含み、軟質である。器厚2㎝前後を測る。10は端部、凹面共に、丁寧なでが施されている。凹面には、格子目叩文を残す。胎土は灰色を呈し、小石、白色礫を含み、軟質である。器厚2.1㎝前後を測る。11はかなり硬質の瓦である。青灰色の粘性の強い胎土に、白色粒子の若干の混入がある。凹面には布目痕、凸面には縄目叩き文の痕跡を明瞭に留める。器厚1.9㎝である。12は10と酷似している。器厚2㎝。

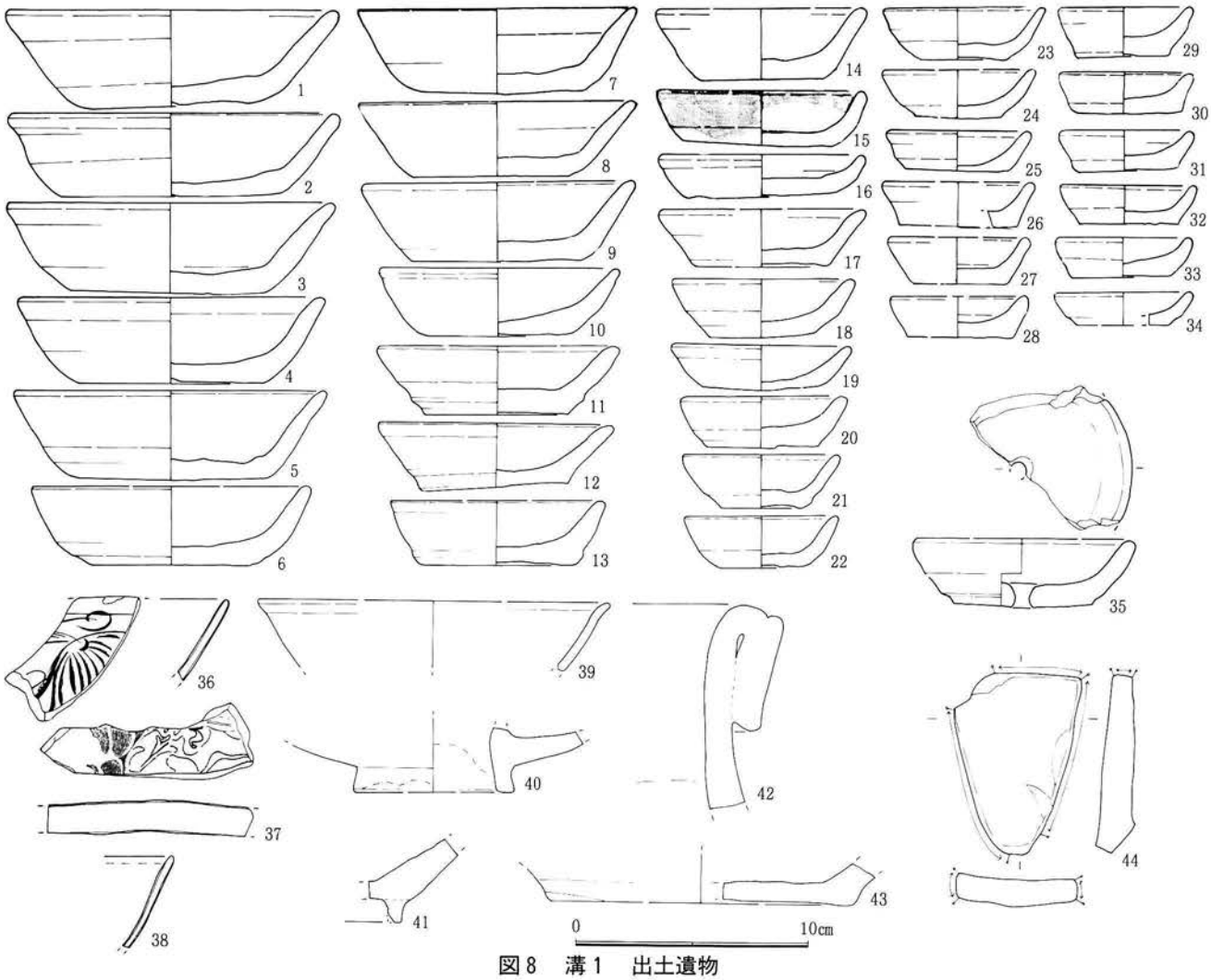


図8　溝1　出土遺物

溝2（図10）

調査区北側、G～H－2～3グリッドにかけて、海抜13.8m前後で検出された南北溝である。この溝は道1、溝1と直交し、溝1の南壁で立ち上がり、調査区外北へと延びて行く。検出された掘方規模は、南北の長さ4m、東西の上端幅1.9m、下端幅40cmを測る。深さは確認面より80cm前後である。溝の断面は、V字型に近く、西壁は鋭角的に、東壁は緩く立ち上がる。底部は、ほぼ平坦であるが、若干，南側に傾斜している。

この溝の覆土は、灰味茶褐色粘質土で、壁際には鎌倉石と土丹塊（8cm大）が多く混入し、中央部にも同大の土丹塊が多く混入している。総じて締まりは悪い。

この溝の南北の軸方向は、N－40°－Eである。

溝2出土遺物（図11、12）

図11は溝2上層から出土した遺物である。

1～6はロクロ成形のかわらけ。1は大皿、2は中皿、5は小皿、3、4、6は極小の皿。ここで出土したかわらけの特徴は、粉質で、胎土は橙色系を呈し、胎土には白針、茶色粒子が混入しており、側面観は逆台形を呈し、体部が大きく引き出され、また、内底面の指なでが強く、外底部の糸きり痕は不明瞭で、すのこ痕が顕著であるものが主流をなす。1の口径は12.7cm、底径7.5cm、器高3.7cm、器厚8mm、5の口径は6.5cm、底径4.5cm、器高1.7cmを測る。極小かわらけは、口径は6cm以下で、底径4.7～4.2cm、器高2～1.6cmを測る。5、6は側面に丸味をもつ。

図9　溝1出土遺物

7は白かわらけの口縁部の破片。

8は研磨痕のある陶片。3㎝四方の常滑窯の製品の破片の全辺に研磨痕を有する。

9～11は瓦。9は鬼瓦の破片。胎土は暗灰色、白色粒子、白針が混入し、粉質が強く精良である。器表は磨かれ黒色を呈する。10、11平瓦。10は凸面の叩き目文が『三つ鱗』である。胎土は淡桃色を呈し、赤茶色粒子、白色礫、若干の砂が交じり粗い。厚さは2.2㎝を測る。11は9と同様の胎土であるが、粉質が強い。凹凸面ともに丁寧になでられ、成形の痕跡を残さない。端縁部四面に1㎝の面取りを施す。

厚さ2.3cmである。

図12、1～52はロクロ成形のかわらけ。1、2は大皿、3～26は中皿、27～52は小皿。図11のかわらけと同様に、体部が外反しながら大きく引き上げられるが、器肉は、薄手、厚手両様である。胎土はほぼ同質である。内底部のなでは明瞭であり、外底部の糸きり痕も明確に遺存している。また、糸きりが雑なため、底部の縁端部に粘土が付着し、器型のゆがみも目立つ。1、2の口径は12.8cm、12cm、底径7.5cm、7cm、器高3cm、3.5cmを測り、1は9mm前後と器肉が厚く、口唇部は肥厚する。中皿の口径は10～8cm、底径7～5.5cm、器高3～2.3cmを測る。25、26は側面観が異なり、やや丸味を持つ。小皿は、口径7.5～5.7cm、底径4.5～3cm、器高2～1.7cmを測り、体部は丸味をおびるもの、真っすぐ直立して立ち上がるもの、外反するもの三様である。23は灯明皿。

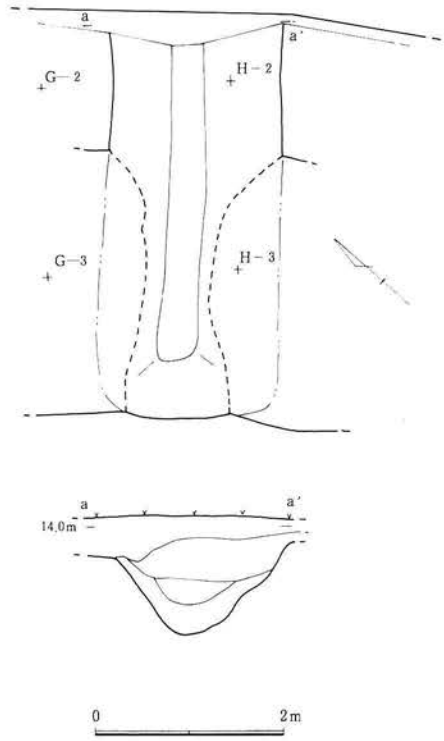


図10　溝2

53、54は青磁蓮弁文碗。53は口縁部の破片。素地は灰色を呈し、黒色、白色粒子を含む。釉調は灰緑色、失透しており、艶も無い。口唇端部は釉が薄く、気泡が観察される。54の復元された高台径は4.8cmを測る。胎土は灰味白色を呈し、白色粒子を含み若干、ガス孔が観察される。釉調は灰味緑色、透明度は余り無いが、艶、光沢共に良い。畳付以外は、全面に1mmと厚く施釉されており、特に、高台際は3mmと厚い。

55は瀬戸窯の摺鉢の口縁部の破片。胎土は茶味灰白色を呈し、白色粒子を若干含み軟質である。釉は赤茶色を呈し、ハケ塗りである。

56は平瓦の破片。胎土は肌色を呈し、白色粒子を若干含む精良土である。凸面に格子目叩き文が遺存しており、凹面はなでられ、無文である。厚さは2.3cmを測る。

溝4（図13、14）

溝4はE～F－1～2グリッド内において、海抜13.7m付近で検出された南北溝である。溝の北側は調査区北壁で立ち上がり、南側は、調査区外南に延びる。検出された掘方規模は、南北1.6m、上端幅1.6m、下端幅0.2m、深さは確認面より0.95mを測る。底部は平坦で、西寄りに位置しており、その海抜は12.75mである。

断面形はV字型を呈する。東壁は外反して真っすぐに鋭角的に立ち上がり、西壁は中間にわずかなテラス状の平場を持って立ち上がる。溝4は溝1、道1を切る。

この溝の覆土は、褐味灰色粘質土で、粘性があり、大型土丹塊、土丹粒子、かわらけを含み、締まりは良くない。下層の溝底に近づくに従い、土丹粒子が細かくなり、若干の砂の混入もあり、締まりはさらに悪くなる。

また、覆土中には、土丹を挟んで、上層、中層、下層、最下層と4層に分かれて、かわらけが多量に投棄されていた。各層のかわらけ溜りは、F－2グリッド杭を中心として、南北に広がりを持って検出された。上層に検出されたかわらけ溜りは、F－2グリッド杭南側に、海抜13.6m付近で検出された。範囲は90cm四方に渡り、15cm前後の堆積をみる。出土したかわらけ（図15）は、中皿57、小皿11（内、灯明皿2）極小49の合計117枚で構成されている。また、土丹を挟んで直下に検出された中層（図16）においては合計23枚検出され、大皿1、中皿15（内、灯明皿3）小皿7の構成である。下層のかわらけ

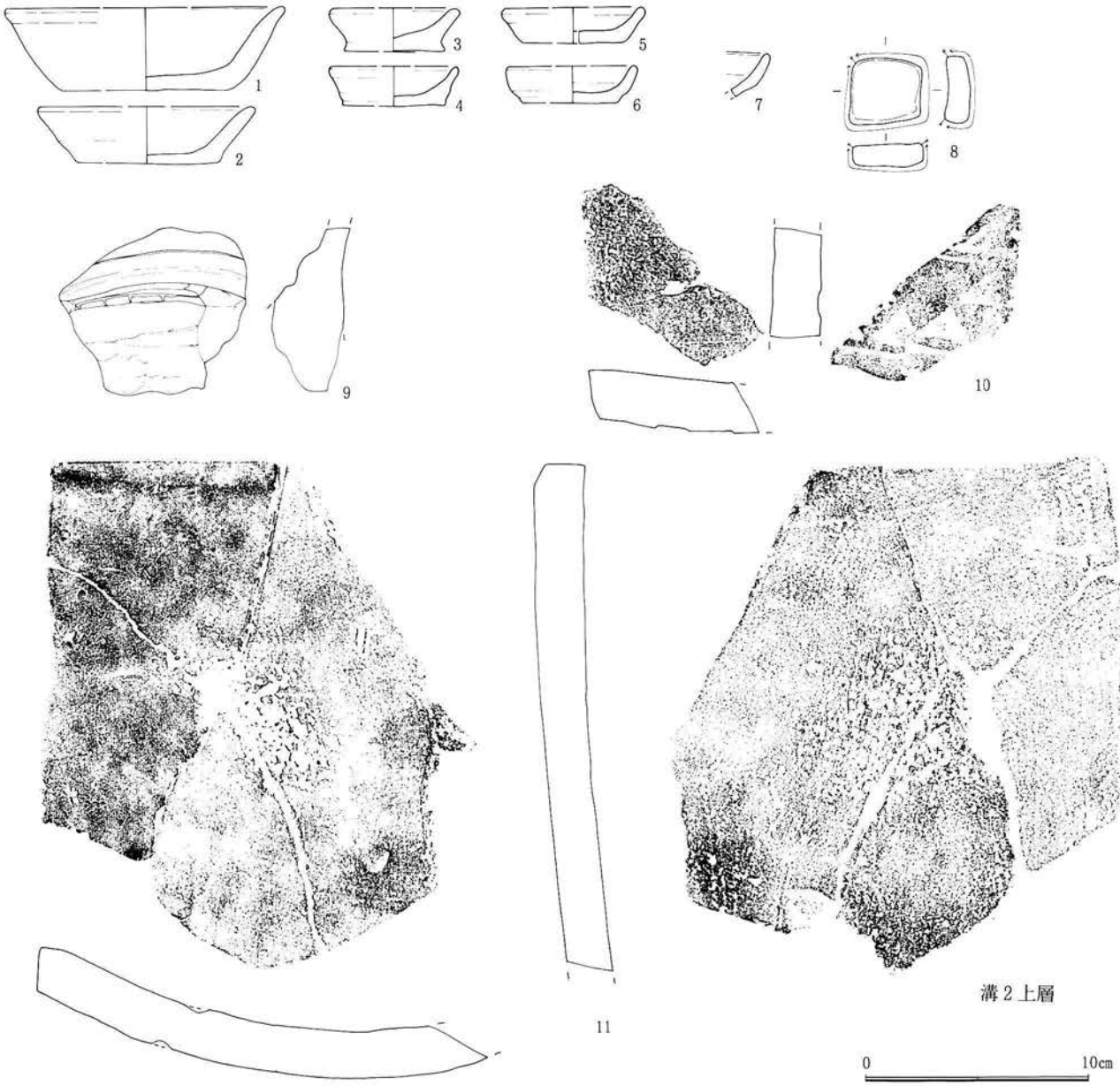


図11　溝２出土遺物（１）

溜りは、Ｆ－２グリッド杭東側に、海抜13.4m付近で検出された。範囲は東西1.3m南北0.6mに渡り、20cm前後の堆積をみる。出土したかわらけ（図17）は，前後の層、あるいは遺構からの混入もあったが、当該期のものは、大皿４、中皿56、小皿37（内、灯明皿１）、極小22の合計119枚で構成されている。また、さらに、土丹を挟んで、直下に検出された最下層（図18）では合計125枚、大皿５、中皿86（内、灯明皿１）、小皿３、極小31の構成である。この溝の南北の軸方向はＮ－40°－Ｅである。

溝４出土遺物（図15～19）

図15、１～119は上層より出土した遺物である。１～117は、ロクロ成形のかわらけ。ここから出土したかわらけは、概ね、胎土は粉質で、橙色系、肌色系の両様がある。胎土には、共に赤茶色粒子、黒色粒子、白針、金雲母、軟礫を交え焼成は良好である。外底部の糸きり痕は明瞭ではなく、内底面のなでは比較的強い。体部は外側に引き上げられ、側面観は逆台形を呈する。１～57は中皿である。口径10.4～8.3cm、底径6.8～4.6cm、器高３～2.3cmを測る。１、７は口唇端部が開き、胎土がキメ細かい精良土で、丁寧な作りである。49、51は体部中位のなでが強く、底部がぼったり厚い。32、33、39、50、55は側壁がやや丸味をもって開く。52、54は底部の糸切りが雑で、高台状に残る。58～68は小皿。

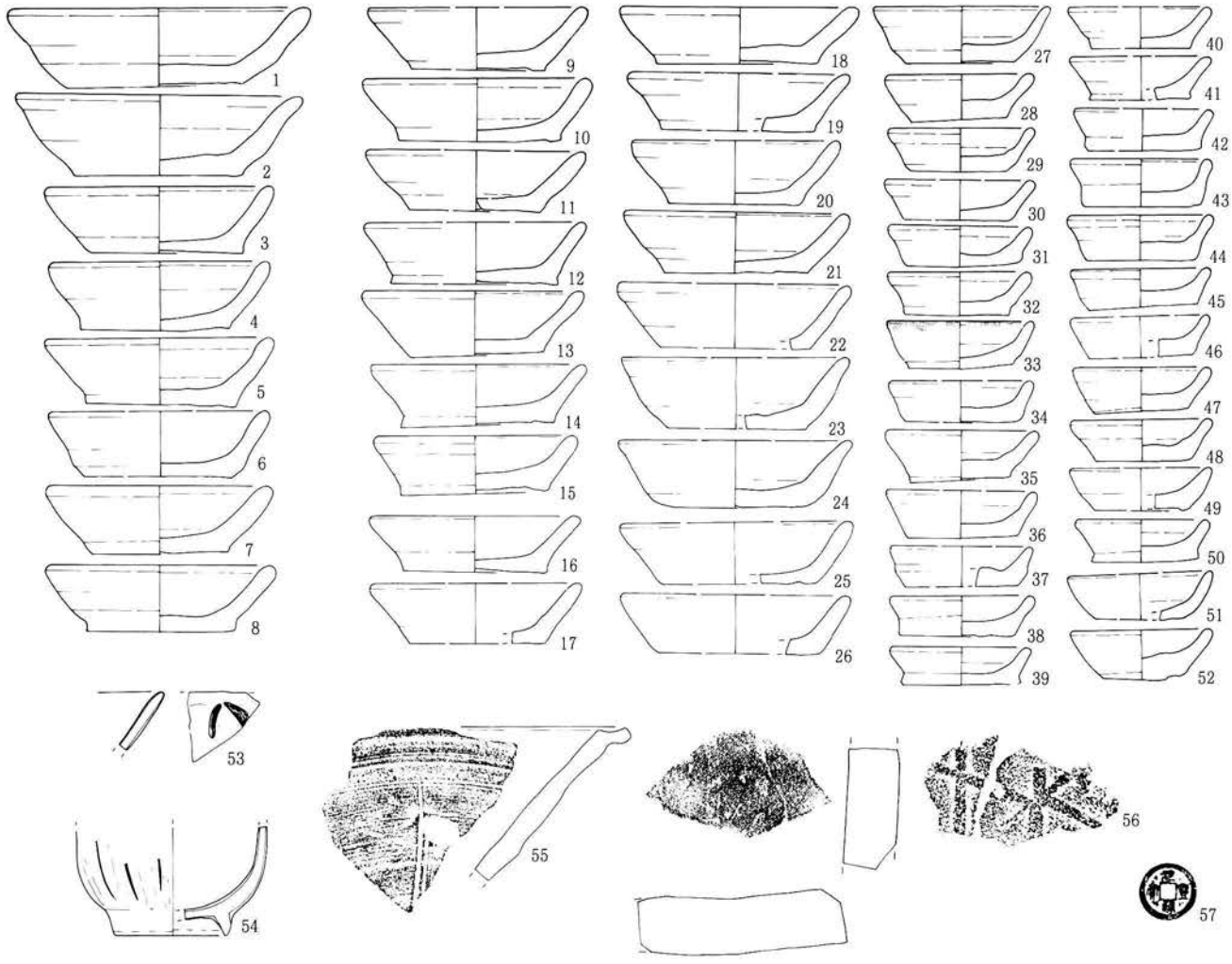


図12　溝２出土遺物（２）

口径7.8～6.6cm、底径5.6～4.3cm、器高2.2～２cmを測る。63は橙色で、若干、雲母、茶色粒子を交えるが混入物の少ない胎土で、小さな底部から段をもって立ち上がり側面観が異なるが、ここで出土するものと同様な体部を引き上げた作りである。62、65、66、68は、内底部のなでが雑である。61、64は灯明皿。

69～117は極小かわらけ。口径6.4～5.3cm、底径5～3.8cm、器高２～1.6cm、胎土は桃色味橙色～橙色を呈し、赤茶色粒子、白針、金雲母を交える。焼成はすこぶる良好で、薄く焼き締まる。体部は外側に引き上げられ、直線的に外反し、側面観は逆台形、または四角形を呈するもの、側壁にややを丸味をもち口唇内部が玉縁状となるものがある。概ね、内底面のなでは、比較的強く、雑であるが、90、92、112、114は比較的丁寧である。118は瀬戸窯の花瓶。底径6.6cm、最大胴径6.4cm、器厚８mm前後を測る。胎土は灰色を呈し、若干の白色粒子を含む。釉は、本来、黒色を呈すると思われるが、再火を受け、艶の無い灰味黒色を呈している。119は研磨痕のある常滑の胴部片。3.2×4.4cmを測り、側面全体が使用されている。

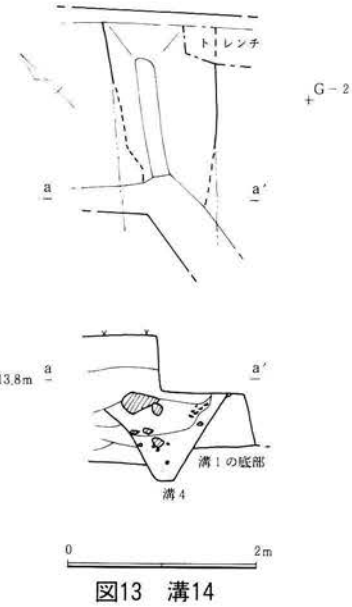


図13　溝14

図16は溝４中層より出土した遺物である

１～23はかわらけ。ここで出土したかわらけの胎土は、粉質で橙色系、肌色系の両様がある。胎土に

は共に赤茶色粒子、白針、金雲母、白色軟礫を交え焼成は良好である。1は大皿。口径12.7cm、底径7.4cm、器高3.7cmを測る。胎土は粉質で、桃色味橙色を呈し、白針、金雲母を交え、焼成は良好である。側壁は、体部中位から、大きく外反しながら立ち上がり、口唇端部は端反となる。器肉は6㎜前後と薄めである。

2～16は中皿である。口径10.4～8.1cm、底径7.1～5cm、器高2.9～2.1cmを測る。概ね、外底部の糸きりの痕跡は明瞭ではなく、すのこ痕が顕著である。また、側壁は外反して立ち上がり、器高は高めである。5、10は、内底面と内体部の立ち上がりの境界に強いナデの調整痕が認められる。7、11は器高2cm余りと低めであるが、胎土等は同様のものであり、同類であると思われる。2、8、14は灯明皿。

17～23は小皿。口径7.5～5cm、底径5～3.5cm、器高2.3～1.6cmを測る。中皿と同様に口径に比して器高が高く、法量を増す。雑に切った外底部の糸きり痕を明瞭に残す。

24は褐釉壷。肩部～頸部。素地は灰味茶色を呈し、白色粒子を多く含む。体外部の色調は黒茶色、肩部に耳を付け、また、肩部と頸部の間には段を有する。

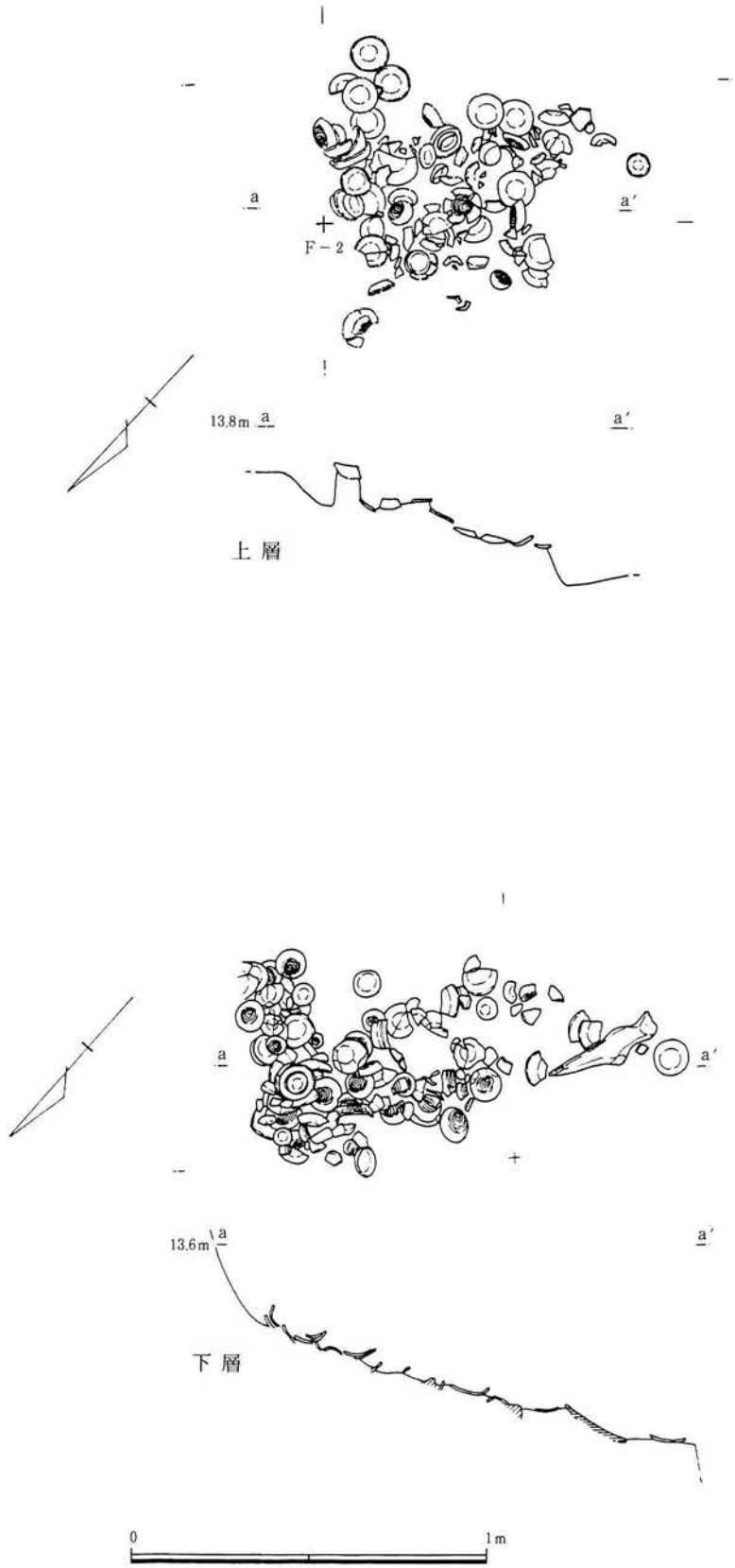


図14　溝4かわらけ出土状況

25は瀬戸窯の灰釉卸皿。復元された口径は15.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、微細な白色粒子を混入する。

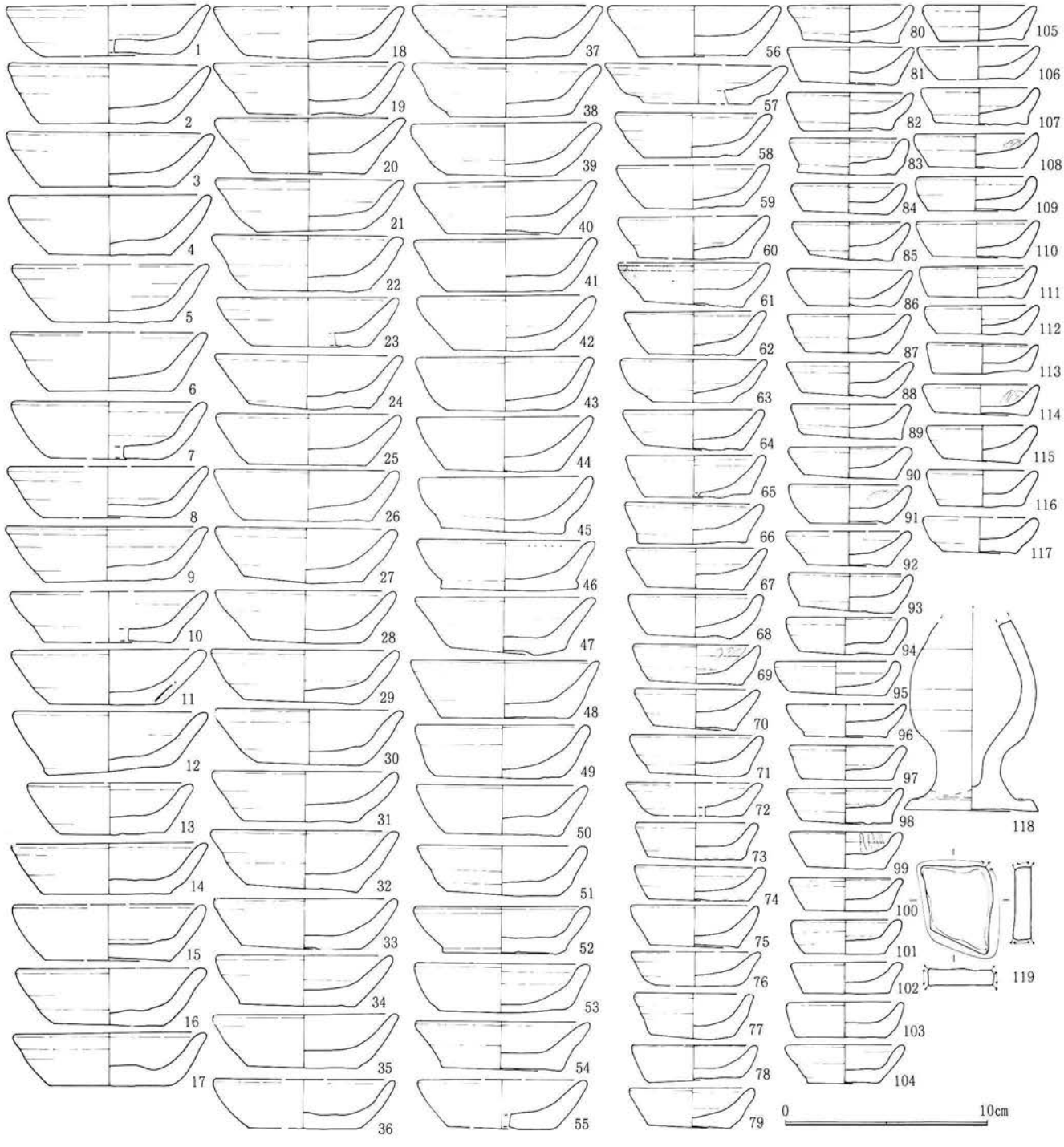


図15　溝４出土遺物（１）

26は山茶碗窯系捏鉢。復元された口径は30cmを測る。胎土は灰色を呈し、mm大の長石を多く混入する。口唇部は丸く収め、体外下部はへら削り調整である。体内部全体に降灰する。

27は常滑窯の甕の底部の破片。胎土は暗灰色で、長石、黒色粒子を多く混入する。

28、29は平瓦。28の胎土は灰白色、胎土には茶色粒子、白色粒子を含み、粉質の軟質な胎土である。両面共に黒色を呈する。29の胎土は、白色を呈し硬質である。茶色粒子、白色礫を混入する。凸面に叩目文を遺存する。

図17は、溝４下層から出土したかわらけである。１～８は大皿。３、４、８は下層からの混入品。７も胎土に微細砂を交え、若干ざらつき、ここから出土するものとは異なり混入品の可能性がある。ここから出土したかわらけの口径は12.7～11.8cm、底径8.9～6.4cm、器高4.1～3.3cmを測る。概ね、胎土は粉

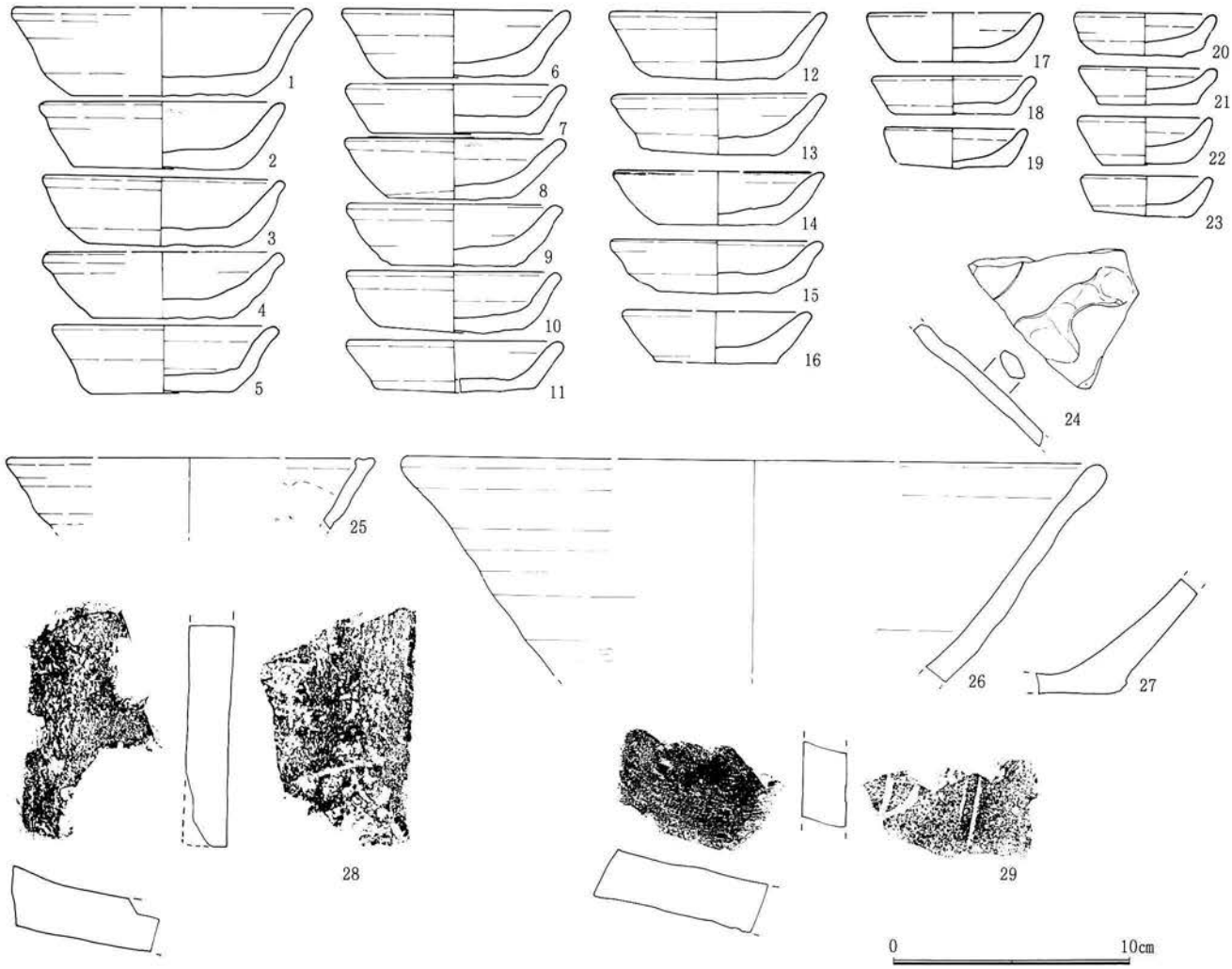


図16　溝４出土遺物（２）

質で、橙色を呈し、白針、金雲母、茶色粒子を交え、焼成は良好である。側壁は底部から外反して立ち上がる。外底部のすのこ痕、及び内底面見込みの横ナデの痕跡は明瞭である。６は口唇端部が端反となる。

９～64は中皿である。口径10.4～8.5cm、底径6.8～5.5cm、器高2.9～2.3cmを測る。胎土は肌色系、橙色系の両様あるが橙色系が主流である。内体部のなでが強く稜を残す。また、内底面のなでも強い。外底部の糸きり痕、すのこ痕は明瞭ではない。体部が大きく外反して開き、側面観が逆台形をなすもの、余り開かず、角型を呈するものと２通りである。器肉も厚く重量感がある。口唇端部のなでが強く、端反りになるもの、直口気味のもがある。。28、42、48、58、63は、あまり体部が開かず、丸味をもち、古式を残す。52は２段の名でが強く体内部に稜を残す。

65～113は小皿。68～79は混入品。口径7.2～６cm、底径4.9～3.9cm、器高２～1.8cmを測る。114～135は口径６cm以下の極小かわらけである。小皿、極小かわらけ共に胎土は粉質で、色は橙色系を呈し、丁寧な作りである。82は灯明皿。106、114、129は体部を細く引き出す。

図18は溝４最下層から出土したかわらけである。ここで出土したかわらけの胎土は、粉質で橙色系、肌色系の両様を呈する。胎土には白針、金雲母、茶色粒子、淡茶色礫を交えるが、橙色系には白色礫も観察される。焼成は概ね良好である。外底部の糸きりの痕跡、及び、すのこ痕は明瞭ではないが、底部を大きく切り出すものは概してすのこ痕が明瞭である。内底面のなでは強く大胆である。１～５は大皿。口径12.8～11.4cm、底径８.～6.3cm、器高3.9～3.3cmを測る。胎土は粉質で、２、３、４は橙色系、１、

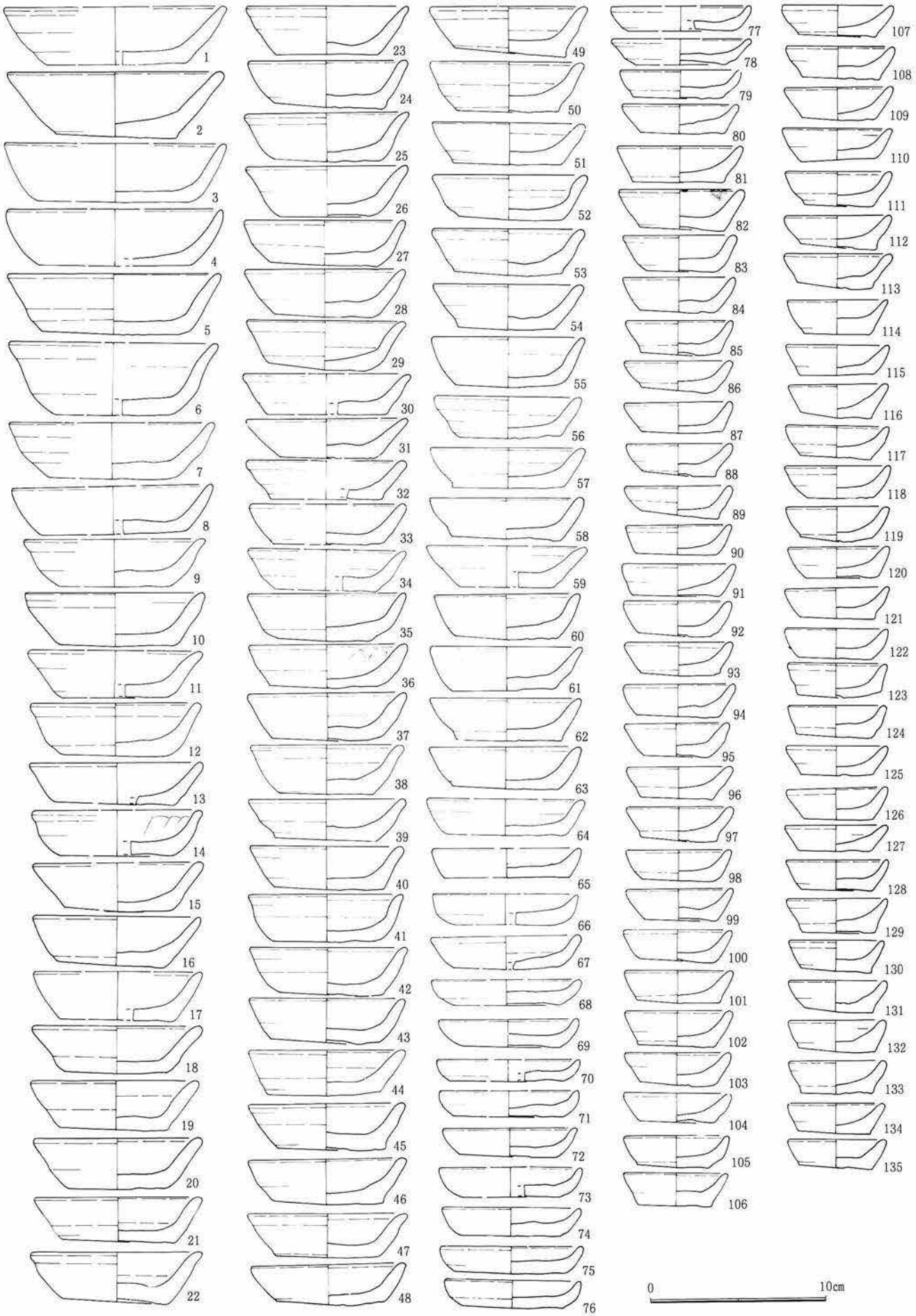

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
0
10cm

図17　溝４出土遺物（３）

5は肌色系を呈する。橙色系のかわらけは、側壁が、底部から反り返って立ち上がり、口唇部は端反となる。器肉は6㎜前後である。3は外底部のすのこ痕が明瞭に遺存する。1、5は開き気味に立ち上がり、器肉は8㎜を測る。内底面見込みの横ナデは共に大胆に施されている。

6～91は中皿である。口径10.4～8.5㎝、底径7.5～5.3㎝、器高3.1～2.2㎝を測る。胎土は肌色系、橙色系両様があり、外底部の糸きり痕、すのこ痕は明瞭ではない。底部が小さく、体部が大きく開き、側面観が逆台形をなすもの、余り開かず角型を呈するもの、また、体部が内湾気味に、幾分丸味を残すもの（9、54、54、640、63～66、70、71、78、81、82、86～88）がある。55は口唇部がなでられ、端反となる。20は灯明皿。

92～94は小皿。口径8.1～7.6㎝、底径6.5～4.8㎝、器高2.2～2.1㎝を測る。95～125は口径6㎝以下の極小かわらけ。共に胎土は粉質で橙色系を呈し、丁寧な作りである。

図19は溝4最下層から出土した遺物である。1は鍔釜。復元された口径は17㎝を測る。胎土は淡橙色を呈し、茶色粒子、金雲母を交えた精良土である。鍔直上に直径2㎜の孔を焼成以前に穿つ。鍔下は炭化している。

2は平瓦。胎土は黒色を呈し軟質で粗い。凹凸両面共に無文である。

土壙6（図20）

調査区東壁際H－11グリッド杭下に広がりをもって検出された土壙である。検出された掘方規模は、南北3m、東西1.24mまでを測り、その主体は、調査区外東側に有る。下端は概ね、上端幅より15㎝前後内側にある。底部は平坦で、側壁は外反して鋭角的に開く。この土壙は、遺構面上では海抜13.6m付近で検出されており、深さは確認面より20㎝前後である。しかし、東壁の土層のセクションでは海抜14.3mあたりから掘り込まれていることが確認されている。この土壙の覆土は凹レンズ状の堆積をする。上層からの層序は、暗褐色粘質土層、土丹層、暗茶褐色粘質土層、土丹層、暗褐色粘質土となっており、下層には炭化物が層状に堆積し、湧水のため締まりが悪くなっている。

土壙6出土遺物（図21）

1～16はロクロ成形のかわらけ。1～7は大皿。口径14～12㎝、底径8.8～6.8㎝、器高4.2～3㎝を測る。胎土は粉質で、橙色系を呈し、白針、金雲母、茶色粒子、白色礫を交え、焼成は良好である。側壁は底部から外反して立ち上がる。外底部のすのこ痕、及び、内底面の横ナデの痕跡は明瞭である。1～3は器高が4㎝と高く、法量を高める。2は口唇端部が端反となる。8、9は中皿である。口径11.2～9.6㎝、底径6.4～5.9㎝、器高3.4～2.5㎝を測る。胎土は橙色系を呈する。内底面のなでが強く、8は口唇部が端反、9は側壁下部に若干丸味を残す。10～16は小皿。口径8.6～6.2㎝、底径6～3.6㎝器高2.5～1.8㎝を測る。外底部のすのこ痕、及び糸きりの痕跡は明瞭ではない。概ね、口径に比して器高が高い。13、14は下層よりの混入品。

17は青磁双魚文鉢、または、皿。素地は灰白色を呈し、若干黒色粒子を含み、精緻で粘性があり、また、ガス孔が観察される。釉調は青緑色を呈し、透明度、光沢共に良い。内底面には双魚文を貼付する。釉は畳付以外は全面施釉、文様の周囲、及び高台際は釉が厚い。器表は若干貫入する。

18は山茶碗窯系捏鉢の口縁部。胎土は灰色を呈し、白色粒子、雲母を含む。口唇部はやや角張る。

19はかわらけ質の灯明台の頸部。頸部径は4㎝を測る。

井戸3（図22）

調査区南側、H－15グリッド杭南側に広がりをもって検出された井戸址である。この井戸の東肩は、調査区外東に在る。検出された掘方規模は、南北2.05m、東西1.5mまでである。海抜14m付近で検出されたが、東壁土層断面図では、海抜14.5m付近より掘り込まれているのが確認された。深さは制限深

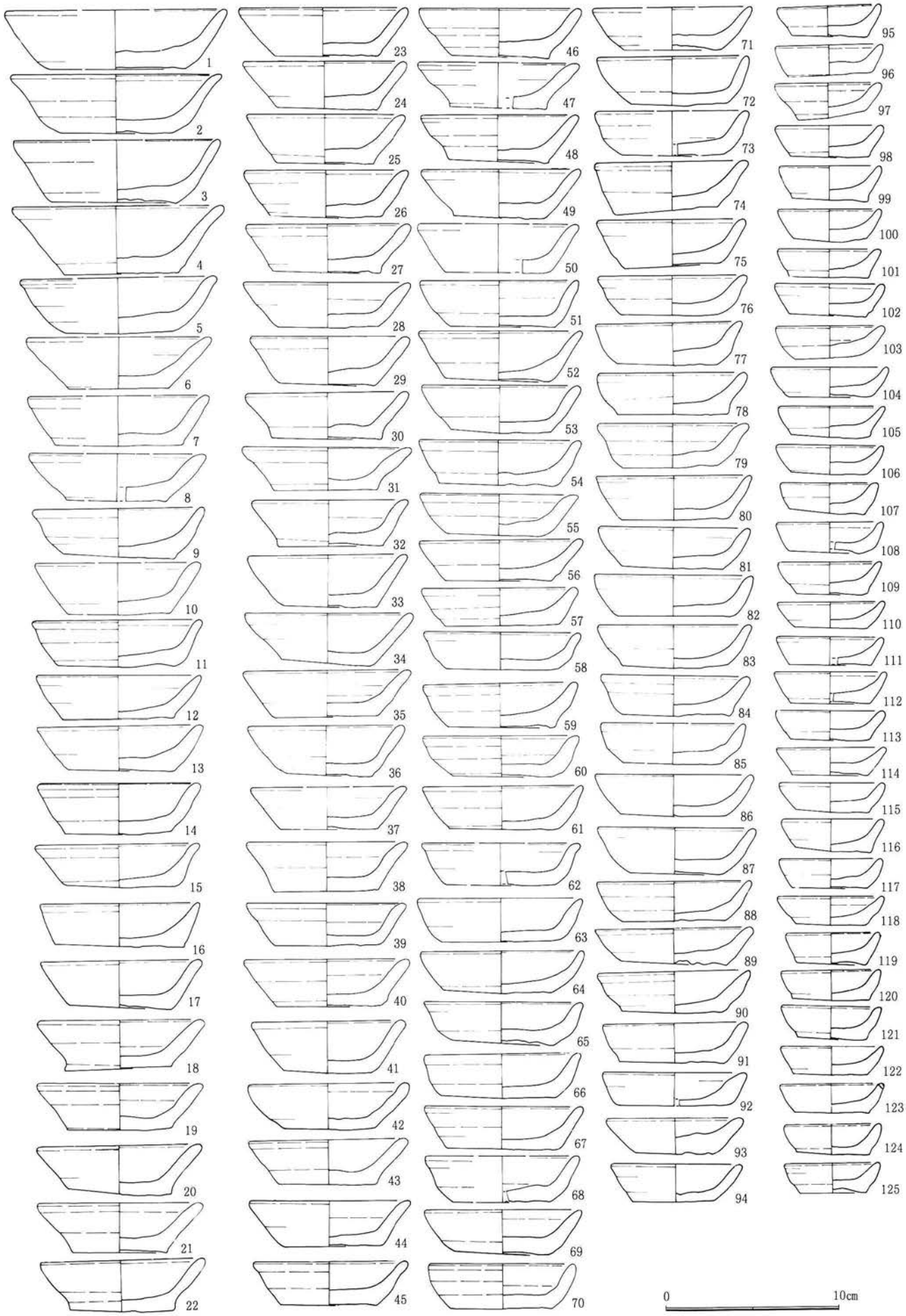

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
0
10cm

図18　溝４出土遺物（４）

度現地表下1.5mまでの確認で、完掘はされていない。

この井戸の覆土は、黄褐色粘質土で、全体に炭化物が混入している。大別して3層に分かれ、上層は土丹粒子～土丹塊（～30cm大）、かわらけ細片を含みやや締まる。中層、下層には土丹がさほど混入しなくなり、締まりも非常に悪くなる。

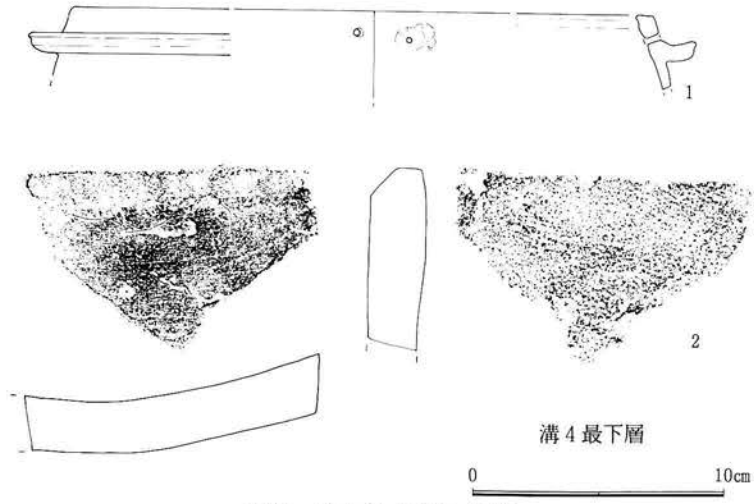


図19　溝4出土遺物（5）

井戸4（図23）

調査区南西側、F－18グリッド杭北側に広がりをもって、検出された井戸址である。この井戸の南半分は、調査区外南に在る。検出されたのは、東西1.8m、南北0.9mまでの掘方である。遺構面上では、海抜13.7m付近の検出であったが、、南壁土層断面図では海抜13.9m付近より掘り込まれていることが確認された。深さは制限深度を越えるため、未完掘である。

この井戸の覆土は、土丹粒子、土丹塊、かわらけ細片、炭化物を含み、大別して2層になる。上層は灰褐色粘質土で、炭化物を多く混入しており、下層は暗灰色粘質土で、まばらに炭化物を含む。締まりは、両層共に良くない。

井戸3出土遺物（図24、1～9）

1～7はロクロ成形のかわらけ。ここから出土したかわらけの特徴は、胎土は粉質で、橙色系を呈し、白針、金雲母、茶色粒子、白色礫を交え焼成は良好である。また、口径に比し器高が高い。1～3は大皿。口径13～12.5cm、底径7.4～6.6cm、器高4.1～3.2cmを測る。側壁は底部から外反して立ち上がり、2は口唇端部が端反となる。3は下層からの混入品。4～7は小皿。口径7.8～6.8cm、底径4.9～4.2cm、器高2.7～1.2cmを測る。4～6の外底部のすのこ痕、及び糸きりの痕跡は明瞭ではない。7は下層よりの混入品。

8は白磁皿の口縁部の破片。素地は白色、透明な白色釉を施釉する。光沢、艶、共に良い。内面に印花文を施し、口縁部は口兀となる。

9は山茶碗窯系捏鉢の底部の破片。胎土は灰色を呈し、白色粒子、小石を含み粗い。断面、三角形の貼付け高台で、内底面は非常に摩滅している。

井戸4出土遺物（図24、10～13）

10～13はロクロ成形のかわらけ。10、11は大皿。口径は13cmを測り、器形は側壁が外反するタイプである。11は底径、口径比が大きく、器高3.9cmと高い。胎土は共に粉質で、橙色系を呈し、白針、雲母、赤色礫を交え、焼成は良好である。12は小皿。口径8cmを測る。外底部のすのこ痕は顕著である。13は口径5.8cmを測り、胎土は橙色を呈し、粉質である。

表土層出土遺物（図25）

1～15はロクロ成形のかわらけ。1～4は体部が内湾する。胎土は雲母、赤色粒子を含み粉質であり、1、3は橙色を呈し、2、4は肌色で、硬く焼き締まる。1は大皿。口径12.2cmを測る。外底部の糸きりの成形は雑で、すのこ痕を明瞭に遺存する。2～4は小皿。口径8.2cm、底径6.2cm前後、器高1.3cmを測り、浅い皿状である。5～15は体部が外反するタイプである。胎土は橙色系で、白針、雲母、赤色礫、白色礫を多く含む粗い胎土である。外底部のすのこ痕、及び糸きりの痕跡は明瞭ではない。6、7、8、

10は、体部に若干丸味が残る。6の胎土は肌色、粉質で白針、雲母、赤色礫、白色礫を含み粗い。7、8、10は胎土が橙色系で赤色粒子を多く含む胎土である。2、9は灯明皿。

16は青磁蓮弁文碗の口縁部の破片。素地は灰色、釉調は灰味緑色を呈する。器表には無数の傷痕が有り、光沢、艶共に悪い。蓮弁の幅は広い。

17～21は瀬戸窯の製品。17、18は灰釉、折縁皿の口縁部。共に胎土は、灰色を呈し、粉質、軟質である。釉調は、灰味黄緑色を呈し、器表には貫入が著しい。17の外体部は露胎、口縁部の凹帯は浅く、18の口縁部の凹帯は4㎜と深い。19は入子の底部。復元された底径は3.4cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色粒子を若干含み、軟質、精緻である。体部は露胎となり、外底部の糸きりの痕跡は明瞭である。20は皿の底部。底径5.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含み硬質である。外底部には糸きり痕が明瞭に遺存しており、はけ塗りの痕跡を留めている。21は鉄釉天目茶腕の口縁部。22、23は常滑窯の壷の口縁部。22は玉縁となり、胎土は灰色を呈し、白色粒子を若干含み、精良である。口縁端部、及び外体部に降灰する。23の復元された口径は19cmを測る。胎土は灰黒色を呈し、微細な白色粒子を含み硬質である。口縁部全体に降灰している。

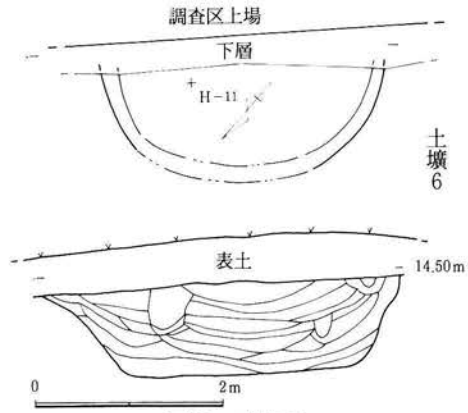


図20　土壙6

24は研磨痕のある陶片。常滑窯の甕の胴部片を使用し、2辺に使用痕が認められる。

25、26は鉄製品、釘。

27は砥石。鳴滝産、仕上げ砥。

28は骨製品。厚さ5㎜、幅1.15㎜を測り、端部を丸く成形して直径7㎜の孔を穿つ。

1面出土遺物（図26）

1～39はロクロ成形のかわらけ。1～12は大皿。13～21は中皿。22～39は小皿。大皿の口径は15～12.2cm、底径9.4～7.2cm、器高4.2～3.6cmを測る。概ね、胎土は粉質で、ほぼ橙色系にまとまり、胎土には白針、金雲母、赤色粒子を多く含む。体部が大きく外反するタイプのものである。1、4、6、8はさらに端部が開いて法量を高めている。特に、11は底径が小さく、口径との比率が大きい。中皿の口径は10.8～8.9cm、底径5.4～5cm、器高3.8～2.4cmを測る。体部が外反するもの、丸味を残すもの、胎土も橙色系、肌色系と両様である。22～36の小皿の口径は8～6cm、底径5.1～3.3cm、器高2.7～1.6cmを測り、概ね、口径に比べ器高は高い。37～39は下層からの混入品。

40～47は磁器。40は青磁、櫛掻文碗の口縁部の破片。素地は灰白色を呈し、やや粘性が強い。釉調は

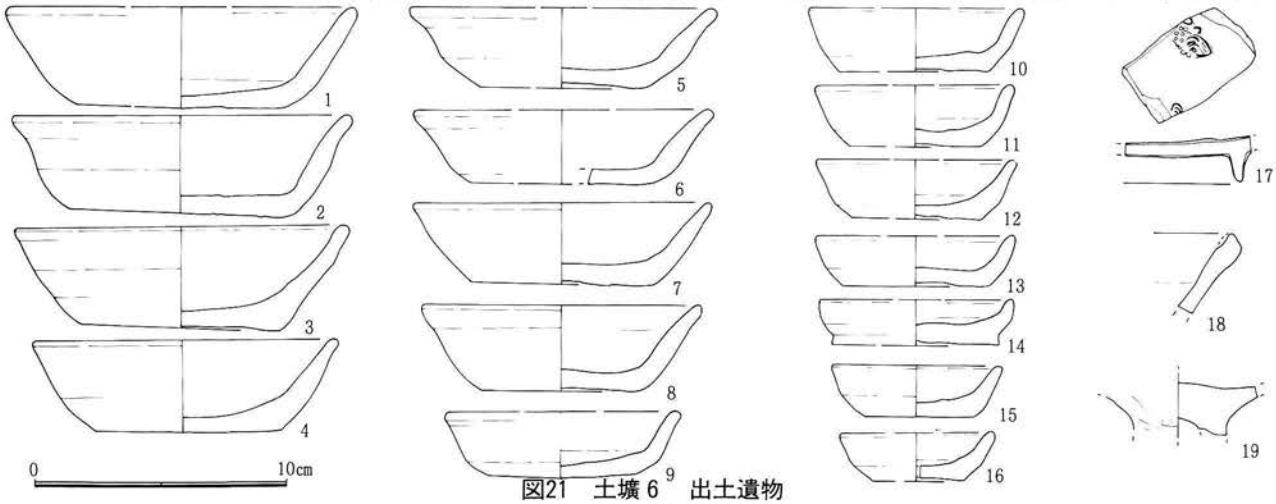


図21　土壙6出土遺物

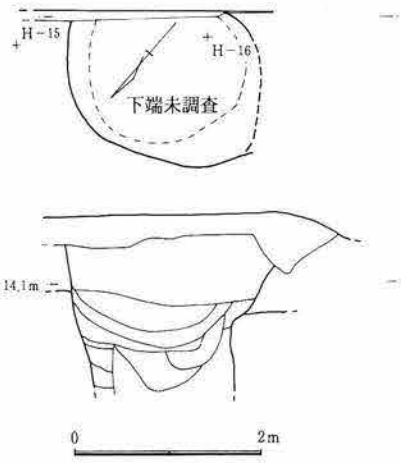


図22　井戸３

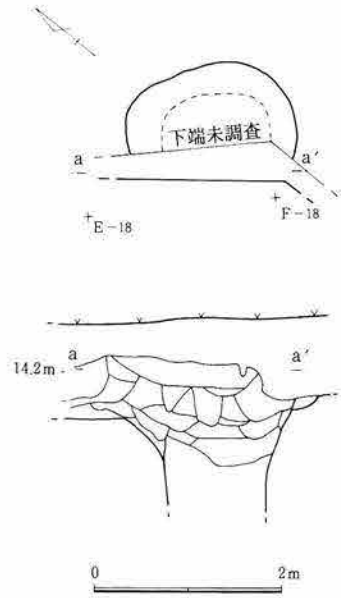


図23　井戸４

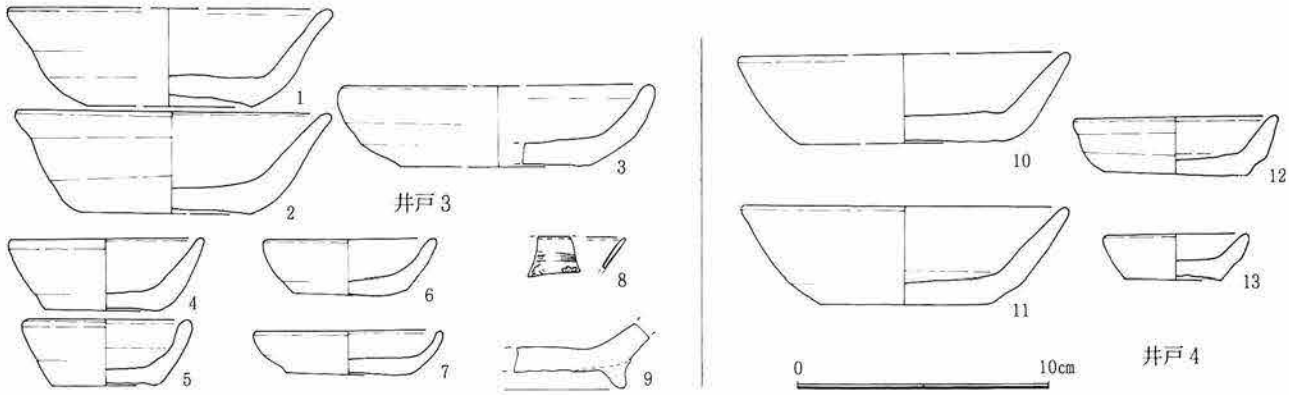


図24　井戸３・４　出土遺物

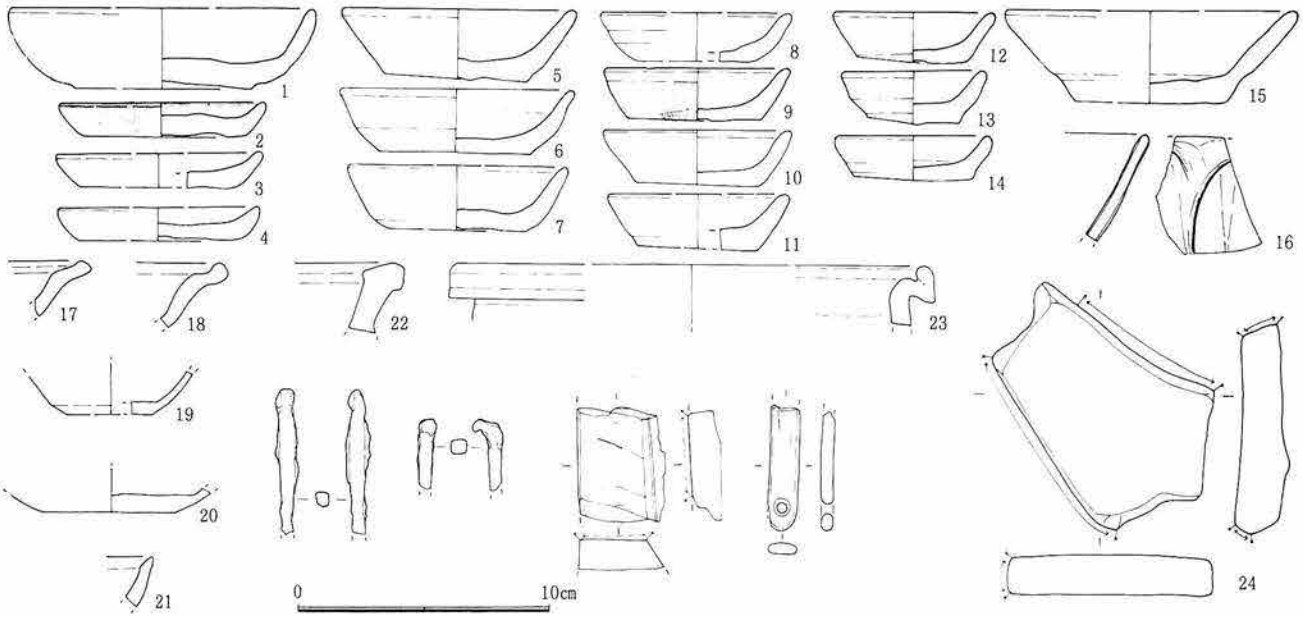


図25　表土層　出土遺物

緑灰色を呈し、光沢、透明度共に良い。41～43は白磁の碗、41、42は口兀碗。素地は白色、灰白色を呈し、釉調は灰白色で、光沢、艶共に良い。41の復元された口径は11cmを測る。42は器表の貫入が著しい。43の素地は、黄味灰白色を呈し、釉調は白色、光沢、艶、透明度全て良い。器表には貫入が若干見られる。44～47は青白磁。44は梅瓶の胴部の破片。素地は灰白色を呈し、若干、白色粒子を含む。釉調は灰味水青色を呈し、再火を受け失透する。45は輪花皿の口縁部。素地は灰白色を呈し、緻密である。釉調は青緑色を呈し、気泡が多く失透する。46は合子の蓋。復元された口径は5.4cmを測る。素地は白色を呈し、釉調は緑味白色、光沢、透明度、艶良い。口縁端部は露胎となり、器表には貫入が著しい。47は香炉の脚。素地は灰白色を呈し、緻密である。釉調は濃水青色を呈し、光沢、透明度共に良い。脚部は貼付けて作られる。

48～57は瀬戸窯の製品。48、49は灰釉卸皿。48の復元された口径は19.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子、金雲母を含む。口縁端部は凹帯が回る。49は7㎜と器肉が厚く、胎土には金雲母を含まない。50は灰釉縁釉皿、復元された口径は12.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。51は灰釉の皿の底部。復元された底径は5㎝を測る。胎土は暗灰色を呈し、白色粒子を含み粗い。内底面の重ね焼きの痕跡、また、外底部の糸きり痕跡は明瞭に残る。52は灰釉折縁皿の口縁部。復元された口径は14cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。口縁端部は2㎝折り曲げられ、2段の凹帯が回る。53は皿の底部。底径8.2cmを測る。54は鉢の底部。55～57は灰釉の碗。55は口縁部の破片。56、57は底部。56の復元された底径は6㎝を測る。胎土は暗灰色を呈し、白色粒子を含み粗い。貼付け高台である。57の底径は5㎝を測る。胎土は肌色を呈し、白色粒子を含み粗い。高台は削出し高台である。

58、59は山茶碗窯系捏鉢の口縁部。共に胎土は、灰色を呈し、白色粒子を多く含み、口縁端部は丸く収める。58の復元された口径は27.4cmを測る。

60～63は常滑窯の鉢の口縁部の破片。胎土は灰橙色～淡褐色を呈し、白色粒子を多く含み、概ね軟質で、口縁端部は窪む。

64は亀山の甕の胴部の破片。

65、66は瓦質製品。65は輪花型瓦器碗。復元された口径は9㎝を測る。胎土は白灰色を呈し、精良である。器表は黒色処理され、横方向に磨かれる。66は燭台の脚部。直径4.6cmを測る。器表は黒色処理され、縦方向の磨きを施す。上方にはスタンプによる雷文と連珠文が巡る。

67はかわらけを転用した円板。直径6.6cm、厚さ0.7㎜前後、およそ半分が遺存している。68、69はかわらけを転用した取瓶。内面の所々に銅が付着している。

70は研磨痕のある陶片。常滑窯の甕の胴部片を用い、2辺を使用している。

71は北宋銭。至和元宝。

（2）2面の検出遺構と出土遺物

土層断面図では、かなり文化層が細分されていたが、この時期に行われている玉砂利の張替の層位により、3時期に大別された。以下、新しい順に2A面、2B面、2C面とし各時期の遺構と遺物の説明をする。

2A面は1面下20cm灰～暗茶粘土層を取り除いて検出された遺構面で、調査区南側に検出された。調査区北側は、1面時の削平を受け検出されていない。この遺構面上からは、玉砂利敷き遺構が3カ所に確認された。また、部分的に粉砕かわらけによる地業が行われていた。他に、かわらけ溜りを2カ所、土壙3基、井戸2基、据甕1基の検出もある。2B面は、2A面より20cm前後下から確認した遺構面である。この面は、随所に土丹地業が施されており、その面上に遺構は展開している。この面からは、調査区中央部に2カ所の玉砂利敷遺構が確認された。その東側からは4個の礎石を検出した。また、調査

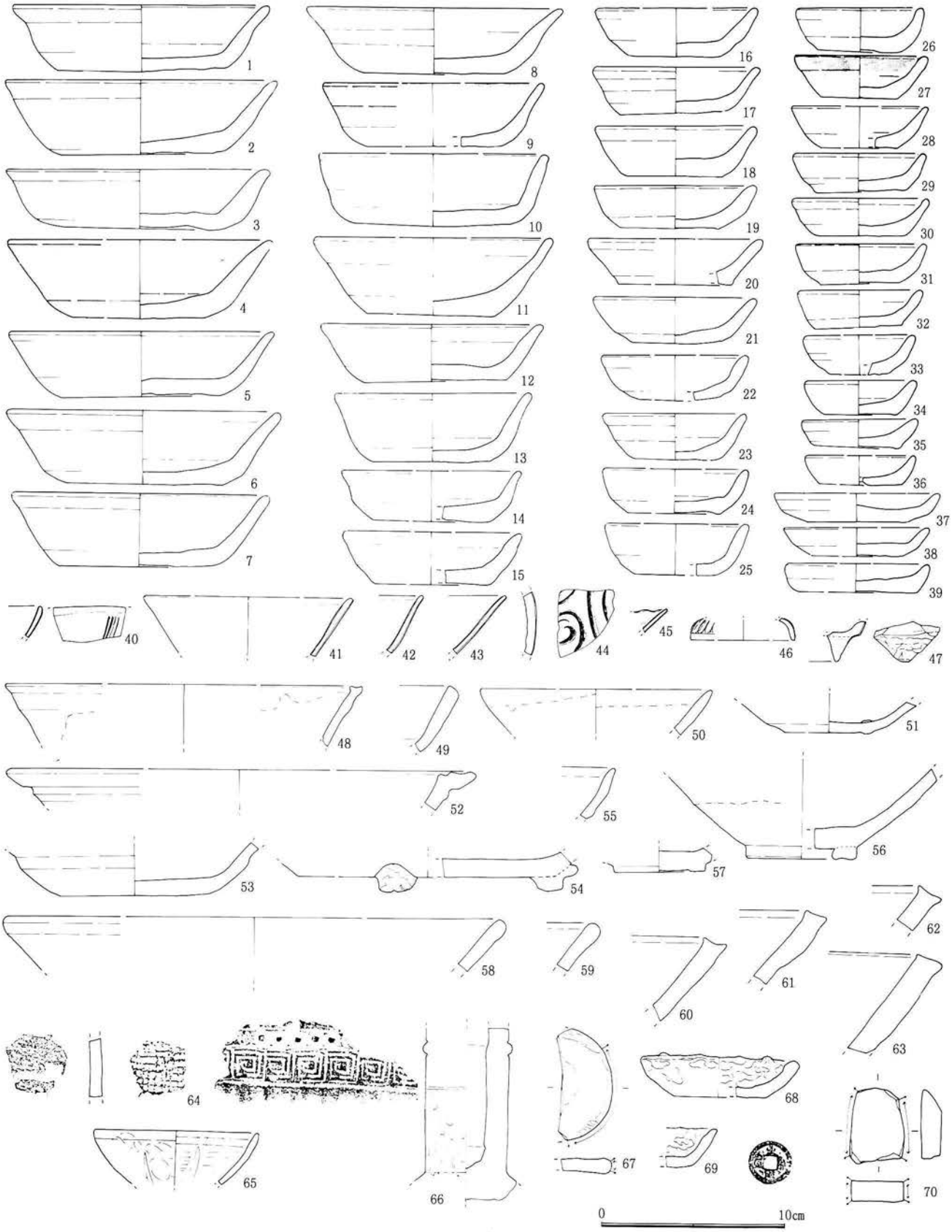

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
55
56
53
54
57
62
58
59
60
61
63
64
68
65
66
67
69
70
0
10cm

図26　1面出土遺物

区南側、北側においては溝群、柱穴群を検出している。２C面は、２B面より15cm前後下、茶褐色粘質土層上に確認した遺構面である。この面からは、かわらけを粉砕したもの、また、土丹による地業が施されていた。この面上には、焦土が広範囲にわたって確認された。この面からは、２m四方の広範囲にわたる、３カ所の玉砂利敷遺構が確認された。また、３m四方にも及ぶかわらけ溜りを、１カ所に検出している。

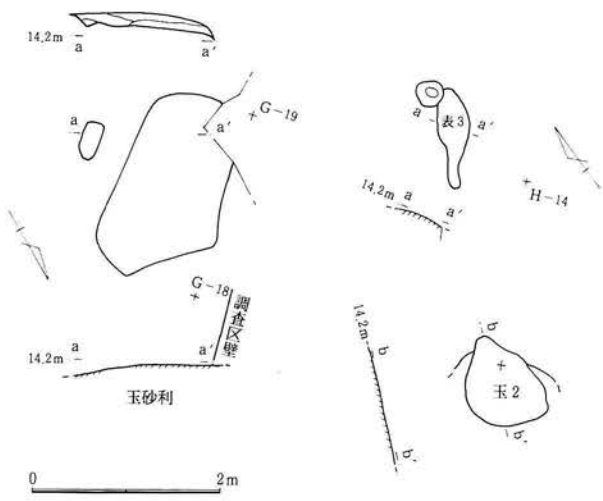


図27　玉砂利遺構１・２・３

２A面の検出遺構と出土遺物

（附図２）

玉砂利遺構１　調査区南西隅、G－18グッリド杭の南側に広がりをもって、海抜14.2m付近で検出された遺構である。この遺構は40cm前後の空間を挟んで東側と西側に広がる。確認された範囲は、東側で東西0.2m南北0.4m、西側で東西1.1m、南北２mである。10cm前後の厚さをもって敷かれており、玉砂利の大きさは直径５～30mmのばらばらの大きさのものを使用している。この玉砂利敷遺構は、西から東へ緩やかに傾斜しており、最大比高差は10cmを測る。

写真１　玉砂利遺構１

玉砂利遺構２　調査区南側、H－15グッリド杭下に中心をもって広がり、海抜14.2m付近に検出された遺構である。範囲は東西0.8m南北１mが確認された。まばらな平面的な広がりであり、また、約10cmの厚みを確認したが、それもまた、密度が粗く確実なものではない。玉砂利の大きさは直径５～30mmである。

玉砂利遺構３　調査区南側H－14グッリド杭西側に広がりをもって、海抜14.2m付近に検出された遺構である。東西0.3m、南北1.1mが確認された。玉砂利遺構２と同様に、正確さに欠けるが、厚さ９cmを確認した。玉砂利の大きさは直径５～30mmである。

玉砂利遺構１出土遺物（図28　１～27）

１～22はかわらけ。１～４はロクロ成形の大皿。５～22は小皿。５は手づくね成形、６～22はロクロ成形。ロクロ成形の胎土は、概ね、ほぼ橙色系を呈し、胎土には白針、赤色、白色礫、金雲母を多く含む。底部の糸きりの痕跡は明瞭ではない。大皿の口径は13～12.2cm、底径8.8～7.9cm、器高3.3～３cmを測る。口径、底径共に縮小化の傾向にあり、また、器肉も７mmと薄手である。小皿の口径は8.8～6.6cm、底径6.5～4.2cm、器高1.9～1.2cmを測る。５の復元された口径は、9.4cmを測る。ゆがみが顕著で、作り

が雑である。

23～25は青白磁。23は梅瓶の胴部の破片、素地は灰白色、釉調は水青色を呈し、光沢、透明度、艶すべて良い。器表の貫入が著しい。24、25は合子の蓋と身。共に素地は白色、釉調は水青色を呈する。同一個体の可能性がある。24の復元された口径は８cm、口縁部は露胎となり、頭頂部には印花文を施す。25の復元された口径は6.4cm、口縁部、底部は露胎である。 26、27は白かわらけの口縁部の破片。

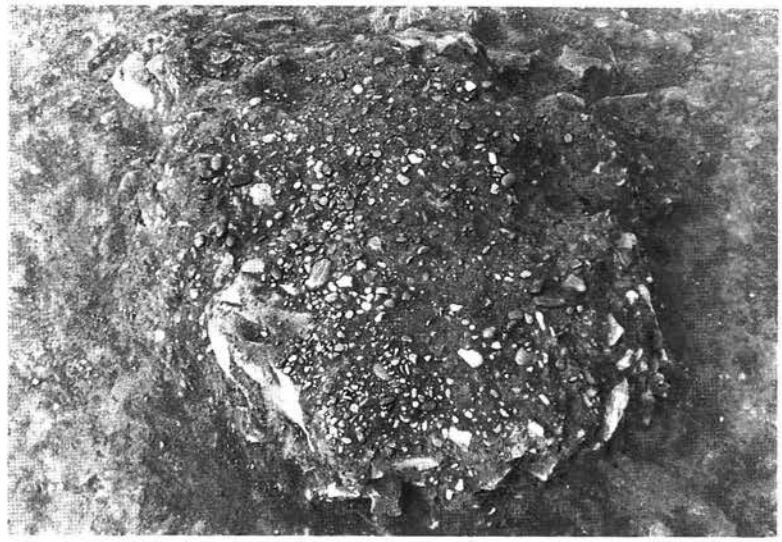


写真２　玉砂利遺構２

玉砂利遺構２出土遺物

（図28 28～33）

28～33はロクロ成形のかわらけ。28～30は大皿。31～33は小皿。胎土は粉質で、胎土には白針、赤色礫、金雲母を多く含む。大皿の口径は13.4cm、底径8.5～7.8cm、器高３cm前後である。口径、底径比が大きくなりつつあり、器肉の薄手化が顕著である。29は前代の様相を呈し、器肉が厚く、底部が大きい。小皿の口径は7.6～7.2cm底径5.2～4.8cm器高1.8～1.2cmを測る。

写真３　玉砂利遺構３

玉砂利遺構３出土遺物（図28 34～37）

34、35はロクロ成形のかわらけ。34は大皿。35は小皿。共に胎土は橙色系を呈し、粉質である。大皿の復元された口径は14cm、底径8.8cm、器高3.8cmを測る。器肉は薄手化が顕著である。小皿の復元された口径は7.5cm、底径5.2cm、器高1.6cmである。

36は瀬戸窯の灰釉の入子。口径3.6cm、底径2.6cm、器高６mmを測る。外体部、内底面は露胎となり、また、外底部はへら削り調整である。

37は鉄製品、釘。

かわらけ溜り１・２（図29）

玉砂利遺構１の東側に検出された遺構群である。共に平面的な広がりを持って検出されたが、わずかな広がりを呈する小規模なかわらけ溜りである。全てロクロ成形のかわらけで構成されている。

かわらけ溜り１は、調査区南東隅、Ｈ－19グリッド杭を中心に広がりを持って、海抜14.1m付近に検出された遺構である。範囲は東西1.6m、南北0.8cmを測る。散在した様相であり、また、このかわらけ溜りの中からは、木炭片が多数検出されており、直径５cm、長さが10cmを測る大型のものも認められた。

かわらけ溜り２は、かわらけ溜り１の北東、Ｈ－18グリッド杭西側に、広がりを持って、海抜14.2m

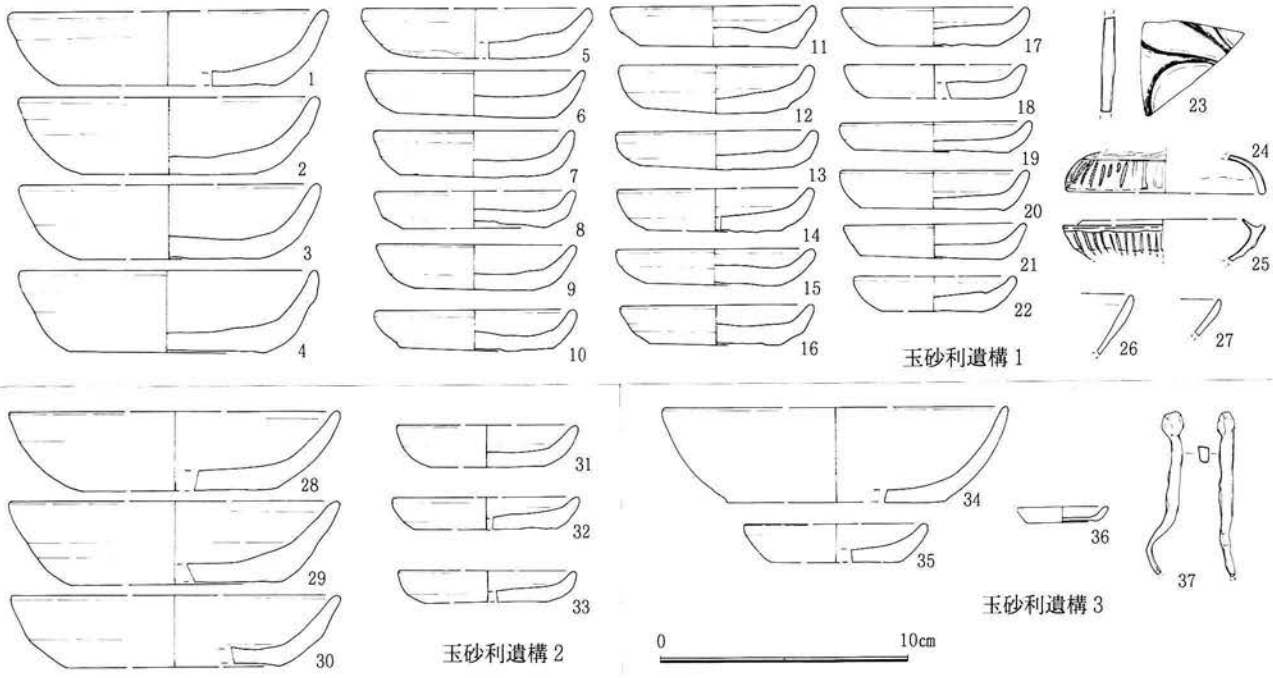


図28　玉砂利遺構１・２・３出土遺物

付近に検出された遺構である。範囲は、東西１ｍ、南北0.3ｍを測る。

かわらけ溜り１出土遺物（図30）

１～23はロクロ成形のかわらけ。１～５は大皿。６～23は小皿。大皿の口径は13～12㎝、底径9.6～7.5㎝、器高３㎝前後である。口径、底径比は小さいが、器肉の薄手化、口径の縮小化の傾向が見られる。１は口径、底径比が小さく、器肉が厚めで前代の様相を残す。小皿の口径は8.6～7.6㎝、底径6.4～5.1㎝、器高2.2～1.3㎝を測る。胎土は橙色系、肌色系と両様である。胎土は概ね粉質であるが、６～12の胎土はやや砂交じりである。

24は瓦器碗。復元された口径は9.6㎝を測る。胎土は灰白色、紐を丸めたような高台をつける。楠葉型のものとは若干タイプの違うものである。

かわらけ溜り２出土遺物（図31）

１～６はロクロ成形のかわらけ。１、２は大皿。３～６は小皿。大皿の口径は13㎝前後、小皿の口径は８㎝前後に収まる。胎土は概ね粉質で、白色礫、白針、雲母を含む。大皿の体部は内湾気味に開いて立ち上がる。小皿は浅い皿状を呈する。

７は青白磁、合子の蓋、復元された口径は８㎝を測る。素地は灰白色、釉調は緑味水青色を呈し、やや失透するが、光沢、艶共に良い。

８は鉄製品、釘。

据甕（図32）

Ｇ－16グリッド杭西側において、海抜14.2ｍ付近で検出された遺構である。口縁部は欠損している。検出されたのは胴～底部にかけての部分である。この甕は、最大胴部径80㎝、器高48㎝までが確認された。40㎝前後が埋没しており、埋土の上面には、この甕の破片が20片散乱していた。

この甕の埋土は灰褐色粘質土で、５～10㎝大の土丹塊、大きさ10㎜前後の玉砂利が含まれており、炭化物も若干混入している。

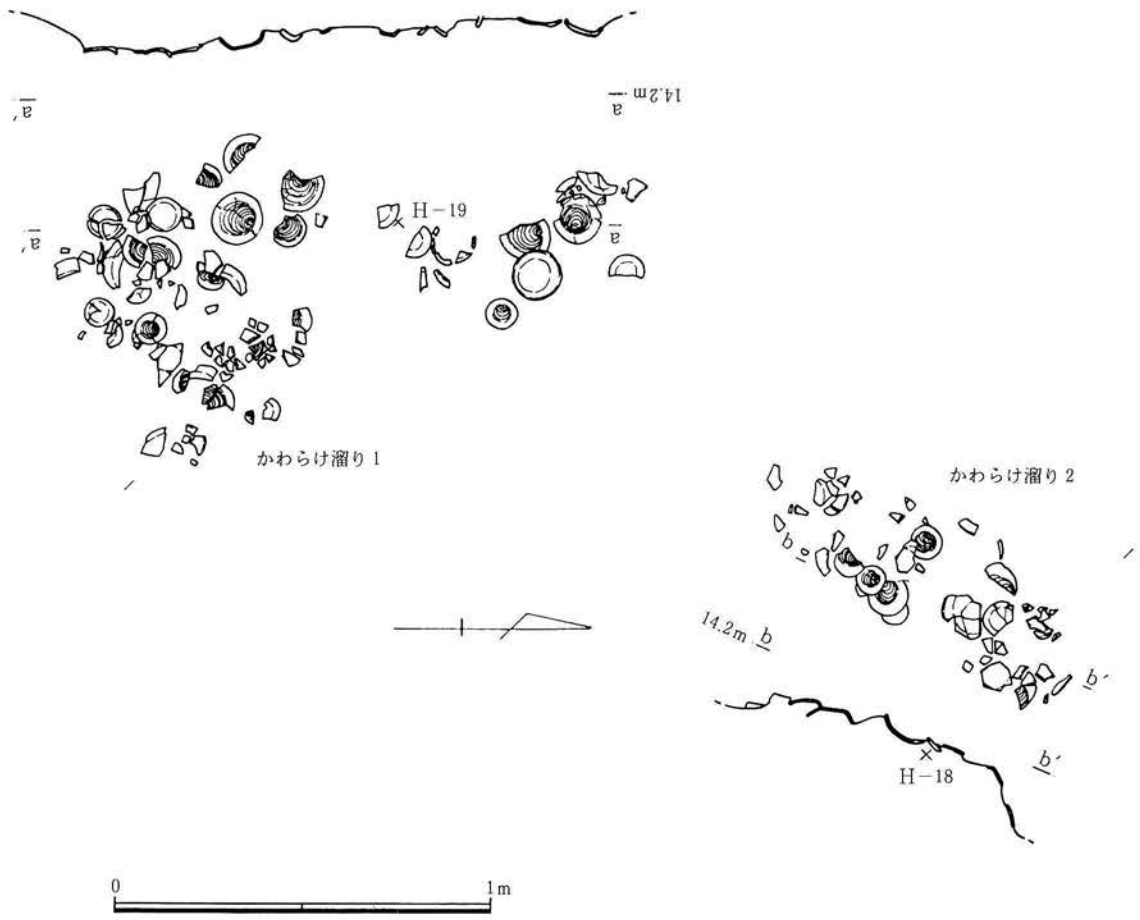


図29　かわらけ溜り１・２

据甕出土遺物（図33）

１、２はロクロ成形の大皿と小皿。共に薄手深鉢型のものである。大皿の口径は13.3cm、底径8.2cm、器高3.4cm、小皿の復元された口径は7.1cm、底径4.3cm、器高2.6cmを測る。

３、４は常滑窯の甕。３は口縁部の破片。４は底部。胎土は共に、長石を含み、灰色を呈する。３の縁帯幅は３cm、４の底径は22.6cmを測る。同一個体の可能性がある。

土壙３・５・７（図34）

土壙３はＧ－15グリッド杭南側に広がりを持って、海抜14m付近に検出された遺構である。検出された掘方規模は東西1.3m、南北0.8mを測り、平面形は、東西を長軸とする楕円形を呈する。底部はほぼ中心にあり、南北0.5m東西0.4mを測る。深さは確認面より0.96mである。側壁は、直立気味に、若干開いて立ち上がる。また、この土壙の底部中央には、安山岩の礎石が遺存している。大きさは30cm四方で、厚さは10cmである。上面は平坦である。

この土壙の覆土は灰褐色粘質土で、上層には挙大の土丹塊、石片、かわらけ細片が混入しており、下層に行くに従い、混入物の粒子が細かくなり、また、炭化物が混入してくる。全体的に締まらない覆土である。

土壙５はＨ－16グリッド内、調査区東壁際において、海抜13.9m付近に検出された遺構である。検出された掘方規模は、南北１mを測り、東西方向は主体が調査区外東に在るが、0.5mを確認した。深さは確認面より20cm前後の浅い土壙である。

この土壙の覆土は灰褐色粘質土で、土丹粒子、鎌倉石片、かわらけ細片、炭化物が混入し非常に締まらない覆土である。

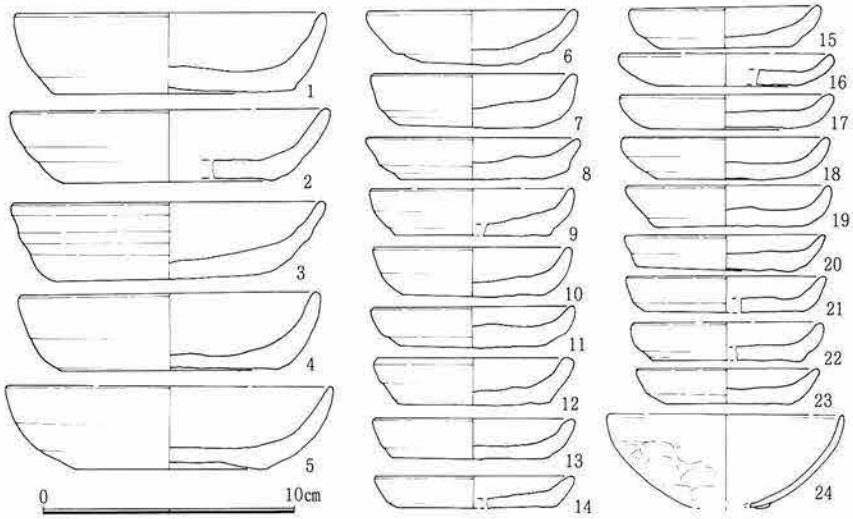


図30　かわらけ溜り１出土遺物

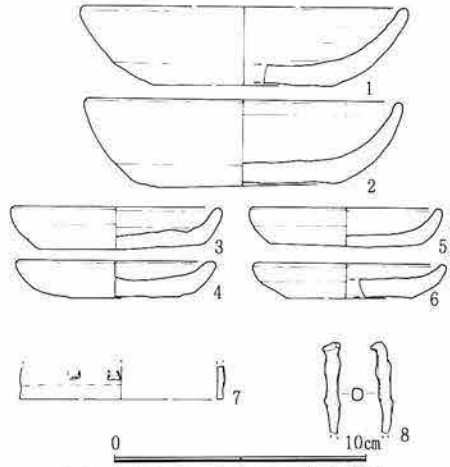


図31　かわらけ溜り２出土遺物

この土壙は、この面より検出されたが１面時の遺構で、１面時には確認できなかった土壙である。

土壙７はＧ－13グリッド内で海抜13.8m付近に検出された遺構である。平面形は円形を呈し、検出された掘方規模は直径0.8m、深さは確認面より40cmを測る。底部は西寄りに在り、また、側壁は真っすぐに掘込まれている。

この土壙の覆土は暗い茶褐色粘質土で、土丹粒子、玉砂利、かわらけ細片、炭化物が混入し、締まりは極めて悪い。

土壙３出土遺物（図35　１～６）

１～４はロクロ成形のかわらけの小皿。１、２、４の胎土は橙色を呈し、白針、赤色粒子、砂粒を含み、器表はざらつく。底部の糸きりが雑である。焼成は良好で、４は焼き締まる。３は肌色を呈し、比較的丁寧な作りである。口径8.5～7.5cm、底径6.2～5.3cm、器高1.6cmを測る。

５は渥美窯の捏鉢。復元された底径は13cmを測る。胎土は青味灰色を呈し、若干の長石を交えるが精良土である。内底面は摩滅している。高台は貼付け高台であり、籾殻の圧痕が観察される。

６は安山岩系の石臼、上臼である。復元された直径は45cmを測る。凹高は４cm、供給孔は直径6.5cmを測る。

土壙５出土遺物（図35　７、８）

７、８はロクロ成形のかわらけの小皿。口径8.8cm、底径6.1cm、5.2cm、器高1.6cmを測る。共に体部は外反して立ち上がるが、７の胎土は橙色、白針、赤色粒子、白色礫が混入し、器肉は８mm前後と厚い。８の胎土は肌色系、白針、雲母が混入しており、器肉は６mm前後と若干薄手となる。

土壙７出土遺物（図35　９、10）

９はロクロ成形のかわらけの小皿。口径7.8cm、底径5.6cm、器高1.2cmを測る。胎土は橙色を呈し、白針、赤色粒

写真４　据甕半截状況

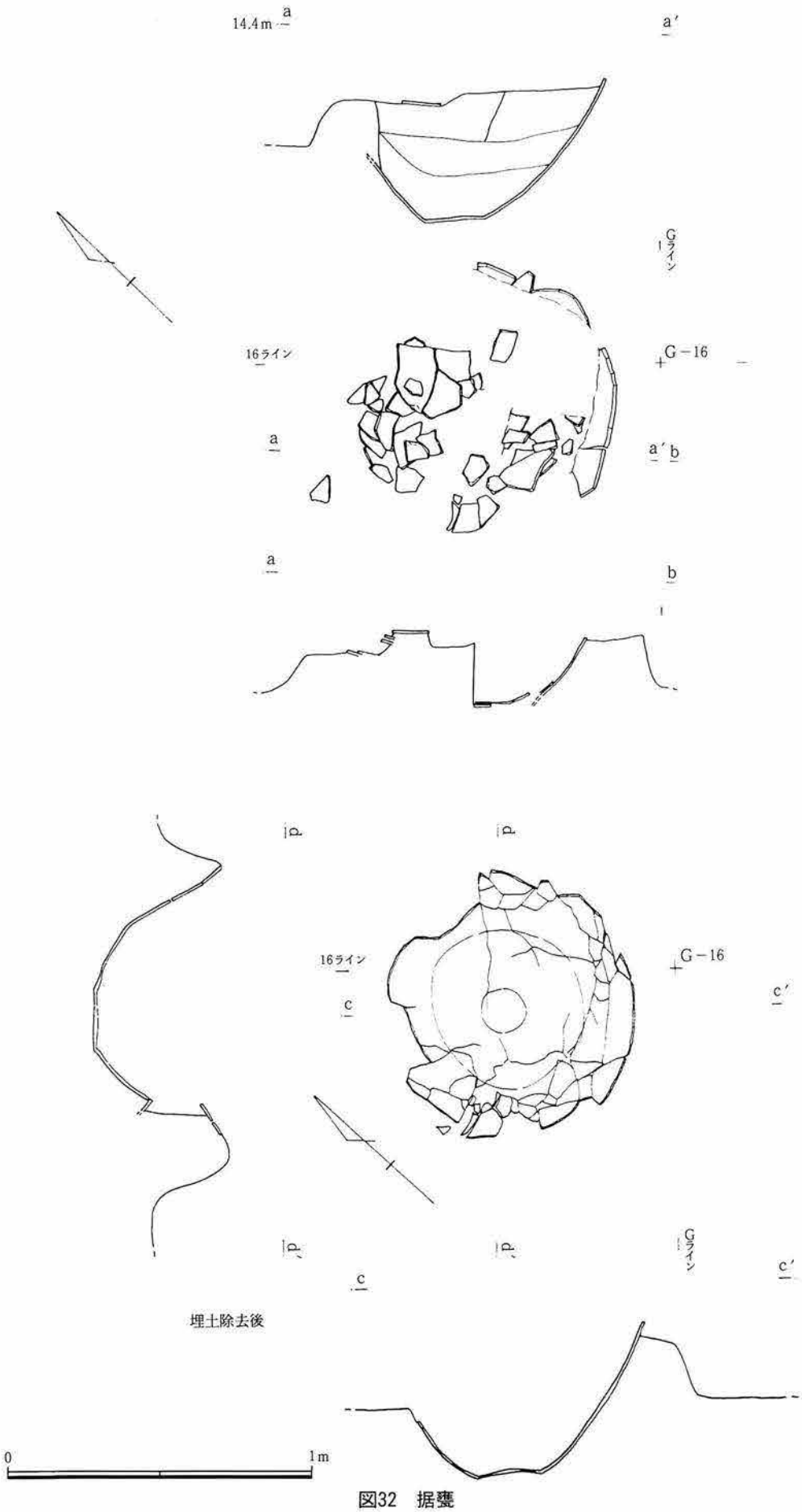

14.4m
a
a′
Gライン
16ライン
G－16
a
a′
b
a
b
d
d
16ライン
G－16
c
c′
d′
d′
Gライン
c
c′
埋土除去後
0
1m

図32　据甕

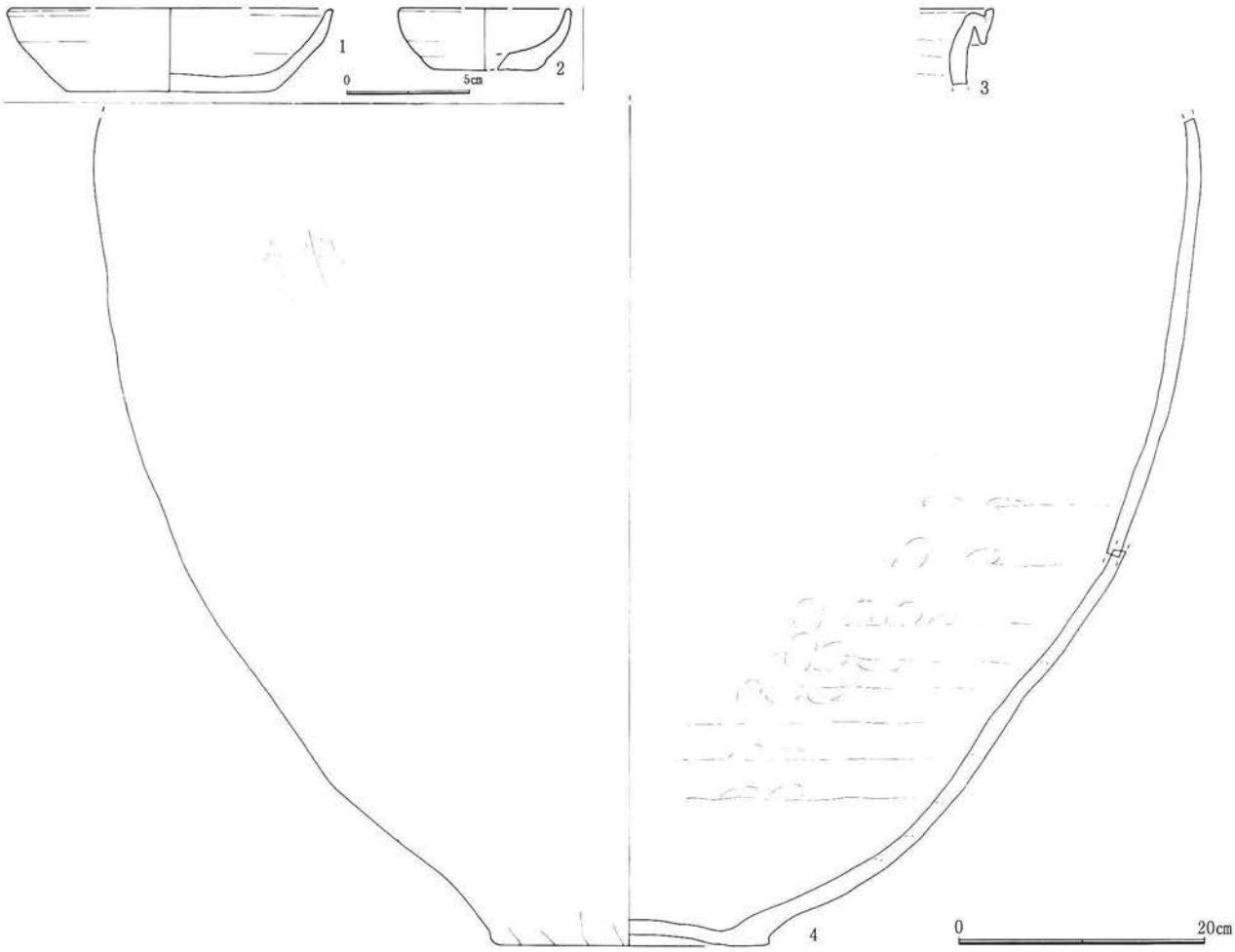


図33　据甕出土遺物

子、砂粒を含み器表はざらつく。底部の糸きりが雑である。再火を受けた痕跡を留める。

10は北宋銭。紹聖元宝。

井戸１（図36）

調査区西壁際Ｇ－14グリッド杭下に広がりをもって、海抜13.9m付近に検出された遺構である。この井戸の主体は、調査区外西にあるため、検出された掘方規模は、南北1.2m、東西0.8mである。深さは制限深度1.5m以上であるため、底部の確認はなされていない。

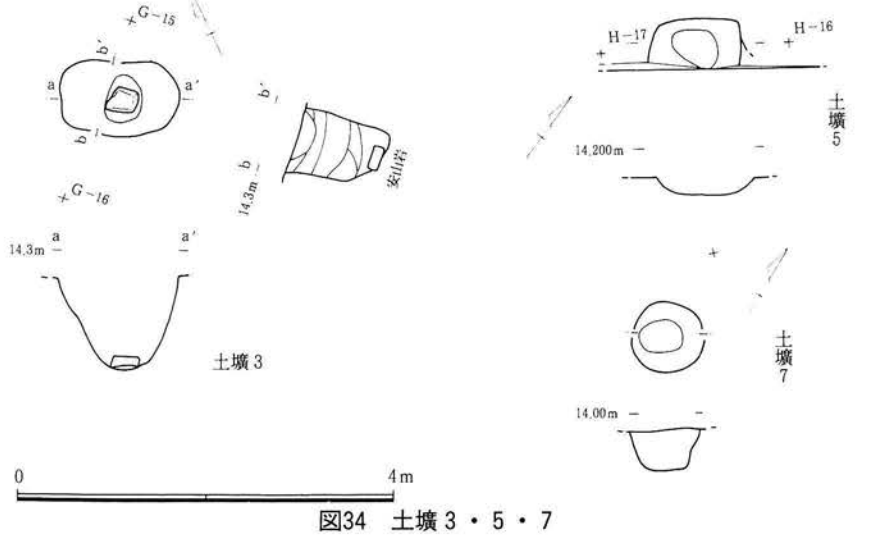


図34　土壙３・５・７

この井戸の覆土は灰褐色粘質土で、上層には土丹塊、土丹粒子を多く含み、かわらけ細片、炭化物が混入し、中層には炭化物が多く混入しており、締まりは極めて悪い。下層は混入物が認められず、締まった層である。

井戸２（図37）

調査区東壁際Ｈ－16グリッド内で、海抜13.7m付近に検出された遺構である。北側は井戸３に切られており、東側は調査区外東にある。検出された掘方規模は南北1.2m、東西0.56mである。深さは制限

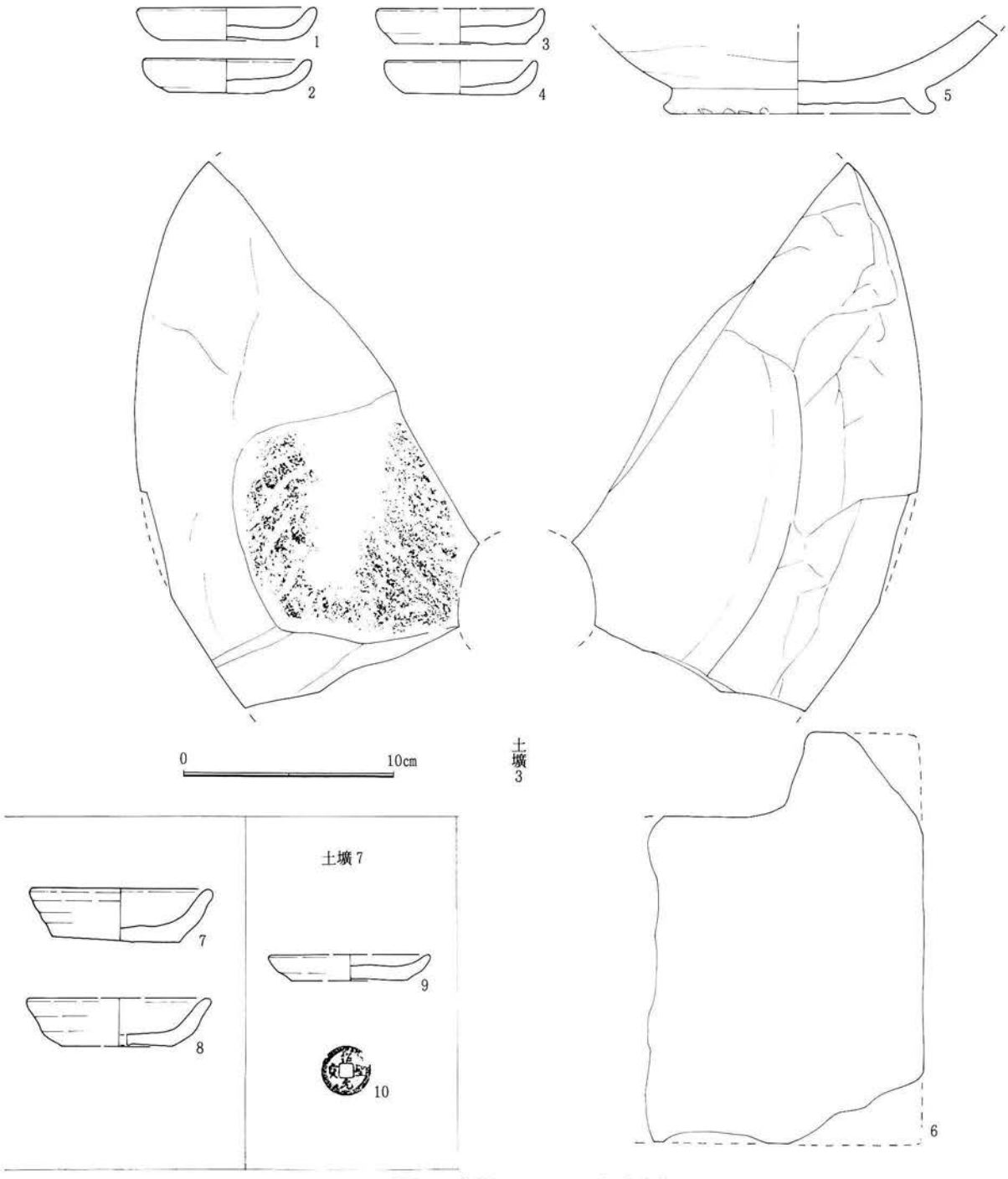


図35　土壙３・５・７出土遺物

深度1.5m以上であるため、未調査である。

この井戸の覆土は若干砂の混入した灰黄色粘質土で、上層には土丹粒子を多く含み、かわらけ細片、炭化物が混入し、下層には炭化物が多く混入しており、全体的に締まりは悪い。

井戸１出土遺物（図38）

１～８はかわらけ。１～４は大皿。１、２は手づくね成形。口径15cmと大型で、器肉は薄く、口唇端部は角張る。３、４はロクロ成形。口径13～12cm、底径8.5cm、器高３cm以上である。胎土は粉質であるが、胎土に砂が混入しており、ざらつく。法量の縮小化、器肉の薄手化の傾向にある。

５～８は小皿。５、６は手づくね成形、７、８はロクロ成形。５、６の口径は９cm前後、器肉は６mm前後を測り、薄い。７、８の胎土は肌色を呈し、粉質で白針、赤色粒子を含む。胎土は肌色を呈し、白針、

赤色粒子、含む。比較的丁寧な作りである。口径8㎝前後、底径6㎝、5.2㎝、器高1.7㎝を測る。8は底部の糸きりが雑な作り方をしており、焼成は良好である。1、2、5、6は混入品。

9、10は青白磁。9は合子の身、10は皿の口縁部の破片。9の復元された口径は5.8㎝を測る。素地は白色を呈し、釉調は水青色である。蓋受と体下部は露胎となる。10の素地は白色を呈し、釉調は水青色である。内体部には輪花の稜線が認められる。

11はかわらけ質製品。高台を持つ皿、あるいは碗。底径6.6㎝を測る。平高台であり、高台には糸きりの痕跡を有する。

12は鉄製品、刀子。

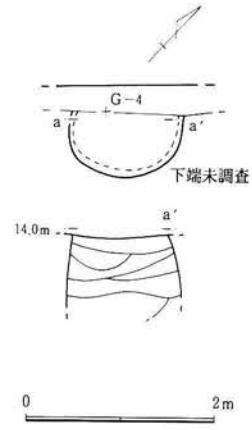


図36　井戸1

井戸2出土遺物（図38　13～26）

13～23はロクロ成形のかわらけ。13～17は大皿、18～23は小皿。大皿の口径は13.4～12㎝、底径9.8～7.7㎝、器高3.2～2.8㎝を測る。13、14、16の胎土は肌色系を呈し、粉質であるが、14、15は若干砂を交える。口径、底径比が小さいが、器肉が薄手となり、口径も縮小化にある。15、17の胎土は橙色系を呈し、白針、金雲母、赤色粒子を交え、外体部が若干外反する。小皿の口径は9.3～7.2㎝、底径6.2～4.4㎝、器高2.4～1.2㎝を測る。20、21の胎土は粉質であるが、若干砂を交え器表がざらつく。口径、底径比が小さいが、器肉が薄手である。18、22、23は粉質の胎土であり、外反する体部の特徴を有しており、上層からの混入と思われる。24～26は磁器。24は青磁、櫛掻文碗の底部。復元された底径は5.3㎝を測る。素地は灰白色を呈し、粘性があり精緻である。釉調は緑灰色、艶、光沢、透明度良い。器表には貫入が顕著である。25は白磁口冗の口縁部の破片。素地は白色、釉調は灰白色、失透するが艶、光沢良い。26は小壷の口縁部。復元された口径は7㎝を測る。素地は白色を呈し、釉調は淡い緑味白色である。口縁端部は露胎となり、口縁部に連珠を巡らせる。器表の貫入は著しい。

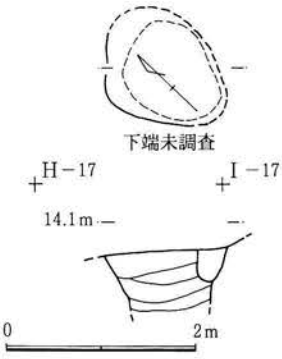


図36　井戸1

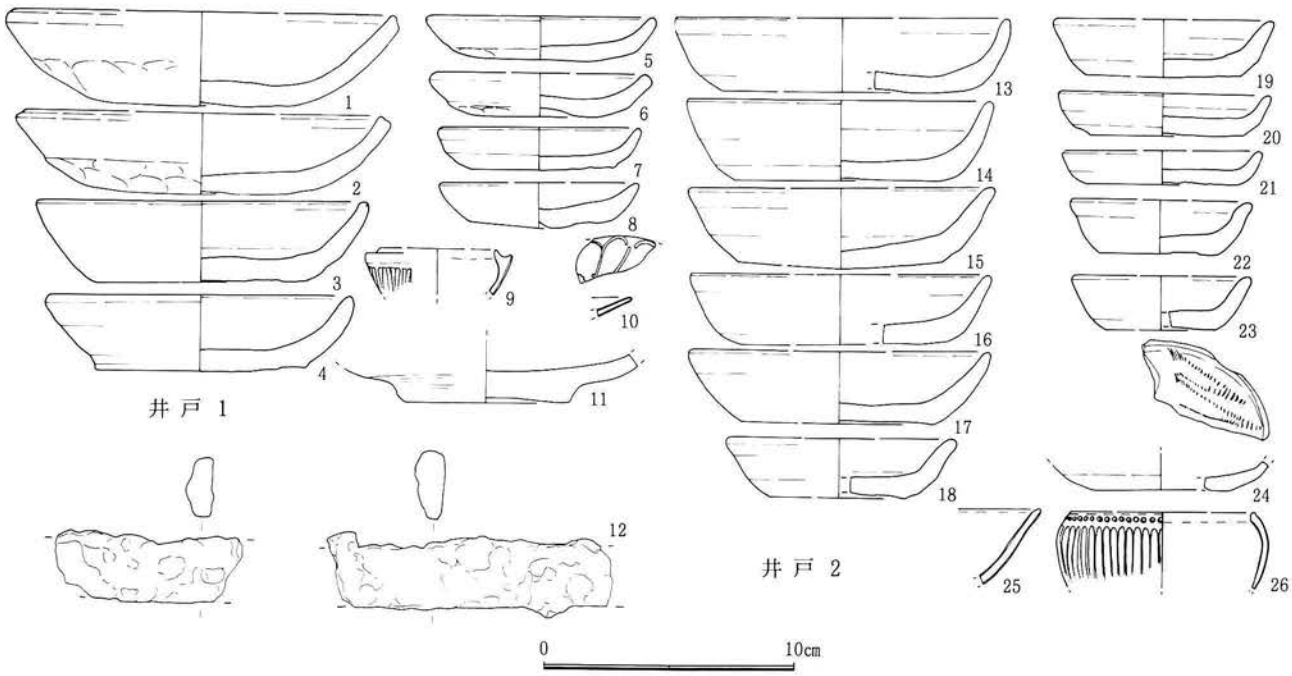


図38　井戸1・2出土遺物

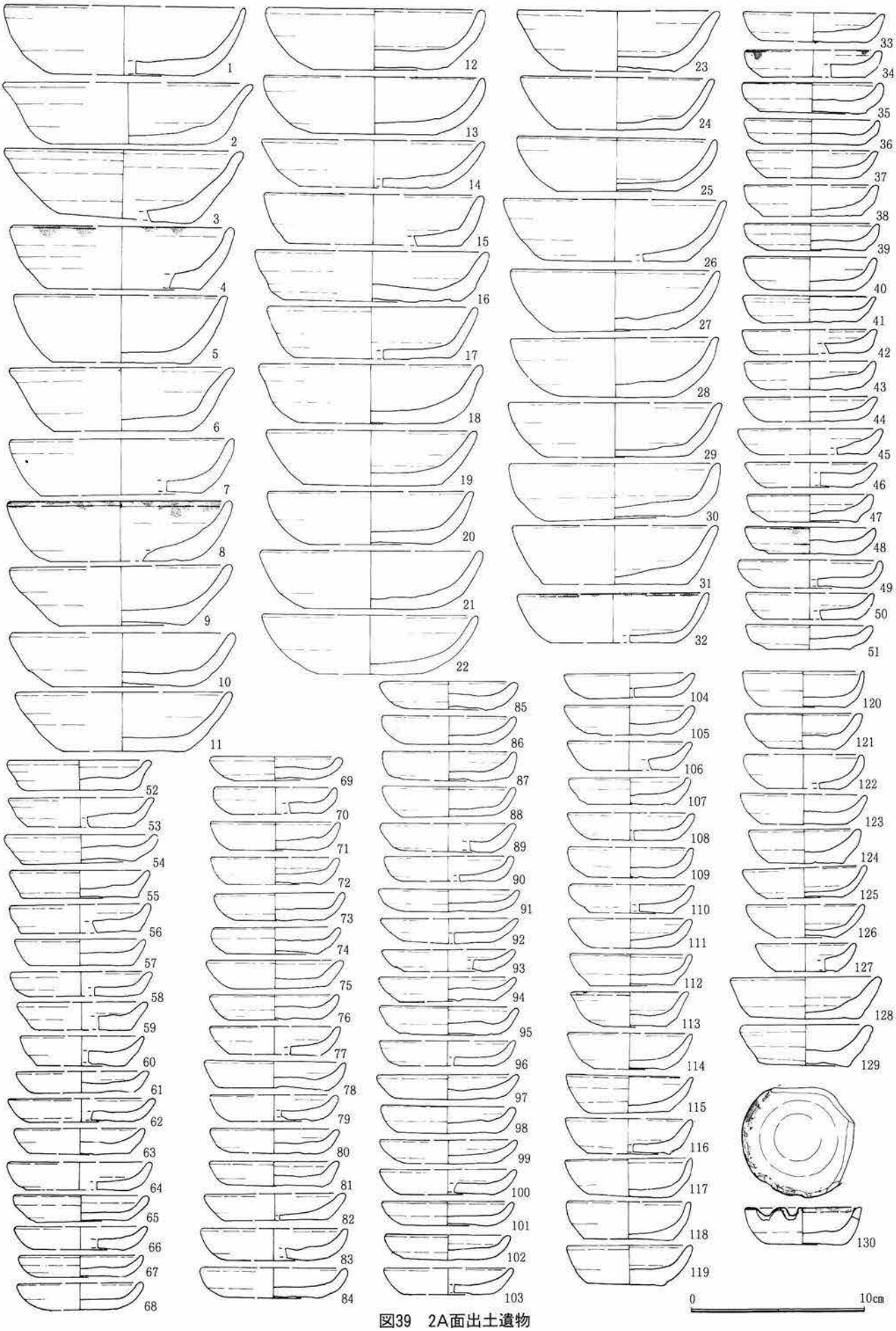

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0
10cm

図39　2A面出土遺物

2 A面出土遺物（図39～41）

図39、1～130はロクロ成形のかわらけ。1～22、26～31は大皿。23～25、32は中皿。33～130小皿。大皿の口径は14.4～12cm、底径10.2～6.7cm、器高4.2～2.6cmを測る。胎土は、概ね橙色～肌色、粉質で、白針、雲母、赤茶色粒子を含み、焼成は良好で、薄く焼き締まる。口径、底径比が大きくなりつつ、口径の縮小化、器肉は薄の薄手化が顕著である。8、12、30の胎土は、橙色系を呈し、赤茶色礫を特に多く混入する。15、16は砂質が強く、口径、底径比が小さい。2は口縁部の器肉が4㎜がと薄く、口唇端部を端反とする。中皿の口径は11.8～11.2cm、底径10.2～6.7cm、器高3㎝前後を測る。焼き締まり、器肉の薄いものが中心である。小皿の口径は8～7㎝、底径6～5㎝、器高2～1.5cm前後に収まる。胎土は、概ね粉質で、白色礫を含み、器肉は均一である。器型は皿型、あるいは碗型を呈し、器肉は焼き締まり薄いもの、ぼったりと重量感のあるものと両様の様相を呈する。114～118、120、124、125は薄手深鉢型の系統である。45は体部が直立気味に真っすぐに立ち上がる。54、90は、体部の指なでが強く、明瞭な稜線を有する。83、84は口径、底径比が小さく、古式の様相を留める。92、94は口唇端部がつまみ上げられ尖る。38、45、82は底部中央がなであげられ薄くなる。109、110、117は体部中央に明瞭な稜線が一段入る。41、73、92は体部を薄く引き出す。130は口唇部の2カ所に切り込みの加工痕を残す。4、8、32、34、48、113、130は灯明皿。103は再火の痕跡を留め器表が焦げている。3、6、23、119、121、124、128、129は上層からの混入品。図40、1～23は磁器。1～16は青磁、17～20は白磁、21～23は青白磁。1～11は蓮弁文碗の口縁部。素地は概ね青味の白色を呈し、精緻で粘性がある。釉調は1、6は灰味緑色、3は明青灰色、2、4、7、11は灰味緑青色、9、10は水青緑色、5、8は灰味青緑色を呈する。概ね体部の釉は厚く、口唇端部は、素地が透けるほどに薄い。失透気味であるが、艶、光沢共に良い。2、3は、器表の貫入が顕著である。器型は、体部が真っすぐに外反して立ち上がるが、2、4は内湾する。5、6、11は口唇端部が端反となる。1は外体部の蓮弁の幅が広く、再火を受け、肌荒れしている。12は龍泉窯の皿。復元された口径は12cmを測る。素地は灰白色を呈し、ガス孔が多く観察される。釉調は黄緑色で、再火を受け肌荒れしている。内底面に刻花文を配する。13は碗の底部。復元された底径は6㎝を測る。素地は灰色を呈し、釉調は青緑色で、内底面に刻花文を、外体下部には沈線を配する。14は折縁鉢の口縁部。復元された口径は22cmを測る。口唇端部は2㎝折れ曲がり、5㎜の縁帯を巡らす。素地は灰白色を呈し、釉調は青緑色で、やや失透気味であるが、艶、光沢共に良い。器表の貫入は顕著である。15は折腰鉢の底部の破片。素地は灰白色を呈し、釉調は青緑色で、畳付以外は全面施釉されている。やや失透気味であるが、艶、光沢共に良い。16は双魚文鉢の底部。復元された底径は17.8cmを測る。素地は灰色を呈し、釉調は青緑色で、畳付は施釉されない。内底面に、魚文を貼付する。17～20は白磁の口兀。17の復元された口径は12.4cmを測る。素地は白色を呈し、釉調は青味の灰白色である。やや失透気味であるが、艶、光沢共に良い。18の素地は白色、釉調は灰白色を呈する。19、20の素地は灰白色、釉調は灰色である。19は艶、光沢共に良く、器表の貫入が著しい。20は光沢・艶共に悪い。21～23は梅瓶の胴部の破片、21は体部、22は底部近くの部位、23は肩部。素地は共に灰色、釉調は灰味の水青色を呈し、器表の貫入が顕著である。21は再火の痕跡を留め、22、23は光沢、艶が良い。24は緑釉の袋物の底部。復元された底径は9.8cmを測る。素地は灰色で、微小な石粒が混入している。釉調は、灰味青緑色を呈し、透明度、光沢共に良い。内面及び外底部は露胎である。

25～28は瀬戸窯の製品。25は灰釉の折縁皿の口縁部。復元された口径は、26.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、1.8cmの口縁端部を2段に折り曲げ、1.1cmの縁帯を作り出す。26は黒釉の花瓶の胴部片。胎土は灰色を呈し、比較的精緻である。文様部分は粘土で貼付けられ、工具による印刻を施す。27は灰釉碗の口縁部。胎土は淡い肌色を呈し、軟質である。28は灰釉の入子の底部。復元された底径は5㎝を測る。

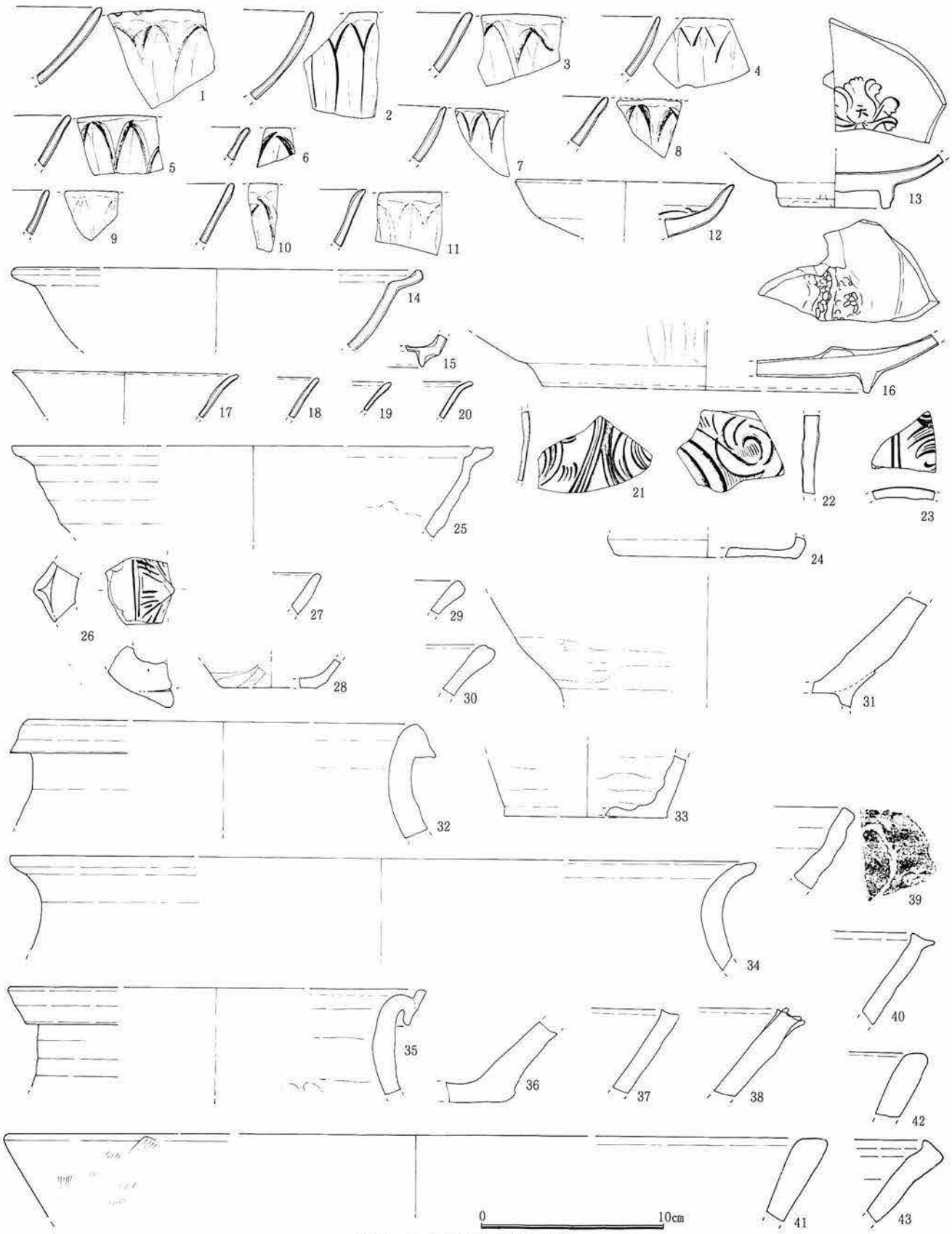


図40　２Ａ面出土遺物（２）

～50㎜大の大きさのものが敷かれていた。

玉砂利遺構５の北側に、４個の安山岩の礎石が検出された。礎石の大きさは、30㎝前後四方で、平面形は、ほぼ方形を呈している。礎石の上面は平坦であり、その上面の海抜は13.9ｍである。礎石間の心心の距離は、1.1ｍを測る。また、この礎石群は、調査区東壁際に検出されており、調査区外東に延びる可能性もある。この建物の南北の軸方向はＮ－30°－Ｅである。

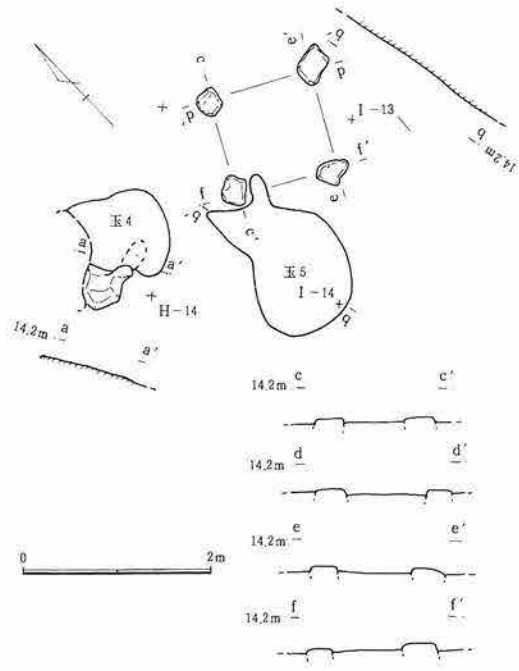


図42　玉砂利遺構４・５礎石建物

玉砂利遺構５出土遺物（図43）

１～14はかわらけ。１～６、８～14はロクロ成形、７は手づくね成形である。１～６は大皿、７～14は小皿。ここで検出されたロクロ成形のかわらけの胎土は、橙色系、肌色系両様であり、大皿は橙色系にまとまる。胎土には白色、及び赤色礫、砂粒、雲母を含み、器表は若干ざらつく。大皿の口径は14～12㎝、底径9.2～7.7㎝、器高3.3～2.7㎝を測る。体部は丸味をもって若干開き気味に立ち上がる。口径、底径の比率の増加、器肉の薄手化が認められる。７の復元された口径は8.2㎝を測る。口唇端部のなでが強く、角張る。底部は平底状を呈する。再火を受け、器表は焦げている。小皿の口径は８㎝前後、底径6.8～5.4㎝、器高1.8～1.5㎝を測る。概ね、体部には１段の稜線を持ち、内湾気味に立ち上がるが、８は開いて立ち上がる。

15～19は磁器。15～18は青磁、19は青白磁。15は劃花文碗。素地は灰色を呈し、粘性がある。釉調は緑灰色、光沢、艶、透明度すべて良い。内面の器表には、ササラ状の縦方向の傷痕が認められる。16～18は蓮弁文を有する。16の蓮弁は幅が広く、17、18は細い。16、17は碗の口縁部の破片。素地は共に灰白色を呈し、釉調は、16が緑味灰色、17が緑灰色である。18は口唇端部が端反となる。素地は灰色、青色の釉である。19は合子の身。復元された口径は4.5㎝を測る。素地は白色、釉調は緑味白色を呈する。口唇端部は露胎となり、体部の貫入は内外共に顕著である。20、21は常滑窯の製品。20は甕の口縁部、21は鉢の口縁部。20の胎土は淡橙色を呈し、長石、白色礫を混入する。21の胎土は、灰色を呈し、長石が含まれており、破片全体に降灰している。

22は北宋銭。元祐通宝。

溝３・５・６　柵列１・２（図44）

これらの遺構群は、調査区南側、海抜14m前後付近で検出された。これらが検出された遺構面には微弱な土丹地業がなされていた。

溝３は、Ｇ－13～17グリッドにまたがって 検出された、南北に走る長い溝である。およそ、調査区の南側半分に、その様相を示している。この溝の北側はＧ－13グリッド杭付近で姿を消し、南側は、Ｇ－17グリッド杭以南で、二股に分かれ、さらに南側に延びる。西側を溝５、東側を溝６とする。

溝３の検出された掘方規模は、南北7.5m、幅50～60㎝、深さは確認面より30㎝を測る。この溝の断面形は、四角を呈し、側壁は真っすぐにち上がる。溝の底部は平坦で、北側が若干低くなっており、南側の山裾から北側の滑川方向に流れて行く様相を示している。

この溝の覆土は灰褐色粘質土で、土丹粒子、かわらけ細片、炭化物を含み、締まりがない。

この溝の南北の軸方向はＮ－38°－Ｅである。

溝５は、溝３が二股に分かれた西側の南北溝である。この溝は南に向かうに従い、溝幅を狭め、深さも浅くなり、徐々に規模を小さくしている。また、南端は、現代の撹乱を受けている。

検出された掘方規模は、南北4.2m、幅50～20cm、深さは確認面より10～５cmを測る。この溝の断面形は逆台形を呈し、側壁は開いて立ち上がる。溝の底部は丸味を帯び、北側が若干低くなっており、南側の山裾から、北側の滑川方向に流れて行く様相を示している。

写真５　玉砂利遺構４

この溝の覆土は、灰褐色粘質土で、土丹粒子、かわらけ細片、炭化物を含み非常に締まりが悪い。

この溝の南北の軸方向はＮ－42°－Ｅである。

溝６は、溝３より分かれた東側の南北溝である。この溝は、南側に向かう様相を呈しながら、Ｇ－18グリッド内で消える。

検出された掘方規模は、南北2.8m、幅40～30cm、深さは確認面より20～15cmを測る。この溝の断面形は逆台形を呈し、側壁は若干開いて立ち上がる。溝の底部は丸味を帯び、北側が６cmと若干低くなる。

この溝の覆土は灰褐色粘質土で、土丹粒子（mm～５mm大）、かわらけ細片、玉石を含み、締まりは極めて悪い。

この溝の南北の軸方向はＮ－20°－Ｅである。

柵列１・２は、前述した溝群を挟んで、並行に東西に検出された。柵列１が溝群の西側、柵列２は溝群の東側である。

柵列１は６口の柱穴が、心心間の距離１ｍを保って、南北に並ぶ。柱穴の掘方規模は南北50～60cm、東西30～40cm、平面形は、南北を長軸とする楕円形を呈する。深さは確認面より30～40cm前後を測り、底部の海抜は13.8m前後とほぼ一定である。柱穴群の覆土は茶褐色粘質土で、やや砂質に富み、覆土中には炭化物が多く含くまれ、土丹粒子、かわらけ細片も観察され、締まりは悪い。

この柵列１の南北の軸方向は、Ｎ－30°－Ｅである。

柵列２は７口の柱穴が、心心間の距離２～2.1ｍを隔てて、南北に並ぶ。柱穴の掘方規模は、直径30～40cm、平面形は円形を呈する。深さは確認面より20～40cm前後を測る。柱穴群の覆土は、灰褐色粘

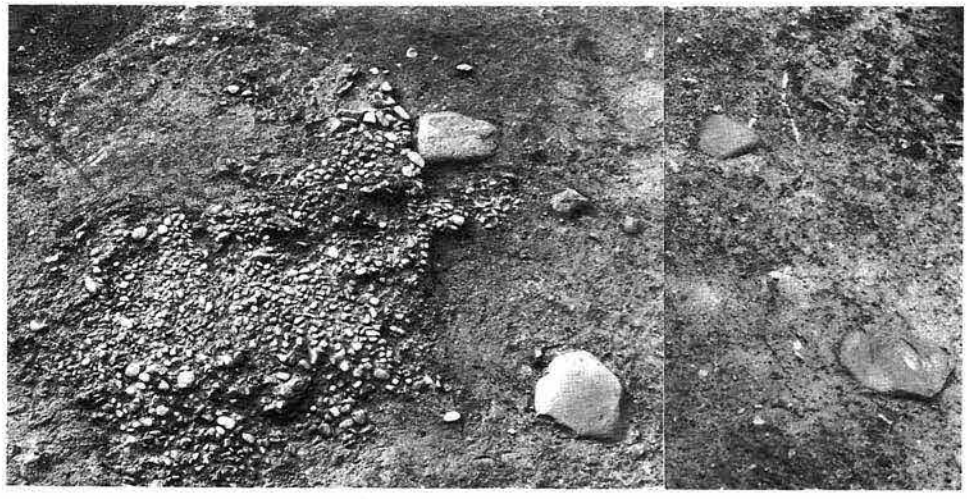


写真６　玉砂利遺構５と礎石

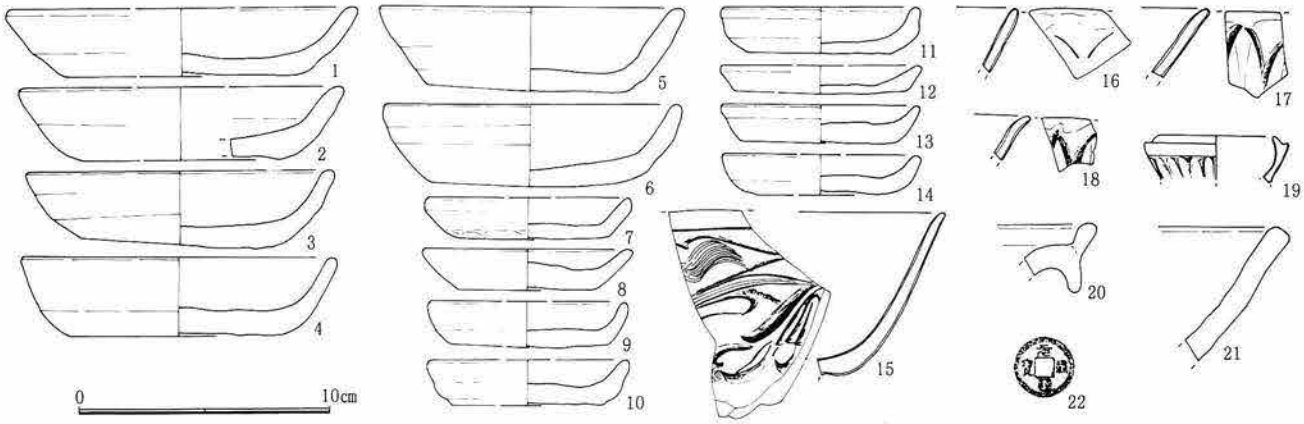


図43　玉砂利遺構５出土遺物

質土で、この柵列２の南北の軸方向はＮ－35°－Ｅである。

溝３出土遺物（図45）

１～14はロクロ成形のかわらけ。１～４は大皿、５～14は小皿。大皿の口径は13.2～11.8cm、径8.4～7.2cm、器高3.3～３cmを測る。胎土は橙色系にまとまり、粉質である。体部は丸味をもち、若干、開き気味に立ち上がる。口径、底径比の比率が大きくなりつつある。２～４は薄手化が顕著である。小皿の口径は8.4～7.6cm、底径7.0～4.8cm、器高1.8～1.5cmを測る。概ね、胎土は粉質で、橙色系、肌色系と両様である。口径、底径比の比率が小さい。５～７は器肉が厚く、８～12は若干器肉が薄手となる。15は山茶碗窯系捏鉢。胎土は灰色を呈し、長石を多く混入する。口縁部は、体部よりやや外反して立ち上がり、口唇端部は丸く収める。破片の内面全体に降灰している。

16は常滑窯の甕の口縁部。縁帯幅は1.3cmを測る。胎土は灰黒色を呈し、若干、長石を混入する。

溝５出土遺物（図46）

１～31はロクロ成形のかわらけ。ここ出土したかわらけの胎土は、橙色系、肌色系と両様であり、橙色系のものは赤茶色粒子、白針、砂粒を交え、器表はざらつく。肌色系は、白針、鉄分を含んだような赤色粒子を含み、粉質な精良土である。

１～12は大皿。13～31は小皿。大皿の口径は12.8～11.2cm、底径8.6～7.7cm、器高3.5～2.9cmを測る。口径が13cm近いものと、12～11cm間のものとに別れる。口径の縮小化が目立つ。器高はほぼ３cm以上と高い。胎土は概ね橙色系にまとまるが、２、10は肌色系である。小皿の口径は、8.8～7.8cm、底径6.6～5.2cm器高1.9～1.6cmを測る。器高が低く、皿状を呈する。

溝６出土遺物（図47）

１はロクロ成形のかわらけの大皿。復元された口径は13cm、底径9.8cm、器高2.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、赤色礫、白色礫、雲母を多く含み、微細な黒砂が多く含まれ、器表はざらつく。外体部下1/3に強い稜線が入る。

柵列１出土遺物（図48　１）

１はロクロ成形のかわらけの小皿。復元された口径は7.8cm、底径4.8cm、器高1.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、若干、赤色礫、白色礫、雲母を含み、微細な黒砂が多く含まれる。側壁はやや開き気味に立ち上がる。

柵列２出土遺物（図48　２～６）

２～５はロクロ成形のかわらけ。２は大皿、３～５小皿。２の復元された口径は12.2cm、底径7.4cm、器高3.2cmを測る。底部が小さく、器肉が薄く器高の高いタイプである。胎土は橙色を呈し、赤色礫、白針、雲母を含む。側壁は、やや開き気味に立ち上がる。内底部のなでは弱い。３～５の復元された口

径は8.6～８㎝、底径6.7～６㎝、器高1.7～1.4㎝を測る。胎土は肌色を呈し、若干、赤色礫、雲母、微細な黒砂を含む。浅い皿状である。

６は亀山の甕の胴部片。胎土は灰色を呈する。外体部には格子目叩き文が遺存する。

溝７（図49）

溝７は、調査区南側、Ｈ－17～18グリッドにまたがって、海抜14ｍ付近に検出された南北溝である。この溝の南側は、土壙と切り合い関係にあり、また北側は、先端部分で北側から西側に向を変えており、平面形はＪ字状を呈する。検出された掘方規模は、南北2.5ｍ、幅25～30㎝、深さは確認面より８㎝前後を測る浅い溝である。

この溝の覆土は、灰褐色粘質土で、土丹粒子、かわらけ細片、炭化物を含み、やや粘性がある。締まりは弱い。

この溝の南北の軸方向はＮ－25°－Ｅである。

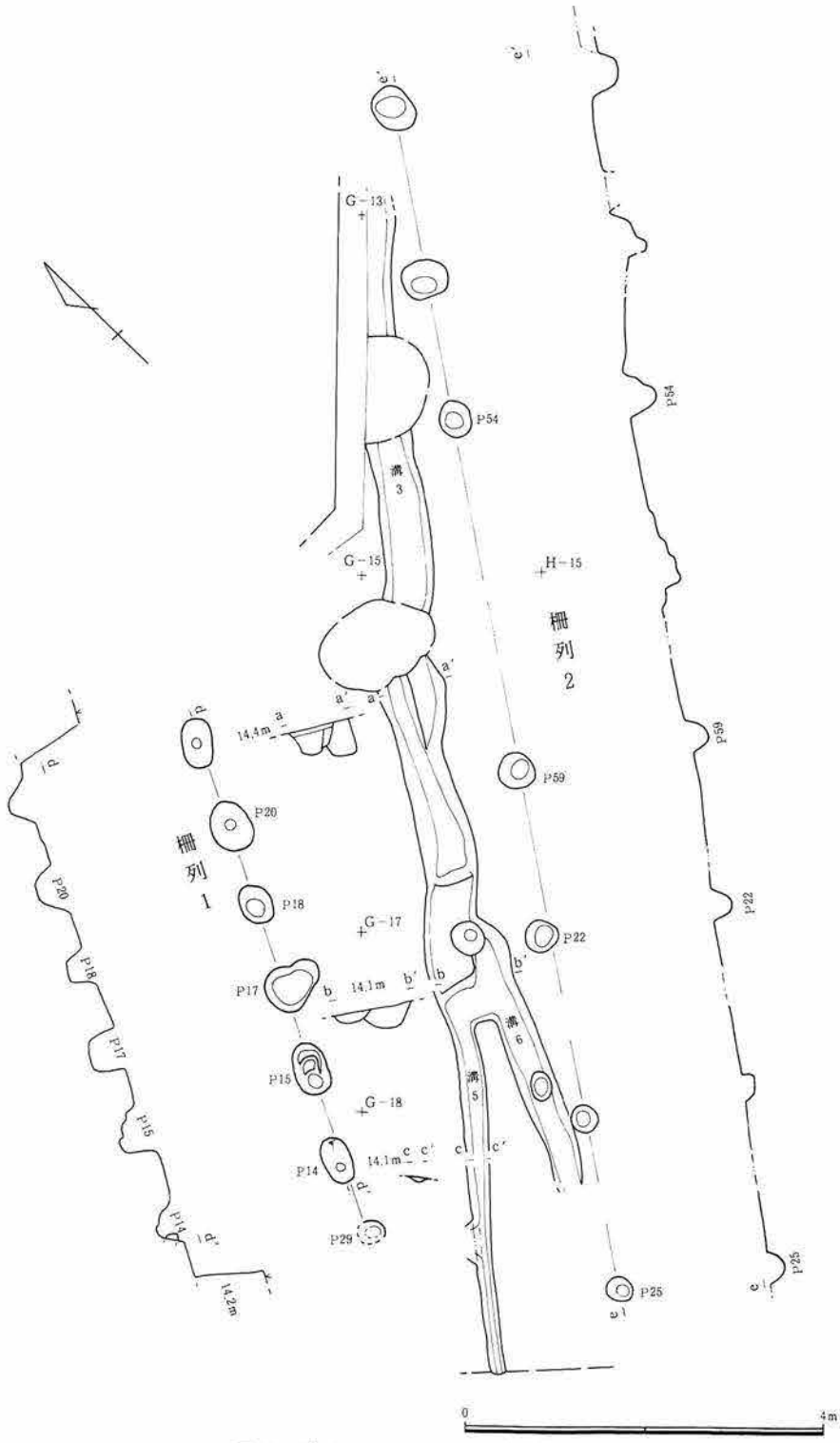


図44　溝３・５・６・７　柵列１・２

溝７出土遺物（図50）

１、２はロクロ成形のかわらけの大皿と小皿。共に、胎土は肌色を呈し、赤色粒子、雲母を含み、微細な黒砂が多く含まれ、器表はざらつく。

１の復元された口径は12.6㎝、底径7.8㎝、器高3.2㎝を測る。側壁は丸味をもって立ち上がる。２の復元された口径は7.3㎝、底径4.4㎝、器高1.7㎝を測る。

溝８（図51）

溝８は、調査区北側Ｈ－３～５グリッドにまたがって、海抜13.6ｍ付近に検出された南北に走る溝である。この溝の検出された遺構面には、強固な土丹版築が施されていた。

この溝は北側が、1面時の道の側溝に切られており、また南側は、土壙9と切り合い関係にある。検出された掘方規模は、南北4.2m、幅30～45cm、深さは確認面より30cm前後を測る。この溝の底部は、2段に掘られており、10cmの比高差をもって、中央部より南側に落ちる。断面形はU字型を呈し、側壁は真っすぐに立ち上がる。この溝の覆土は、灰褐色のやや砂質の強い粘質土で、土丹粒子が多く含まれており、締まりはない。

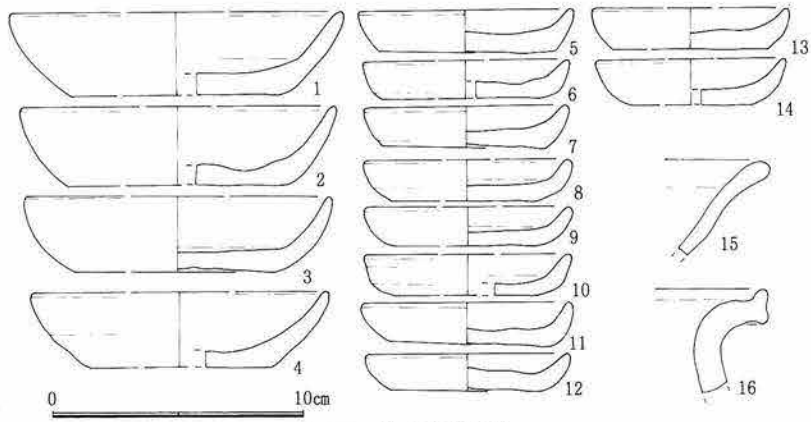


図45　溝3出土遺物

この溝の南北の軸方向はN－72°－Eである。

溝8出土遺物（図52）

1は平瓦。胎土は灰白色を呈しており、厚さは1.8cmを測る。凸面には縄目叩き文を遺存 する。

溝13（図53）

溝13は、調査区北壁際、H～J－2グリッドにかけて、海抜13.4m付近で検出された、東西に走る溝である。この溝の西側は、溝2に切られており、東側は、J－2グリッド杭付近で姿を消す。検出された掘方規模は、東西3.2m、幅70cm、深さは確認面より10～15cmを測る。この溝の底部は丸味をもって凹んでおり、側壁は大きく開く。

この溝の覆土は暗褐色粘質土で、炭化物、土丹粒子を含み、締まりはない。

この溝の東西の軸方向はN－140°－Eである。

土壙8・9・10（図54）

この3基の土壙群は、調査区北側の西壁際、G－5～7グリッドにかけて、海抜13.6m付近に検出された。土壙8と土壙9は切り合い関係をもって検出されており、この2基の土壙群のおよそ半分が、調査区外西にある。南側が土壙8、北側が土壙9である。この2基の土壙の検出された掘方規模は、東西1.3m、南北2.9m、深さは確認面より70～80cmを測る。土壙8、土壙9の底部は平担であり、土壙8の南壁は、なだらかに立ち上がる。土壙9の北壁は、平担な底部から、真っすぐ気味に立ち上がる。

土壙10は、土壙9の東側に位置しており、土壙9に西側を切られる。

土壙10の検出された掘方規模は、東西0.4m、

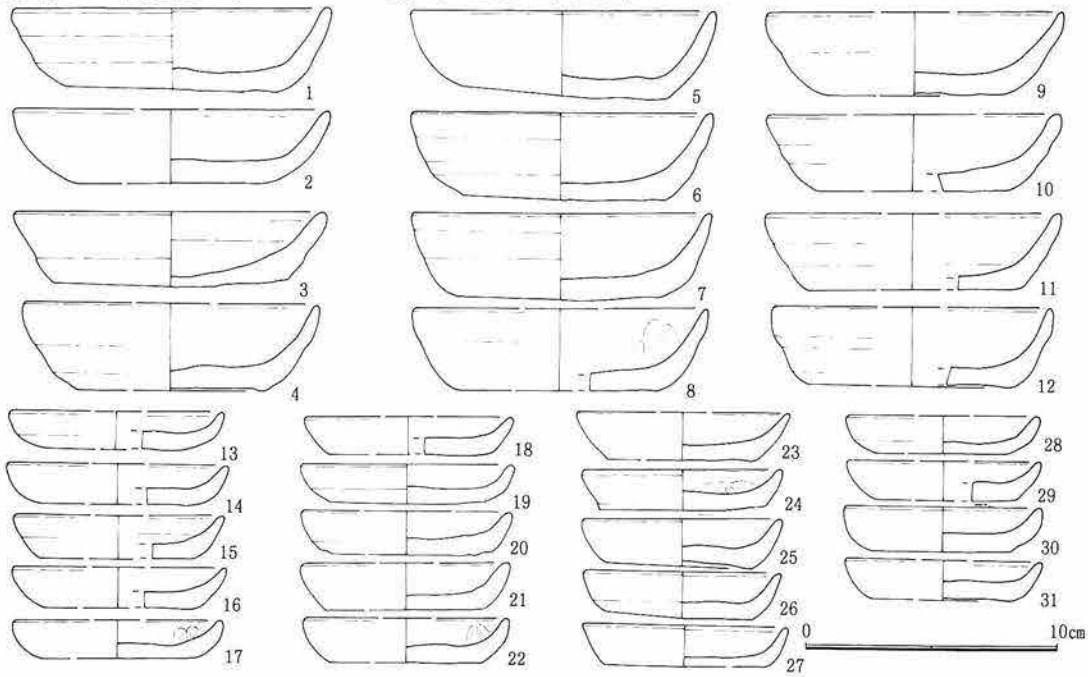


図46　溝5出土遺物

南北１ｍ、深さは確認面より20cm前後を測る。この土壙群の覆土は、暗褐色粘質土で、土丹粒子を多く含み、締まりはない。

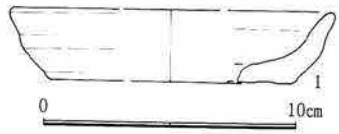


図47　溝6出土遺物

土壙19（図54）

土壙19は、調査区南側、Ｅ－16グリッド内、海抜13.7m付近に検出された。この土壙の北側は調査区外北にある。

この土壙の検出された掘方規模は東西0.8m、南北0.7m、深さは確認面より15cmを測る。底部は平坦で、側壁はやや開いて立ち上がる。

この土壙の覆土は、暗褐色粘質土で、若干の土丹粒子を含み、堅く締まる。

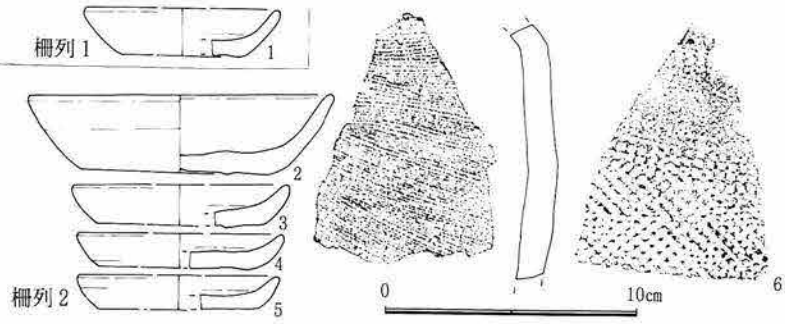


図48　柵列１・２出土遺物

土壙８出土遺物（図55　１～５）

１～３はロクロ成形のかわらけ。１は大皿。２、３は小皿。１の復元された口径は12.3cm、底径7.4cm、器高2.8cmを測る。胎土は橙色を呈し、赤色礫、白色礫、白針、雲母を含む。側壁は、やや開き気味に立ちあがり、側壁中央部の器肉は肥厚する。２、３の口径は８cm、7.5cm、底径6.2cm、６cm、器高1.4cm、1.2cmを測り、同様の皿状の器形を呈するが、２の方が一回り大きい。２の胎土は、橙色系で粉質、３の胎土は、肌色を呈し、微細な黒砂を含む。

４は山茶碗窯系捏鉢の口縁部の破片。胎土は灰色を呈し、長石を多く含む。口唇端部は若干凹む。

５は北宋銭。政和通宝。

土壙８・９出土遺物（図55　６）

６は手づくね成形のかわらけの小皿。復元された口径は9.8cm、器高1.4cmを測る。胎土は、白色味の肌色を呈し、赤色粒子、白針、雲母を含む。底部が平底状を呈する。体部内外共に、ススが濃く付着している。

土壙９出土遺物（図55　７～９）

７はロクロ成形のかわらけの大皿。口径は12.6cm、底径8.2cm器高2.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、赤色、白色礫、白針、若干の雲母を含む。側壁はやや開き気味に立ち上がる。８は常滑窯の壷の口縁部。復元された口径は19.6cmを測る。胎土は灰黒色を呈し、長石、砂粒を含む。縁帯幅は1.8cm、口縁部は玉縁状となる。

９は渥美窯の片口碗。復元された口径は25.6cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、長石、砂粒を含む軟質の胎土である。

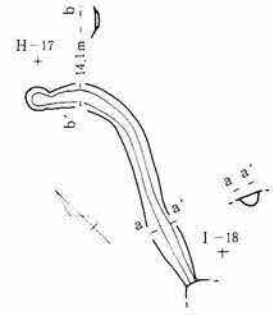


図49　溝７

２Ｃ面の検出遺構と出土遺物（附図４）

玉砂利遺構６・７（図56）

この遺構群は、調査区中央部東壁際、Ｈ～Ｉ－８～10グリッド内で、海抜13.6～13.7m付近に検出された。この遺構群は共に、東側が調査区外東へと続く様相を呈している。敷かれていた玉石は、10～50mm大で、密度は希薄であったが、３～10cmの厚さをもって、比較的広範囲に渡って広がっていた。

また、玉石にまじって、土丹塊、かわらけ片の混入も認められた。

玉砂利遺構６は、Ｈ～Ｉ－９～10グリッド内において、海抜13.7m付近に検出された。検出された玉砂利敷の範囲は東西2.3m、南北３ｍを測る。

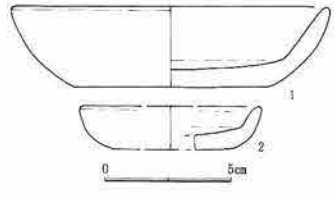


図50　溝７出土遺物

ほぼ、平坦に敷かれていたが、中央部分が、若干高めである。調査区東壁際付近に確認されたものが、密集しており、遺存状態が良好であった。しかし、概ね、密集せず、粗く散在した様相を呈しており、原状は留めていない。

玉砂利遺構７は、Ｈ～Ｉ－７グリッド内において、海抜13.6m付近に検出された。検出された玉砂利敷の範囲は、東西2.2m、南北1.5mを測る。密度には濃淡があり、上層からの撹乱を受けた様相である。

また、この遺構の北側からは、かわらけを粉砕して築き固めた地業面を検出している。検出された地業面の範囲は、東西２m、南北1.2mである。明るい茶褐色砂質土層上に、粉砕したかわらけを、固く築固めて敷き詰めており、下層には玉石が多く含まれ、玉砂利遺構７を覆う様相も呈している。

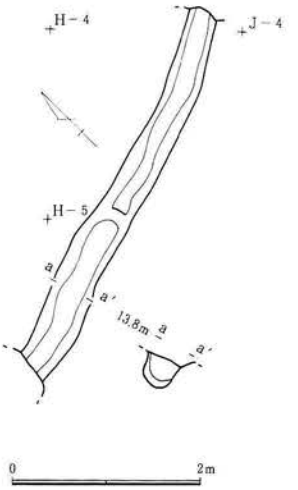


図51　溝８

玉砂利遺構６出土遺物（図57　１～10）

１～４はかわらけ。１は手づくね成形の大皿。２～４はロクロ成形の小皿。１の復元された口径は12.9cm、器高2.8cmを測る。胎土は橙色系を呈し、黒色粒子を多く混入している。小皿の口径は8.4～7.5cm、底径6.2～5.6cm、器高1.5～1.3cmを測る。２、４の胎土は橙色系を呈し、微細な砂粒を含み、器表はざらつく。３の胎土は灰色系を呈し、赤色粒子、若干の白色礫、雲母が混入しており、粉質な胎土である。

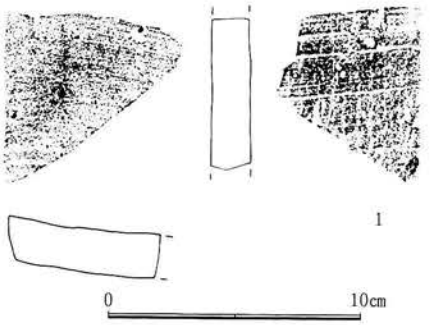


図52　溝８出土遺物

５は青磁、櫛掻文碗の口縁部の破片。素地は灰白色を呈し、釉調は緑灰色である。失透しており、艶、光沢はない。

６は山茶碗。復元された口径は15.2cm、底径6.8cm、器高5.4cmを測る。胎土は灰味の肌色を呈し、若干の長石を交える。体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。高台は貼付け高台であり、畳付には籾痕が認められる。

７は渥美窯の甕の口縁部の破片。胎土は淡灰色を呈し、白色礫を多く混入し、軟質である。

８は白かわらけ。口縁部の破片。胎土は灰味白色を呈し、若干、黒色粒子を含み、粗い。瓦器質黒縁皿をまねたような様相である。

９は平瓦。厚さは2.4cmを測る。胎土は灰味白色、長石を若干交え、粉質の精良土である。凸面には縄目叩き文、凹面には離砂の痕跡が認められる。

10は北宋銭。聖宋元宝。

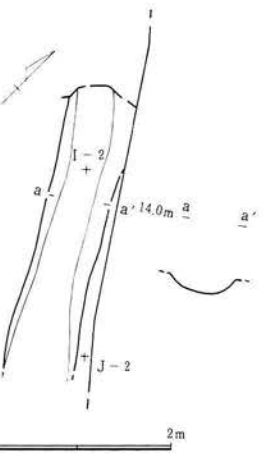


図53　溝13

玉砂利遺構７出土遺物（図57　11～38）

11～35はロクロ成形のかわらけ。11～14は大皿。15～35は小皿。大皿の口径は13～11.8cm、底径8.2～6.7cm、器高3.4～3.1cmを測る。胎土は橙色系で、赤色粒子を含み、粉質が強い。13は肌色系で、赤色粒子を交え、焼き締まり、軽量感がある。小皿の口径は８cm前後、底径6.7～5.4cm器高1.7～1.3cmを測る。胎土は淡橙色～肌色系を呈しており、肌色系の胎土には赤色粒子が多く混入し、器表はざらつ

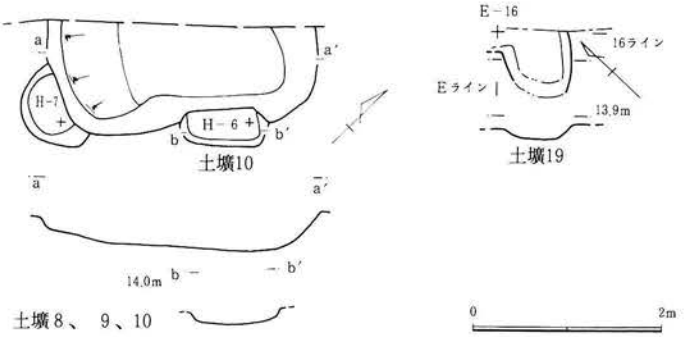


図54　溝８・９・10・11・19

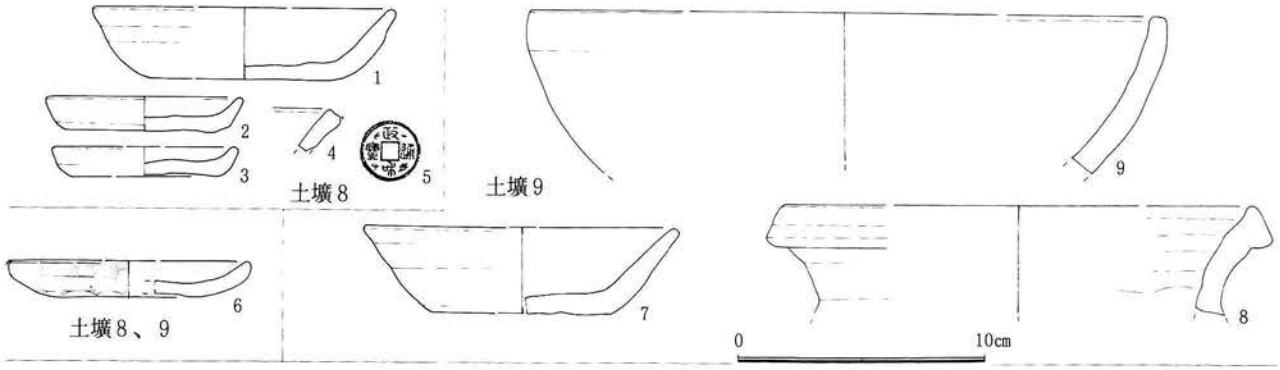


図55　土壙８・8･9・９出土遺物

く。淡橙色系は、赤色粒子が少なく、器表は滑らかである。総じて内底面のなでが弱い。18、23は薄手であり、堅く焼き締まる。24、31は口縁下の横ナデが強く窪む。21、26は直口気味である。

36～39は青磁。36、37は蓮弁文碗の口縁部。36の復元された口径は８㎝を測る。素地は白色を呈し、微細な黒色粒子を混入する。釉調は灰味緑青色、若干失透するが、光沢、艶共に良い。口唇端部は露胎となり、体部は内傾して真っすぐ立ち上がる。外体部には幅の狭い蓮弁を片彫りする。

37は釉調が青緑色を呈する。38は酒会壷、あるいは小壷の蓋。復元された口径は９㎝を測る。素地は灰白色、微細な黒色粒子が混入しており、粘性がある。釉調は緑青色、肌荒れしており、光沢はない。器表には気泡が多く、失透する。口縁端部、及びかえりは露胎となる。39は双魚文鉢の底部。復元された底径は６㎝を測る。胎土は灰味白色を呈し、釉調は青緑色、透明度、光沢、艶、すべてにわたり良好である。高台畳付きは、露胎となる。器表の内外は貫入する。

道３（図58）

この遺構は、調査区中央部、Ｇ～Ｈ－９グリッド内において、海抜13.65ｍ付近に検出された東西に走る道である。玉砂利遺構６の下に、検出されたものである。この道が検出された遺構面は、強固な土丹地業がなされていた。

この道は、浅い凹状を呈しており、調査区外西、及び東にに延びてゆく様相を呈するが、東側は、後世の削平を受けている。検出された道の範囲は、東西４ｍ、上端幅0.8～1.3ｍ、下端幅は0.2～0.4㎝、深さは確認面より10㎝前後を測る。この道は、東に向かうに従い、その溝幅を狭めつつ東方に延びて行く。道路と言うよりは、通路状の様相を呈する。

この道の東西の軸方向はＮ－120°－Ｅである。

玉砂利遺構８・かわらけ溜り３（図59）

この遺構群は調査区南側、Ｆ～Ｈ－15～17グリッド内において、海抜13.8ｍ付近に検出された。溝３に切られており、溝３の西側に玉砂利遺構８、東側にかわらけ溜り３が広がる。

玉砂利遺構８は、Ｆ～Ｇ－15～16グリッド内に検出された。後世の削平を受けており、原状の様相は留めていない。検出された玉砂利敷きの範囲は、東西２ｍ、南北２ｍを測る。玉砂利は、灰褐色粘質土層上に敷かれており、玉砂利の遺存状態により、若干の高低差はあるが、ほぼ、均一に、平坦に敷かれていた様相を留める。また、この遺構を構成する玉石は、４～100㎜大の大小さまざまの大きさのものが使用されており、８～10㎝の厚さがある。この遺構は、比較的、濃密に敷かれた玉石が遺存しており、良好な化粧状態が確認された。

かわらけ溜り３はＧ～Ｈ－14～16グリッド内に検出された。玉砂利遺構８の東側の、若干低い場所に、平面的な広がりをもって検出された。検出された範囲は、東西1.8ｍ、南北5.5ｍを測る。この遺構の厚さは８～10㎝、構成するかわらけは、１枚のみ手づくね成形の小皿が検出されたが、それ以外はロクロ

成形のかわらけであり、大皿116枚、小皿160枚が検出された。また、このかわらけ溜りの中には、炭化物が多く混入しており、若干の土丹塊も含まれていた。

かわらけ溜り３出土遺物（図60～63）

図60～61はロクロ成形のかわらけの大皿。図62は小皿、１は手づくね成形、２以下はロクロ成形である。大皿は口径、底径比が小さいが、口径の縮小化、器肉の薄手化が顕著である。胎土は、概ね、淡橙色～肌色系であり、胎土には赤色粒子、白色礫、微細な黒砂を含み、器表はざらつく。図61は、主に橙色系で薄手の１群である。胎土には、同様なものが混入するが、雲母の混入が目立つ。図60－４は底部に比し、体部を薄く作り出している。７は底径、口径比が小さく大型であるが、胎土は粉質であり、器肉がやや薄くなる。図60－11、51、53は底部がすぼまり、口縁部は直口するタイプである。図60－35は底部はすぼまりるが、口縁部は開いてゆく。図60－22、30、61、図61－18は外体部中央のなでが強く、明確な稜線が入る。

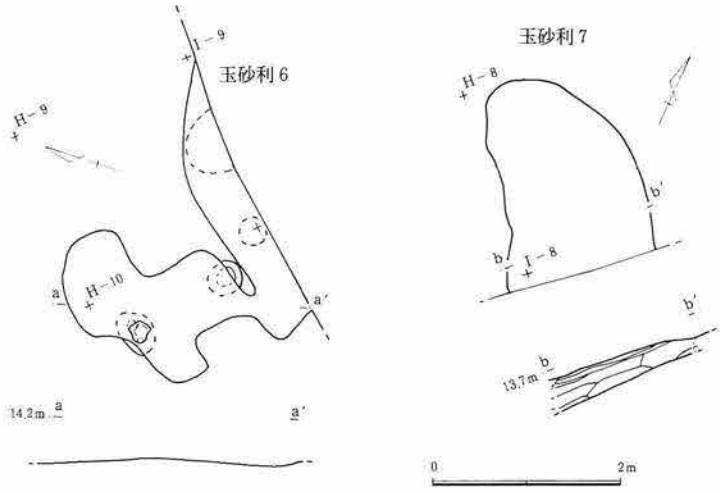


図56　玉砂利遺構６・７

写真７　玉砂利遺構６

図60－44、図61－６、34は体部の立ち上がり際の器肉が薄くなる。図60－31、59、図61－15、26、55は底部を薄く作り出して、体部を立ち上げている。図60－10、13、33、40、図61－７、29、32は２段のなでが強い。図61－41は底部から大きく体部を開いて作り出している。図61－31は口唇部がかなり肥厚する。図61－47は底部を厚く小さく作り出し、体部を大きく開く。図61－26、28、53は外体部の口唇下の横ナデが強く窪む。37はゆがみが顕著である。図61－５、11は、外底部に比し、内底面を広く作り出している。図61－24は口径に比して器高が低い皿状である。図61－49は薄手深鉢タイプである。

図62、１～160はかわらけの小皿。１は手づくね成形。胎土は肌色系を呈し、胎土には白針、雲母、赤色粒子、微砂を含む精良土である。器肉は２～３㎜と薄く、焼き締まる。２以下は、ロクロ成形である。胎土は大皿と同様なものである。比較的器肉が厚く、側面観が角張るもの、器肉が薄く、体部が開き気味に立ち上がるものがある。総じて内底部の横ナデは弱い。２は底部の作りが雑であるため、底部が高台状を呈し、他と様相が異なる。３、124は外体部のなでが強く、口唇端部は丸い。13は内体部のなでが強い。43は内面を引き上げており、45、77、112、123は口唇端部が細く引かれる様相を示す。61は微細な黒砂を多く含み砂質が顕著である。67は腰がすぼまり、直口気味である。54、104はかなりゆがみがあり、平面形は楕円形を呈する。134は口径、底径比が小さく、器肉も厚く、下層からの混入品の可能性がある。75は灯明皿。

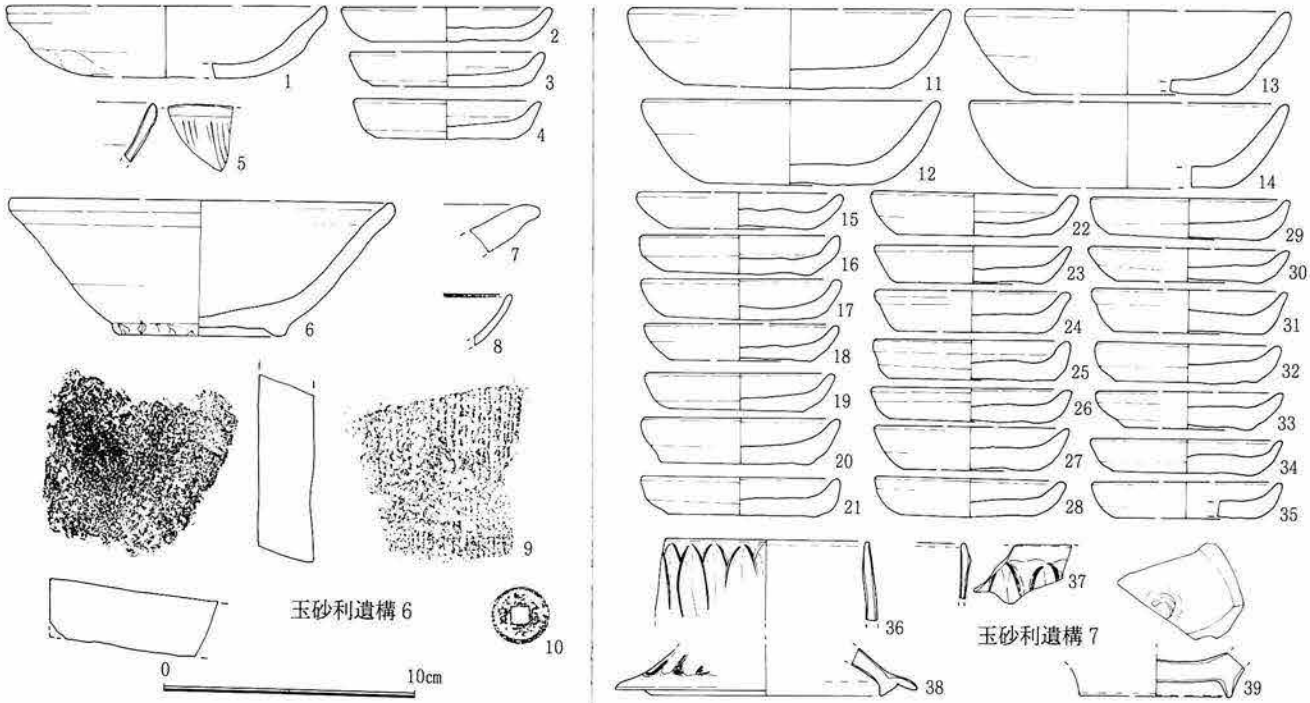


図57　玉砂利遺構６・７出土遺物

図63、１～４は青磁。１、２は蓮弁文碗。１の復元された口径は16.4cmを測る。素地は灰白色を呈し、黒色の微細粒子を混入し、粘性があり精緻である。釉調は、灰味青緑色、透明度は良いが、艶、光沢は無い。器表は若干貫入する。２は碗の底部。底径3.3cmを測る。素地は褐灰色を呈し、釉調は朽葉色である。光沢、艶共に良いが、釉中に気泡が入り、やや失透気味である。高台畳付は露胎である。器表の貫入は細かく、密に入る。３は折縁鉢の口縁部の破片。素地は灰白色を呈し、黒色の微細粒子を、若干混入し精緻である。釉調は青緑色を呈し、光沢、艶共に良いが、やや失透する。４は碗の底部。素地は灰白色を呈し、釉調は青緑色、透明度は良い。高台畳付、及び高台内は露胎である。内底面に草花文を配する。

５、６は産地不明品。５は耳付きの壷の肩部、６は底部付近。共に、胎土は灰白色を呈し、㎜大～微細な長石が混入する。外体部には連続スタンプ文様が巡る。５の内面頸部は指頭による調整が施される。常滑窯の製品（？）。

７は常滑窯の甕の口縁部。縁帯幅2.3cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、長石、若干の小石が混入する。内外口縁部、及び器表に降灰する。

２Ｂ・Ｃ面出土遺物（図64～66）

２Ｂ・２Ｃ面は、資料整理時に確認できた面であり、調査時点での区別はできなっかた面である。時期差もさほど無く，また、１面時の撹乱を受けて、２Ａ面が確認できず、１面下に、この面が検出された地域においては、遺物の出土状況に関しては２Ａ面と大差なく、天地がえしによる１面の混入がある。図64、１～65はかわらけ。１～15はロクロ成形の大皿。16～63は小皿、16、17は手づくね成形、18～63はロクロ成形。２、12、52～56、58～63は上層の混入品である。手づくね成形の小皿（16、17）の胎土は、淡橙色を呈し、雲母、白針が混入する。共に、２次焼成を受けている。ロクロ成形のかわらけの胎土は、橙色系、肌色系両様であり、概ね、粉質であり、白針、赤色粒子、若干の白礫を含む。大皿の口径は13cmまでに収まり、小皿は8.5～８cm前後である。５、15は体部の２段のなでが顕著である。７、８は底部の中心部が薄い作りである。29は砂質が強く、口径、底径比の小さいもので、異質である。46は胎土が水簸されたような精良土である。

64は手づくねの内折れかわらけ。復元された口径は8.8cm、器高1.1cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微細砂を若干含むが粉質である。焼成は良好で、二次焼成を受けた痕跡を留めている。

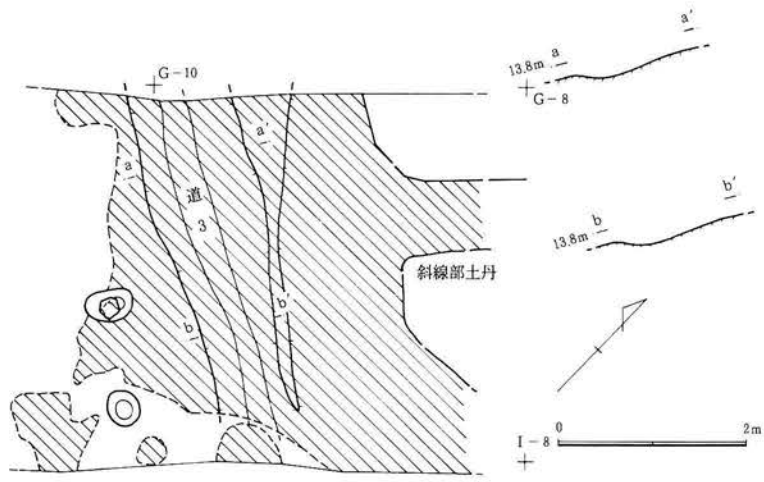


図58　道3

65～71は磁器。65～70は青磁、71白磁。65は劃花文碗の口縁部。素地は灰色を呈し、釉調は緑灰色であり、光沢、艶、透明度すべて良い。内体部に文様を配する。若干、器表に貫入が観察される。66は無文の碗。復元された底径は5.2cmを測る。素地は灰色を呈し、釉調は青灰色、光沢、艶、透明度すべて良い。内底面に傷が多数認められる。高台内、及び高台畳付は露胎である。67は折縁鉢の口縁部の破片。素地は灰白色を呈し、釉調は青緑色、やや失透するが、光沢、艶は良い。68は蓮弁文碗の底部。復元された底径は4cmを測る。素地は灰色を呈し、釉調は青緑灰色、光沢、艶、透明度すべて良い。69、70は内面に蓮弁を配する皿。共に素地は灰白色を呈し、再火を受けており光沢、艶はない。釉中に気泡が多く失透し、器表は細かく貫入する。69の復元された口径は29.6cm、底径17.2cm、器高6.7cmを測る。70は口径25cmが復元された。69の釉調は、青緑色、70は緑青色である。

71は皿の口縁部。口唇端部は露胎である。素地は白色、緻密である。釉調は灰白色、光沢、艶、透明度すべて良い。内面には雷文、花文を配する。

72は緑釉の盤。復元された口径は24cm、底径19.2cm、器高6.3cmを測る。素地は黄土色を呈し、微石粒を多く含む。釉調は明るい緑色を呈し、随所に銀化がみられるが、光沢は良い。内底面には印刻の文様を施す。外底部は露胎である。

図65、1～3は瀬戸窯の灰釉製品。1は鉢の口縁部の破片。胎土は灰色を呈し、混入物がほとんど無く、緻密・粘性がある。2は卸皿の口縁部の破片。胎土は灰色で、ざっくりしている。釉調は灰味緑色を呈する。3は縁釉皿。復元された口径は12.8cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、緻密さに欠け粗い。釉調は灰味緑色を呈する。

4～7は山茶碗。ここで出土した山茶碗の胎土は、灰色～灰褐色を呈し、若干の長石を含み、ざっくりと粗い。高台は貼付けてあり、畳付には籾痕を遺存する。4の復元された口径は15.6cm、底径6.6cm、器高5.9cmを測る。内底面の横ナデの調整は雑である。体部を外反しながら、真っすぐに立ち上げる。口唇端部は端反となり、断面形は三角形である。7も同様な形態である。5は口唇端部が凹む。6の復元された底径は7cm、7の復元された口径は15cmである。

8～17は山茶碗窯系捏鉢。8～15は口縁部。16、17は底部。復元された口径は28.4～21.6cm、高台径14.4cmを測る。概ね、胎土は灰色～暗灰色を呈し、長石が混入し、やや硬質である。10の胎土は粉質な精良土で、11は硬質で、長石の混物が多い。口縁部の形態は、概ね丸く収まり、10、11は角張り、9、10、12は凹が巡る。底部は貼り付高台で、高台高2cm前後と高い。

18～22は常滑窯の製品。18～21は甕、22は鉢。概ね、胎土は黒灰色～灰色を呈し、小石を若干含む程度である。18、20、22はキメ細かい精良土である。甕の縁帯幅1.3～0.8cmを測る。鉢の口唇端部は薄く

図59　かわらけ溜り　玉砂利遺構8

内向する。

23、24は手焙り。23は瓦質、24は土器質。23の胎土は、灰白色を呈する粉質な精良土である。器表は磨かれ、黒色処理を施す。突帯を巡らし、その上に連続スタンプ文様を施す。24の復元された口径は44㎝、底径30.4㎝、器高8.5㎝を測る。胎土は灰橙色で、砂粒を多く含む。外体部は、へら、ハケなでの調整、内体部は、なでによる調整である。口唇部は焦げて炭化する。

25、26は白かわらけ。 胎土は共に、肌色を呈する。器肉は、25は５㎜と厚く、26は３㎜と薄い。25の口唇部は角張る。

27は円板。かわらけの底部の転用。直径７㎝厚さ７㎜である。

図66、１～４は瓦。１は丸瓦、２～４は平瓦。１は厚さ２㎝を測る。胎土は灰色を呈し、若干、白色粒子を含む粉質土である。凸面に縄目叩き文の痕跡を、凹面に布目の圧痕を残す。２は橙色を呈するかわらけ質の胎土である。凸面は非常に滑らかである。凹面には布目痕を遺存する。厚さは２㎝を測る。３は、厚さ2.2㎝を測る。石質で、灰色を呈する胎土である。胎土には、白色粒子が若干含まれるが、混入物があまりない。凸面には縄目叩き文、また、砂を多く付着する。４の胎土も３と同様であるが若干軟質である。凸面両端は縄目叩き文、及び縦方向のなでを施す。厚さは２.３㎝を測る。

５、６は鉄製品。５は釘、６は刀子。

７は不明銅製品。半月型を呈する。遺存部分は1.8×4.5×0.2を測る。

８は北宋銭。開元通宝。

９は砥石。鳴滝産、仕上げ砥。

10は滑石鍋。復元された口径は28㎝、鍔径30㎝を測る。器表は２ミリ前後の丸のみの調整痕が観察される。

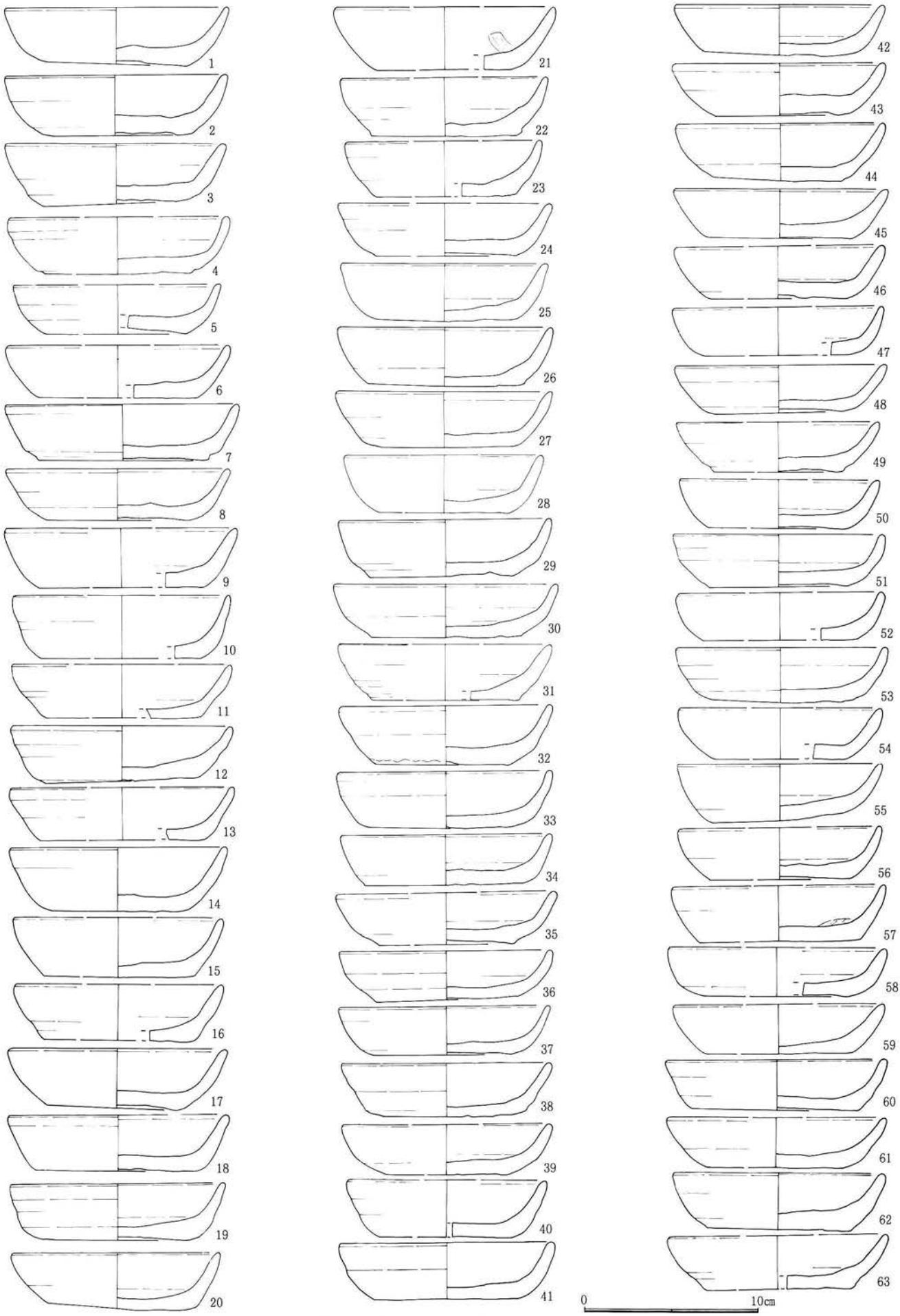


図60　かわらけ溜り３出土遺物（１）

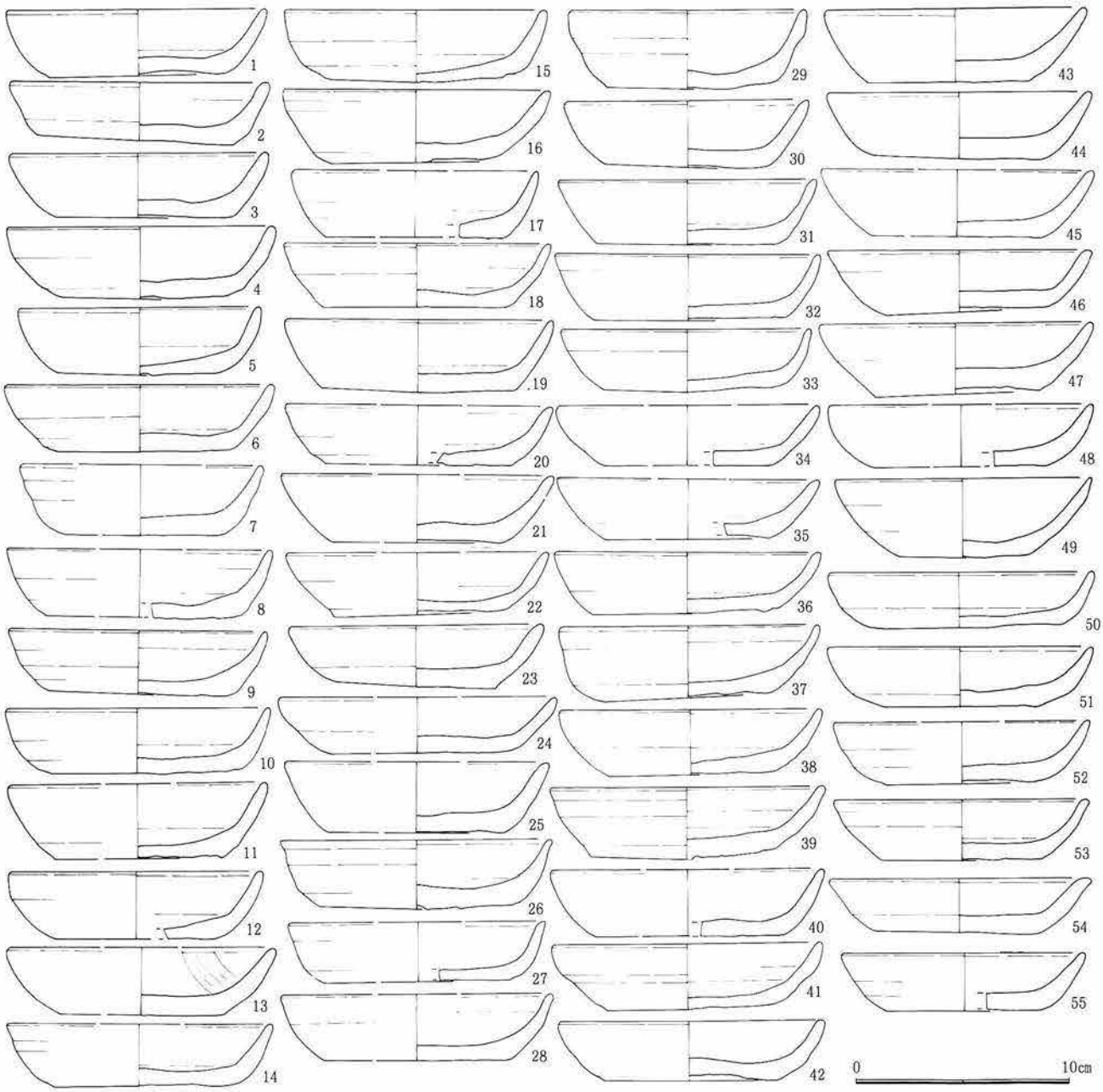


図61　かわらけ溜り３出土遺物（２）

（３）３面の遺構と遺物（附図５）

中世の地山である、黒褐色粘質土層上に、検出された遺構群である。海抜は、北側で13.3m、南側で13.7mとなり、南側が若干高くなっている。遺構面は、本遺跡地北側を西流する、滑川方向に傾斜している。この遺構面上には、かなりの広範囲にわったて焦土が広がっており、火災の痕跡を留めていた。また、この遺構面からは、数度にわたり、作り替えられた掘立柱建物の痕跡、溝、井戸等の、かなり密集した遺構群が検出された。出土した遺物は、かわらけを主体としたものであり、おおよそ13世紀前半期にまでに属するものであったが、若干、鎌倉時代初期のものも含まれていた。

溝11（図67）

溝11は、調査区中央部、G－８～11グリッド間の、長きに渡って、調査区を南北に貫いて走る溝で、海抜13.5m付近に検出された。南北両端は撹乱を受けているため、その全容は握めていない。検出された掘方規模は、南北6.4m、幅1.1m、深さは確認面より30～40cmを測り、南側から北側に緩く傾斜している。断面形はU字型を呈しており、底部の中央部分が若干窪み、側壁は、やや開き気味に立ち上がる。

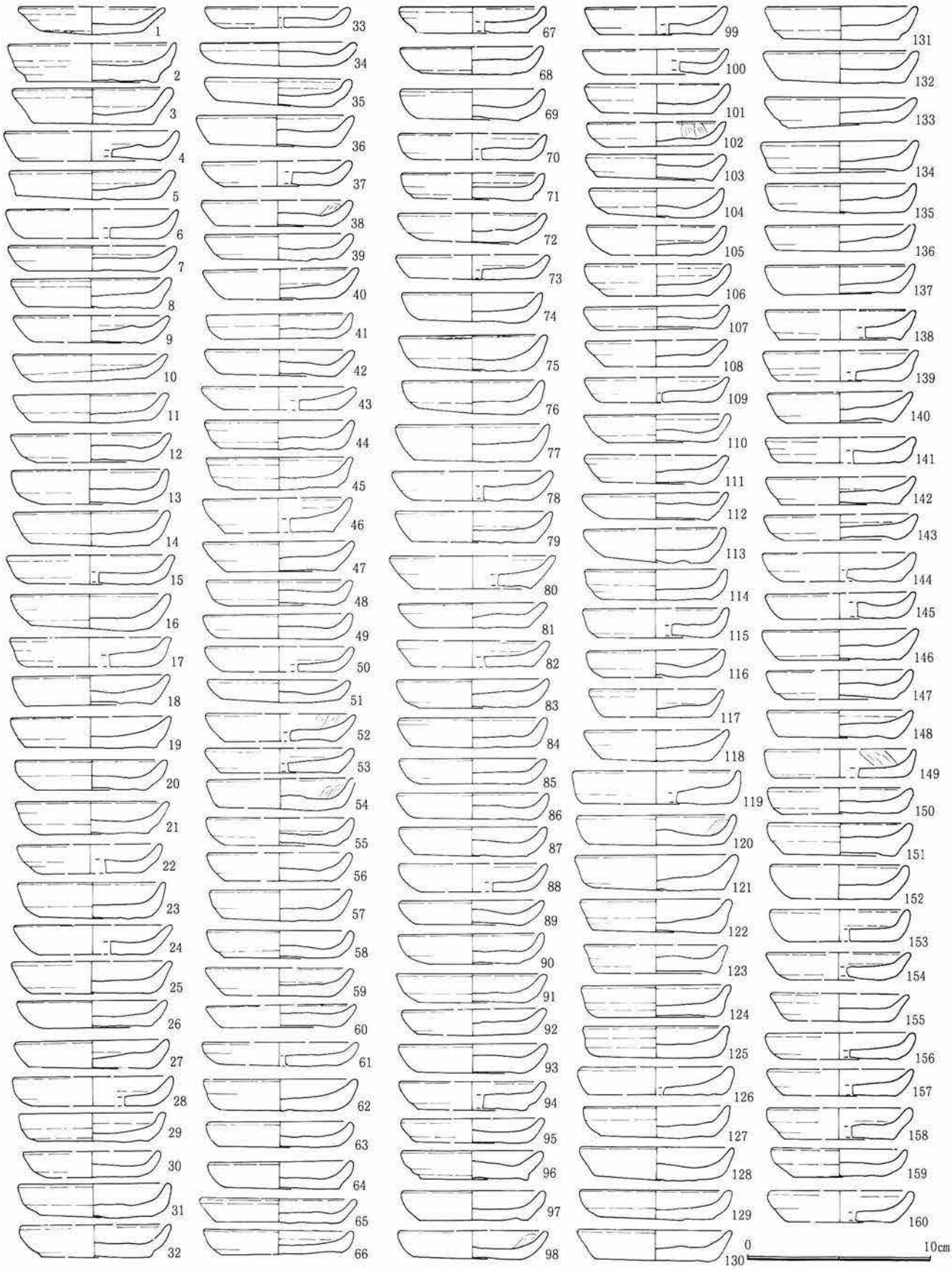


図62　かわらけ溜り３出土遺物（３）

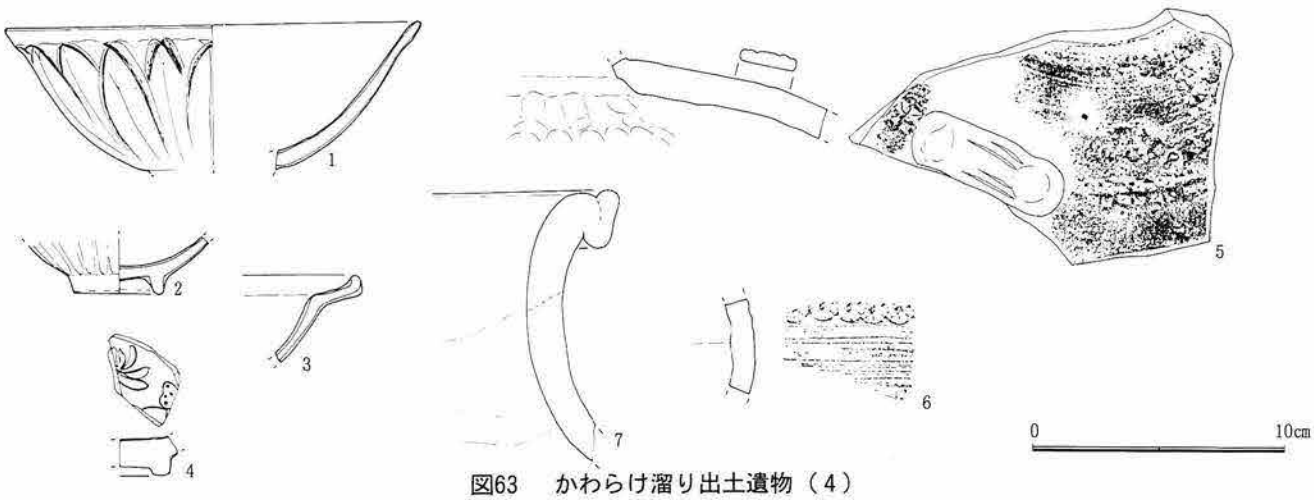


図63　かわらけ溜り出土遺物（4）

この溝の覆土は暗茶褐色粘質土で、おおよそ3層に別れる。全体に土丹粒子、かわらけ細片を含み、中層付近には、炭化物が層状に混入している。比較的締まった覆土である。

この溝の南北の軸方向は、N－39°－Eである。

溝11出土遺物（図68）

この溝を検出した地点は、かなり撹乱されており、天地返しが激しく、遺物もかなり上層の混入が認められたさた。

1～11はかわらけ。1、2はロクロ成形の大皿、9～11はロクロ成形の小皿で、これらは1面の時期の混入品である。いわゆる、側面観逆台形を呈する、体部が外反して、真っすぐに立ち上がるり、器高が高い一群である。胎土は、概ね、橙色系を呈する粉質土である。3～6は手づくね成形の小皿。概ね、焼成の良好な、堅く焼き締まったものであり、器肉の薄く、体部に稜線を残さないものである。4は、体部と底部との間に段差を有し、焼き締まらず、粉質の胎土である。口径10～8.8cm、器高2.3～1.5cmを測る。7、8はロクロ成形の小皿。7は口径、底径比の小さい、器肉のぼってりしたタイプのものである。8は7を全体的に縮小化したタイプである。胎土には微細砂が多含まれ、器表はざらつく。4、7は灯明皿。

12、13は青磁の碗の口縁部の破片。12は櫛掻文、素地は灰白色を呈し、釉調は黄味灰色である。光沢、艶、透明度すべて良い。13は蓮弁文、素地は灰白色を呈し、釉調は緑味灰色である。艶はあるが、失透している。

14は瀬戸窯の鉄釉の天目茶腕。復元された口径は14cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、白色粒子を若干含み、やや粘性をもつ。体部を外反しながら立ち上げ、口唇端部の器肉を薄くして、直口させる。

1面時の混入品である。

15は平瓦。厚さ2cmを測る。胎土は灰色を呈し、白針、金雲母、若干の白色粒子が混入し、やや粘性を持った、軟質の精良土である。凸面に細い縄目叩き文を遺存する。

16は鉄製品、釘。

17は砥石。上野産、中砥。

道2（図69）

道2は、調査区中央部、H－16グリッド内において、海抜13.5m付近に検出された側溝を伴う道である。この道は東西方向に走り、東側、西側は、共に調査区外西、及び東に続いて行く様相を呈している。

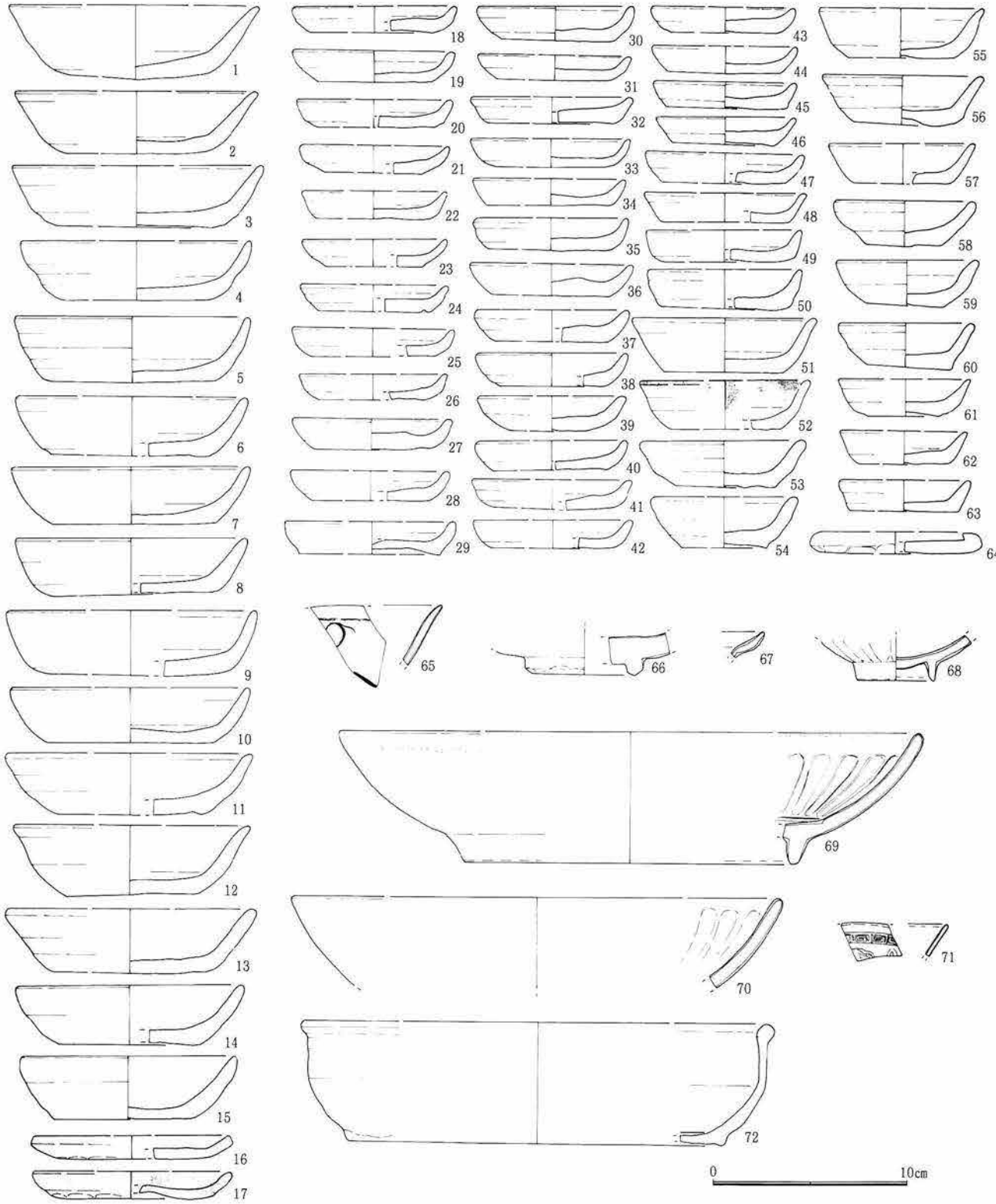


図64　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（１）

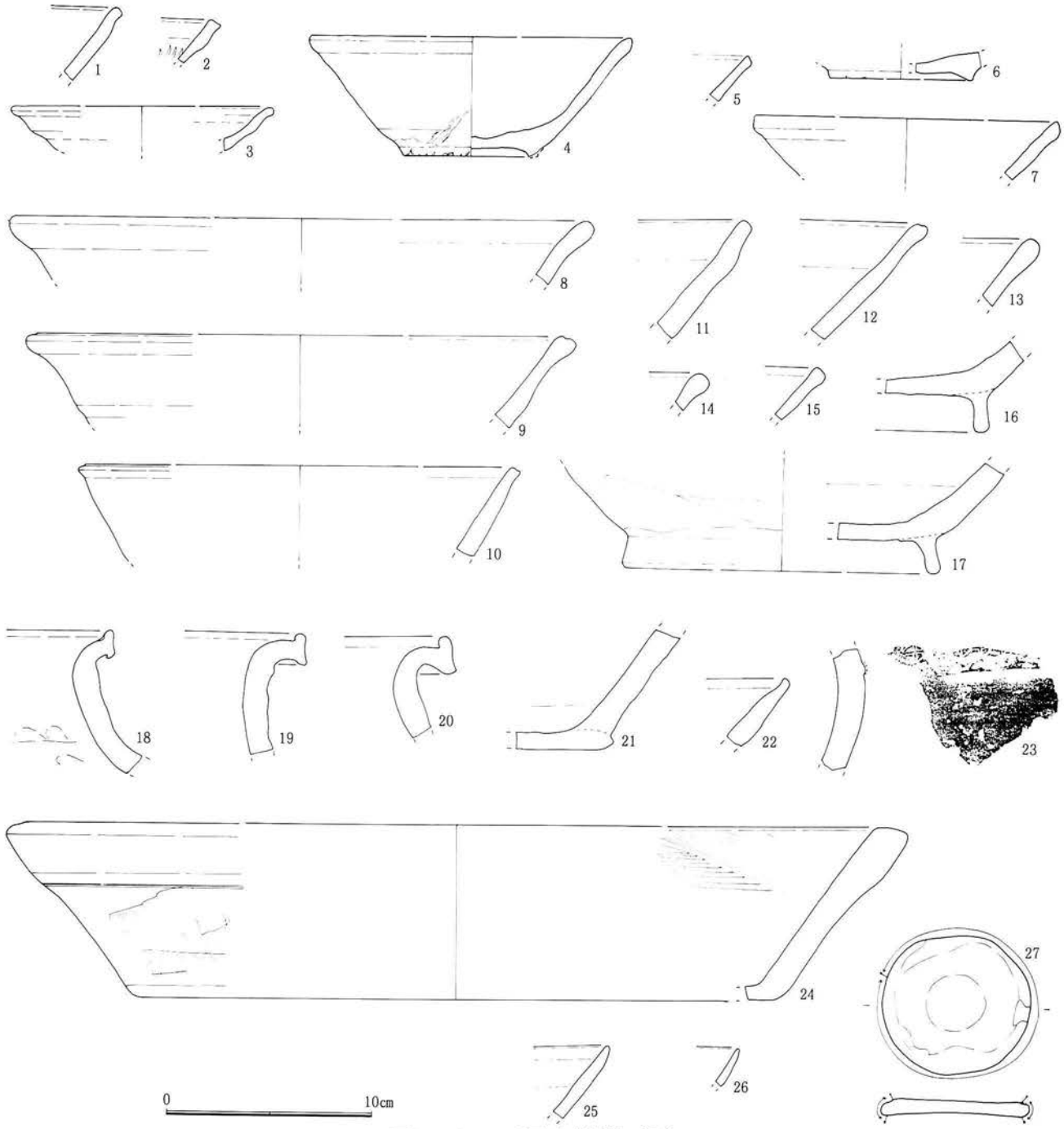


図65　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（２）

検出された道の範囲は、東西３ｍ、道幅1.4～1.1ｍを測る。この道は土丹を築き固めて舗装しており、縁石には、40㎝四方大の、大型の土丹塊を配していた。調査区内では、９個の縁石が確認された。内、１個は正位置からはずれ、側溝内に転がり出ていた。また、道の嵩上げ、または、舗装面上の張り増し等の、改修工事の痕跡は確認されなかった。側溝は北側のものが検出された。掘方規模は、幅90㎝、深さは確認面より30㎝を測る。

この溝の断面形は、開いたＵ字型を呈しており、側溝の底部は、中央部分が窪み、溝の側壁は開いて立ち上がる。また、底部は、東側が高く、東側から西側に流れて行く様相を示している。

この溝の覆土は暗茶褐色粘質土で、全体に土丹粒子、炭化物を多量に含み、砂質が強い。締まりは極めて悪い。

これらの遺構群の東西の軸方向はＮ－55°－Ｗである。

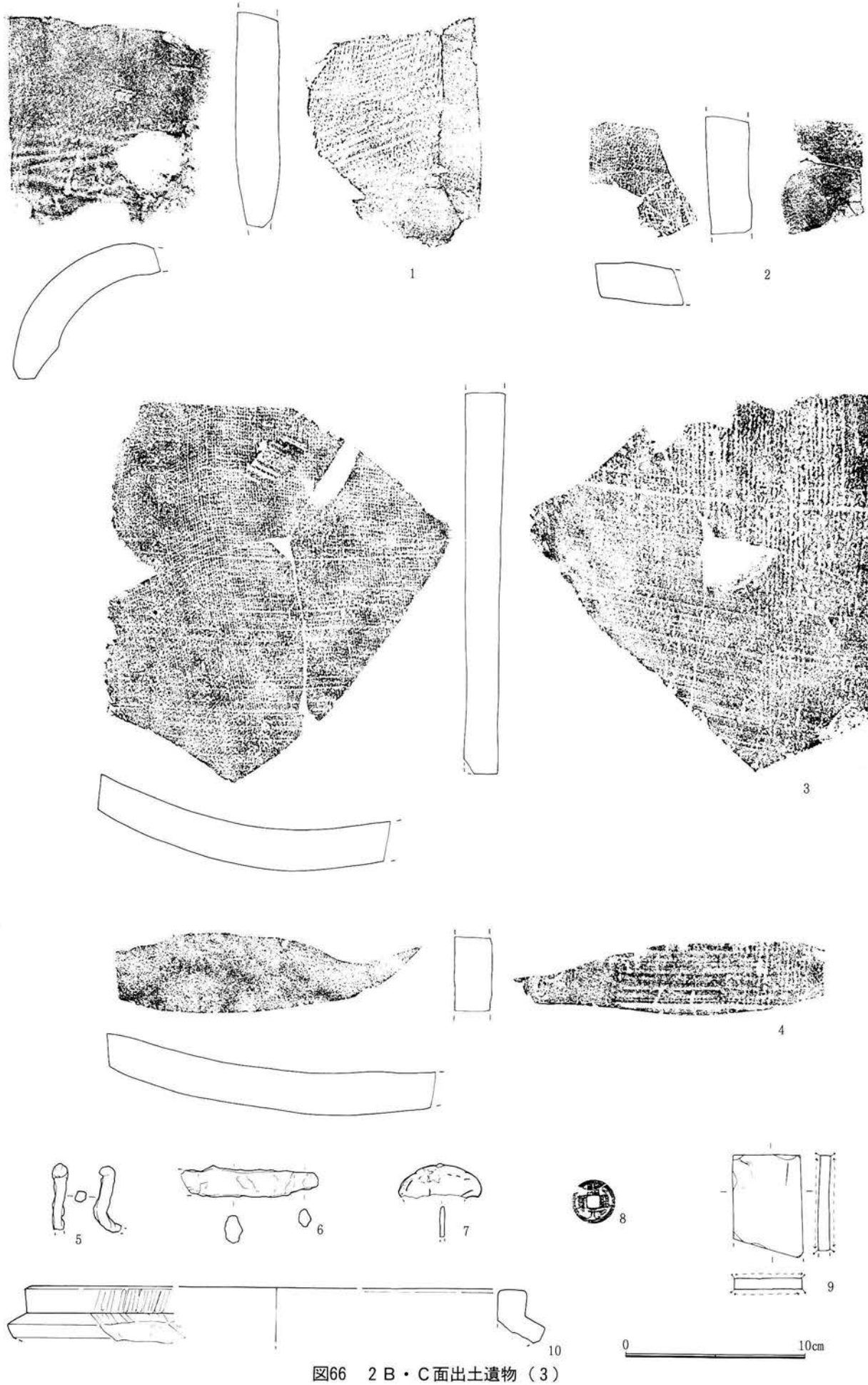


図66　２Ｂ・Ｃ面出土遺物（３）

溝９・12（図70）

この２条の溝群は、調査区北側、Ｈ－４～６グリッドに渡って、海抜13.3m付近に検出された遺構群である。溝９は南北に走り、溝12は東西に走る。また、溝９は溝12を切る。

溝９の検出された掘方規模は、南北4.5m、幅40～60cmを測り、深さは、確認面より40cm前後である。平面形はナマコ型である。底部は、南側が若干低くなっており、北側から南側に緩く傾斜してゆく。溝の断面形は、Ｕ字型を呈しており、東壁は直立気味に、西壁は若干開いて立ち上がる。この溝の覆土は、暗茶褐色粘質土で、10cm大の土丹塊、かわらけ細片、炭化物が混入しており、締まりの悪い覆土である。

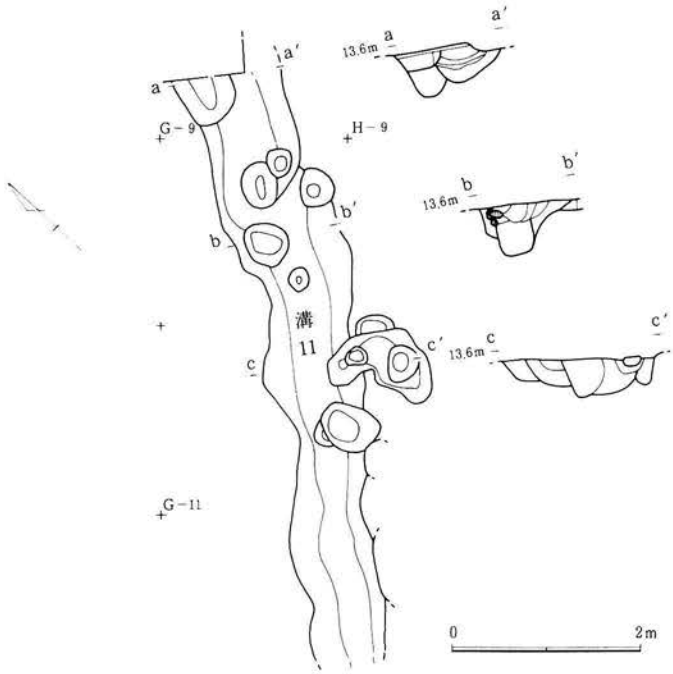


図67　溝11

この溝の南北の軸方向はＮ－38°－Ｅである。

溝12は、道２を掘り上げることによって検出された。この溝は調査区を東西に貫き、その両端は調査区外西、及び東の方向に延びて行く様相を示している。検出された掘方規模は、東西4.5m、幅2.2m、深さは確認面より60cmを測る。この溝の底部は、幅50～90cm、中央部分が若干低いが、比較的平坦であり、西側よりも東側が15cm高く、東側から西側に緩く傾斜している。断面形は凹型を呈しており、側壁は、底部から大きく開いて立ち上がる。

この溝の覆土は、茶褐色粘質土で、若干、土丹粒子、かわらけ細片を含むが、混入物があまりなく、締まりのない覆土である。

この溝の東西の軸方向はＮ－65°－Ｗである。

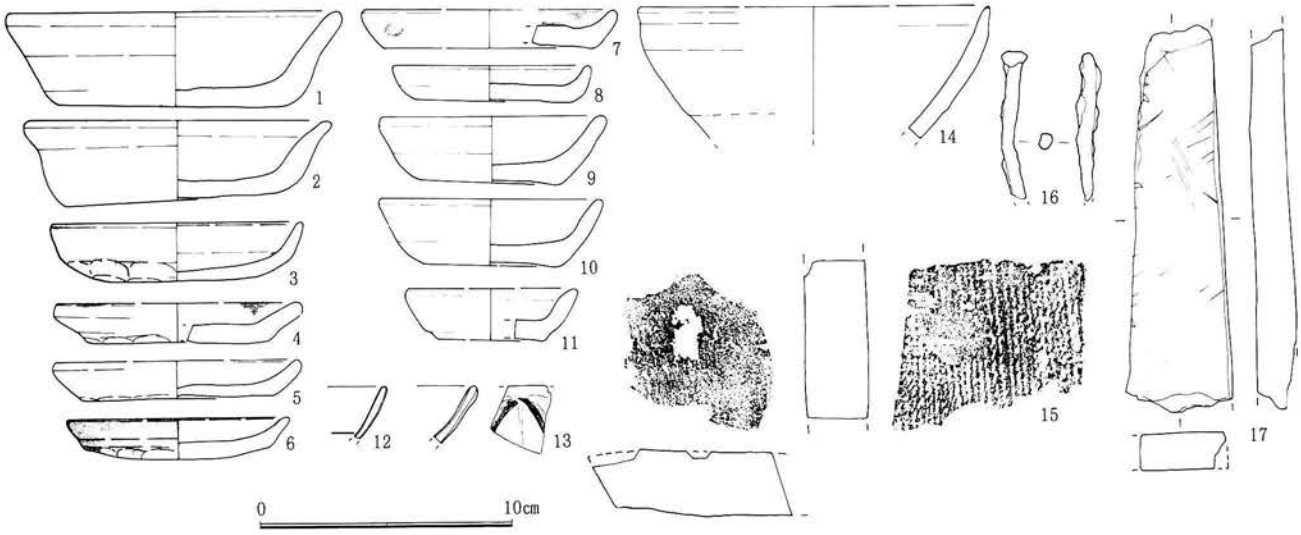


図68　溝11出土遺物

溝９出土遺物（図71）

１～３は手づくね成形のかわらけ。１、２は大皿。３は小皿。大皿の口径は14cm前後、小皿は9.6cmを測る。胎土は、概ね、キメの細かい精良土である。１は体部に２段のなでの稜線が、明確に残り、器肉は６mmと薄い。２、３には体部に稜線はなく、外体部と底部の間に明瞭な稜がはいる。

道２側溝出土遺物（図72　１～４）

１、２はかわらけの小皿。１は手づくね成形、２はロクロ成形である。１の口径は9.3cm、２は9.2cmを測る。胎土は、共に淡橙色を呈し、白針、雲母、微細差を含む。概ねキメの細かい精良土である。１は器肉が５mmと薄く、底部は平底状を呈する。２は器肉が厚く、口径、底径比が小さく、体部は開き気味に立ち上がる。口唇内部のなでが強い。

３、４は渥美窯の甕。３は口縁部。胎土は灰色を呈し、白色、黒色粒子が混入し粘性を有する。口縁部の内体部に施釉している。４は底部。復元された底径は15.8cmを測る。胎土は、若干の白色粒子を含み、ざっくりとしている。底部は剥離している。外体部には、へらによるなであげの調整痕が認められる。

溝12出土遺物（図72　５～16）

図72、５～10は溝12上層より出土した遺物である。５～８はかわらけの小皿。５～７は手づくね成形、８はろくろ成形である。胎土は、概ね、肌色系の、キメの細かい精良土である。手づくね成形の小皿の口径は10～９cmを測る。体部に稜線はなく６は外体部と底部間に稜がはいる。７は灯明皿。８は口径９cmを測る。９は青磁、櫛掻文碗の口縁部の破片。素地は灰色を呈し、釉調は青灰色である。光沢、艶、透明度すべて良い。

10は平瓦。厚さ2.3cmを測る。胎土は灰色を呈し、若干の白色粒子が混入し、やや粘性を持った軟質の精良土である。凸面に細い縄目叩き文を遺存する。

11～16は溝12下層より出土した遺物である。11、12はロクロ成形のかわらけの小皿。胎土は概ね、微細砂の混入した、砂質の強いものである。12は底部から開いて立ち上げ、口唇端部を直口させる。復元された口径は9.4～９cmを測る。

13～15は青磁の碗の口縁部の破片。13は櫛掻文、素地は灰色を呈し、釉調は青灰色である。光沢、艶、透明度すべて良い。14は劃花文、素地は灰色を呈し、釉調は青緑色である。透明度の良い釉を薄く施釉

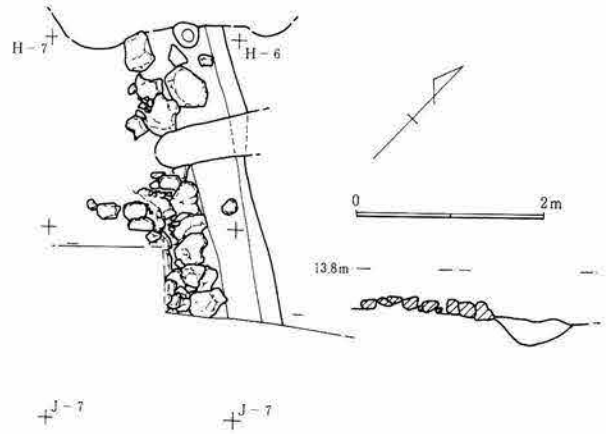


図69　道２

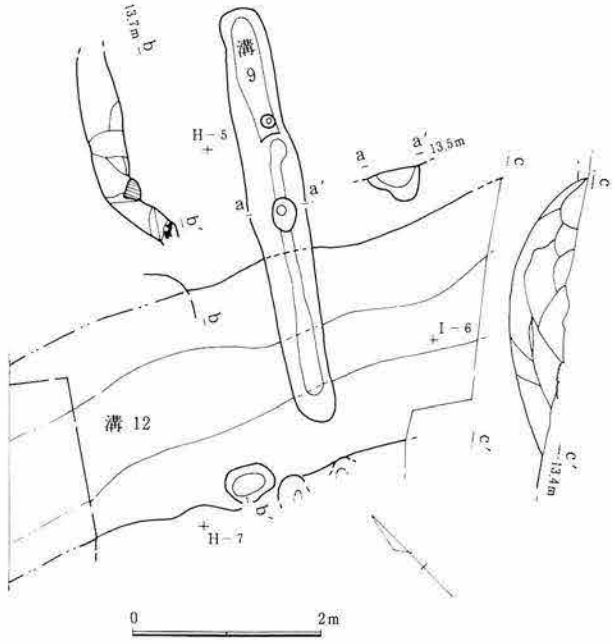


図70　溝９・12

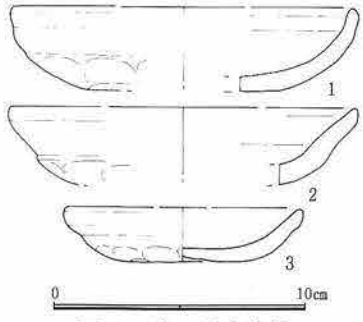


図71　溝９出土遺物

している。15は無文である。復元された口径は11cmを測る。素地は灰白色を呈し、釉調は淡灰緑色である。透明度は良いが、光沢がない。体部は内湾して立ち上げる。

16は常滑窯の甕の底部。復元された底径は16cmを測る。胎土は灰色を呈し、若干の白色粒子を含み比較的粘性が有る。内底部全面に降灰している。

溝14（図73）

調査区北東端、M－1～2グリッド内において、海抜13.2m付近で検出された南北に走る溝である。この溝の主体は、調査区外、南側、及び北側に存在する。

検出された掘方規模は、南北1.9m、幅2.1cm、深さは確認面より50～60cm前後を測る。この溝の底部は、幅50～60cm、ほぼ平坦である。また、南側より北側が若干低くなっており、南側から北側に緩く傾斜してゆく。この溝の断面形は、逆台形を呈しており、側壁は、真っすぐに開いて立ち上がる。

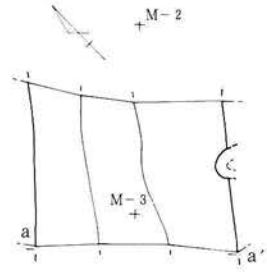


図73　溝14

この溝の覆土は、灰褐色粘質土で、20～30cm大の土丹塊を多量に含んでおり、また、底部あたりは褐鉄化しており、堅く締る。この溝の南北の軸方向はN－40°－Eである。

溝14出土遺物（図74）

図74は、溝14上層より出土した遺物である。

1～4は手づくね成形のかわらけ。1は大皿。2～4は小皿。大皿の口径は14cm、小皿は10～9cmを測る。胎土は概ね、キメの細かい

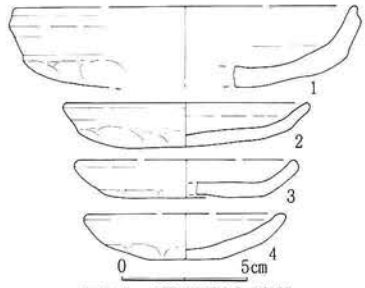
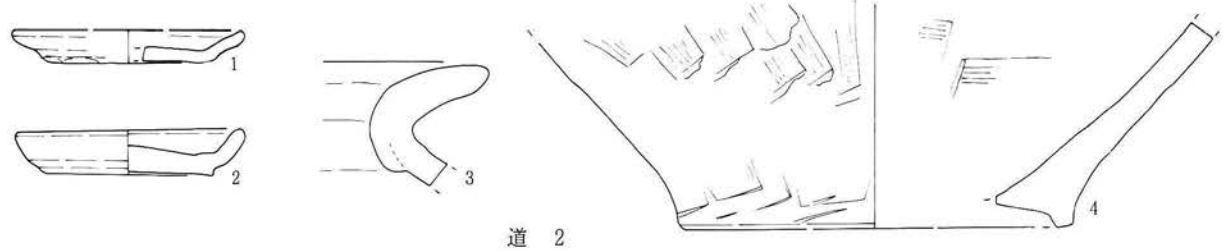
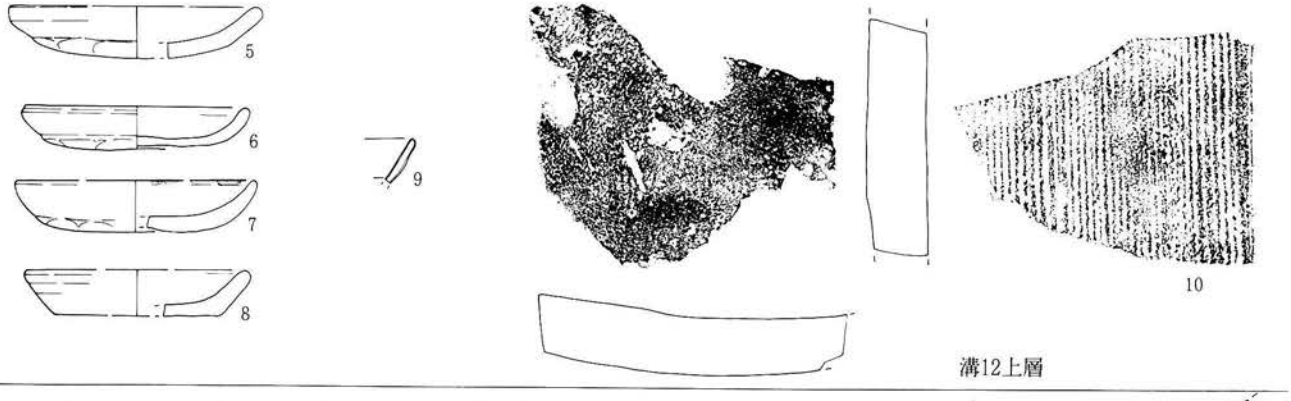


図74　溝14出土遺物





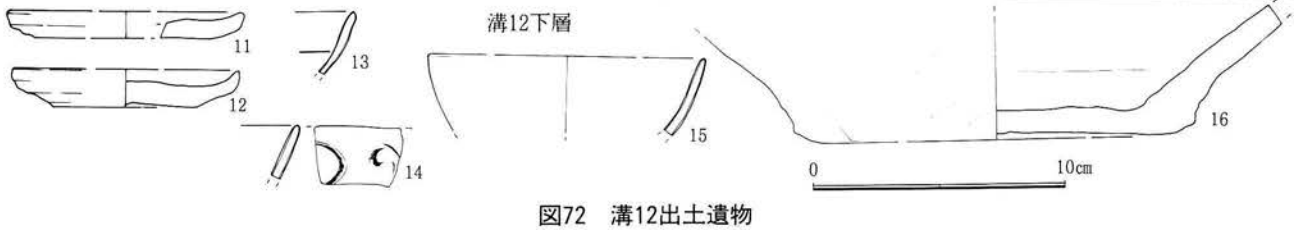


図72　溝12出土遺物

精良土である。1は口唇部のなでの稜線が、明確に残り、小皿は概ね、器肉が6㎜前後と薄い。体部に稜線はない。底部は平底状を呈するが、4はやや丸味を持つ。

渥美溜り1・2（図75）

渥美溜りとは、渥美窯の甕の破片が散乱して遺構面上に検出されたものである。

渥美溜り1は、調査区南側、Ⅰ－5グリッド杭南側に、広がりを持って、海抜13.2m付近で検出された。この渥美溜りを検出した遺構面上は、一面焦土化しており、火災の痕跡を留めていた。

この渥美溜りは、甕の口縁部～肩部にかけての破片が、散乱した状態で検出された。口縁部片1片、肩部片12片の合計13片である。表向き6片、裏向き7片が、鎌倉石の残片の周囲に、散乱していた。この破片からは、この甕が火災を受けた痕跡は認められない。

渥美溜り2は、調査区中央部、H－14グリッド杭北側に、広がっており、海抜13.4m付近で検出された。この遺構は、甕の胴部19片の破片で構成されている。表向き12片、裏向き7片が散乱して検出され、一括して投棄された様相を呈する。

渥美溜り1出土遺物（図76）

1は手づくね成形のかわらけの小皿。口径10.4cmを測る。胎土は肌色を呈し、キメの細かい精良土である。器肉は5㎜前後と薄い。体部に稜線はなく、底部は平底状である。体外部には炭化物が多量に付着している。

2は渥美窯の甕の口縁～肩部。口径46.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子が若干混入し、ざっくりしている。口縁端部に凹が巡る。口唇端部及び頸部に、釉のハケ塗りの痕跡を有する。3は滑石鍋転用の温石。直径1cmの孔を穿つ。

井戸5（図77）

調査区北側、H－7グリッド内において、

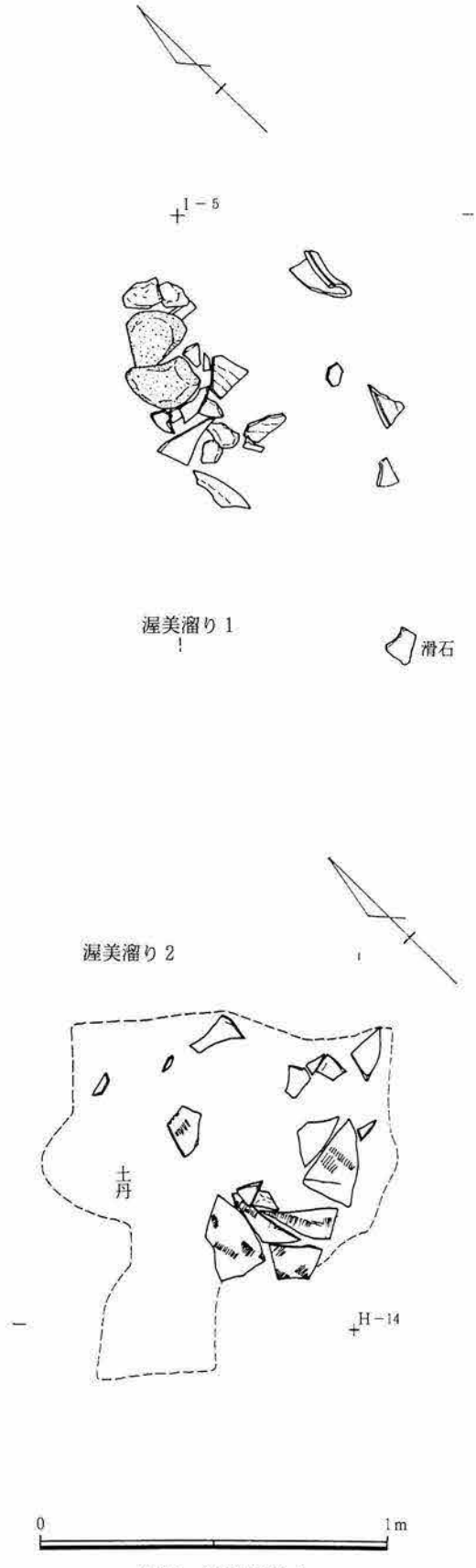


図75　渥美溜り1

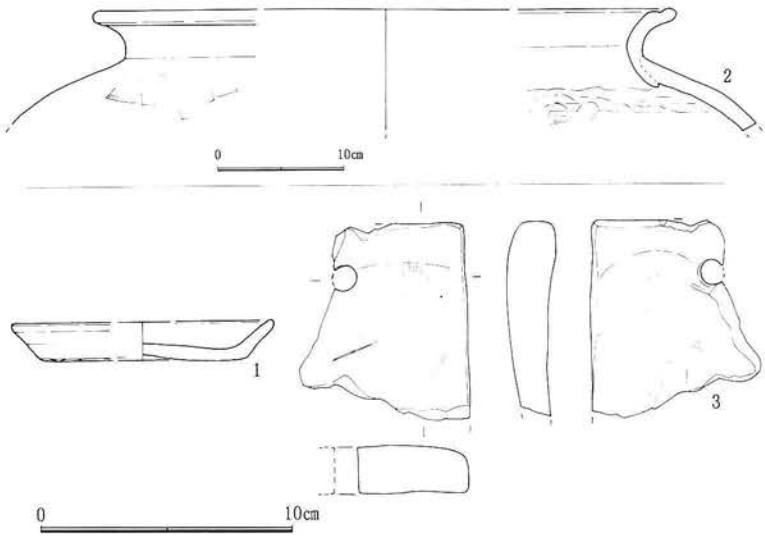


図76　渥美溜り出土遺物

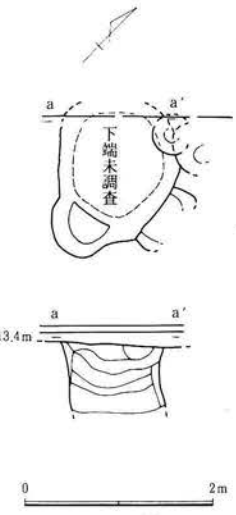


図77　井戸5

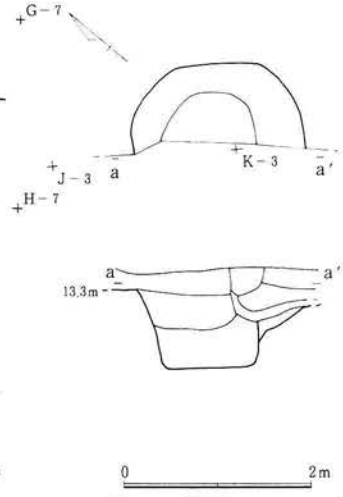


図78　井戸6

海抜13.3m付近で検出された井戸址である。この井戸の西部分は、調査区外西に存在する。また、井戸の底部は、掘削深度限界1.5mを越えるため、未調査である。検出された掘方規模は、南北1.3m、東西1.31mを測る。側壁は真っすぐに、掘り込まれており、断面形は四角である。井戸の構造を示す手がかりとなるようなものは検出されていない。

この溝の覆土は、上層は茶褐色粘質土で、土丹粒子、5～6cm大の土丹塊、炭化物を含み、粘性が強くよく締まる。下層は灰色味を帯びた茶褐色粘質土で、混入物が余りなく締まりは弱い。

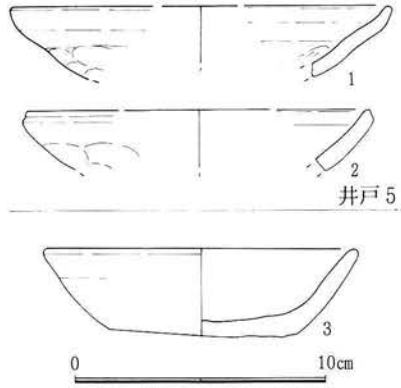


図79　井戸5・6出土遺物

井戸6（図78）

調査区北東端、K－3グリッド杭北側において、海抜13.3m付近で検出された井戸址である。この井戸の南半分は、調査区外南に存在する。検出された掘方規模は、南北0.9m、東西1.8m、深さは確認面より0.9mを測る。側壁は真っすぐに掘り込まれており、断面形は四角である。井戸の構造物は検出されていない。

この溝の覆土は、灰色味を帯びた茶褐色粘質土で、混入物が余りなく，締まりは極めて悪い。

井戸5出土遺物（図79）

1、2は手づくね成形のかわらけの大皿。口径は15cm、14cmを測る。胎土は粉質で、1は堅く焼きし締まり、2は胎芯が残り、口唇端部のなでが強い。

井戸6出土遺物（図79）

3はろくろ成形のかわらけの大皿。口径は12.6cm、底径7.6cm器高3.5cmの測り、器高が高い。胎土は淡橙色を呈し粉質で、白色礫、白針を含む。

土壙11（図80）

調査区北側、G－6グリッド杭東側に広がりをもって、海抜13.4m付近で検出された。この土壙の西側は、柱穴39に切られているため、全体の規模は掴めない。検出された掘方規模は、南北0.8m、東西0.4m、深さは確認面より0.18mを測る。浅い窪地状を呈しており、北側の側壁は、真っすぐに掘り込まれている。

この土壙の覆土は、灰色味を帯びた茶褐色粘質土で、土丹粒（mm大～40mm）、かわらけ片を含み、締

まりは分り良くない。

土壙12（図80）

調査区中央部、H－11グリッド内に広がりをもって、海抜13.4m付近で検出された。平面形は、南北を長軸とする楕円形を呈する。検出された掘方規模は、南北1.3m、東西1.5m、深さは確認面より0.4mを測る。底部は中央に位置しており、平坦である。側壁は、真っすぐに掘り込まれている。

この土壙の覆土は暗茶褐色粘質土で、10cm大の土丹を多く含み、また、土丹粒子（mm大）、かわらけ片、炭化物が飛在する。締まりは極めて悪い。

土壙14・15（図80）

調査区南側、H－19グリッド内において、海抜13.4m付近で検出された土壙群である。土壙14は土壙15を切る。土壙15の南側は撹乱を受けており、また、東側は調査区外東に在る。土壙14の検出された掘方規模は、南北0.6m、東西0.7m、深さは確認面より0.6mを測る。この土壙の覆土は暗褐色粘質土で、10cm～mm大の土丹を含み、少量の褐鉄分、炭化物を含み、若干締まる。

土壙15の掘方規模は、南北1.3m、東西2m、深さは確認面より0.8mを測る。底部は中央に位置しており、平坦である。側壁は底部より開いて立ち上がる。

この土壙の覆土は上層、中層、下層と3層に大別できる。上層は暗褐色粘質土で、1cm大の土丹塊、炭化物、褐鉄を含み、粘性が在り、若干締まる。中層は明茶褐色粘質土で、10～15cm大、1cm大の土丹、若干のかわらけ片を含み、粘性が在り締まる。下層は暗褐色粘質土で、3cm大の土丹塊、褐鉄を含み、粘性強く、締まりは悪い。

土壙23（図80）

調査区南部、H－17グリッド杭内に広がりをもって、海抜13.8m付近で、検出された土壙である。この土壙の東側は、2面時の井戸2に切られる。平面形は、東西を長軸とする不正楕円形を呈する。

検出された掘方規模は、南北1m、東西1.2m、深さは確認面より0.5mを測る。底部は東側に位置して

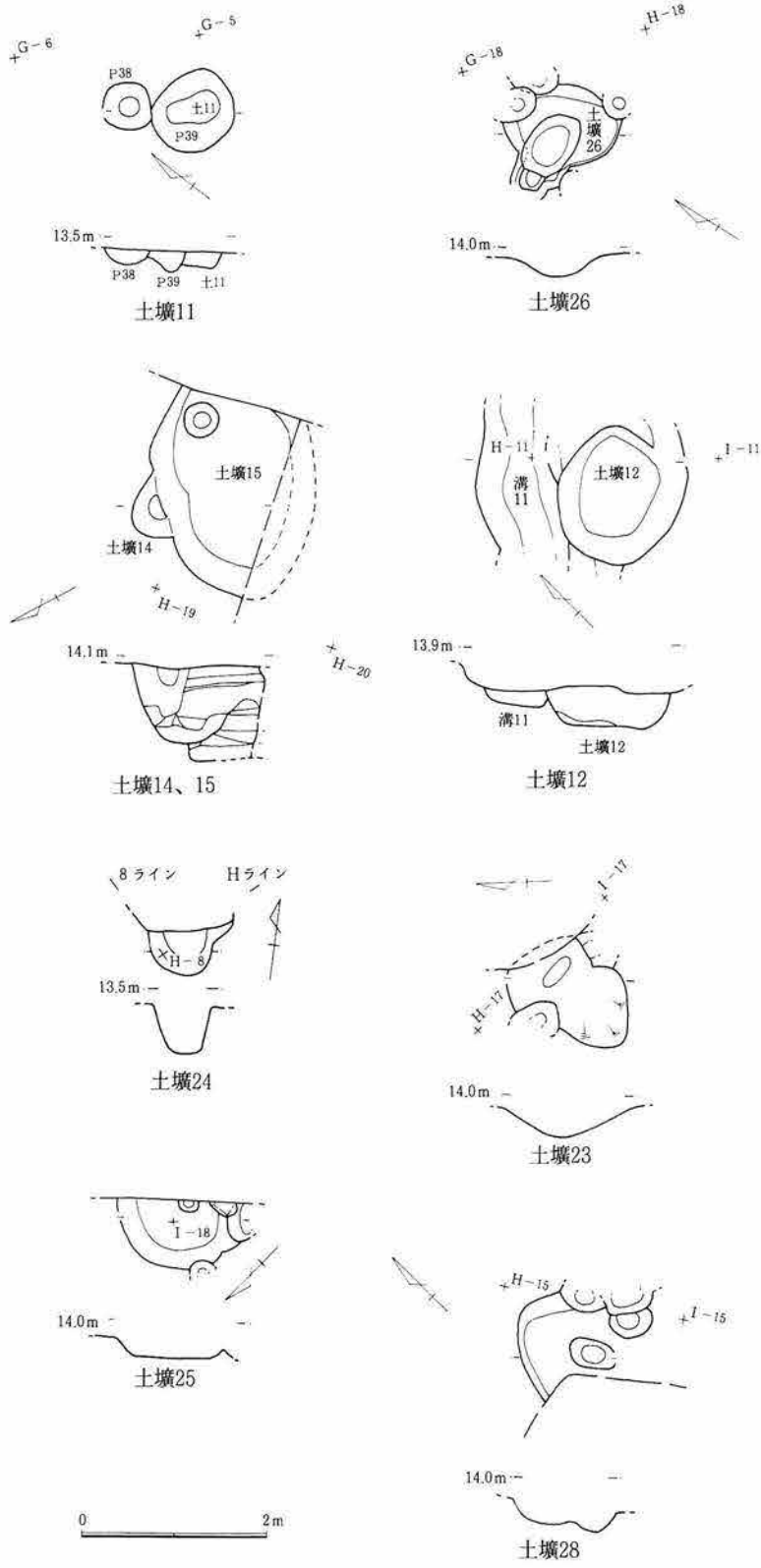


図80　土壙11 12 14 15 23 24 25 26 28

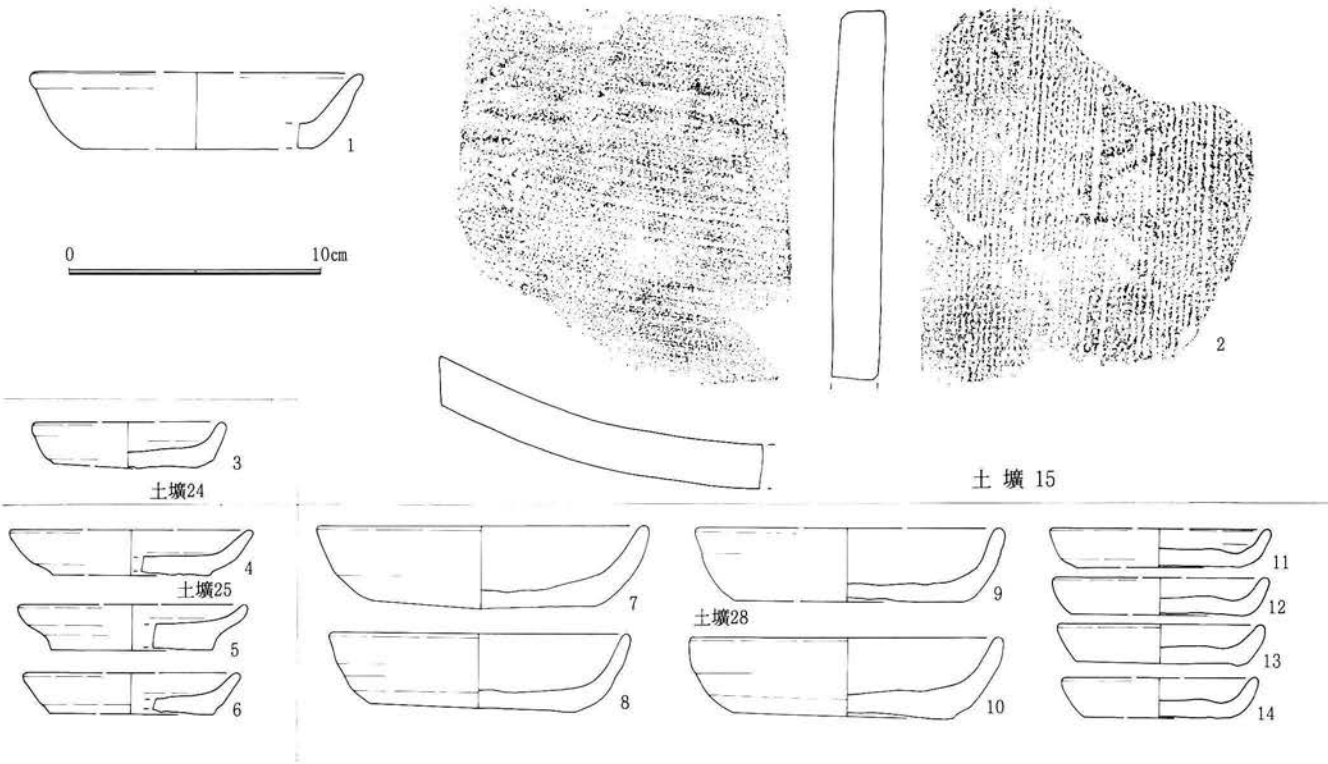


図81　土壙15 24 25 28 出土遺物

おり、東西10cm、南北40cmを測る。側壁は緩く開いて立ち上がる。

土壙24（図80）

調査区中央部、H－8グリッド杭下に広がりをもって、海抜13.3m付近で検出された土壙である。この土壙の北側は、後世の遺構群に切られているため、検出された掘方規模は、南北0.5m、東西0.8m、深さは確認面より0.5mを測る。底部は中央に位置し、また、平坦である。側壁は真っすぐに立ち上がる。

土壙25（図80）

調査区南側、H－18グリッド杭下に広がりをもって、海抜13.8m付近で検出された土壙である。この土壙の東側は、調査区外東に在り、また、南側は柱穴と切り合い関係をもつ。

検出された掘方規模は、南北1.3m、東西0.8m、深さは確認面より0.2mを測る。底部は中央に位置しており、2段に掘り込まれている。側壁は底部より開き気味に立ち上がる。

土壙26（図80）

調査区南側、G－18グリッド杭内に広がりをもって、海抜13.9m付近で検出された土壙である。検出された掘方規模は、南北1m、東西1.3m、深さは確認面より0.1～0.3mを測る。底部は2段に掘り込まれており、その中心は、西側に位置している。

土壙28（図80）

調査区南側、H－15グリッド内に広がりをもって、海抜13.7m付近で検出された土壙である。この土壙の南側は2面時の井戸により切られ、北側は柱穴群と切り合う。

検出された掘方規模は南北0.9m、東西1m、深さは確認面より0.5～0.6mを測る。底部には2箇所に、柱穴状の落ち込みがある。

土壙15出土遺物（図81　1、2）

1はロクロ成形のかわらけの大皿。口径13.3cm、底径9cm、器高3.3cmを測る。胎土は淡肌色を呈し、

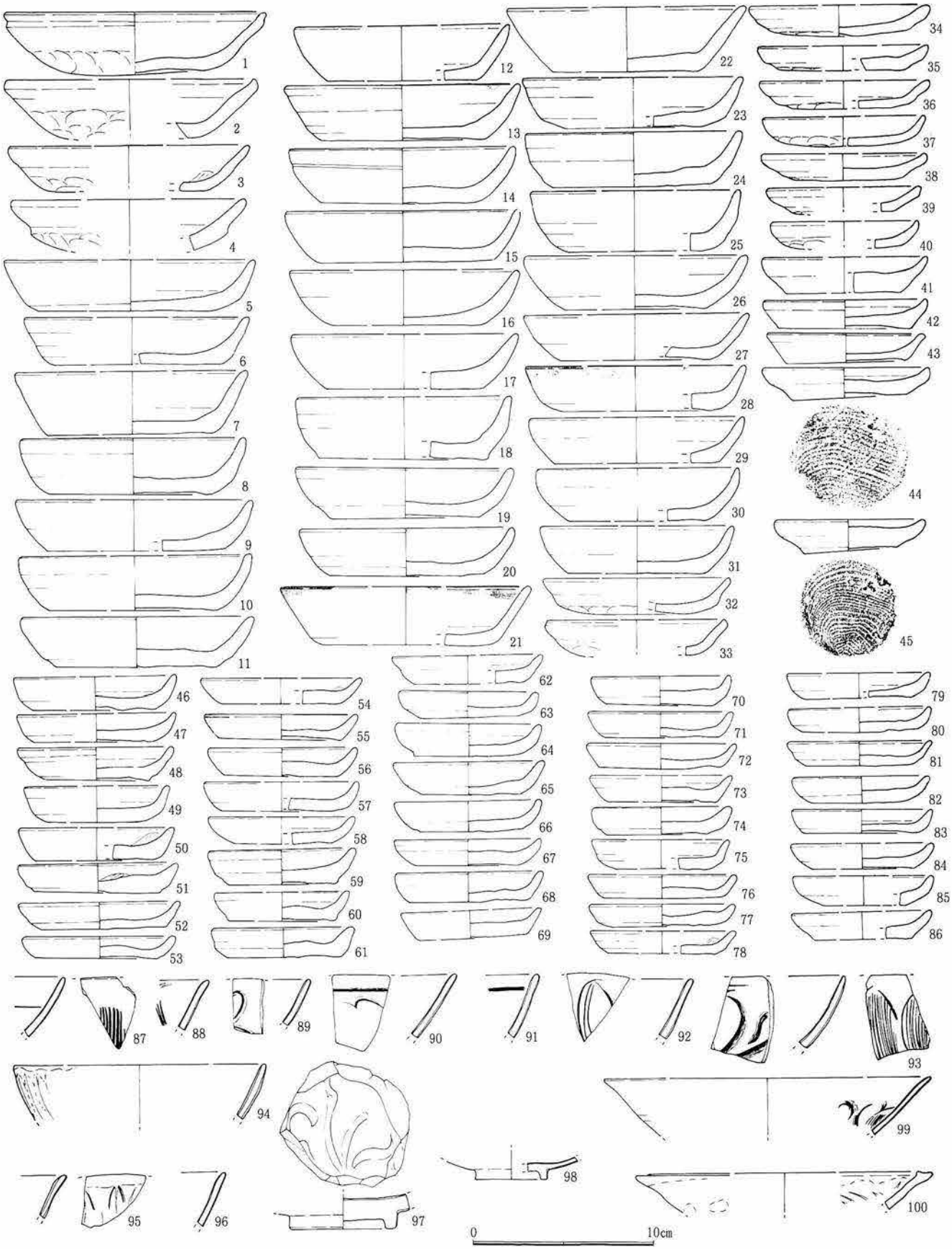

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
0
10cm

図82　3面出土遺物

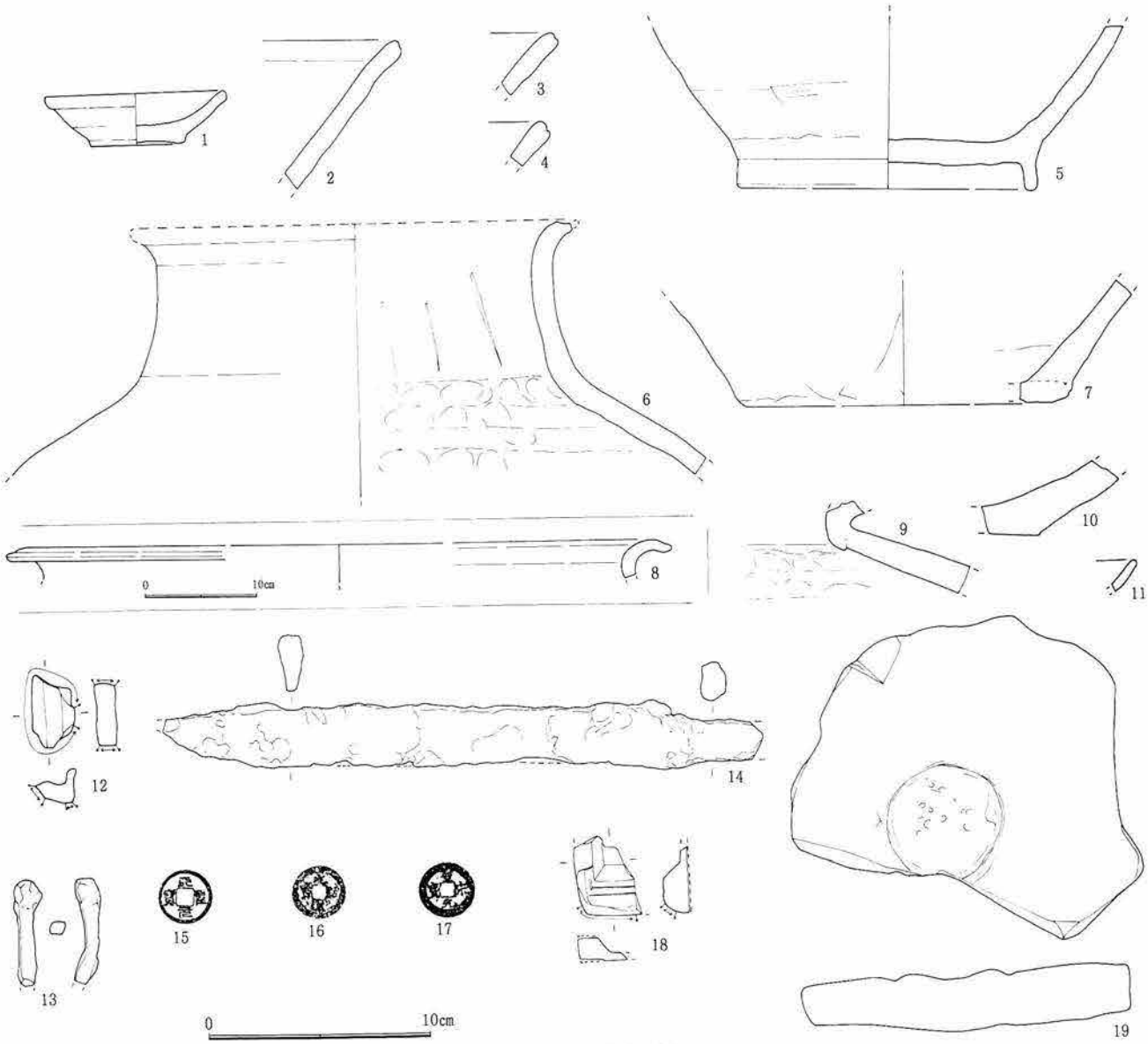


図83　3面出土遺物

粉質で、若干の白色粒子、白針、雲母を含む。ぼったりとした器形である

2は平瓦。厚さ1.8cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子、若干の長石が混入し、軟質のやや粗い胎土である。凸面に細い縄目叩き文を遺存し、凹面には離れ砂が観察される。

土壙24出土遺物（図81　3）

3はロクロ成形のかわらけの小皿。口径7.7cm、底径6cm、器高1.8cmを測る。胎土は橙色を呈し、粉質で、赤色粒子、微細砂含む。焼成は良好である。

土壙25出土遺物（図81　4～6）

4～6はロクロ成形のかわらけの小皿。5は口径9.7cm、底径6.2cm、器高1.8cmを測る。胎土が淡橙色を呈し、砂質が強く、底部が厚く、体部が外反して開き、口唇端部が直口するタイプのものである。4、6は、共に胎土が淡橙色を呈し、粉質で、赤色粒子、雲母を含む、焼成の良好なものである。

土壙28出土遺物（図81　7～14）

7～14はロクロ成形のかわらけ。7～10は大皿、11～14は小皿。概ね、胎土は橙色系を呈し、粉質で、赤色粒子、白針、若干の雲母を含む、焼成の良好なものである。大皿の口径は13.3～12cm、底径9～8.4

cm、器高3.3～3.1cmを測り、口径、底径比の小さいものであるが、若干、口径の縮小化、器肉の薄手化が認められる。小皿の口径は8.8～8cm、底径7～6cm、器高1.5cm前後を測る。内底面を巡る横ナデが強く、体部の立ち上がり際が窪む。

3面出土遺物（図82～85）

図82、1～86はかわらけ。1～4は手づくね成形の大皿、32～40は手づくね成形の小皿。手づくね成形のかわらけの特徴は、胎土に若干の金雲母を含むが、水簸されたようなキメの細かい粉質土である。焼成は極めて良好で、焼き締まり、器肉も5mm前後と薄い。口唇端部に1段のなでを施し、体部の稜線はない。大皿の口径は14.5cm～13cm、器高3.4cmを測る。小皿の口径は10.4～8.2cm、器高2～1.4cmを測る。2は口唇端部のなでが強く凹む。36、40は2次焼成を受けている。38の小皿の外底部は、平底状である。内底面に横ナデの痕跡が認められる。4のかわらけは粉質で、淡橙色を呈しぼってりと厚く、ほかのものとは異質である。

5～31はロクロ成形の大皿、41～86は小皿。ここで検出された、かわらけの大皿の特徴は、口径、底径比が少なく、器肉も若干厚い。小皿は、体部が丸味を持ち、口唇端部が内向するもの、外向するもの両様である。胎土は共に、粉質、肌色系で白針、赤色粒子を含むものと、橙色系または、肌色系で赤色粒子、白礫、微細砂をふくむものの両様ある。大皿の口径は14cm～12cm、底径10～8cm器高3.4～2.4cmを測る。小皿の口径は9～8前後cm、器高2～1.5cm前後を測る。7、18は口径に比し、器高が高い。8は、体部に明確な2段のなでの痕跡ある。13、16は、底部を若干薄めに作り出している。静止糸きりに近い。18、25、30は、外体部のなでが強いため、稜線を有し、口縁部は直口気味である。27は薄くシャープであるが、焼成はさほど良くない。41、42、44、45は、側壁を底部から、大きく開いて立ち上げ、口唇端部を直口させる。外底部は静止糸きりの痕跡を留める。44の胎土は橙色を呈し、粉質で水簸された胎土である。45の胎土は、肌色系で砂質に富む。43は、全体的に器肉が薄めであるが、体部は底部から引き上げ、やや器肉を肥厚させる。48は器高が1.9cmと高めで、シャープなスタイルである。51は内底面の横ナデの際に、粘土が寄り器肉が分厚くなる。砂質の強い胎土で、外底部は静止糸きりに近い。72は手づくね成形のものの胎土と近い。22は上層の混入品。13、21、28、55は灯明皿。

87～99は磁器。87～97は青磁、98は白磁、99は青白磁。87、88は櫛掻文碗の口縁部の破片。87の素地は灰白褐色、釉調は緑灰色、光沢、艶、透明度共に良い。88の素地は茶灰色、釉調は茶色、光沢、艶、透明度すべて良い。共に器表は細かく貫入する。89～92は劃花文碗の口縁部の破片。概ね素地は灰色～灰白色、釉調は青灰色、91は、茶灰色を呈する。光沢、艶、透明度共に良い。92は、器表が細かく貫入する。93は櫛掻蓮弁文碗の口縁部の破片。素地は灰白色、釉調は青灰色を呈し、光沢、艶、透明度共に良い。器表は細かく貫入する。94、95は蓮弁文碗。94の復元された口径は14cmを測る。素地は灰白色、釉調は緑青色、失透するが光沢は良い。95は口唇端部が端反となり、薄い施釉である。素地は灰白色、釉調は緑青色、光沢、艶、透明度すべて良い。97は無文の碗。素地は灰色、釉調は朽葉色、失透しており、光沢、艶もない。97は碗の底部。底径5.6cmを測る。素地は灰白色、釉調は黄灰色を呈する。光沢、艶、透明度すべて良い。高台内、及び畳付は露胎である。器表は貫入する。内底部に文様を配する。98は白磁口兀碗の底部。復元された底径は4cmを測る。素地は白色、釉調は灰白色を呈する。光沢、艶、透明度すべて良い。高台内、及び畳付は露胎である。99は碗。復元された口径は18cmを測る。素地は白色、釉調は水青色、光沢、艶、透明度はすべて良い。内面に文様を配する。

100は瀬戸窯の灰釉の卸皿。復元された口径は16.4cmを測る。胎土は白色で、細かい石粒を含む。口縁部のみ施釉する。

図83、1は山皿。口径8.2cm底径4.4cm器高2.3cmを測る。胎土は淡灰色を呈し、長石、黒色粒子を含み

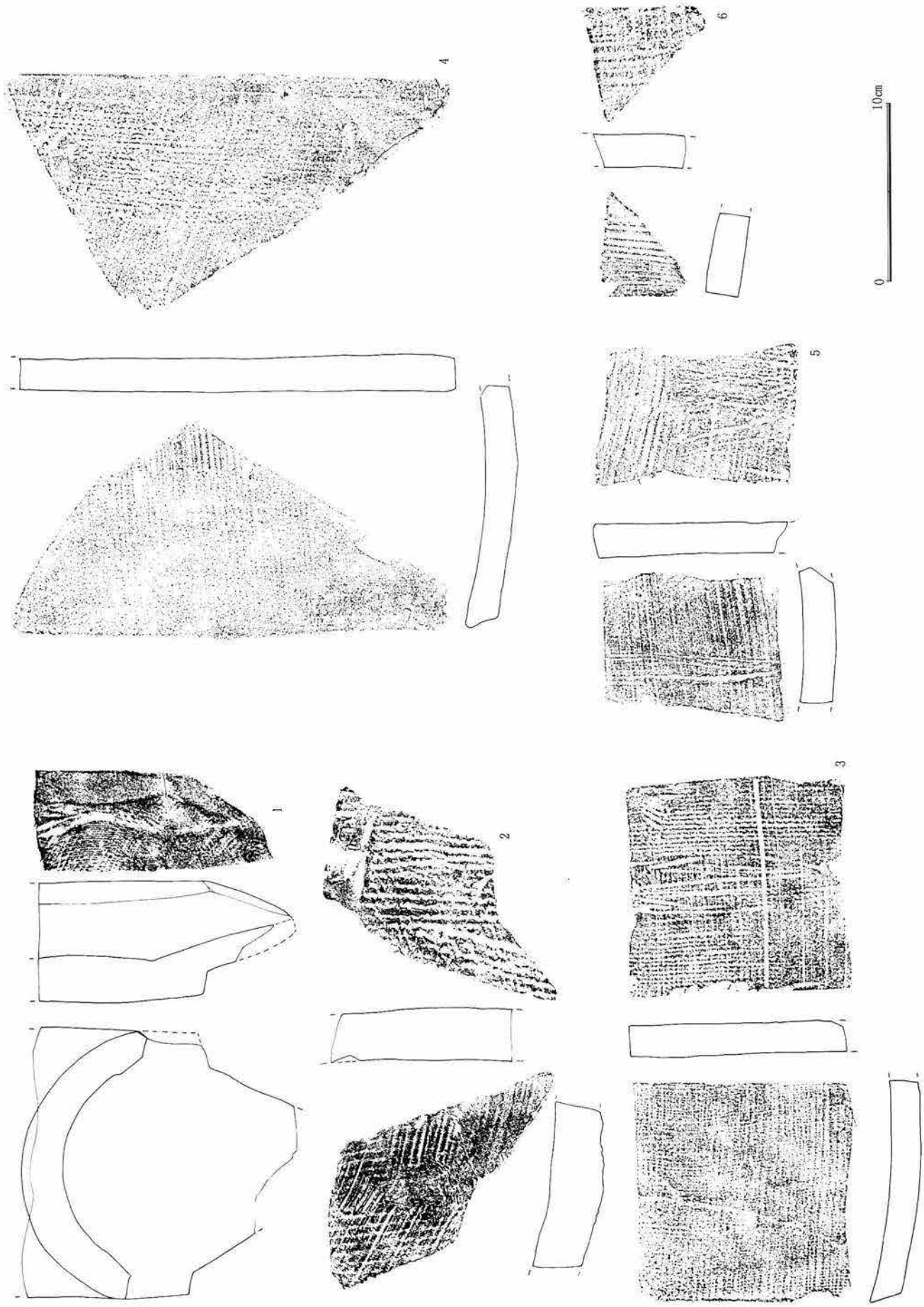


図84　3面出土遺物

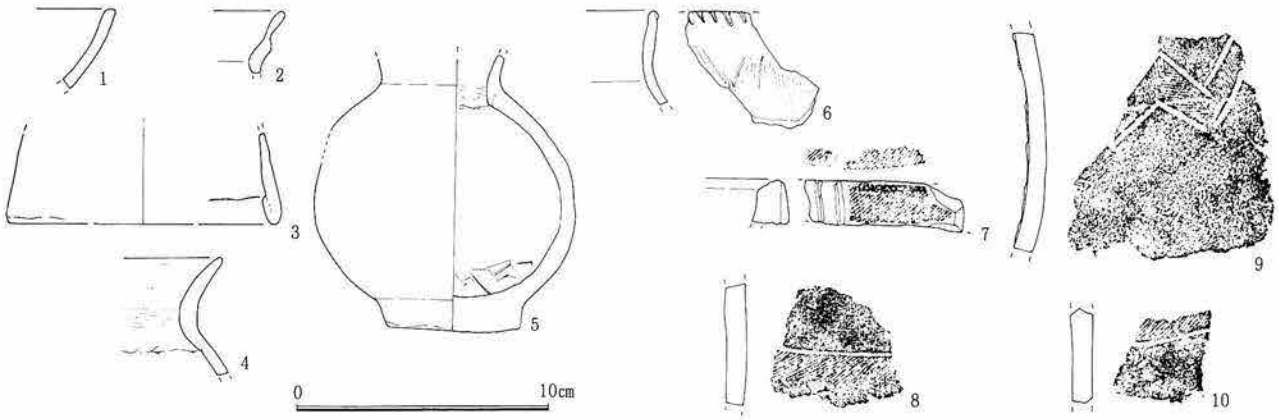


図85　中世層土の古代遺物

硬質である。外底部には糸きりの痕跡、また、口唇端部には重ね焼きの痕跡を留める。

2～5は山茶碗窯系捏鉢。2～4は口縁部の破片。すべて口唇端部が凹む。胎土は淡灰色を呈し、2は長石、雲母、黒色粒子を含み軟質、3、4は、若干の長石が混入する程度のやや硬質の胎土である。2は降灰を受けず、3、4は内外に降灰する。5は底部。復元された高台径は15cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石、若干小石を含み、ざっくりと粗い。貼付け高台である。内底面はかなり摩滅している。6、7は常滑窯の製品。6は壷の口縁部。復元された口径は20.3cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石、若干小石を含み、硬質で、幾分粘性が感じられる。内側の頸部には、縦方向にへらなで、頸部～肩部には、指頭による調整痕を留める。外体部に降灰する。7は甕の底部。復元された底径は15cmを測る。胎土は淡褐色を呈し、5～1㎜大の長石が混入しており、粗い。内底面は摩滅が顕著であり、鉢に転用された可能性もある。

8～10は渥美窯の製品。胎土は概ね、灰色を呈し、細かい長石を若干含み、軟質である。8は口縁部。復元された口径は60cmを測る。口縁端部は凹が巡る。9は頸部～肩部。外体部に叩き目の痕跡を留める。

10は底部。胎土にはやや粘性がある。内面は降灰を受ける。

11は白かわらけの口縁部の破片。胎土は白色を呈し、微細砂が多く混入し、器表がざらつく。

12は研磨痕のある陶片。常滑の甕の口縁部を研磨している。

13、14は鉄製品。13は釘、14は刀子。遺存した刀身の長さは24cm、茎3cmまでである。厚さは棟1cm、刃先は5㎜、茎は1cmである。

15～17は北宋銭。15、天聖元宝。16、天裕通宝。17、聖宋元宝。

18は硯。海部上方～ムコウブチ隅部。規格線を引いた痕跡を遺存する。裏側は剥離している。海の深さは7㎜、側面、及び表は磨かれている。

19は土丹製品。14.8×14.6×2.5cmを遺存する。つまみの付いた蓋の様相である。実際にはつまみ部は文様として、形状を刻んだだけでつまめない。裏側は、平坦に加工を施し、内側から外側にむっかて、上向に反り上がる。

図84、1～6は瓦である。1は丸瓦。2～6は平瓦。1は玉縁～男瓦部。玉縁部の長さは5cm、厚さは1.5cm、男瓦部の厚さは2.4cmを測る。胎土は灰黒色を呈し、雲母が多量に混入している。外体部は黒色である。凸面に縄目叩き文が若干残るがなでられている。凹面には布目が明瞭に遺存している。2は厚さ3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子が若干混入し、粉質で粘性がある。凸面には、太い縄目叩き文が、縦方向、その上から、斜め方向に施されている。凹面には、布目の圧痕を遺存している。3～5の胎土は灰白色を呈し、長石が若干混入し、硬質である。凸面には、細い縄目叩き文が、縦方向になされ、凹面には布目が遺存している。3は厚さ1.8cmを測る。凹面端縁部は、面取りされている。

4は凹部には離れ砂が付着している。5は凹面に模骨痕が遺存している。6は厚さ2㎝を測る。胎土は暗灰褐色を呈し、長石が若干混入し、粉質で粘性がある。凸面には、縦横の縄目叩き文、凹面には模骨痕が遺存している。

中世層出土の古代遺物（図85）

1は須恵器の坏の口縁部の破片。胎土は青味灰色を呈し、若干の白色、黒色粒子を混入する。口縁部内外、及びに内体部に降灰する。2～5は古墳時代、6～10は弥生時代の土器である。2はS字甕の口縁部の破片。胎土は淡橙色を呈し、粉質で、角閃石、1㎜大の小石を混入する。3は台付甕の脚部。復元された底径は10.6㎝を測る。胎土は淡肌色を呈し、粉質で、角閃石、長石、微石粒を混入する。内外体部共に、なでによる成形である。4は甕の口縁部の破片。胎土は赤茶褐色を呈し、、角閃石、微細石白針を混入する。口縁部は、なでによる、頸～肩部は、はけによる調整である。5は小壷。底径5.3㎝、最大胴径10.7㎝を測る。胎土は淡肌色を呈し、粉質で、角閃石、砂粒を多く含む。内外体部共、へらなでによる調整である。底部～体部あたりにススが付着している。6は甕の口縁部の破片。の胎土は肌色を呈し、胎芯が残る。角閃石、砂粒を多く含む。内外体部共、ハケによる調整である。口唇端部は、押捺により波状を呈する。7は壷の口縁部。縦方向に2本の突帯をつけ、口唇端部と口縁部に、羽状縄文を配する。胎土は肌色を呈し、角閃石、砂粒を多く含む。8～10は壷の肩～胴部。区画を作り、その中に縄文をはいする。9の区画は、棒状の物の押捺、8、10はへらがきによる。胎土は肌色を呈し角閃石、砂粒を多く含む。8、10はの器表には、横方向のへら削り調整がなされ、また、丹彩の痕跡を留める。

第4章　まとめ

今回の調査では鎌倉時代から室町時代、凡そ、13世紀から15世紀中頃までの遺構の確認をすることができた。検出された遺構群は、大別して3時期の変遷をたどる。中世1面は15世紀初頭前後～15世紀前半、中世2面は13世紀後半まで、中世3面は13世紀前半までである。出土した遺物も、主に当該期のものであり、各時期ともに、まとまった量で網羅している。また、遺構の確認はなされなっかたものの、弥生時代、古墳時代、古代（平安時代）の遺物が出土している。近隣に当該期の遺跡の確認がなされていることから、本遺跡地に運び込まれたのか、あるいは、遺跡地があった可能性も予想される。以下、各時期の概略を述べ、若干の考察を加えまとめとする。

中世3面

この遺跡地は、13世紀前半の早い時期から開発される。直交する大規模な溝12、14により、土地の区画を造りだし、建物の構築、溝、井戸、土壙等を造り、土地利用を始める。以後、溝12は埋め立てられて、その場所に道路（道2）が造りだされる。この道は、出土遺物より13世紀前半まで存続したと思われる。この道は、13世紀中頃以降から15世紀まで続く1面時に検出された道より、10m南側の山裾寄りにある。路面は、土丹によるかなり強固な舗装が施されており、1面時の道と同様に、公道的要素が非常に強い。なんらかの理由で、道2を廃棄し、道を滑川寄りに移動して、作り直した事も考えられる。また、同時に、道2は、鎌倉時代前半期における「田楽辻子」であった可能性もある。この遺構面には、焦土面が随所に広がりを見せており、幾度も火災を受け、そのたび毎に、地業、及び建物の立て替え等の造成を行っていた様相が見て取れる。勝長寿院は康元元年（1256）12月に類焼したとある。この遺跡地が近隣であり、時期的にほぼ当てはまることから、本遺跡地の様相が、文献資料と対比できることも考えられる。

中世2面

この時期は、数時期に渡る玉砂利の張り替え時期を基にして、文化面を追った。玉砂利の張り替えは、短期間に、頻繁に行われたようである。出土遺物から13世紀後半～14世紀後半頃と思われる。調査区内で、部分的な広がりを、おおよそ3時期、計8カ所検出した。しかし、検出状況から、恐らく各時期ともに、広範囲に渡って敷かれていたのだと思われる。2A面時には、南側に、若干検出されただけであるが、この遺構面の北側は、大きく1面時の撹乱を受けており、玉砂利敷遺構が北側にも広がっていた可能性は十分にある。また、各時期の庭石、遣水状の溝、四阿屋を連想させる礎石建物等の検出は、庭園風の観があり、玉石は、その化粧の為に、随所に敷かれていたのであろうと思われる。しかし、2C面時の大規模なかわらけ溜りの検出は、この調査地点が、遺跡地の主体部分ではなく、建物の裏手、あるいは、主体部よりも遠く隔った場所であることを予想させる。遺構の検出状況から、各時期とも、さほど土地の利用方法に変化が見られないことから、一貫して主要部分ではないと思われる。本遺跡地の西方、大御堂ガ谷には、勝長寿院があったと言われ、その場所は、本遺跡地から直線距離にして150mである。この寺は、大御堂ガ谷がすべてが境内であったと言われている。玉砂利敷遺構は寺院址に見られる特殊な遺構であり、本遺跡地からの、この玉砂利敷遺構の検出は、この調査地点が、勝長寿院の敷地内、裏手にあった可能性を予想させる。

また、安山岩の礎石を有した土壙3（柱穴）に関しては、これに対応する遺構が検出されておらず、建物の様相は不明である。本遺跡地が、寺院址である場合、この遺構が塔の心礎であるとする指摘もあるが、遺構間の検出遺構の様相からは確認はとれない。しかし、この遺跡地が、寺院址である可能性を秘めた発見である。この時期の遺構の検出状況は、最もこの遺跡の性格をよく表していると思われる。

中世１面

この時期に検出された遺構群は、前時期と全く様相を異にする。大規模な土木工事が行われ、大型の遺構群が展開する。この面から検出された遺構群は、主に調査区北側を中心に展開していた。検出された道は、東隣の調査で確認された道筋の西側延長部分と思われ、今回の調査では、道の南肩、及び南側の側溝が検出された。北肩、及び北側側溝は、調査区外、現在の『田楽辻子』下、あるいは、それ以北であろう。いずれにしても、現在の道と重複しており、15世紀から、この道筋が、あまり移動せず、踏襲されていることが確認された。前回の調査では、この道が６回の改修工事を経て13世紀半ばごろから継続してあったことが確認されている。しかし、古い時期のものは、道筋が、もう少し滑川よりであったようだが、基本的には道筋は大きく変わってはいない。 また、道に直交して検出された溝２は、出土遺物から、道と、ほぼ同時期と思われる。道との空間地帯には、橋が架けられていたと思われるが、その橋に関しての遺構が、確認されていないことから、恐らく板を渡したような簡単なものであったと予想する。これらの遺構群は出土遺物から15世紀前半までと思われる。また、同時に、道と直交して検出された溝４は、Ⅵｂ期（註１）のかわらけの出土もあり、15世紀中半頃まで存続したと思われる。また、この溝から多量に出土したかわらけを、大皿11㎝以上、中皿（11～８㎝）小皿（８～７㎝）極小６㎝以下として、４層の統計を取ると、上層（大皿０、中皿57、小皿11、極小49）中層（大皿１、中皿15、小皿７、極小０）下層（大皿４、中皿56、小皿37、極小22）最下層（大皿５、中皿86、小皿３、極小31）となり、各層ともに中皿が主流を占めており、この時期、よく使用された大きさなのであろう。また、上層は、主に中皿と極小皿で構成されており、時代が下がるほどに細分化されなくなる。しかし、使用した皿の構成、人数などは、この数字からは不明である。この時期をもって、この遺跡地は終末期を迎える。1455年、鎌倉公方が鎌倉から古河に敗走したころより、鎌倉は次第に衰退してゆき、同時に、勝長寿院も寂れてゆくと言われる。この時期の様相は、まさに、それを反映している様に思われる。

これ以降、この遺跡地は大型土丹により、埋められ、造成を行っているようであるが、現代の撹乱を受け、以後の様相は不明となり、現在に至り、住宅地となっている。

本遺跡地は、開幕当初から、源家と由縁が深く、政治的にも重要な地域内に属していた。また、西谷には、頼朝に創建され、以後、北条氏により厚く被護された勝長寿院があり、また、それは室町時代に至っても、引き続き鎌倉公方により被護されている。一貫して政権下にあった勝長寿院の近隣に所在する本遺跡地が、中世のこの時期、かなり繁栄していたのではないかと調査以前より予想させるものであった。しかし、今までにあまり、調査が行われておらず、様相は不明であった。今回の調査では、全時期を通して、遺構、遺物がまとまって、ある程度の量を網羅して検出されており、予想を十分に実証づける事が出来たと思われる。また、それは、勝長寿院と関係した遺構群も含まれており、各面から検出された遺構群の様相は、勝長寿院を含めた、この近辺の盛衰をかなり反映したものであったのではないかと思われる。

（註１）服部実喜 南武蔵・相模における中世の食器様相 神奈川考古34号1995年５月）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	森　孝子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
てんがくずし 田楽辻子 しゅうへんいせき 周辺遺跡	かながわけん 神奈川県 かまくらしじょうみょうじ 鎌倉市浄明寺 一丁目661番外	204	33			19980730 ～ 19981020	254.34㎡	宅地造成及び個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田楽辻子 周辺遺跡	中世都市	室町時代 鎌倉時代	道路・溝 井戸・玉砂利敷遺構・ 土壙・柱穴群	かわらけ 船載・陶磁器 国産陶磁器（瀬戸・ 常滑・渥美等） 石製品・金属製品 骨製品 須恵器・土師器 弥生式・土器	13世紀末～14世紀にかけてのかなり頻繁な玉砂利敷きの改修工事。 15世紀の道及び側溝の検出。

写　真　図　版

PL. 1

▲A　調査地点（北から）

▲B　重機による掘削（北から）

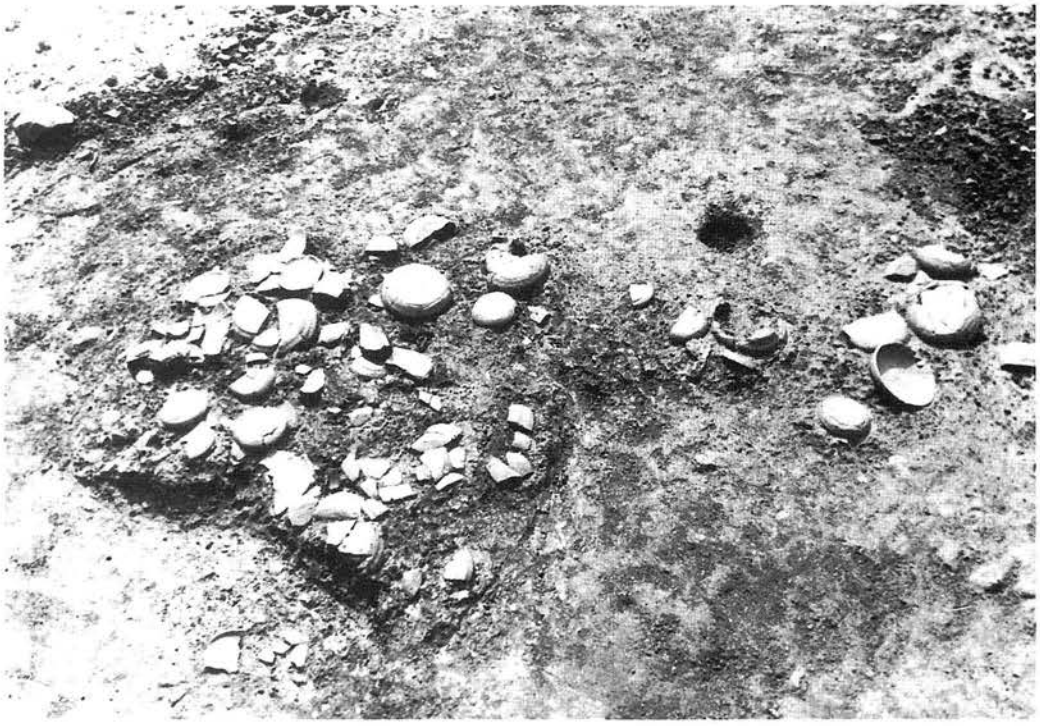
PL. 2

▲A　ベルトコンベヤー設置完了（南から）

▲B　現代の撹乱を完掘した調査区（南から）

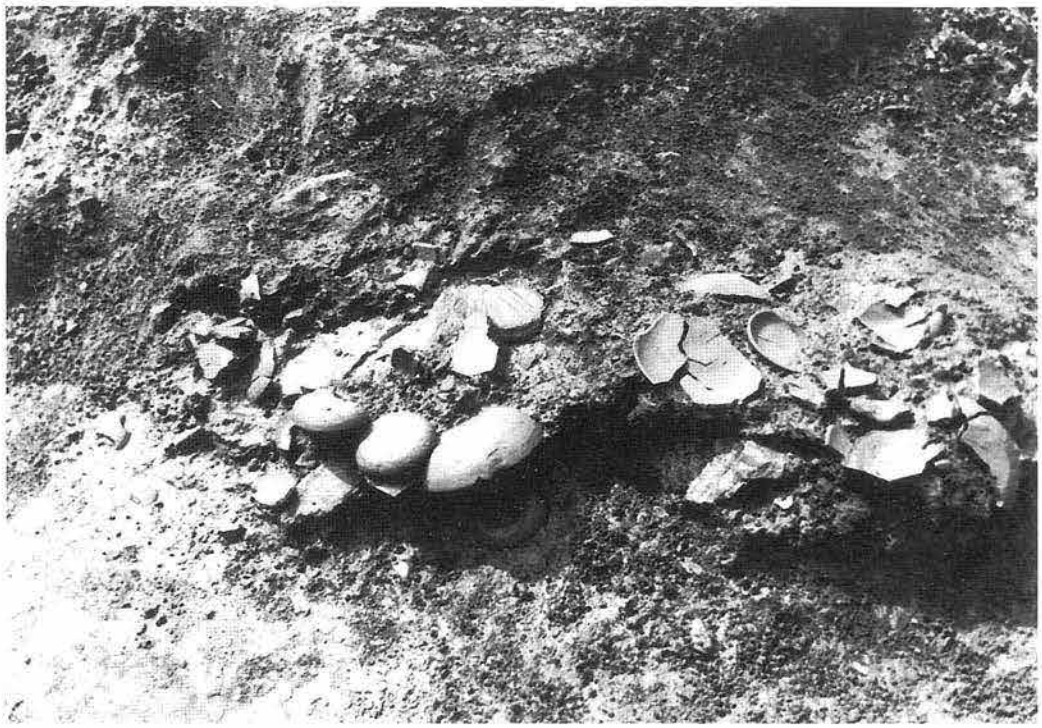
PL. 3

▲A　玉砂利遺構１・かわらけ溜り１（南）・かわらけ溜り２（北）（西か）



▲B　かわらけ溜り１（東から）

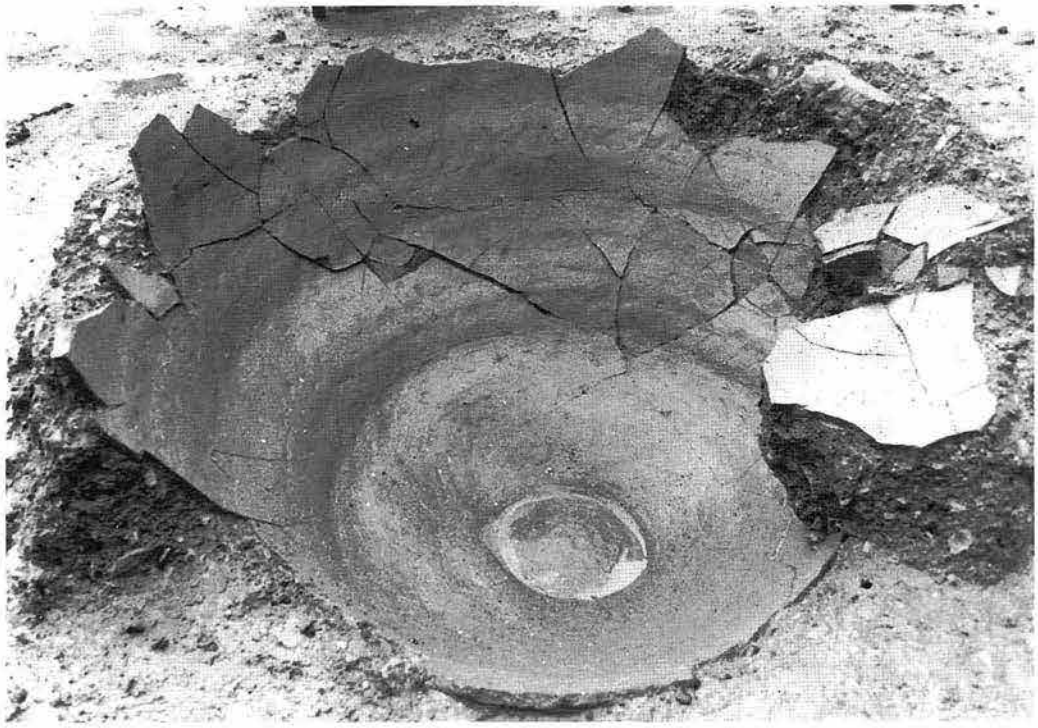
PL. 4



▲A　かわらけ溜り２（南から）

▲B　G－17グリッドに検出された庭石と礎石（西から）

PL. 5



◀A　F－16グリッドに検出された据甕（西から）

▲B　土壙３（東から）

▼C　同左　覆土土層（東から）

PL. 6

◀A 道1・溝1・溝2・溝4近景（東から）

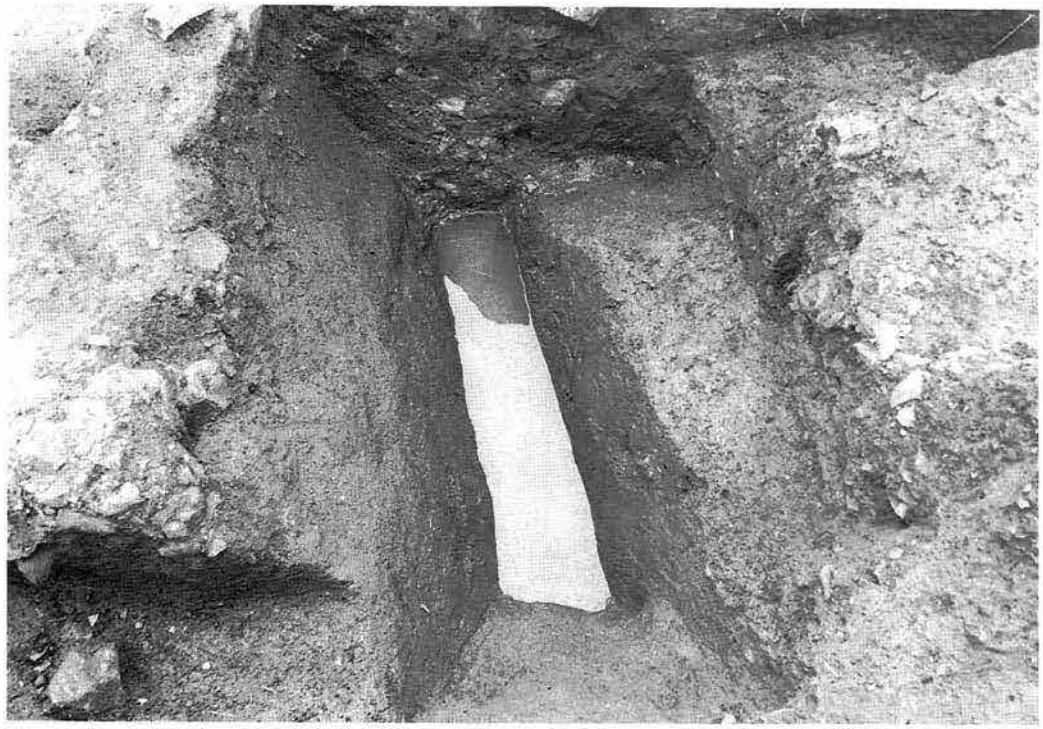
▶B 同上（西から）

PL. 7

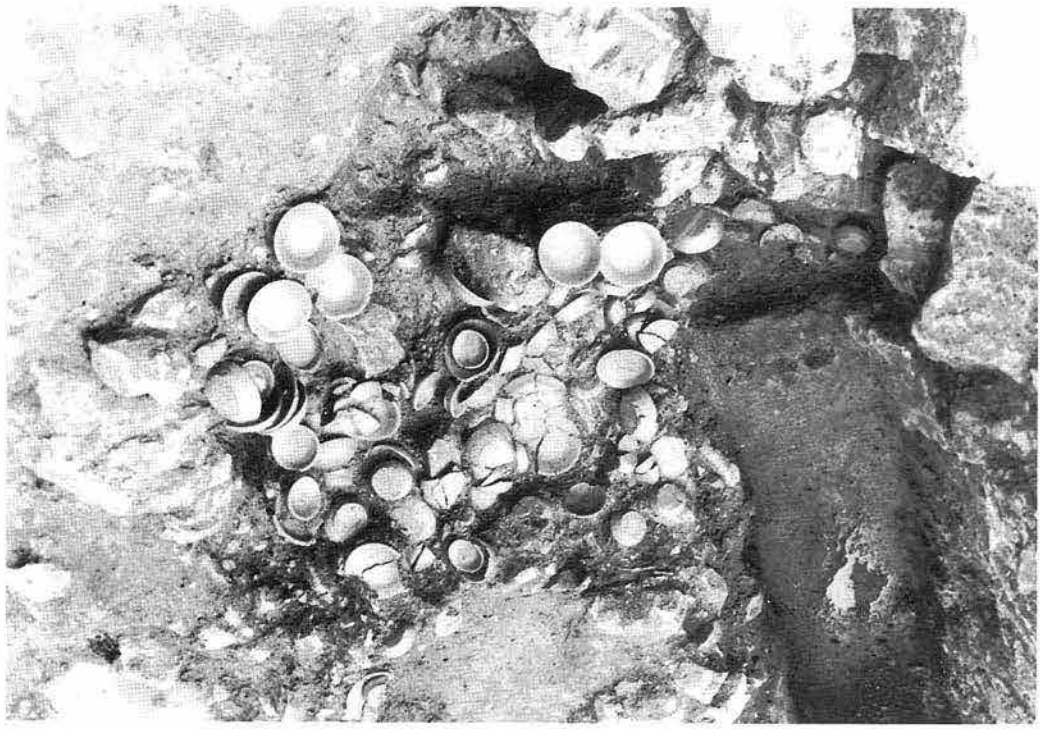
◀A 溝2（南から）

◀B 溝2覆土セクション（西から）

PL. 8



▲A　溝 4（北から）



▲B　溝 4 上層かわらけ溜り（南から）

PL. 9

▲A　溝４上層かわらけ溜り下出土　瀬戸仏華瓶（南西から）

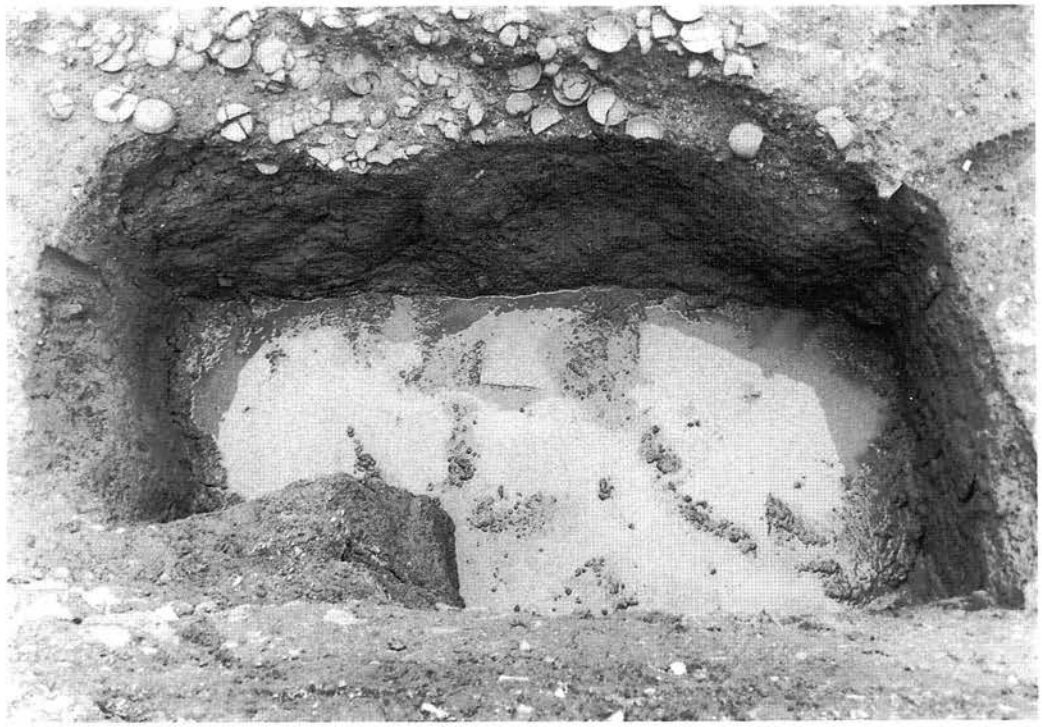
▲B　溝４下層かわらけ溜り（南西から）

PL.10

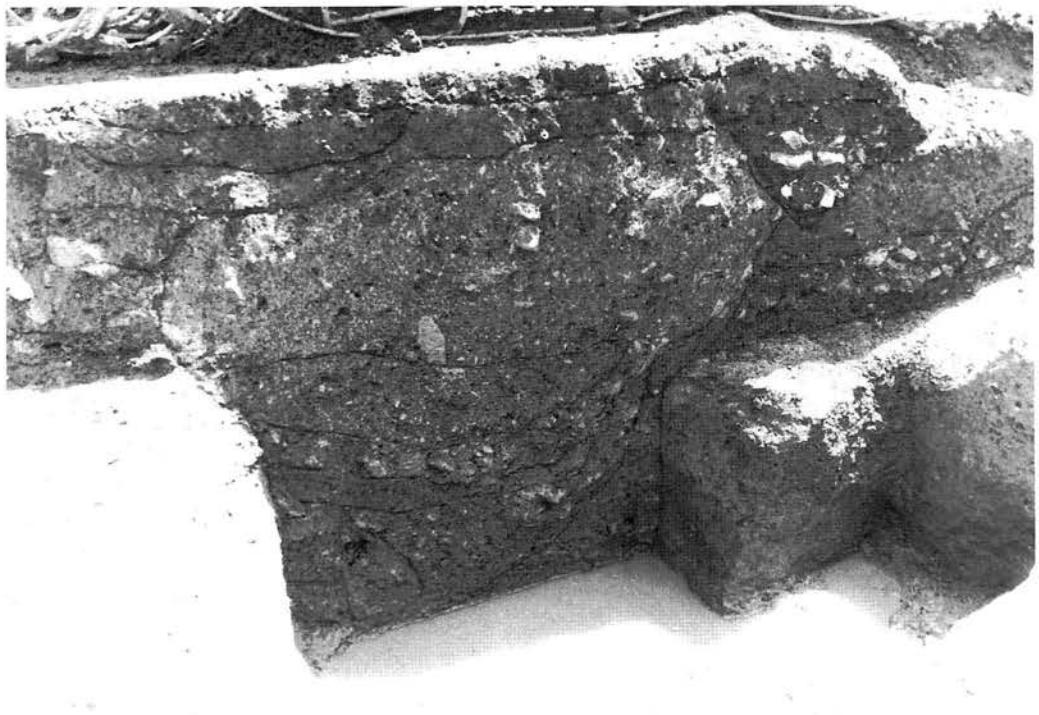
▲A　井戸 1（西から）

▲B　井戸 4（南から）

PL.11

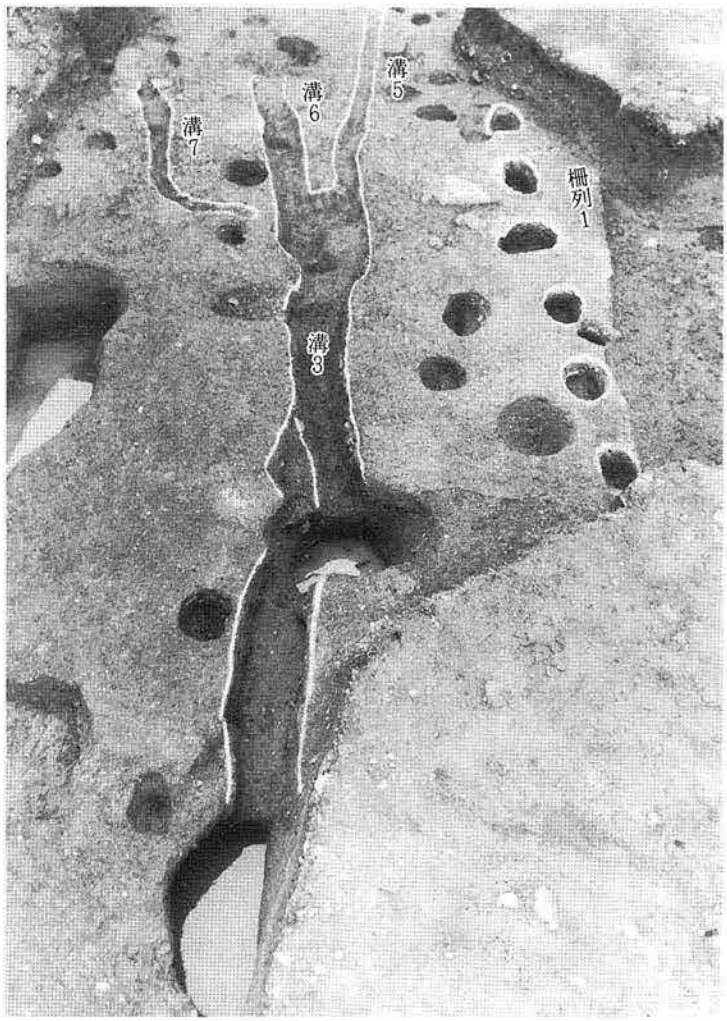


▲A　井戸２・３（東から　南井戸２・北井戸３）

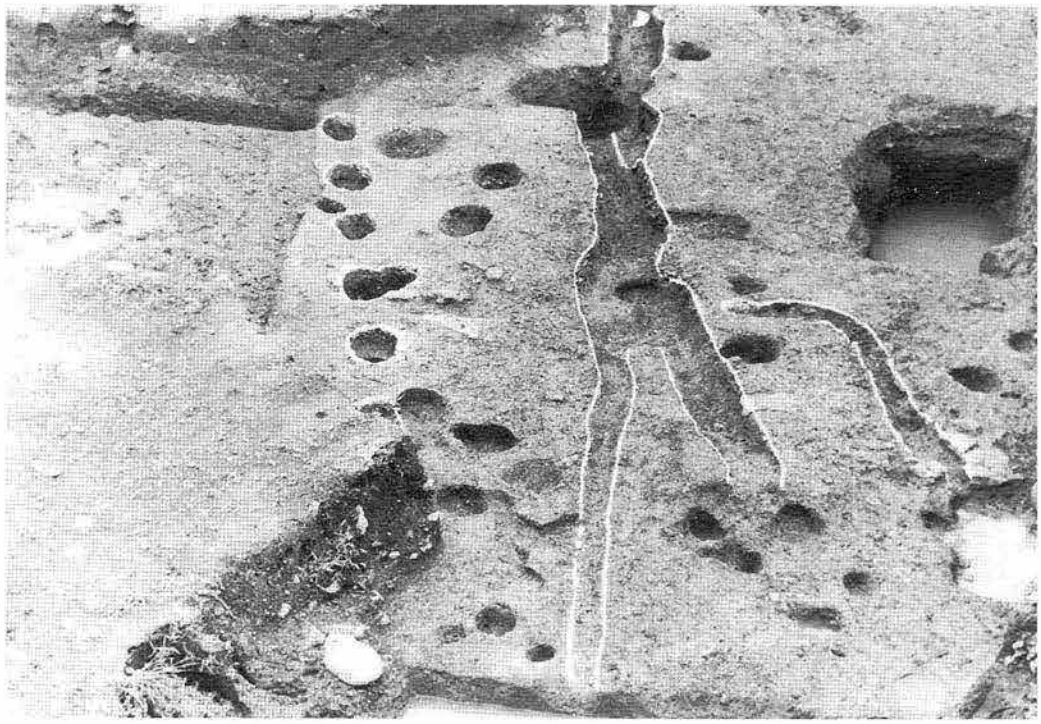


▲B　井戸３覆土セクション（北西から）

PL.12

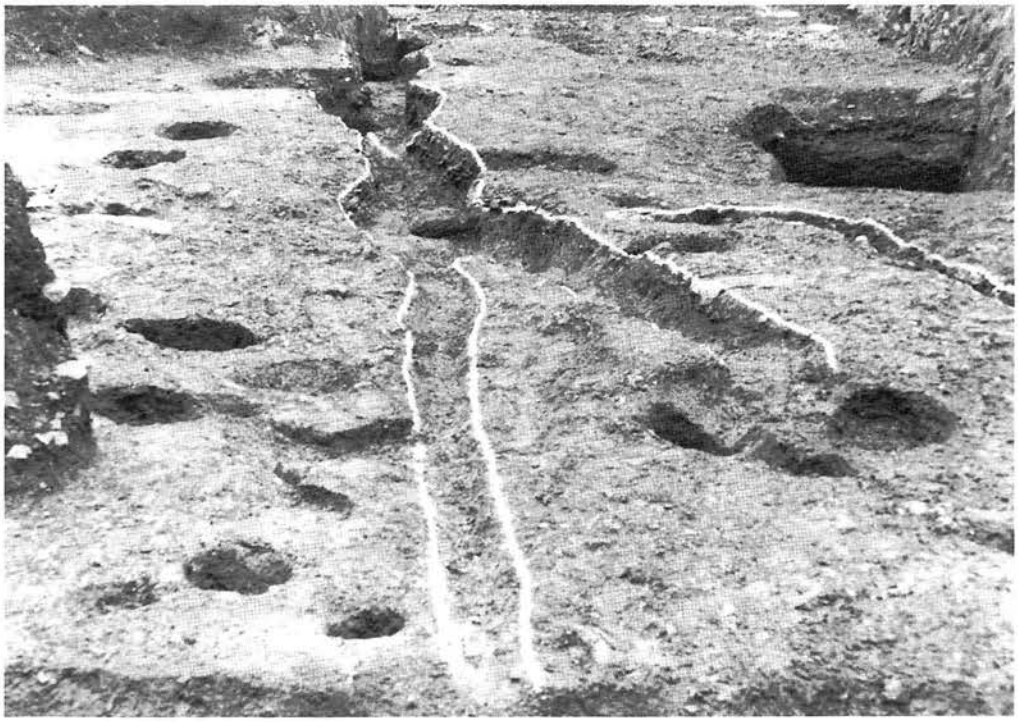


◀A 溝3・5・6・7・柵列（北から）

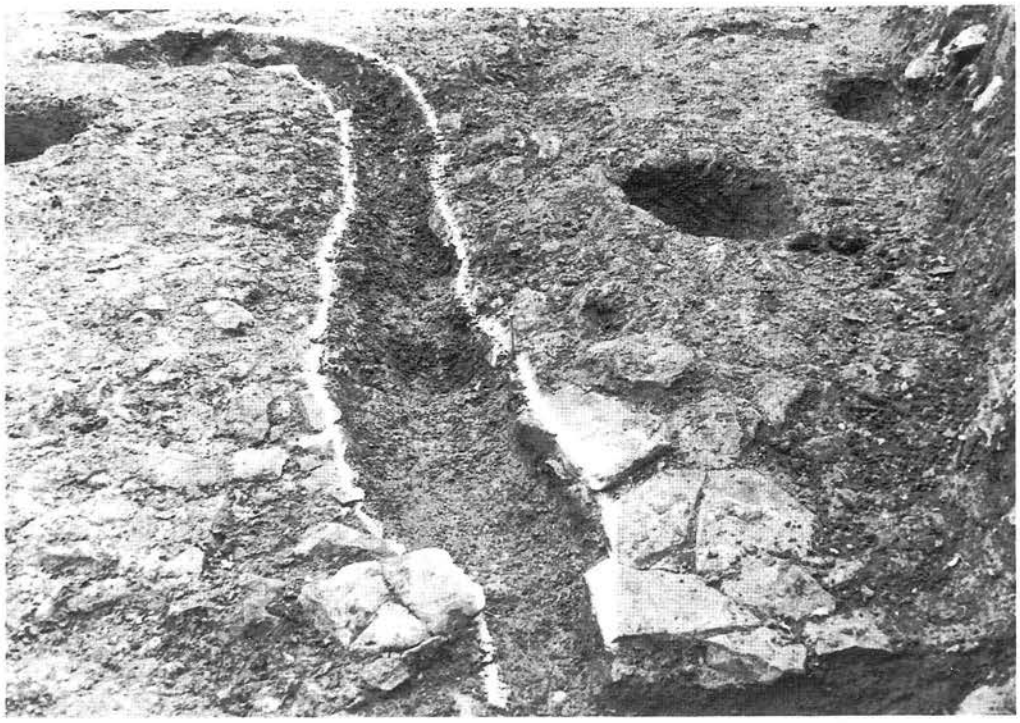


◀B 同上（南から）

PL.13



▲A　溝3・5・6・7近景（南から）



▲B　溝7近景（南から）

PL.14

▲A　溝8（西から）

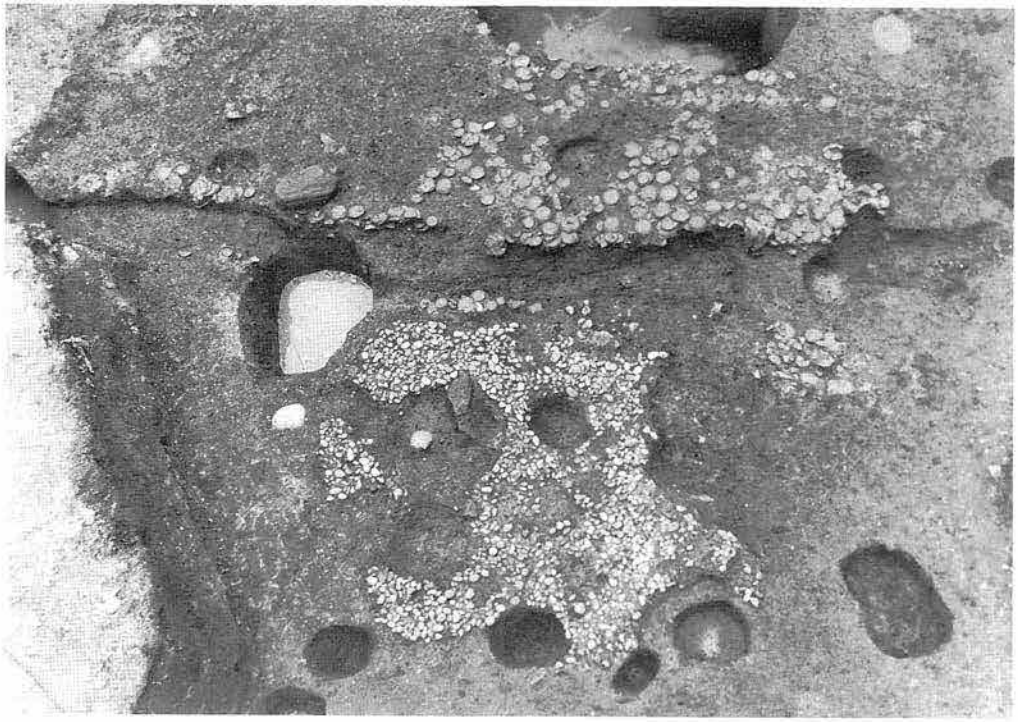
▲B　同上近景（南から）

PL.15

▲A　溝13（西から）

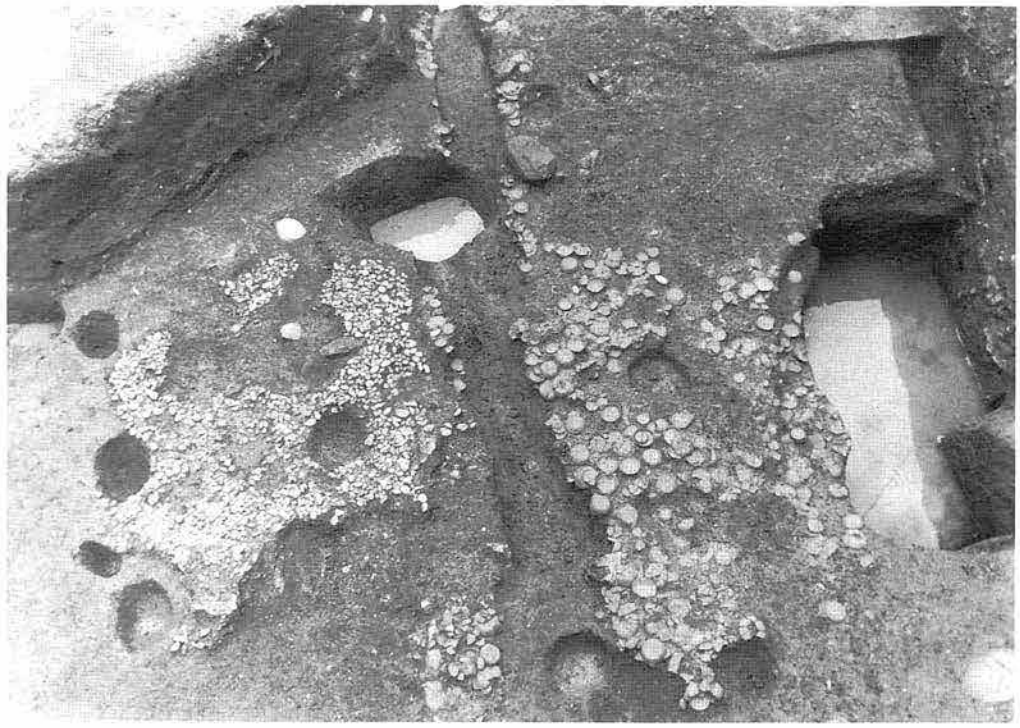
▲B　D～E・15～17グリッド2　B面（西から）

▲A　玉砂利遺構 7　かわらけ粉砕地業（南から）



▲B　かわらけ溜り 3 ・玉砂利遺構 8 （西から）

PL.17



▲A　かわらけ溜り3　玉砂利遺構8（南から）

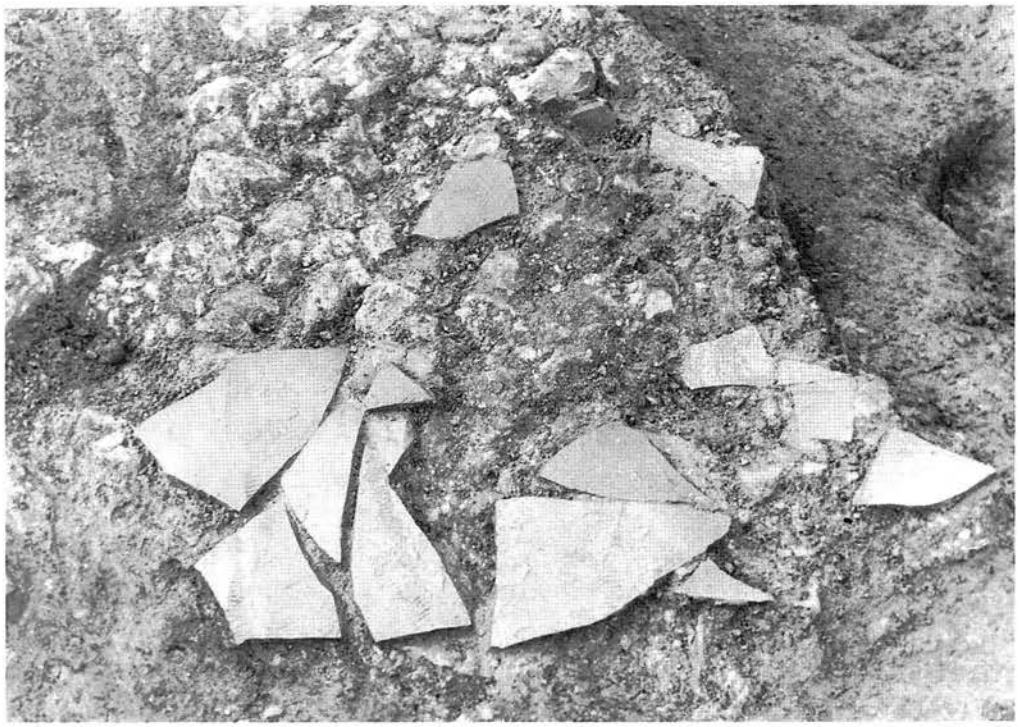
▲B　2面　全景（南から）

PL.18

▲A　調査地点より北方向を望む

▲B　3面覆土より検出された常滑窯の壷（東から）

PL.19

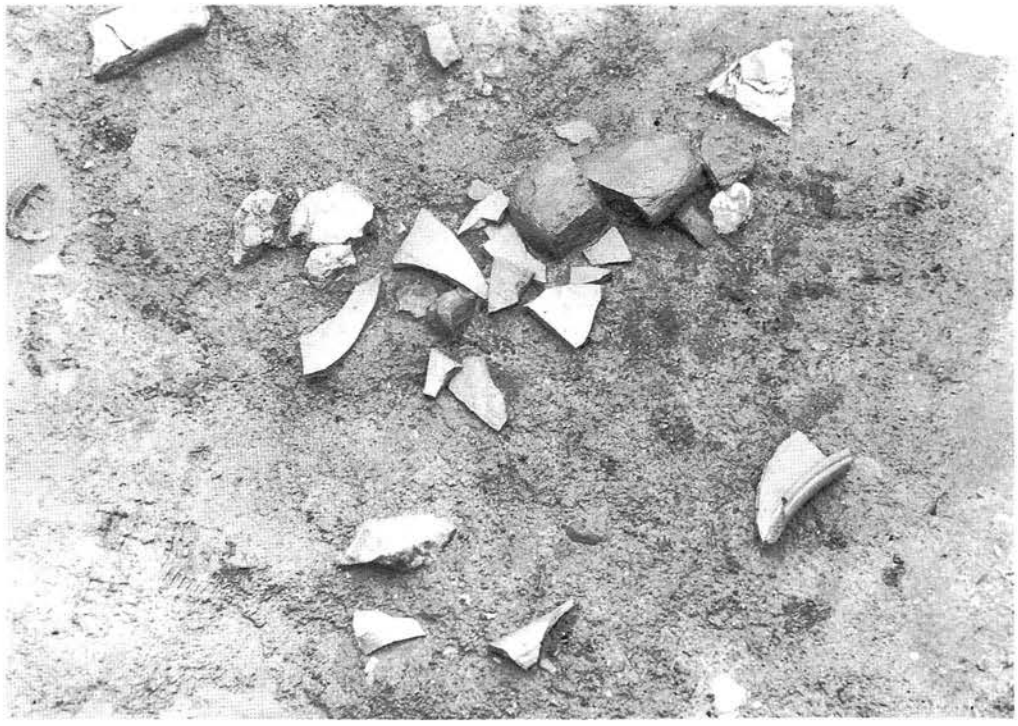


▲A　3面覆土より検出された渥美の甕（渥美溜2）南から

▲B　3面覆土より検出された刀子（東から）

PL.20

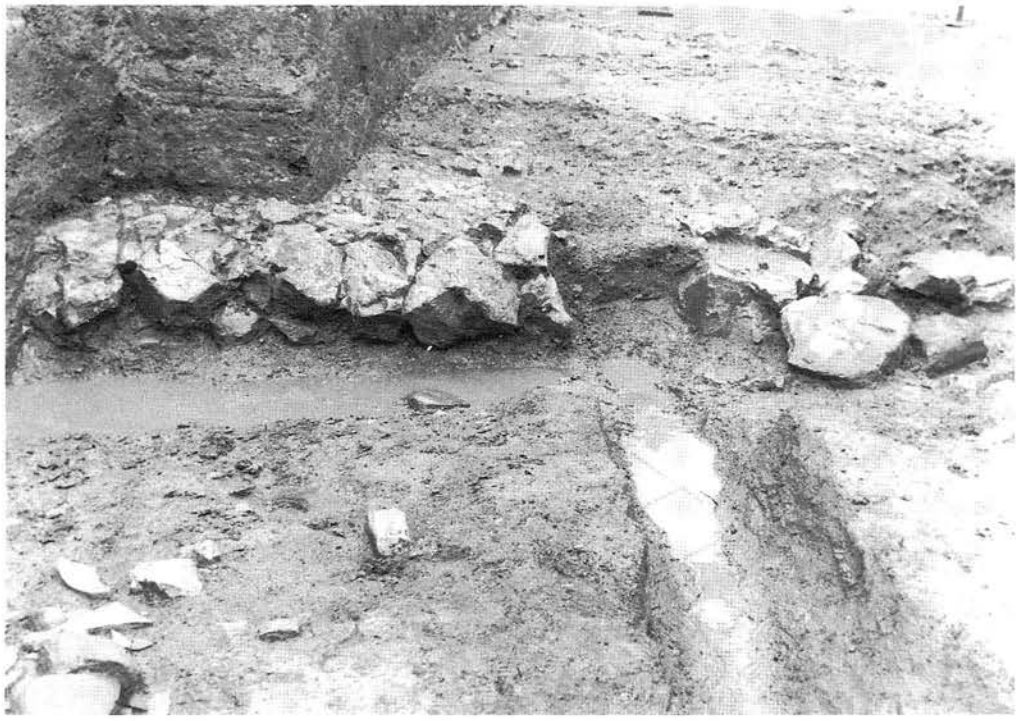
◀A　調査区北半遺構検出状況



◀B　3面　渥美溜り1（南西から）

PL.21

◀A　3面溝9（南から）

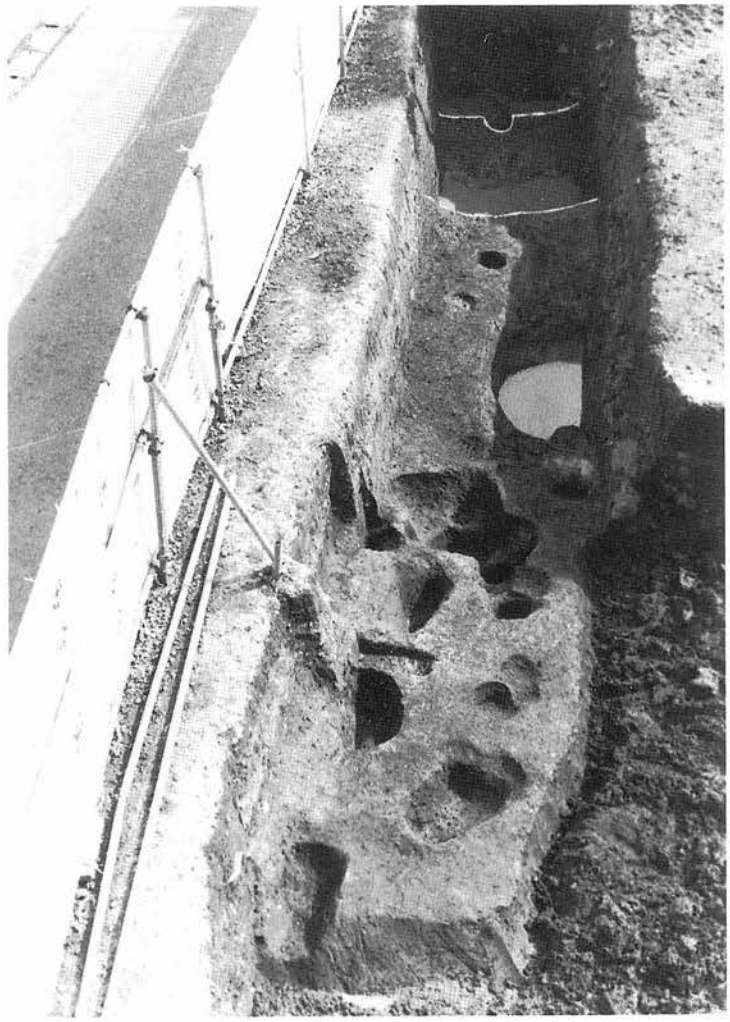


▲B　3面　道2（北から）

PL.22

◀A　3面　道2（西から）

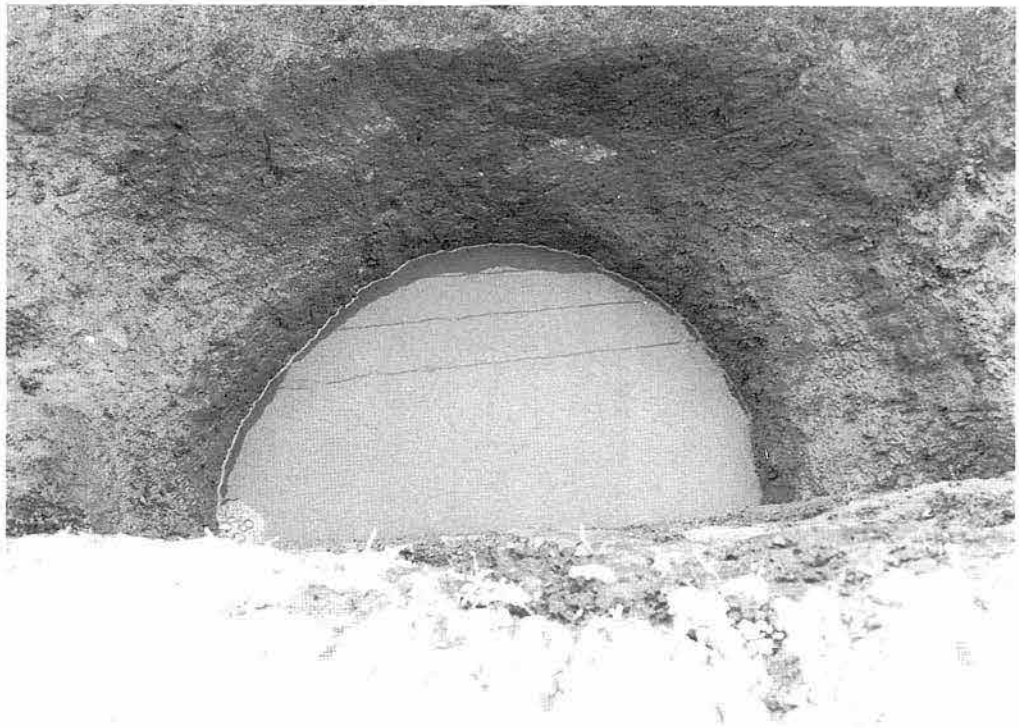
▶B　3面　溝12（西から）



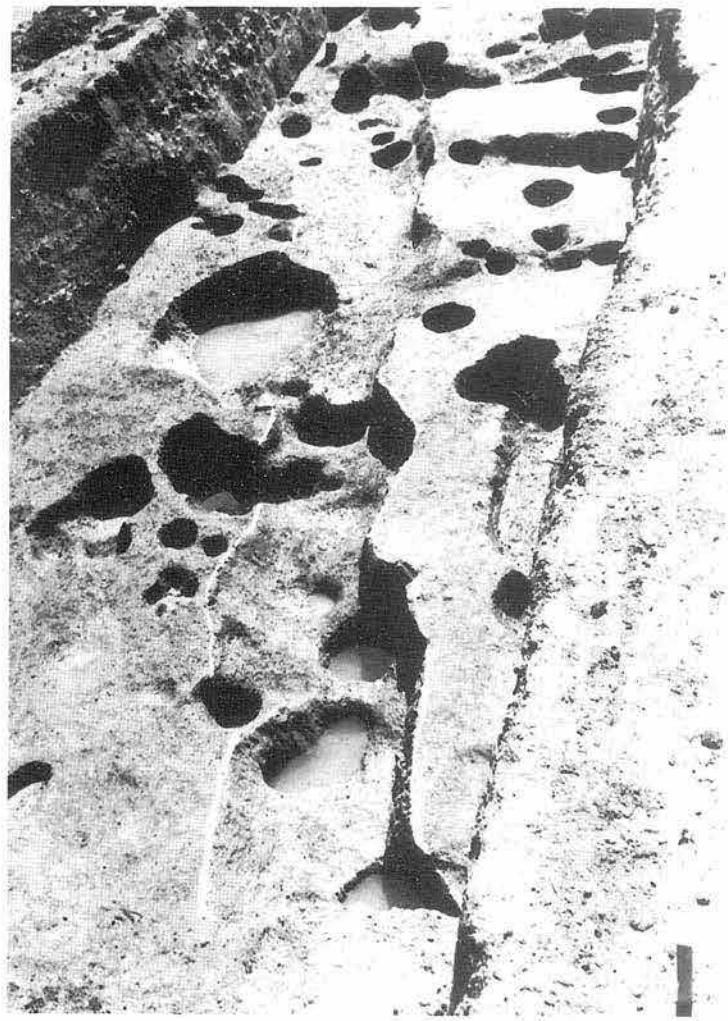
◀A 3面 Ⅱ区全景（西から）

◀A 3面 溝14（北から）

PL.24



◀A　3面　井戸6（南から）



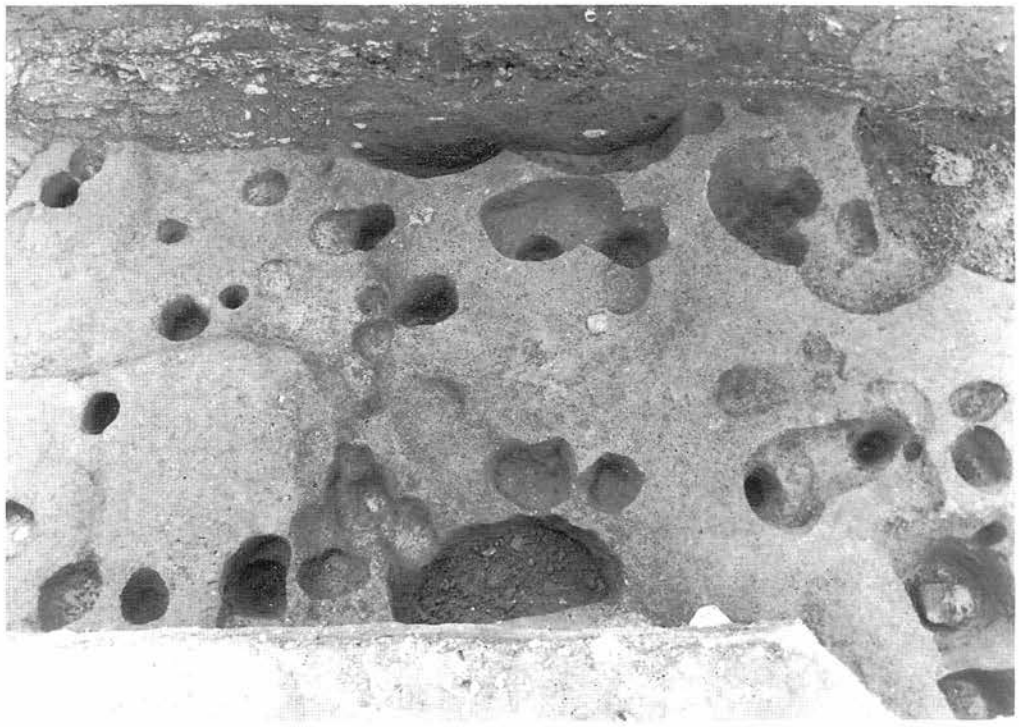
◀B　3面　溝11（北西より）

PL.25

▲A　3面・F～I－8～10グリッド全景（西から）

▲B　3面・F～I－9～11グリッド全景（西から）

PL.26

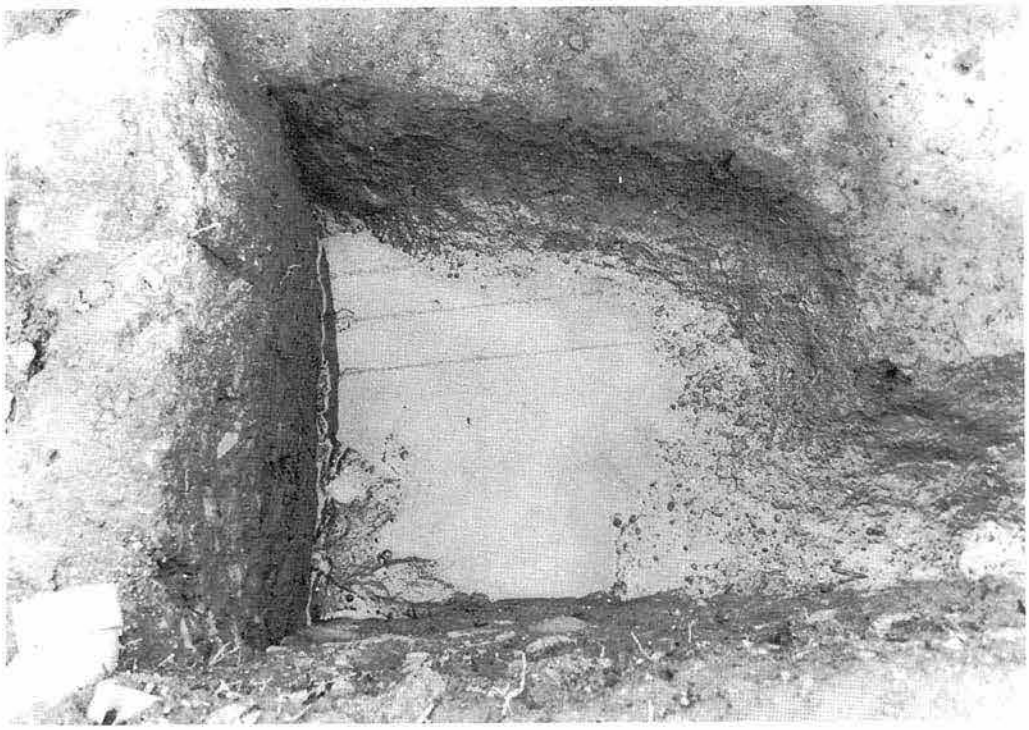


◀A　3面　F～I11～16グリッド全景（西から）

◀B　3面　D～E15～17グリッド全景

PL.27

▲A　3面　D－1～2グリッド全景（南から）



▲B　同上に検出された土壙（南から）

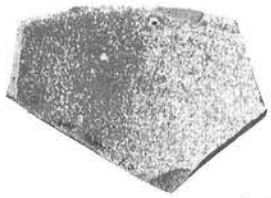
5－3

5－5

5－8

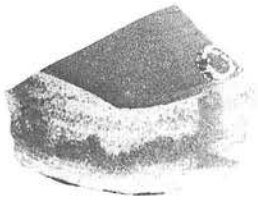
5－9

窪地1



5－10

5－12



5－11

5－19

5－21

5－22

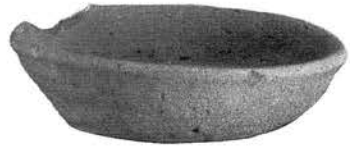
5－23

7－2

7－4

7－5

8－2



8－10

8－12

8－15

8－19

8－22

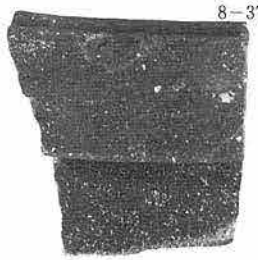
8－23

溝1

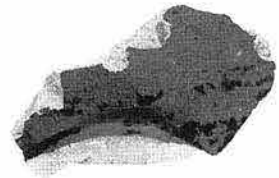
PL.28

窪地1・3　溝1（1）出土遺物

8－36


8－37

8－42


8－40

8－44

8－41

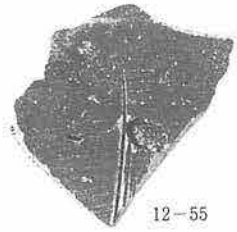
溝1

11－2

11－6

12－53

12－54


12－55

溝2

15－32

15－47

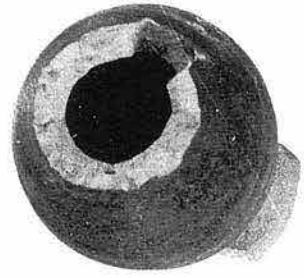
15－49

15－62

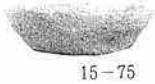
15－64

15－68

15－71



15－74


15－75

15－76

15－93

15－94

15－100

15－112

溝4上層

15－118

PL.29

溝1（2）・2・4（1）出土遺物

16－2

16－8

溝４中層

16－21

16－24

16－25

17－2

17－5

17－38

17－41

溝４下層

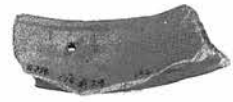
17－44

17－93

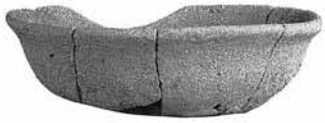
溝４最下層

18－99

18－115



19－1



21－2

21－3

21－17

21－13

21－15

土壙６

21－19

24－1

24－2

24－9

24－5

24－6

24－7

井戸３

PL.30

溝４（２） 井戸３ 出土遺物

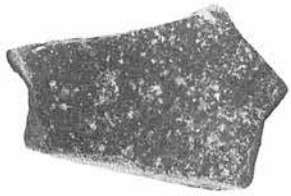
24－11

24－12

24－13

井戸 4

25－16



25－24

25－28

表土層

26－2

26－4

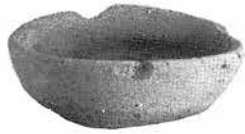
26－5

26－6

26－7

26－13

26－19



26－29

26－32

26－41

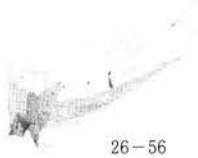
26－46

26－47

26－50

26－52

26－53



26－56

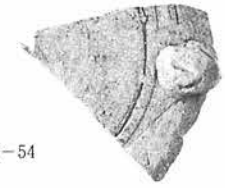
26－63

1 面

26－65

26－66

26－68

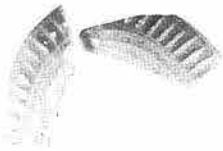


26－54

PL.31

井戸 4　表土層　1 面　出土遺物

28－23



28－24

28－25

玉砂利遺構１

28－36

玉砂利遺構３

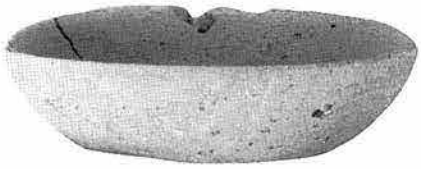
30－1

30－3

30－7

30－19

かわらけ溜り１



31－2

31－3

31－4

31－7

かわらけ溜り２

35－1

35－2

35－4

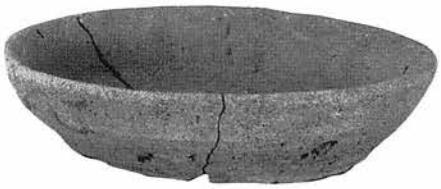
土壙３

35－5

土壙５

35－7

PL.32　玉砂利遺構１・３　かわらけ溜り１・２　土壙３・７出土遺物



38－4

38－3

38－5

井戸１

38－7

38－9

38－10

38－15

38－20

井戸２

38－22

38－24

38－26

39－12

39－22

39－81

２Ａ面

39－117

39－119

39－120

39－121

40－1

40－2

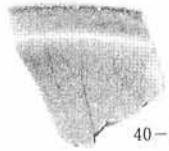
40－3

40－4

40－5

40－12

40－13



40－14

40－16

40－17

40－21

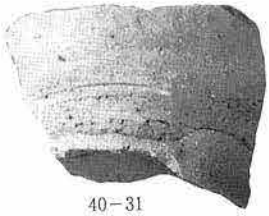
40－22

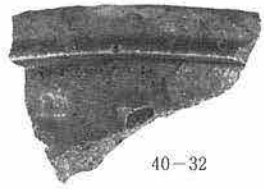
40－25

40－26

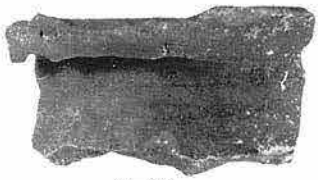
PL.33

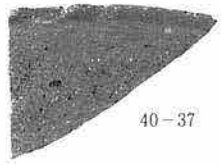
井戸１・２　２Ａ面（１）出土遺物

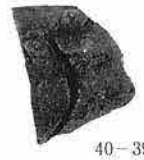

40－31


40－32

40－34


40－35


40－37

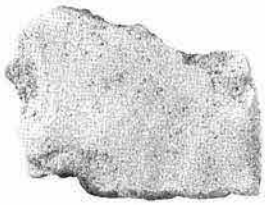

40－39

41－1

41－2

41－3

41－5


41－6

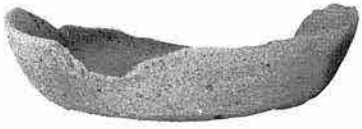
41－14

41－16

41－17

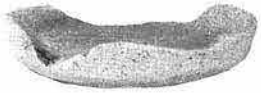
41－18

2 A面


43－4

43－6

43－8


43－11

43－13

43－15

43－21

43－19

玉砂利遺構 5

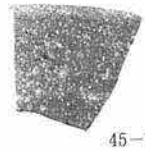
PL.34

2 A面（2） 玉砂利遺構 5 出土遺物

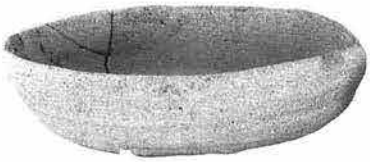
45－3

45－5

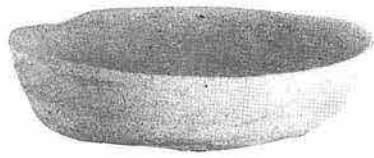
45－7


45－15

溝３

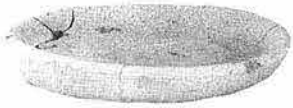

46－1

溝５


46－3

46－5

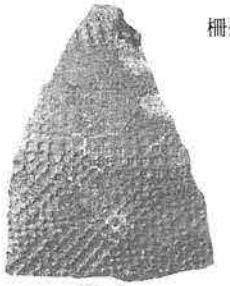
46－12

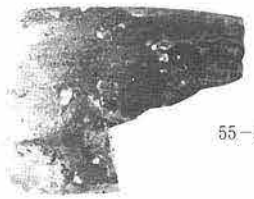

46－19

46－24

46－27

柵列２

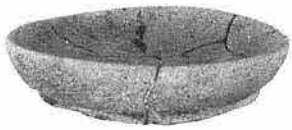

48－6

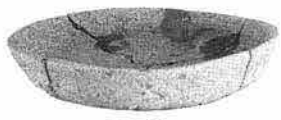

55－9

57－6

土壙９

玉砂利遺構６


57－20

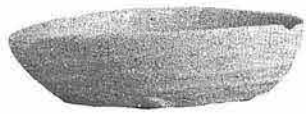

57－23

57－26

玉砂利遺構７

57－39

60－12



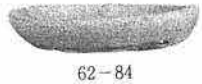
60－50

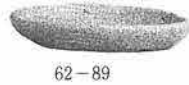
61－49

62－20

62－36

62－80

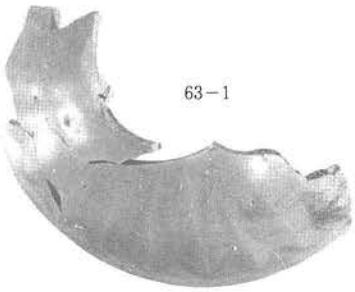

62－84

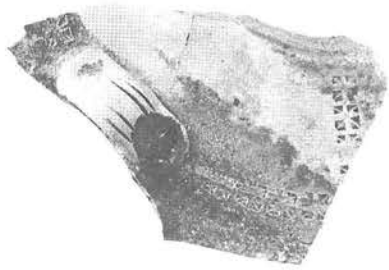

62－89

62－140

かわらけ溜り３

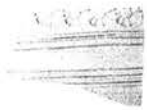
PL.35 溝３・５　棚列２　土壙９　玉砂利遺構６・７　かわらけ溜り３出土遺物


63－1


63－5

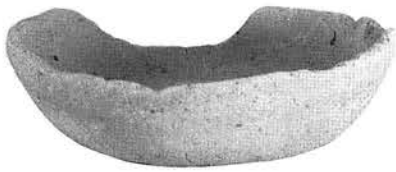
63－3

63－4


63－6

63－7

かわらけ溜り３


64－15

64－27

64－30

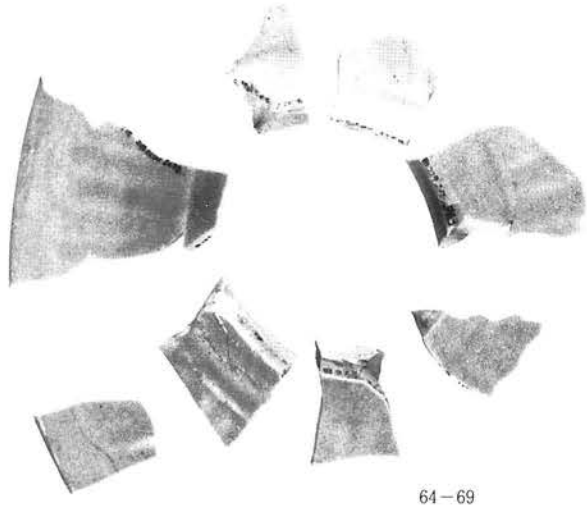
64－53

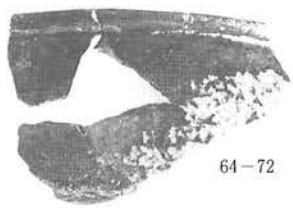
64－59

64－60

64－64

64－65

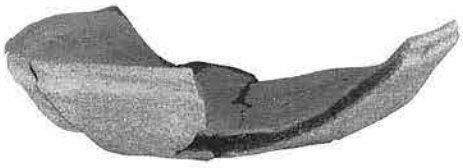

64－69


64－72

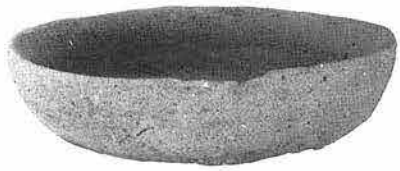
２ＢＣ面

PL.36

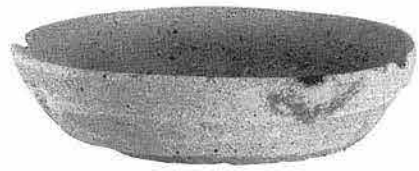
かわらけ溜り３　２Ｂ・Ｃ面出土遺物



82－1



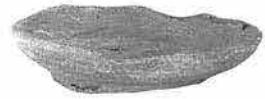
82－8



82－13

82－24

82－44



82－45

82－53

82－59

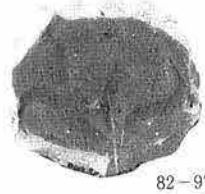
82－67

82－76

82－87

82－90

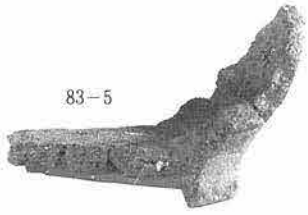
82－93



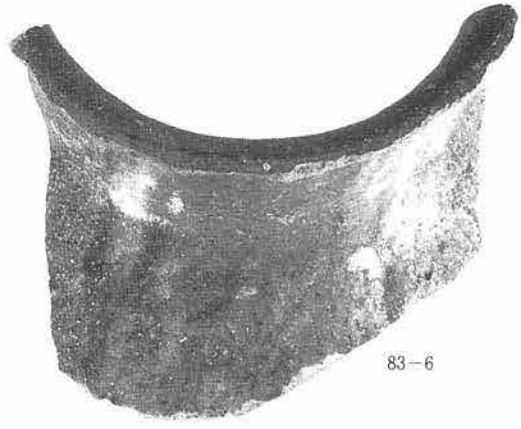
82－97

82－100

83－1



83－5



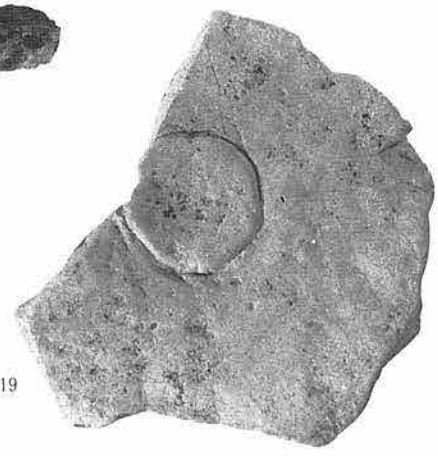
83－6

83－8

83－14

83－18

3面



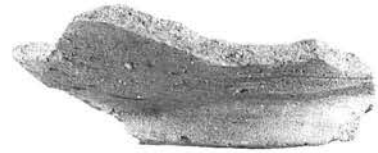
83－19

PL.38

3面出土遺物

65－3

65－4


65－16

65－19

65－20

65－24

65－27

66－7

66－10

2ＢＣ面

68－1

68－2

68－5

68－6

68－8

68－9

68－14

溝11

道2

72－2

74－2

79－3

溝14上層

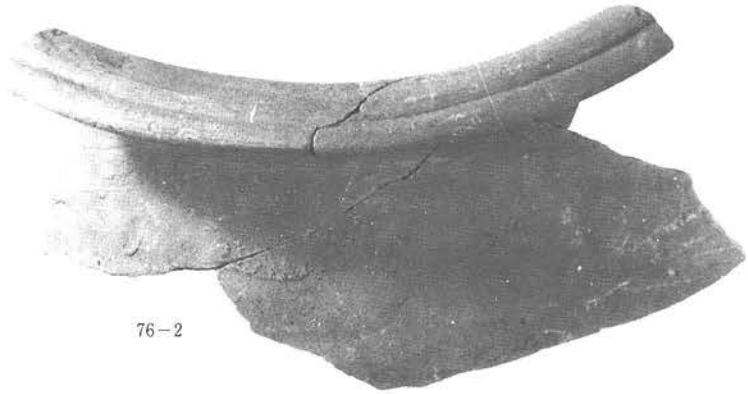
井戸6

72－6

溝12下層

72－12

72－14


76－2

PL.37

2Ｂ・Ｃ面（2）溝11・12 道2 井戸6 渥美溜り1出土遺物

85－5

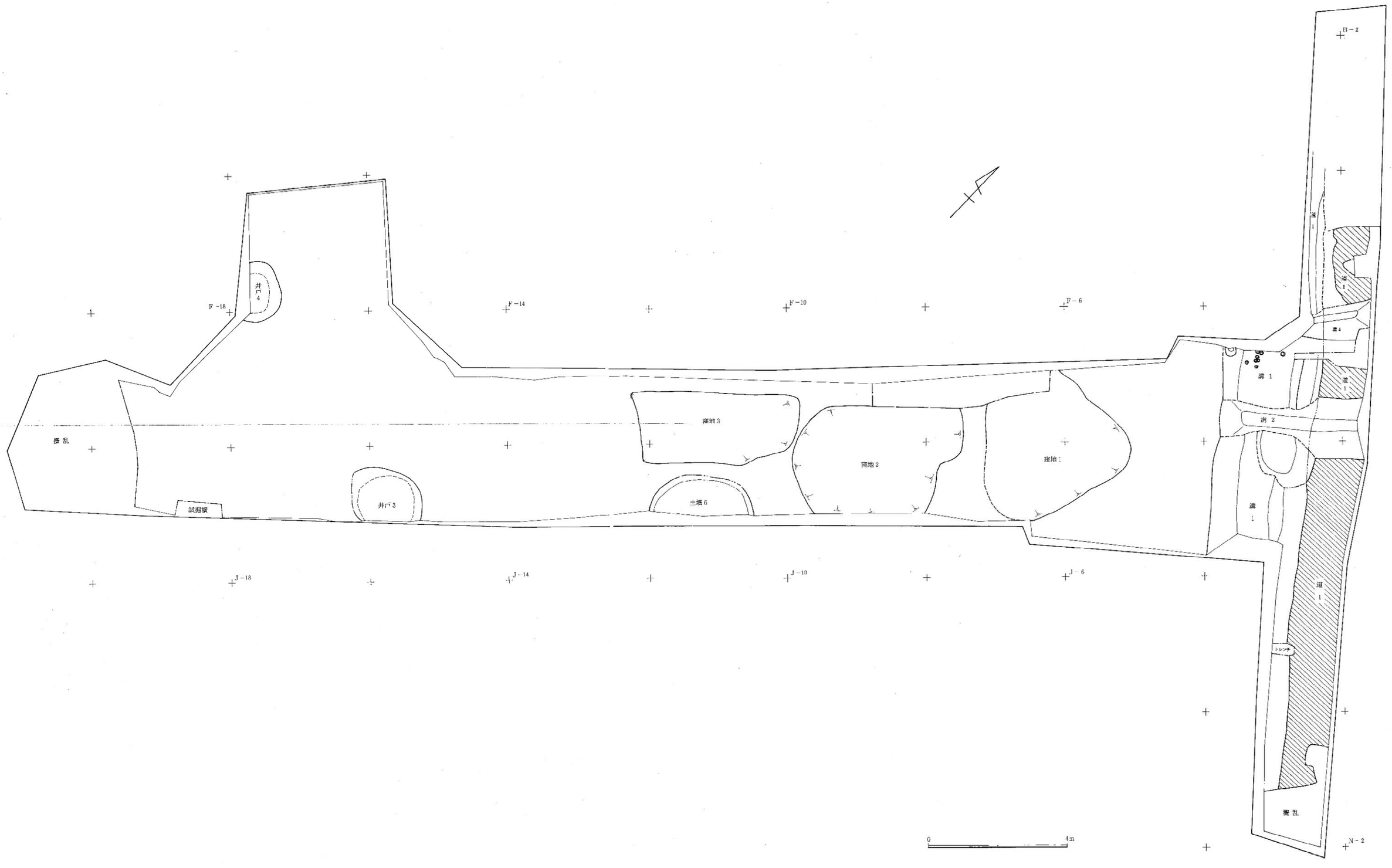
85－6

85－8

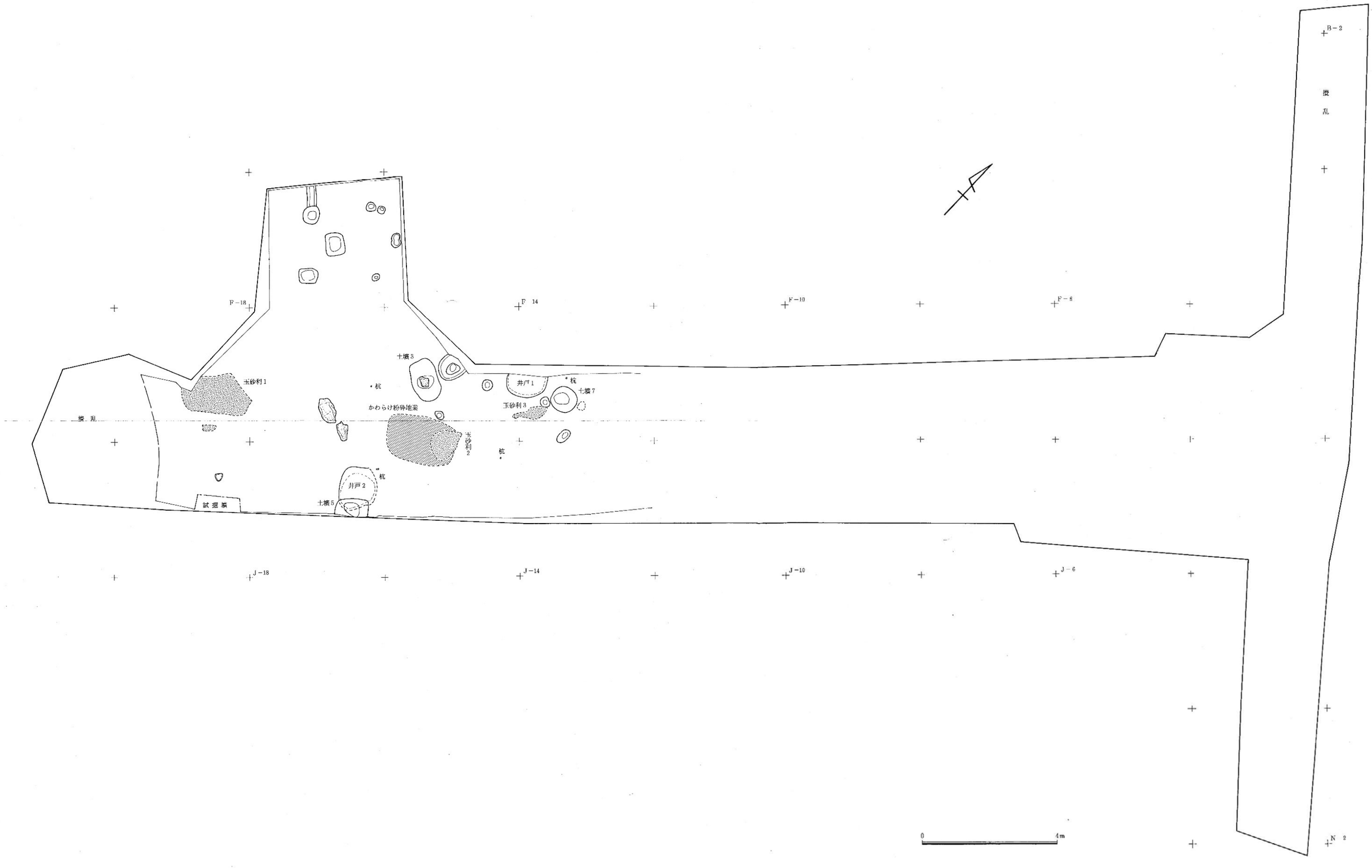
85－7

85－9

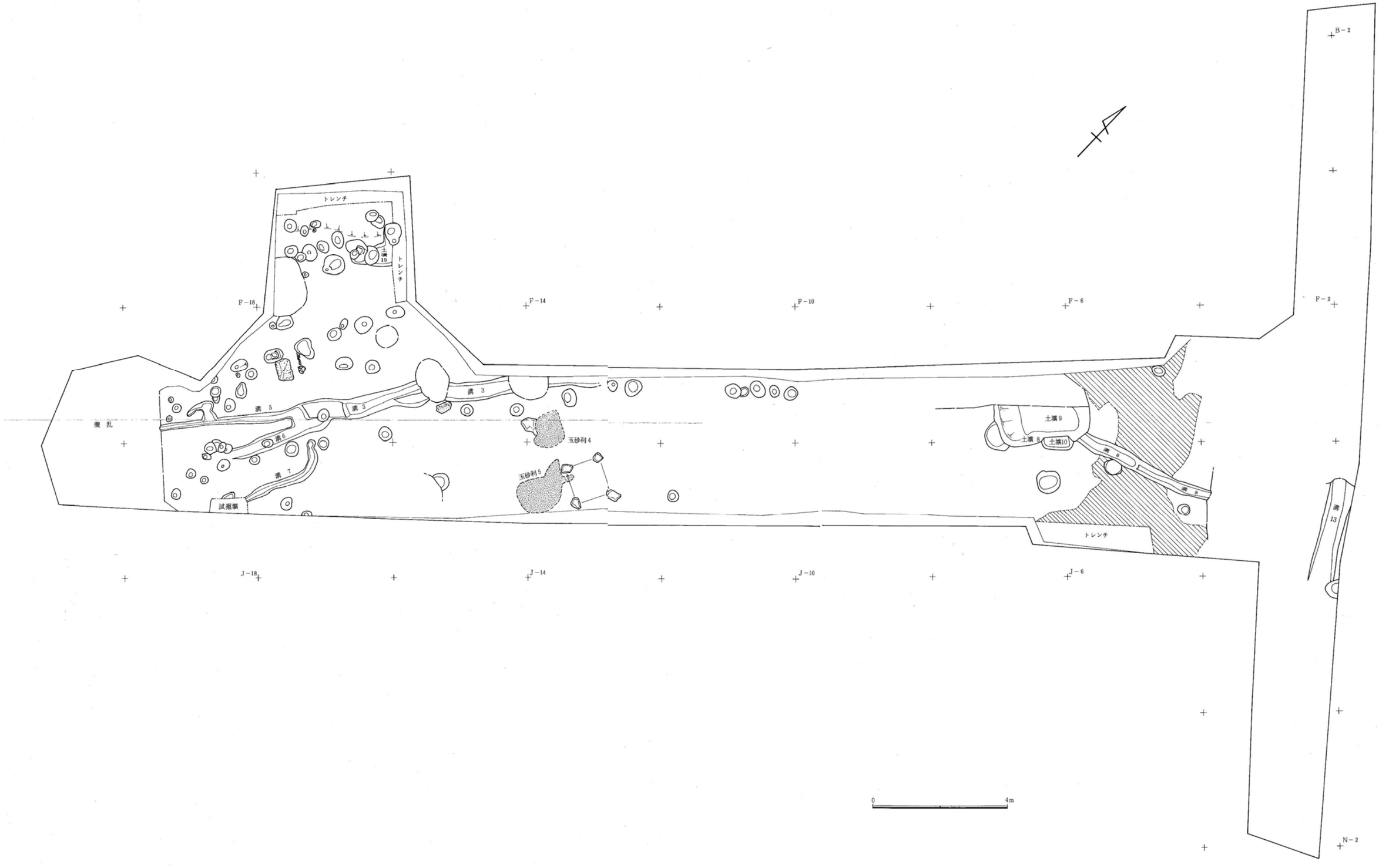
中世層出土の古代遺物


B-2
F-18
F-14
F-10
F-6
井戸4
撹乱
試掘壙
井戸3
窪地3
土壙6
窪地2
窪地1
溝1
溝2
溝4
道1
トレンチ
撹乱
J-18
J-14
J-10
J-6
N-2
0
4m

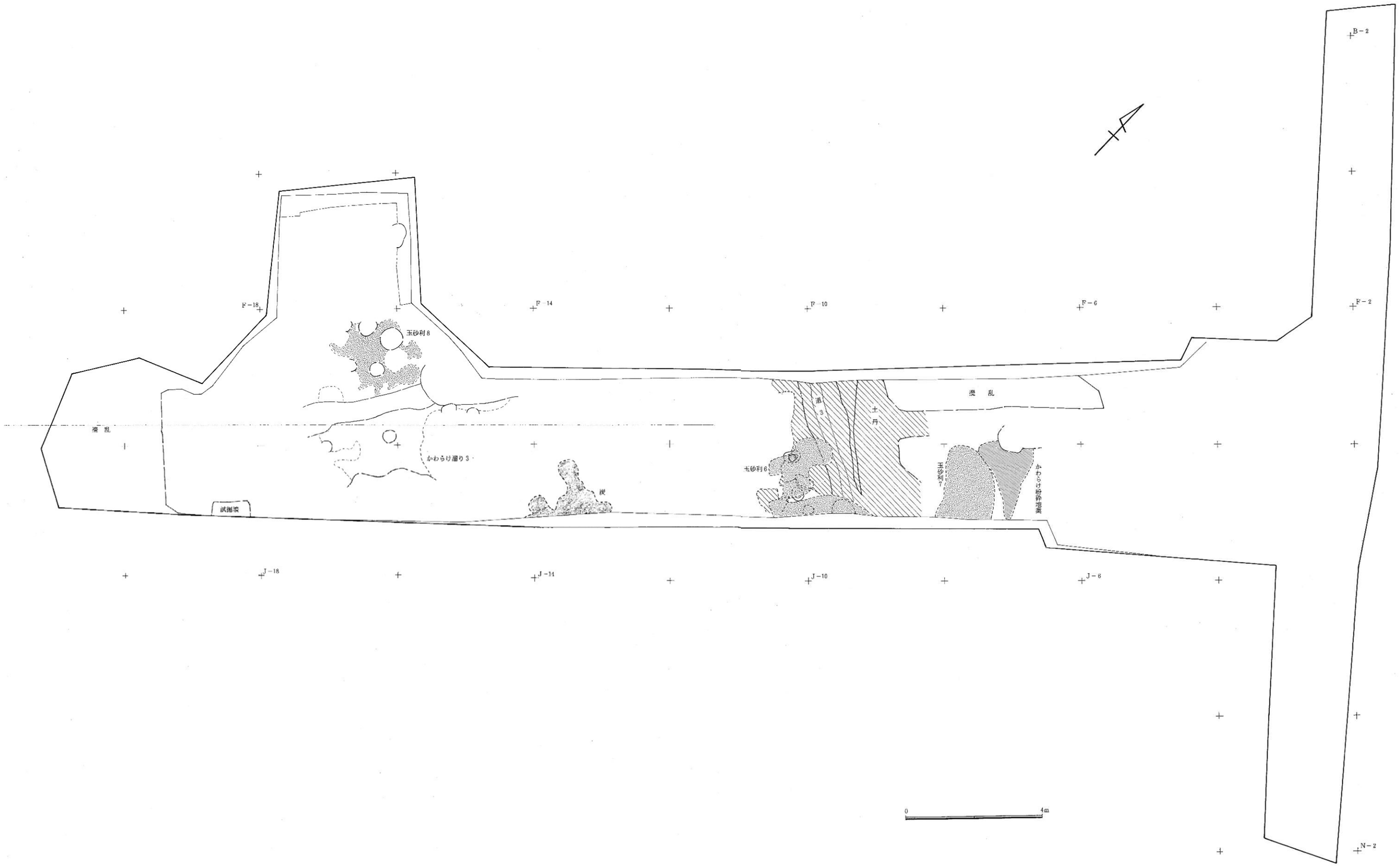
附図1 中世1面全体図



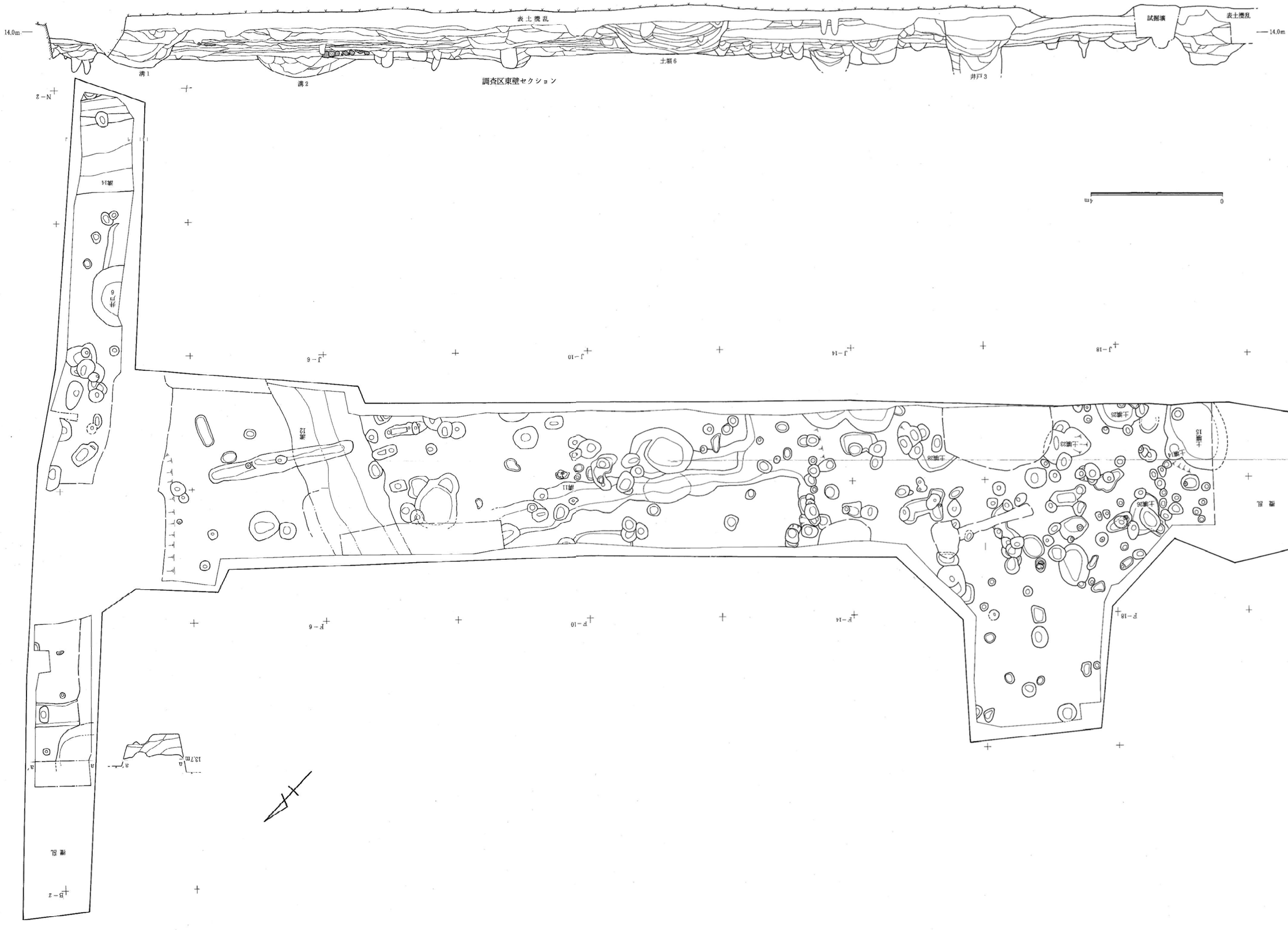
附図2　中世２Ａ面全体図



附図3　中世２Ｂ面全体図



附図4　中世２Ｃ面全体図


14.0m
表土撹乱
溝1
溝2
土壙6
井戸3
試掘壙
表土撹乱
14.0m
調査区東壁セクション
N−2
J−6
J−10
J−14
J−18
溝14
井6
溝12
溝11
土壙28
土壙25
土壙23
土壙26
土壙14
溝15
撹乱
F−6
F−10
F−14
F−18
13.7m
a
a'
撹乱
B−2
0
4m

材木座町屋遺跡（No.261）

材木座一丁目890番７地点

例　言

1．本報文は、材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）内、鎌倉市材木座一丁目890番７地点に於ける個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成10年９月28日から10月27日まで実施した。調査面積は約40㎡。

3．本報文に関わる整理作業は、汐見一夫・山上玉恵・渡邊美佐子が分担して行った。執筆は、汐見・渡邊が行い稿末にその名を銘記し、これを汐見が編集した。又、本報に使用した写真は、汐見が撮影した。

4．出土遺物の内、舶載陶磁器は手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）・瀬戸窯製品は佐野元氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）に御教示を賜った。

5．現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。

市内各遺跡発掘調査団　㈱シルバー人材センター
東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所

6．本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

7．調査・整理体制は以下の通り。

調査担当　小林康幸
調　査　員　熊谷洋一　汐見一夫　山上玉恵
調査補助員　田村葉子　八杉陽子　渡邊美佐子
作　業　員　町田義一　渡辺輝男　山崎一男
　　柴崎英輔

目　　次

第１章　環境と立地 ……338
第２章　調査の概要 ……340
第３章　検出した遺構 ……342
第４章　出土した遺物 ……344
第５章　調査成果 ……346

挿図・表目次

図１　遺跡地の範囲と調査地点 ……338
図２　調査地点の位置と周辺の地形 ……339
図３　国土座標上の位置 ……340
図４　堆積土層図 ……341
図５　１面全測図 ……342
図６　２面全測図 ……343
図７　３面全測図 ……343
図８　出土遺物（１）……344
図９　出土遺物（２）……345
図10　常滑窯甕押印文拓影 ……345

表１　常滑窯甕押印文拓影一覧 ……345
表２　遺物計測表 ……347
表３　出土遺物破片数表 ……347

写真図版目次

図版１　１．Ⅰ区１面全景（西から）……351
２．Ⅰ区２面全景（西から）……351
３．Ⅱ区１面全景（東から）……351
４．Ⅱ区２面全景（西から）……351
図版２　１．Ⅰ区３面全景（西から）……352
２．同上礎板（東から）……352
３．Ⅱ区３面全景（西から）……352
４．同上建物 ……352
図版３　１．Ⅰ区２面曲物底板出土状況 ……353
２．Ⅱ区３面かわらけ他出土状況 …353
３．Ⅱ区３面礎板出土状況 ……353
図版４　１．Ⅰ区最終状況（東から）……354
２．Ⅰ区北壁堆積土層（東から）……354
３．Ⅱ区最終状況（西から）……354
４．Ⅱ区北壁堆積土層（西から）……354

第１章　環境と立地

材木座町屋遺跡は、滑川より西、現JR横須賀線の南側一帯の海岸線に沿った広い地域が呼称されている。北側で米町遺跡、西側では下馬周辺遺跡・由比ヶ浜中世集団墓地遺跡等の中世鎌倉期に庶民層が生活・活動した地域に囲まれ、東側の丘陵裾には、長勝寺跡・光明寺旧境内遺跡をはじめとする寺院址群が展開している。又、遺跡範囲内に史跡元八幡と新居のえんま堂跡を内包し、南東沖には中世鎌倉の貿易港である和賀江島を望む。

材木座の名は、中世に材木を扱う組合である座が置かれた所から江戸時代には地名となっているが、それ以前は名越の一部であった時期もあり明らかではない。米町遺跡との境付近を中心とした一帯には、『吾妻鏡』建長３年（1251）12月３日条や文永２年（1265）３月５日条にみられる、定められた商業地域が展開し、和賀江島や元八幡の占地から中世鎌倉の中でも早くから人々が往来した地域であろう。

図１　材木座町屋遺跡の範囲と調査地点

調査地点は遺跡範囲内の北寄り、史跡元八幡の南東至近距離にある。現況の海抜は５m前後を測る。名越に源を発する逆川は北側を西下し、途中一本橋北で向きを変えて南下し本地点の西120m程で滑川に合流する。付近等高線は遺跡範囲東側丘陵の形状に沿って、滑川へ向って舌状に緩やかに低くなる。

現況での遺跡範囲内では主に個人住宅が密集していることもあり、他の市内遺跡に比べ調査例は非常に少なく、調査成果に基づいた中世期の生活様相や基盤層から観た当時の地形等は、不明な点が多いと言わざるを得ない。本地点周辺では、発掘調査２ヶ所（図１・２の地点１・２）が、又、近年知り得る限りで確認調査４ヶ所（図１・２の地点５～８）が行われている。

地点１・２は共に幅２m程と遺構検出には限られた範囲ながら、市内遺跡の浜地一帯で普遍的に確認される方形竪穴建築址や、土壙・井戸他密なる遺構群が砂層上に発見され、かわらけや舶載陶磁器類・国内産陶土器・獣骨・貝類等多くの遺物が出土し、遺物から観た年代は13世紀代～15世紀初頭とされている[註1]・[註2]。地点５は５㎡弱の狭小な範囲ではあったが、現地表下60cmのやや土壌化した砂質土遺構面から掘り込まれた方形横桟支柱形の井戸が発見され、良好に遺存した木製井戸枠内から多くの遺物が、又、調査壙内で視認した遺構面と考えられる堆積土層中からは、13世紀代の遺物が出土している[註3]。地点６は顕著な遺構は確認できなかったものの、出土した遺物の年代は13世紀代～15世紀と考えられ、水磨した様なものも観られた[註4]。地点７・８では、近現代の堆積土除去後は殆ど無遺物の大型土丹層が現地表下２m強まで及び、それ以下は自然堆積層と考えられる軟弱な砂層が堆積している[註5]。

尚、上記に関する註釈・各地点名の地番・本報文に係わる引用・参考文献は、本報文末第４章に纏めて記した。

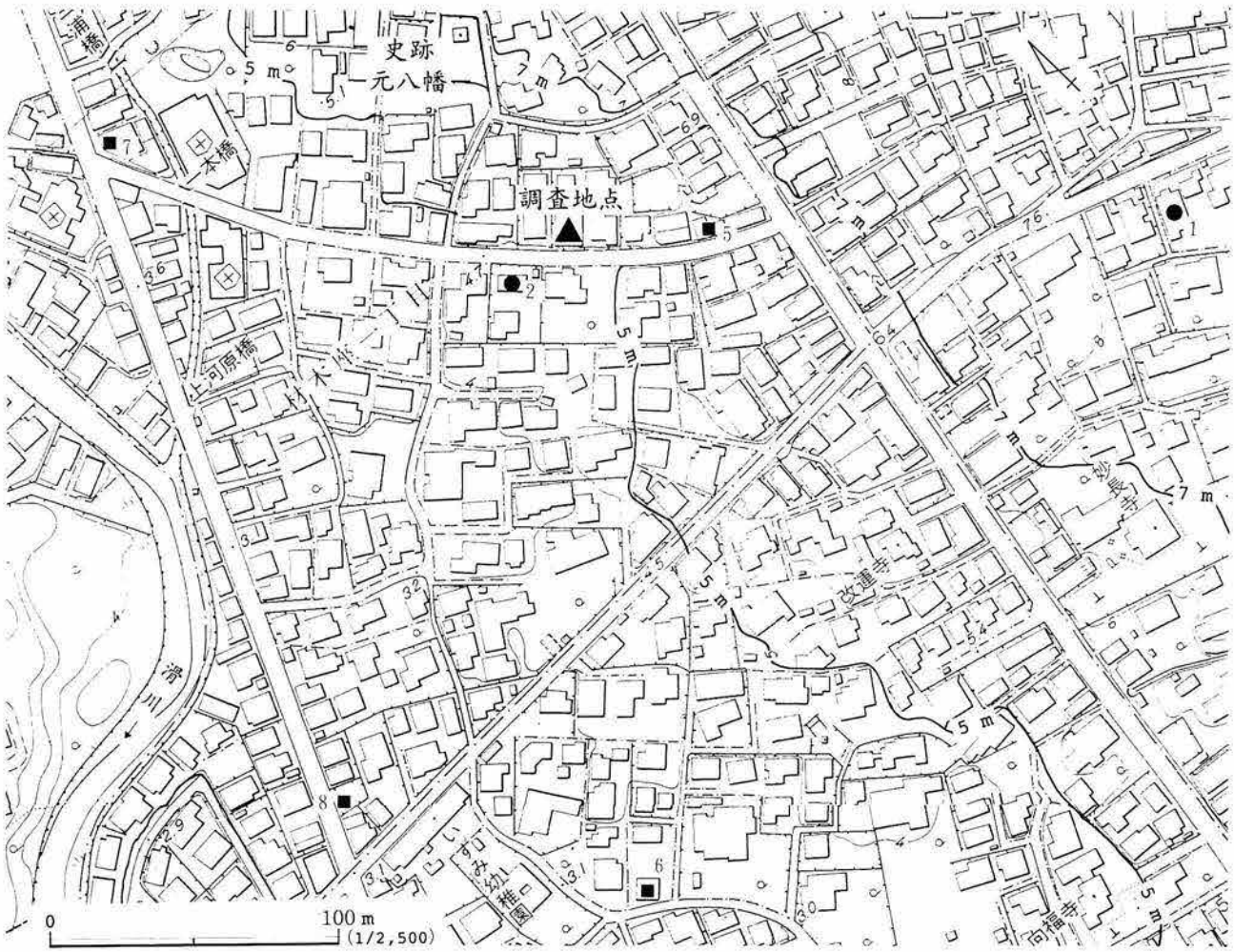


図２　調査地点周辺図

第２章　調査の概要

・調査の経緯と経過

調査は個人専用住宅の建設に先立ち、確認調査の結果中世期の遺構面が確認されたため、基礎工事で杭打ちをする範囲を対象として実施された。平成10年９月21日から確認調査の成果を基に、現地表下約40cmまでの近現代の堆積土を重機に依り除去し、並行して器材を搬入し調査開始とした。調査範囲は幅２ｍ×長さ９ｍを目安に設定し、敷地奥側をＩ区、道路側をⅡ区とした。Ｉ区の東端及びⅡ区の西端は近現代攪乱層が深くまで及んでいる為、重機掘削の際に予め深掘りし排水壙とした。その後人力に依り掘下げ・遺構検出を行ったが、Ｉ・Ⅱ区双方の１面終了時点で以降の残土を敷地内で処理するには困難と判断されたため、Ｉ区を先行して掘下げⅡ区の調査に伴う残土は終了したＩ区を人力で埋め戻しつつ進める方法を採らざるを得なかった。為に、Ｉ・Ⅱ区を併せた各面の全景写真は撮影し得なかった。

天候には恵まれなかったが、10月14日にはⅡ区２面からの調査に着手し、必要な記録を採りつつ遺構面を掘下げ、最終的には無遺物自然堆積層まで確認することができた。遺構の実測は光波測定器用い、出土遺物は極力層位毎に採り上げ、遺構外出土遺物に関してはＩ・Ⅱ区に拘らず纏めて扱う事とした。

著しい湧水と狭小な調査区に難渋しながらも、10月26日にはⅡ区の最終状況の写真を撮影し、調査区土層断面等必要な記録保存を行い、関係各方面に連絡の上器材を撤収し調査終了とした。

・国土座標上の位置（図３）

調査に際しては、遺構実測定点Ｐ１・Ｐ２を付近４級基準点Ｄ132・Ｄ133を基本軸として、光波測定器に拠り設定した。図３に示した国土座標値Ｘ・Ｙは、現地調査の成果数値から整理作業時に国土地理院発行1／2500の地図から手作業計算に依り算出したものである。尚、図中のＳ１・Ｓ２は図４に示した堆積土層断面図の位置を示す。

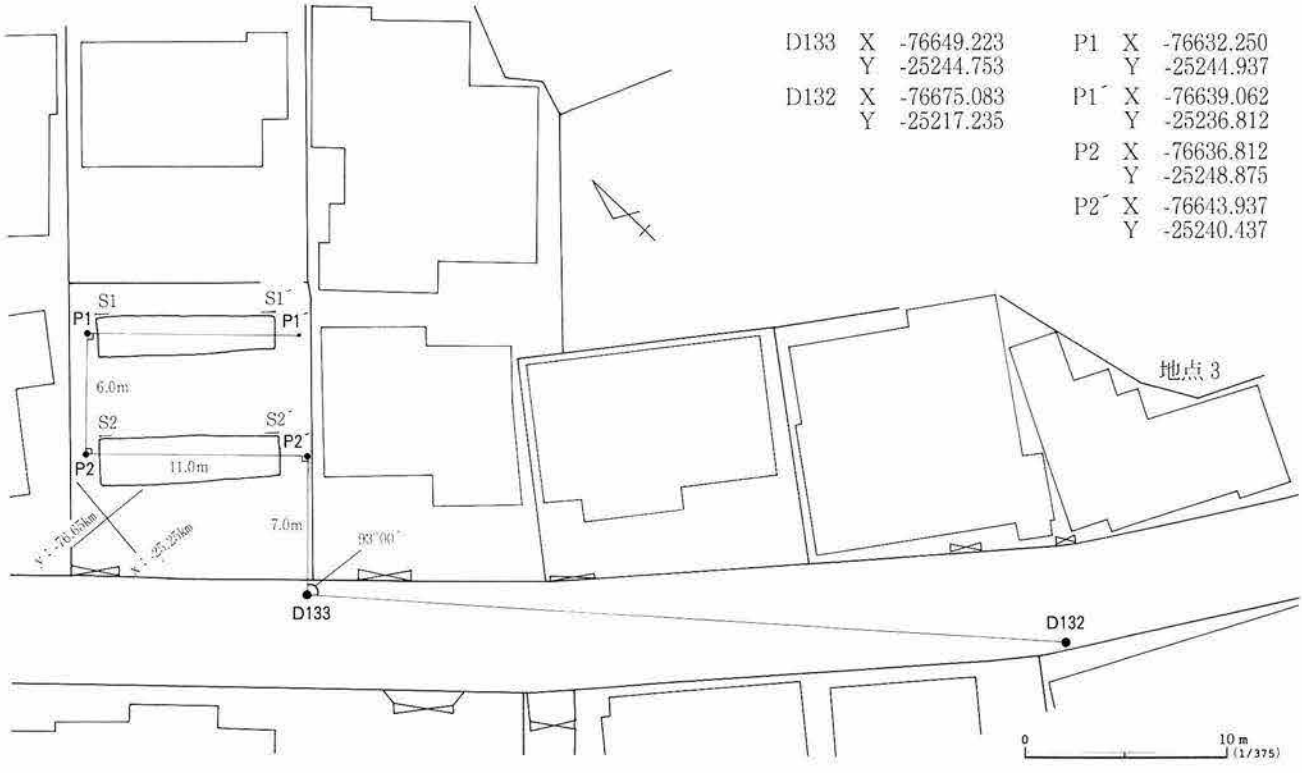
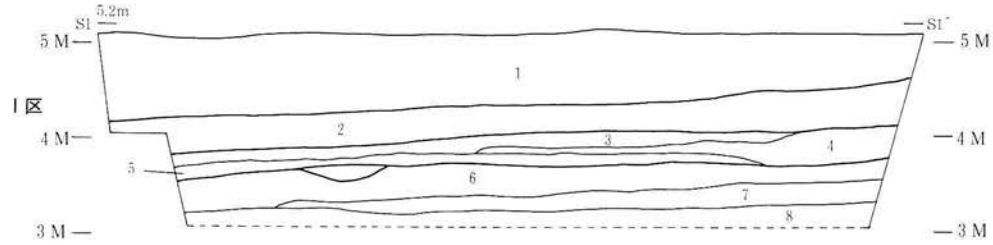


図３　国土座標上の位置と調査基準点



土層注記：

1．近世以降の堆積土。　2．茶褐色粘質土。
3．暗茶褐色粘質土。　4．黒褐色弱粘質土。
5．黒褐色砂質粘土。　6．暗黒褐色粘土。
7．暗灰色砂＋黒色粘土。　8．暗黄褐色砂。

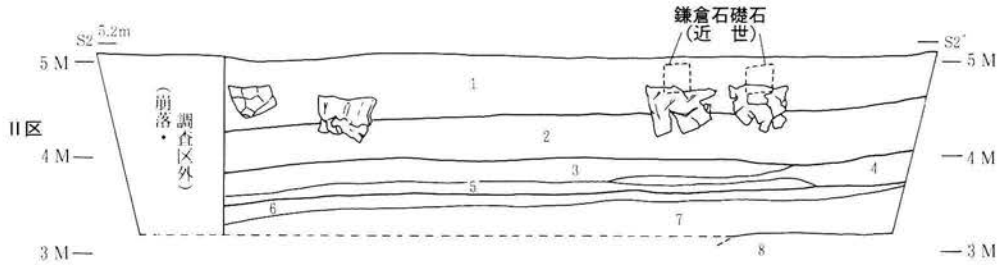


図4　堆積土層

・堆積土層（図4）

図4は、図3のS1・S2則ちI区・II区両調査区の北側壁土層断面図である。

1層中には、近世以降の建物礎石に使用した鎌倉石が残っており、礎石下の所謂グリ石は柱穴を粗掘りした後に土丹を上から叩込んでいる様に観察され、叩込まれた土丹は潰れて2層までめり込んでいる。2層は、かわらけ粒・土丹粒を疎らに含むしまりの良い茶褐色粘質土。上面を1面としたが、II区では遺構が殆ど検出されず中世遺物包含層であった可能性もある。遺物は出土するが、摩滅して角が取れているものも観られた。3層・4層は、やや軟弱ながら上面付近に貝粒子を含む砂層が散見され、上面を2面とした。遺物は多量に出土する。5層は、腐食有機物を微量含んだ砂混じりの粘土で、しまり悪く水気を帯びる。6層廃棄後の湿地性の堆積土と思われる。出土遺物は少ない。6層は、しまり良く上面がやや硬化した暗黒褐色粘土で、市街地調査で中世地山とされる暗褐色粘土に似る。遺物はI区で数点出土している。7層は、粗い貝粒子を含む砂層中に黒色粘土を不規則に混交する。調査区内では無遺物。8層は粗い貝粒子を含む粗砂で、浜地の調査では無遺物自然堆積層とされる。最高位海抜3.3m。図1・2の地点1・2で中世地山とされている層に相当する。

各層位は東から西へ緩やかに傾斜し、8層以外はかなり土壌化した砂質土及び粘質土の堆積である。堆積土の様相を付近地点1・2・5と比較すると、各地点では海成或は風成の砂層が砂丘状に堆積し、遺構覆土や遺構面構成土等はほぼ砂層若しくは砂質土で構成される。地点1では海抜7m前後、地点2では海抜3.3m程で自然堆積層が、地点5では海抜4m弱で8層と同様の砂層が確認されている。この自然堆積層のレベル差は、東側丘陵から舌状に延びる等高線或は現況道路面のレベル差と大差はない。ただ本地点ではその上に堆積する遺構面構成土は、他所から運び込んだ如く土壌化している。これは、本地点が砂丘状の地形が構成される間に窪地状に取残された湿地部分に中り、為に生活面の確保と安定を図り土砂に依り嵩上げしていった結果と考えられよう。

第３章　検出した遺構

本章では発見した遺構について各面毎に触れていく。下層へと調査が進むに従い湧水が著しい為に、幅の狭い調査区ながら排水の側溝を切らざるを得ず、又、安全を考慮して調査区壁に法を付けて斜めに掘下げた為、３面時の調査幅は実質的には１m程になってしまった。

図５～７の各面の全測図は、敷地内における Ⅰ区・Ⅱ区の位置関係をそのままに図示した。遺構実測定点Ｐ１・Ｐ２及び各見返りのラインは、６mの距離で並行関係にある。版組の都合上、必要に応じて各面に関わる遺構間断面図は、Ⅰ区・Ⅱ区の平面図間に罫線で囲み同縮尺で図示した。

１面（図５）

現地表下40cm～80cm、海抜4.6m～4.2mのしまりの良い茶褐色粘質土上面を１面とした。両調査区共に西に向って緩やかに下り勾配で、遺構面とするにはやや不安もある。Ⅰ区では土壙状のプランをいくつか掘り上げたが、覆土は潰れた土丹塊で占められており、その殆どが前章堆積土層の項で述べた近世建物基礎に伴うものと思われる。他の小土壙も、覆土の違いを遺構の如く掘り上げた可能性が高い。

遺物は精査の際に数片出土しているが、指先大ほどの極小片ばかりで摩滅しているものが多く、図示してはいない。

２面（図６）

現地表下110cm前後、海抜約4.0m付近の粘質土上面に、貝粒子を含む砂層が観られるレベルを２面とした。炭・土丹粒を混入するしまりのない粘質土を覆土とする柱穴状・小土壙状の遺構を多く発見した。

各遺構間に特に規則的な配置・間隔は認められず、相互の関係は不明である。土壙３は、遺構とするには余りにも浅く、遺構面構成土の堆積の違いを掘ってしまっているのかもしれない。

遺物は２面上精査の際或は各遺構内から、糸切り底かわらけ片・常滑窯甕胴部片・瀬戸窯製品・火鉢・石製品等が出土しているが、遺構内出土２点の他はいずれも極小片で図示し得なかった。

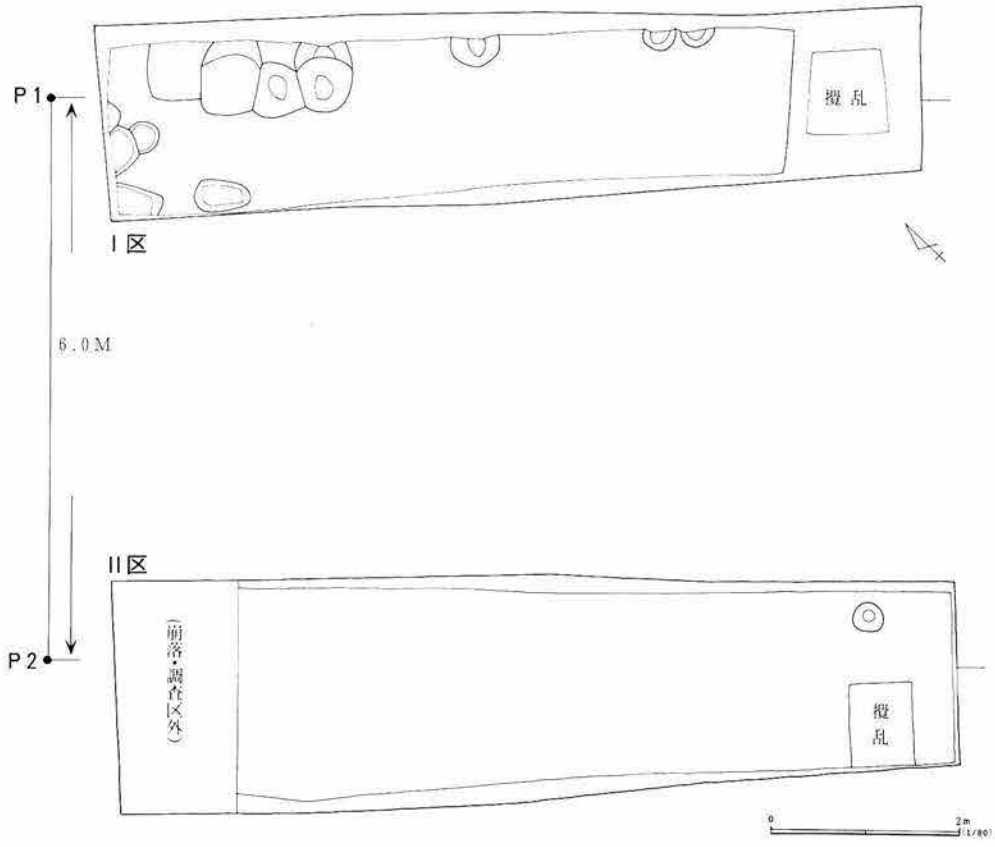


図５　１面全測図

3面（図7）

現地表下140cm前後、海抜約3.7m付近のやや硬化した暗黒褐色粘土面上面を3面とした。Ⅰ区で面上に据えられた大型の礎板と溝状の土壙等、Ⅱ区では平面は方形で底面にPit.を伴う建物他を発見した。

Ⅰ区の礎板は一辺15～25cm・厚さ10cm弱で、子細に検討したが伴う掘り込みは確認し得ず、面上に据えられたものと判断した。土壙4は東西方向が長軸の溝状土壙と思われる。重複するPit.28は、新旧は不明だが土壙4には伴わない。

Ⅱ区の建物遺構は、確認最大範囲で3.1m×1.2mで底面に柱穴状のPit.と杭穴状の小穴を伴う。杭穴は平面プランと同方向に並び、径15cm内外・深さ10～15cm前後。この建物遺構は方形竪穴状の遺構と考えられ、調査区南壁の土層断面観察からは2面の遺構の可能性もある。

遺物は少ない上に小片ばかりで接合も殆ど認められない。遺構内出土遺物は、建物遺構内出土の2点を図示し得たに留まる。

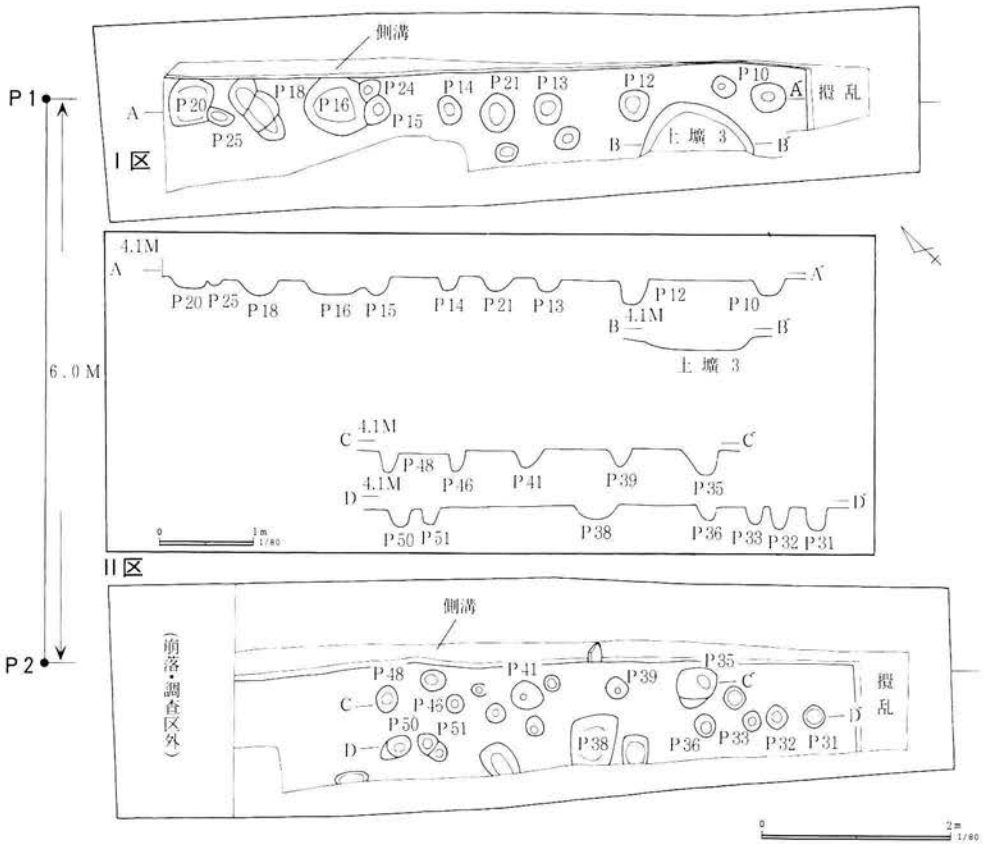


図6　2面全測図

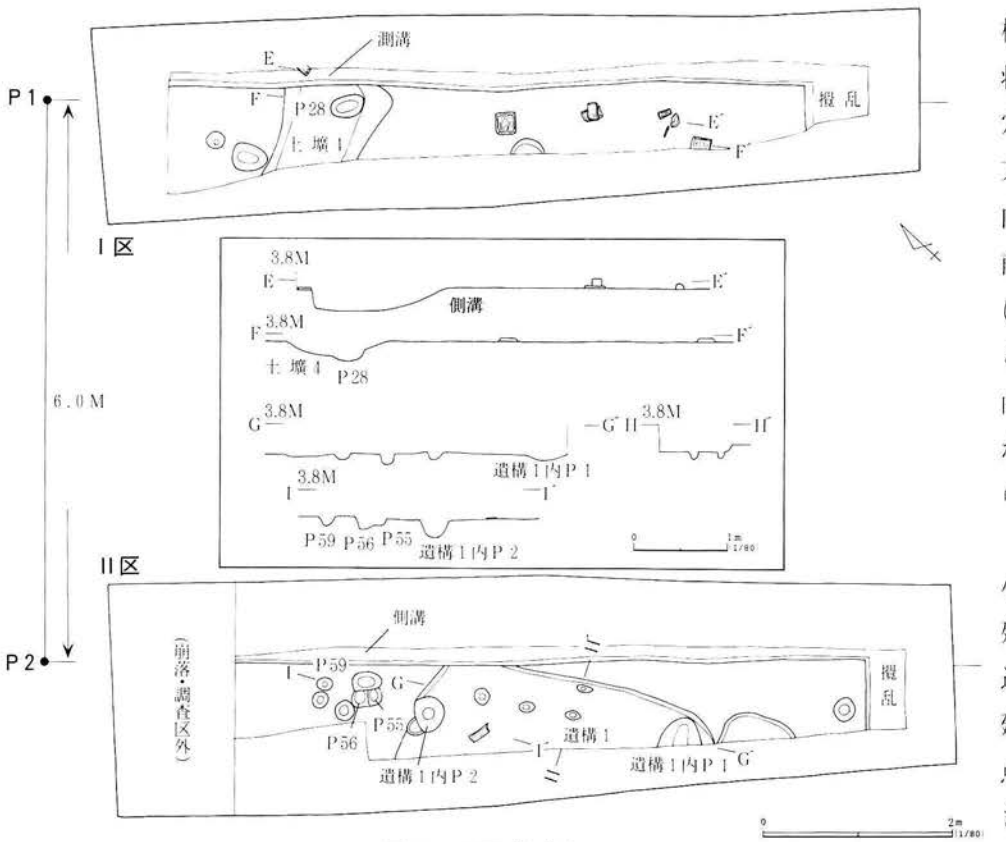


図7　3面全測図

第４章　出土した遺物

本章では出土した遺物について遺構・層位毎に記す。接合前の出土単純破片数は2,700余点を数えるが、実測し得たのは56点に過ぎない。各遺物の法量・寸法は、第４章表２に纏めた。

図８の１～４は遺構内出土遺物。１・２は２面Pit.16･24（Ⅰ区）出土。１は鍔釜形土鍋。２は赤間ヶ石（紫石）製の硯。全体に剥離・破損が著しく、遺存する陸部分の加工痕から観ると消費地での再成形品。３・４は３面建物１（Ⅱ区）出土。３は糸切り底のかわらけ。器表淡橙色で胎土・焼成は良好。４は山茶碗窯系捏鉢。胎土に小礫を余り含まず、内面の摩滅が著しい。

図８の５～16は１面下、概ね図４の２層出土。５・６は糸切り底のかわらけ。本層位から出土し図示し得ないが形状の分る破片には、胎土・焼成・成形が良く体部が開き気味の大型品も一定量含まれる。７は龍泉窯系青磁劃花文碗。８・９は瀬戸窯灰釉卸皿。８は灰緑色の釉を漬け掛けした中Ⅰ期の製品。

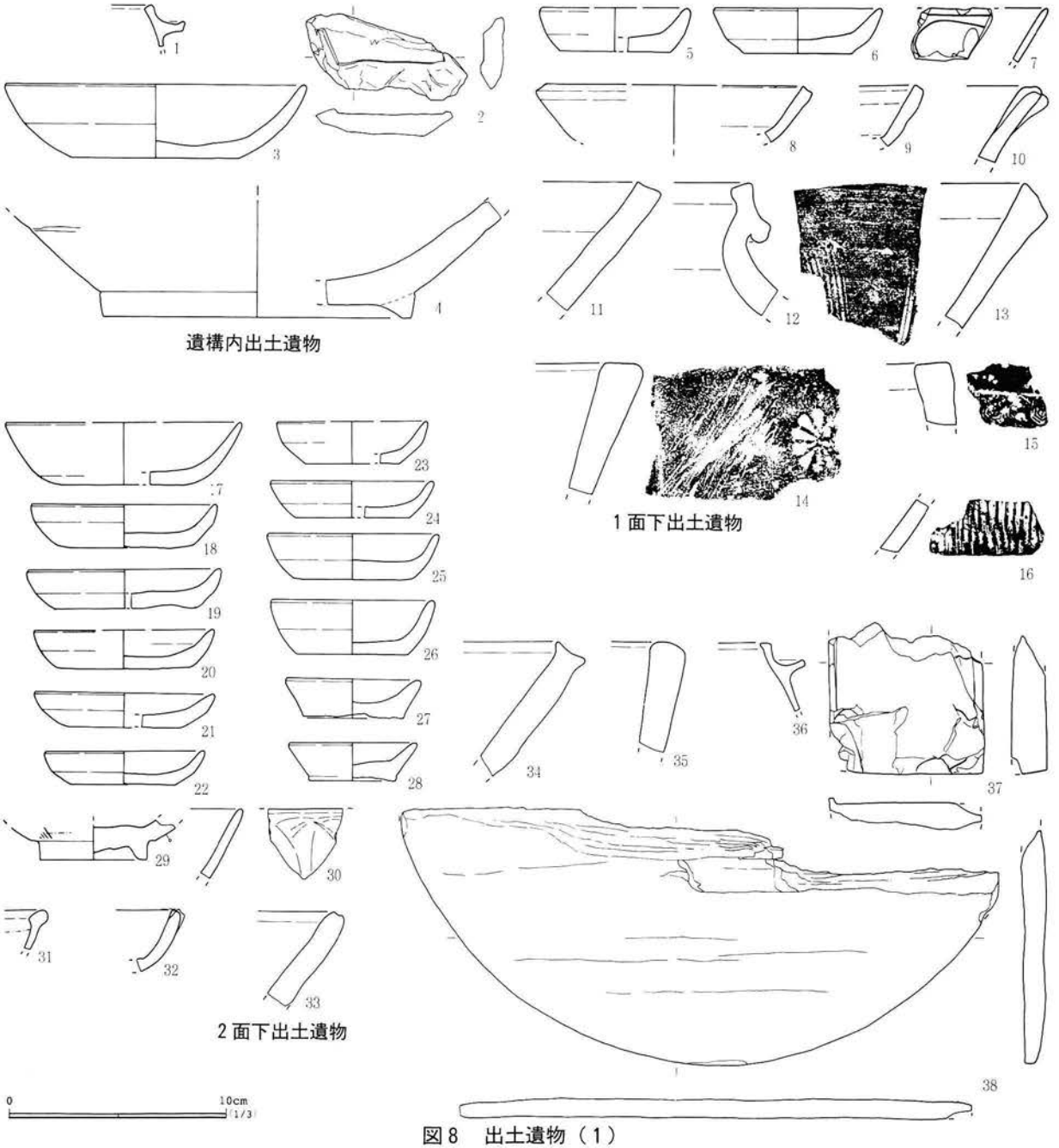


図８　出土遺物（１）

9は灰緑色の釉を刷毛塗りした前Ⅲ期の製品。10は山茶碗窯系捏鉢。口唇が肥厚し頂部は僅かに窪む。11は常滑窯捏鉢。12は常滑窯甕。小破片の為傾きにやや不安がある。13は備前窯擂鉢。摺り目の条線は浅く、一単位8本。14は瓦器質火鉢Ⅲ類。輪花形になるタイプで、外面には10弁（？）菊花を陰刻。15は瓦質火鉢Ⅳ類。胴部が扁球状になるタイプで、外面口唇下沈線間に亀甲文を配する。16は須恵器壷。

図8の17～38は2面下、図4の3・4層の出土。17～28は糸切り底のかわらけ。最も多くの遺物数が出土した層位ではあるが、かわらけは図示した以外に実測可能なものはなかった。年代的には多少の幅と混在があるが、2面が構成された以降の年代観を示していると考える他あるまい。29は同安窯系青磁櫛掻文碗。外面体部下端と高台は露胎。30は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。釉調は灰緑色味。31は泉州窯系黄釉陶器盤。32は瀬戸窯灰釉卸皿。淡灰緑色の釉を漬け掛けした前Ⅲ期の製品。33は山茶碗窯系捏鉢。胎土は粗く、口唇頂部は沈線状に窪む。34は常滑窯捏鉢。口唇は内外双方に強く引かれる。35は瓦器質火鉢Ⅲ類。輪花形になると思われる。36は鍔釜形の土鍋。37は赤間ヶ石（紫雲）製の硯。陸部と横縁が遺存。38の木製品は曲物底板。表面に刃物痕は無い。又、2面上及び2面下から出土した押印文の残る常滑窯甕胴部片拓影は、図10に図示した。（汐見）

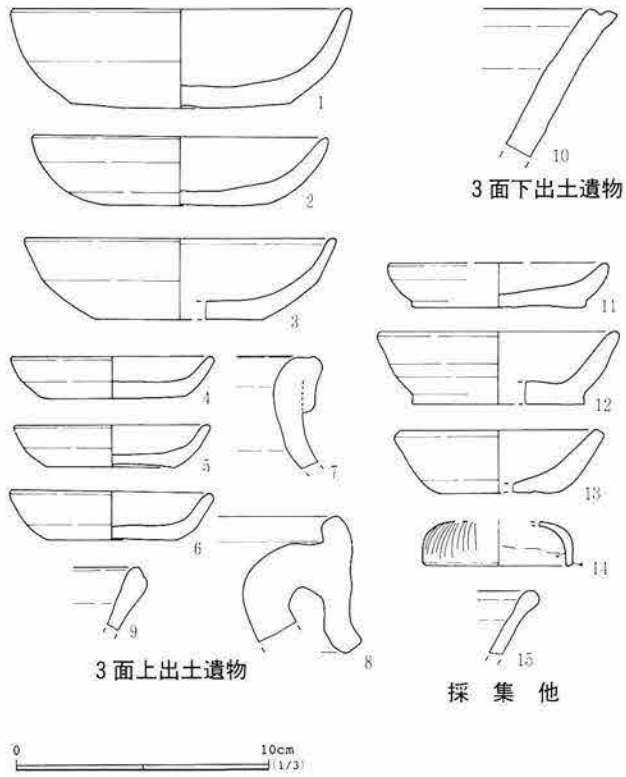


図9　出土遺物（2）

図9の1～9は3面上、概ね遺構精査の際の出土。1～6は糸切り底のかわらけ。橙色乃至灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。7・8は常滑窯甕の口縁部。共にN字状に折返されるタイプ。7は灰黒色を呈し夾雑物を多く含む胎土。器表は黒褐色。8は小礫を含む粗い胎土で、口唇は肥厚し沈線状の窪みがみられる。器表は灰色。

図9の10は3面下、図4の6層出土の常滑窯捏鉢。小礫を含むがしまりの良い胎土。

図9の11～15は排水壙深堀の時等、帰属するべき遺構・層位が不明になってしまったものを、採集遺物としてここに含めた。11～13は糸切り底のかわらけ。橙色乃至暗橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。14は青白磁合子の蓋。型捺し造りで、素地は明灰白色、淡水色の釉は極薄く掛けられる。15は山茶碗窯系捏鉢。粗い胎土で口唇部は肥厚する。器表は灰白色を呈する。図10には、出土した押印文の観られる常滑窯甕胴部片拓影を、個体上方を天として縮尺1/2で図示した。（渡邊）

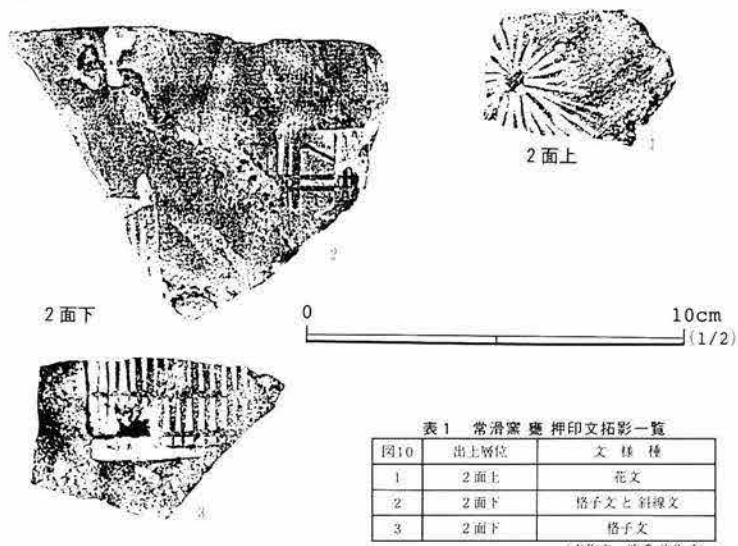


表1　常滑窯甕押印文拓影一覧

図10	出土層位	文様種
1	2面上	花文
2	2面下	格子文と斜線文
3	2面下	格子文

（表作成　渡邊美佐子）

図10　出土常滑窯甕押印文拓影

第5章　調査成果

本地点の調査では調査区が狭小なこともあり、至近距離に在る元八幡と関連づけられる遺構について言及し得ず、その時期に遡る出土遺物は皆無であった。

発見した遺構は、調査範囲内では不規則な配置としか観られないPit.や小土壙が殆どで、僅かに3面の建物1と土壙4の方向から、付近の遺構軸方向が想像される程度である。この方向性が2面以降に踏襲されているとしても、幅2mの調査区では建物や柵列等を類推するのは困難であろう。図1・2の地点2・5で確認された遺構と考え併せると、本地点の北側に展開していたであろう町屋或はその周辺域の性格が強く、庶民層が生活・活動していた地域と考えられよう。

出土遺物を図示し得なかったものを併せ観ても、かわらけの年代観を念頭に置けば、手捏ね成形のものは摩滅した小破片が上層から数点出土しているのみで、鎌倉前期まで遡れる遺物は殆ど無いに等しい。本地点の年代観は、3面上出土のかわらけにやや13世紀代を観ることもできようが、概ね14世紀代以降の出土状況を示し、2面以降は15世紀代に入る要素も含んでいる。

これら発見遺構・出土遺物の状況は地点2・5と大きくは矛盾するものではなく、現段階ではこの付近の環境と年代を概ね顕していると考えられようか。

最後に表3の出土遺物破片数について付記しておく。表は、出土した全遺物破片を接合前の単純破片数で記している。本文でも触れた様に1面は中世遺物包含層の可能性もあり、殆どが指先大程度で摩滅したものをも含む極小破片であることから観ても、他所からもたらされた土砂中の遺物が混在している事も考え得る。舶載陶磁器やかわらけは細かく砕け易く、単純破片数で数える事に因る数字の持つ危うさが見え隠れしている。参考までに本地点の出土遺物はテンバコ数で言えば5箱であり、内1面に帰属する遺物は1箱にも満たない。今後の課題であろう。　（汐見）

【註（地点名）・引用参考文献】

註1（地点1）　瀬田哲夫　「7.材木座町屋遺跡（No.261）鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成6年度発掘調査報告（第2分冊）』平成7年3月　鎌倉市教育委員会

註2（地点2）　木村美代治他　「7.材木座町屋遺跡（No.261）　鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7　　平成2年度発掘調査報告』　平成3年3月　鎌倉市教育委員会

（地点3）　田代郁夫他　「5.材木座町屋遺跡（No.261）　鎌倉市材木座四丁目260番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6　　平成元年度発掘調査報告』　平成2年3月　鎌倉市教育委員会

（地点4）　馬淵和雄　「材木座町屋遺跡（No.261）　鎌倉市材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13　平成8年度発掘調査報告（第1分冊）』　平成9年3月　鎌倉市教育委員会

註3（地点5）　平成9年10月確認調査実施。筆者立ち会い担当。

註4（地点6）　平成10年7月確認調査実施。瀬田哲夫氏の御教示及び確認調査時筆者実見。

註5（地点7・8）平成10年11月確認調査実施。筆者立ち会い担当。

白井永二　『鎌倉事典』　東京堂出版

中野晴久　「中世知多古窯址群の押印文　―ミクロ流通史のための予備的研究―　」『知多半島の歴史と現在No.4』　1992　日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房

河野眞知郎「中世鎌倉火鉢考　―東国との関連において―」『考古論叢　神奈川』第2集　1993年　神奈川県考古学会

表2　遺物計測表　単位　cm

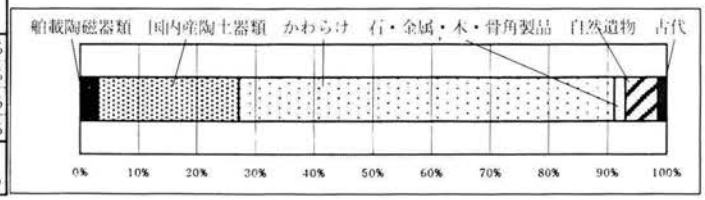
時期	層位 遺構名	遺物No.	種別	計測値						単位 cm ( )=復元値 [ ]=残存値
2面	Pit.16 Pit.24	図8－1	土器類 土鍋							
		－2	石製品 赤間ヶ石製硯	長さ	[7.0]	幅	[7.1]	厚さ	[1.7]	
3面	建物1	図8－3	土器類 かわらけ・糸	口径	13.8	底径	7.7	器高	3.4	
		－4	山茶碗窯系 捏鉢			底径	(14.3)			
1面	1面下	図8－5	土器類 かわらけ・糸		(6.8)		(5.0)		2.1	
		－6	土器類 かわらけ・糸		7.7		5.0		2.1	
		－7	龍泉窯系 青磁 劃花文碗							
		－8	瀬戸窯 灰釉 卸皿		(12.0)					
		－9	瀬戸窯 灰釉 卸皿							
		－10	山茶碗窯系 捏鉢							
		－11	常滑窯 捏鉢							
		－12	常滑窯 甕							
		－13	備前窯 擂鉢							
		－14	瓦器質 火鉢 Ⅲ類							
		－15	瓦質 火鉢 Ⅳ類							
		－16	古代 須恵器 壺							
2面	2面下	図8－17	土器類 かわらけ・糸	口径	(10.9)	底径	(5.6)	器高	2.9	
		－18	土器類 かわらけ・糸	口径	(8.5)	底径	(6.2)	器高	2.0	
		－19	土器類 かわらけ・糸	口径	8.9	底径	6.6	器高	1.8	
		－20	土器類 かわらけ・糸	口径	(8.3)	底径	(6.2)	器高	1.8	
		－21	土器類 かわらけ・糸	口径	8.2	底径	5.2	器高	1.6	
		－22	土器類 かわらけ・糸	口径	7.3	底径	4.8	器高	1.6	
		－23	土器類 かわらけ・糸	口径	(6.9)	底径	(4.3)	器高	2.0	
		－24	土器類 かわらけ・糸	口径	7.5	底径	5.2	器高	1.7	
		－25	土器類 かわらけ・糸	口径	7.9	底径	5.6	器高	2.2	
		－26	土器類 かわらけ・糸	口径	7.4	底径	5.1	器高	2.5	
		－27	土器類 かわらけ・糸	口径	6.2	底径	4.6	器高	1.8	
		－28	土器類 かわらけ・糸	口径	5.9	底径	4.0	器高	1.8	
2面	2面下	図8－29	同安窯系 青磁 櫛描文碗			底径	5.0			
		－30	龍泉窯系 青磁 鎬連弁文碗							
		－31	泉州窯系 黄釉陶器 盤							
		－32	瀬戸窯 灰釉 卸皿							
		－33	山茶碗窯系 捏鉢							
		－34	常滑窯 捏鉢							
		－35	瓦器質 火鉢 Ⅲ類							
		－36	土器類 土鍋							
		－37	石製品 赤間ヶ石製硯							
		－38	木製品 曲物 底板		(28.0)			厚さ	1.0	
3面	3面上	図9－1	土器類 かわらけ・糸	口径	13.4	底径	8.8	器高	3.9	
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径	11.6	底径	6.7	器高	2.8	
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径	12.2	底径	6.6	器高	3.3	
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径	8.0	底径	5.8	器高	1.7	
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径	7.7	底径	5.2	器高	1.7	
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径	8.0	底径	5.1	器高	1.9	
		－7	常滑窯 甕							
		－8	常滑窯 甕							
		－9	山茶碗窯系 捏鉢							
	3面下	図9－10	常滑窯 捏鉢							
	採集他	図9－11	土器類 かわらけ・糸	口径	8.6	底径	7.0	器高	1.8	
		－12	土器類 かわらけ・糸	口径	9.4	底径	6.8	器高	2.9	
		－13	土器類 かわらけ・糸	口径	7.8	底径	4.6	器高	2.5	
		－14	景徳鎮窯 合子蓋	口径	5.6					
		－15	山茶碗窯系 捏鉢							
2面	2面上	図10－1	常滑窯 甕 押印文拓影							
	2面下	－2	常滑窯 甕 押印文拓影							
		－3	常滑窯 甕 押印文拓影							

表3　出土遺物破片数

	舶載陶磁器						国内産陶器類							土器類			
	青磁	白磁	青白磁	施釉	(釉調)	その他	瀬戸窯	常滑窯	渥美窯	備前窯	魚住窯	亀山窯	その他	かわらけ	瓦器	土鍋	その他
1面	24	15	5				62	217	3	1				575			
2面	17	2	6	5			19	214	6					755	1	2	1
3面	2	1						43	1					220		1	
採集	3	1	2				5	46	1				1	201			
計	46	19	13	5	0	0	86	520	11	1	0	0	1	1,751	1	3	1
%	1.7%	0.7%	0.5%	0.2%	—	—	3.1%	19.0%	0.4%	0.0%	—	—	0.0%	64.0%	0.0%	0.1%	0.0%

	土製品			火鉢	瓦	石製品					金属製品					木製品	骨角製品
	土錘	羽口	その他			砥石	硯	滑石類	火打石	その他	鉄釘	他鉄製品	銅銭	他銅製品	その他		
1面				13		8	1	1	1			2		1			1
2面				16	1	4	2		1	3	5	1				4	
3面				4		2				1	2	1				10	
採集		1		2							磁						1
計	0	1	0	35	1	14	3	1	2	4	7	4	0	1	0	14	2
%	—	0.0%	—	1.3%	0.0%	0.5%	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%	0.3%	0.1%	—	0.0%	—	0.5%	0.1%

	自然遺物			古代		計	%
	貝	骨	その他	土師器	須恵器		
1面	4	25		3	4	966	35.3%
2面	4	80		12	6	1,167	12.6%
3面	7	21			7	323	11.8%
採集	1	9		5	2	281	10.3%
計	16	135	0	20	19	2,737	
%	0.6%	4.9%	—	0.7%	0.7%		100%



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	汐見一夫　渡邊美佐子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月

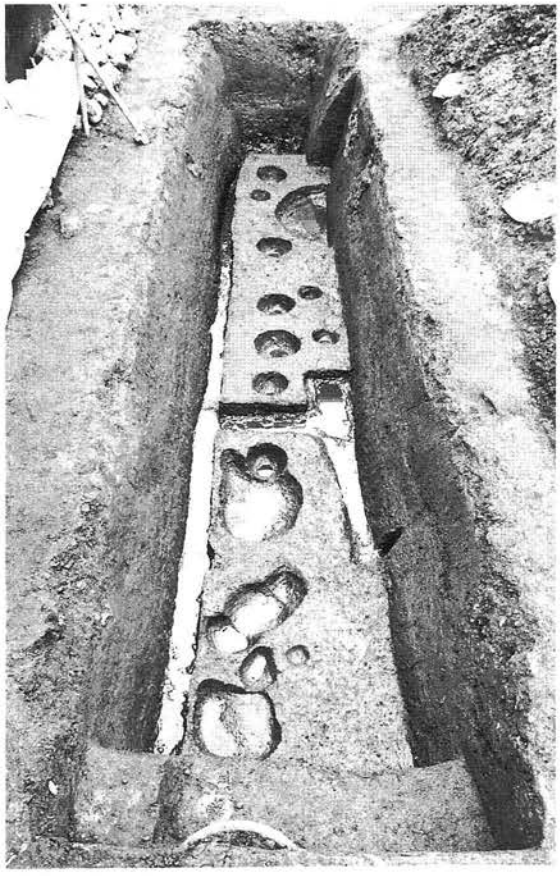
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし ざいもくざいっちょうめ 神奈川県鎌倉市材木座 一丁目890番7	14204	261	35° 18′ 30″	139° 33′ 20″	1998.9.21 ～ 1998.10.26	40㎡	個人専用住宅 （2世帯住宅）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
材木座町屋遺跡	都市	中世・近世	建物・土壙・Pit.	舶載陶磁器 国内産陶器 土器類 石製品 金属製品 木製品 その他	

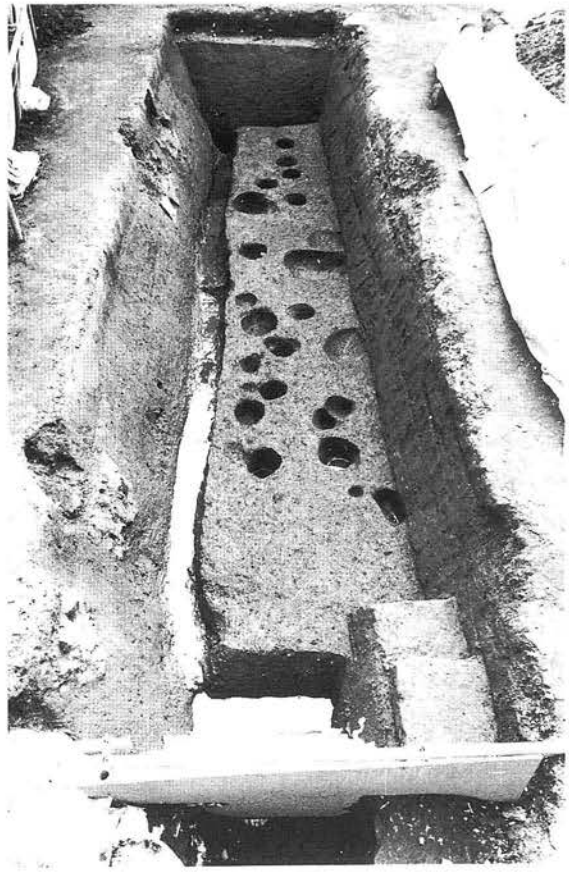
写　真　図　版

▲1．Ⅰ区1面全景（西から）

3．Ⅱ区1面全景（東から）▲



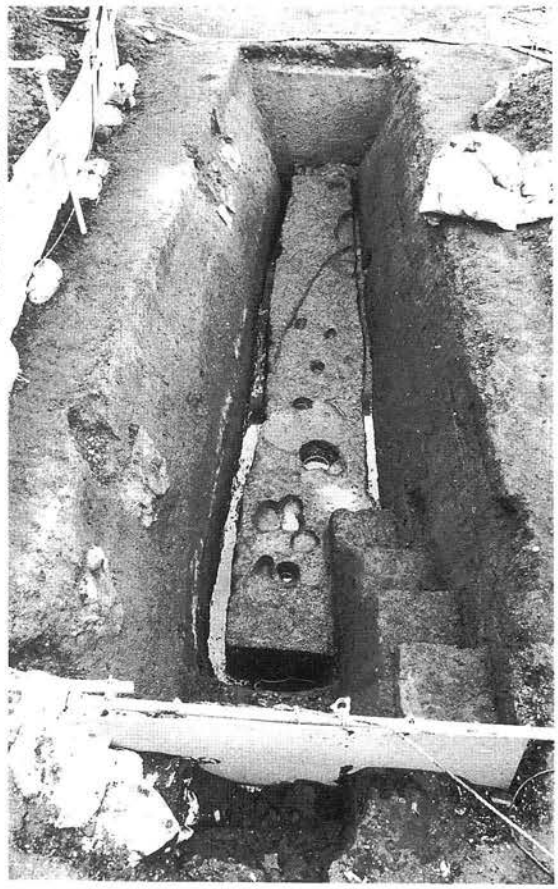
◀2．Ⅰ区2面全景（西から）



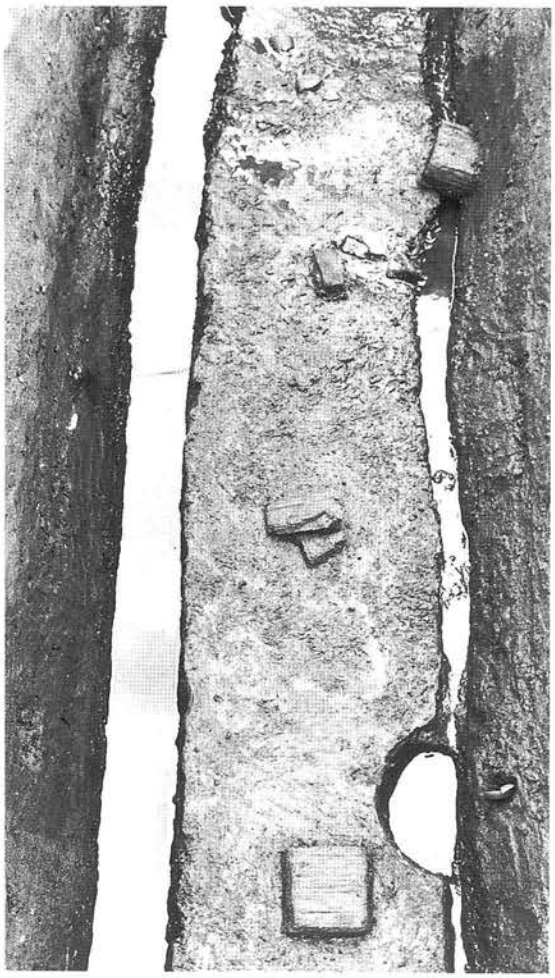
▶4．Ⅱ区2面全景（西から）

図版 2

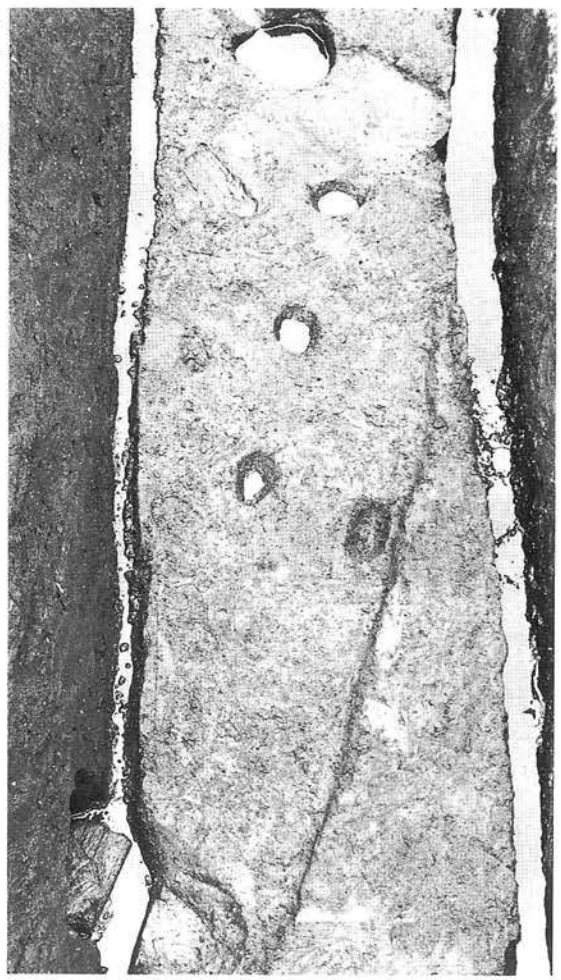
◀1. Ⅰ区3面全景（西から）



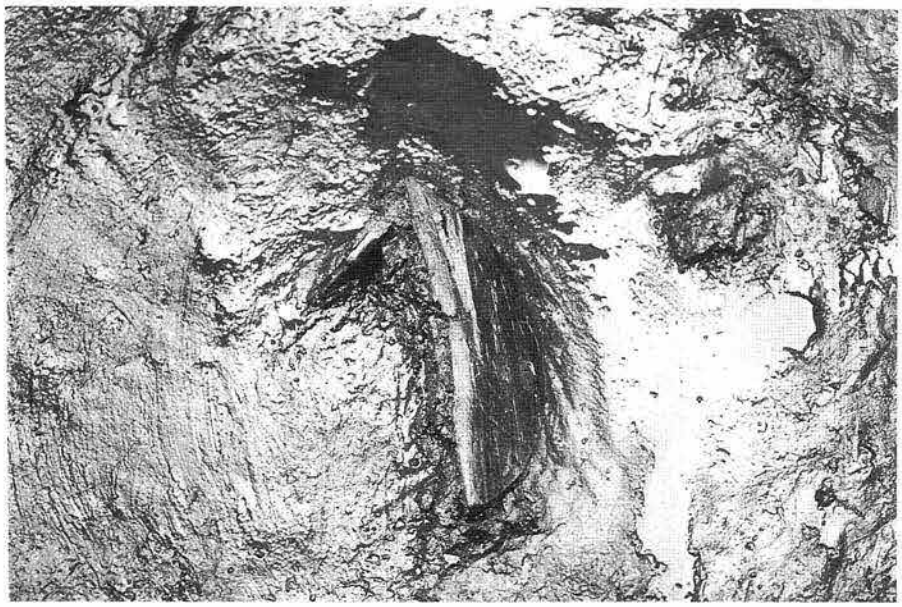
▶3. Ⅱ区3面全景（西から）



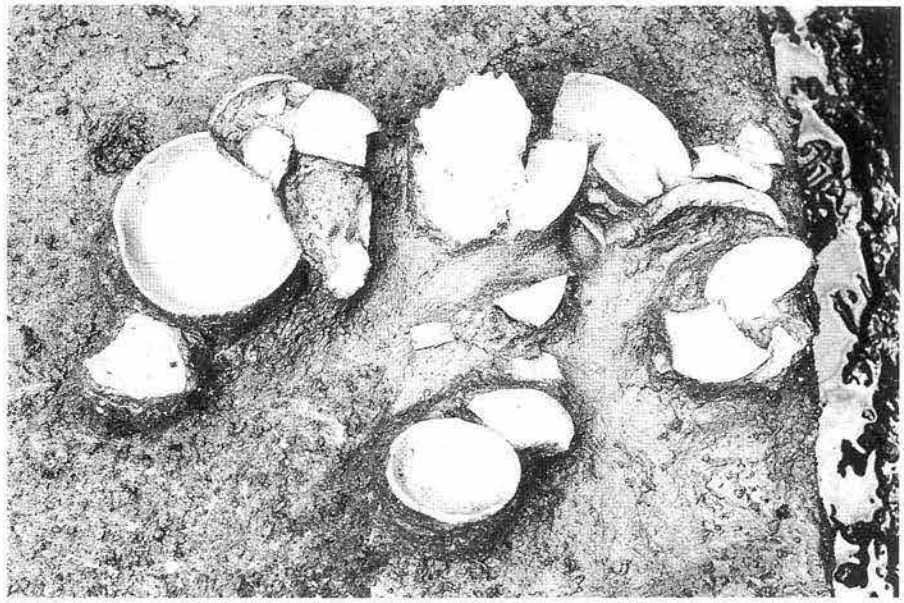
◀2. 同上礎板（東から）



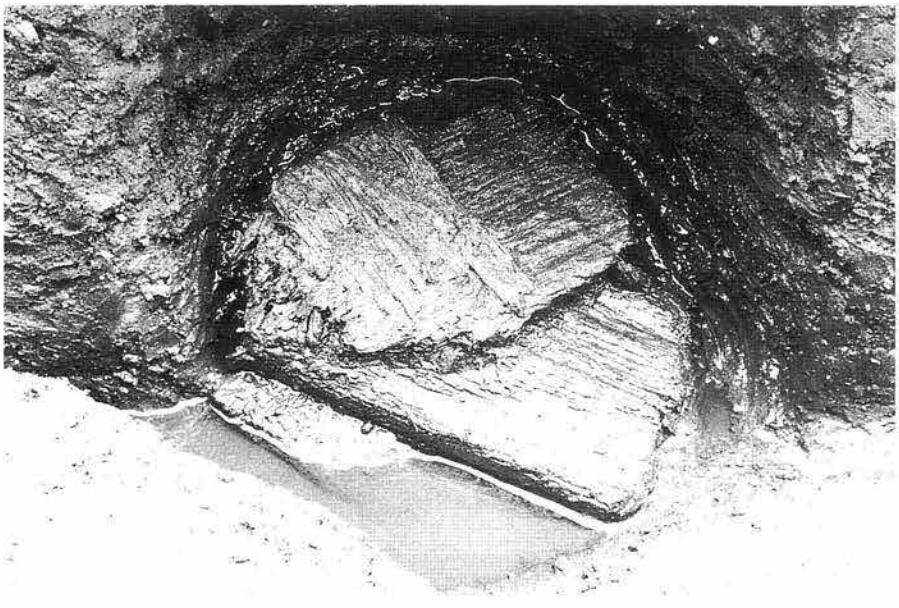
▶4. 同上建物



◀1．Ⅰ区2面
曲物底板出土状況

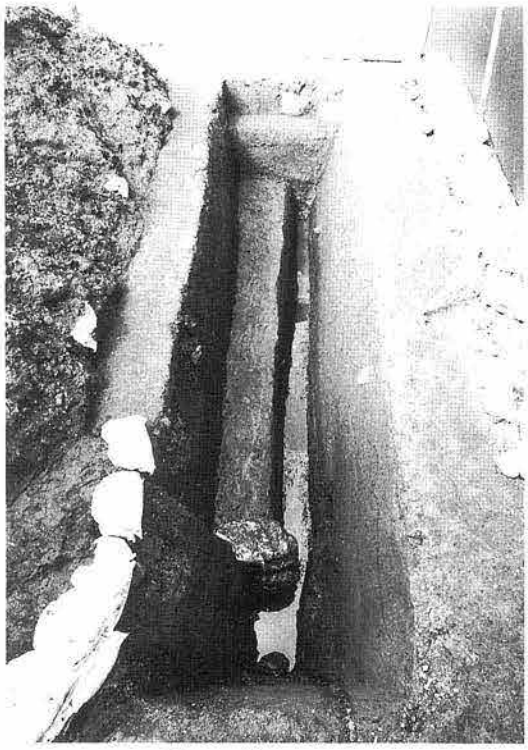


2．Ⅱ区3面かわらけ他
出土状況 ▶

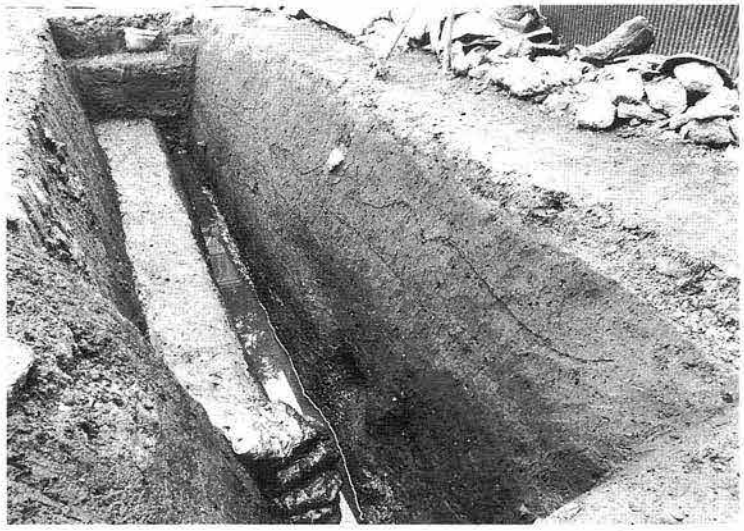


◀3．Ⅱ区3面
礎板出土状況

図版 4

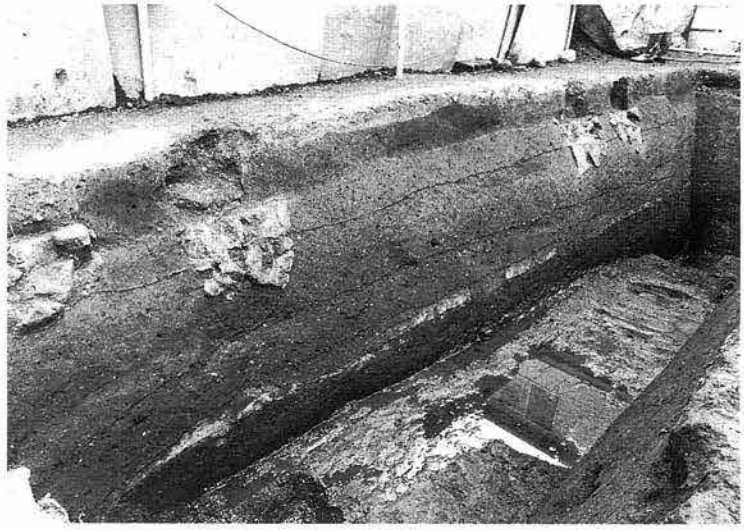


▲1．Ⅰ区最終状況（東から）



2．Ⅰ区北壁堆積土層（東から）▲

▲3．Ⅱ区最終状況（西から）



4．Ⅱ区北壁堆積土層（西から）▲

鎌倉市埋蔵文化緊急調査報告　16

平成11年度発掘調査報告（第1分冊）

発　行　日　平成12年3月

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　中川印刷株式会社